

# 山 岳



LX

# Caravan

## SUPER



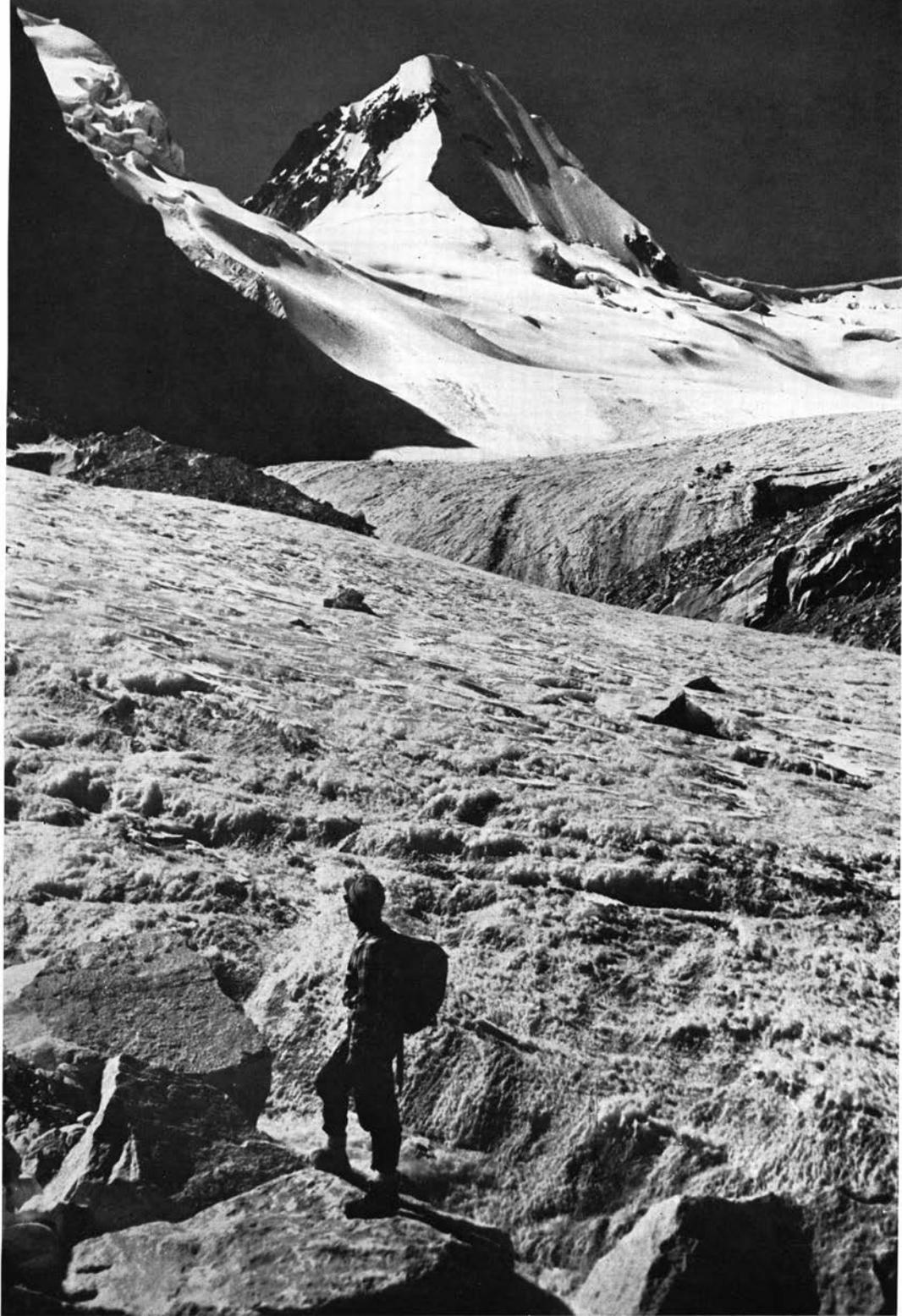
### 発 売 品 目

藤倉ゴム		リザードポンチョ	¥ 1,800
キャラバン シュー		キャラバン アイゼン	¥ 650
スタンダード	¥2,100	<b>鐘淵化学</b>	
デラックス	¥2,300	<b>カネカロン シュラフ</b>	
スーパー	¥2,400	スリーパー(キャンピング用)	¥ 3,700
ガイドオンリー	¥1,650	ツアー(スリーシーズン用)	¥ 4,400
ハイビック	¥1,700	アルプ(オールシーズン用)	¥ 5,800
トリップ(牛革・型底)	¥2,900	アタック(デラックスオール シーズン用)	¥ 6,500
スノーキャラバン		ポーラー(高所極寒用)	¥ 8,000
ラバスキーブーツ		ポーラー・スーパー (デラックス高所用)	¥10,000
ビニスキーブーツ		<b>東洋羽毛(羽毛シュラフ)</b>	
リザード マット		ダウン・バッグ	¥14,500
大・中・小・コンビ型		<b>ニチレナイロン キャンパーテント</b>	
ナイロン・マット		キャラバン型 2~3人用	¥ 8,800
足踏み式エアポンプ	¥ 600	4~5人用	¥13,000

株式会社 山 晴 社

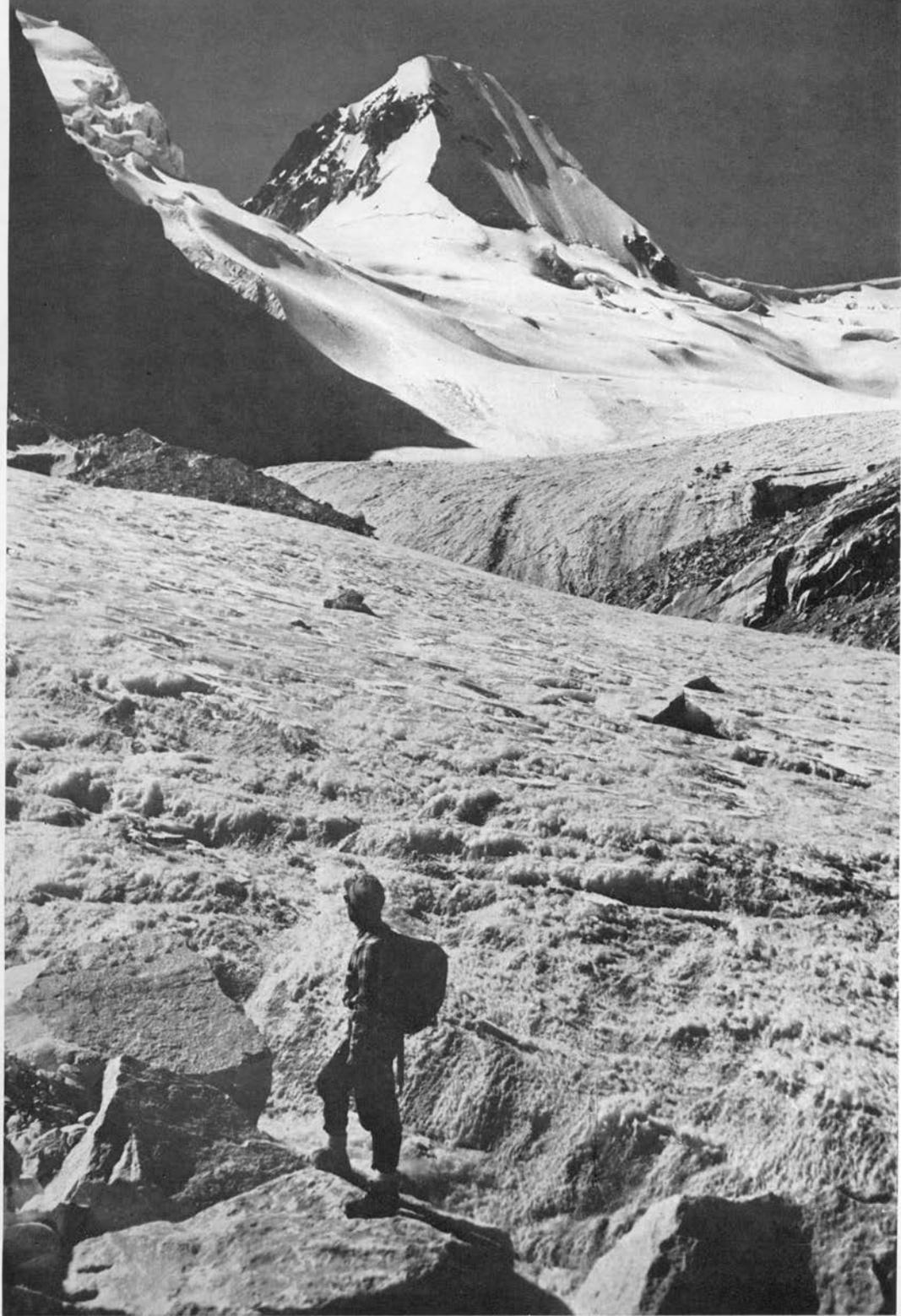
チャチャコマニ東氷河から見たビノウアラII峰

Vinohuara II (5639m) seen from Chachacomani East Glacier,  
Cordillera Real. (By I. Mukou)



チャチャコマニ東氷河から見たビノウアラII峰

Vinohuara II (5639m) seen from Chachacomani East Glacier,  
Cordillera Real. (By I. Mukou)



山

岳

第六十年



2846

183	47.7.18. 受入
N	No.
岩永信雄氏寄贈図書 <small>氏奇贈</small>	
日本山岳会	

## 山 岳 第六十年 目 次 (一九六五年度)

ギヤチュン・カン登頂……………	古 原 和 美…………一	
ランタン・ヒマール……………	近 藤 哲 也…………三	
ポリビア・ア ند ス……………	向 一 陽…………四	
アンナプルナ南峰登頂……………	樋 口 明 生…………六	
グレイシャー・ドーム登頂(一九六四年秋)……………	島 澄 夫…………七	
バルンの山々へ(一九六四年)……………	山 野 井 武 夫…………一〇	
アラスカの山々……………	北 村 泰 一…………二	
セント・エライアス(一九六四年)……………	浅 野 清 彦…………三	
ローガン峯東稜(一九六四年)……………	室 田 欣 一…………三	
ローガン峯(一九六四年)……………	川 崎 巖…………四	
アルタアル連峰・オピスポ峰登頂……………	宮 野 準 治…………五	
知床岳と知床半島一周の旅……………	成 瀬 岩 雄…………六	
海外登山略報(グノン・キナバル登山、カナダ親善登山、マウント・クック登頂)……………	……………	一七

追悼

高野鷹蔵氏（武田久吉・中村清太郎・山川黙・三枝守博・藤島敏男）、住広造氏（武田久吉）、山口国俊氏（浜田一馬）、吉川良平氏（石黒清蔵）、篠原敏弘氏（山本健一郎）、三輪孝氏（小野幸）……………一七九

図書紹介（日本百名山・雪原の足あと・Americans on Everest）……………一五九

会務報告（一九六四年九月—一九六五年六月）……………二〇三

英文梗概……………卷末一

ヒマラヤ登山年譜（続3）（一九五九年—一九六二年）……………田中榮蔵…卷末三

ヒンズー・クシュ山脈覚え書……………吉沢一郎…卷末四

写真

- ピノウアラII峰（東京外語大）（巻頭）
- ギャチュン・カンに関するもの十枚
- ランタン・ヒマールに関するもの六枚（内折込二枚）
- ボリビア・アンデスに関するもの六枚
- アンナブルナ南峰に関するもの六枚（内折込二枚）
- グレイシャー・ドームに関するもの七枚
- バルン地域に関するもの十一枚
- ブラックバイン峰及びブリーガル峰に関するもの四枚（内折込二枚）
- セント・エライアスに関するもの四枚
- ローガン峰東稜に関するもの四枚
- ローガン峰西稜に関するもの二枚
- アルタアルに関するもの二枚

高野鷹蔵氏・住広造氏

地図

- ゴジュンバ水河地域概念図・ギャチュン・カン登頂ルート図
- ランタン・ヒマール概念図（折込）
- チャチャコマニ付近概念図・ソラタ山群概念図・サハマ付近概念図
- アンナブルナ・ヒマール西南地区概念図・アンナブルナ南峰登攀ルート図
- グレイシャー・ドーム概念図・グレイシャー・ドーム登攀ルート図
- バルン地域概念図
- ブラックバイン峰及びブリーガル峰概念図
- ランゲル山脈概念図（折込）
- ローガン峰西側概念図
- アルタアル概念図・オピスポ峰登攀ルート図
- ヒンズー・クシュ山脈概念図（折込）
- 東部ヒンズー・クシュ山脈中央部略図（折込）

表紙カット

佐藤久一朗

# ギャチユン・カン登頂

古 原 和 美

## 計画に至るまで

長野県山岳連盟海外登山委員会が、ヒマラヤ登山の実現をめざして具体的な計画の検討をはじめたのは、一九六一年秋からであった。しかし、その当時は長野県岳連の力にふさわしい山を、長野県岳連の人達だけでという原則のもとに、目標も七千メートル前後の山、隊の規模もせいぜい五、六人程度という考えから、エヴェレストを盟主とするマハルングルル・ヒマール中の未登峯、プモリ(七二四五メートル)を中心に研究をすすめていた。プモリを選んだ主な理由は、世界最高峰エヴェレストを始めとして、ローツェ、マカルー、チョー・オユー等八千メートル級のジャイアーツを含むこの地域が、やはり私達にとって非常な魅力であったこと、日本の登山隊或いは探査隊が、一九五九年秋の福岡大学隊、一九五九年秋から一九六〇年にかけての雪男探検隊を除いては、まだめばしい本格的な登山をこの周辺で行っていないかったこと、過去の記録からプモリは技術的にかなり困難はあろうが、可能性があったこと等からである。

しかし、一九六二年五月になって、外電は西独・スイス合同隊がプモリの登頂に成功したというニュースを伝え、プモリの計画は挫折した。再び振り出しにもどった委員会では、第二目標であったカラコルムのバルトロ・カンリ(七三二メートル)、マルビティング(七四五八メートル)、ミナピン(七二七三メートル)、ネパール・ヒマラヤのランタン周辺の山等、色々な議論の中に検討が加えられたが、どうどうめぐりの末、やはりヒマラヤ登山史上、最も由緒深いエヴェレスト周辺に行きたいと云う、最初の願いが委員会の空気を支配し、かくて新しい目標として浮び上って来たのが、エヴェレストの西方約二〇キロ、チベット・ネパール国境稜線に聳えるギャチュン・カンである。しかし、ギャチュン・カンはロイヤル・ジオグラフィカル・ソサエティで新しく出した地図：“The Mount Everest Region” 1:100,000によると、高度七九二二メートルと八千メートルに近く、世界に残されている未登の独立峯の中では大物である。過去に於て、この山に近づいた代表的な隊としては、一九五二年の英国隊(隊長 E・シプトン)、一九六二年の米国隊(隊長 W・W・セイヤー)等があり、日本からは一九五九年の福岡大隊(隊長 加藤秀木)、一九五九年の雪男探検越冬隊(隊長 小川鼎三)があるが、実際に登攀を試みた隊はまだなく、従ってその地形やルートも明らかでない。このような立派な山が、何故に今まで手つかずで残っていたのか、不思議な気もしたが、南面の写真からすれば、正に岩の城塞で、かなりの難峯らしいことは想像出来た。これに挑むとなれば、当然、隊の規模にしろ諸準備にしろ、プモリとは問題にならない大がかりなものが必要となって来る。果して私達の手におえるかどうか、疑問の点も多かった。ただ私達にわずかながらも希望を与えたのは、ゴジュンバ氷河からギャチュン・カンに近づいて、偵察をされた福岡大隊、雪男探検隊の方々の直接のサジェストであった。即ち、北面のチベット側は問題外として、南面中央部の大岩壁及びヌプ・ラ(東側)からの登攀は望みがなさそうであるが、ゴジュンバ氷河最奥部附近から、頂上のすぐ西の国境稜線に這い上っているアイス・クローアルは、雪や氷が安定し、傾斜が思いの外ゆるやかであれば、唯一の登路となり、国境稜線に出ることが可能ではないかという意見である。写真を見ただけの範

困では私達も全く同意見で、このクーロアール突破が、ギャチュン・カン登頂の鍵であると考えた。

たまたま、その頃折衝を続けていたスポンサーのことで、地元信濃毎日新聞社、信越放送、長野県の後援がほぼ確定し、日本でも有数の山岳県という立場から、私達の計画に対しても予想外の理解と援助が得られ、当初のライト・エクスペディションから、ビッグ・エクスペディションに切り替るに足る資金面の目鼻がついた。これに力を得て、委員会は八千メートルに近い高度の問題、クーロアールに於ける雪崩の問題、国境稜線に達してから、頂上までに可能なルートがあるかどうかの問題等、未解決な問題をかかえながらも、登れるかどうかは、「自分達自身の手足で実際にふれて見ることである」という思い切った考えから、計画遂行に踏み切ったのである。なお第一次隊が失敗したならば、ギャチュン・カンを日本隊の今後の継続事業として、第二次第三次と取りあげて行くことも同時に決定され、またギャチュン・カンが登攀不能の場合を考え、第一次隊の第二目標としては、ギャチュン・カンの西方にあるゴジュンパ・カン（七八三九メートル）、東南方の国境稜線にある七〇三四メートル無名峯、チュンブー（六八五三メートル）等の山々が予定された。

一九六三年六月末、ギャチュン・カン計画は、一九六四年度全日本山岳連盟海外登山の代表として正式に決定を見、同時に長野県内でも後援会、実行委員会が発足し、ギャチュン・カンへの歯車が一齐にまわりはじめた。

### 隊 員 選 考

一九六三年七月末、長野県岳連評議員会によって私は隊長に推薦され、隊員の選考についても一任された。私自身は、目標がプモリから、より高くより困難と思われるギャチュン・カンに変更されたからには、隊員も海外登山に全く未経験である長野岳連の人達だけでは到底無理で、この際大乗的な立場にたつて、県外からも若干のヒマラヤ経験者を隊員として加え、名実共に全日本岳連の代表としてふさわしい隊に、強化しなければならないと考えていた。従

って隊長の重任を引受けるに際し、以上のような条件を示し、最終的には評議員会の了承を得ることが出来た。

隊員を選ぶにあたっての基準等については、過去に於ける数多くの登山隊の経験からして定説もあり、殊更ここに述べるまでもないが、ただ一つ、最後まで各方面から指摘されたことは、大学山岳部等のように、気心のよくわかった一グループから選ぶのと異って、岳連加盟の各単位山岳会から、ピック・アップしたチームを作るだけに、お互の能力や性格もわからず、充分なチーム・ワークがとれるかどうかということであった。しかし長野県岳連は、県内に日本の代表的な山々を数多く持っている関係上、山岳に関する年間行事が非常に多く、従って常日頃の会合や、研修会、講習会、合同合宿等で顔を合せる機会も多く、どちらかと言えば、連盟自体が一つの山岳会のようなムードをかもし出していった。このことは、県内から選ぶ隊員に限っては、チーム・ワークの点でも、まず問題はなからうとは思われた。問題はむしろ、県外から選ぶ補強隊員と、県内隊員の融和がうまく行くかどうかであった。これについては随分神経をつかい、選考にあたっては、如何にヒマラヤ経験者と雖も、私の全く知らない人では隊員として問題にならず、全岳連幹部の方々の助言も相まって、私が日頃親しくし、また私自身も属しているジュガール会（一九五八年の深田隊以来四回にわたるジュガール・ヒマール登山隊の隊員三〇名でつくっている親睦会）のメンバーから選ぶことにし、出発前、国内でのトレーニング合宿をなるべく数多くもつことによって、隊員相互の融和をはかろうとした。こうして最後に長野岳連、全日本岳連の承認を得て決定した隊員は次の通りで、名称も全日本岳連一九六四年ヒマラヤ登山隊と呼ぶことになった。なお後援団体である信濃毎日新聞社から、報道記者一名、信越放送からはカメラマン一名が隊員として加えられた。

隊長 古原和美（四〇歳） 長野岳連 大町山の会 総括・医療担当。

副隊長 吉沢一郎（三三歳）                      グループ・ド・モレーヌ山岳会 渉外担当。

隊員 加藤幸彦（三〇歳） 愛知岳連 名古屋山岳会 渉外・輸送担当。

武田 武 (三〇歳) 長野岳連 大町山の会 輸送担当。  
 町田 和信 (二九歳) " グループ・ド・モレーヌ山岳会 庶務・会計担当。  
 大滝 明夫 (二九歳) " 長野電鉄山岳会 食糧担当。  
 堺 沢清人 (二七歳) " 駒峰山岳会 装備・気象担当。  
 北村 忠雄 (二七歳) " グループ・ド・モレーヌ山岳会 装備担当。  
 安久 一成 (二五歳) 東京岳連 鵬翔山岳会 食糧担当。  
 菊地 俊朗 (二八歳) 信濃毎日新聞社 報道担当。  
 小林 忠治 (二八歳) 信越放送 カメラマン。(以上年齢はすべて一九六三年九月隊員決定当時)。  
 その後多忙な準備期間をさいて、九月に戸隠山で四日間(主として計画の検討と軽いトレーニング)、十日には穂高岳で四日間(主として登攀技術の交流)、十一月には富士山で四日間(主として装備のテスト)、トレーニング合宿を行い、隊員の相互理解と、信頼を深める機会を持つことが出来たのは、チーム・ワークの面でも非常にプラスになった。

### 登山時期の問題

プレ・モンsoon期に於けるネパール・ヒマラヤ登山の時期は、モンsoon来襲直前の約十日間を、ヒマラヤの天候が最も安定した時期として、登頂期間をここにおくのが今では常識のようになってきている。しかし、これも絶対的なものではなく、年によってはモンsoon直前の安定期が、早くなったり遅くなったりすることもあるうし、また最近の各国登山隊記録を見ると、登頂時期がかなり早めになって来ている。これはモンsoon直前の安定期以外にも、登頂のチャンスが何度かあるということを示している。そこで、私達が具体的な登山のスケジュールを決めるにあた

り、例年の隊より早めに入山して、なるべく数多くの登頂チャンスを持つようにすれば、隊員もあせることなく、余裕をもって行動出来、また高度順応にも都合がよく、成功の確率が大きくなるのではないかと考えた。更に私個人としては、四月から五月と暖かくなるにつれて、セラックやアイスフォールの崩壊、クレバスの変化等もいちじるしくなり、氷河全体の荒れかたがひどくなること、又ひどいサンダー・スノーがしばしば起るようになること等、過去のいやな経験から、出来れば登山期間をうんと早めて、三月から四月にかけての、所謂ヒマラヤの冬から春への移行期に、ヒマラヤ登山を一度試みてみたい考えを持っていた。

従来ヒマラヤ地方の冬季には、ジェット・ストリームと言われる七〇〇八〇ノットの偏西風が、八千メートル前後の山頂附近を吹き荒れており、また降雪も多く、登山には適しない時期と言われている。しかし過去のヒマラヤ越冬記録によると、一夜にして大量の雪が降り積もることもあるが、連日降り続くようなことは思ったより少なく、むしろ冬季も意外に晴天が続き、ヒマラヤの山々がくっきりと眺められる日も多いようである。そこで、厳冬期はともかくとして、少し暖かくなった二月から三月頃の間、キャラバン、ベースキャンプ、前進キャンプの建設を行い、ジェット・ストリームの弱り出す最初のチャンスをとらえて、登頂することも可能ではないか。確信はもてなかったが、ヒラリー隊の三月のアマ・ダブラム（六八五メートル）登頂、アメリカ・エヴェレスト登山隊の五月一日登頂等に力づけられた。このような経過を経て、第一回目の登頂期間を四月中旬と想定し、これから逆算して、ゴジエンバ氷河B C建設を三月上旬、カトマンズ出発を二月中旬、従って日本出発は一月下旬の構想が生れた。

## 諸 準 備

並行して進められていた色々な手続き、諸準備は、スタートが早かったため、すべて順調に進み、一二月一五日は、長野市に集められた食糧・装備等の梱包も、すべて長野県岳連傘下各山岳会の献身的な努力で完了し、また登山

許可の公報も入手することも出来た。食糧・装備等については、過去の日本隊に準じ若干改良、工夫を加えた程度で特別新しいものは殆んどなかった。一、二変わったところでは、発電機、酸素補給器位のものであろう。

発電機は、当初報道担当隊員が、撮影用カメラのバッテリー充電、写真の現地焼付、引伸し用として要望したものであるが、折角持つて行くなら、キャラバンの途中や、ベースキャンプで電燈をつけようということになって調達したもので、長野県内のメーカーに製作させた。百ボルト出力二百ワット、重量二三キロの小型だが、キャラバン中或いはベースキャンプの天幕村では、各天幕に電燈が付き、隊員の精神安定に与えた影響は大きく、充分に効果をあげてくれた。

酸素補給器は、ギャチュン・カンの高度よりして、絶対必要とは考えられなかったが、高所の岩登りが予想され、かなりエネルギーを消耗するのではないかと思われたので、主として登頂隊用として用意された。フランスのジャヌー登山隊使用のものと同じフランス製ボンベ十九本（耐圧  $330 \text{ kg/cm}^2$ 、脱水純酸素  $93\%$ 、重量  $5.6 \text{ kg}$ ）、レギュレーター（ $1 \text{ l/min} \sim 5 \text{ l/min}$  調整可能）、マスク夫々四組を購入した。ボンベ十九本という数字は何となく中途半ばだが、これはフランスのメーカーにあった在庫品を、あらいざらい入手したからである。なお医療用として別に、川崎航空製作、600 $\text{ l}$ 入りのボンベを四本購入、フランス製のレギュレーターがびったり合うように、口金を造りなおしてもらった。

その他クローアールの雪崩、国境稜線より上部の岩場を考慮に入れ、これ等の場所には、すべて固定ロープを取り付ける予定で、固定用、バイレン・ロープ、縄ばしご、約三五〇メートルを用意した。

食糧・装備の総重量は、出来るだけ軽くとの方針ではあったが、結局外装まで入れて約九トン半になってしまった。すべての荷は一二月一六日、二台の大型トラックで長野を出発、横浜で大阪商船「らんぐん丸」に積み替えられ、二二日隊員より一足先にカルカッタへと出航した。

## カトマンズへ

一九六四年一月二三日、私、町田、菊地、小林の四名は羽田を飛び立った。バンコックで、勤務先の用件で先に日本を離れていた加藤が乗り込み、二六日夜遅く五名はカルカッタのダムダム空港に到着。リットン・ホテルを本拠にして、翌日から荷物の通関業務その他の仕事に取りかかった。一月下旬のカルカッタは、夏服の私達にはまだ肌寒い位であった。中印国境紛争、回教徒・ヒンズー教徒の衝突によって起った、所謂カルカッタ暴動と、うち続いた事件の直後だっただけに、カルカッタの街は数多くの軍隊が警備についており、何となく重苦しい空気に包まれていた。二六日着く予定の「らんぐん丸」は、なかなか着かなかつた。動乱で港に入ることが出来なかつた船が、沖合いにまだ何十隻とおり、数少ない船着場があくのを順番待ちしているとのことであった。相変らず船荷通関の交渉は、ビスタリ（ゆっくり）ペースで、ややこしかつたが、まだ時期は早いし、今回はふところも暖かいので、私達も特別あせる必要もなく、余裕をもって対処することが出来た。

三一日、「らんぐん丸」はようやくフーグリ河に姿を現わしたが、接岸出来ず、そこで私達は、登山隊では今まであまり聞いたことのない「荷物のはしけ取り」をすることにした。このやり方は結果的にはかえって具合がよかつた。隊員と通関業者、カルカッタ税関の担当官、駐カルカッタ・ネパール領事館の担当官しか乗っていない。はしけの上で荷物の内容検査、封印をやるのであるから、多勢に無勢、交渉もやり易く、至極あっさり通関は済んでしまった。しかし、荷物の中、三個が横浜で積み込む際、エージェンツのミスで、船艙の一番下に入れられ、しかもご丁寧なことに、老大な鉄材の下敷きになっていたため、これを引取るのに更に三日かかってしまった。

二月五日、カトマンズでの仕事をスムーズに進めるため、私と菊地はダムダムをたつて空路カトマンズへ先行した。カトマンズはカルカッタより一段と寒く、霜がおり、氷がはるきびしさに、二人は震えあがり、夏服の下にスウ

エーターを着込む始末であった。ここでもすべての登山隊と同様、通関業務をはじめとして色々な仕事に忙殺され、連日市内を飛び廻った。ネパール政府からギヤチュン・カン登山隊付として派遣される連絡官は、かつてインド陸軍に勤務したことのあるミスター・J・C・タクル(25歳)にきまった。六尺豊かな大男であるが、外務省儀典局長P・C・タクル氏の弟で、毛並みのよさもあってなかなかの紳士である。また私達の隊の郵便物、その他通信の在カトマンズ連絡責任者は、第三次ジュガール・ヒマール登山隊の連絡官を務め、既に顔なじみのティルサ・ナラヤン・マリ君に依頼し、快諾を得た。

一方、荷物輸送を担当した、加藤、町田、小林三隊員は、荷物と共にカルカッタから鉄路パトナへ向い、パトナでは又わずらわしい交渉を重ねた後、ようやくIALの輸送機をチャーターし、パトナ・カトマンズ間三往復で九トン半に及ぶ荷物の輸送を行い、二月一二日に完了、翌一三日、カトマンズ空港で荷物の通関が丁度終ったところに、九日羽田をたつて追いかけて来た後発隊の吉沢、北村、堺沢、安久、武田、大滝の六名が、全く無駄のないタイミングのよさで到着。ここに全隊員、全荷物がカトマンズに集結し、第一段階が終った。

## シ エ ル パ

ダーズリン系のシエルパを使うべきか、それともカトマンズのヒマラヤン・ソサエティ(HS)系のシエルパを使うべきか、この問題については、既に日本での準備期間中に、隊員間で色々と論議された事柄である。しかし結論的には、技術面等色々欠点もあるが、私達の目標がマハルングル・ヒマールにあるからには、その中心地であるナムチェ・バザール周辺出身のシエルパで固めているHSのシエルパを使うことが、現地でのトラブルを少なくするために最も良い方策であろうと、九月以来HSと連絡を重ね、サードーをはじめとして、HS所属の有能なシエルパを数名指名して、HSの内諾を得ていた。従って、私達がカトマンズに着いて、直接の交渉に際しても、何のトラブ

ルも無く、全く友好裡にスムーズに事は運んだ。一九六四年プレ・モンズーンは、これといったビッグ・エクスペデ  
 イションもギャチュン・カン以外には無く、また他の隊に先んじてカトマンズに乗り込んだため、HSには職を求め  
 てソロ・クーンブからやって来たシエルパ等がごろごろしており、既に指名していたシエルパ以外に、私達は選りど  
 り見どりで、よさそうなシエルパを追加採用することが出来た。HSのディレクターが、今度の日本隊位強力なシエ  
 ルパ・チームを獲得出来た隊は、今までにないとお世辞を言ってくれた程だが、カトマンズで最終的に私達が採用し  
 たシエルパの顔ぶれは、次の通りであった。

サー ダー パサン・プタールⅢ号(ダージリン)

コ ッ ク キルケン(タミ)

ハイ・アルティチュ  
 ード・ポーター (シエルパ) ギルミー・ドルジェ(クンデ)

" " " " ナワン・ドルジェ(クムジュン)

" " " " イラ・ツェリン(ナムチェ・バザール)

" " " " アン・ドルジェ(クンデ)

" " " " ニマ・テンジン(タミ)

" " " " ニマ・テンジン(タンボチエ)

" " " " テンジン・ギルミン(ナムチェ・バザール)

" " " " パサン・テンジン(クンデ)

" " " " アン・パサン(クムジュン)

" " " " アンゲレ・ラマ(ソロ)

" " " " ドルジェ・シエルパ(ソロ)

ローカル・ポーター (シエル。パ) カルマ・タクダバウ (ダージリン)

" " ( " ) ペンバ・ヌルブ (ロムジヨ)

" " ( " ) ミンマ (ナムチェ・バザール)

" " ( " ) ハクパ・ギャルブ (ソロ)

" " ( " ) アン・ドルジェ (ガート) リジン・ゴンパから雇備。

キツチン・ポイー (シエル。パ) フータルケイ

" " ( " ) スリ・ナムギャル (ナムチェ・バザール)

" " ( " ) サガラマ (タミ)

## キ ャ ラ バ ン

二月一七日、準備はすべてととのい、ギャチュン・カンをめざして、カトマンズを後に東への旅が始った。隊員一名、連絡官一名、シエル。パ二〇名、クーリー三一五名、総勢約三五〇名のキャラバンである。カトマンズからソロ・クーンブの中心ナムチェ・バザールまで一七日、この道は戦後ネパールが世界の登山家達に門戸を開いてから、英国をはじめとして幾多の登山隊が辿ったエヴェレストへの道であり、私達は先人達を偲びながら毎日東へ東へと長い旅を続けた。

前年、アメリカのエヴェレスト登山隊が、総勢一千人の大部隊で同じ道を通じた後だけに、物価やクーリーの賃金等、つり上っているのではないかと恐れていたが、数年前とあまり変りなく、どちらかと言えば、日本の東海道にもあたる、カトマンズ以東の主要道路にあたるためか、街道筋の部落も人も秩序が保たれており、西のポカラ周辺で最近言われている物価や賃金の昂騰もあまり見られず、現地人とのトラブルらしきものも殆んど起らなかった。故郷

のソロ・クーンブとカトマンズの間を、常日頃しばしば往復している私達のシエルパの顔が、ものを言ったせいもあるだろう。

天気は申分なかった。カトマンズ到着以来ずっと快晴続きで、キャラバンが始ってから天候は安定しており、東へ進むに従って、マナスル三山から、ガネツシュ、ランタン、ジュガル、ガウリサンカール、ロールワリン・ヒマールと、澄みきった空に移り変って行くヒマラヤの美しい山々を毎日楽しむことが出来、出発前期待していた「冬の好天」があつたことを喜んだ。さすがに緯度が南のせいか、昼の陽光は強く汗ばむ程であつたが、朝夕は寒く、隊員達はキャラバン第一日目から夜は羽毛服を着込み、とうとう最後まで羽毛服を手元から離せなかつた。しかし又それだけに、予想もしなかつたインフルエンザが流行し、これには随分悩まされた。ネパールで今冬インフルエンザや天然痘がはやっていることは、カトマンズ滞在中も承知し、注意は怠らなかつたが、キャラバンがはじまると、先ずシエルパ、クリーリーにインフルエンザが拡がり、一週間程たつと、もはやキャラバン全体が咳の行列となつてしまつた。隊員達は感染しないように、いつの間にか行列の先頭からラストに集つて歩く慣わしになつていたが、それでも遂に発病する者が続出し、キャンプ地でも、患者用テント、回復期テント、健康者テントと分けて入らねばならなかつた。

ソロ地域に近づくに従つて、毎日越えるいくつかの峠も次第に高度を増し、第十二日目にはキャラバン中最も高い、高度約三六〇〇メートルのラムジュラ・バンジャンを越えた。シエルパの話によると、昨年私達と殆んど同時期にこの峠を越えたアメリカ隊は、一メートルを越す深い新雪に、裸足のクリーリーが動けず、随分痛めつけられたといふので、気がかりであつたが、今年は峠の頂上付近に、わずかの残雪が凍りついている程度で、あつけなく越えてしまつた。ソロ地域に入つてからも、私達の念頭を去らなかつた不安は、三月上旬までは、時々一夜にして一メートルもドカ雪が降ることがあるといふことであつたが、結局ナムチェ・バザールに着くまで天候が崩れなかつたのは全

く幸運であった。

キャラバン第十四日目、ようやくドウド・コシの岸边に出て東進を終り、これより針路を北に変え北上、翌日高度約三〇〇メートルのカリ・ラで、はじめてドウド・コシの上流はるかに、目標のギャチュン・カン南面を望むことが出来た。ルートに予定しているクローアール上部も見えるが、まだ遠くて精細はつかめない。しかし噂さにたがわず、登攀はかなり困難かつ危険なものとなりそうである。かわりばんこで双眼鏡をのぞいている隊員の意見も、樂觀悲觀論半々位である。

三月四日、カトマンズを出てから一七日、キャラバンは高度約三八〇〇メートルのナムチェ・バザールに着いた。ここでカトマンズから連れて来たクローリーは一旦全員解雇し、あらためて寒さや高度に慣れている、ナムチェ周辺のシエルパ族のクローリーに切り替えることにして、隊員もカトマンズ以来はじめての休養を取った。ナムチェ・バザールはヒマラヤのまった中の部落として、世界に名を知られているだけに、周囲はすべて雪と氷の山々にかこまれ、特にクワンデ（六一八七メートル）、タムセルク（六六三三メートル）がすばらしい。ここでも雪は全くなく、まるで信州の春のように、のどかな風景である。

キャラバン中のインフルエンザがなおおきらず、この数日最も調子の悪かった町田、北村両隊員は、ナムチェ到着と同時に、四十度の高熱を出し、寝込んでしまった。ナムチェの高度が三八〇〇メートルの高さだけに、肺炎を引き起す可能性もあり、ドクターの私としては、そう安心も出来ない状態であった。

三月六日、吉沢副隊長、加藤、大滝の三名は、コジュンバ氷河ベースキャンプ地選定の目的をもって、数名のシエルパと二〇名のクローリーを連れてナムチェを先発、翌七日、先発隊のあとを追って本隊も再びキャラバンをはじめた。町田、北村隊員はまだ熱が高く、回復するまでナムチェで静養するよう指示し、世話係として二名のシエルパを残した。チェック・ポストのキャプテン・グルンをはじめ、私達の隊にいるナムチェ出身のシエルパ達の女房連中も、

心よく二人の世話を引き受けてくれた。本来ならばドクターである私も、しばらく付添って様子を見るべきであったが、先発隊や本隊にもインフルエンザのなおりきらない隊員、シエルバ、クーリーが多数おり、上へ登れば登るほど、高度の影響も強くなり、致命的なことが起る公算が強かったし、またナムチュのチェック・ポストには無電があつて、常時カトマンズと連絡を取っており、万一の場合はただちにヘリコプターをカトマンズから呼び寄せるよう手配もついたので、後髪を引かれる想いで、私は本隊と行動を共にしたのである。

ナムチュからゴジュンバ氷河のベースキャンプまでは、ドウド・コシに沿って遡ること五日の行程で、相変らず天気は良く、エヴェレスト、ローツェ、タムセルク、カンテガ、アマ・ダブラム、タウエチュ、チョラツェと、マハルングール・ヒマール中の著名な山々が次々と顔を出し、川沿いの道は森林限界を越えて牧草地帯へと入った。まだ冬枯れのまま花は咲いていないが、周辺にはヤクの群がのどかに首の鈴を鳴らして、夢のような風景である。しかし高度は既に四千メートルを越え、そろそろ最初の高山病が隊員達をおそい、インフルエンザとミックスして最後の数日は全く苦しい行進となった。ゴジュンバ氷河のベースキャンプには先発隊が三月一〇日、本隊は一日に着いたが、先発隊の吉沢副隊長はベースへあと一日のところで病状が悪化し、一時は全身の痺れん、意識不明となって先発隊を脱落、本隊に助けられてベースに辿りつき、また私、武田隊員、連絡官のミスター・タクルも、高山病やインフルエンザで本隊から脱落し、一日遅れて第三陣として二日ベースに入った。全隊員と全物資がベースに入れば、その遠征は半ば成功であるとよく言われているが、まだナムチュには二人の隊員が病床にあり、ベースでも吉沢、武田が動けない症状では、ベースキャンプ到着の喜びもあまり感ぜられなかった。カトマンズからキャラバンの一員として連れて来て、今では隊のマスケットになつていた連絡官のチベット犬(生後二ヵ月)バッテリーも、高度の影響を受けたのか、ベースで元気なうずくまっていた。

## ベースキャンプ

ベースキャンプの位置は、広いゴジュンバ氷河に、左岸から半島状に突出したモレーンの上、高度約五二八〇メートル、チョー・オユーからギャチュン・カン、ヌブ・ラ、七〇三四メートル無名峯に至る国境稜線の山々が一望のもので、どの方向から雪崩が出ても絶対安全と思われる、一九六二年アメリカのセイヤー隊のベースキャンプにもなった場所、BCとしては申分なかった。

BCでは、クーリーとしてナムチュエから荷をかついで来たシェルパ、フー・ドルジェ(クムジュン)、カミ・パサン(クムジュン)、ペンバ・テンジン(クムジュン)の三名を新たにローカル・ポーターとして採用、またマイル・ランナーとしての八名(二名一組の四組)を加えて、サーダー以下総数三二名のシェルパが攻撃のために残った。

三月一三日は全員でBCの整備、荷物の整理を行い、夕方までには石を積みあげて作った大食堂、シェルパ用寝室をはじめとして、発電機を備えつけた発電室、気象観測所、便所等、数箇月を過すに充分な機能をもつ基地が出来上がった。五千メートルを越えては、使用に耐え得るかどうか懸念していた発電機も、快調にうなりはじめ、各テントのベンチレーターからコードを通した電燈が一斉についた。

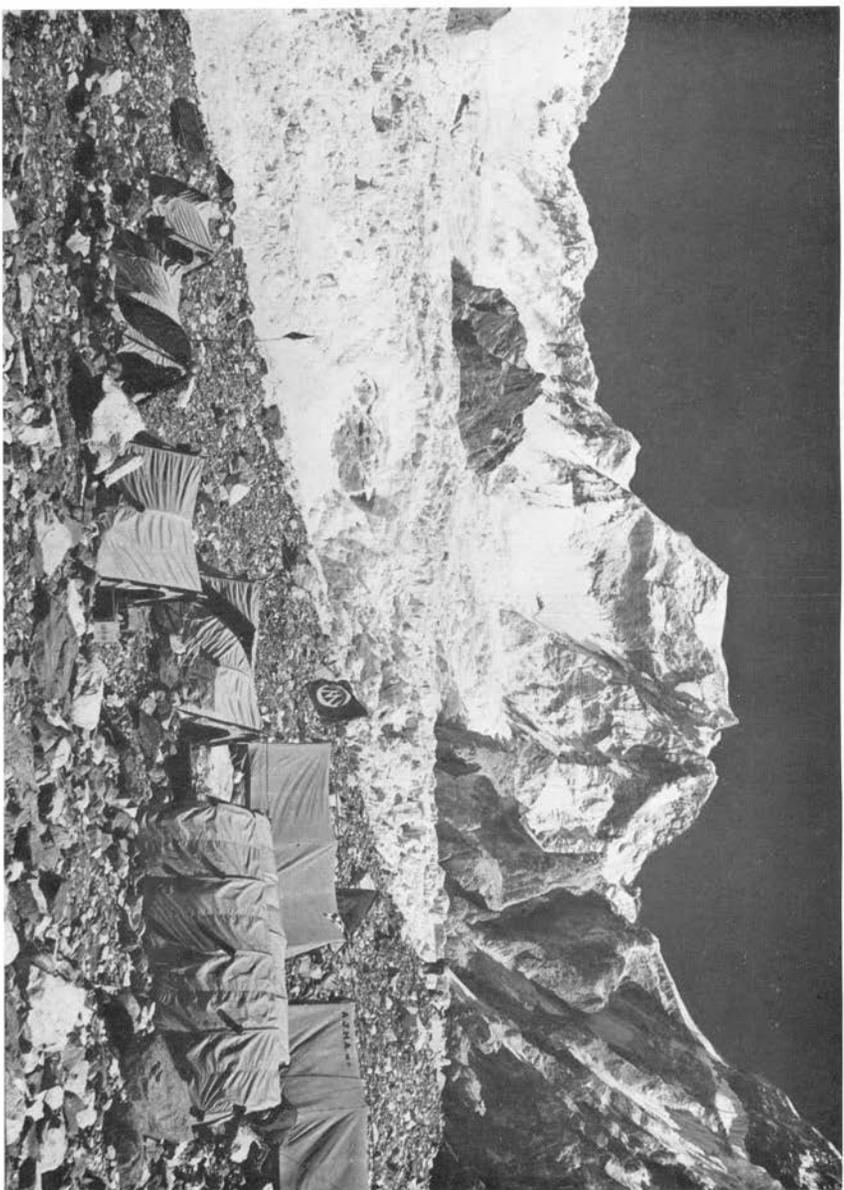
## アイスフォール

BCから眺めたところでは、やはり想像していた通り、南面からのルートはゴジュンバ氷河のアイスフォールを突破して、頂上西側の国境稜線に這い上っているクローアールの下に達し、クローアールをつめて稜線に出る以外にはなさそうである。BCから約七、八百メートル先で、ゴジュンバ氷河全体が、高差約四、五百メートルにわたって滝状に急激に落ち込み、そのあたりで夜となく昼となくセラック崩壊の響音をたて、険悪な形相をしているのが気にな

ったが、ヒラリー隊もセイヤー隊も、このアイスフォールを突破してヌブ・ラ（五九二メートル）へ登っているし、氷河の幅が非常に広いので、どこか抜け道がありそうである。第一段目のアイスフォールの上部は、一たん平坦になっているが、更にその奥には次のアイスフォールがあるようであるが、はっきりわからない。ただ、目で見える範囲では、氷河は上部になるほどクレバスの亀裂もまだ少なく、また例のクローアールも思った程傾斜がきつくないようである。私は天候にさえ恵まれれば、成功するかも知れないと直感的に感じた。いずれにしても、差し当りの問題は、この氷瀑地帯を乗り越えて、クローアール直下に達することである。早速作戦会議が開かれ、まだ調子の悪い隊員もいて、二、三日休養もしたいところだが、好天は相変らず続いているので、翌一四日から登高を開始することになった。

三月一四日、加藤⇨サーダー、大滝⇨ギルミー・ドルジェの二組が、先ずアイスフォールの中央部あたりに登路を求めて挑戦した。BCからは、これ等の隊の行動がよく見える。簡単に突破するのではないかとの予想を裏切って、遅々として進まない。その中、豆つぶのような加藤達のあたりに響音がとどろき、雪煙がまい上り、思わずひやりとなる。午後になって、二組共落胆した顔をして戻ってきた。中央部周辺は、三十分おき位にセラックが崩壊して氷雪崩なだが起り、とても近よれたものではないと言う。それにシェルパの技術がお粗末で、たよりにならないらしい。今日は攻撃の初日なので、シェルパの中で最も技術がすぐれているというサーダーとギルミーを、わざわざ出してやったのである。出鼻をくじかれた恰好で、加藤達もシェルパもしゅんとなってしまう。

翌一五日は、加藤⇨サーダー、大滝⇨アン・ドルジェ、安久⇨カルマ、堺沢⇨ナワン・ドルジェの四組を出した。中央部は昨日の偵察で、問題にならぬことがはっきりわかったので、加藤組、大滝組は左岸よりに、他の二組は右岸よりに偵察に向った。しかし昼過ぎ、加藤組、大滝組はゆきづまって引返すむね、相ついでトランシーバーで連絡して来た。大滝組はアメリカ・セイヤー隊の前進キャンプの跡を発見したが、その先で大クレバスに出合い、越えるこ



ベースキャンプから見たギヤチュン・カン  
Gyachung Kang (7922m) seen from the Base Camp. (By K. Kohara)



ゴジュンバ氷河氷瀑地帯の登高  
Ascending in the ice-fall of the Ngojumba Glacier.  
(By Y. Kato)



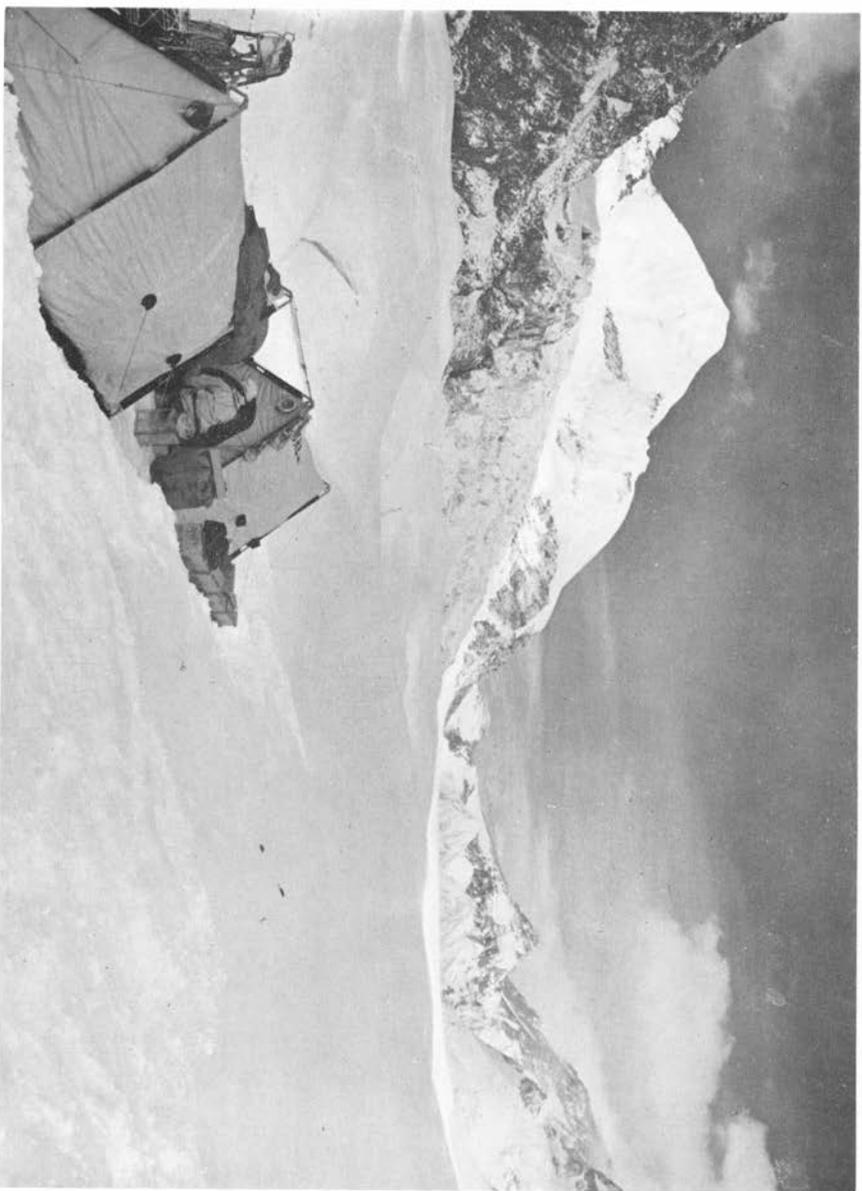
C I, C II間のアイヌ・フォール  
The ice-fall between Camps I and II.  
(By Y. Kato)



CIVから見たアイス・クーロアール  
The ice-couloir seen from Camp IV. (By Y. Kato)



アイス・クーロアールの登高  
Ascending in the ice-couloir with an unnamed peak  
(7034m) in the background. (By Y. Kato)



第2キャンブからヌプ・ラと6896m峰を望む  
Nup La (5913m) (right side snow-field) and the 6896m Peak (left) seen from Camp II.



ギヤチュン・カン

の頂上における墾沢清人隊員

seen in the backGround. (By Y. Kato)

7346m) in Tibet



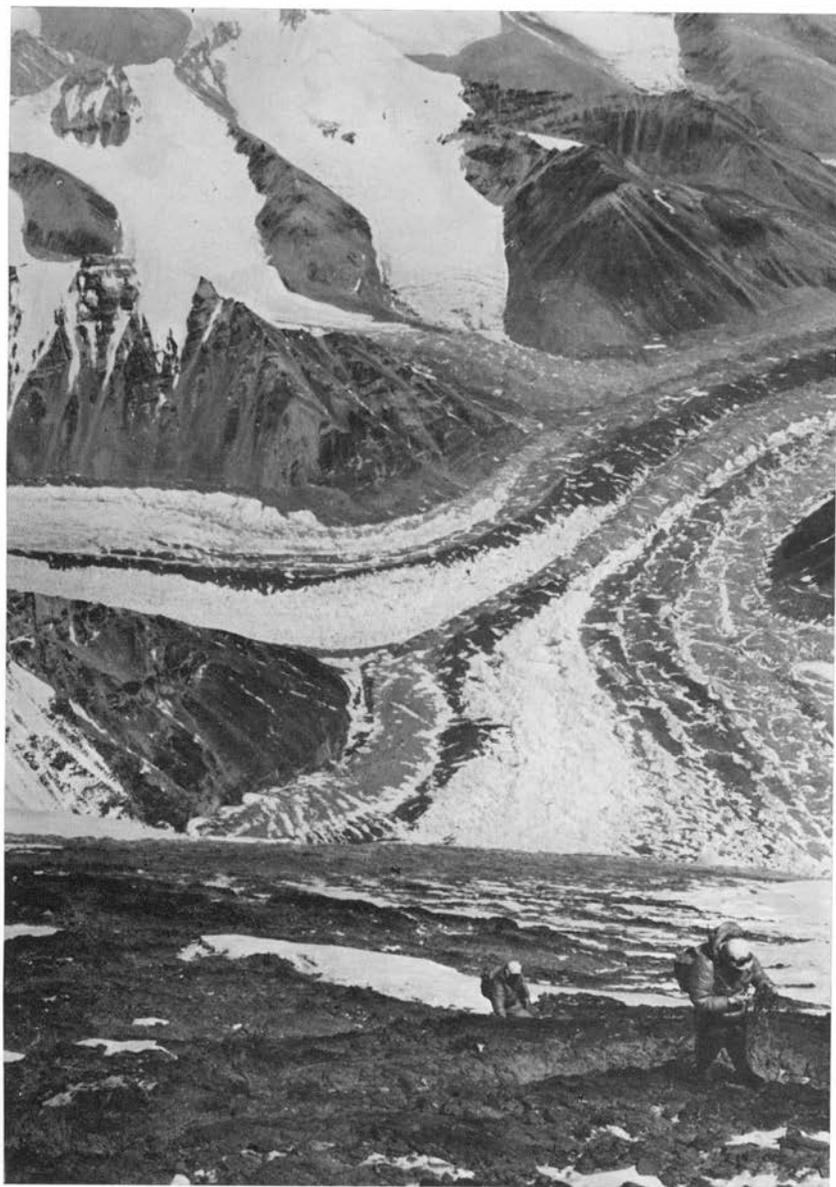
ギヤチエン・カンの頂上からエヴェレスト、ローツェ、ヌプツェ、マブツェ、アモリ、チャムラン、アマ・タ  
ドラムを望む

Mt. Everest (8848m), Lhotse (8501m), Nuptse (7879m), Pumori (7135m), Chamlang  
(7319m) and Ama Dablam (6856m) seen from the summit of Gyachung Kang.

(K. Yasuhisa)



チヨール・オユーとゴジユンバ・カン (ギヤチュン・カンの頂上から)  
Cho Oyu (8153m) and Ngojumba Kang (7839m) seen from the summit of Gyachung Kang.  
(K. Yasuhisa)

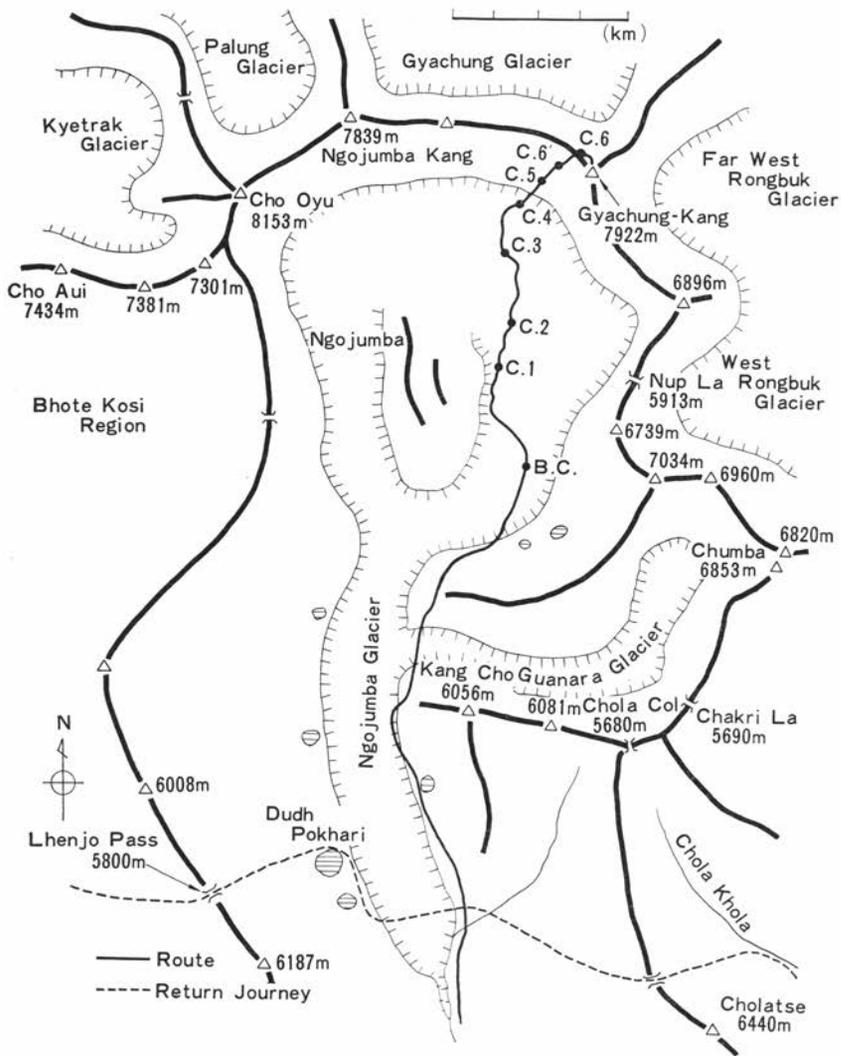


ギャチュン・カン頂上直下の岩場を登る

Climbing up on the steep rock slope just below the summit of Gyachung Kang. Gyachung Glacier (Tibetan side) seen far below.

(By Y. Kato)

Sketch Map of the Ngojumba Glacier Region



とが出来なかった。ヒマラヤ三回目の加藤が弱音を吐いて、BCの私も少し心配になって来た。これだけ幅広い氷河であるから、どこかに弱点がありそうなものである。右岸沿いに登路を求めている安久組、堺沢組も、かなり悪いらしく、行動はなかなかはかどらない。いらいらして双眼鏡で見ている中に、別々のルートをさぐっていたこの二組が、とうとう一緒になってしまった。また一つ希望が消えたわけである。しかし午後も遅くなって、四人組から、第一段目のアイスフォール帯を突破して、高度約五七〇〇メートルの氷河台地に抜け出たとの嬉しい報告が入って来た。それより上部にも又新しいアイスフォール帯があるが、今までより傾斜が全体的にゆるく、先の見通しもよさそうだとのことである。このニュースでBCはやっと明るい空気になった。

三月一七日、第一氷瀑地帯の上部、先に安久達が到達した高度約五七三〇メートルの氷河台地にCIが建設されて、加藤、安久が三名のシェルパと共に入り、BCからは、数日の休養ですっかり病の回復した武田の指揮で、シェルパのポッカ隊が動きはじめた。

一八日、加藤、安久はCIから上部へのルートを求めて更に氷河を前進、傾斜は少しゆるくなったが、第二段目の氷瀑地帯も簡単には行けず、特に大小さまざまなクレバス群になやまされ、シェルパのカルマがヒドン・クレバスに転落して肋骨を痛める小事故も生じたが、危険なクレバスにはジュラルミンのはしごを渡し、一九日には高度五九六〇メートルにCIIを建設した。既に東方のヌプ・ラより高い位置である。前進が軌道にのり、ポッカも順調に進み、計画が思いの外進展して行くのに驚いたり喜んだりしていたこの日は、それ以外にもう一つの喜びがあった。ナムチエで、三月六日以来療養を続けていた町田、北村両隊員が、健康をとりもどしてBCに到着したのである。病との闘争直後に、いきなり五千メートルを越えるBCに登って来たためか、顔色はさえず、苦しそうではあったが、攻撃期間中に戦列に復帰することはまず駄目だろうと、半ばあきらめかけていた私達にとっては、この上ない喜びであった。

三月二三日、最前線にいた加藤、安久、堺沢、武田、サーダー達の健闘で、第三段目のアイスフォールが切り開かれ、CⅢへの道がついた。CⅢの位置は、ギャチュン・カン頂上附近から派生して、南面の大障壁と、クローアールを分けている急峻なスノー・リッジの末端氷河台地上で、高度約六四一〇メートル、振りかえればゴジュンバ氷河Bのすぐ下流にあるカン・チョウ（六〇五六メートル）は既に足下に沈み、かわってドウド・コシ下流周辺のマハルングール・ヒマール、ロールワリン・ヒマールのおびたしい山々がせりあがってき、またヌプ・ラを越えたはるか彼方には、エヴェレストが高々と王者の貫祿をもって聳えたっている。

二四日、CⅢの加藤、サーダーは、ゴジュンバ氷河最奥部の大氷原を更に前進して、待望のクローアール直下に達し、CⅣの予定地を選定すると同時に、クローアールの氷や雪の状態を偵察することが出来た。これによって、第一難関であった、三段にわたるゴジュンバ氷河の氷瀑地帯は突破され、BCからクローアールに至るルートが確保された。

二五日、攻撃を開始して以来まる一週間、休みなしに最前線で活躍していた加藤、安久、サーダーのパスンは一たん休養のためにベースに下山、かわって武田、町田、堺沢が第一線に出、三月二七日、クローアール直下の安全な氷河台地、高度約六六五〇メートルにCⅣ（アドバンス・ベース）を建設した。下方の各キャンプでは、シエルパ達によって連日荷物の輸送が続けられ、CⅡには大滝、CⅠには北村が輸送の責任者として地味な仕事の指揮をしていた。

天候はずっと安定しており、午前中は快晴で午後になって雲が出て来る日が続いていた。まだ午後には雪の降る日は少なく、雷は全くなかった。数百羽の渡り鳥の群が、ヒマラヤを越えて北へ向う日もあった。

最初の計画ではCⅣ（アドバンス・ベース）が建設されたら、休養のため隊員は一たん全員BCに下り、充分休養をとった後、クローアール工作、頂上攻撃を行う予定であったが、天候がなおしばらく続きそうなこと、クローアール

ルから帰って来た加藤達の報告で、クローアールの雪や氷が現在最も登高に良い状態であること、隊員も目下全員調子が良くなっていること、荷物輸送も順調に進んでいること等から、私はこのチャンスのをがさず、引き続き頂上まで速攻する決心をした。

BCの私、吉沢副隊長、それに休養中の加藤、安久を交えて作戦会議がもたれ、登頂までの最終案が検討された。そしてクローアールの工作に一週間、国境稜線に最終キャンプを置いて登頂に約五日間、即ち四月一〇日前後に第一回の攻撃を行うスケジュールが組まれ、無電で全キャンプに伝えられた。

### クローアール工作

三月二八日、最前線の堺沢、町田を中心にいよいよクローアール工作がはじまった。国境稜線までの高差約八百メートル、傾斜は平均四〇度、雪や氷が比較的安定しているとは言うものの、わずか二、三回のヒマラヤ経験では、雪崩の予想も難かしい。雪崩の恐怖におびやかされながらのルート工作は、苦闘そのものである。それに高度は六六〇メートルを越え、再び酸素不足の影響が強くなり、行動は今までの半分におちた。一日に百メートルかせいぜい二百メートル、ステップを切り、固定ロープをはるのがせい一杯で、くたくたに疲れはててCIVに帰る。翌日は更にその上に固定ロープをのばして行く。

三〇日には、BCで休養充分の加藤、安久がCIVに入って再び先頭を交替、堺沢、町田、武田は休養のため下部キャンプに下った。

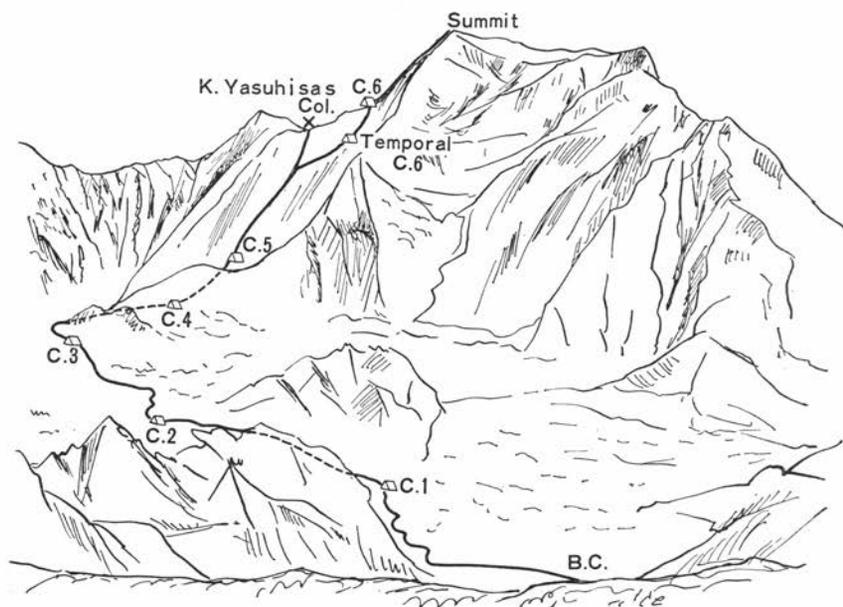
四月一日、クローアールのどまん中、高度約七〇五メートルにCVが建設された。雪崩の危険をさけるため、クローアール内にはキャンプを置きたくなかったけれども、国境稜線まで一日で出ることはいよいよ難しく、止むを得なかったのである。CVはクローアールの斜面をけずって、やっと作った狭いスペースにたてられており、一足テ

ントの外に出るとスリップする恐れがあり、大小便も固定ロープにつかまって用を足した。

一方その間も、各キャンプの物資輸送が、シエルパ達によって間断なく続けられた。BCにいた私も、BCから毎日上げる荷物の指示、四、五日おきに下からやってくるマイル・ランナーとの連絡、日本へ送る通信、報告類の原稿書き、山麓の部落からやって来る焚木や肉、卵等の物売りとの交渉、トランシーバーによる各キャンプとの定時通話等、結構忙がしかった。一度最前線まで登って、自分の目で上部の状況を確かめたかったが、急ピッチで前進が続いていたため、まだその余裕がなかった。しかし上部のことは、CIVに登るべく三月二八日BCを出発した吉沢副隊長に、すべて一任してあった。

四月三日の朝、最初の定時通話は、CⅢにいる吉沢副隊長から重大な事項を報告して来た。昨夜、クローアールのCVが雪崩に襲われ、テントは倒壊し、危くたすかかった加藤、サーダーのパスンは、着のみのまま、真夜中に固定ロープを伝ってCIVに逃げ帰ったというのである。覚悟はしていたものの、とうとう来るべきものが来た。BC到着当時は一日中雪の降らない日が多かったのだが、此の一週間頃から午後降雪があるようになり、心配していたところだった。しかし、日時がたてば、ますます午後の降雪は強くなり、その内雷も鳴りはじめるだろう。いずれにしてもクローアールに登るのは、冒険で一種のかけに近いが、登路がここ以外にない現在、あくまで登頂をねらうためには、強行する以外に手はない。クローアールの登路、CV、すべて固定ロープを今以上嚴重につけるよう、改めて指示する。多量の新雪が降れば、おしまいである。今の天気が続いている間に、短時日で登頂しなければならぬ決意を更に深くする。

四月四日は加藤、パスンにかわって、安久がCVに入り、クローアール上部の工作をはじめ、四月六日、安久、ニマ・テンジン（タミ）、イラ・ツェリンの三名は遂に国境稜線、高度約七五〇〇メートルのコルに出ることが出来た。安久は稜線まであと百メートルのところまで参ってしまった。しかし稜線へ出たシエルパ達の報告では、コルから



頂上への国境稜線は、約三〇〇メートルにわたって完全なナイフ・エッジで、とても行けたものではないと言う。C Vが建設されてから既に六日たったが、まだ先の見通しがつかず、C IVに前線指揮者として今日上った吉沢副隊長と、B Cの私との間で、今後の対策をめぐって、午後八時まで交信をかわし合った。

四月七日、安久にかわってC Vに入っていた大滝、小林（カメラ・マン）は、新ルート開拓の期待をになってクローアール上部より、クローアールをはずれて、新しくななめ右上へ、岩と雪の壁を登り、高度約七五〇メートル、稜線までもう百メートルの岩棚に、仮のC VIを建設することに成功した。無電の連絡によれば、仮のC VIから、頂上直下の国境稜線（先に二名のシェルバが報告したナイフ・エッジより、更にもう一つ上部のコル）まで、明らかに登攀可能で、頂上はもう間近かで、一日で行けそうだが、C VIのキャンプ・サイトが悪く、真のC VIを国境稜線まで上げた方がよいと言う。このニュースは大きかった。頂上への希望が湧いて来たのである。C IVの吉沢副隊長と無電で登頂態勢の細かな打合せ

をする。

四月八日、天気はまだ良かったが朝から珍しく風が強く、ギャチュン・カンは全山ごうごうとうなりをあげている。これでは今日は動けないだろう。頂上を目前にして、天気周期が変わって来たのかと心配する。しかし朝の定時通話を入れると、強風について、C Vの武田、サーダーのパサン以下五名のシエルパによる支援隊は、アタックキャンプの資材をもって、既にC Vを出たとのことである。また第一登頂隊に予定された加藤、堺沢も、計画に従ってC IVからC Vに向っている。

一方、国境稜線直下の岩棚に、ひっかかるように建てられていた仮のC VIで、工作隊の大滝、小林は乏しい燃料、食糧と高度の影響のため、殆んど睡眠のとれない苦しい一夜を明かし、武田以下支援隊の到着を待って、ようやく本格的な休息をとることが出来た。武田、パサンは更に稜線近くまで登って、仮のC VI上部にフィックス工作を行い、武田は大滝、小林と共に、もう一日だけ頂上への道を切り開くため、仮のC VIに泊った。四月八日、夜の隊員配置は、仮のC VI（大滝、武田、小林）C V（加藤、堺沢）C IV（吉沢副隊長、町田、北村）C III（安久）B C（古原、菊地）で、翌九日、加藤、堺沢の第一登頂隊が、武田、大滝達に替って国境稜線に新しくたてるC VIに入り、一〇日を第一回の登頂日と決定していた。

夕刻、最後の無電定時通話で、仮のC VIの武田、大滝は、C IVの吉沢副隊長を中継して、「二人のコンディションは上々であるし、頂上もここからは完全に射程距離内にあり、四時間位で行けるかも知れぬ。明日もう一度だけ上やらせてくれ。特別の障碍がなければ、登頂出来そうだし、障碍があれば、加藤達登頂隊のため、出来得る限り工作をして下りたい」と伝えて来た。明日まで天気が良くて、明後日から天気が崩れる可能性も充分ある。そうなれば登頂のチャンスが一回でも多い程、成功率も高くなる。そこで、あくまで試登であるから絶対無理をしないよう念をおし、私は明日のチャンスを二人に与える決心をつけ、アタックの指示をした。

## 大滝隊員の遭難

四月九日は快晴にあけた。BCの私と菊地隊員は、頂上やクローアールが最もよく見えるCIから、今日の行動を指示するため、早朝BCを出てCIに向った。BCとCI間のアイスフォールは何度行って見ても悪い。だが、ぐずぐずしていると、武田達の登頂に間に合わなくなるので、スピーディに登る。昼前CIに着き、早速千ミリ望遠レンズをセットして登頂の瞬間を待った。しかし、なかなかレンズの視野に隊員の姿は現れず、更に今日は一日中、全キャンプがトランシーバーのスイッチを入れておくことになっていたが、どのキャンプからもさっぱり連絡がない。一二時の定時通話にもCIV（アドバンス・ベース）から報告が無く、どうしたのかといらいらして来たやさき、午後一時、CIVの吉沢副隊長から驚くべき第一報が飛び込んで来た。大滝隊員が行衛不明になったと言う。全く予期していなかったことだけに、一瞬唖然となってしまった。くわしいことはCIVでもまだわからないらしい。私の横にいた菊地も、事の重大さに大きな衝撃を受けている。それから夜に至るまで、次々に伝えて来た情報で、大滝の遭難は疑い得ざる事実となった。

高度約七五〇メートルの仮のCVIで、身体をちょっと動かすことさえ苦しい環境のもとに、二本の酸素を三人で分けあって一夜を過ぎた武田、大滝は、九日朝、出発に手間どり、八時四五分テントを出て行動開始。しかし意外に時間を食い、国境稜線へ出た時は既に一一時四五分、これでは頂上は無理と判断し、行動を打ち切って引返す決意をして、氷のテラスで休憩をとった。高度約七七〇メートルである。リーダーの武田は、明日のアタックに備えて、少しでも先のルートを探ろうと、休憩地を離れて約八〇メートル程進み、CIVとの定時通話のため後をふり返った時、大滝がチベット側へすべって行くのを見た。休憩していたテラスからチベット側には、約一〇〇メートルゆるい氷の斜面が続いていた。普通ならピッケルで停止することが可能な傾斜であるが、大滝は何の抵抗も示さず、あたかも失

神したような状態ですると斜面をすべり、斜面の先端からチベット側へ消え去ったのである。武田は直ちに引返し、大滝の滑落した跡をたどったが、ピッケル、オーバーシューズに入ったままの片一方の高所靴、手袋、タバコ、果物の缶詰等が、点々とちらばっていたのを発見しただけで、斜面の末端から先は、チベット側ギャチュン氷河に目測約二千メートルも一気に切れ落ち、一人で搜索することが不可能なため、急を飯のC VIに告げた。折からC VIには明日の第一登頂隊加藤、堺沢が、パスン以下六名のシエルパのサポートを受けて到着、報告を聞いて、武田、小林にかわってただちに現場に急行し、国境稜線、現場近くの高度約七六七〇メートルに新らしいC VIを建設すると同時に、チベット側を搜索したが、ギャチュン氷河側へ下降することは困難で、何の手がかりもつかむことが出来なかった。

比較的安全な場所、しかも休憩中というところで、二人はザイルをはずしていた。また自己確保もしていなかった。その責はまぬがれ得ないであろう。しかし大滝隊員がどうしてスリップしたか、その瞬間を武田も見しておらず、直接の原因は分らない。ただ推測に過ぎないが、飯のC VIで、殆んど眠ることの出来なかつた苦しい二晩を過していた大滝は、無電では身体の調子は良いと答えていたが、どうしても初登頂したい気持から、身体の異状を我慢していたのか、或は自覚症状はあまりなくとも、他覚的に高処の影響をひどく受けていたのか、休憩地で一瞬、意識を失う（ちよっと靴の紐を結びなをそうと、急に下をむいてもめまいがするようなことがあり、現場に一方の靴が残されていたことから、その日、朝から足の感覚が無いと言っていた彼は、靴下のはきかえをしていたことも考えられる）とか、全身の虚脱状態とかいったことが生じたのかも知れない。

大滝の遭難がはつきりした時、隊として一番大きな問題は、攻撃を続行するか、攻撃を一たん打切って退却するか、きめなければならぬことであった。しかも、その決断は急を要する。C IVの吉沢副隊長からも、どうするか指示を求めて来る。またC IVと他のキャンプの内でも、そのことについて盛に話し合っているのが、かすかに無電で傍受される。吉沢副隊長を通じて、各キャンプの隊員の状況をきかせると、皆思いの外冷静で、悲しみを乗り越えて弔

い合戦をしたとのことである。私自身の腹は既に決っていた。もし隊員達が大滝の遭難にうちのめされ、動揺しているなら登頂を断念しよう。しかし元氣ならば、大滝を失った今も、攻撃態勢はととのっており、大滝の死を活かすためにも是非登頂しなければならぬ。それがアドヴェンチュアの精神であり、パイオニア精神であろう。犠牲を乗り越え、不屈の闘志をもってヒマラヤの山々に登頂した、数々の各国登山隊のことが頭をかすめる。

夕刻の定時交信で、私は攻撃続行の指示をC IVの吉沢副隊長に伝えた。

C Iにも数名のシェルパ達がいた。まだ事情は知らなかったが、午後から夜にかけてのあわただしい、異状な無電のやりとりで、彼等も何かを感じとっていたかも知れない。遭難のしらせにショックを受け、意気沮喪することを恐れ、攻撃は明日に延びただけ伝え、彼等に真実を話すことを一日待ち、私はすべてを明日にかけた。

その夜のC Iはみじめな暗いものだった。せまいサーブ用のテントの中で、恐らく絶望であろう大滝のことや、連絡を受けて悲しむであろう日本の家族達のこと、内外の岳界の反響のこと、今後の処置等、菊地隊員と二人でぼそそと話し合いながら、遅くまで寝つくことが出来なかった。

〔隊員の配置。C VI第一登頂隊（加藤、堺沢、パサン）アン・ドルジェ。C V第二登頂隊（町田、安久）武田、小林、パサン・テンジン以下シェルパ四名。C IV吉沢、北村。〕

## 登 頂

四月一〇日、起き出して見れば、今日もまた真青な空、快晴である。C IVの吉沢副隊長から、C VIを何度呼んでも応答が無いが、恐らくトランシーバーの故障で、天気も良いし、第一登頂隊は予定通り頂上へ向っているだろうと連絡して来た。昨日からトランシーバーの故障が続出し、各キャンプ間の連絡がとだえがちであったが、一番大事な今日も用をなさないとすると、もうC Iの私達はどうしようもない。聞えないトランシーバーに耳を寄せ、千ミリ望遠

レンズの焦点を頂上に合せて、ただ一日中見守る外手がなかった。

午前十一時、突然望遠レンズをのぞいていた菊地隊員が、「登った」と狂気のような声をあげた。山頂に赤いものがちらついていると言う。かわつてのぞく、間違いない、成功したのである。菊地がだきついて来る。周囲にいたシエルパ達もどつと湧き、一斉に握手を求めて来た。すぐ頂上の見えないC IVの吉沢副隊長や、他のキャンプの隊員達にトランシーバーで成功を知らせる。それからしばらくして、トランシーバーからたった一言、「こちらはギャチュン・カンの頂上です。」堺沢の声である。そのあと又ツツンと切れてしまったが、全く奇蹟の声であった。

#### 第一登頂隊堺沢隊員の手記（信濃毎日新聞掲載）

加藤隊員の「四時だ」と叫ぶ声が目がさめた。昨夜（四月九日夜）一分間三・五リットルに調整しておいた酸素ボンベは、完全にならなくなっていた。シエルパのアン・ドルジュを起こし、ガスターコンロに火をつけさせたが、低温のため火勢があがらない。外はあいかわらず強風が吹きまくっている。パサンは、「こんなに風が吹いては出発出来ない」ともぐもぐいって、シユラーフにはいったまま。

「出かけるんだ」と強くいってたたき起こす。しかし、起きてはみたものの、靴をはくのひと苦勞。加藤隊員は昨夜、靴をシユラーフのなかにいれておかなかつたので凍りつき、コンロであぶっている。朝食はおじやにオートミール。ここから上は岩登りが多いとみて、加藤隊員はアイゼンをオーバーシューズなしの高所靴に調整している。私はその間、酸素マスクの手入れ。

六時四〇分——思いきって外にでた。快晴、だが、ものすごく寒い。風もあいかわらず強い。零下三二度。出発シユーンを十六ミリ・ムービーカメラにとろうとしたら、凍ってまわらない。あきらめて十六ミリはおいで行くことにする。昨夜セットしておいた酸素にマスクをつけ、一分間に三リットルに調整した。「さあ、出発だ」——見上げる稜線には雪煙があがっている。

最初は六〇メートルの雪の斜面だ。サポートをしてくれるアン・ドルジェが、百メートルのフィックス・ザイルを肩にかけ、先に登り工作。タキちゃんの遭難現場を、「きっと登ってくるよ」と心のなかで誓って過ぎた。フィックスのおわったところで、アン・ドルジェが「高所靴をはいてこなかったので足が痛い」と、ちぢかんでいる。彼と別れた。〴〵くろうさん〴〵この稜線が目ざすギャチュン・カンの頂上へつづいているのだ。これからさきは予想通り岩ばかりだ。標高八千メートルで、五キロの酸素ボンベ二本かついで岩登りするのは大変だ。カメラなどほかに一〇キロもあるのに。酸素をここですてた。

加藤隊員がトップ、パサンを間にはさんだ。最初はチベット側の岩場を登る。スリップすれば、はるか下方の氷河へ一気におちるだろう。確保する私も足場をしっかりとる。つぎは茶色の広い斜面、休むことなく登り続ける。あまり広い斜面なので、帰りの目じるしにパサンの背おっていたナイロン・ザイルをおく。いいピッチだ。「大丈夫、登頂出来る。」そんな自信みたいなものがわいて来た。

稜線上の最初のコブで一息いれた。第四キャンプが豆つぶのよう。トランシーバーで、成り行きを心配している吉沢副隊長らを呼んでみたが、通じない。チョコレートをほおぼる、トマト・ジュースは凍ってダメだ。頂上まであと一時間位で行けそうだ。

危険な岩場を通過しおわった。頂上直下の小さな岩棚についたとき、登頂成功を確信した。ここから見ると頂上は雪のドームだ。パサンがニコニコしている。ヤッケのポケットに大事にいていた日の丸と全日本岳連旗をとり出し、ピッケルにつける。寒いとはずむ心でなかなかゆえられない。アイゼンをつけるのももどかしい。用意ができた。「さあ、行こうぜ」と、加藤隊員が目で合図している。一步、一步……。足どりがだんだん早くなるのがわかる。心は駆足だ。私の目には三角錐になった雪の頂点しか映らなかった。もう、頂上は目の前——。雪が消えて、紺色の空が一足ごとに大きくなった。眼界にはなにもない。「登った、登った。」胸に熱いものがこみあげて来る。パ

サンが私と加藤隊員に抱きついてきた。あわてて時計を見た。十一時ちょうどだ。

三人で頂上の尾根にまたがり、四囲の山々を見る。東にエヴェレスト、西にチョー・オユー。私の視界をさまたげるものはない。ギャチュン・カンは高い。タウエチエ、ヌンブルなどのヒマラヤ前衛峰がはるかに低く見える。日の丸の旗をピッケルにつけて大きくふる。そして頂上にたてた。栄光の一瞬だ。写真を何枚もとりあって、正午すぎ下山の途についた。おりる時、もう二度と登ることのないギャチュン・カン頂上を、もう一度アイゼンで強く踏んだ。

第一登頂隊の加藤、堺沢は、C VIまでサポートしたシェルパ・サーダーの、パサンをさそい、友情の登頂を果した。頂上直下の岩場では、酸素を捨て、オーバーシユーズ、アイゼンをはずさねばならなかった。

C Iで第一登頂隊の成功を確認した後、私と菊地はあわただしく千ミリ望遠レンズの装置をたたみ、登頂と遭難の第一報を送るため、すぐBCへと下りはじめた。BCに近づくと、私達の姿を認めて、連絡官のミスター・タクルをはじめ、BCのシェルパ達が総出で出迎えてくれた。まだ何の事情も知らぬ彼等は、成功したのか、失敗したのか、大きな期待をもって、私達の口から出る言葉を待っていた。しかし、私と菊地はC Iで打合せて来た通り一言も発せず、BCの全員を食堂に集めた。皆の顔がそろった後、初めて私は口を開いた。「今日、加藤、堺沢サーブとパサンが登頂に成功した。」シェルパ達の目が一斉にかがやき、歓声があがった。「しかし、もう一つ、私は不幸なニュースを伝えなければならない。昨日大滝サーブがチベット側に転落し、絶望である。」喜びは一瞬にして悲しみにかわり、沈痛なうめきと、すすり泣きの声が上がった。連絡官も、コックのキルケンも、シェルパ達も、はてはキットン・ボーイの少年達も、BCの全員が涙を流した。私は国境を越えた彼等の友情に、深く心をうたれた。

その夜、BCの私と菊地は、ネパール政府や日本の関係者達に知らせる、喜びと悲しみの数十通の報告書や手紙

を、徹夜で書いた。

「一〇日夜の隊員配置。C VI第二登頂隊（町田、安久）加藤、パサン・テンジン。C V北村、ニマ・テンジン（タミ）、アン・パサン、ドルジェ。C IV吉沢副隊長、武田、小林、堺沢、サーダー。」

四月一日は、昨日にもおとらぬ快晴であった。C VIからは、町田、安久の第二登頂隊が、午前七時出発、強い風の中を再び頂上へ向い、一〇時頂上へ立った。遭難の直後であり、昨日第一登頂隊も成功しており、第二登頂隊を出す必要はなかったかも知れないが、天気も良く、C VIより頂上まで既に固定ロープもあり、また何とか大滝の手がかりをつかみかけたために、あえて第二登をさせたのである。町田、安久は登頂後、C VI、C Vに待機していた加藤やシエルパ達のサポートを受けて、一気にC IVまで下り、またC Vもその日の中に撤収された。

## 撤収と下山

翌四月二日から、C IV以下各キャンプの撤収をはじめた。クローアル工作から登頂と、二週間にわたって休む暇もなく頑張ったため、上部キャンプの隊員、シエルパ達の疲労はひどく、特に登頂隊の加藤、堺沢、サーダーのパスンはC IVでのびてしまい、下降も人一倍苦しいものになった。その上、今ではBC建設当時とくらべて、平均気温も五度以上上がり、うち続いた晴天のため、セラックは崩壊し、クレバスは大きく口をあけ、登路として使ったルートを下れず、新しい道を開いて撤収をしなければならなかった。一二日の午後には、ヒマラヤに来てはじめてのサンダー・ストームがあり、氷河の上に電光が走り、雷鳴がとどろいた。これから五月までは、毎日のようにサンダー・ストームが来襲するだろう。私達は間一髪、タイミングよく好天の中に登頂を終った幸運をよるこんだ。

四月一五日、撤収は完了し、全員が山を下り、BCに集結した。疲労と高度の影響で、北村や武田の顔はバスケットボールの球のようにふくれあがり、また吉沢副隊長、北村は眼底出血のため目が見えず、サーダーのパスン、テン

ジン・ギルミン、イラ・ツェリン等、主力シエルパ達も、BC帰着と同時に寝込んでしまった。休養と荷の整理が一段落した四月一九日、全員でBCにほど近いゴジュンバ氷河左岸の台地に、大滝隊員のケルンを作った。

1964. 4. 9. 大滝 明夫 AKIO OTAKI

ギャチュン・カンに眠る

A. J. H. E. 1964

シエルパのテンジン・ギルミンがドライバーできざんだ石碑の前で、私達は大滝の冥福を祈った。ゴジュンバ氷河を眼下に見下し、ギャチュン・カンからチョー・オユーに至る山々が一望のもとに望まれるこの地は、大滝をとむらうには最もふさわしい場所であった。

最初の予定では、ギャチュン・カン登頂終了後、私達はタウエチエ、チョラツエ等の試登をすることにしてはいた。しかし、大滝を失った今となっては、これ以上事故を引き起すようなことは避けなければならない。試登は放棄され、比較的危険の少ない探査だけを引き続き行うことにして、四月二三日、先ずクーンブ、イムジャ氷河周辺を探査する町田、加藤、安久、堺沢、小林の組がBCを出発、クーンブに向った。レンジョ・パス(五八〇メートル)を越えて、ポータ・コシ源流の山々を探査する古原、吉沢、北村組、輸送隊を指揮してまっすぐタミ部落に下る武田、菊地組は、二五日BCをすべて撤収し、それぞれ次の目的地に向けて出発した。三隊とも五月八日までにタミ部落に再び集結し、帰路につく手はずである。

BCを去る日は、珍らしく朝から雪が降っていた。大滝を残して山を下ることは実につらいことであった。降りしきる雪の中を、何度も何度も振りかえり、悲しみの涙を流しながら、私達はギャチュン・カンに別れを告げたのである。

## 附 記

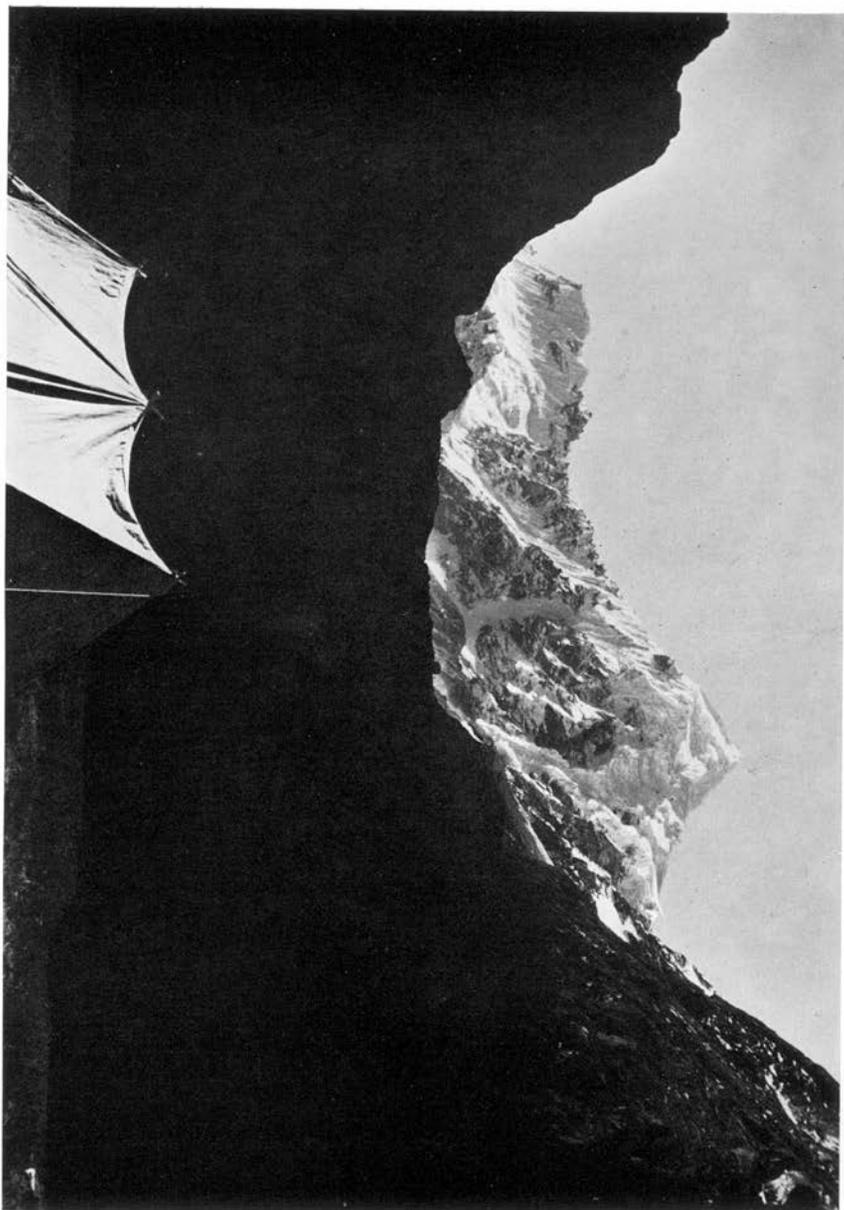
その後クーンブ方面の探査隊は、チョラツエ（六四四〇メートル）のすぐ北側、約五二〇〇メートルの無名の峠を越えてチョラ・コーラに下り、クーンブ氷河、イムジャ氷河を探査して、更にアンプ・ラプチャ（五七八〇メートル）を越え、ホングー氷河上部からアマ・ダブラム（六八五六メートル）を一周して、ミンボー・ラ（五八〇〇メートル）を越え、再びイムジャ・コーラに入り、五月五日集結地タミに帰着。

またポータ・コシ源流方面の探査隊は、レンジヨ・パス（五八〇〇メートル）を越えてポータ・コシに入り、これを遡って四月二九日ナンパ・ラ（五八〇六メートル）に至り、周辺の山々を偵察した。なおナンパ・ラのネパール側には、西ドイツのチャー・オユー登山隊（ルディ・ロット隊長以下五名）がBCをはっており、西ドイツ隊の遭難（隊員二名死亡）について色々と相談を受け、物資の援助をした。

これ等二隊の探査行については、又あらためて機会があれば報告する予定である。

（訂正）一七頁のスケッチ・マップ中、Nsojumba Kang 南方の氷河の中段に Nsojumba と記入のあるのを Kyojumba と、また Chumba 6853 m であるのを Chumbu 6853 m と訂正する。（編者）



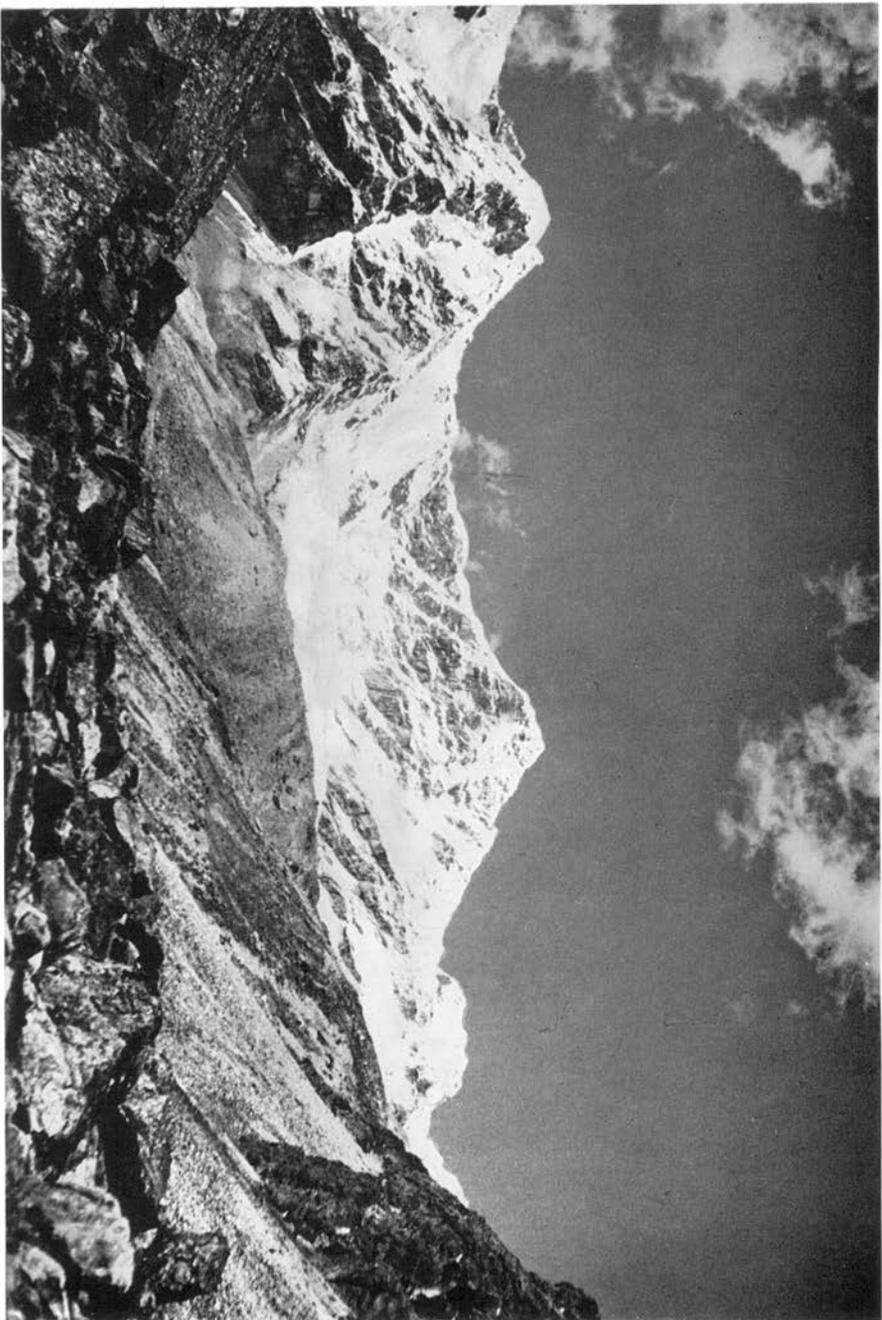


トウルバイク氷河の第1キャンブから見たウルキンマン (6397 m)  
Urkimang (6397 m) seen from Camp 1 on the Trupaiku Glacier.

(By T. Kiyohara)

ガンジャ・ラのすそ5100m付近から見たランタン・リルン  
Langtang Lirung (7245 m) seen from the foot (c.5100 m) of Gangja La.

(By T. Kondo)



キュンカ氷河左岸のモレーン上から見たキュンカ・ピーク (6979 m)

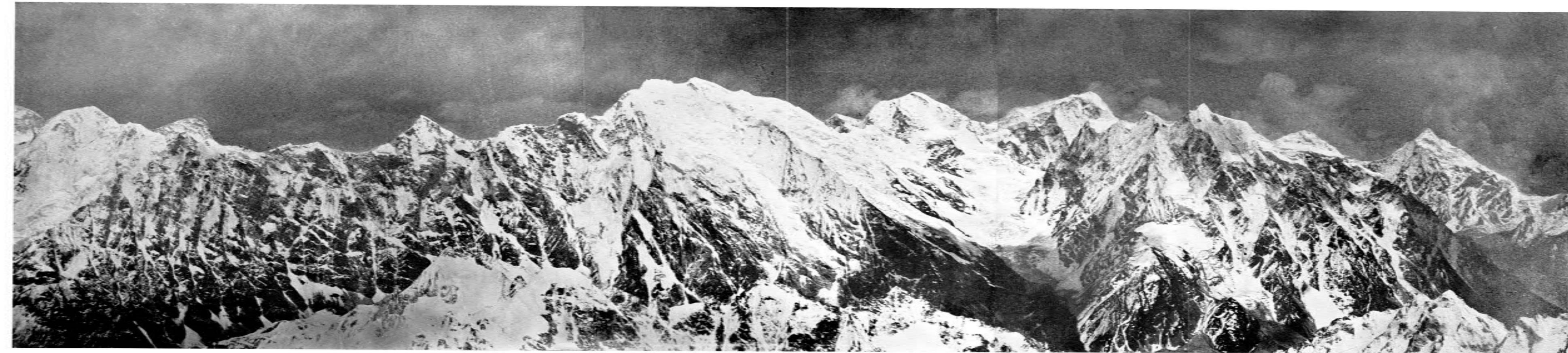
Kyungka Peak (6979 m) seen from the left side of the Kyungka Glacier.

(By S. Sasaki)



キュンカ・ピーク国境稜線上の第3キャンプから見たビッグ・ホワイト・ピーク(左)とドルジェ・ラクパ(右)

Big White Peak (7083m)(left) and Dorje Lakpa (6989m) (right) seen from Camp III on the border ridge of Kyungka Peak.  
(By S. Sasaki)



キュンカ・ピーク国境稜線上の第3キャンプから見たランタン氷河左岸の山々

The peaks on the left side of Langtang Glacier, taken from Camp III on the border ridge of Kyungka Peak.

(left to right) Goldum (6447m), Pemthang Karpo (6842m), Kan Karmo (White Dome, 6830m), Big White Peak (7083m), Dorje Lakpa (6999m),

Langshisa Peak (6294m) and Urkimmang (6397m).

(By S. Sasaki)



ティルマンのコルへの途中から見たゴサインターン (右) とハーゲンのコル (手前のやや右)  
Gosainthan (Shisha Pangma, 8013m) (right) with the Hagen's Col (foreground),  
taken from the midway to the Tilman's Col. (By S. Sasaki)

## ランタン・ヒマール 一九六四年

近 藤 哲 也

### 一、ランタン・リルン

四月四日、第一次遠征から三年間の空白を経て、再びリルン氷河のBCに立った。直ちに高度順応をかねて、アイスフォールと稜線上のアイス・ビルディングの観察及び南稜の偵察へと、あわただしく一週間が過ぎ去った。

第一次遠征時と比較して、アイスフォールの変動は非常に激しく、C II予定地のアイスフォール中央部では、崩壊と言うよりむしろ削り取られたような状態である。また国境稜線上のアイス・ビルディングにも、大きなクラックが二ヶ所望見出来た。このような変動の激しさは、五月中旬再度観察した時に証明された。即ちアイスフォール下部において二ヶ所が崩壊されていた。アイス・ビルディングの崩壊が、どれ程恐ろしいものを体験している私達には、当然南稜ルート上の偵察が繰り返され、多少表層雪崩の危険はあるが、南稜線上に到達出来るルンゼを開拓した。

四月十三日、全員BCに集まり協議した結果、アイスフォールの正面ルートは危険性大きく放棄し、南稜ルート一本にしぼることにした。南稜直登ルンゼの取付点(四九〇メートル)にC Iを設営し、コルへのルート工作と荷上げを

行い、四月二十一日にコルのチョック・ストーン直下にC II（五六〇メートル）を設営した。C IIは、コルに覆いかぶさる五メートル四方のチョック・ストーンの下に設け、三人用ウィンパーテントをロックピトンで固定した。C IとC IIの間は、このような下部の傾斜三五度、幅二〇メートル、上部の傾斜四五度、幅七メートルの急峻なルンゼでダイレクトに結ばれているが、C IIの最大の欠点は収容人員が三名に限られていることである。初めて見た南稜の西面は、ランタン部落の背後まで切れ落ちていて、ルートとしてはリッジ通しに登るのではなく、西面の岩場を斜め左へとまき気味に登る。

四月二十三、四日、C IIから上部のルート工作に出た隊員たちは、長時間のアルバイトの結果三角ピークの頂上に立った。三角ピークとは、コルから最初に現われる三角形の岩峰であるが、実際は三角錐であって一面を東に向け、氷壁の二面を西と南に向けている。したがって、南稜上は平均傾斜六〇度の氷壁を登ることになる。三角ピークから上部のルートは、私達の期待に反して、あまりにも絶望的な稜線であった。

東面から偵察したテントの設営出来そうな雪のコルが、実は氷のナイフエッジの上に、雪庇状のキノコ雪が乗っているだけである。そのナイフエッジが続いて、すぐに急な雪稜、つまり二番目の岩稜が始まる。ついで三番目の岩稜の上には、キノコ状のアイス・ブロックが続き、キャンプ・サイトとすべきスペースは発見出来ない。さらに上には六十メートル以上のアイス・ブロックが稜線上にオーバーハングしている。結論的にキャンプ・サイトがないこと、また荷上げルートとして登攀不可能であることが判明し、南稜ルートは放棄せざるを得ないことが明らかになった。

四月二十五日、C Iに全隊員が集まり今後の方針を検討した結果、ランタン・リルンの頂上は、雪崩の危険を覚悟の上でアイスフォール・ルートをとり、ラッシュ方式で敢行する以外に方法はないと再確認された。しかし私達は本年のアイスフォールの状態を考慮して、敬遠するのが賢明と考えた。

四月二十八日、ランタン・リルンを放棄し、二十五日間住みなれたBCに別れを告げ、未踏の山を求めてランタ

ン・コーラの奥へとベースキャンプを移動した。翌日、ランシサ・カルカからさらに上へと、新しいベースキャンプをキシユンプ・カルカに設営した。広さ百メートル四方、枯草と短かい青草が交錯した中に、ヤクの大きな糞が点とした広場。東にはカン・カルモ（別名トーム・ブラン 六八三〇メートル）が、その名の如く純白のスケールの大きい姿で腰を据え、その右手即ち私達のBCの頭上に、ランシサ・ピーク（六二九四メートル）が覆いかぶさる様に私達を見下している。谷の上流は新旧のモレーン、大小の岩石を積み上げ、モレーンの集合所の観を呈している。

隊員も二、三日前からの放心したような虚脱状態から脱し、元氣を取り戻して来た。周辺の未踏峰と期間とを考慮して、隊を二分し、近藤、門田、佐々木の三隊員とシエルパ二名をもって、キュンカ・ピーク（六九七九メートル）、清原、伴、常慶の三隊員とシエルパ二名をもってウルキンマン（六三九七メートル）の二未踏峰を攻撃することにした。

## 二、キュンカ・ピーク登頂

キュンカ・ピーク（六九七九メートル）はランタン氷河右岸の、ネパールとチベットとの国境稜線にそびえ、正面に十数段の岩棚を形成し、岩棚下部に五〇〇メートル平方の雪原を持っている。それから数百メートルのアイスフォールとなって、キュンカ氷河に落ちている。その左稜線即ち国境稜線及び右稜線共、岩と氷のミックスしたナイフエッジで、CⅢのキャンプ・サイトの発見が問題だと判断した。CⅠをキュンカ氷河どん詰りのモレーン上五〇五〇メートルの地点に設営し、CⅡはキュンカ・ピークのとふところとも言うべき、雪原上五七〇〇メートルに設営した。

四月三十日、隊員三名、シエルパ二名、ローカルポーター三名の総勢八名は、約三五キロの装備食糧を背に、BCを後にしキュンカ氷河最奥にCⅠを設営し、隊員三、シエルパ一の名がCⅠに入った。翌日、CⅠの四名はアイスフォールのルート偵察及びCⅡへの荷上げに向い、アイスフォール右端を廻り込んで雪原上に達した。このような高度に平坦なスノウ・フィールドがあるとは意外で、絶好のCⅡ設営地であった。

五月二日、BCからのサーダー、アン・テンバを含むシェルパ二名の応援を得て、昨日荷上げた雪原上にCIIを設営する。その間BCからCI及びCIIへの荷上げはほとんど行われ、CIIは強固な前進基地となり、近藤、門田、佐々木の三隊員とサーダー、アン・テンバ、ミンマ・ツェリンの二名、ローカルポーター一名の頂上への戦いの場所となる。CIIからはランタン・ヒマールとジュガル・ヒマールの境界の山々が一望出来、一九六二年日本隊が登頂したビッグ・ホワイト・ピークが、また中央に私達の隊が行動を起しているウルキンマンが望見出来る。

五月三日、CIIの五名は、CIII設営地の発見及びルート工作に早朝五時半CIIを出発し、右稜線に取り付く。稜線への雪壁はきつく、尾根上に達したのが八時三〇分、考えていたよりさらにきつく、氷のトラバースや岩峰の登攀の連続で、CIIIのキャンプ・サイトは発見出来ず、六五〇メートルの地点に達したのみで引き返す。氷壁の下降には相当な時間を要し、CIIに帰着したのは二十一時三〇分だった。右稜線からの登攀は完敗で、明日から、ルートとしては長い、CIIIのキャンプ・サイトの確実な左稜線、即ち国境稜線に取り付くことにする。

五月四日は昨日の二〇時間に近い行動のため、隊員の疲労を考え全員休養とし、私は隊長への連絡かたがたBCに下る。

五月五日、佐々木隊員とミンマ・ツェリンの二名は、鞍部までのルートに八本計三二〇メートルのフィックス・ロープを固定する。

五月六日、CIIの全員はCIII設営のため七時三〇分出発、ルンゼの取付まで快調に進み、岩の壁をトラバースしてルンゼに入った頃、九時三〇分上部岩壁からの落石でサーダーのアン・テンバは大腿部を負傷、歩行困難となる。直ちに門田ドクターの診察によって、CIIから一挙にBCまで下ろすことにした。

五月七日、昨夜の積雪は二〇センチにもなり、ルンゼの雪の状態を考慮して沈澱とする。四月末からの好天がいつまで続くのかと心配し、また二名のメンバーの欠除を考慮して、明日、近藤、佐々木の二隊員とミンマ・ツェリンの

三名にて、一挙に頂上を攻撃するのが良策だと判断した。

五月八日、快晴、早朝二時ローカルポーターの声に眠りをさまされ、熟睡出来なかった目をこすりながら、食欲の起らないスープとアルファ米を無理にお替りして、寢袋から出た。簡易テント、高所服、石油ストーブ等をキスリングに丹念に入れテントを出る。満天の星空のもとにキュンカ・ピークの岩肌が無気味に光っている。雪原を横切り、一昨日デポしたルンゼの中間点に達した頃から、対岸の山々に朝日が当り始めた。下部ルンゼを登り切った地点から、国境稜線に向って岩のバンドが三〇〇メートル程上っている。氷壁と岩壁との接続部は氷化したチムニーとなり、フィックス・ロープが固定されている。国境稜線直下の氷化したルンゼを、ステップ・カッティングしたアイスボールをかぶりながら、国境稜線の鞍部六二〇〇メートルのCⅢに達した。九時半と言う時刻と終日続きそうな天候、隊員の調子をにらみ合わせて、三名共ビバーク用全装備をここに置き頂上に向うことにする。国境稜線のチベット側は、ネパール側の岩の切り立った壁に比して氷の斜面が続いている。しかし、その斜面もこれ程の高度にかかわらず、クレバスが数多く開いている。頂上への稜線には三つの岩峰があり、それぞれ氷のジャンクションを持っている。四〇メートルのザイル一本では、三人の確保は無理だと判断して、フィックス・ロープをセカンドからサードの間を用いた。一九六一年にもミンマ・ツェリンとロープ・パーティーを組み、ランタン・リルンの稜線六五〇〇メートルに達したこともあって、彼とは隊員同様気心は知れている。完全に切り立ったネパール側と、大きな氷河が入り込んでいるチベット側を眼下に、アイス・カッティングと確保の連続は、時間の経つのも忘れて無意識に動作していた。

二つの目のピークに立つと、頂上は間近かに見え、あと六〇メートル、いや一〇〇メートルかと思いつながら、ゆつくりと登った。十三時五十五分頂上に立つ。頂上はネパール側に二メートル程雪庇が張り出し、その上は氷の斜面となっている。続いて佐々木、ミンマ・ツェリンが頂上に立ち、高度計、測量のハンドレベル、チベット側のスケッチ

等、次から次へと頂上での仕事をすまし、テントを出てから二度目の食事をする。一時間近く頂上で過し、ガスの中強い風でも別につらさを感じず下降に移る。テントに帰着したのは二二時〇分、待ち構えていた熱いお茶、チキンラーメンを食べ寝袋にもぐり込む。このような短時日に、少人数で七〇〇メートルに近い山が登頂出来た要因を振り返ってみると、第一に十日間もの好天が続いたことが最大の幸運で、第二にBCからCI及びCIIへの物資の補給が確實迅速に行われたこと、第三に全員が非常なファイトをもって行動したことがあげられると思う。

### 三、ウルキンマン登頂

ランシサ・カルカから見ると、東方の谷間の奥に純白のピラミダルな山容が、夜明けの星のような清冽さで輝いていた。ランタン・ヒマールとジュガル・ヒマールとの境にある小さな未踏峰ウルキンマン（六三九七メートル）の意味は、東方の星だとシエルパが言う。私達がこの山に登ろうと思ったのは、スターサファイアのきらめきにも似た、その美しさに魅せられたためかも知れなかった。

四月三十日、清原、伴、常慶の三隊員とシエルパ二名、ローカルポーター二名はBCのキシユンプ・カルカを出発し、ランシサ・カルカからトゥルパイク氷河に入る。左岸のモレーンとカンジュンの岩壁の間を進む。左のランシサ・ピークは下部を大岩壁に囲まれ、背面の懸垂氷河しかルートはないだろう。左前方に見えるどっしり落着いた山は、ドルジェ・ラクパ、いまスイス隊がCIIまで建設中とのこと。

ウルキンマンを正面から見ると、右の稜線は雪の台地を二つ作って下部は岩壁となり、正面は急峻なアイスフォールが崩れ落ちてルートはとれず、左も岩と氷壁で武装されている。右下のアイスフォールをつめて岩壁を右側へ廻り込み、裏から右稜線へ出る以外にルートはなさそうだ。岩屑の散乱する氷河の端にCIを作る。

五月一日、ウルキンマンとカンジュンの間には氷河が入っており、高度差二百メートル位のクレバスの少ないアイ

スフォールを形成している。右のゆるい雪面をルートにとるが、雪が腐って膝までもぐる。雪斜面を登り切ると雪原へ出る。ウルキンマンの裏、つまり南面は二百メートルの岩壁が続いていて、一ヶ所その岩壁の間を縫って走っているクローアールが登路になりそうだ。

五月三日、細いクローアールは稲妻型に曲っていて、雪は続いているが三つの小さな滝を持っている。アイゼンは良く大きく傾斜がきついため、かなりのアルバイトを強いられる。滝を二つ登り左へまき気味に岩帯を抜けると、やっと二百メートルの岩壁の部分は終る。雪のリッジ伝いに第一プラトローへ出た。テントを三十位張れそうな広いプラトローだ。さらに雪の斜面を登って、第二プラトローまでトレースして引き返す。ここから見るとさすがにランタン・リルンは高く、相変わらず頂上はガスに包まれて見えない。

五月四日、第一プラトローへCⅢを設営し、清原、伴、常慶の三隊員とミンマ・ツェリンⅡ号が入る。

五月五日、六時起床、直ちに全員出発する。第二プラトローから眼前に三百メートルの水壁が立ちふさがっていて、青磁色の青氷となっている。左の稜線へ出れば幾分傾斜がゆるいのだが、クレバスが大きくて渡れず、右の稜線へも取付くことが不可能で、結局氷壁に取組む。傾斜五十度位で一步一步アイス・カッティングのため時間のかかることおびただしい。全然ビレー出来ないの、四人ともザイルなし、頼れるものは上へ上へと登ろうとする自分の意志と、ピッケルとアイゼンのみ。四時間半一度の休みも無くカッティングを続けて、十一時五十七分ウルキンマンの頂上に立った。雪ばかりで岩は無く、三方からのリッジの終点だった。ガスの中で型通りネパールの旗、日の丸、市大旗をピッケルに結んで写真をとる。早々に昼食をすませて下山にかかる。

吹雪き出して視界はゼロ、吹き上げてくる雪に顔をたたかれながら一步一步慎重に下る。アンザイレンはしたが、気安めにすぎず、神経がすりへる下降だった。登りと同じく四時間半かかって、やっとCⅢにたどりついた。

五月六日、CⅠへ、さらに全員BⅢに帰着した。

#### 四、ランタン・ヒマール

ネパールの首都カトマンズから、わずか一週間の近距離にあるランタン・ヒマール。ヒマラヤで一番美しい風景の一つに数えられるランタン・コーラ。谷の上流には平坦な草地が展けて、高山植物が咲きみだれ、周囲には氷の峰々がそびえている。また最近にはキャンジン・ゴンパにヘリコプターまで発着出来るといふヒマラヤの一等観光地だ。このようなランタン・ヒマールに、早くからヒマラヤの先駆者は足跡を残している。

一九四九年にティルマン、一九五一年にアウフシュナイター、一九五二年にハーゲン博士が夫々ランタン氷河の隅まで踏査している。

一九五五年、ランペールがランタン氷河からカン・カルモ（ドーム・ブラン、ホワイト・ドーム、六八三〇メートル）に登頂した。

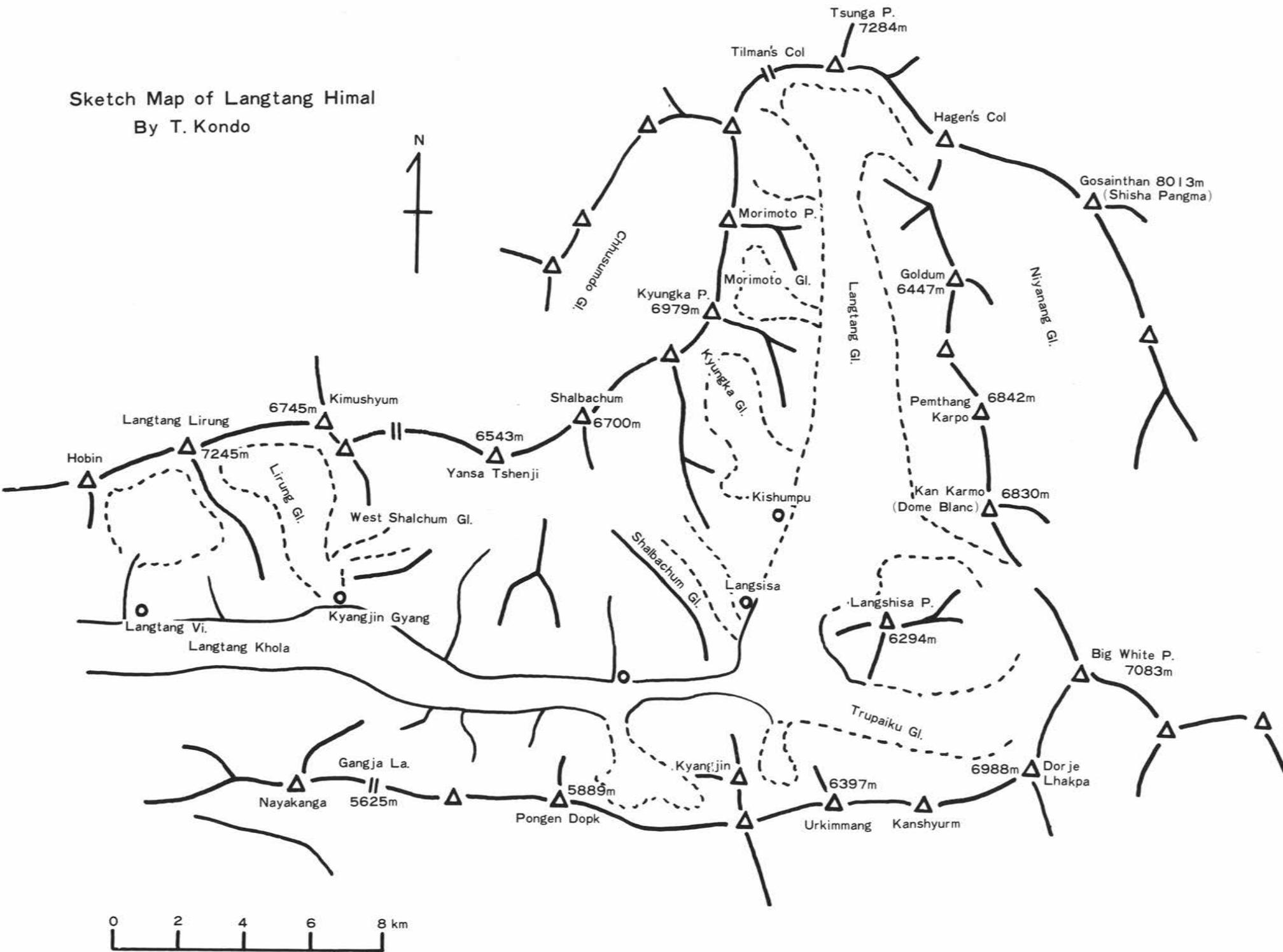
一九五八年に深田隊がガンジャ・ラを越えてランタン・コーラに入り、ランシサ・カルカまで入っている（「山岳」第五三年参照）。

一九五九年飯田山岳会の山田隊は西サルバチュム氷河から、サルバチュム（六七〇〇メートル）に登頂し、さらにランタン氷河に足をのばして、数多くのランタン氷河の山々の写真をもたらした（「山岳」第五五年参照）。

一九六一年、第一次大阪市大隊はリルン氷河に入りランタン・リルンへ、アイスフォールから登頂を試みたが、国境稜線六五〇メートルの地点に達したのみで敗退した。五六〇メートル附近の雪原に設営したCⅢにおいて、雪崩に遭遇し、森本隊長、大島隊員、ガルツェン・ノルプの三名を亡くしている。しかし、その登攀期前に、ランタン氷河に入り周辺の山々、氷河の状態を観察した（「山岳」第五七年参照）。

一九六三年秋にイタリア隊が、ランタン・リルンを目指したが、アイスフォール中央部にCⅡを建設して、CⅡ上

Sketch Map of Langtang Himal  
By T. Kondo





部の岩稜を登攀中スリップ事故を起して隊員一名が死亡した。キムシユンの三つのピークより下の岩峰に登頂し、さらに西サルバチウム氷河からサルバチウムに登頂したと思われる。

その間に、カトマンズ在住の登山家が数多くランタン氷河に入っている。一九六二年には英国の駐ネ武官カーネル・ワイリーが、ランシサ・ピークの背後に入り周辺を踏査した。また米国の平和部隊の三名は、ハーゲンのコルに達している。

一九六四年には第二次大阪市大隊が、また英国のシャフスバリー伯爵がスイスのガイド三名を隊員にし、トゥルパイク氷河からドルジェ・ラクパ（六九八メートル）に登頂を試みたが、頂上直下二百メートルで引き返している。秋には田村宏明氏がシエルパを連れてランタン氷河に入り、周辺の山を踏査している。

ランタン・ヒマールを本格的に測量したのは、ハーゲン博士であるが、私達が第一次、第二次ランタン・ヒマール遠征の折に概念測量したデータを総合すると、高度について数多くの疑問がある。例えば私達が登頂したキュンカ・ピークは約六七五〇メートルと思われる、さらにその北に存する無名峰（私達はモリモト・ピークと称したい）は、六八八〇メートル前後と思う。（ランタン・ヒマールの山名や高度については、深田久弥『ヒマラヤの高峰』第四卷九二頁以下にかなり詳細な解説がある。ついで見られたい——编者）

## 附 記

一、大阪市大ヒマラヤ遠征隊一九六四年のメンバーは、

隊長 鈴木武夫（四十歳）

副隊長 近藤哲也（二十七歳）

隊員 門田嘉弘（三十歳）

” 清原鉄也（二十七歳）

” 伴 明（二十四歳）

隊員 常慶 和久 (二十三歳)

〃 佐々木 惣四郎 (二十一歳)

シエルバ サードー、アン・テンバ 他六名

二、行動概要は三月二日羽田発、三月二十五日カトマンズに全員集結、四月四日リルンBC設営、四月二十九日キシユンプ・カルカBC設営、五月十日ランタン・リルン調査とランタン氷河測量、五月二十二日帰途キャラバン、六月一日カルカッタ、六月九日伊丹着。

三、第一次隊の遭難碑はリルン氷河右岸に建設したが、それに並んでイタリヤ隊の碑も建設されていた。記念碑を、ランタン部落のラマ僧に管理を依頼して、ランタン部落に建てた。

## ボリビア・アンデス 一九六四年

向 一 陽

『アンデスへ行こうか』とふと思った。理屈や煮つまった計画の果てではない。たんなる衝動である。初夏の夕方、氷の連嶺を思わせる入道雲が湧き立っていた。いささかきざっぱいが、そんなもののせいかも知れない。

いくつかの遠征計画がなかなか軌道に乗らず、軽いいらだちにとらわれていた。それが『アンデス』一つを焦点に定めた瞬間、すっと消え去った感じがした。しゃにむに行動を起こしてみれば実現しそうな予感があった。

ペルー・アンデスへは学生のとき単身行こうと夢見たことがあった。仲間の渥美重幸(スペイン語学、盛岡在住)がチリ山岳会会報を翻訳したこともあった。だが改めて遠征隊を組んで行くとなると、どこへ行くか。ペルーにはもうほとんど処女地域はない。

外語大の図書館でオックスフォードの古い世界地図を広げると、チチカカ湖の東岸、ボリビア領内に七千メートル台の山二つが見つかった。アンコウーマとイリマニ。周囲がすべて茶色に塗られた中に、そこだけぽつんと青い高原の湖。『チチ』『カカ』という、いささか郷愁をもたらす発音。その湖の守護神のように突っ立つ、たぶん水をまわっているであろう二つの高峰。ボリビア・アンデスを調べてみることにした。

家に帰って『アンデスへ行くぞ』と話す、妻が『あたしも行く』と言い出した。彼女は外語のスペイン語を出ている、山にも登っていた。ひそかにアンデスへのあこがれを暖めていたらしい。女も遠征に加わっていけないということとはなからう。

十数人が隊員として名乗りをあげた。行きたい者が行けばいい。隊員の選考はしなかった。それが主義だというわけではない。『自分自身の経験がないのだから、遠征に適、不適の断を下す資格はない』と思ったからである。だが結果的にはそのうち約半数は出国できなかった。外語の卒業生は人使いのしづらい商社関係の勤めが多い。

資料に関しては吉沢一郎氏、竹田吉文氏、岩村善次氏（外務省移住局）など多数の人のお世話になった。チリ山岳会のヘルマン・ミルス氏、アメリカにいるエベリオ・エシユバリーア氏にも貴重な地図を貸していただいた。アンコウーマもイリマニも七千メートルないこと、両峰の間は長さ百キロ以上の連嶺で、かなりの部分が未踏地域であるらしいことが分かった。その山脈——コルディエラ・レアルを第一目標に、時間に余裕があればボリビア西部の大火山帯をトラックで縦断してみようと思った。

出国手続きなどでも村木潤次郎氏をはじめ、多くの人から十まで面倒を見ていただいた。思い立ってから十ヵ月後、一九六四年四月七日、横浜港から川崎汽船の貨客船ペルー丸で出発した。

隊の構成は次の通りである。年齢は出発時。

向 <sup>むこう</sup> 一 <sup>い</sup> 陽 <sup>よう</sup> 隊長。二十九歳。東京外語大英米科卒。三十二年度リーダー。共同通信勤務。

鈴木久仁夫 二マネージャー。二十八歳。外語大ドイツ語卒。三十四年度リーダー。不二越鋼材勤務。

青木正樹 二装備係。二十九歳。外語大フランス語卒。三十三年度リーダー。都立大学大学院。

向晶子 二食料係。二十七歳。外語大スペイン語卒。三十三年度女子部リーダー。

竹下孝哉 二医療係。二十三歳。外語大中国語四年。三十七年度サブ・リーダー。

稲 川 忠 庶務係。二十二歳。外語大フランス語四年。三十八年度サブ・リーダー。

以上六隊員のほか、寺本義明（日立製作所。二十八歳）、田中啓雅（伊藤忠。二十七歳）、亀山晃一（丸紅飯田。二十五歳）、星達雄（三菱商事。二十五歳）、渥美重幸（河北新報。二十八歳）、柴田力（富士フィルム、サンパウロ在住。二十八歳）の六人も計画書に名を連ねていた。

また現地では次の五人が登山に参加した。

フランス・グティエーレス 2 2 ボリビア山岳会。二十二歳。第一次登山。

ノエル・カステイロヨ 2 2 同。二十二歳。第二次。

太 田 寛 治 2 2 同。ボリビア日東金属鉱山。工学院大学山岳部OB。二十八歳。第二次。

ベナンシオ・パチャワヤ 2 2 三十五歳。全期間。テント・キーパーとして雇った。

アントニオ・ガルシア 2 2 二十七歳。全期間。運転手。

ペルー丸には鈴木以外の五人が乗った。横浜出港後五十日目の五月二十六日早朝、チリのアリカ港に着いた。アリカで雑貨店を開いている河鍋定吉さん 2 2 熊本出身 2 2 に入国手続きや通関で面倒を見ていただいた。

翌朝アリカラパス鉄道でボリビア入り。ディーゼル・カー一輛だけ。週一回の急行便である。標高四〇六七メートルの国境の駅を越える。車窓の左右に雪を頂いた火山がいくつも現われた。『コルディエラ・オクシデンタル』と呼ばれる火山帯である。火山帯を抜けると大高原が開けた。四千メートル前後の標高で、ペルー南部からボリビア西部を通りアルゼンチンまで続く『アルティ・プラーノ』である。行く手、アルティ・プラーノの果てからコルディエラ・レアルが立ち上がってきた。西日を受けて氷がきらきら輝やいている。夕方、レアルのふところに抱かれた感じの、ボリビアの首都ラパスに着いた。大使館、日本人会、ボリビア山岳会（クルブ・アンディノ・ボリビアーノ）などから数十人の出迎えを受けた。鈴木が空路先着して諸手続きを済ませていた。

ラパス市はアルティ・プラーノから落ち込む谷の斜面にかかっている。町並みは小流を挟んで、標高三千五百メートルから四千百メートルの間に散らばっている。中心標高は三六三二メートルという。空気が薄いせいかな高度が下がるほど下町に上流階級の邸宅が多く、四千メートル近くの山の手には貧乏なインディオの、土造りの住居が密集している。

到着翌日から高度順応と見物を兼ねて市内や郊外を動き回った。大使館には川崎栄治大使、吉水通一等書記官をはじめ外語の卒業生が多いので、自分たちの事務所のように気安く出入りさせてもらった。標高五千二百メートルのチャカルタ宇宙線観測所を車で訪れたが、急激に高所へ上がったため頭が霞んだようで、歩き回るのがいささか苦しかった。川崎大使と一緒に、ラパス東方にあるレアル山中の峠を越えて東面の溪谷地（ユンガス）へも下りた。穂高の屏風岩のような岩壁に囲まれた、溪谷の中の広い草地にテントを張り、マスを釣った。

歩き回っているうち高度にも慣れてきた。河鍋さんに後送を頼んでいた荷物も着いた。通関もうまく済んだ。

## 第一次登山

コルデイエラ・レアルには一九二八年オーストリア隊がはいり地図を作っている。それ以外には信用できる地図はない。レアルの中央部にチャチャコマニ（六〇七四メートル）がある。ヘルマン・ミルス氏が貸してくれた地図（オーストリア隊測量のもの）によると、チャチャコマニ周辺は『？』印だけだった。計画当初はチャチャコマニ東面の『？』部分にはいつてみようと思っていたのだが、一九六三年秋発行のアルパイン・ジャーナルを見て、この東面には一九六二年にイギリスのリーディング大学パーティーがはいり、処女峰を登りまくったことが分かった。そこでぼくたちはまずチャチャコマニ南方の『？』印を目指すことにした。

ラパスでポリビア山岳会員にレアルの様子をたずねたが、まったく要領を得ない。チャチャコマニ西方山麓までト

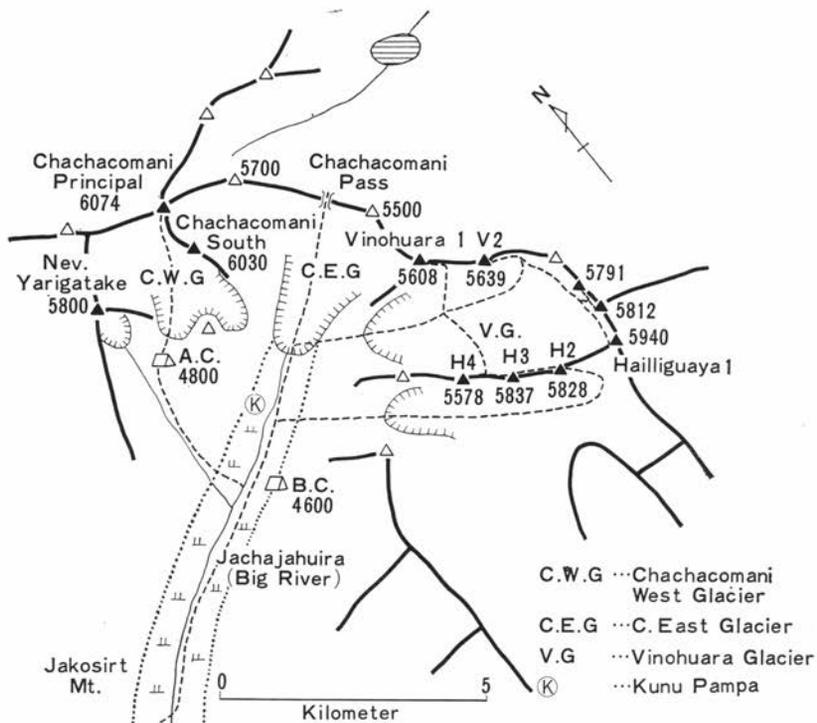
トラックで日帰りの偵察に出かけた。チチカカ湖のほとりのペーニヤという部落から、チャチャコマニを大きく仰ぐことができた。チャチャコマニの頂上近くには、空中にひろげた白い傘のような大氷原がかかっていた。主稜線はその南方へ高く続き、氷河をまとったたくさんさんのピークが眺められた。だがまだ前山越しに三十キロのかなたである。

地図によると前山の向こうのどこかに『チャチャコマニ部落』がある。『チャチャコマニ部落』は『チャチャコマニ山』南方から流れる谷の下方にあった。『チャチャコマニ部落』を見つけ出せば『チャチャコマニ山』南方の処女山群へはいるルートが分かりそうだ。ところがその『チャチャコマニ部落』へはどう行けばいいのかが分からない。『チャチャコマニ山』の見えるところには、あちこちに『チャチャコマニ』と名のつく集落がある。

そこで改めて鈴木と竹下を『チャチャコマニ部落』探しの日帰り偵察に送った。二人は前山をまわりこむ道を発見し、最奥の『チャチャコマニ部落』らしいところへ着き、荷運びの動物を交渉して帰ってきた。

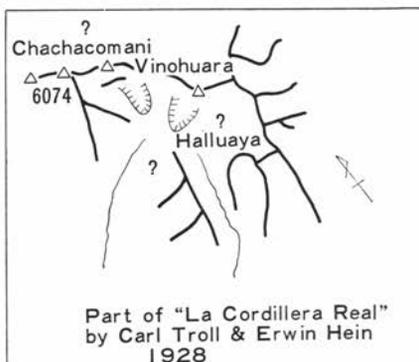
六月九日、第一次登山に出発した。ボリビア山岳会のグティエレス君が同行する。またベナンシオというインディオの男をテント・キーパーとして雇った。ベナンシオは過去七回遠征隊に同行した経験を持っている。一橋隊、神戸大隊にも同行した。ふだんはボリビア山岳会のチャカルターヤ・スキー場の番人をしている。自分では混血だといっているが、アイマラ族の血が濃く、外見は純粹のインディオとまったく変わらない。なんでもよく知っていて重宝な存在だった。

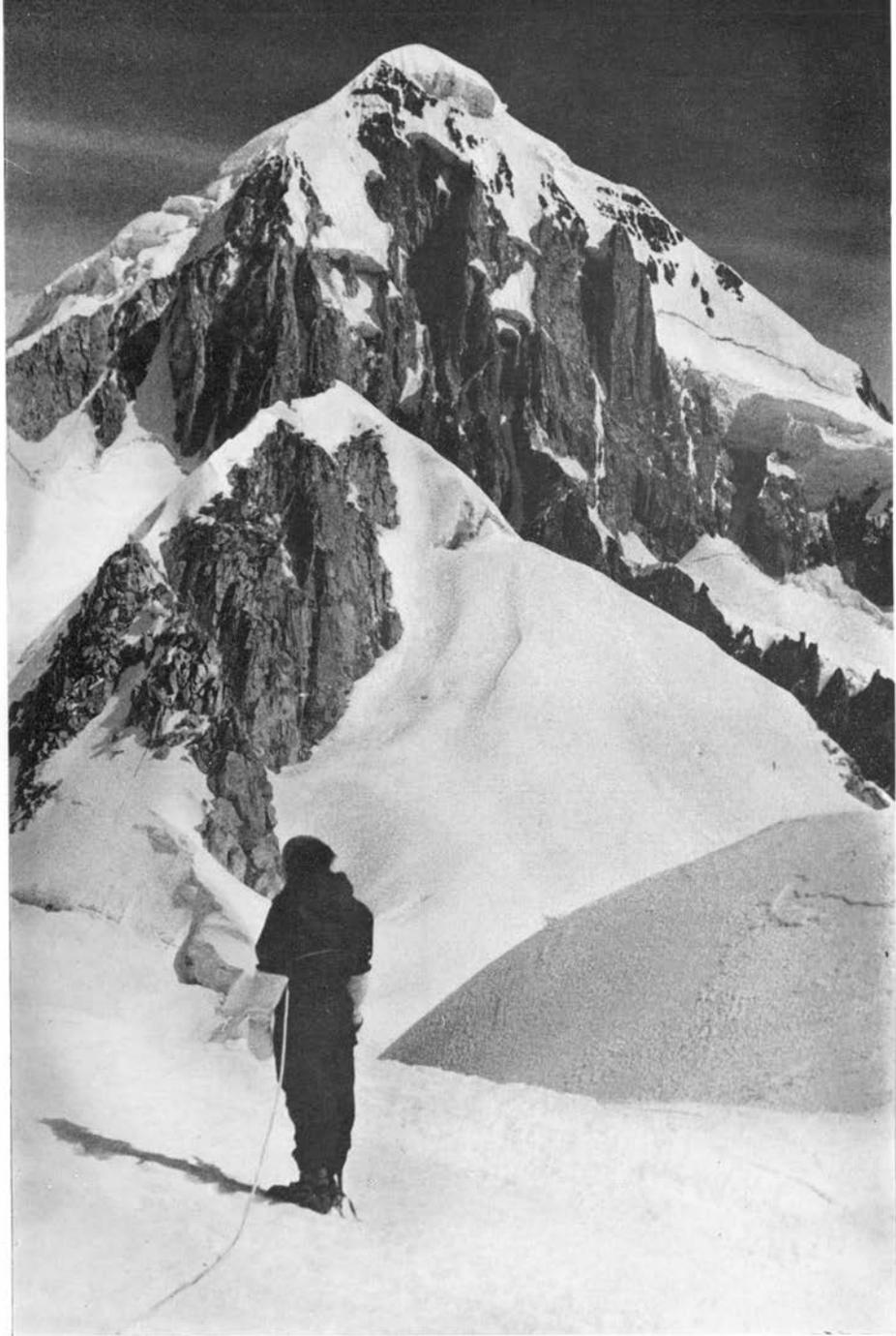
夜明け前にラパスをトラックで出る。大高原の広いジャリ道を北に向かってつっ走る。右手に続くレアルの鋭いピークが赤く染まってくる。昼前『チャチャコマニ部落』に着いた。ここから先は道はないが、草原をまだトラックで進めそうだ。部落のインディオに、荷運びのリャーマたちを連れてあとを追ってくるよう頼み、チャチャコマニ山から伸びて来ている広い尾根を登った。古代の氷河が運んだ堆石の尾根である。大小の石がごろごろする間をパーハが埋めている。パーハはイネ科の植物。日本のイ草に似て先がとがっている。いまは冬枯れで陽光に黄色く燃えるよう



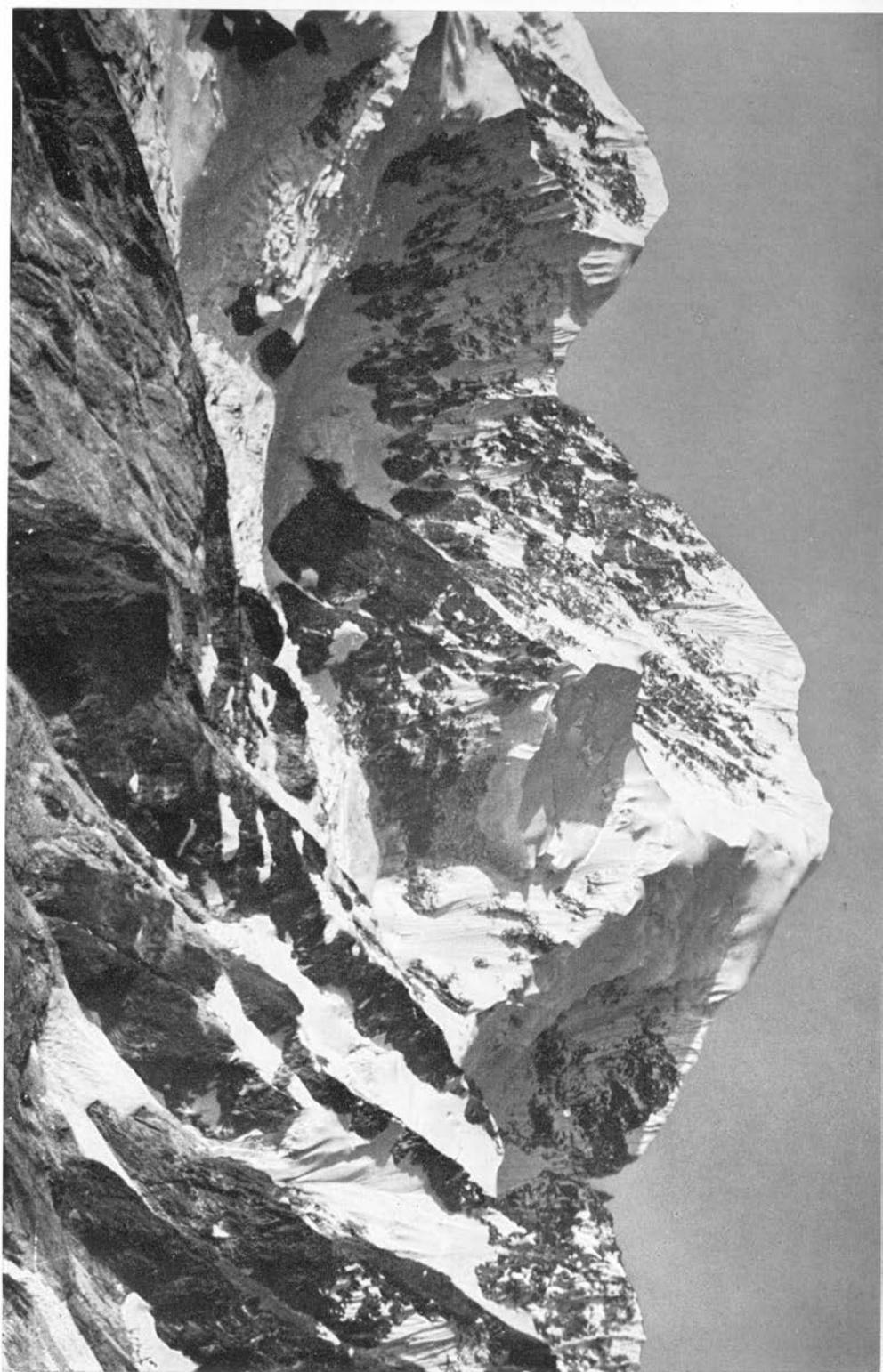
- C.W.G ... Chachacomani West Glacier
- C.E.G ... Chachacomani East Glacier
- V.G ... Vinohuara Glacier
- K ... Kunu Pampa

Chachacomani, Vinohuara, Hailliguaya  
Andean Expedition  
by the Tokyo Univ. of Foreign Studies,  
1964





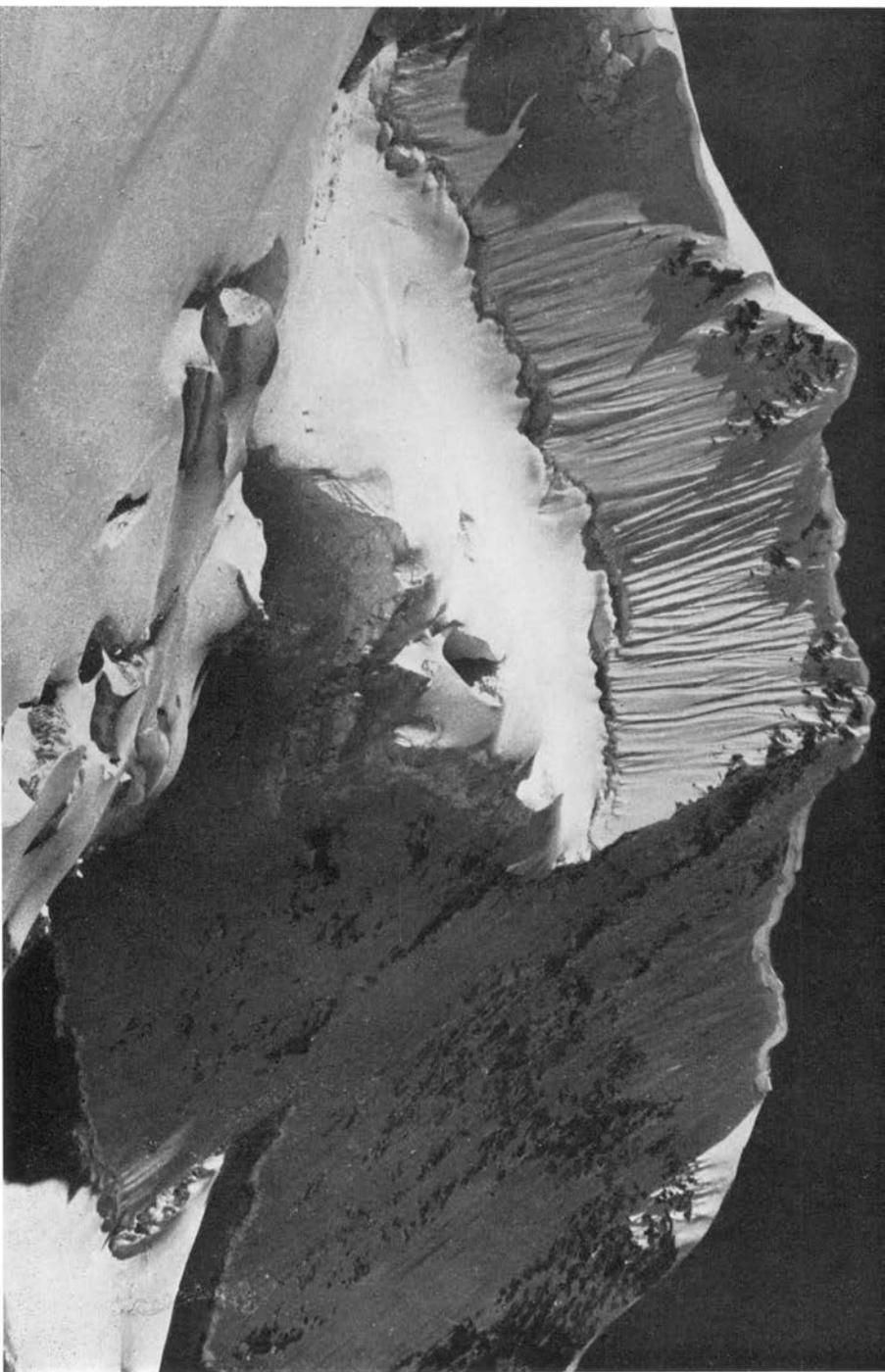
アンコウマの東面  
East face of Hancouma (6427m), Cordillera Real.  
(By I. Mukou)



イヤンプアの南西面

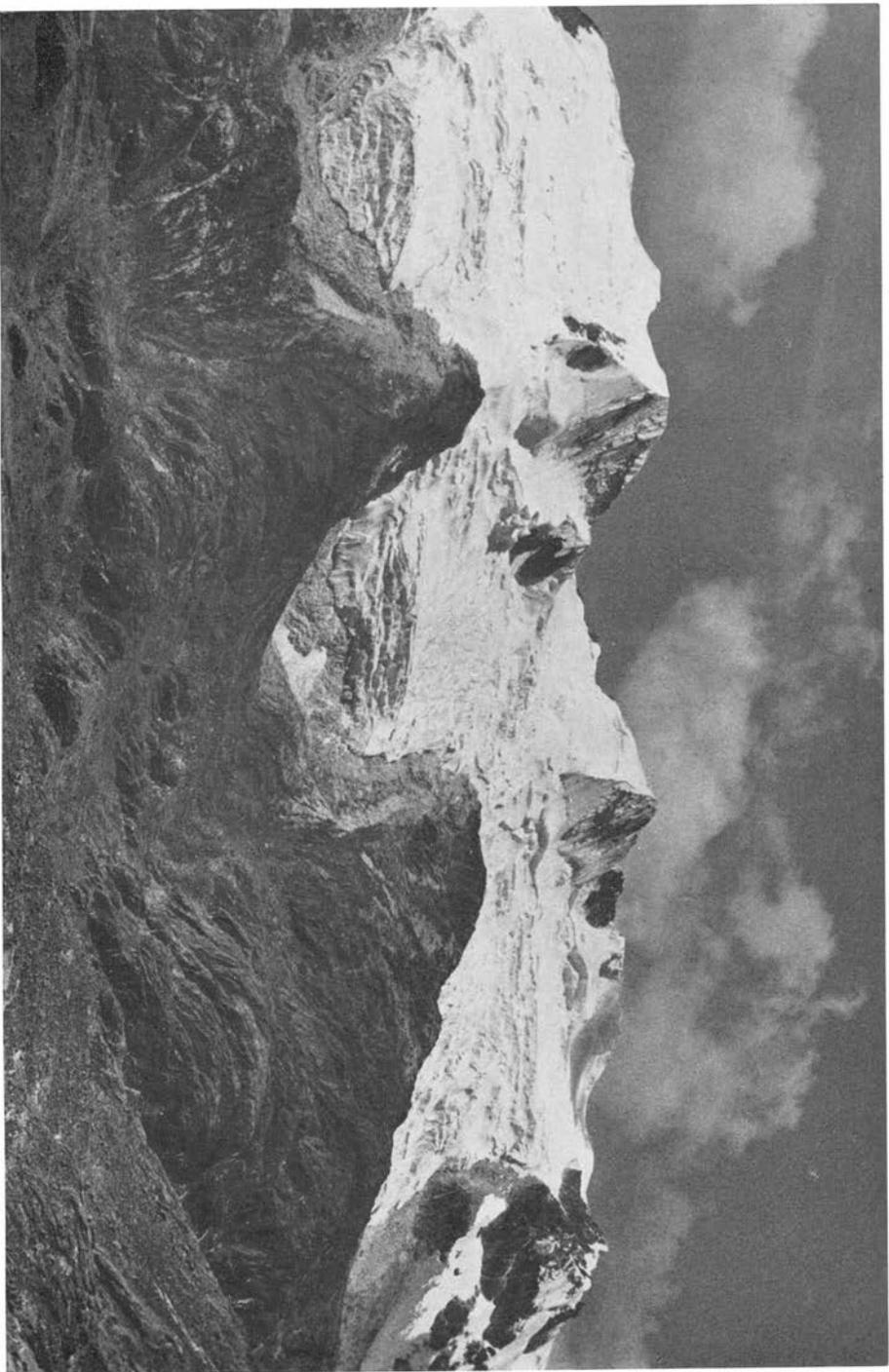
The South-western aspect of Nevado Illampu (6362 m), Cordillera Real.

(By I. Mukou)



チヤチヤコマニ西氷河から見たチヤチヤコマニ南峰  
Chachacomani South Peak (6030 m) seen from the Chachacomani West Glacier.  
Cordillera Real. (By I. Mukou)

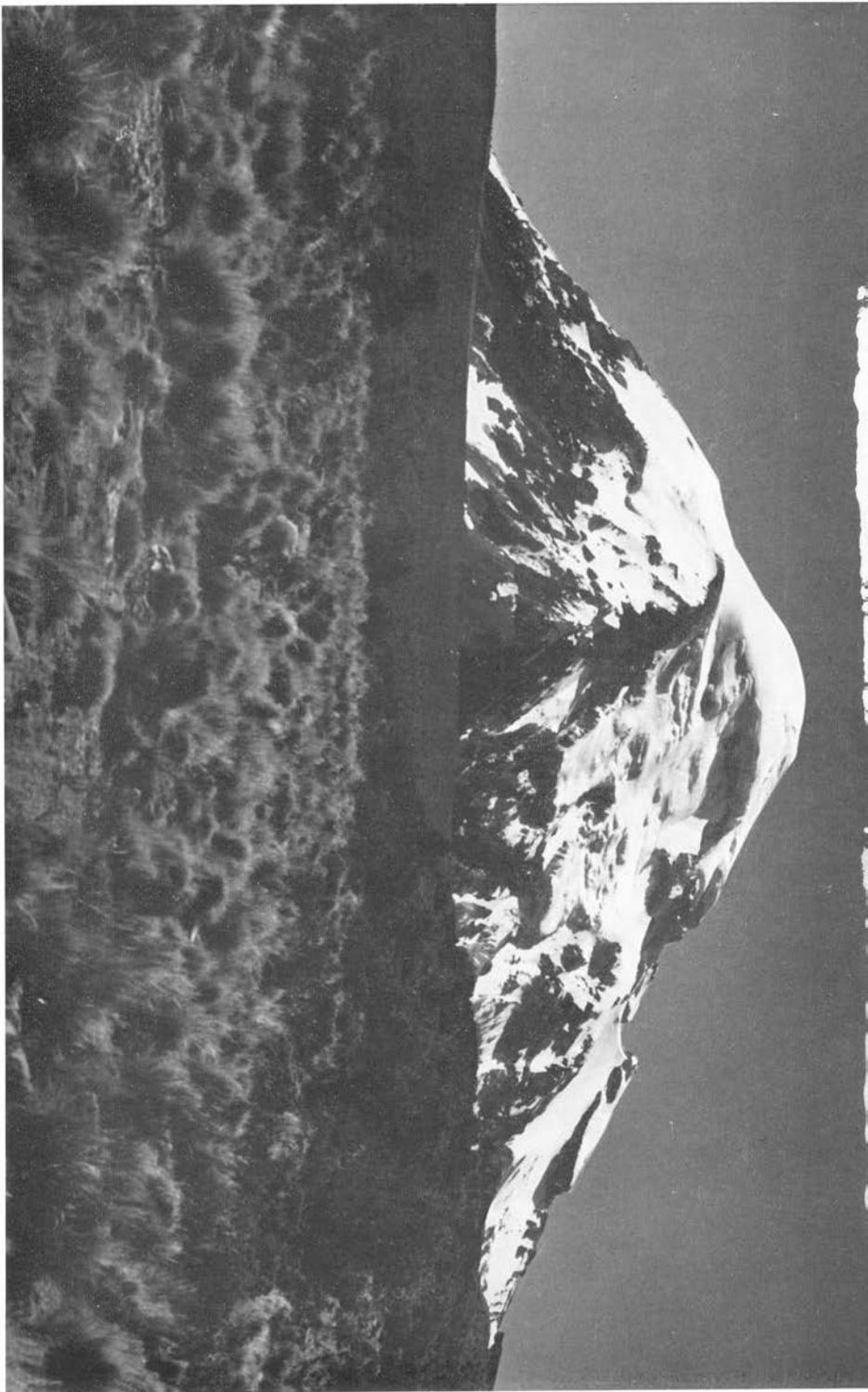
III (5520 m)    II (5550 m)    I (5600 m)



ピルヨー・アソコウマ山群

Viluyo Hancouma Group, Cordillera Real.

(By I. Markou)



サハラの西面

West face of Sajama (6531 m) (By I. Mukou)



1964年東京外国語大学アンデス遠征隊員

The members of the Andean Expedition by the Tokyo Univ. of Foreign Studies 1964.

Left to right (back row) : I. Mukou (leader), K. Suzuki, A. Mukou, T. Inagawa, K. Ohta.

(front row) : Banancio Pachahuay, T. Takeshita, M. Aoki, Noel Castillo.

だ。

昼すぎ尾根がけわしくなった。トラックはここまで。やがて着いた動物たちに荷物を積みかえる。リヤーマ七四。ロバ五匹。馬二匹。インディオが二人ついている。

足下には古氷河跡の広いU字谷が広がっていた。谷底は平らで幅五百メートルもありそう。白濁した流れがうねっている。兩岸はせり上がって上になるほど急になり、頂稜部には支氷河のカルルがいくつもかかっている。谷底へおり、テントを張った。谷の行く手にはさかずきを伏せたような雪山が夕日に赤く輝やいている。処女峰ビノウアラらしい。その右手にはビノウアラより高い多数のピークが、複雑に重なっている。すばらしい処女地域へ来た。ともかくビノウアラめざして谷をつめてみることにした。(『ビノウアラ』とは『ぶどう酒を注ぐ』という意味だ) (という。白い流れをぶどう酒に見たてたものだろう)

翌日谷を三時間ほどさか上り、ベース・キャンプを定めた。標高四六〇〇メートル。ベース・キャンプの先で高さ百メートルほどの岩壁が谷筋一ぱいをふさいでいる。岩壁の上はまだ谷が続いているようだが、『動物が上へ行けない』とインディオが言う。ベース・キャンプは谷底から十メートルほどの高さの、左岸の小テラスの上だ。そばを分厚いコケを割って、きれいな側流が落ちていく。谷の対岸にはヒマラヤヒダをまとったすばらしい高峰が、青空の中から見下ろしていた。チャチャコマニの南にあるので『チャチャコマニ南峰』と呼んだ。

翌十一日、全員で偵察に出た。岩壁にはけもの道がついており、簡単に上へ出ることができた。岩壁の上はさらに谷が一キロほど続き氷河の舌端があった。この舌端から二パーティーに分かれて偵察に行き、ほぼ周囲の地勢をつかむことができた。

この氷河(チャチャコマニ氷河と仮称)は東北方に向かってゆるやかに上り、主稜線の下で左に直角に曲がりアイス・フオール地帯となる。アイス・フオールはさらに上で左に曲がり、チャチャコマニ主峰(六〇七四メートル)と南峰の間から落ちているらしい。チャチャコマニ氷河舌端の一キロほど上で、左岸から別の氷河(ビノウアラ氷河と仮称)が落ち込

んでいる。両氷河を分ける地点にビノウアラが立っている。ビノウアラ氷河のまわりに多数のピークがあった。この氷河の末端は高さ十メートルほどの氷壁。その上は大小のクレバスの入り乱れた緩斜面で、やがて円形劇場の底のような広い氷原となる。氷原は二キロほどゆるやかに続き、すさまじいアイス・フォールがかかっている。その上に幅の広い堂々たるピークが立っている。あとでテントに遊びに来たインディオに『あのへんの山はなんというか』とたずねると『ハイリワヤ』と答えたので、そのピークを『ハイリワヤ主峰（I峰）』と仮称、その右手に五八〇メートル前後の高さで続くピークを同II峰、III峰、IV峰、V峰と仮称した。ハイリワヤとビノウアラの間にも、さらに三個のピークを数え、これまで『ビノウアラ』と呼んでいたピークを『ビノウアラI峰』、その右に隣り合っているピークを『ビノウアラII峰』と名付けた。あとの二つにはまだ名前をつけていない。

またベース・キャンプの上の岩壁より上部の谷を『クヌ・パンバ』（上の谷）、川を『ハチャハウイラ』（大きな川）と麓のインディオは呼んでいた。

ビノウアラ氷河の周囲の山は、いずれもベース・キャンプから日帰りで登頂した。前進キャンプを出すべきだったと思うが、天気の良いうちにといい、また荷上げで余分の労力を費すのを恐れて、あえてラッシュ・タクトイックをとった。ハーケン類を使わない、フリー・クライミングによる登頂である。六月末までに計十一のピーク（うち初登頂十座）を登り、三十日ラパスに帰った。ピークの高さは、登頂のさい持ち上げた高度計の指標と、測量されているチャヤコマニ主峰の高度との比較、及び目算から制り出したものである。いかげんではあるが、チャヤコマニ主峰の高度自体が、ボリビア政府公認の地図では六五〇〇メートルと記入されているほど、高度に関しては曖昧なので有名なボリビアのことだ。『高度不明』とするよりは価値がある。低めに算定しておいた。そのうち正式の測量で訂正されるだろう。（高度計はラパスの飛行場の高度に合わせた。連日曇一つない快晴で、気圧の変化はほとんどなかったらうと思う。）

登頂したピークの概要を記す。

▽ピノウアラII峰 (五六三九メートル)

頂稜部分の長さが百メートルもありそうな、薄い屋根型の、姿の美しいピークである。頂稜のまん中あたりから傾斜五十度以上の薄い氷稜が、一直線にピノウアラ氷河に落ちていた。十三日、青木、竹下、稲川の三人がこの氷稜にとりついたが、けわしすぎてだめ。十五日、再度この三人で頂上をめざした。氷稜を左に見て南方の主稜線へ登り、稜線伝いに登頂した。頂上直下にでかいクレバスがあった。

▽チャチャコマニ・コル (約五四〇メートル)

十一日、向、向(岬)、竹下、グティエーレスの四人でチャチャコマニ氷河をつめた。ゆるやかな上りである。空気が薄く非常に澄んでいるので物体の遠近感がない。せいぜい十分も歩けばと思うのに一時間かかっても着かない。コルは最初からすぐそこに見えていたのに、氷河末端から四時間登っても一向に近くならず、午後二時引き返した。ピノウアラI峰の上空が、星が見えそうほど濃い。

十六日、鈴木、向(岬)、向の三人でコルに立った。高さ二メートルほどの大きなケルン二個を見た。完全な処女地帯と思っていたので、ショックだった。てっぺんに三角形の先のとがった石をのせた独特の形をしている。のちほどビルーヨ・アンコウマII峰でもこれとそっくりのケルンを見た。ビルーヨには一九二八年のオーストリア隊しかはいっていない。このケルンもオーストリア隊のものとしか考えられない。だが同隊はこのコルへは立っていないはずだ。どういうことか分らない。

コルの右手に三角錐のピークがある。五五〇〇メートルほど。コルの左手にチャチャコマニ東峰(仮称、五七〇〇メートル)がある。すごい懸垂氷河の氷の房飾りに守られていて簡単には手が出ない。東からの風が冷たく、そうそうに引き返した。

▽ピノウアラI峰 (五六〇八メートル)

十一日、鈴木、稲川、青木の三人がピノウアラ氷河を偵察に行き、このピークの頂上からピノウアラ氷河とチャチャコマニ氷河の合流点へ落ち込む岩稜にとりついた。岩稜中ほどのギャップへピノウアラ氷河側から雪のルンゼを伝って登り、さらに岩稜伝いに一ピッチ登り懸垂で下りてきた。

十三日、鈴木、グティエーレス、向(島)、向の四人で頂上をめざす。ピノウアラ氷河上の円形劇場の底でピノウアラII峰に向う三人と別れ、I、II峰間のコルへ登る。急傾斜だがアイゼンがよくきいた。大きなクレバスが二本あったが、幸いスノー・ブリッジがかかっていた。コルから頂上はすぐのように思えたが、これが長くけわしかった。ピノウアラ氷河側の雪壁を二ピッチ登り、岩稜へ。岩稜はおもに東面をからんで登る。小さな岩壁をいくつも越す。岩稜が終わると雪のリッジで、アンデス特有の大きな雪団子がいくつもかぶっていた。高さ五十メートルほどの雪団子が現われた。鈴木が稜線伝いにザイルを伸ばしていったが大きなクレバスがあり、おまけに頭上が大きくかぶっている。ぼくがトップを代わって、右側からからみぎみに登ってみたが、薄い氷の下が岩で足場が定まらず下りた。時間もないので午後四時引き返す。

十五日、同じ四人でピノウアラI峰へ向かったが、グティエーレス君は調子が悪くて帰幕。三人だけで登ってしまったのはかわいそうなので、I峰を後まわしにチャチャコマニ・コルへ登った。

十六日、四人でI峰をめざし、登頂に成功した。頂上は稜線から左半分が雪のオーバーハング、右側が岩のオーバーハングで守られていた。近ずきながら『登れないかな』と思っていたが、幸運なことに岩のオーバーハングの下に深いチムニーがあり、それをたどって向う側へ抜けることができた。頂上は長さ三メートルほどの雪塊。その下に一畳敷きほどの岩棚があり四人かたまることができた。

▽無名峰(五七九メートル)、同(五八二メートル)

ピノウアラII峰とハイリウヤI峰を結ぶ稜線の上にある。十五日、青木、竹下、稲川の三人がピノウアラI峰登頂

の余勢を馳って登頂した。I峰南方のコルから稜線の右側をスムーズにたどることができた。懸垂氷河上部の広い氷の棚みたいなルートである。雪原状のコルに出て左が五七九一メートル峰、右が五八一二メートル峰、ハイリワヤI峰の付属物的な存在ではあるが、立派な形をしているので登頂リストに加えることにした。三人は疲れきって深夜帰幕した。

▽ハイリワヤII峰(五八二八メートル)、同III峰(五八三七メートル)、同IV峰(五五七八メートル)

十七日、稲川、青木、竹下の三人が一気に縦走に成功した。円形劇場の底からIII、IV峰間のルンゼを登る。下部は大岩のごろごろした堆石地帯、ルンゼは氷となってから傾斜が増し、底がまっ暗な大クレバスをスノー・ブリッジで渡る。コルの直下が雪の小テラス。右へやせた氷稜を二十分ほど登るとIV峰頂上。テラスへ戻り、稜線伝いは通過できないので、稜線のビノウアラ氷河側の氷壁をからみぎみに登る。III峰頂稜は長さ百メートルに近い、氷の釣り尾根。右側はIV峰からII峰まで高さ八百メートルに近い垂直の氷壁である。氷壁の下は別の氷河がクヌ・パンパへ向かって落ちている。

やせ尾根を下り、再び登ってII峰。この下りには雪庇がなかった。II峰から一たん下って、I峰の付属ピークを登り始めたがつまり、右へおろる。このへん右から氷河が上がってきていて傾斜がゆるく、ひざ以上のラッセルに苦しんだ。どうしてもI峰へのルートが見つからないので、クレバスを巻きながら下り、氷河をたどって深夜帰幕。

▽ネバド・ヤリガタケ(五八〇〇メートル)

二十日、ベース・キャンプを毎日見下ろしているチャチャコマニ南峰攻略のため偵察隊を出した。鈴木と竹下はチャチャコマニ氷河をつめ、南峰、主峰間へ出るルートを探しに行ったが、チャチャコマニ氷河はチャチャコマニ・コル手前の屈曲点から上は、クレバスの状態が非常に悪くて通過できず、疲れきって帰ってきた。

青木と稲川は南峰西面をとりかこむ大アイス・フォールに挑んだ。このアイス・フォールは、ベース・キャンプの

上の百メートルの岩壁から続く岩山によって、二つに分かれている。主流はクヌ・パンパへ落ち、支流がベース・キャンプの対岸に食い込む支谷へ落ちている。青木たちはこの支谷からアイス・フォール末端部の高さ百メートルの氷壁を登った。氷壁の上はしばらくセラックス地帯が続き、その上はアイス・フォール上部の大雪原である。この雪原をはさんでチャチャコマニ南峰に対する岩峰に登頂してきた。西面は雪がついているが、チャチャコマニ側はほとんど岩で、槍ヶ岳頂上部を大きくしたような鋭いピークである。かなりきわどい岩登りだったという。「ネバド・ヤリガタケ」と命名。

#### ▽チャチャコマニ南峰（六〇三〇メートル）

南峰へ二偵察隊を出した日、ぼくはベース・キャンプ背後の尾根へ登った。ベース・キャンプを見下ろす南峰の南稜から登頂の可能性がある、とかねがね思っていたから、それをよく観察するためである。南稜の左側にアイス・フォールの主流が落ちていた。アイス・フォールを南稜下部の岩尾根の接点をたどって、アイス・フォール上部へ前進キャンプを出すことを考えた。だが南稜の上部は非常にやせた氷のリッジで、かなりむずかしそうだ。

青木たちが見つけたルートに従って上部雪原を渡り、南峰、主峰間のコルへ出ることにした。二十一日、支谷に前進キャンプを出し、六人ではいった。ペナンシオはベース・キャンプの留守番だ（グティエレス君は十八日下山）。前進キャンプの標高は四八〇〇メートル。湿原のほとりである。数百メートル上に小氷河の舌端があり、この氷河はヤリガタケにつき上げている。

二十二日早朝、六人でチャチャコマニ南峰へ向かった。テントのそばの急な堆石の斜面をしばらく登ると、チャチャコマニ西氷河支流の舌端に出た。舌端部は垂直で手が出ない。少し左へ岩場をよじたあとアイス・フォールにとりつく。堅い氷だった。アイゼンの爪がよくささらない。時間がかかった。五十メートル二ピッチで登りきる。二パーティーに分かれて氷塔地帯を進み、大雪原へ出る。南峰が雪原のかなたにすばらしいヒマラヤヒダの南壁を見せて立

っていた。雪原の上では暑さにまいった。ラッセルがひどくてピッチがあがらない。竹下、青木、稲川が先行パーティー。一番若い稲川がトップで深雪と格闘している。

南峰から主峰へかけての稜線直下には、広いところでは幅十メートルもありそうなクレバスが、長さ一キロほども続いていた。百メートルほど回りこむと、不気味なスノー・ブリッジがかかっていた。両峰間のコル近くから猛烈な西風に悩まされた。あまり冷たくて一時は登頂を断念しようと思うほどだった。コルから急な氷壁にステップをたんにんに切って三ピッチ。先行パーティーは寒さのため頂上に居たたまれず、先に下りてきた。頂上は長さ三メートルほどの狭いナイフ・エッジである。帰途、氷塔地帯で月が出た。

#### ▽チャチャコマニ主峰（六〇七四メートル）

二十四日、鈴木、青木、竹下の三人が第二登に成功した。南峰とのコル直下まで前々日のルートをたどり、腹までのラッセルに悩みながら左へトラバースを続ける。北面へ出るとクレバスだらけの堅雪の斜面だった。頂上部分はじめは急な氷壁でとりつけず、主稜線近くまでまわり込んで頂上に立った。主峰は頂稜部分の長さが二百メートルもありそうな屋根型のピークで、頂上はその東端。西端も六〇六〇メートルの標高が算定しており、登頂した。西峰として別個に扱ってもいいのだが、それほど顕著ではないので登頂リストには加えない。

#### ▽ハイリワヤ工峰（五九四〇メートル）

南峰登頂の翌日、向、向（昌）、稲川の三人はベース・キャンプに下りた。翌二十四日、向、稲川、ベナンシオの三人がハイリワヤの主峰（工峰）に登った。頂上部分はこちらも長さ二百メートルはある屋根型ピークである。無名峰二つに登頂したときのルートをとどり、懸垂氷河の上部を巻いた。頂上の西側は大きな雪庇で、下の氷河を見ることができなかった。

## 第二次登山

ラパスに帰って一週間ほど休養し、七月六日第二次登山に出発した。この回はラパス在住の太田さんとボリビア山岳会のノエル・カステイヨ君が同行した。太田さんは工学院大学山岳部OBでボリビア日東金属鉱山に勤めている。ぼくたちが来るのを知って『ぜひ参加させてもらおうと、装備を日本からとり寄せていた』という。

第二次登山の目的はレアル北端のソラタ山群である。ソラタ山群にはアンコウーマ(六四二メートル)とイヤンプ(六三六二メートル)という二つの巨峰がある。アンコウーマは三回、イヤンプは二回登られている。両峰の間に六千メートル前後のピークが四つほど。アンコウーマから東に伸びるレアル主稜線上にアンコピティ、ウーマアリヤンタなどの処女山群がある。この山群の南にはいるサンフランシスコ谷の源頭にベース・キャンプをおき、アンコウーマと処女山群を登ろうという計画だったが、第一次登山の間に米豪合同登山隊がサンフランシスコ谷にはいり、アンコウーマの第四登とその他いくつかの登頂に成功したという。計画を変更して、北面からソラタ山群の内ふところへ深く食い込んでいくココ谷にはいることにした。

ソラタ山群に関しては、エシユバリニア氏が貸してくれた色刷り五万分の一地図があった。一九二八年のオーストリア隊が測量した地図である。ココ谷には、この隊以外はいった記録がない。

途中四泊して上部ココ谷にベース・キャンプを定めた。すさまじい鉄砲上りと鉄砲下りの連続だった。ココ谷部落の住人はずるくてリヤーマの交渉に骨が折れた。

ベース・キャンプは標高四六〇〇メートル。ビルーヨ・アンコウーマの山すそにある、小さな氷河湖のそば。モレーンの間に青い氷河湖が多数散らばっていた。上部ココ谷をへだてて西方の空を仰ぐと、イヤンプからアンコウーマへかけてぎざぎざの鋭いピークが並び、その中から大きな氷河が三本落ちていた。南方、谷の源頭には、アンコピ



テイ山群の白いピークが連なっている。

#### ▽イヤンプ(六三六二メートル) 試登

一番手近かなイヤンプをまず攻めることにした。ココ谷を渡ってイヤンプ氷河のほとりに前進キャンプを出した。ピコ・デル・ノルテ(六〇八〇メートル)からイヤンプへかけては、高さ五百—八百メートルのすごい岩壁が二キロ以上も続いている。岩と氷の巨大なオーバーハングがあり、まったく手が出ない。イヤンプ氷河をつめて源頭のコル(五九九三メートル)に出た。頂上まで直線距離で一キロ弱、比高三百六十九メートル。コルからジャンダルムを一つ越すと、その先はまず高さ百メートルほどの垂壁である。稜線の右側は大きなオーバーハング混じりのつるつるのスラブ。リスがなく登れない。左は薄い氷が張りついている。少し西面において、氷壁にくい込んである浅いガリーを登ることにした。だが、これもオーバーハングに守られている。コルの下に第二キャンプを出し計五日間、交代でこのガリーにザイルを伸ばしたが、ついに突破できなかった。食料とハーケンが尽き、そのうえ西風が鋭すぎた。イヤンプは時間があまったらまた試みることにし、アンコウーマに目を向けた。(神戸大隊のイヤンプ試登については「山岳」第五九年参照—編者)

#### ▽無名峰(六〇五六メートル)

イヤンプ・コルの南側にある岩峰に十六日、鈴木、稲川、ノエルの三人が登った。コルからは取りつけず、北壁のガラガラ崩れるルンゼを登り、登頂後は急な氷壁へ下る。かなりのアルバイトだった。ノエルは十八日下山。

#### ▽アンコウーマ(六四二七メートル)

ココ谷をさらに二キロさか上った湿原のほとりにベース・キャンプを移した。流れは幅一メートルほどとなり湿原の中をうねっている。

二十二日、全員で荷物を分けて背負い、アンコピティイ峰北面の氷河をさか上る。氷河を抜けて、I峰から北方に

伸びる幅の広い氷稜の上に前進キャンプを作った。向、竹下、稲川、向(昂)の四人がはいり、他は下る。すさまじい西風である。アンコウーマ東面は巨大な鋭いピラミッド。眺めていると気がめ入りこみそうな迫力がある。前面は比高八百メートルの赤黒い大岩壁。両サイドの稜線は分厚い雪庇が重なっている。前進キャンプの標高は五五〇〇メートル。

アンコウーマにとりつくには、アンコウーマ氷河の上部氷原を二キロほど横断する。二十三日試登。ぼくは早めに引き返し、ベース・キャンプまでコンロの補給に往復した。二台のコンロがそろって使いものならず、前夜来腹をへらし、のどはからからだった。二十五日、稲川、竹下、向の三人で登頂に成功した。第五登である。西方から雲が押し寄せて、山頂部では視界は十メートルもなかった。

アンコウーマ氷河から三百メートルほどの氷壁を登って主稜線へ。イヤンプーアンコウーマ間ではここだけ例外的に幅の広い稜線を一キロほど風に翻弄されながら進み、百メートルほどの第二の氷壁を登る。その上は見事な三角形のリッジが急角度に伸び上がっていた。頂上は広い雪原だった。

#### ▽アンコピティVII峰(五八五〇メートル)

アンコピティ山群は地図の上では七つのピークを数えることができる。いずれもなかなか立派な姿をしている。二十三日、ベース・キャンプから青木、鈴木、太田さんの三人がVII峰に登頂した。頂上にオレンジの皮があったという。反対側から米豪隊に初登頂をさらわれたらしい。懸垂氷河に手こずったという。

#### ▽アンコピティI峰(五八六三メートル)

頂上部分がきれいな雪のピラミッドのピークである。二十四日、天候悪くアンコウーマに登れないで停滞していた。午前十時ごろ風が弱まったので妻と二人で登りに行った。

雪の支稜依いに三時間で往復できると踏んでいたが、実際は六時間かかった。支稜の上は下から見えないクレバス

が何本も走って時間がかかり、最後のピラミッドは大きなクレパスにとりまかれていて渡れない。クレパスの下を右へ主稜線の近くまで巻いて、あぶなっかしいスノー・ブリッジを渡り、六十度ほどの氷壁を二ピッチ登り主稜線に立った。そこから頂上までは薄い氷稜が伸び上がっていた。薄い上に風が激しいので立ち上がれない。氷稜にまたがった。右足はぶらぶら。左足はかろうじて雪面にあたった。大きな階段を作りながら、二十五メートル約十ピッチで頂上に立った。米豪隊の足跡はない。

▽アンコピティIV峰(五八一八メートル)

鈴木、太田さん、青木の三人が二十六日、前進キャンプから往復した。アンコピティI峰東面につき上げる氷河の上部雪原をトラバースして稜線に出た。上部雪原では腰までのラッセルに悩まされた。この日は雪も降った。IV峰はV峰(五八三九メートル)と対になっている。V峰の付属物ととれないこともないが、それでも三角帽子みたいなすうどいピークである。

▽ビルーヨ・アンコウーマI峰(五六〇〇メートル)

『ビルーヨ』とは『血の』という意味のアイマラ語。『ビルーヨ・アンコウーマ』で『血の白い水』という意味になり、つじつまが合わない、と思っていたが、山を見て納得した。岩が鉄物を含んでいて非常に赤い。ウーマアリヤンタから主稜線をはずれ北方に伸びて、小じんまりした一群を形造っている。ベース・キャンプから湿原を渡って行く。

二十七日、竹下と稲川がI峰に登頂。クレパスだらけでルート・ファインディングがむずかしかった。四面がきり立っている鋭いピークである。

▽ビルーヨ・アンコウーマII峰(五五五〇メートル)、同III峰(五五二〇メートル)

二十七日、向、向(晶)登頂。午前中は雪が舞った。II峰は一九二八年のオーストリア隊が登頂したらしい。岩稜

を登って行く。氷河の近くのテラス上に、オーストリア隊のものと思われる大きなケルンがあった。チャチャコマニ・コルで見たケルンとそっくりで、てっぺんの方角を示すらしい三角形の石がのっている。

Ⅲ峰は西面の懸垂氷河をつめたが、頂上部分は高さ百メートルほどの本を立てたような氷壁で直登できない。左の北方稜線にまわり込んで登頂した。頂上は長さ五十メートルほどの薄い氷稜。

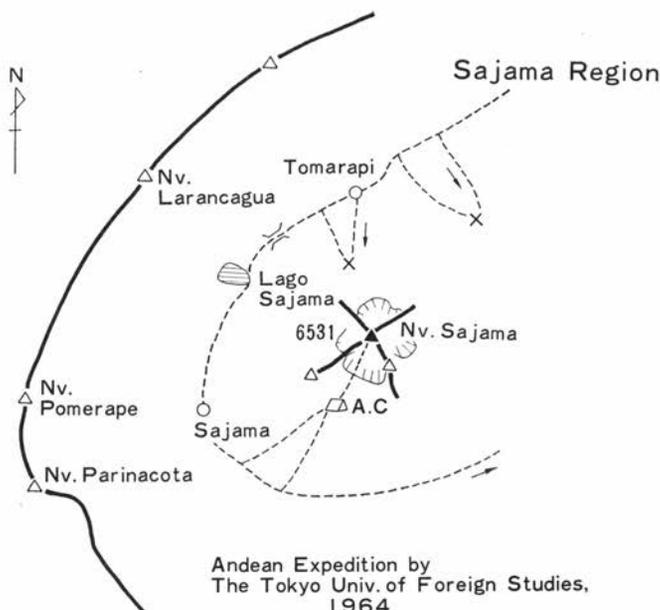
南方のⅢ峰へ縦走しようとしたが、*「本」*の角に大きなクレバスがあり下りられない。反対側へ上りのルートを下ったあと、*「本」*のすそをめぐる大きなクレバス伝いに歩いてⅡ・Ⅲ峰間のコルに出、Ⅱ峰も登頂した。東面にもかなり大きな氷河を見下ろすことができた。ビルーヨ・アンコウーマ山群には、このほかⅣ峰(五四五〇メートル)、Ⅴ峰(五五〇〇メートル)がある。

第二次登山は予定より長びいたので、食料がなくなつて困つた。ピストルを携行していたので、ピスカツチャ(尻尾の長い山うさぎ)を十一匹撃つて食べた。二十九日、約束していたとおり、ココ部族からリヤーマを追つて男たちが上がつてきた。クラツカーのくずを少しづつ分けて食べ出発。ガスが深く道に迷つた。まっ暗になつてココ部族に着いた。三十一日ラパスに帰着した。

### 第三次登山Ⅱサハマの登頂

サハマ(六五三二メートル)はボリビアの最高峰である。チリとの国境線を走る火山帯、コルディエラ・オクシデンタル(西アンデス)に属している。

八月十二日午後晚くラパスを出発、十七日に登頂し、十九日午後ラパスに帰つた。サハマ周辺はせめてひと月ぐらしかけて、ゆっくり探つてみたかったのだが、帰国の時間が迫つてサハマだけの駆け足登山に終わった。十九日にラパスを離れてペルー經由帰国の予定だった。



船会社との交渉のため青木をラパスに残し、隊員五人にベナンシオ、計六人のパーティー。サハマ西麓のサハマ部落(約四〇〇メートル)までトラックで途中三泊。朝はトラックのエンジンが寒さで動かず、一時間ほど後押しをした。チチカカ湖とポーポ湖を結ぶデスアグアデロー川では、箱舟でトラックごと渡ったのだが、〃渡し守〃がのんびりしていてまる一日近くかかった。水の枯れた川床を渡るさい、車輪が泥にはまりこみまいった。塩だらけの土地で飲み水が少なくて、泥水を飲んだ。道といえるものがない、奇怪な溶岩の峠を越えた。同乗させてやったインディオに道をだまされ、とんでもなく遠いところに連れて行かれた。インディオの泥の家の土間に寝た。

近くから仰ぐサハマは『これが山だ』というような迫力である。分厚い氷帽をかぶっている。富士山のように、一見どこからでも登れそうだが、麓と頂上を結ぶ線がなかなか見つかからない。

サハマ部落から人夫を雇って、火山礫の裾野を一日登り前進キャンプを設営。十七日、鈴木と稲川が頂上に立

った。時間がなく全員登頂は果せなかつた。

山行の間中すごい西風に吹きまくられた。登頂の日も頂上は雲の中であり、鈴木たち二人は、富士の突風が連続して吹くような強風に悩まされた。頂上は大氷原である。

十八日サハマ部落を離れ、往路とは違うサハマ南麓をまわる道をたどった。夜、大高原でトラックごと道に迷い、深夜飲み水もないままトラックの上で眠った。

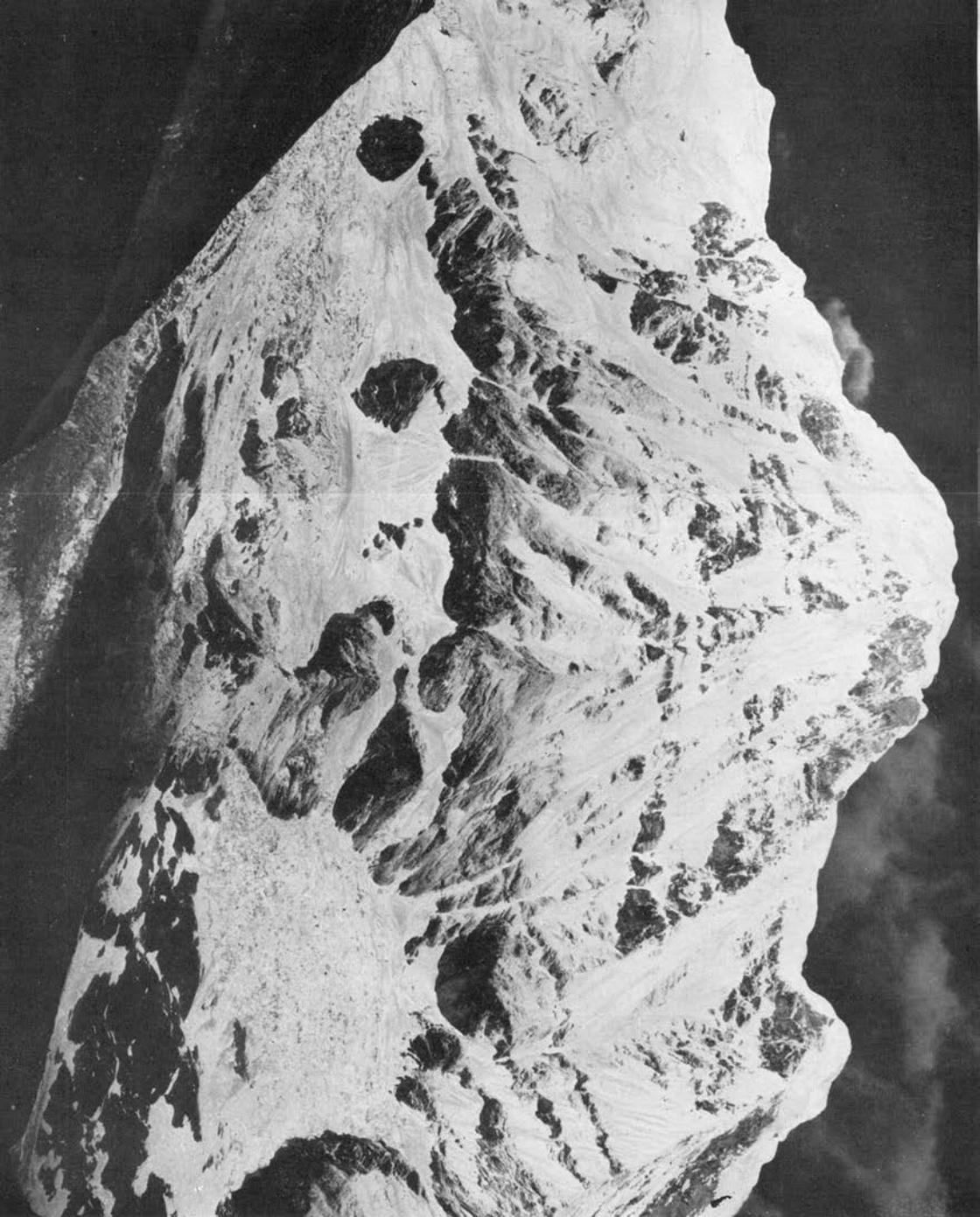
# アンナプルナ南峰登頂

樋口明生

## はじめに

人類最初の八千メートルとして、よく知られているアンナプルナの主峰（八〇七八メートル）から南にのびる稜線が、フィンガー（七二六〇メートル）を起こし、さらに南にのびて南峰（七二五六メートル）を聳立させている。一九六四年秋、京都大学山岳部は学生を主体とする隊をこの山に送り、初登頂に成功した。

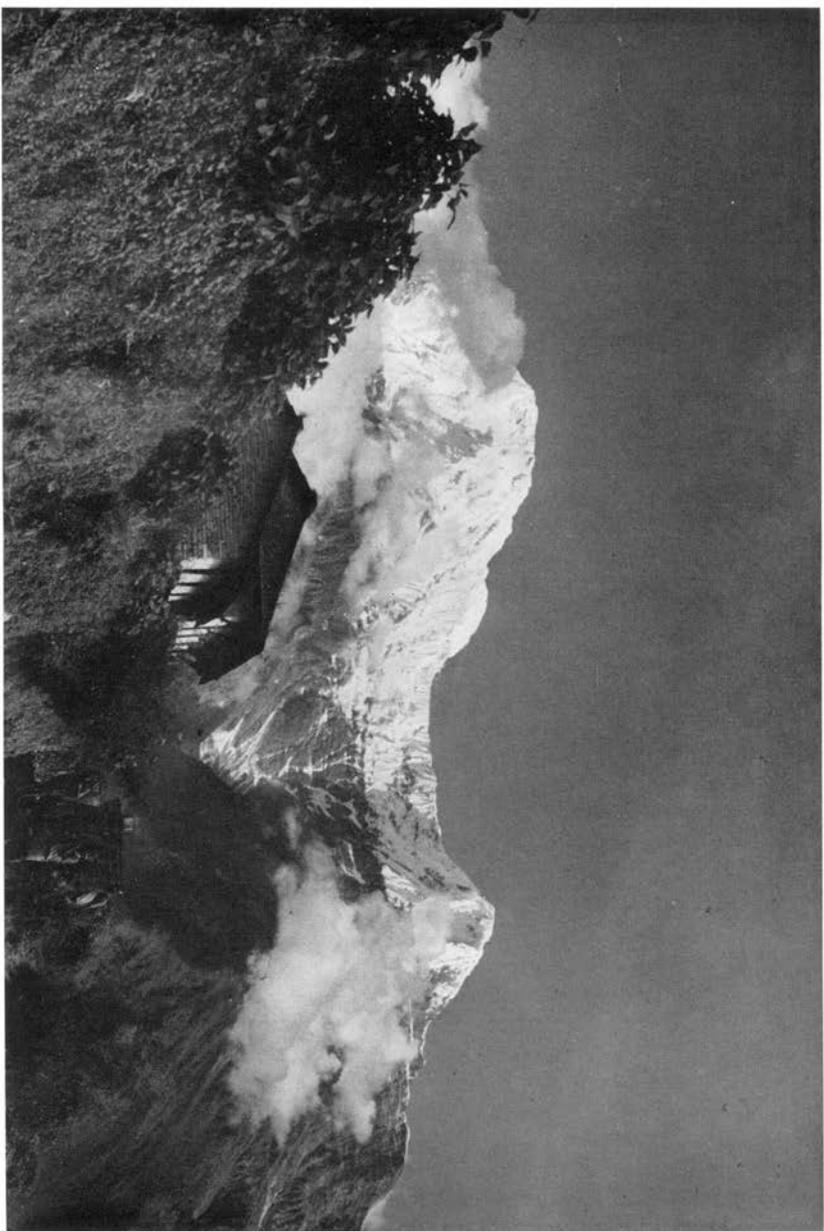
京都大学山岳部は一九六二年に、インドのパンジャブ州にあるインドラサン（六三二二メートル）に第一回の遠征隊を送り、その初登頂に成功した（「山岳」第五八年参照）。今度が第二回目である。今度は七千メートル級の手頃な未登峰をというので、最初西ネパールにあるカンジロバ（七〇四三メートル）が候補にあげられ、いろいろ検討された結果、だいちキャラバンに一カ月もかかるのでは遠すぎるし、その上この山自身の資料が少な過ぎるため、登頂の可能性がさっぱりわからないので、こういう山は現在の山岳部の目標としては不適合であるということになり、つぎの山が物色された。その結果、ダウラギリIV峰（七六四〇メートル）が目標に選ばれた。この山ならアプローチも比較的短かく、資



ベースキャンプからアンナプルナ南峰を見る

Annapurna South Peak (Ganesh or Moditse, 7256m) seen from the Base  
Camp (c.4000m)

(By H. Higuchi)



ネパールのリカンポルンから見たアンナプルナ南峰(左)とヒンチュリ(右)  
Annapurna South Peak (7256m) (left) and Hinchuli (6705m) (right) seen from  
Ghandrung.  
(By M. Kimura)



第3キャンブ付近から見た「セラック尾根」(中央)と中央峰(左上のスカイライン)

View looking up the upper part of the climbing route to Annapurna South from near Camp III (c.5600m).

“Serac ridge” in the center with the central peak (7100m) in the left.

(By S. Uyeo)



アンナプルナ南峰頂上における上尾隊員、背景はダウラギリI峰  
S. Uyeo on the summit of Annapurna South Peak (7256m) on October 16, 1964  
with Dhaulagiri I (8172m) in the background.  
(By Mingma Tsering)

料も豊富なうえ、非常に美しい山であり、高度も十分なので、今度の遠征の目標として申し分なしということになった。

早速、登山申請書を作り、四月二日に外務省に提出した。万一不許可になった時のことを考えて、申請書には第二候補としてアナンプルナ南峰、第三候補としてランタン谷の奥にあるツンガ・ピーク（七二八メートル）をあげておいた。一方、カトマンズ在任の神原達氏に申請書の写しを送り、ネパール政府の登山許可を取って頂くようお願いをしたのであるが、その返信によると、ダウラギリIV峰は、J・O・M・ロバーツ氏が前からねらっている山で、彼はそのために色々準備中であるから遠慮されてはどうか、ということである。そこでやむを得ずダウラギリIV峰をあきらめて、第二候補のアナンプルナ南峰を第一候補に昇格させ、申請書を書きなおした。このようにして、目標が決定されたのである。

一方、山岳部では隊員選考委員会を作り、四人の隊員が選ばれた。その際、なるべく後継者を養成するという意味で、下級生も入れるという方針が採用された。そのため、隊長を含めて平均年齢二十四歳という若い隊が誕生した。これは今までわが国から出た、七千メートル級をねらう遠征隊としては、最年少の隊ではなからうか。隊の構成はつぎのようである。隊長は樋口明生（京都市大学防災研究所助教授、三十四歳）、副隊長は上尾庄一郎（大学院薬学研究科、二十六歳）、隊員は吉野照道（農学部四回生、二十三歳）、島田喜代男（工学部三回生、二十二歳）、木村雅昭（法学部四回生、二十一歳）、上田豊（理学部三回生、二十歳）の四人である。

五月十一日にカトマンズから許可内定の電報をうけとり、全員大いに張り切って、いよいよ本格的な準備にとりかかった。七月十日ネパールから正式の許可を受けとり、七月の中頃に荷物を船積みし、終り頃、吉野、島田、木村の三人が神戸港から出発することができた。

八月十三日、空路カルカッタに着いた樋口は、先の三人と合流し、十八日島田とカトマンズに飛んだ。同じく八月

二十三日、空路カルカタに着いた上尾は、吉野、木村および十八日着いた上田の三人と合流し、二十五日荷物通関の手続きをすませ、鉄道で荷物とともにノートンワに向った。カトマンズで手続きを終えた島田は、二十四日連絡将校とともにポカラに飛び、ポーターを雇う手配をした。二十八日ノートンワに着いた四人は、ここでダーズリンから呼んだラクパ、カルマの二人のシェルパと、ポカラから飛んできた連絡将校と会い、翌二十九日ネパール入国および荷物通関の手続きを終え、バイラワに入った。

隊員と荷物は、ここからポカラまで空輸の予定である。ところが、この飛行場は田圃のような処で、一日雨が降ると三日位水びたしで使用に耐えない。モンズーンはまだ明けず、三日と好天気は続かない。連日飛行機会社に交渉に通うが無駄であった。結局九月八日の第二便で飛べることになり、夕方カルマを除く全員ポカラに集結した。

わが隊のサーダーは、サン・プタールⅢ、コックはラクパ・ツェリン、ハイポーターはミンマ・ツェリンとカルマの二人、ローカルポーターはノルブである。ほかにメールランナー二人とキチンボーイ一人が加わった。

### モディ・コーラ入り

ポカラの朝はすばらしい。起きぬけに名ばかりのホテルを出て、前の飛行場に出ると東の空が明るくなりはじめ、今まで灰色だった山々が目覚めてくる。北の方には左から我々の目指すアンナプルナ南峰、一峰、マチャプチャリ、三峰、四峰、二峰、ラムジュンと七千〜八千メートルのヒマラヤひだで装われた山々が峨々と聳え、連なっている。まさに神々しいとでもいうよりしようのない景観である。この国の人々が神々の座と考えるのも当然のように思える。飛行場の芝生には三々五々牛や水牛が草をはんでおり、その影が長くのびている。西の方の山あいにはダウラギリらしい白い峰が見える。

南峰を双眼鏡でのぞいてみる。東側のヒウンチュリ（六七〇〇メートル）に続く稜線は、コルから丁度半分位までは物

凄いナイフエッジで、南側の傾斜は相当なものである。一寸手がつきそうにない。やはり南氷河をつめる方がよさそうである。

九月九日、キャラバン開始。前日の夕方着いた荷物を深夜までかかって整理し、また早朝から仕分けをし、目方なるべく均一にする。装備係の木村を中心に、目のまわるようにいそがしい時間が過ぎた。八時過ぎからポーターがぼつぼつ集まり始める。連絡将校の処で登録をすませ、前渡金と番号札を受け取っている。女のポーターも三人混って四十七名が登録された。一人当り三十五キロ位の荷である。九時半頃に先頭が出発し、全員出終るまでに一時間程かかった。バザールで、燃料と現地食のアタ、マイタなどをついだポーターをあわせ、セティ・コーラ沿いにキャラバンが始まった。村々ではお祭りらしく、着飾った女達が踊りを踊っているに出くわす。皆鼻や耳に穴をあけ飾りをつけている。ネックレスも重そうなのをしている。隊員達はサブザックとカメラを肩に、思い思いに歩く。コックのラクパは夕食用に鶏を二羽仕入れ、ザックの上のせて歩いていく。今日の予定はノーダラまでであったが、出発が遅かったため目的の地まで行けず、スリケットまでにする。テント場はセティ・コーラの支流の河原である。テントを張り終った頃から雨が降り出した。隊長用のテントでキャラバン第一夜を迎えた。

キャラバンの朝は「サーブ、お茶」で明ける。寝袋から首だけ出して、タプブリ入ったミルクティーを飲みほす。煙草を一本喫い終ってからテントを出る。あまりよい天気ではない。

今日は昨日の遅れをとりもどすべく、かなりの強行軍をやった。河原から五、六百メートル登り尾根に出ると、ノーダラという所に着く。はるかにポカラの湖が見える美しい所である。ここから西に向かつて、千五、六百メートルの尾根の上のだから道を行く。所々にある水たまりには、水牛が首だけ出してつかっている。泥水であるが、彼等は生き甲斐を感じているのである。羊飼いの少年どもが羊を追っている。「ナマスデ(こんにちわ)」と云って合掌すると、彼等もニコニコしながら応じてくれる。なかなか人なつっこい。晴れたり曇ったりの天気である。適当な間隔

で作られているチョータラ（休み場）は大樹の蔭になっており、腰をおろすと出ていた汗もスツとひいていき、実に氣持がよい。ルムレイを過ぎモディ・コーラ左岸に出る。ここは崖の上で、五、六百メートル下をモディ・コーラが南に流れている。チョータラで汗をぬぐっていると、丁度雲が切れ始め、南峰が見えだした。立派な山である。何枚も写真を撮る。ころみに近くにいた土地の者に山の名を尋ねてみると、ダウラシリだと答えた。

この山は四つの名前をもっている。一つはもちろん我々がここで使っているアンナブルナ南峰である。これは、この山がアンナブルナ山群にあり、主峰の南にあるピークであるから、当然付けられてよい平凡な名である。もう一つはモディ・ツェ（Modise）である。これは、モディ・コーラの源頭にある峰（ツェ）という意味であろう。三番目はガネツシュである。ガネツシュとはヒンズー教の神様の名で、この神様は象の頭をもっている。実際、ポカラからこの山を見ると、あたかも象の頭のように見え、その鼻はヒウンチュリに繋がっている。はじめてポカラから実物を見た時、うまく名を付けたものだと感心した。この遠征中我々は主としてガネツシュと呼びならした。音感もよくなかなかよい名前であるが、残念なことにこの名はガネツシュ・ヒマールとまぎらわしいので、ここではあえてアンナブルナ南峰を採用しておく。最後の一つは云うまでもなく、先に書いたダウラシリである。最初この名を聞いた時には、ダウラガリの誤まりであろう位に考えていた。ところが、何度聞き直してもギリではなくシリである。意味はと聞くと、意味はないと答える。どうもやはりこの山の名前らしいが、我々にはなじみがなく使う気になれなかった。しかし、これから後のキャラバン中に、機会ある毎に村人達に尋ねた結果、やはりこの山の名に間違いなことがわかってきた。モディ・コーラ上流部では、この名が正しいようである。

さて、そのチョータラから急な坂道を下り、吊橋を渡ると今夜の泊り場ピレタティに着く。

九月十一日、朝食の時カルマに会った。彼は一日遅れてポカラを発ち、現地米などをかついだポーター六人をひき連れて、一日ですぐその崖の上までとばし、今朝早くここまでやってきたということだ。その駿足には驚く他はな

い。これで全員揃ったことになる。ガンドルックへの道は、はじめ暫らくはモデイ・コーラ沿いに行き、途中から河を離れて登りにかかり、八百メートル位だからと登り道が続いている。高度が増すにつれ対岸の村が見えてくる。急な山の斜面は丹念に耕やされており、段々畑がはるか山の上まで続いている。「耕して天に至る」という表現も決して誇張ではない。所々に十軒、二十軒と家が斜面にへばりついている。川ははるか下になり、廊下状になっている。このあたりでは、すぐ目の前に見えている向い側の村に用足しに行くのは、泊りがけでということになりそうである。

ガンドルックの人達は、とっつきがよくないと聞いていたが、我々が着くと、大勢つめかけ、まるで見せ物である。隊員達はてんでに、ある者は本を片手に妖しいヒンディ語やネパール語で子供達の相手になっている。マレーで日本軍と戦かったという老人が現われ、日本語で何か問いかけてくる。このあたりは、あの勇敢なグルカ兵の故郷である。

夕暮れ時、南峰が真上に雲の間から顔を出した。この人達もダウラシリと呼んでいる。マチャプチャリも頭だけ前山の上に出した。内院の氷河も見える。多分東氷河であろう。山はガンガブルナか。こう近くまで来るとさすがに凄いい。隊員一同厳肅な気持になる。高度差五千メートル余り。南面はまさに絶壁である。北東面がゆるければよいが、と折るような気になる。

翌朝は数名のポーターを交代させたので、出発が遅れて予定通り進まず、キムロン・コーラで泊ることになった。

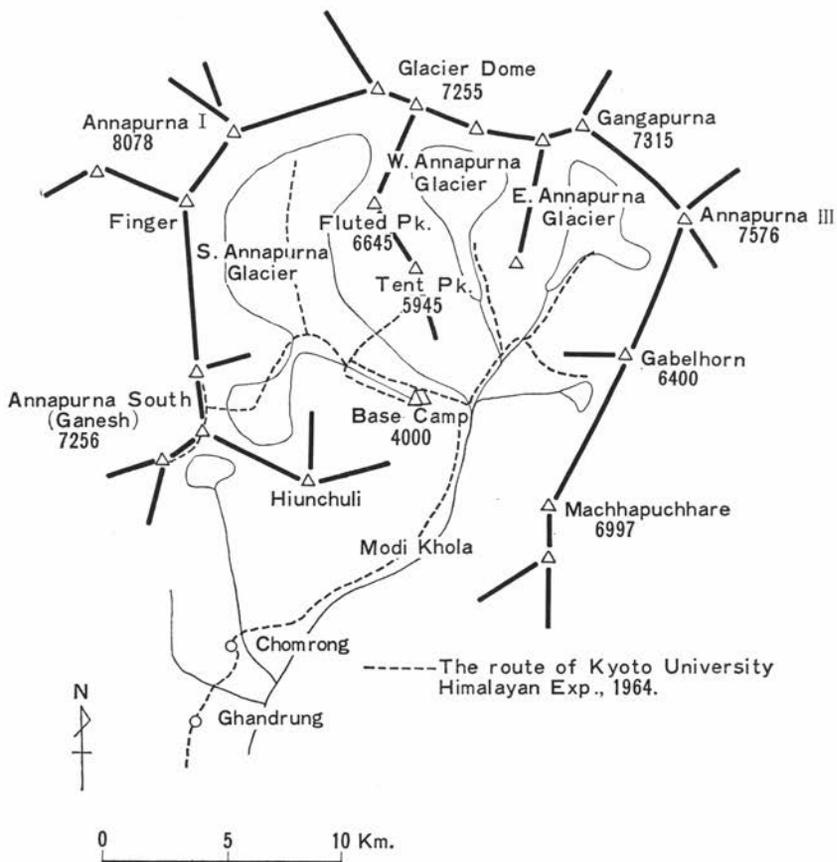
十三日、その遅れをとりもどすべく早く出て、三時間ばかりでこの谷最奥の村、チョムロンに着いた。ここでも成績の悪い二、三のポーターをとり代えるために、村長らしい人の家に話しに行く。家の軒下にある濡れ縁のような土間に、むしろを敷いて坐りこみ話をする。ここでも次第に見物人の数が増してくる。ポーターは集まった。但し村人の言い分はこうである。ここから上流部は聖域であり、神々の住いである。したがって階級の低い人間や女は立入り

厳禁である。もし入るようなことがあれば神様の怒りに触れ、きつと面倒なことがもち上るであろう。また、聖域では殺生はつしまねばならないから、鶏もたくさん売るわけにはゆかない。今夜の分だけでがまんしろ。その上、聖域に入るにはそれに見合うだけのお賽銭をあげる、などという。この際なるべく村人を刺激せず、穩便に済ませた方がよからうということになり、できるだけ彼等の言う通りにすることにした。まずロー・カーストの連中と女を今日一日で解雇して、代りをこの村から雇うことにした。また、鶏は二羽で諦らめ、明日からは食わないことにした。お賽銭の方は、五十数名のポーターを含め、一人につき何ルピーかを支払えということであったが、貧乏な我が隊としては、なるべく払わずに済ませたいと思い、その点については帰路改めて話をしよう、ということでもなんとか通り過ぎた。

ここから上は、もう人里はない。しかし、山羊などの放牧のための道が、かすかについている。けれども林の中の下草のある所や草原に入ると、トレースを見つるのは困難である。その上このあたりから連日蛭になやまされることになる。下草の裏側や濡れた岩の上で、我々の通るのを待ち構えており、足が触れるや否や吸いついてくる。そして足首の処から靴下の中に潜りこみ血を吸う。目の粗い靴下をはいているとときめんである。しかも一度吸われると血はなかなか固まらないため、そのにおいをかぎつけてくるのか、たくさんの蛭がそこに集中してくる。そつと靴下をめくると、一カ所に十匹位たかっていることがあり、ぞつとする。素足のポーター達は、気の毒に足を血まみれにして歩いている。それでも彼等は馴れたもので、先を斜めに切った長目の竹を持って歩き、蛭が吸いつくと荷物をかっついて立ったまま、器用にそのへらでこそぎ落している。終り頃には少し馴れたが、この蛭の攻撃はベースキャンプまで続いた。特に夜寝る時は脅威であった。

九月十四日、昨夜の泊り場クルティを出て、モディ・コーラ沿いにかなり悪い道を歩く。一日中降ったり止んだり、天気は一向によくならない。右岸から流れこむ支流をいくつか渡渉するが、はじめから靴がずぶ濡れであるから

Sketch Map of the Southwestern Part of Annapurna Himal



全く気にならない。ポーター達は黙々と歩いている。彼等は汚ない毛布のようなものを一枚もっているだけで、それが時としてはレインコートになったり、敷物になったり、夜具になったりする。便利なものである。

雨の中を泊り場ヒンコーに着く。ここは巨大な岩小屋で雨はかからない。その中に隊員用のテントを張る。水は横にあるし、泊り場としては快適な場所である。しかし、もう高度は三千メートルを少し越えたので、気温はかなり低い。その上雨に濡れているので、寒いのと腹がへったのとで、裸同様のポーター達は怒りだし、もうこれ以上上へは行かないと云い出した。ナイケ(ポーター頭)がカンカンになってどなっている。サーダーのパスンも同じようにどなっている。おどしたり、なだめたり、すかしたり、いろいろの手を使ってポーターに応待している。そのうちに夕食の用意ができて、暫らく休戦。食事の時よく聞くと、チョムロンで雇ったポーター共が、ここから上では流れの急な所を渡渉しなければならぬとか、道が非常に悪いとか云って、ポカラから来た連中をそそのかしているらしい。こういう問題は全てサーダーに任せてあるから、我々は部外者のようなものである。小柄でおとなしそうなパスンも、ポーターの前ではうんと強気で堂々としており、さすが名サーダーの名に恥じない。結局この問題は、いやな奴は帰れ、ということになり、実際ここで何人か解雇されたが、食後ナイケがテントに入ってきて、上まで行きますよということのでけりがついた。

九月十五日、キャラバン最後の日、一日中雨。泊り場が狭いため出発が遅れ、出たのは九時であった。泊り場からすぐ上の所で、かなり流れのきつい支流を渡渉しなければならない。上の方には数本の滝がかかっている。フィック・ス・ロープを張って確保した。モディ・コーラの本流は黄色の泥水である。右岸沿いに小さい張り出しを幾つか越え高度をかせぐ。相かわらず蛭が多い。一時頃東氷河と南氷河との合流点に出る。もう完全に内院に入り込んでいる。南氷河の方に道をとる。右岸を少し登ると橋があり、それを渡ってモレーンを少し登ると、小さい岩小屋と羊飼いの小屋とがある。マチャプチャリに登った英国隊のベースキャンプは、このあたりであろう。ここもよい所であるが、

我々はなるべく高い所まで行く方がよいと考えて、ここから二百メートル程上にベースを作った。標高四千メートルである。ここなら少し下れば薪も得られるし、水は横を流れているし、眺めもよいし、ベースとしてはまず申し分ない所である。早速小さいテントを一つ張って、ポーターに賃金を支払う。前渡し金の額が人によって違うので、計算に手間取り、支払いが全部済んだのは四時半頃であった。その頃には他のテントも張り終り、どうやらベースキャンプらしい形が整っていた。大テントに入り祝盃をあげる。外は雨。折角のベース入りなのに、あまり氣勢が上らない。今朝ポーターを十一人解雇したので、荷物を全部運び切れず、パサンがその番をしてヒンコーに残っている。明日はその分を荷上げしなければならぬ。

九月十六日、雨。ベースで初めて迎える朝。朝寝坊をする。七時半頃ベッド・ティーが届く。今日は残った荷を上げるだけである。ポーター十人をつれて、シェルパが下っていった。隊員は全員休息をとることにする。ガスで何も見えない。夕方、パサン達が上がってきた。これで全員および全荷物が集まったことになる。

## 登 高 開 始

九月十七日、「サーブ、お茶」で目をさましテントのファスナーを開くと、見事な快晴である。西には南峰がデンと腰を据え、南にはヒウンチュリが頭上に迫り、東にはモディ・コーラをはさんで、世界で一番美しい山と言われるマチャブチャリが聳え、北にはモレーンの上にアンナプルナの主峰が白く輝やいている。まさしく聖域である。南峰は氷河をつけ、急傾斜の氷壁に守られて少々手ごわそうである。ヒウンチュリに繋がる稜線は、こちら側から見ても下半分には美しいヒダの入った絶壁で、とうてい手がつけられない。やはり氷河をつめるのがよいだろう。飽かず眺めるうちにガスがかかってくる。

隊員達は整備に忙しい。ザイルを巻き直す者、前進キャンプ用の荷物の仕分けをする者、テントを張る者等々。気

象観測用の器具もセットされた。テントは合計七張になった。食料係の上田は、朝から近くで放牧している羊を買いに行き、モリモリ肉のついた羊を引つ張って帰ってきた。しばらく肉に飢えていたので全員歓声をあげる。明日第一便のマイルランナーを走らせるので、たくさん手紙を書いた。明日から偵察を始める。

十八日、吉野、上田、パサン、ミンマの四人が偵察に出た。ベースキャンプから一時間程上った所で、南峰とヒウンチュリの間にある氷河が、南氷河の本流に落ちこんでいる。ルートはその支流の対岸になるので、どこでそれを横切るかが当面の問題である。この支流が落ちこむ所は高度差百メートル位の露岩で、そこでは支流末端のセラックが絶えず崩壊を続け、大きな音をたてている。最初、その上部のセラック帯を横断しようとしたが、かなり危険である。ガスで先がよく見えないので、その日は引き返し、翌日再び偵察を続けたが、どうも見込みがない。二十日に上尾、吉野、木村、ミンマの四人が別のルートを偵察した結果、ベースキャンプのある側谷と本流とを区切るリッジから一度本流に下り、本流のモレーン上を一時間程上って、支流左岸の草つき尾根にルートを取ることに決定しケルンを積んだ。この草つきを五百メートル程登った所がC Iの予定地である。例の落ち口の所ではセラックが数分おきに壊れ、ドーンと谷中にこだまを響かせて、氷塊が崩れ落ちている。

翌二十一日にはほとんど全員でポッカを開始し、草つきから少し左に外れたモレーン上にC Iを建設した。ここは標高四六〇〇メートル、BCが見渡せる所で、前には支流のアイスフォールがあり、セラックが大蛇の鱗のように続いている。すぐ横には美しい水が流れている。よい所だ。ここに泊る吉野と木村を残し他はBCに下った。

ところがその帰り道のことである。草つき尾根から南氷河に下りた所にデブリがあるが、それを下り気味にトラバースして中程まで来た時、左の方で雷の鳴るような音が聞えた。右の方では例の落ち口でセラックの崩壊の音がしょっちゅう聞えているが、左の方から聞えるのは初めてである。それにしても音が長く続くなと思っていると、先に渡り切って休んでいたミンマが、突然鋭い口笛を吹いた。振り返ると、津波のような氷の流れが、すぐそこまで押し寄

せてきているではないか。あわてた。急な草つきの下降で痛めた足も何のその、走った、走った、何も考えずに。かなり走ってもういいだろうと振り返ると、前より近くにほんの二、三メートルの所から氷がおおいかぶさってくるではないか。これはいけない。走れ、走れとばかりに闇雲に走った。上田が前に見えた。「島田はどうした」「大丈夫です」との答に正直助かったと思った。安全地帯まで逃げのび、振り返ったがまだ雪崩は動いている。粘性の大きい流体のようだ。止まるのを見届けてホツとした。咽喉がかわいて、うまくものが云えない。一休みしてシェルパ達の見物席に行き、ニコニコした顔に迎えられた。

よく見ると、もう一つ上の谷からも同時に雪崩が出ている。かなり大規模のものだ。我々を襲ったのは、草つき尾根の向って右側の谷、先刻までは水がチヨロチヨロと流れていただけの谷から出ており、デブリが草つきに沿って右に折れ、扇状に拡がっている。この地点については、往路に少し懸念したが、デブリが真黒でかなり古く思えたので、まず大丈夫と考えていた。仰ぎ見ると大きな氷塊がスラブの上に乗っており、少々の危険は感じたが、落ちてくるまでに壊れてしまいうだるう位に思っていた。結局上部の地形判断が甘かったわけで、実はこの小さい谷は懸垂氷河の下部に漏斗状に開いており、氷河の崩壊した氷をかき集めて流す、樋の役目をしていることが後にわかった。

先を歩いていた上田は、ほぼ横断し終る頃に雪崩に気付き、樋口と島田が必死に走るのを見守っていた。やきもきしながら両手で目を覆ったり、開いたり、自分も逃げたり、また目を覆ったり……。 「あの元氣な島田もこれで終りか、この遠征もこれで終りか」と思ったという。BCに帰ってから雪崩の話でもちきりであった。夕食の時ミンマに「我々は死んだと思ったか？」と聞くと「イエス」と答えられてしまった。これからは、よほど気をつけなければならぬ。

翌日測量したところによると、このデブリは約三万平方メートルもあり、平均の厚みを三メートルとすると、約九万立方メートルもの氷が動いたことになる。平均勾配は十五度であった。

二十二、二十三の両日、吉野、木村はC Iから上部の偵察にかけた。C Iから草つき尾根をつめて左側へ氷河に出で、オニギリ岩の下部（五三〇メートル）まで達した。途中はデブリ、クレバスが多く、あまり快適なルートではない。下ではC Iへのボッカが続く。

続く二日間BCでは雨。C Iでは雪となり新雪雪崩の音が響く。全員沈黙。

九月二十六日、C Iにボッカのため例のデブリの所まで行くと、更に新しいデブリがあった。規模は前の三分の一位である。おかげで、デブリの移動速度を測るために立てておいた目印の旗が、流されてしまった。C Iからは上尾、島田、パサンが偵察に出てC IIの位置を三角岩の下に決定した。翌日C Iへのボッカの途中、草つき尾根で休憩中、右岸のゴルジュ（先日の雪崩が通った谷）に雪崩が起った。我々が襲われた雪崩の上部での有様を、十分観察することができた。この日も我々の行動がもう三十分も遅ければ、まともにやられていたかもしれない。上では五二〇メートルの雪原上にC IIが建設され、上尾、島田、パサンの三人が泊った。

九月二十八日、吉野、木村、ミンマ、カルマと共にC IIに行ってみる。C IIからは上尾、島田、パサンの三人が上部の偵察に出ていった。翌日もボッカと偵察が続いた。天候は朝からの高曇りがだんだんガスに変わり、小雪がちらつきだした。次の日もボッカと偵察を続けたが、なかなかよいキャンプ地が見つからない。上尾が連日働らき過ぎたので、交代に樋口がC IIに上った。

十月一日、樋口、吉野、ミンマの三人でC IIから偵察に出る。今までC IIから直接オニギリ岩の上部に出るべく偵察を重ねていたが、思うように捗らないので、今度は下を通るルートを探しに行く。初めは勾配のゆるい雪面であるが、オニギリ岩の下を通過した所にある細長いデブリを過ぎる頃から、右に折れて急な登りにかかる。左岸は一面のクレバス地帯である。ガタガタした細いリッジを登り切り、二本並んで入っているクレバスを避けて、ジクザクに登る。セラック尾根の下部を通り過ぎ、ククリ尾根下部の雪原に出る。この辺はデブリの巣である。ククリ尾根と南峰

の東稜（ヒウンチユリに繋がる稜線）との間の氷河は、この辺から急に傾斜を増しつつ中央峰に突き上げているが、その表面は上から下まで全部デブリで覆われている。ククリ尾根の右側の、セラック尾根との間の沢も、セラック尾根から出たデブリで覆われている。空は快晴である。

危険地帯を短時間で通過するために、予め休んでおいて、一気にデブリを通りぬけククリ尾根下部に取付く。この間標高差二百メートル位であるが、絶えず雪崩に気をつけながら急いで登らねばならず、かなり苦痛である。ククリ尾根の傾斜は思ったより急で、上に行く程やせてくる。六〇〇メートルまで登った。あと百メートル位でセラック尾根とのジャンクションである。しかし、ここから上はきわめて条件が悪く、その上時間も遅くなったので引き返すことにする。

翌日再び偵察に行く。デブリの巣を通過する際、大雪崩に会いセラック尾根に逃げた。どうも物騒である。これならなるべく最短距離を通って、セラック尾根に取付く方がよさそうである。雪崩が済んでも直径数メートルもある落石が続いている。昼食をとり、意気沮喪して下りにかかる。デブリ地帯を通り過ぎ一息ついて休んでいると、上の方でボンという大きい音がした。見上げると稜線の近くで雪煙が上り、それが強烈な勢いで駆け下りてくる。丁度入道雲がもくもくと上るのを上下逆にし、スピードをはるかに早めたような具合である。千載一遇の好機とばかり8ミリカメラを取出す。同行の吉野もカメラを出している。「逃げる時は云ってくれ」と頼んでおいて、カメラを回わす。雪煙雪崩であるからいたしたことはあるまい。できるだけ近くにくるまで映画に納めてやろうと思って撮り続けたが、すぐに「もう逃げなあきませんわ」と声がかかると音が離れて驚いた。雪煙はすぐ近くまできているではないか。またもや逃げた。三人共必死である。ほんの二〇メートル程走った頃、もう雪煙に追いつかれた。爆風を伴った猛烈な地吹雪である。吉野がバランスを失なうてうっ伏せに倒れ、またあわてて駆け出す一幕もあり、三人三様大いに逃げた。皆一ふるいブルブルと震って、大いに驚いたさまを語りあった。雪崩の本体は我々には

届かなかったので助かった。それにしても大いにキモを冷やし、体を冷やし、頭を冷やした。さすがのミンマもこれには驚いた様子であった。

次の日、危険地帯は朝早く通過する方がよからうということで、デブリ地帯の手前の安全な所にCⅢを作った。そして、できるだけ朝早くそこを通過することによって安全を期した。おかげで、そこでの事故は完全に防ぐことができた。

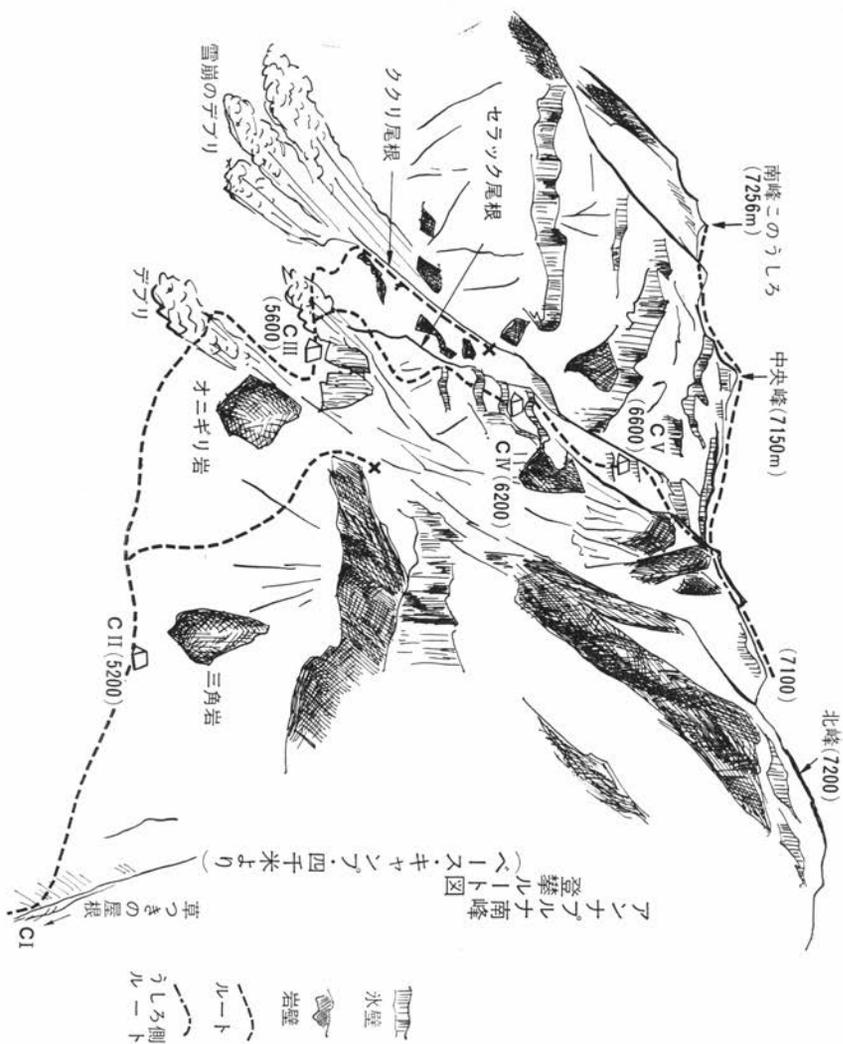
翌四日、上尾、木村、パサンの三人はCⅢからククリ尾根を偵察し、先日の最高到達点から更に上部に達したが、そこから上は非常に悪いことを再確認し、このルートは諦めて次の日セラック尾根に取付き、六二〇〇メートルの地点にCⅣのキャンプサイトを決定した。

十月六日は久しぶりの快晴である。ほんの少し綿を千切ったような雲が浮かんでいる。上尾、木村、カルマの三人は、CⅢから出てセラック尾根のルート工作をやっている。三カ所のフィックスのうち一番困難なのは、十メートル位の氷壁にステップを切りフィックスを張る仕事だ。上からの連絡により、パサンとラクパは繩梯子用の材木を伐りにBCに下った。CⅡへの荷上げはほぼ終り、目下CⅢへの荷上げが行なわれている。樋口とミンマはCⅠで三日程休んで、この日CⅡに登った。少し休み過ぎたようだ。

十月七日、CⅣへの荷上げが行なわれテントが張られた。CⅢへの荷上げも続いている。CⅢはデブリの横で、なかなか快適な所である。見晴らしもよく、アンナブルナの主峰からグレイシャー・ドーム、ガンガブルナ、三峰、四峰、二峰、マチャプチャリと美しい姿がまともに眺められる。

翌八日、CⅣのすぐ上の氷壁に、島田と上田によってルート工作が開始された。ここはセラック尾根の段々の一つで、低い所で十メートル、高い所で三十メートル位の氷壁になっている。太いツララが壁一面に、スタレのように垂れ下った所である。吊り上げを繰り返して登り切り、一番高度差の少ない左寄りの方に、丸二日かかってルートが作

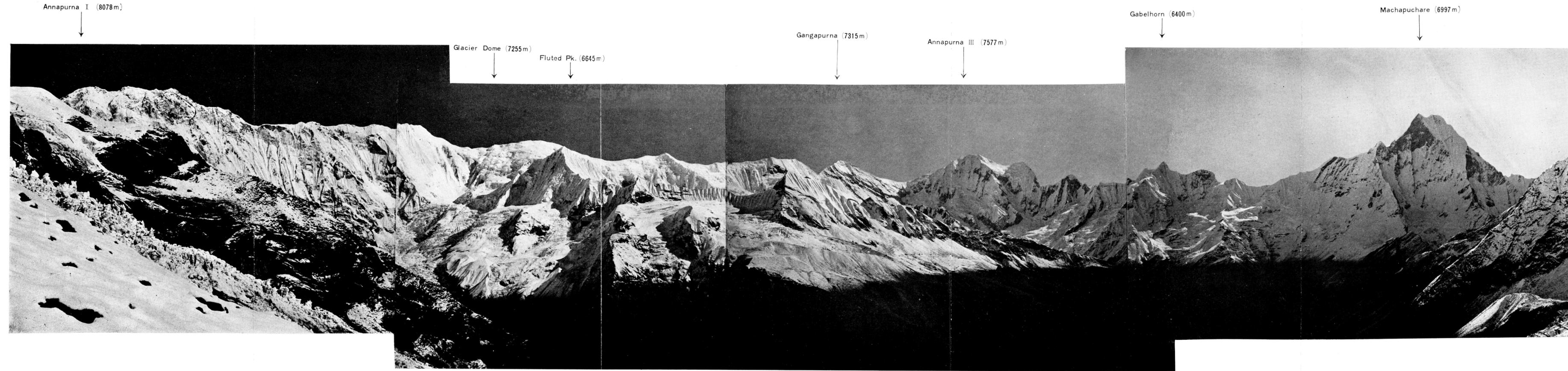
アンナブルナ南峰登頂



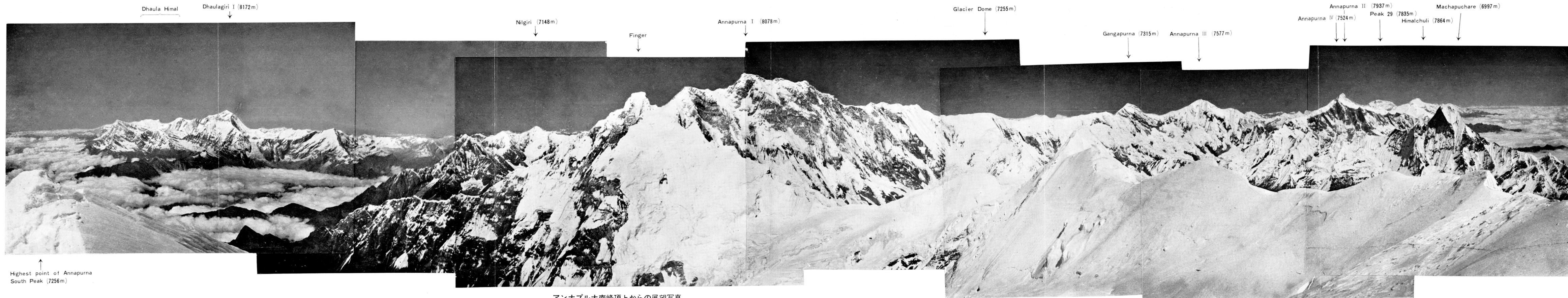
られた。

十月九日、C IVへの荷上げを済ませてC IIIに帰ってくると、何となく様子がおかしい。よく見るとテントの両側がデブリに覆われている。懸念していたセラックがとうとう崩壊したらしい。幸いなことにC IIIそのものはやられていない。実は昨日夕食の時にセラックの基部が崩壊して雪崩が起り、ミンマの警報で吉野と三人テントから逃げだしたのだが、我々の地形判断によると、もっと大規模な崩壊が起っても大丈夫という結論に達していたのである。C IIIは少し高みに張ってあったので、デブリはこれを避けて両側に分かれている。最も近いものは、テントから三メートル位の所にブロックが転がっており、北側には直径十数メートルの巨大なブロックが滑ってきている。テントの上側にある幅五メートル位のクレバスは、雪崩の通り道だけは完全に埋まっている。デブリは直径数センチの水をザラメ雪でとじこめた、丁度ツプアンのようなブロック（直径数十センチ、数メートル）と、青氷そのもののブロック（一メートル以下）と、ザラメ雪とから成り、不気味な様相を呈している。巨大なブロックの通った跡は、深く鋭くえぐられ樋状になっている。このブロックがクレバスを超える時、クレバスの上の端の雪を押しきたらしく、ブロックの前面には三角に新雪が盛り上っており、よく見るとその中にツララのついた小さいブロックが含まれている。それにしても我々の地形判断はきわめて（ギリギリ）正しく、予想通り「まず大丈夫」であったわけである。我々はこの雪崩が留守中に起ったことを感謝した。もしテントに居る時、しかも夜中に起っていたら、どちらに逃げるか迷ったあげく、雪崩の中心に向かって逃げたかもしれないからである。さて今夜はもう崩壊は起らないであろうし、仮に起ったとしても、先のデブリが邪魔をしてテントまで届かないであろう。とまたまた楽観的なことを云いながら寝てしまった。

十一日、晴時々曇、夜中三時にセラック尾根の右側の懸垂氷河で大崩壊があり、C IIIに居る全員とび起きた。テントから首を出して見たが、はるかに遠い所で起った崩壊であった。北斗七星がグレイシャー・ドームの上に低く横たわっている。その頃から風が強くなり、テントの換気孔からしきりに雪が舞い込んでくる。夜中に起きたので寝坊を



モディ・コーラ源流の山々：第Iキャンプと第IIキャンプの間（高度約4900m）からの展望  
Panoramic View of Annapurna Himal seen from the midway (ca.4900m) between Camps I and  
II of Annapurna South Peak.  
(By S. Uyeo)



Highest point of Annapurna  
South Peak (7256m)

アンナプルナ南峰頂上からの展望写真

A Panorama taken from the Summit of Annapurna South Peak (Ganesh or Moditse, 7256m). (By S. Uyeo)

North Peak of Annapurna  
South Peak (C. 7200m)

Central Peak of Annapurna  
South Peak (C. 7100m)

し、午前七時の交信は逃がしてしまった。九時の交信によれば、上尾、吉野、木村、カルマ、ミンマの五人はC IVから出て上部を偵察している。BCから運んだ材木を使って、昨日C IVの氷壁に縄梯子がかかったが、それでも五人通過するのに一時間以上かかったということだ。風が強いので、突風に気をつけるように注意する。上尾は高所帽を飛ばされたようだ。六六〇メートルの所にC Vが決定された。島田はスダレ氷壁のルート工作に頑張り過ぎて持病の痔をだし、昨日、今日とC IVで沈澱している。大分重症らしい。明日は見にいてみよう。この日、C IIIは雪崩による睡眠不足を防ぐために、セラック尾根末端のテーブル状セラックの上に移転した。前より住心地は悪いが致し方ない。

十月十二日、快晴。パサンとノルブを役者に仕立てて映画を撮りながらC IVに向う。急斜面にかかるフィックス・ロープを頼りに高度をかせぐ。C IVに着くと島田がごそごそと這い出してくる。「体の具合はどうだ」と聞くと「それがどうも」という返事である。氷壁のルート工作に張り切り過ぎたせいだろう。今日は少しでしたが、昨日までは寝返りをするのも苦痛だったとか。頂上の目の前まで来ていながら、痔なんぞ出るとは何とということか。折角秘かに期待していた全員登頂も、単なる夢になってしまうか。ちょっと残念であるが今更仕方がない。早く回復するよう祈るだけだ。

パサンとノルブは昼食を済ませ、明日の仕事の打合せをするとC IIIに帰っていった。振り返ると見馴れた山々の向うに、ヒマルチュリが顔を出している。南側のヒウンチュリのコルははるか下になり、その向うに大雲海が見える。

隊員四人とミンマ、カルマは、昨日決定したキャンプサイトにC Vを作りに行っている。夕方、氷壁の上から盛んに雪が落ちてくるので出てみると、上尾等がC Vを作って下りてくるどころだった。縄梯子を使って次々C IVに帰ってくる。今夜のC IVの泊りは五人である。C Vでは吉野と木村で明るいうちに、かなり上部のルート工作ができてい。山に入ってからの天気をグラフで表わし、その周期性から判断すると、明日は絶好の天気になるはずである。い

よいよアタックだ。

## ア タ ッ ク

十月十三日、目がさめると予想通り絶好のアタック日和である。吉野、木村、上田の三人の第一次登頂隊は、六時にC Vを出発した。ここで少し吉野の手記を借用しよう。

「十月十三日、快晴。起床三時半、六時出発。最高のアタック日和だ。テントを出るとすぐに氷の急斜面で、前日取付けたフィックス・ロープ伝いに木村、上田、私（吉野）の順にアンザイレンして登る。休む暇もなく青い氷の急斜面。下をのぞくと、一気にククリ尾根左手の大雪崩のルートに落ちこんでいて、なんとも気味が悪い。ちょっとした風でもザイルがそよぎ、体のバランスを失ないそう。

九時。初めて休む。上田、木村、私とオーダーを変えて出発。ルートは氷と雪。小さなステップ一つ作るにも時間がかかり、垂直な部分が多い。見上げると前の隊員の足跡がまっすぐ、青空に突きぬけるように上ってゆく。

十一時、二度目の休憩。ゆくては四、五〇メートルの氷壁。なんとかなるうと坐りこんで昼飯を食う。アルファ米に氷を入れておいた袋弁当。おかずも何もないが一番うまかった。煙草一服の後出発。左手に六、七十メートルトラバース。雪庇の下から一面にヒマラヤひだがなぎ落ちている。このルートをアタックすることに決め、私は空身で約六十五度のもろい雪面に取付いた。ひざまで雪。三〇メートル程登って垂直の氷壁に突き当たり、全員その下に集合。再び私がスタート。じゃまなツララをたたき落して氷を削り出す。足元が崩れそうだが頑張る。急に、顔に冷たい風が吹き当たった。遠くにチベットの山々、右前方にアンナプルナ第一峰が見えた。この時が一番嬉しかった。稜線に出たのだ！ 引き上げたあとの二人も「すごい」を連発。十四時、無線で上尾副隊長と交信。

ここから南に見えるピーク目指して出発。十四時四十五分、遂に頂上へ。前の二人が雪面を登り、そのまま虚空に

踏み上っていくような写真を何枚も撮って、ピッケルにネパール国旗、日の丸、我が山岳部の旗を結びつけてから頂上に上った。頂上は広くどこもがってはいないが確かにピークだ。ここから東に延びた稜線がヒウンチュリへと続く。ガネッシュ中央峰と云ったところである。三人思い思いに写真を撮りあい、十五時四十分引き返しにかかった。(以下略)

一方、C IVでは刻々入る無電により自分と上尾が一喜一憂していたが、最後の雪庇を乗り超えて稜線に出たという報が入ると一安心した。というのは、技術的な困難は全て稜線に出るまでにあると見ていたからである。彼等からの通信によれば、稜線に出た所からはどれが最高峰かわからない、という。無理もない。コルから似たような高さのピークを比較せよというのが無理というものだ。ともかく名前が南峰だから南の方へ行けと指示する。

ここでちょっと註釈をつけておかねばならないが、アンナプルナ南峰は明らかに独立峰と見なせるが、その稜線は南北に長く幾つかのピークをもっている。我々は仮にそれ等を南から最南峰、中央峰、マイナーピーク、北峰と名付けたが、近くから見るとどれが最高峰かわからない。出発前にカトマンズでJ・O・M・ロバーツ氏(英国マチャプチャリ隊長)に会って聞いたところによると、最南峰が最高だということである。というようなわけで彼等は南へ向った。稜線へ出ればもう困難はないと思っていたものの、中央峰登頂に成功したとの無電が入った時はやはり感激して、C IVにいる連中は思わず握手を交した。うれしい。とうとうやった。交わすべき酒がここまで上っていないので、やむをえず紅茶か何かで乾盃する。シェルパもうれしそうである。彼等は一時間ばかり頂上において下りにかかった。ところが、それからが大変である。というのは、ルートは主稜線の東側にあるため、三時を過ぎると陽がかげり、雪は再び凍り始め、急斜面の下降は極度に困難となる。一時間毎に無電で交信するが、「今何番目のフィックスの所にいる。全員元気」とか「どこそこにフィックスの工作中。全員元気」とかいう返事である。傾斜がきつクワン・アット・ア・タイムで行動せねばならないので、手間取る。八時頃まで出ていた月もかくれてしまった。彼等も寒い中で

よく頑張っている。五回目の交信の時、もうC Vのすぐ近くまで来ているという知らせをうけ、無電機をつけたまましておく。九時半、「C Vに帰りました」という連絡をうけホッとした。これで初登頂も無事終った。

十月十四日、快晴。昨日の登頂隊と交代して、更に最南峰と北峰に登頂するべく上尾、ミンマ、カルマの三人とC Vに向う。途中二カ所フィックス・ロープが張ってある。上のフィックスを過ぎて急傾斜をあえぎながら登るとC Vに着く。吉野等がテントから出てくる。「おめでとう」「よかった」としばらく喜びを分かちあう。C Vは六六〇メートルの所にあり、尾根の段々の一つの非常に狭いテラスに作られており、頭上からきた急斜面が続いて足下は切れこんでいて、斜面に鳥の巣のようにへばりついたキャンプである。目の前は一気にC IIIのあたりまで落ちこんでいる。尾根の幅も広くはなく、テントのすぐ後には大きなクレパスが口を開けている。テントには上の斜面から、握りこぶし位の雪塊がしょっちゅう落ちてくる。眺めを除けばあまり快適とは云えないようだ。しかし幸いなことに雪崩の危険はない。明日はアタックである。早くシュラフにもぐりこむ。

十月十五日、快晴。三時過ぎ目をさます。隣りのテントの二人のシェルパに炊事を始めさせる。食事を済ませて外に出る。気温は零下十七度、昨夜の最低は零下十九度である。そのわりに寒いとは感じない。風のないせいだろう。東の空が明るくなっている。向い側のヒウンチュリはもうはるか下に見える。南側は雲海である。高所服に身を固め、オーバーボン、オーバーシューズ、アイゼンを着けて出発、五時半。上尾とミンマのパーティーが先に出て、自分とカルマのパーティーがこれに続く。C Vからすぐフィックスである。落ちればダイレクトに谷底である。氷の露出した急斜面をフィックスにつかまりながら登る。このロープは第一次登頂隊が夜中に張ったフィックスに繋がっている。暗い中でよく張ったものだと思えて感心する。今朝はもう上側のピンが抜けて、下のフィックスと一緒にぶら下がっている。急斜面を直登すると、氷の屑のたくさんたまったテラスに出る。一服する。稜線に出る最後のフィックスの所で、上尾が登っているのを8ミリにおさめてサヨナラをする。というのは、ここを登り切れれば主稜線で、彼等は

南峰へ、我々は北峰へというのが今日の計画だからである。このフィックスを使って巨大な雪庇を乗り越え稜に首を出すと、ダウラギリが我々を迎えてくれた。続いてカルマが上ってくる。雪庇の下までは風蔭になっていたため無風に近かったが、稜線に出るとさすがに風が冷たい。しかし飛ばされるような風ではない。第一次登頂隊が立派な道をつけておいてくれたので、今日は非常に早く稜線に出られた。先に稜線に出た上尾パーティーは南の方に大分進んでいる。我々も北峰に向って歩きます。北に向う稜線はあまり広くはなく、東面はほとんど垂直に近い。ところどころにコブがあり、そのコブの所は両側共きわめて急傾斜である。約一時間程歩いて二つ目のコブに着く。マイナーピークである。東側をカルマが越えかけたが「行けぬ」という。交代してのぞくと、なるほど垂直に落ちている。西側の急斜面なら通れそうである。しかし北峰までの道のりは予想に反して長く、少なくともここから三時間はかかりそうである。第一次登頂隊の話では、コルからは南峰へ行くより北峰の方が近いということだったので、一日でなんとかなると思ったし、ビバークもしない方針である。もし北峰まで行けたとしても、下り口のフィックスの所にもどるのは午後五時を過ぎるであろう。そうなると一次隊の二の舞である。残念だが涙をのんでここから引き返すことになる。カルマも残念そうであるが、一昨日のを知っているので無理にとは云わない。決心がつくと気が楽になった。昼寝でもしよう。ここも頂上の一つだ。ゆっくり煙草を喫いながら大パノラマを満喫する。西にはダウラ山群、北はフィンガーとアンナプルナ主峰、これは恐ろしく大きい。東はアンナプルナのⅢ、Ⅳ、Ⅱの順に続いている。マチャプチャリは正面だ。ヒウンチュリは足下、南は南峰の上で十二時半にすでに到着している上尾達が、写真でも撮っているであろう、小さく人影が見える。その向うは雲海である。

十月二十日、全員無事ベースキャンプに集結した。来た時には緑だったこのあたりも、すでに黄色くなり、近くの小川には氷が張り始めている。

帰路のためのポーターがベースキャンプにやってくるまでの一週間を、東アンナプルナ氷河、西アンナプルナ氷

河、南アンナプルナ氷河の偵察小旅行でつぶした。特に東アンナプルナ氷河入り及び南アンナプルナ氷河源頭までの偵察は、我々が初めてであると思われる。また「聖域」の中央に位置するテント・ピーク（五九四五メートル）を、島田、木村がアタックし、一夜のビバークの後に登頂に成功した。

十月三十日、ガンドルックから呼んだポーターと共に山を下った。

## お わ り に

帰りのキャラバンは四日間、十一月三日にポカラに着いた。八日には全員カトマンズ帰着。その後、樋口は十七日にカトマンズを出て、約一ヵ月間インドに滞在し、十二月十九日羽田に帰った。上尾はデリーからパキスタン、アフガニスタンまで足を延ばし、十二月二十三日台北経由で帰国した。吉野と木村は、カトマンズで旅行許可を取り、カルマを連れてポカラからトゥクチェに出て、ダンブッシュェ谷を溯行しフレンチ・コルに達し、再びトゥクチェに帰った後、マヤンディ・コーラに入り、バガール村の奥、ダウラギリの南面を見て、十二月二十三日カトマンズに帰った。その後一月二日より二週間、ガンジャ・ラまで往復してきた。

島田と上田はノルブを連れて、まずランタン谷に入り、次にチリメ・コーラに行き、後にパンサン・ラを越えてブリ・ガンダキに出て、サマ、ラルキヤ・ラよりトンジェに出て、ポカラ経由で一月六日カトマンズに帰った。四人は二月十九日に揃って羽田に着いた。

グレイシャー・ドーム登頂 (一九六四年秋)

島 澄 夫

ここ数年来の我国ヒマラヤ遠征の隆盛ぶりは、折からの海外旅行自由化に拍車をかけられて、まさに「天井知らず」の感がある。私の山仲間たち(千葉県山岳連盟)も、そうしたブームの中にあつて、彼等の夢を遠くヒマラヤの未知の山、未知の谷に求め続けて来た。ネパール、カラコルム、コンロン、そして中央アジアと、登山家としてまた探検家として、未知を求める心の「狼火」は、限りなく燃え広がって行つた。そして、ここ数年の間に彼等の視線は、一つの焦点として「カラコルム」に集中されて行つた。

それは、この地域が登山や探検に、まだまだ数多くの「知られざる宝」を埋蔵しており、バイオニヤーをもって自任する連中にとつて、うつつのドリームランドだったからである。この見果てぬ「夢」の一つの発露として、一九六四年のカラコルム遠征計画が、打ち出された。しかし、現実的な国際問題、政治問題は、この夢をかなえる大きな妨げとなつた。パキスタン政府からの回答を得ぬまま、貴重な日時は矢のように過ぎた。止むなく第一の夢は放棄された。しかし、これだけのことで、彼等の間に燃え広がった遠征の「火の手」を消し去ることは、すでに遅きに失してゐた。急拠、第二の夢の実現にとりかかった。目標は、より可能性のある、ネパール・ヒマラヤにふりむけられ、

パイオニヤの夢を満たしてくれる『未知』が選ばれた。アンナプルナのグレイシャー・ドーム（七二五五メートル）。これが、その『未知』の名前だった。

アンナプルナ、この華麗を誇る神々の座に、大きな足跡を残したのは、一九五〇年のフランス隊だった。それは最初の八〇〇メートル “Premier 8000 m.” として有名な、アンナプルナI峰（八〇七八メートル）の登頂だった。その後一九五三年京大隊の試登の後、一九五五年IV峰（七五二四メートル）がドイツ隊に、更にII峰（七九三七メートル）、III峰（七五七七メートル）が英国隊、インド隊によって、それぞれ征服された。しかしアンナプルナの南面、モディ・コーラの内院は、一九五六年、一九五七年の英国のロバーツ（J.O.M. Roberts）、ノイス（W. Noyce）らによって、踏査された記録——一九五七年マチャプチャリ（六九九八メートル）登頂——を見るのみで、充分な処女性を残していた。

計画の二転三転で、当然のことながら、出発はポスト・モンズーン期に延期せざるを得なかった。そしてネパール政府から、仮許可の電報が舞い込んで来たのは、六月もおしこまれてから、出発の廿日前のことだった。とにかく、まがりなりにも遠征許可がおり、名実ともに『遠征隊』が出来上がった。しかし、前途は更に多難だった。隊長、隊員、ともに若輩であるため、資金的な行詰りは惨憺を極めていた。出発前夜まで、募金のための東奔西走がくりかえされた。今から考えると、無事全員が日本を旅立つことが出来たのが、不思議なくらいである。とにかく、この『奇蹟』は実現し、軌道にのり、そして成果を収めた。

だが何にもまして嬉しいことは、グレイシャー・ドームの登頂成功が、われわれをこの『奇蹟』に導いて下さった関係者各位の、並々なぬ御厚情に対して、いくばくかの謝意のしるしになり得たことである。

六〇年来と云われるポカラの大雨は、想像を絶する凄じさだった。連日襲って来る驟雨は二十メートル先のものも見えなくなる。草原の飛行場は、まるで湖のよう。お蔭で、ボンベイ経由で、荷物と共に一箇月前に出発した先発

隊は、飛行機（バイラワ（ポカラ）の欠航で、二週間以上もバイラワで足止めを食い、カトマンズ經由の後発隊が、ポカラに先行する破目になってしまった。飛行場との睨めっこが毎日続いた。ネパールに来てから、すでに半月。残された仕事といたら、待つことだけだった。しかし九月八日は、革命的な日となった。待望のダコタ3型が、バイラワの雲間から、その旧式な雄姿を見せたのだ。早速バラック建てのホテルの前庭にテント村が出現した。荷物の整理、人夫の召集、食糧の調達、久しぶりに味わう多忙が、われわれを陽気にした。

九月十日、同じアンナプルナのカネツシュを目指す京大隊の後を追って、いよいよポカラ脱出だ。隊員七名、連絡官一名、シエルパ七名、それに三〇キログラムの荷を背負った七十六名のクリー、総勢八十二名のキャラバンが、住みなれたポカラを後にする。

ここで隊の主な編成を紹介しておこう。

隊長 島 澄 夫 三二歳（放射線医学総合研究所）

隊員（会計）石川昌一 三〇歳（小岩中学）

“（食料）佐 瀬 洋 二八歳（経済高校）

“（渉外）竹内正己 二六歳（中大文学部）

“（庶務）有 沢 輝 明 二六歳（千葉市役所）

“（装備）高 橋 善 勝 二六歳（日大工学部）

“（記録）西村満弘 二五歳（東洋高圧）

連絡官 K・K・ダハール 二六歳

サーター アン・ダワ 三四歳

コック テンジン

シエルバ ドル ジェ

” アン・カミ

” ラクパ・ノルブ

” ダ キ ヤ

その他コック見習一名、メイランナー一名、ローカルポーター二名の編成である。

モディ・コーラの路は、河原沿いにゆるやかな起伏を描いて、どこまでも続いている。坦々とした山道は、谷の緑にやわらかく包まれて、雲間に見えがくれするマチャプチャリさえなければ、蓼科の谷沿いでも歩いているようだ。途中汚ならしい茶店で、紅茶を啜ったり、谷川で水浴びなどをして、道草を食う。こうした、のんびりとしたキャラバン気分を楽しめるのも、ヒマラヤならばこそだ。

第一日目の宿泊地は、ナウダラというところで、広い河原沿いに続く田圃の、とある台地の上にテントが張られた。路は、ここから本谷と別れて、山腹を巻きながら、次第に急な登りとなっている。つずら折りの山路を、四時間あまり登りつめると、今度はモディ・コーラ目がけて、一気に下りとなる。降り切ったところがピラタティだ。この谷最大の部落で、商店も並んでいる。青々と繁茂している田畑も、この村の豊かさを象徴しているようだ。

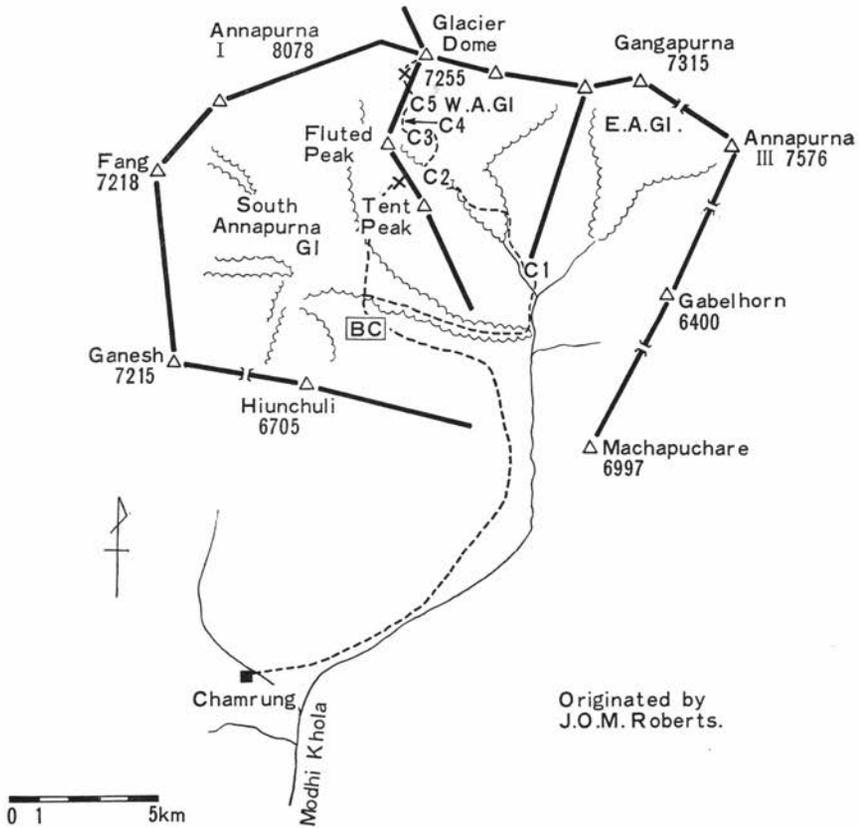
キャラバン三日目。畔路伝いに村を出はされると、再び急な登りとなる。胸つき八丁を越して、やっと峠に出る。途端に、目の前に見事な舗装道路が出現した。平らな石を丹念に敷きつめた、階段状のペイヴメントが、青い絨氈を重ねたような、段々畑の間を縫いながら、山腹の彼方にうねっている。今日の目的地ガンドルングは、この万里の長城のような石段を登りつめたところで、山あいの斜面に、丁度リッジのように突きでている故もあって、素晴らしい眺望が楽しめる。小学校の校庭。と云っても三〇坪たらずの格好の広場なので、校長先生に交渉して、今宵の宿に提供してもらおう。

翌十三日は、久し振りに晴れ間が出た。小学校の屋根越しに、大きな雪の山が驚くほど間近に迫って来た。ヒウンチュリ（六七〇メートル）だ。迷路のような石垣の間を縫って、村を出る。『鋪道』をしばらく登ると、今度は切っ飛ばしたような下りだ。膝が笑い出すころ、やっとキムロン・コーラの谷に降りつく。グルン族の農家が数軒。静かな山村だ。少々早いが昼食にする。昼食となると例によってコックのテンジンは、その場にどっかり大あぐらをかき、やおら石油コンロに火をつけ、飯を炊き始める。その悠々迫らぬ態度に、われわれは唯哑然として待つばかり。飯の出来る間、例によって村人達が見物にやって来た。仲々可愛らしい村娘もいる。早速つかまえて記念撮影。ニコニコ笑いながら、何やらわけのわからぬ言葉で、しきりに話しかけて来る。この辺の女性は男性より社交的だ。近づきのしるしにと、タバコをさししたら、頷を横に振る。これには驚いた。この山奥ではタバコは貴重品だ。シエルバ、クリーの雇用条件にも、タバコの支給が明記されているほどなのに。結局、器用な手つきで、うまそうに吸い始めたが、一応の遠慮を見せたわけだ。カラコルムでは、女性と来ると、われわれをまるで化物か何かのように毛嫌いするし、男どもからはダニのようにものをたかられる。同じ貧しい山奥でも、宗教や生活環境によって、このように違ってくるのかと、今更のように、彼女達の態度に深い感銘を覚えた。

午後になると、再び雨がぱらつき出した。今年のモンスーン明けは、例年より遅いらしい。次第にその出没の数を増すヒルに神経を使いながら、チョムロンに着いた頃には、雨も本降りとなって来た。標高三〇〇〇メートルのこの村は、戸数十軒たらず、モディ・コーラ最後の人里だ。痩せた段々畑に、粟、麦、トウモロコシ、それに豆などを僅かながら作っている。モディの谷の斜面に、しがみつくように生きている寒郷である。

雨宿りにと、一軒のかなり大きな農家に立ち寄る。ぞろぞろ出て来た家の人達と話をしていると——と言っても通じないので、お互いに勝手なことをしゃべるだけだが——頼みもしないのに、お茶をわかつてサービスしてくれた。そのうち連絡官のダハールがやって来て、やっと話が通じ始めた。結局、軒先ながらその家を、一夜の宿に無償で提

### Sketch Map of Glacier Dome



供してくれることになった。こちらから頼みもしないのに、全く親切な話である。お蔭でその晩は、みじめな雨のテントを味わずに済んだわけだ。

翌朝も憂鬱な雨だった。雨具を被って村を出る。ここからはいよいよ無人のジャングル、山ヒルの王国に入るわけだ。案の定、この時ならぬ侵入者に対するヒルの襲撃は、苛烈を極めた。裸足で歩くクリーの足には、血を吸って膨らんだヒルが、鈴なりになっている。昼近くクルドガールというところにつく。大きな羊飼いの小屋がある。午後になって、雨は一そう強くなった。小屋は人夫達で満員の盛況。あぶれたものは、竹で編んだゴザをカマボコ型に建て、急造のねぐらを器用につくっている。憂鬱な夜が過ぎて、憂鬱な朝が来た。今日もズブ濡れのジャングル旅行が始まる。相も変らぬ上下からのヒルの襲撃に、グロッキーになりながら、ヒルコの洞穴にたどりつく。標高三三〇〇メートル、すぐ目の前はもう雪の世界だ。明日はいよいよベース入り。さすがに夜は冷えこむ。しかし、いくら寒くても、ヒルの帝国から脱出出来ることは、この上なく有難かった。

翌十六日も氷雨と濃霧に明けた。クリーの、むきだしの瘦せた足が、深い霧に見えがくれて、如何にも寒そうだ。午後になって、やっと南アンナブルナ氷河の末端に出る。霧のため全く視界が効かない。ベース偵察に先発した石川、竹内、アン・ダワも、位置が確認出来ず、引返して来た。「えい！ ままよ。」地図と磁石をたよりに、闇くもに前進する。霧の中から、先行した京大隊のBCが現われた。立ち寄ったものの、前日来の悪天候で、はっきりとした位置確認が得られない。再び出発。時計と高度計をたよりに、適当な平坦地をBCと定める。BCの位置が登攀成果を大きく左右するというのに、全く、心もとなない話だが、盲目同然ではどうにもならぬ。テントを立て、クリーに賃金を払う。例によって、帰りの賃金問題で騒動が持ち上がる。この辺のところは、どこのクリーも同じだ。払え、払わぬで押問答の末、人夫の一人が、いきなり腰の山刀を抜き放った。しかし、こちらは沈黙の持久戦だ。裸同然のクリー達は、とてもこの寒いベースでは泊れない。明るいうちに下の羊小屋まで降りなければならぬ。逆に足

もとを見られたクリー達は、三々伍々ブツブツ文句を言いながら、引返して行った。

四日も続いた雨は、カラリと晴れ上った。晴れて見て驚いた。アンナプルナI峰（八〇七八メートル）の南壁が、目の前に大きく立ちはだかっている。ヒウンチュリ（六七〇五メートル）もすぐ背後にある。目指すグレイシャー・ドームもアンナプルナの東、フルーテッド・ピーク（六六六七メートル）の肩越しに巨大なドームを覗かせている。南アンナプルナ氷河も、かなり上部に入ってしまったわけだ。西アンナプルナ氷河の入口、ゴルジュ地帯がかなり下方に見える。BC位置を、いささかオーバーランニングさせた言いわけも手伝って、一応南アンナプルナ側からの接近を試みることにする。荷の整理も終了した九月十九日、第一次偵察隊として、高橋、西村、ドルジュの三名が氷河の左岸に向う。まだ雨季が完全に終わらないのか、このところ午後から決ったように天候が崩れ出す。視界の効かぬ偵察で、確実性はなかったが、フルーテッド・ピークとテント・ピークのコル突破に一応の可能性が出たので、一発バクチを打つことにする。

九月二十日、C1を氷河の左岸四七〇〇メートルのモレーン上に立て、翌二十一日C1を出発した第一次偵察隊はコル直下まで前進、五〇〇〇メートルの地点にC2予定地を確認。翌日第二次偵察隊（石川、佐瀬、アン・ダワ）が、C2建設と同時に、C2入りをするわけだ。二十二日、二十三日の両日は、珍らしく雨が降らなかった。その間を利用して、C1強化の荷上げと、第二偵察隊のルート工作が行われた。しかし、翌日は、再び陰鬱な吹雪となった。そしてC2の偵察隊から、それ以上に陰鬱な情報がやって来た。フルーテッド・ピークへの尾根は、ものすごいナイフ・エッジで、固定ロープが千メートル以上も必要なこと。その先のルートは、天候が悪く殆んど予測がつかぬこと。トランシーバーから流れる声は、烈しい風雪でもすれば途切れ勝ちだった。連日の悪天候と隊員の疲労。これ以上の悪条件が続けば、致命的なことになる。冷酷な「撤退命令」が出された。雪まみれになってテンとを撤収する隊員達の士気は、風雪よりも冷たかった。近くにBCを置いている京大隊も、C1から先のルートが雪崩の通路とな

っているため、登攀に困難を極めているようだ。毎日のようにガネツシュから流れ落ちる雪崩は、百雷のような暴れかただった。

続く二十五、二十六日も、相変わらず天候の回復は望めなかった。撤収は二十六日に終了。全員BCに戻って来た。ルートはやはり、西アンナプルナ氷河からの接近以外には、とれそうもない。西氷河入口のゴルジュ突破は、相当の難関だが、一九五七年英国ノイス隊が、すでにここを通過している。休む間もなく、竹内が二名のローカルポーターを連れて、ゴルジュに向う。他の連中は休養だ。午前中、久しぶりに訪れた晴間を利用して、皆洗濯に水浴に大童だ。標高四二〇〇メートル。このBCは、攻撃拠点としては不適當だが、景勝地としては最適だ。モレーンの上には、柔らかな芝地が広がり、その間を縫うようにして、小さなせせらぎが可愛らしい音をたてている。時折聞えて来る羊の遠声が、遠い牧場の夢を誘うようだ。北の空にはアンナプルナI峰が、八〇〇〇メートルの大氷壁を天高くそそり立たせ、東にはフルーテッド・ピークが、純白のヒマラヤ巒を見せている。ふりかえると、聖なる山マチャプチャリが、研ぎすまされた氷の穂先を、鋭く天空に突き刺している。その金属的な氷の冷さには、美しさを通り越して、凄絶な鬼気を感じさせる。芝地のところどころに咲き乱れている秋の野花も、この豪壮な氷の大伽藍に、おののいているようだ。

九月二十八日、有沢、ドルジュエの二名が、ゴルジュに手こづっている。竹内隊の支援に向う。連日の雪で、谷は予想以上に増水している。ゴルジュの通過不能の場合を考えて、第二次偵察隊として、佐瀬、アン・ダワ、ダキヤの三名を、南アンナプルナ氷河左岸に向ける。先日の試登ルートを伝って、旧C1からテント・ピークの南稜をまわり込み、西アンナプルナ氷河に達するルートを確認するためである。他方、ゴルジュの攻略も第一の難関、三〇メートル程のスラブに固定ロープを工作、第二難関である三メートル程の小滝は、山麓から材木を伐り出し、ハシゴをつくって突破。九月三十日、やっと西アンナプルナ氷河に入り込むことに成功した。僅か四〇メートル足らずのゴルジュ

に、五日も費やされたわけだ。ゴルジュの突破と同時に、第一次偵察隊（竹内、有沢）は、西アンナプルナ氷河の分岐点上部、標高四二二〇メートルのモレーン上にC1を建設。一方、テント・ピーク側をまわりこんだ第二次偵察隊（佐瀬）は、二十九日西アンナプルナ氷河に下降、同日氷河右岸にキャンプをする。しかも彼等のキャンプ・サイトは標高四八〇〇メートルで、次の前進キャンプとして適当だった。別に忍術を使ったわけではないが、C1とC2が同時に出来上ったわけだ。

十月一日、久しぶりに太陽が拝めた。隊長は第一次偵察隊と共にC1に入る。その間C2の第二次偵察隊は、氷河上部の偵察、残りのものはBCよりの荷上げだ。BCからゴルジュを越えてC1までは、ポッカ・ルートとして少々ストライドが長いので、ゴルジュ手前に荷物デポ地点をつくり、ピストン輸送する。天候はどうやら、回復の兆が見えたようだ。BCとC1間では、相変らず蟻のような荷上げ作業が続く。その間隊長はC2および、その対岸のロック・ポイント近くまで登って、グレイシャー・ドーム側の氷河の状態を偵察する。フルーテッド・ピーク側からインゼルが三本、更にグレイシャー・ドーム胸壁の氷河中央に向かって大きなインゼル越しに見える氷棚を二つ越し、三つ目の氷棚に乗れば、その雪面はゆるやかな傾斜で、グレイシャー・ドームの肩に続いている。インゼル基部の氷河の状態がすこぶる悪そうだが、しかし何とかやれそうだ。三日間にわたる偵察は、もうわれわれに少しの躊躇も許さなかった。

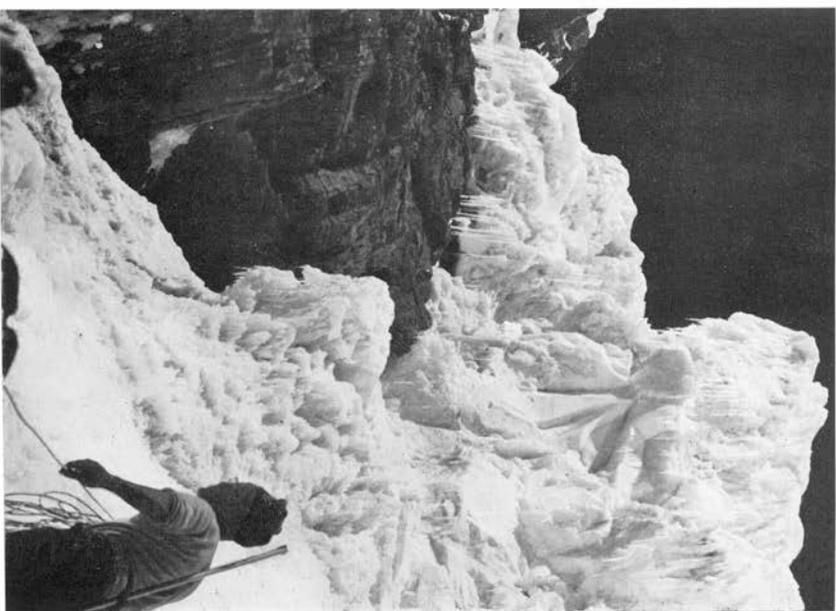
十月四日、久しぶりの快晴が目まぶしかった。第二次偵察隊は、フルーテッド・ピーク東稜の基部をまわりこんで、第二のインゼル基部五四〇〇メートルにC3サイトを確認した。間髪を入れず第一次偵察隊は、C3建設に向う。一方、BCのポッカで腰を痛めた西村が、C1へ前線復帰をして来る。BCの白川、高橋は、残りのシェルパ達を指揮して、相変らず辛い運送業に明け暮れている。インゼル基部の氷は、予想以上に荒れていた。第一次偵察隊の苦闘は、まず、キャンプ直上の、岩のルンゼ突破で開始された。そこを抜けると、気の遠くなるような長い雪の斜面



アンナプルナ I 峰 (8078 m) の南面  
South face of Annapurna I (8078 m) seen from the col of Glacier Dome.



モディ・コーラからのマチャプチャリ  
Machapuchare (6997m) seen from the Modi Khola.



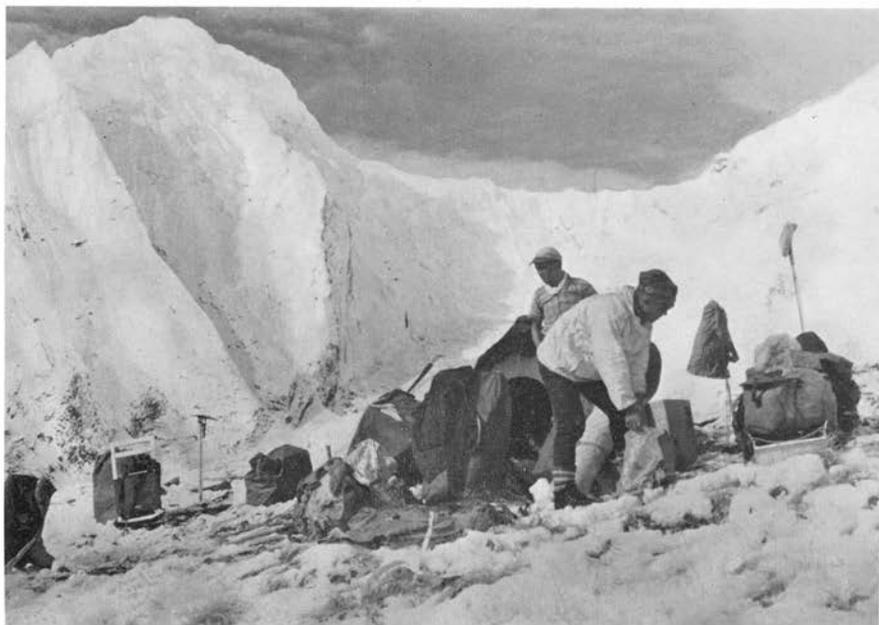
第3キャンプへの途中のアイス・ドーム  
The ice-fall on the route to Camp III, Glacier Dome.



クレイシャー・ドームの頂上にて  
On the summit of Glacier Dome (7255m).

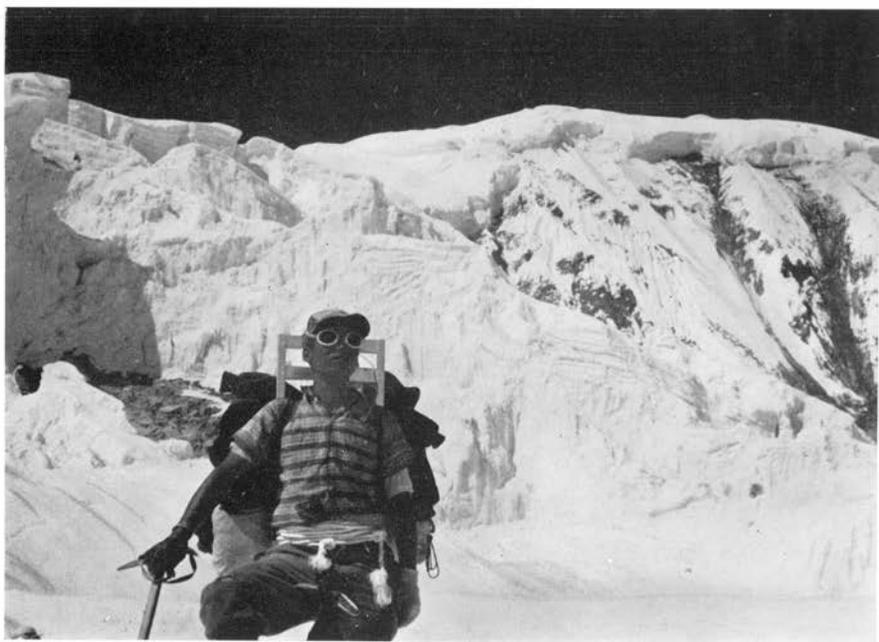


第3キャンプからクレイシャー・ドームのアイス・フォールを  
望む  
The ice-fall of Glacier, Dome seen from Camp III  
(5400m).



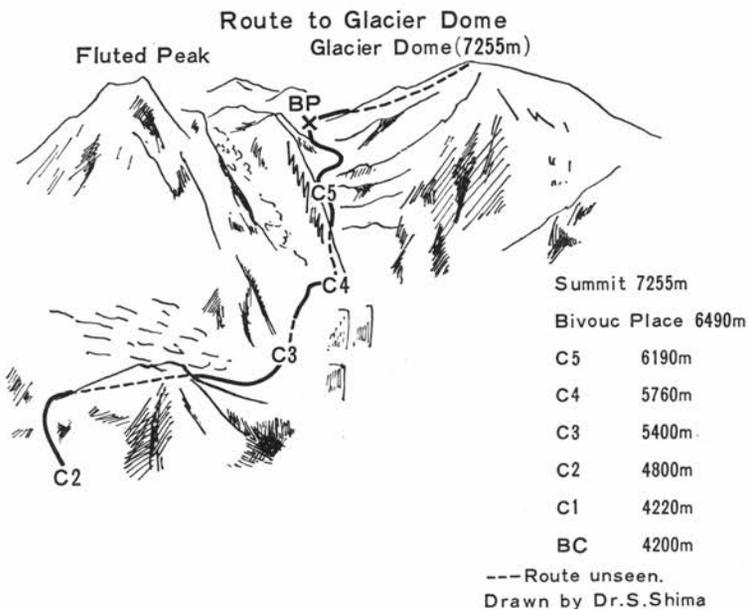
南アンナプルナ氷河上のキャンプ、背後はヒウンチュリ

A camp on the South Annapurna Glacier, with Hiunchuli (6705m) in the background.



第3キャンプ上部の氷壁

Ice walls above Camp III (5400m) calling us to combat. Glacier Dome still lofty.



が、無数のヒドン・クレバスを孕んで、上部のアイスフ  
ォール群に続いている。二十メートル程の氷瀑は、完全  
な垂壁だ。再びピトンが打ち込まれ、縄梯子が垂れ下が  
る。アイスビルディングの上は、不安定なスノウ・ブリ  
ッジがかかっている。一触崩潰の橋なので、アプミを頼  
りにその橋の下をくぐる。頭上約八〇メートルの小さな  
雪のクローワールにも、赤いロープが垂れ下がる。その  
上約五メートルの氷の垂壁にも、ロープが電光型に走っ  
ている。このところ固定ロープのオンパレードだ。C3  
からここまで、高距にして三〇〇メートル足らず。一日  
に一〇〇メートルも稼げれば上乘というところだ。三日  
間のロープウェイ土木工事を終えて、選手交代。今度は  
佐瀬、西村組が工事を請負う。十月九日、C4が巨大な  
氷塔の上に置かれる。標高五七六〇メートル、C4から  
上の氷壁も九十度。二日がかりの工事で、約四十メー  
トルのロープが張られる。このC3とC4のルート、足よ  
りも手が疲れると、ボツカ隊はしきりにこぼす。

十月十一日、第二次偵察隊はルートを求めてC4を出  
発した。キャンプ上部の雪原をつめて、氷のクローワー

ルをトラバースした時だった。突然、頭上の氷柱に火花が散った。氷の亀裂だった。氷崩は落下するにつれ、小さなナダレを呼んで、二人を襲った。危うく小さなクレバスに難を逃れる。だがナダレの最後の氷塊が、佐瀬の背部を襲った。数メートルはじき飛ばされた彼は、もう自力では起き上がれなかった。トランシーバーによる緊急連絡は、一度C4に登ってきた隊長を、遭難現場へと駆りたてた。激痛にうめく佐瀬を、C4へ収容するのは困難をきわめた。彼の苦痛にたまりかねてか、シェルパのダキヤが突然声をあげて泣き始めた。その声に誘われて、何とも言えぬ悲愴感がわれわれの胸をしめつけた。ふりかえると、白い雪の世界が空虚の中に静まりかえっていた。もうこれが見取めかも知れない。しかし、その感傷に溺れてばかりはいられない。一刻も早くC4へ収容せねばならない。やっと連絡のとれたC3の隊員に、医療品の至急荷上げを指令する。そして、しばらくの躊躇の後、遠征の中断も――。胸の中を風が吹き抜けたようだった。しかし、もし骨折でもしていれば、隊の全力を挙げて、下山させなければならぬ。C4上部の大氷壁は、ロープで「荷物」のように吊り降ろした。動かす毎に呻きを上げる「荷物」の運搬は果しくなく辛く、そして長かった。C4で早速鎮痛剤を注射して、彼を裸にする。骨折はなかった。全治二週間程度の負傷だった。「よし、登山続行だ。」再びトランシーバーで、佐瀬の負傷状態と遠征の継続とを伝える。この指令は心の風穴をふさぐには充分だった。グレイシャー・ドームに再び活気が訪れた。

十月十二日、隊長、竹内、有沢の三名は、佐瀬をC3へ収容する一方、ドルジェをC4入りさせる。サーダウのアン・ダウは、この所腹痛を訴え不調なので、ドルジェを攻撃隊員として、西村のパートナーにしたわけだ。翌十三日も、抜けるような青空だった。しかしシェルパに言わせると、この天気も、四、五日というところか。今日は攻撃隊の待つC4へ、竹内、有沢、高橋、それにシェルパ三名がC5建設用資材を背負って出発する。この内、有沢、高橋、アン・ダウ、それにダキヤの四名がC4に留まり、C5建設並びにアタックのサポートをする予定である。石川は、残りのシェルパ、ローカールポーターと共に、C2とC3間の荷上げだ。彼は最初高度影響にかかったので、敢

て後方の補給戦線に置いたのだが、以後黙々として〃縁の下〃に力を入れてくれた。C3に収容された佐瀬は、半身不随だが食欲もあり、元氣を取り戻したようだ。彼の負傷が比較的軽くて済んだことは、不幸中の幸いだが、ここで戦力を一人失うことは、重大な損失だった。五七六〇メートルのC4から七二五メートルの頂上までは、常識としてC5とC6と二つのテントが必要だ。だが、安定した天候の極端に短かいポスト・モンスーン期では、十月中旬までに登山を終えなければならぬ。恐ろしい〃冬〃は、もうすぐそこまで来ている。「もう一週間もすると、恐ろしい大雪がやって来る。Kill day、〃殺戮の日〃と言って、羊など皆殺しになってしまふ。」シエルパのドルジェがそんなことを言つて、隊員達を威かす。できるだけC5を上部に持ち上げて、〃一発勝負〃を試みる以外に手はなかつた。

十月十四日。攻撃隊はC4を出発して、C5建設予定地に向つた。サポート隊はC5建設用の装備、食糧を背負つて、これを追つた。今日中にC5を建設し、同時に明日はアタック、と一刻の猶予も許されない。すべては〃王手詰め〃である。

午後二時過ぎ、約二〇〇メートルの雪壁を登りつめて、〃第二の氷棚〃直下にC5を作つた。標高六一九〇メートル。ピークまであと千メートルとちょっと。C4へと下るサポート隊の激励を受けて、西村、ドルジェが二人用のC5テントにもぐり込んだ。この遠征にかけられた長い歳月と膨大な費用。そして労力。すべてが、この若い二人の〃明日〃に賭けられたわけだ。

そして十月十五日は明けた。午前七時、申し分ない快晴に恵まれて、二人はC5を出発した。雪のクローワールを快適なピッチで突破。三時間足らずで〃第二の氷棚〃に出る。午後一時、グレイシャー・ドームとフルーテッド・ピークとのコルに出て、さらに北側(アンナプルナー峰側)を巻いて、グレイシャー・ドーム稜線上にビバーク・サイトをつくる。標高六四九〇メートル。ツェルトをかぶつても、七〇〇〇メートルの寒さと興奮は、二人を容易に寝せつけ

なかつた。凍てついた無数の星が、明日の快晴を約束してくれていた。

十月十六日。朝日が『白き神々の座』を金色に染めはじめた。テントをはねのけた二人は、アイゼンをつけザイルを結ぶ。午前六時三十分、最後のチャンス『を賭けて二人は出発した。五十度に近い雪の側稜が、ピークに向かって一気に伸びていた。アイゼンが小気味よく氷に喰い込む。二人はただ黙々と登った。期待と不安が、知らず知らずのうちに二人の足を速める。午前十一時四十五分、二人は、一番高い雪の上に出た。

「頂上だ！」

これですべてが終わった。あれほど苦勞したグレイシャー・ドームは、二人の足下にあるのだ。

「午前十一時四十五分。登頂しました。」

トランシーバーから流れる西村隊員の報告は短かかった。しかし、それだけでじゅうぶんだった。この短かい言葉のうちには、すべてがあつた。「われわれは終わったのだ。」それだけで充分満たされていた。

頂上の雪の中に全隊員の名簿と、冬の富士で遭難した二人の山仲間の遺影と遺骨が埋められた。あれほどヒマラヤに憧れていたこの二人は、アンナプルナの処女峰、七二五メートルの頂に安らかに眠つたのだ。

登頂の夜は凄じょうな満月だった。苦闘した氷河の山『グレイシャー・ドームも、いまは、青い月影のなかで、幻のように美しかった。

静かな、美しい、そして満ち足りたヒマラヤの夜だった。

## バルンの山々へ (一九六四年)

山野井武夫

### まえがき

私達立教大学山岳部関係者の間で、戦後もヒマラヤへ行こうという計画は、何度となく樹てられた。戦前ナンダ・コートへ出掛けているだけに、七〇〇メートル以上の未登の山を、初

登でもコブでは駄目だとか、山の問題と財政的な問題で、ヒマラヤ行の話が樹てられてはこわれ、こわれてはたてられてはいるうちに、一九六四年頃にはヒマラヤ病に取りつかれた者も極く限られて来た。一九六三年春、酒井OB会長・小原先輩に私のヒマラヤ行の構想を話し助言を得て、メンバーを集めたのは十月であった。①ネパール東部バルン氷河に五名以内の隊を送る。②費用は四百万円以内、個人負担を四十万円以上とする。③学術の外貨を使用するため大学組織の隊とする。④未踏峯にとらわれず広く歩ける機動性のある隊としたい。⑤時期は一九

六四年プレ・モンスーン期とする。⑥これを機に引続き小パーティを出す、ということが骨子であった。要するに準備も資金も極力隊員が中心でやり、何登でも面白そうな山へ登り山旅を楽しみ、こうして小さな隊を何度か出すうちに、力が出来てから大きな隊を編成するということである。

十二月中旬、大学の協力を得て、ドイツ語研究室を借用し、隊長には福田山岳部長を口説き落とし、十二月末外務省を通じて登山申請・外貨使用の許可申請等を出した。これらは時間との競走で全く奇跡的であった。この間企画については深田久弥氏、渉外にはネパール在住の神原達氏の親身の御世話をいただき、隊の成否に関する二つの段階の援助は本当に有り難かった。小原先輩からは、大いに楽しめ、金だけは充分持って行くように、君達は誰を見ても英語が駄目だから、外地では金だけを頼りとせよ等、妙な激励の言葉ももらい、本格的準備は十二

月末始められた。発注する装備は何もなく、個人装備は今迄山登りに使っていたものを持参し、OB会のテント等を借用し、シェルパ用のものは片桐・山友社・秀山荘・富士スポーツ等の先輩連に「唐突な御願い」をし、装備は一月中旬まであつとう間に集められ、幸先き良いスタートを切った。

バルン氷河の奥にはマカルー(八四七〇メートル)、ジャンクション・ピーク(七五〇二メートル)、ペタンツェ(六七三〇メートル)、チャムラン(七三一九メートル)、バルンツェ(七二二〇メートル)、ピラミッド(六八三七メートル)等、多くの六五〇メートル以上の山を擁しており、少数の私達でもこなせそうな山もあり、見て来るだけでも良いという気持であつた。東部の町ダーランでキャラバンを編成し、ダンクッタ、ヌムを経てバルンに入り、約四〇日間バルン氷河生活を送り、バルンツェ、ペタンツェ登頂後ホングー氷河、アンブ・ラブチャ、イムジャを経てエヴェレスト付近を回り、ナムチエを経てカトマンズへ帰るコースを予定し、道中では鉱物・植物・動物・昆虫等の学術調査も併せて行なう計画であつた。隊のメンバーは、

隊長 福田 宏年 (37歳) 立教大学助教授。

隊員 山野井 武夫 (30歳) 和光産業勤務。

“ 大倉 昌身 (24歳) 東京電気勤務。

“ 岸 野 武 (24歳) 酒井吉之助商店勤務。

“ 遠藤 泰可 (24歳) ヒルトンホテル勤務。

以上五名で、隊長以外は立教大学山岳部OBであり、隊の名称を立教大学ヒマラヤ学術踏査隊とした(年齢は遠征当時)。

### ダーラン・バザールまで

三月七日真夜中、先発の山野井、遠藤はカルカッタのリットン・ホテルに入った。ランタン・リルンの大阪市大とか、川喜田教授等と一緒にホテルだった。毎日新聞のI氏の援助によるところが多く、その他丁度シャルプー隊の平野征人氏らがラッセル・ホテルにいたので、シェルパ、通関、キャラバンの助言を受け、本村領事館員からは通関業者のゴッシュ氏を紹介され、本隊と合流後、三月一六日ハウラー駅から大倉・岸野・遠藤の三名は、約二トンの荷物と共にジョグバニへ向つた。一七日、隊長と私はゼネスト中のカルカッタ、ダムダム空港をあとにカトマンズに飛んだ。カトマンズでは所定の仕事の他に、神原氏の助力によりカーネル・ワイリー(一九五三年英国エヴェレスト隊員)に会い、キャラバンの基地ダーランのグルカ連隊キャンプの宿泊許可をもらい、快適なダーラン生活が約束された。

私達はシェルパを手配する時間がなく、平野氏の勘案等から半分はシャルプーの者を、残りカトマンズで決めるべく考えており、早速ヒマラヤン・ソサエティで人選を行ない、サーダール・ナミ、シェルパ・アン・ダワ(コック)、アンタルケイ、ラクパ・ノルブ、パサン・ノルブ、パサン・カミの六名のシェ

ルパ、ジャンプ、パサン・ニマのキッチンボーイ、他に二名をメール・ランナーとして雇った。サーダーはギャルツェン・ノルブの義兄弟、アン・ダワは阪大と日大隊、アンタルケイはシャルブーへ、パサン・ノルブ、ラクパ・ノルブは一九五九年のヒマルチュリ以来の日本隊の馴染だし、という具合で皆何等かのつながりのある連中で、サーダーを除いては、全員バルンに入ったことがあるとのことだった。最初隊長は大学の授業の関係で、五月中旬不要の荷をまとめてダーランへ下りる予定であったので、帰路の道案内としては特にインテリ・シェルパとして、高校出のパサン・カミを選んだ。リエゾン・オフィサーには、最初東海大学隊に加わったカルキ君という青年が決ったが、翌日ホテルでマラリヤの発作で倒れる椿事があり、交渉した結果大男のビスタ君というが決った。

三月二日にはシェルパを含めた全員が、ダーランのグルカ連隊キャンプに集まり、食糧の買出し、装備の分配、荷作り等が進められた。キャンプ生活は全く快適であったが、食堂では食事のたびに将校に話し掛けられ、特に夕食時等は緊張のために物を味わう余裕もなく英語とマナーが悩みであった。サンダルとアロハシャツでビラトナガールの空港に降り立ったビスタ君は、その姿では厳しい英国隊の食堂には出られず、やりくりして急場をしのいだが、この時から彼と私達との間には越え難いみぞが出来てしまった。必要と思う物は何んでも支給される

と思っているらしく、その鉄面皮は驚歎に価する。装備の支給では根負けがして、ダージンまでシェルパを一名つけて、高所用靴とオーバーズボンを買いにやらせる一幕もあった。最初に一歩ゆずり円満にキャラバンを始めた、そう考えた私達の作戦負けで、この後何回となく彼と私達は衝突したのである。

### 六三名のキャラバン

マラヤン・キャンプの外にポーターを集め、荷物をあたえてキャラバンの第一歩をふみ出したのは、三月二六日であった。登り降り、赤茶けた単調な道であったが、サーダーに代わりアンタルケイが良くやってくれたおかげで、バイナップルを賞味したり、泳いだり、茶店でジャン(地酒)をあさったり、ポーターやシェルパにネパール語を教わったり、楽しみながら徐にマイペースで、コンディションを整えて行くことができた。

四月二日朝、ボータバスの泊り場で、ニマが不調をうったえて来た。チキンボックスらしいので、サーダーにその旨を伝え、彼をメールランナーに仕立ててダーランで静養するようにした。彼の「チキンボックス、シェルパ、チェンジ、ノーグッド」と言う答えは、いささか難解であったが、チキンボックス(水泡瘡)がシェルパにうつったら大変だという意味らしい。ヌム

までつづく尾根に出て初めて、クムバカルナ・ヒマールの山々が見えた。ジャイガンティックなマカルー、名の通り羽を拡げた鳥のようなチャムラン、それにトウツエ(六七三九メートル)、いよいよヒマラヤへ来たんだという感が深くなった。

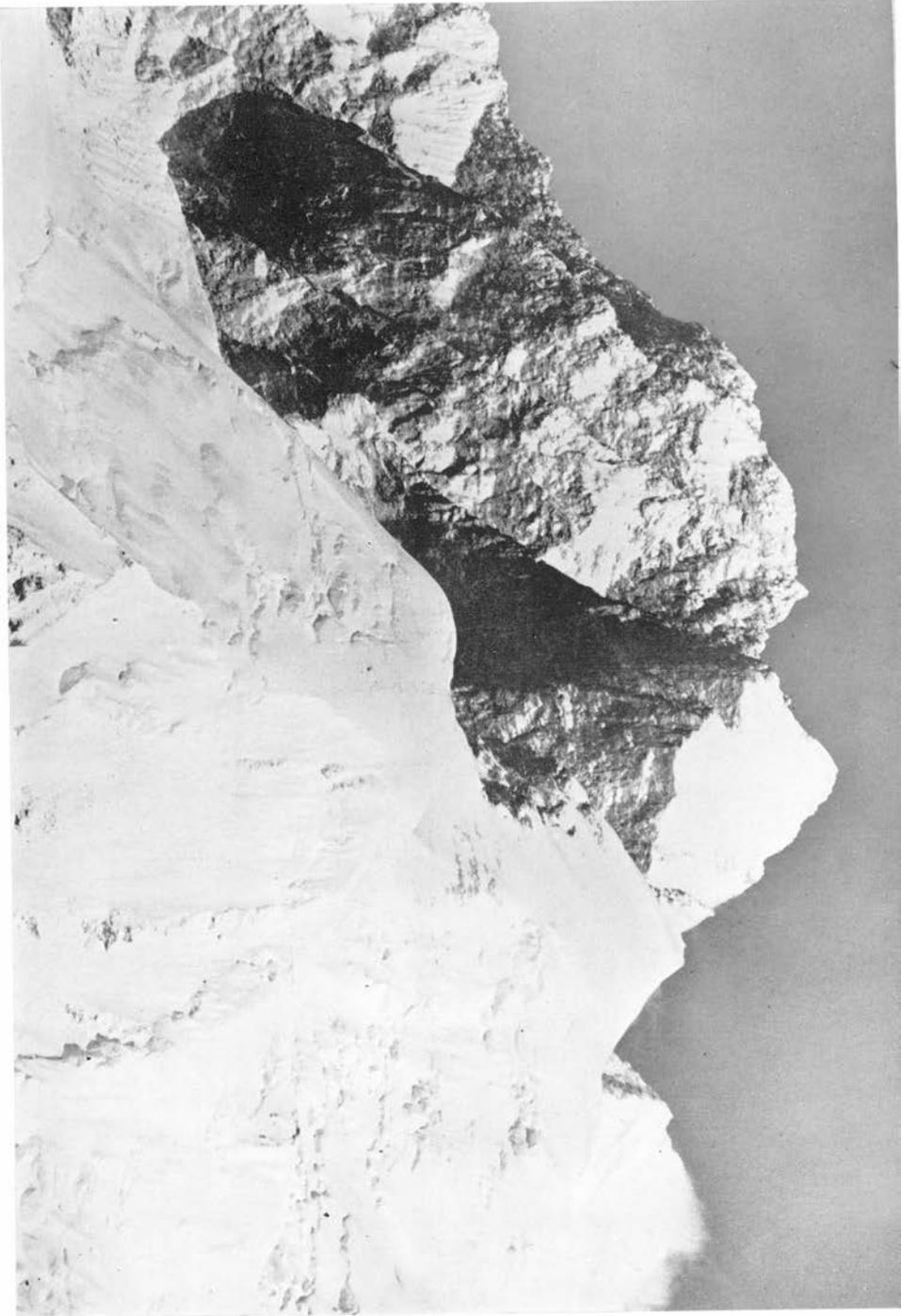
ヌムの突端からアルンを竹の吊橋で横切る時、山野井、岸野と四名のシェルパは、本隊と離れセドアの民家の軒下に泊るはめになってしまった。頭上には蜜蜂の巣があり、夜は家ダニのアタックに顔から身体中はれ上がり、二た目と見られない姿となり、岸野やシェルパは煙草をきらせ、近所の子供を手なずけてキザミ煙草をちよるまかし、手製の両切を作り、「力車タバコ」(安いモーターバス以下のタバコ)と名ずけて吸う一幕もあった。

バルン谷に入る最後の部落セドアで一日休養をとり、ここでポーターを交代した。大勢の村人の中での傑作は、年寄りが雪男の毛をDDTの粉と交換しようとやって来たことだろう。婆さんは、雪男の昼寝している処を見つけ、目覚めて立去った後拾ったものだから、ほん物だと言うのである。四月六日、セドアのポーターをつれて村を後にした。クムバの森、ティキ・ラの雪の峠等を越え、バルン・コーラに入ると川べりに別天地がひろがる。美しいカルカ、黒々した大岩壁の上に見える白い頂や氷河、豊富な燃料で火事かと見まごうキャンプ・ファイヤーがたかれ、本当にヒマラヤの庭という感じのところがつづく。

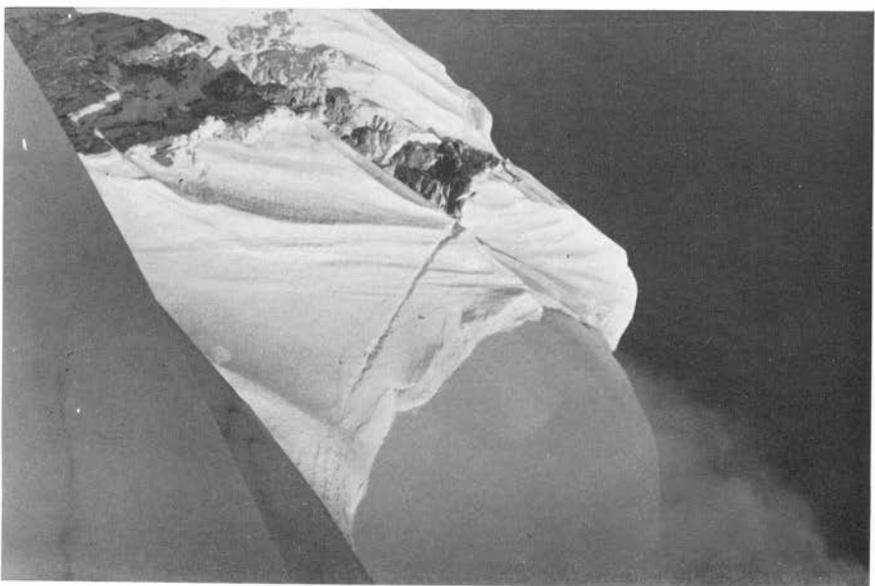
バルン・ポカリの一キロ程上部、高度にして約五一五〇メートルの草地に到着したのは四月一日で、ここをベースキャンプと定めセドアの人夫を帰した。セドア以来のキャラバンで感心したことは、フランス隊の記録にもある通り、セドアの村人の忠実と忍耐強さである。ティキ・ラ越えでは裸足の彼等に追いつかれ、ステップ・カッティングが間に合わない位であった。しかし、BC入りの日はロングコースに加え、寒さと高度のため皆疲労し、私達も祈るような気持で彼等を見守り、ありったけのシート等を集め、急造テントとして収容し、最悪の事態に備えたが、幸い翌日皆元気に下って行った。

### ベースキャンプ

バルン・コーラは地図で見る通りきわめてゆるい傾斜である。理想的な高度にBCを設けては、当地域で目的の山へ登ることが難かしい。高過ぎると思っただが、いっきに五一五〇メートルの地点に入ってしまった。右手にはマカルー、正面にはロイツェ・シャル、左手は無名峯に囲まれ、下方には神秘の水をたたえたバルン湖を控えたこの地は、最高の景色を提供して、一日中山を見ているだけでもあきない。私達はバルン・ホテルとBCを名づけ、石室を造ったり、観測器具をすえつけたり、荷物を整理したり、草の根、偃松(ポーターが一日がかりで下から取ってきた)等でホテルを整備した。食糧についてはセド



イースト・コル附近の無名峰から見たローツェ・セントラル、ローツェ・シヤール及びチヨー・ホル  
Lhoise Central (8400m), Lhoise Shar (8383m) and Cho Polu (6734m) seen from the top  
of an unnamed peak near the East Col.



バルンツェ頂上直下の急峻なピナクル  
The steep pinnacle just below the summit of  
Baruntse.



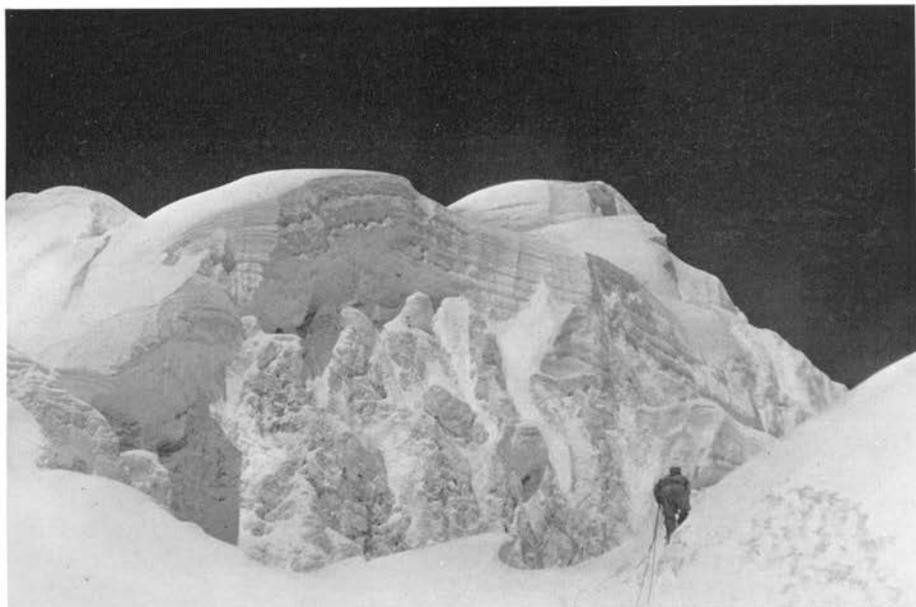
チョー・ホルから見たローツェ・シヤールの上部  
The upper part of Lhoitse Shar seen from Cho  
Poju.



チョー・ホルとのコルから見たジャンクジョン・ピーク  
Junction Peak (7502m) seen from the col between  
Cho Polu and Junction Peak.



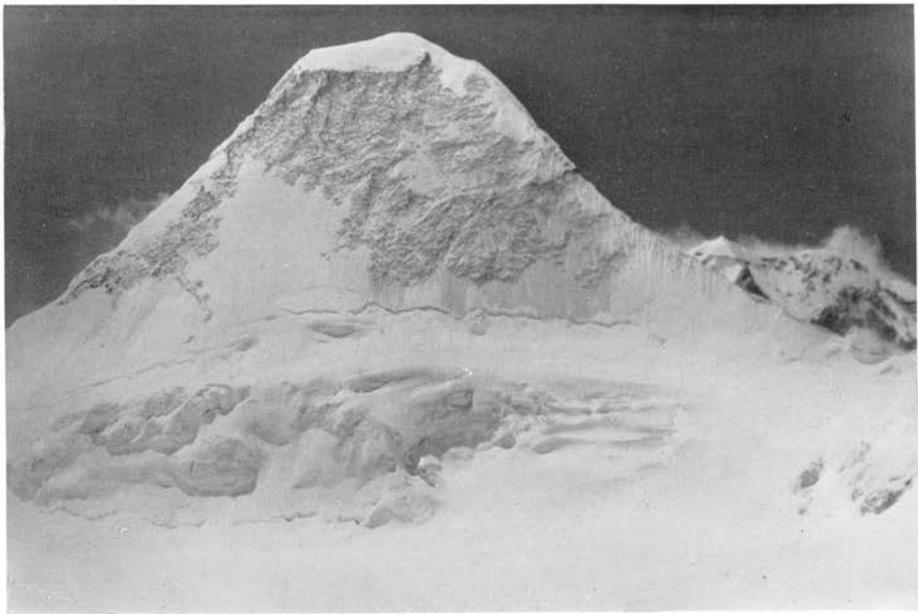
ジャンクジョン・ピークとのコルから見たチョー・ホル  
Cho Polu (6734m) seen from the col between Cho  
Polu and Junction Peak.



バルンツェの頂上とその直下の雪庇の出た尾根  
The summit of Baruntse and its difficult corniced ridge.



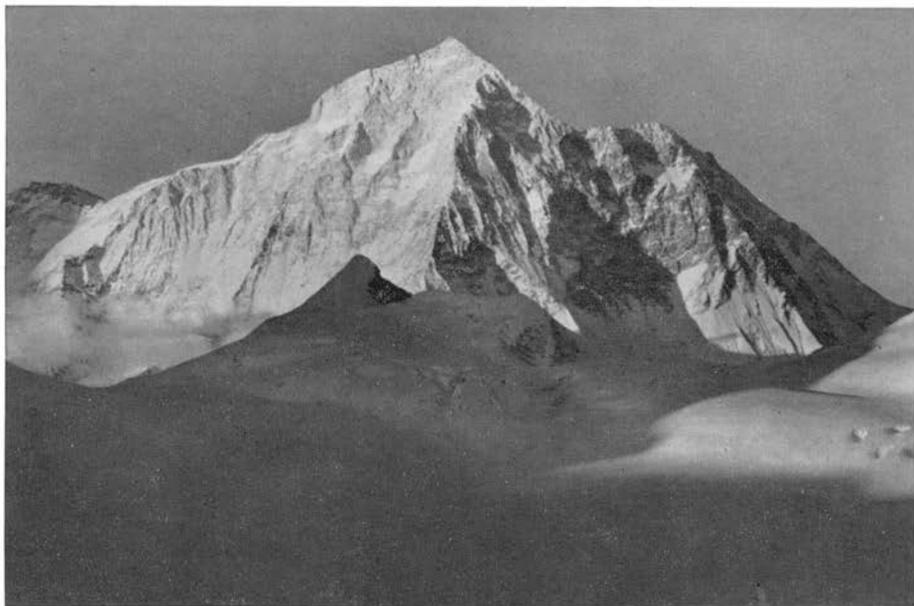
最終キャンプ (C III) から見たバルンツェ  
Baruntse (7220m) seen from the final camp (Camp III)



プラトー氷河上部から見たピラミッド・ピーク  
Pyramid Peak (6837m) seen from the upper part of Plateau Glacier.



プラトー氷河上部から見たバルンツェ  
Baruntse (7220m) seen from the upper part of Plateau Glacier.



イースト・コルから見たマカルー  
Makalu (8470m) seen from the East Col.



ベタンツェへの途中から見たチョモレンゾー、マカルーII及びI (左から)  
Chomolönzo (7796m), Makalu II (7660m) and Makalu I (8470m) seen from the  
midway towards Pethang Tse.

アの村人に予約し、十日おきに二度程野菜、鳥、米等を上げるよう手配しておいた。高度のたたりはてき面であったが、徐々に皆調子を上げて来た。ここはヒマラヤでも異常乾燥地帯らしく、誰でもむくみ、シエルパに慰さめられる始末であった。

バルンツェ、プラトール氷河へ

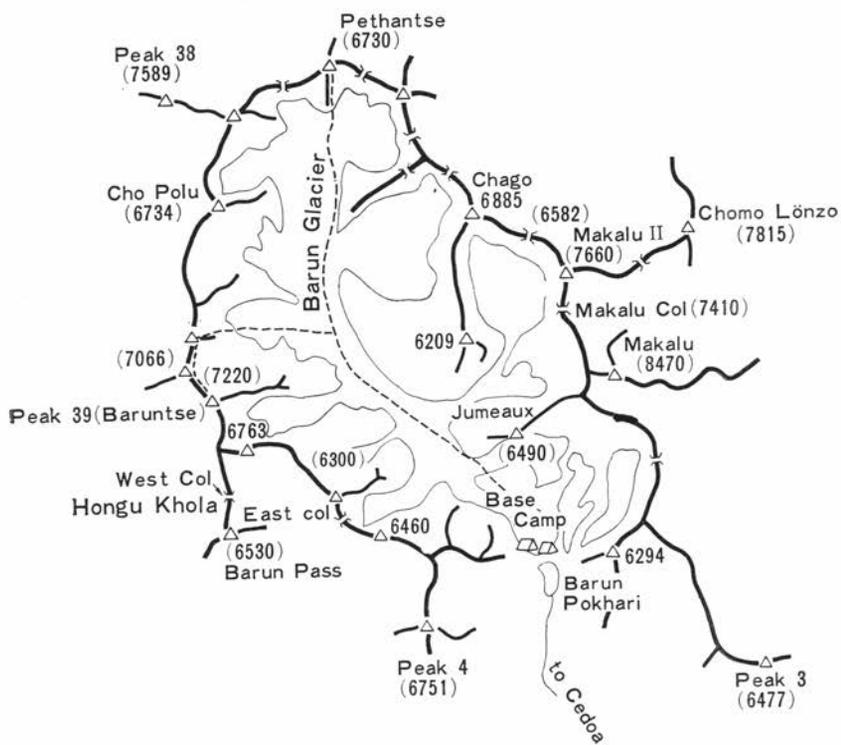
四月一三日、バルン谷を溯り、イースト・コル（シエルパニ・コル）へ出る谷の入口のモレーン上に荷物を揚げ、ここをアドヴァンス・ベースキャンプ（ABC）（五三〇〇メートル）とすることにし、六人用天幕一張を建設した。四月一六日には五七五〇メートルの地点にC1四人用一張を設け、更にシエルパニ・コルの登り口に一〇〇メートル程のロープを固定することが出来た。シエルパの言によれば、今年この地区はサム・ウォームで、メニスノウであるという。その証拠に下の方には雪がない。シエルパニ・コルへの登路は例年半分ガレが出ていて、ロープは不要であるとのことであった。この間サーダーとリエゾンが見物を兼ねて、他の連中と一五キログラム程の荷をABCに上げて来たが、高度のため二人共アウトになり、BCで看護をつけて寝ている状態だった。一九日、山野井、アンタルケイ、ラクバと三人でシエルパニ・コルのフィックスを終え、プラトール氷河に出て初めてバルンツェを見、これはいける、易しいと思って喜んでいた時、隊長からサーダー、リエゾ

ン共病状の悪化を無電で伝えて来たので、山野井が急いでBCへ下って見た。兩名共典型的な気の病らしく、すっかり元気がない。隊長もあきれ返って、BCより下にキャンプを設け、兩人に看護人をつけ、隊員はすべてABCから上に上るといふことになった。リエゾンはともかく、サーダーのマイナスC1というのは前代未聞であった。上のキャンプでは二日大倉、アンタルケイがプラトール氷河上六一〇〇メートルの地点にC2を設け、バルンツェ本峯の登路を偵察していた。

プラトール氷河はバルンツェに源を發し、ピラミッド、げんこつ山（無名峯）等の麓を通り、バルン谷のシエルジョン・カルカの正面にアイスフォール（ローア・バルン・グレイシャー）となって落ちる、氷河というより大雪原である。シエルパニ・コルから見ると、バルンツェの手にそっくりな、にせバルンツェがあり、約一〇〇メートル程バルンツェに向かって進み、高い頂に立つと本當の頂が望める。ゆるい女性的な感じで全く容易に見え、ニュージラード隊の苦悶は全くそのように感じられた。四月二三日の夕方、隊長から無電で「サーダーが死にそうだ」と伝えて来た。大倉が至急下り、次いでナムチェ・バザールへシエルパを走らせ、ヘリコプターによる救出要請の電報を打たせるべく準備を始めた。

C2から上の偵察をやっている大倉は、アンタルケイとパーティを組み、好調でバルンツェ中段に掛る二つの大クレパスを

## Sketch Map of Barun District



越え、ルートを見つけ六六〇〇メートル迄トレースし、二五日にはアタックに入る態勢でいただけに、下れということは辛らかったが、彼は情勢を正確につかみ、二四日にはマイナスC1に下り、サーダーの手当をした。二五日にはヘリコプター要請の手紙を持たせ、パサン、ラクパの両シェルパをナムチェに下らせた。ウェスト・コル、アンブ・ラプチャ両峠とも雪の状態が悪く、乏しい装備の内から彼等にも亦ツェルト、ロープ等持たせねばならなかった。帰りには二三名のポーターを雇い、食糧を上げるよう指示した。サーダーの手当は大倉に任せ、山野井、岸野、遠藤にシェルパ二名でバルンツェに向かい、二八日には六六〇〇メートルの地点にC3を建設し、山野井、遠藤、アンタルケイが入り、C2から岸野、パサン・カミがこれをサポートした。

### バルンツェのアタック

二九日は好天に恵まれ、C3の三名は登頂を試みるため五時三〇分テントを出た。最初急な斜面を登るだけであったが、右手に黒々としたマカルーが姿を表わし、にせバルンツェを見下ろす高度になる頃から、氷混りの傾斜面となってきた。大きなクレバスを三個所ばかり越え、最後に小さな雪庇を切ってリッジに出、一五〇メートル程幅広い尾根を行くと、突然頂上が目の前に姿を表わす。約七〇〇〇メートルの地点で、幅広かった

尾根が左へ曲がり、雪庇となって右手バルン側に張り出し、左は五メートル程下からスパッと一気にイムジャ側へ落ち込んでいる。約一五〇メートル先に三〇メートル程のピナクルが立っていて、その先に卵型の雪庇が二個あり、その先が頂上である。一つ目の雪庇の下半分は見えないが、二つ目の下に出れば成功と見た。この地点でアンタルケイに確保させ、トップを交代して進んで見たが、なかなか思うようにならない。そのうちC2から来た岸野パーティが追いつき、三名で交代で進み、ピナクルの下迄足場を切り、四〇メートルのロープを一本固定して、二時下降することにした。

ピナクルは四分の一以上が雪庇状で、直登は不可能、雪は左手に廻り込めば固そうなので（正面は途中から雪庇になってしまふ）、次回は先ず一五〇メートル以上のロープと、フィックス用バー二本以上と、足場切りの折たみスコップ等持参し、ピナクル中段に一五〇センチのバンドをきざみ、コーナーは人の立てる丈だけけずろうという作戦を立てた。前回シャールプー登頂で意気込んでいたアンタルケイの「バトツァイナ」と言う声が力なくひびいた。

五月一日、遠藤とアンタルケイは再度バルンツェに向かった。前回の結論を実行するため、C3を五時三〇分出発し頂上へ向った。二九日の引返し点八時通過。アンタルケイのジツへルにより幅約二〇センチのバンドをピナクルに、更にコーナー

をまわりこんでピナクルの上に出る。ルートにはロープを固定したが、天候悪化のため一四時三〇分、ピナクルから懸垂で下降し、一五時三〇分C3に帰着した。遠藤のピナクル越えに、私達は今度こそ大丈夫の念をいだいた。

二五日からBCとの連絡が絶えているため、BCへ下りサーダー、リエゾンの様子、食糧の補給状況等を確認し、充分休養の上一気にバルンツェを落し度いと考えて、二日早朝C3から下降を始めたが、C2への途中で大倉、ジャンプの兩名が上を心配して連絡に来たのと一緒になりBCへ下った。途中歩きながらの話では、名医のおかげで注射を何本も打たれ、サーダーは大分元気が出て来てBCに上っており、食糧も充分とは言えないが、セドアからにわとり・じゃがいも等が上り、活気があるという。まずまず胸をほっとさせた。ヘリを呼んだ上にサーダーに死なれては、我が隊は破産してしまう。シェルバの話では彼は病気の常習犯とのこと。ヒマラヤン・ソサエティ不信の念を強くしたが、喧嘩にならない。五月三日、四日と久方ぶりのBCは、ナムチェに下ったラクパ、パサン等全員が集まり賑やかであった。アン・ダワが作る料理を手当り次第食べ、シユラフを外に出してごろりと横になる。強風にマカルーが雪煙をなびかせ、大きな鳥が飛んで来て輪を画く。或る者は床屋を開き、或る者は仕立屋を又手紙をと、思い思いに休養を楽しんだ。ここで今後の計画を最終的に検討した。①現地食糧の補給を

計画的に行う。②隊長もアンブ・ラプチャを越えてナムチェ經由で下山する。そのため五月一〇日迄に全員プラトリーのC2に集まる。③五月末にはイムジャへ出ることにし、バルンツェは五月一日迄若しくはあと二度の攻撃で打切る。④隊長が帰ったあとは、バルン谷上部及びプラトリー氷河周辺の試登を行なう。⑤リエゾンがトラブルを起し過ぎるので、先に帰る隊長の指揮下に入るのがいやならセドア路を帰す。⑥シェルバの増員、ヘリの要請等で大幅に予算を超過しているため、帰路のキャラバンは短縮する等である。

私達が上のキャンプにいた時の、リエゾンの横暴ぶりを聞いた若い連中は、なぐるといふ始末であり、悪事はサーダーとリエゾンが全部しよってしまい、おかげで他の連中はチームワークが良くなるといった皮肉な面もあった。六日から山野井、大倉、岸野、遠藤、アンタルケイ、パサン・カミの六名でバルンツェに登るべくキャンプに向かい、隊長の班はBCを撤収してC2へ移動を開始した。

### バルンツェ登頂の断念

五月九日、バルンツェ攻撃のため山野井、大倉、遠藤、アンタルケイの四名でC3を五時四〇分に出発した。このところ毎日午後になると天候がぐずれぎみであったが、九時にピナクルの下に着き、大倉、遠藤のパーティが先行してピナクルの上

出た。一時間程下で見ていたが、五メートル程しか進んでおらず、時折手のふれた雪庇の裏側が落ちるのが見える。アンタルケイにコーナーでジツヘルさせ、ピナクルの上へ出て見たが、クレバスの入った雪庇があり、卵の殻状の雪庇へ出るのは至難の業である。日数に余裕もなく、予想外の病人と、プラトール氷河の出口入口の悪さにロープ類を使い果してしまつた私達に、残された可能性は殆んどない。ここを越すには二百メートル程のロープ、二五本程のフィックス用バー又はアイスピトン、丸三日の好天が必要と見た。頂上は目前であるが、生命をかけて登る程の山でもない。丁度隊長と無電連絡が取れたので、残念ではあるが登頂を断念してC3へ帰着した。

私達がバルンツェ最後の攻撃をしている頃、隊長の指揮でB、C、ABCは撤収され、殆んど荷はプラトール氷河のC2に集められた。一〇日、C2に全員が集まり計画を次の段階に移した。A班は隊長、リエゾン、サーダーでパサン・カミとハイポーターを使って、一四日アンブ・ラブチャを越えナムチェ經由帰路につく。B班は山野井、大倉、ラクパ、アン・ダワの四名で、一日から二日迄バルン上部へ出て、ペタンツェの登頂及びその他の偵察を行う。C班は岸野、アンタルケイ、ジャンプー、パサンで、C2を基地としてヒラミッド・ピーク(六八三七メートル)の試登と無名峯の偵察及びA班の輸送の援助を行うこととした。

A班は一日C2を出発、不要になつた荷を運ぶため、ナムチェから呼んだ十名程のローカル・ポーターと共にウェスト・コルを下り、パンチ・ボカリ、アンブ・ラブチャを越え、五日でナムチェに到着し、シエルバの町ナムチェで一週間程滞在、近所のタミの部落の祭礼等を見物し、六月六日カトマンズに到着した。ウェスト・コルやアンブ・ラブチャの下降は決してらかなものとは言えないのに、私達のために必要な装備をのこしていかけた隊長の気持には、全く頭が下がる思いであつた。

### バルンの奥へ

B班は一日プラトールを出発してABCに下り、次の日は八日分の荷物を背負つて、広々としたバルン谷をさかのぼつた。一三日は吹雪で滞在し、一四日バルンツェから流下する氷河のモレーン上にテントを前進させた。一五日、氷河上を左岸から右岸に移り、バルンの谷も奥まつた五八五〇メートルの地点に最終キャンプを張つた。

五月一六日、ペタンツェ攻撃のため全員で四時四十分テントを出た。最初三時間程広大な雪原を横切り、ペタンツェの基部へ着いたのは八時である。ルートは三つほど考えられた。先ず左手のジャンクション・ピークとのコルから右方稜線をとるもの。次に右手のチャゴーとのコルから左方稜線をとるもの。第三に私達が選んだ真中の壁を登るものである。八時に取りつ

いて、一時間程は急な斜面のラッセルであったが、クレバスを越え六四五〇メートル付近から堅氷が出て来て、ピトンを使う有様になってしまった。クレバスを越え壁をすぎると難場は終つて、雪の大斜面を三〇分程登ると国境稜線に出た。ものすごい風圧をうけ、結んでいるザイルは弓なりである。ここを小一時間も登つたであらうか、一二時三五分たみ二十畳程の頂上へ着いた。かすかにマカルーやエヴェレスト下方のチベット側が見える。天候も悪化して来たのでぐずぐず出来ず、写真だけ型どおりに撮って早々に下りにつつた。取付の雪原に着いた時はほっとしたが、雪原上のトレースは消え、かすかに見える赤旗をたよりに一七時一五分キャンプにもどつた。全くロング・コースで登頂感などにもなかつた。一七日は好天であつたが強風が吹きまくり、休養をとることにした。

一八日は、ジャンクション・ピーク偵察のため、全員でチヨールボルとジャンクション・ピークのコルへ向い、雪原をつめた所のコル下の壁の基部六〇五〇メートルの地点に横穴式の雪洞を掘り、シェルバ二名に明後日のむかえを言い渡してテントに帰し、山野井、大倉は雪洞に泊つた。翌一九日は寒さのため早くから眼を覚した。久しぶりで私達が炊事をし、かんとんに朝食を取つて出発した。コルまでは約一〇〇メートル位の壁であつたが、ロープをつかい楽に上部に出た。しかし雪庇の張り出しが大きく、突破するのに苦労した。コルに出るとホングー・

ユーラが眼下に開け、アマ・ダブラムが天をさしていた。ローツェ・シャルを観察すると、イムジャ側は斜面のいたるところで雪崩れていて、ジャンクション・ピークからのルートは長いが安全に登れそうだ。

ジャンクション・ピークは私達がかつては夢を抱き、セントポール・ピークと名ずけて頂に立とうと考えていたが、テントを一つ出さないと無理である。種々考えたがチヨールボルに登ることにした。適当な痩せ尾根で面白い登高が続いたが、一四時高度六六五〇メートルの地点で雪庇を踏み抜く事故があり、頂上直下であつたがやむなく下つた。一八時三〇分暗くなつた雪洞にもぐりこんだが翌日もよい天気であつた。身仕度をして雪洞をあとにした。シェルバがこちらに向つて、黒点のように登つて来るが見えるが、なかなかこない。途中でにこやかなシェルバに向えられテントに戻る。二日、ABCを経てC1までむかえに来たプラトール隊と合流、十日間のバルンの旅を終えた。

一方、プラトール氷河隊は五月一四日迄荷物の輸送をし、隊長隊一名の出發を見送つた後、岸野、遠藤、アンタルケイはピラミッド・ピーク(六八三七メートル)に向う。C2から雪原を行き、六五〇〇メートル峯の東側をトラバースぎみに膝までのラッセルがある。一二時四〇分頃、アンタルケイがヒドン・クレバスに落ちたが、ロープでとまつた。打身の彼を空身でC2へ帰らせ、二人で彼の荷を分けて背負い、一五時二〇分六五〇

○メートル峰とピラミッド・ピークとの間の雪原を前進キャンプと決める。五月一日六時三〇分、テントを出た。雪原をつめこるへの急な雪壁を登り、一〇時三〇分コル(六四〇〇メートル)に着いた。ホングー氷河をはさんでチャムランの全容が見える。頂上迄の登りは、ホングー氷河側もプラトー氷河側も劣らず急峻で、雪も硬く氷化している。ホングー氷河側を捲き気味に、悪い所はアイスピトンをつかいながら一三時三〇分迄登る。高度約六六〇〇メートル位であろうか、ここからテントに帰った。パサン・ノルブとジャンプーがテントまで出向えてくれた。

五月一六日は休養日としたが、遠藤とパサン・ノルブ、ジャンプーの三名で、横手にある無名峰(六五〇〇メートル)に登る。ドーム型の双子峰で、約四時間の苦闘の後頂きに立った。アンタルケイがC2から上ってきて五名となった。五月一七日、視界が悪いのでアタックをあきらめ、攻撃に有利のようにテントを上方に移動することとし、コル直下までジャンプーを除いた他の者で装備を背負って登った。五月一八日、四名で再度ピラミッド・ピークのアタックに向う。六五〇〇メートル付近でアンタルケイが不調をうったえたので、待たせることにした。先日の引返し地点をすぎる頃から天候が悪くなる。一三時、最後の難関と思われる岩場に着く。高度六七〇〇メートル付近で引き返すことにする。頂上が地吹雪の間に時々見えた。懸垂下降で時間をかせぎ一七時テントに着く。

五月一九日、集結日が明日なので登頂をあきらめC2へ下る。午後から無人のC2を整備する。五月二〇日、ベタンツェ・パーティを迎えに下る。コルで一三時迄まったが見えず、無電もきかない。遠藤、ジャンプーは南東にある六四〇〇メートル峰を登りC2にもどる。二一日、コル下で無電による連絡がとれ、ABCの上部で再会し、C1地点にテントを張り全員泊る。二二日、全員C2に入り、撤収の準備をし、午後出発ウエスト・コルに泊る。夕方吹雪の中を五人のローカル・ポーターが、ナムチェから撤収の手伝いに来た。彼等をC2まで上らせる。なにしろ食糧が底をついたので、サブだけカルカまで先きに下ることにする。パンチ・ボカリ、アンブ・ラプチャを経て、二四日青い草が一面のチュクン・カルカについた。ここでアンタルケイ以下七名を待たため三日間滞在、二七日全員合流したので、久しぶりにヤクの生肉とジャンに舌つずみをうち、軽い酔いにまぶたをとじる。

二九日、ディンボチェから隊を二分し、大倉は連絡と荷物を下るすためナムチェに先行、他の隊員は三日間の行程で、エヴレストに近いプモリの麓まで行く。三一日、ナムチェで全員合流、アンタルケイの家で休養ののち、六月三日二名のポーターと共に、カトマンズをめざして帰路のキャラバンを開始した。

(付記)この遠征については、既に福田宏年『バルン氷河紀行』(一九六四年一〇月講談社)が刊行されている。(編者)

## アラスカの山々

### II ブラックバイン峯第三登とリーガル峯初登II

北村 泰 一

私達の隊は学校創立〇〇周年記念とか、そんな大袈裟なものではない。しかも猫も杓子も海外に出る世とあっては、私達としても杓子以下ではおさまりがつかない。何とかならないかと学生達が相談をもちかけてきたのは、一九六四年の正月であった。しかし、私達教員が出るとなれば、単なる山登りだけでは許されない。幸い隊長にも私にも、かねてやってみたいという研究テーマがあった。山の高さ、研究テーマ、隊の規模、そしてそれからくる募金額。これらを睨んで、これならなんとかなりそうだと考えた。大学当局もその意義を認めて計画を買ってくれ、実質的に理工学研究所主催の行事としてできあがったのが、同志社大学アラスカ学術遠征隊である。とかく学術遠征隊

というものは、どちらかにウェイトがかかりすぎ、他方がほんのつけたしになる傾向があるが、これらを平等なウェイトでやろうというのが私達の狙いであった。

私達の隊は非常に多くの目的をもっていた。氷河の研究、地磁気の測定、VLF（可聴周波宇宙電磁波現象）の観測、それにブラックバイン峯の登頂等と、総勢八名では余程うまくたちまわらないとこなしきれない。まず隊員を紹介しよう。

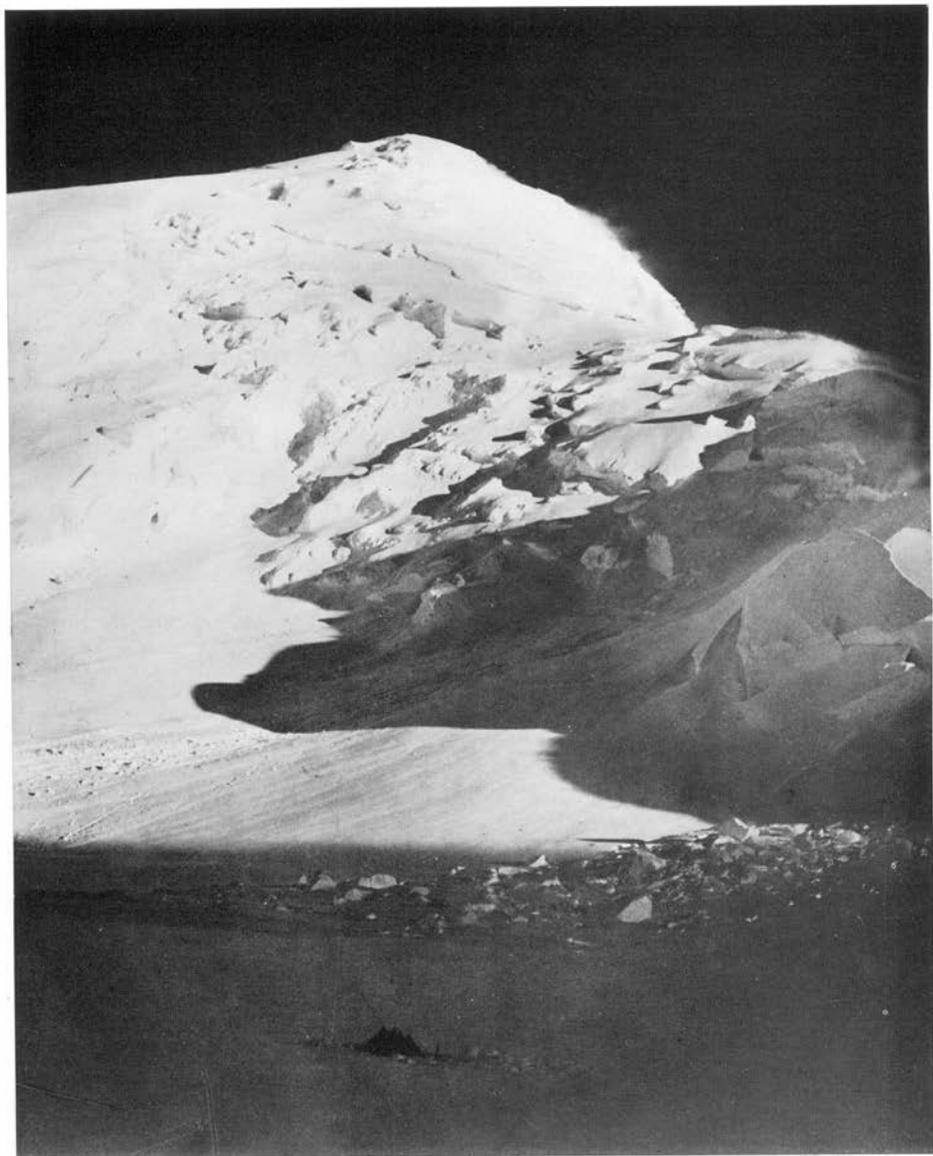
西原 正夫（44歳） 隊長。工博。同志社大学教授（高圧

材料学）。氷河測定担当。

北村 泰 一（33歳）

登攀隊長。理博。同志社大学助教

（空間物理学）。地磁気VLF観測担



ブラックバーン峰西北尾根とアドバンス・ベースキャンプ I (2800m)  
The North-west ridge of Mt. Blackburn (5038m) seen from the  
Advanced Base-camp I (2800m).

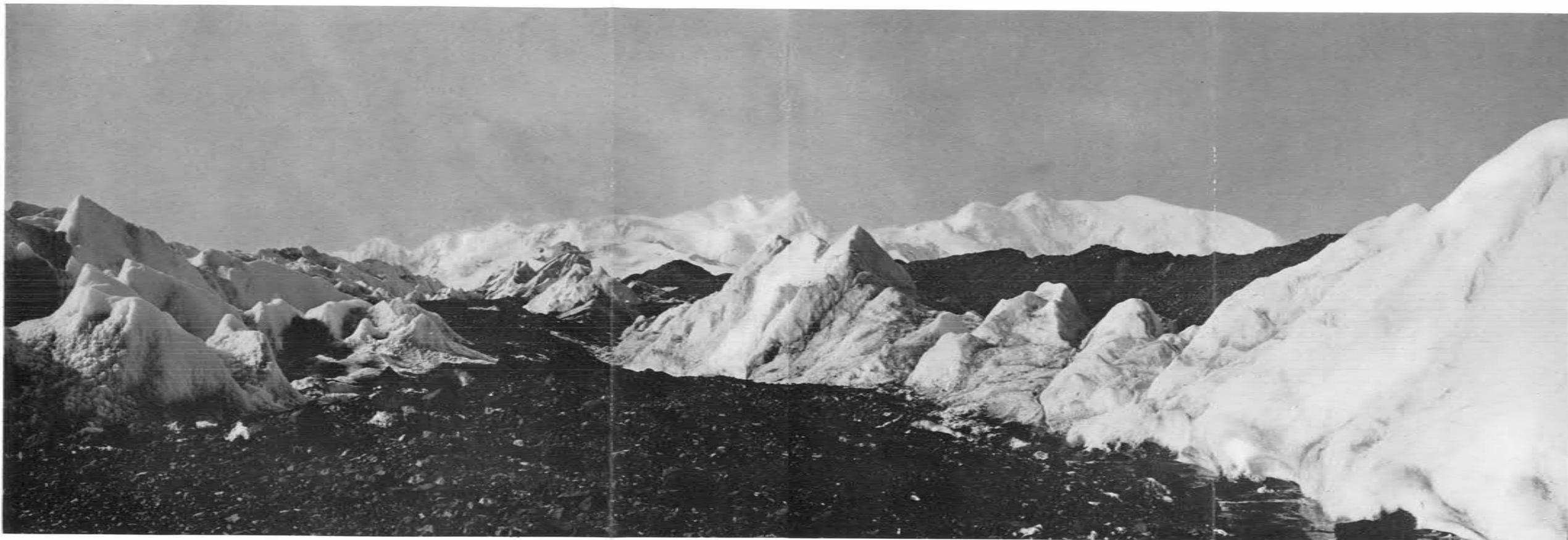
(By M. Kitamura)



リーガル峰の西面と第2キャンプ (3300m)

The West ridge of Mt. Regal (4212m) and Camp II (3300m).

(By M. Kitamura)



ナベスナ氷河上流から見たブラックバーン峰（右）と双子山（14,200ft. 中央、仮称）  
Mt. Blackburn (16,523ft.) (right) and "Twin" (tentatively named peaks)  
(14,200ft.) (center) seen from the upper part of Navesna Glacier.  
(By M. Kitamura)



飛行場のように広いブラックバーン峰 (5038m) 頂上からナベスナ氷河を望む  
The Nabesna Glacier seen from the round top of Mt. Blackburn.

(By M. Kitamura)

当。南極第一及び第三次越冬隊員。

京大学士山岳会員。

長谷川 嘸一 (26歳)

同志社大学山岳会員。トーレエンジンアリング勤務。氷河測定担当。同志社山嶺会台湾遠征隊員。

同志社山嶺会台湾遠征隊員。

荒木 徹 (26歳)

京都大学大学院博士課程(空間物理学)。地磁気VLF観測担当。

川井 康男 (25歳)

同志社大学工学部電子工学科四回生。同志社大学山岳部主将。装備・VLF観測担当。

同志社大学山岳部主将。装備・VLF観測担当。

松本 朗 (23歳)

同志社大学経済学部四回生。同志社大学山岳部副将。食糧担当。

田中正男 (23歳)

同志社大学文学部四回生。渉外担当。

内藤 真一 (22歳)

同志社大学文学部二回生。医療担当。

数多く出る遠征隊の中でも、このように地球科学的な研究と登山とを、対等に含んでいる遠征隊は一寸珍しい。それは極端ない方をすれば、ノート一冊でことが足りる人文・社会科学の調査を目的とする隊とは異って、こうした地球科学の研究には、複雑な電子管回路や電源等の重装備が必要だからである。

氷河の研究をとりあげたのは、隊長の専攻が高压下における岩石や金属の変形を研究する分野であり、その理論と測定方法

を氷河に応用したら、或いは今迄複雑で大変困難とされていた氷の流動の問題が、力学的に解明出来るのではないかとの希望があったからである。地磁気やVLFの測定を採り上げたのは、最近ロケットや人工衛星によって盛んになりつつあるスペース・フィジックス(空間物理学)の研究の鍵になる現象が、アラスカでは大変豊富で観測しやすいという理由による。しかし、これはアラスカに限ったことではなく、カナダ、シベリア又は南極等、高緯度地方であればどこでもよい。日本でも今秋からいよいよ南極観測が再開されるが、今回のアラスカ行は、その時のための予備的研究の意味ももっていた。

山の選択については余り自由はなかった。西のマッキンレーはすでに明治・早稲田両隊の足跡があり、又アメリカの連中のブレイグラウンドとも化し、東のセント・エライアスやローガンは当時既に全日本山岳連盟のパーティや関西学院大学が夫々名乗りあげていた。とすると残るはその中間に位置するランゲル山脈かチュガッチ山脈しかない。チュガッチは山も低く、未踏峯も三〇〇〇メートル台迄下らねばありそうにない。ランゲル山脈なら主峯はどうか五〇〇〇メートル台を保てる。又その山群には、山日記にアラスカ唯一の未登峰として記載されているリーガル峯も含まれている。アプローチも短かい。現役学生が主として登る山であれば、そう高のぞみも出来まい。先ずこのあたりが穩当であろう。こうして準備が始まったのは四月

の初めであった。幸い朝日新聞社の援助もきまり、又所長や学内有力教授の奔走によって募金も必要額に達した。物資調達もアピ、サイバルの先輩の経験ですっかり道がついている。伝統のある大学は有難いものである。

## 山麓への旅

七月三日。隊長がアンカレッジに到着し、これで一行八名全員が揃った。アンカレッジでは明治や早稲田の隊にならって、木村氏と明大の高橋進氏に大変お世話になった。アンカレッジを通る日本人は大抵の場合この両氏のお世話になる。時には二パーティ以上も日本人が重なり、はたでみても大変な位の忙しさだが、両氏は嫌な顔一つせず世話をされている。しかし、その好意に甘えて、世話をされるのが当然だという態度は敵につつまなくてはならない。これからもアラスカへ多くの隊が出かけることであろうが、注意すべきことである。

山麓へ至る第一の拠点は、アンカレッジの東北三五〇キロの距離にあるガルカナ (Gulkana) とさうところである。仕事は、そこへまず一トン余りの荷を運ぶことにある。幸いにもガルカナへは立派な、いわゆるグレン・ハイウェイが通じているので、トラックによる荷物の輸送が可能である。しかしアラスカは大変な物価高。中でも人件費はべら棒に高い。運転手つきでトラックを借りると、一日二五〇ドル(約九万円)余計にと

られる。これではとてもかなわない。多少危険でも私達自身で運転してゆく他はない。幸い長谷川君が免許をもっていたのでトラックを借り、その第一歩を踏み出したのは七月四日の早朝であった。パルコーをすぎると、美しいマタススカ谿谷沿いにH W Yはぐんぐん高度をあげる。ある峠をこすと忽然として大平原が展開される。私達はアラスカの内陸部に足をふみ入れたのであった。高度六〇〇メートル、みわたす限りの湖沼と森林。真直にのびるH W Yがいくつかの岡を越えたころ、ガルカナは目の前にあった。

ここに大きな飛行場があり、ウィルソン (Jack E. Wilson) というブッシュ・パイロットがすんでいる。ブッシュのはえているようなところでも、一寸したスペースさえあれば勇敢に離着陸することから、ブッシュ・パイロットという名前がついたのでそうである。いわばその道の野武士的存在である。アラスカにはブッシュ・パイロットは数多くいても、スキーをつけて氷河上に離着陸出来るものは多くはない。西の方マッキンレー地方にドン・シェルドン (Don Sheldon) として東のガルカナにウィルソンだけだと本人の話である。このガルカナから、基地になるナベスナ氷河まで直線距離にして約一〇〇キロ、航路にして一六〇キロ以上はある。この間の輸送手段が問題であった。無論、自動車道路等はない。前にも述べたように人件費が誠に高く、ヒマラヤのように人夫を使うわけにはゆ

かない。というよりは大体そんな人間はいない。たとえ人間がいるにしても、そんな人間を使うよりも飛行機で輸送する方がずっと安上りで済む。飛行機といってもパイパー・スーパーカブというほんの小さな二人用の小型機である。一人で尾部をひょいと持ち上げて、簡単に方向転換の出来る程度のものである。

## 基地の完成

この年の夏には日本からカナダ・アラスカ国境周辺の山岳地域へ、幾つかの遠征隊が殺到した。関西学院大学、学習院大学、福岡からきた隊がカナダのローガンへ、日本山岳連盟の隊がエライアス峰へといった具合である。この他にもまだあるらしい。この現象は恐らく、一九六四年四月から外国観光外貨の枠が、はずされたためであろうと考えられる。

ところでウィルソンは、これらの隊の輸送をほとんど一手に引受けて輸送するという。各隊とも輸送時期はほとんど同時なので、当然諸々の支障が起った。この地域の天候は非常に不安定だ。そして変化が激しい。晴天は数日に一日の割合しかない。その一日を各隊が待ちうけているのであるから、気持ちかなり焦って一向に事が進捗しない。七月五日はこうしてウィルソンはどこかへ飛んでゆき姿をみせず、私達は飛行場の一隅にテントを張って待機せざるを得なかった。

翌六日もウィルソンは姿をみせない。まだローガンから帰ってこないという。そこで交渉の結果、デープという副操縦士に、ナベスナ氷河の基地の下流二〇キロのリーヴ飛行場 (Reeve Air Field) まわりのパイパーより一まわり大型のセスナ機で輸送を開始して貰うことになった。ガルカナからリーヴへ直接空輸するのはやや遠すぎる。グレン・ハイウエーをガルカナからなお二時間北上したチストチナ (Chistochina) という、もとインディアン部落であったところに飛行場があり、そこからだと四十分は短縮される。それ、というわけでチストチナへ走る。その日全部の輸送が終ったのは夜の十時。曇った空に、あたりは漸やくうす暗がりになるうとする頃であった。

七月七日。快晴で絶好の輸送日和だが、ウィルソンはローガンへいっていたのか、やはり姿をみせなかった。

翌七月八日。やつのことでウィルソンが姿をあらわした。彼はローガンからつい先程帰ってきてクタクタに疲れている。だから輸送を、この近くのナベスナ部落にガイドとしてすんでいるビルという男にまかせて、自分はこれから帰ってねるといふ。輸送はその日の午後四時から始まった。夜中でも明るいから心配は要らない。自分が一番機でとびだした。

ナベスナ氷河上空にさしかかる。幅五キロメートル、その源頭迄全長一五〇キロ以上もあるかという巨大な氷河である。バルトロ氷河で長さは六〇キロ、さらに長いシアチェン氷河で

さえ七〇キロ位しかない。下流はいたるところクレバスが口をあけ、大要危険な様相を呈していた。あちこちに氷河湖がみおろせる。約三〇分で基地予定地についた。基地予定地は、氷河のわきの氷河堆積物で出来た広々した平坦地の一隅にあり、眼前には上半分なお雪をいたゞく無名の前山がそそり立ち、下半分の山腹はなだらかな緑の斜面をもって、遙か彼方でこの平坦地と連らなっている。山肌には谿水が夕日をうけてキラキラと

ひかり、何ともいえぬ美しさ。この辺は氷河の幅は六、七キロ、山麓の幅十キロはあろうと思われる。飛行機が去ってみると、あたりは寂として谿水のせせらぎの音のみ。陽はなお高く空はいやが上にも青い。ふと昭和基地に初上陸した時の気持を思い出す。前山の尾根に見える数個の白い斑点は山羊の群だろうか。第二便がやってきたのはそれから一時間余り後、続いて第三便、第四便。やっと全部の人間と荷物を運び終えたのは、もはや太陽が空に高い翌朝午前二時頃であった。

こうして私達の四〇日にわたる基地は、このナベスナ氷河の中流に完成された。この地をナンガ・バルバートになぞらえ、メルヘンウィーゼと名づけた。

### ブラックバーン登頂

基地が出来て晴天の三日間が過ぎた。基地が出来たらすぐ登山隊を第一前進基地（ABC1）へ輸送すると約束したウィル

ソンは、まだやってこない。皆の顔に焦燥の色がうかぶ。

七月一三日、故障していた無線機がなおり、ウィルソンを呼びだしたら午後二時に飛来するという。基地は俄かに活気づく。爆音高くやってきた一番機にまず自分がのりこむ。機上からリーガル、ブラックバーンの登路を偵察し、その根拠点ABC2とABC1を定めなければならぬ。

登山に関して私達は三つの計画をもっていた。ランゲル山脈中の主峯ブラックバーン（五〇三八メートル）と、これに近接する未知の処女峯リーガル（四二二メートル）の登頂と、この二峯を結ぶ尾根の縦走である。しかし、この縦走は時間的な制約によって実現の可能性は少なかった。

ブ峯は一九一三年アメリカのドラ・キーン隊が私達とは反対側のケニコット氷河（Kennicott Gl.）から初登頂し、それから半世紀後の一九五八年、アメリカ各地からの混成隊ブルーマ隊によってもナベスナ側から登頂されている。

チストチナで会った元ガイドと自称する老人は、次のような面白い話を聞かせてくれた。彼は一九一三年のドラ・キーン隊に途中までついていった。頂上近くまで行った彼の仲間のガイドによると、登頂の日、ドラ・キーン達は風について出かけ、間もなく帰ってきて登頂に成功したといったが、あの嵐の中では登頂できる筈がないというのである。ひよっとすると、ドラ・キーンは偽登頂したのかも知れないが、五〇年経った今、そ

んなことを詮索してもはじまらない。それより自分達の登頂に全力をつくすべきだろう。

まもなく機は基地を飛び立った。ナベスナ氷河を上流へ向う。下流では荒々しかった氷河も、上流では大分穏かになっていく。モレーンが何本も見える。写真も文献もない未知の処女峯リーガルとはどんな山だろうか。ある前衛峯の岩壁をまがりきると、目の前が一度に開けてきた。「しめた、これならいける。」西北尾根はクレバスが多く、それに余りにも長い。南尾根か又はダイレクトに頂上に続く西尾根を登るべきだ。これでリーガルはよし。機はブ峯に向い、まもなく縦走路にさしかかる。おお、これは悪い。鋭いナイフエッジが延々と続く。

このあたりの山相は二つに大別される。三千メートル級の山の相と、五千メートル級のそれである。雪線は二、三千メートルであるから、この高さで浸蝕風化が最も激しい。従って五千メートル級の山の山頂附近は、非常に穏かな相をしているのに対して、三千メートル級の山の多くは絶壁と鋭い稜線とに囲まれ、しかも岩質が極度にもろい。縦走は簡単にあきらめた。次はブ峯だ。

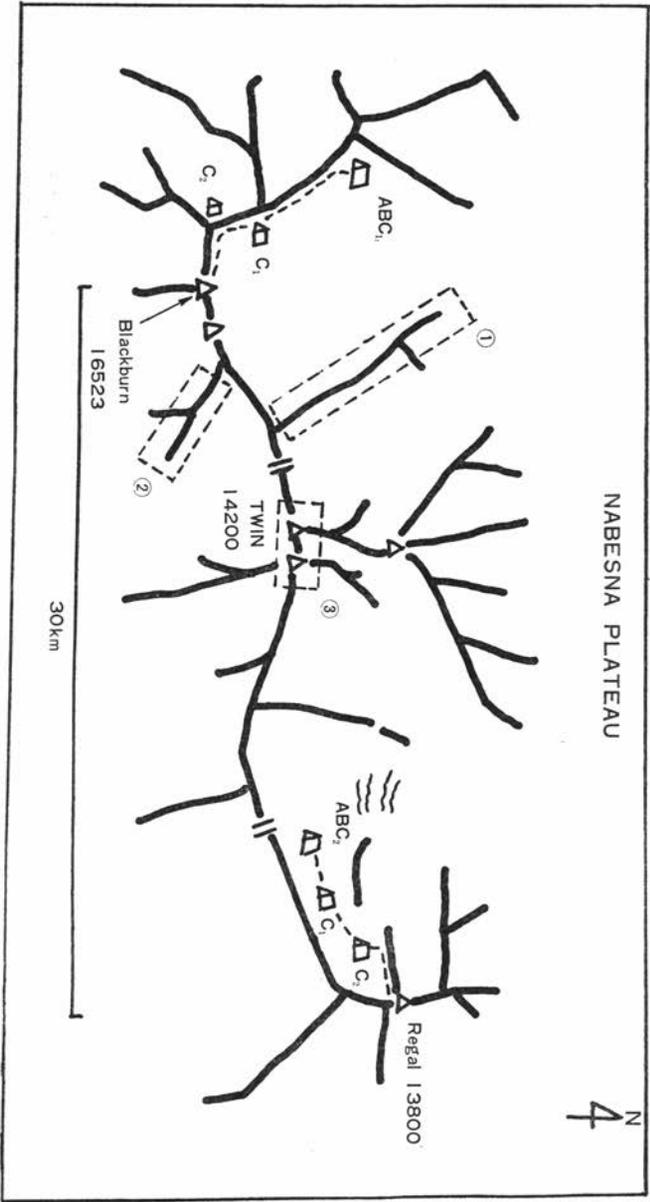
先ず予定の東北尾根の偵察にかかる。下半部はよし。だが下半から上半にさしかかるところが悪そうだ。もっと近づく。おお、これは絶望的だ。下半と上半を連結する尾根の両側は千メートル以上もなき落ち、鋭いナイフエッジが一、二哩も続き、

その奥に急傾斜の氷壁が立ちほだかっている。四名ではとてもこの悪尾根の輸送は続けられまい。だが、この尾根を放棄すれば、六年前アメリカ隊が登った尾根を登らねばならない。ルート変更か？ あくまでこの尾根をやるか？ 三度四度とその上を飛んだ後「勝てる勝負だけをしよう」と心に決める。

着陸場所を指定する。ウィルソンは二、三回雪原の上を旋回していたが、やがて下降し始める。軽いショックと共に着陸。眼前にこれから登ろうとする北西稜が、かなりの傾斜でたちはだかる。雪崩の心配もない。ここをABC1としよう。高度二八〇〇メートル、頂上まであと二つキャンプを出せばよかろうと胸算用する。

七月十四日午前六時、松本君を最後に四人がそろそろ。さて今日は、とに角偵察をかねて目の前の氷壁を登らねばならない。八時出発。肩の荷がずしりと重い。

十時頃約二〇〇メートル程登る。やっとコルの向う側のクスクラナ氷河(Kuskulana Gl.)が眺められる高さだ。ナベスナ側と異って、雪が大変少ない。雪崩の音しきり。固定ザイルをどんどん使用する。急傾斜で五、六十度はあろう。しかし雪はしっかりしている。三五〇〇メートル位の地点から斜面に蒼氷が出だして来た。雪と蒼氷の混合である。午後三時三十分、とある氷塊の突き出した蔭に、わずかに平坦な空間のあるところで停止する。ここは下から見ていた前衛峯にはまだまだ及ぶま



尾根概念図

<p>ABC<sub>1</sub> (2800 m) フラツクラン登山ベース</p> <p>C<sub>1</sub> (3600 m) 第一キヤンゾ</p> <p>C<sub>2</sub> (4400 m) 第二キヤンゾ</p> <p>① 東峰にいたる東北尾根 ナベスナ側</p> <p>② " 東南尾根 ケニコット側</p> <p>③ 双子山 (通称)</p>	<p>ABC<sub>2</sub> (3000 m) リーガル登山ベース</p> <p>C<sub>1</sub> (3300 m) 第一キヤンゾ</p> <p>C<sub>2</sub> (3400 m) 第二キヤンゾ</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

い。高度は三七〇〇メートル。まだ時間は早かったが、これからはなお傾斜が増し、デポ地点が果して見つかるかどうかはわからないので、その日はそこに荷物をおきABC1迄降りる。あれ程晴れていたのに、ABC1に降りた頃はすっかり曇り、小雪さえバラついてきた。

翌十五日、再び晴天。昨日の疲れがとりきれず、気だるい身体をむち打って再び荷上げ。昨日のトレースが残っており、大いに高度をかせぐ。肩の荷が重い。

昨日のデポ地点へ三時間も早く着く。持ってきた固定ザイル二五〇メートルはすべて使用した。このデポ地点より上は一寸見たところでも傾斜が相当に急で、この先どれ程固定ザイルが必要かわからない。川井、松本両君を偵察に出し、内藤君と私はテントを張る。まもなく両君が帰着したが、その報告によると、これから上四〇〇メートルまでは着氷と雪と急傾斜で、今今のルートの中では最も悪いとのことであった。そこで、このデポ地点を正式に第一キャンプ地(C1)とすることに決めた。第一キャンプは氷塊の蔭のほんの一坪程のスペースを利用して張られ、頭上は着氷が続ぎ、眼下は一〇〇メートル以上もなき落ちているという絶景の場所である。ついそばにランゲル峯(Wrangell, 4292m)、サンフォード峯(Sanford, 4920m)、ジャーヴィス峯(Jarvis)が望まれる。この地を中天にかかるキャンプという意味で、鷲の巣キャンプと呼ぶことにした。その

日は再びABC1に降りる。

翌朝四時に起きる。零下六度。前夜バラバラと雪の音がしていたので、今日は駄目かと思っていたら、また快晴である。テントを片付け、もう通いなれた道となったルートを三度荷上げする。体も快調。三時間程で鷲の巣キャンプに到着した。この三日間連続晴天が続いたので、トレースが消えず大変幸運であった。

ウィスキーを飲みながら、翌日の作戦をたてる。鷲の巣キャンプから頂上までは高距にして二二〇メートル。ラッシュで行って行けない高さではないが、途中にどんな悪場があるかも知れない。確実に登頂するためには、もう一つキャンプを建設しなればならない。しかし、もはや四人同時に行動するわけにはいかない。そこで第一登頂隊として川井、内藤両君を、第二登頂隊として松本君と私を決め、第二登頂隊は第一登頂隊を支援して翌日は第二キャンプ(C2)を建設することにした。

翌七月十七日。三時起床。もう外は明るい。空は分厚そうな高層雲にとざされ、少しの風もなく、嵐の前の静けさといった不気味な感じ。視界も悪い。今日は荒れそうだ。

六時に鷲の巣キャンプを出発。すぐ目の前の急傾斜を登る。川井、松本両君の努力で一〇〇メートルの着氷の壁にステップが切られる。彼等の技術は信頼できる。私はただあとからついて行けばよかった。四〇〇メートルのあたりで着氷の急傾斜

面は終り、四一〇〇メートルあたりから傾斜はゆるく、雪も柔かくなってきた。松本君は元氣よくラッセルしていくが、自分は仲々ついていけない。肩の荷がくいいる。明らかに高度の影響を自覚した。一寸早すぎると思ったが、四四〇〇メートルのところにはC2を建設する。天候は悪化の傾向がみえる。急がねばならない。風は冷たく、高所服を着てもゾクゾクしてくる。軽い頭痛がする。呼吸をいくらしもしたりない感じである。第一登頂隊の川井、内藤両君をC2に残し、再び急斜面を鷲の巣キャンプへと降りた。往路三時間、帰路二時間、行動時間の短かきの割合には、ぐったりとした疲労を覚えた。

鷲の巣キャンプに戻って一時間程した午後一時頃、猛然たる風が吹き出した。今にもさげんばかりのテントのハタメキ。テントのすぐ上の氷塊のかどをきる風は悪魔の悲鳴に似て、この絶壁の一角の高度四〇〇〇メートルの小さな鷲の巣キャンプは、狂騒の場と化した。よかった。もう一時間寝坊していたら、あの蒼氷の急斜面で、この嵐にあったところであったと、その幸運を喜びがあった。

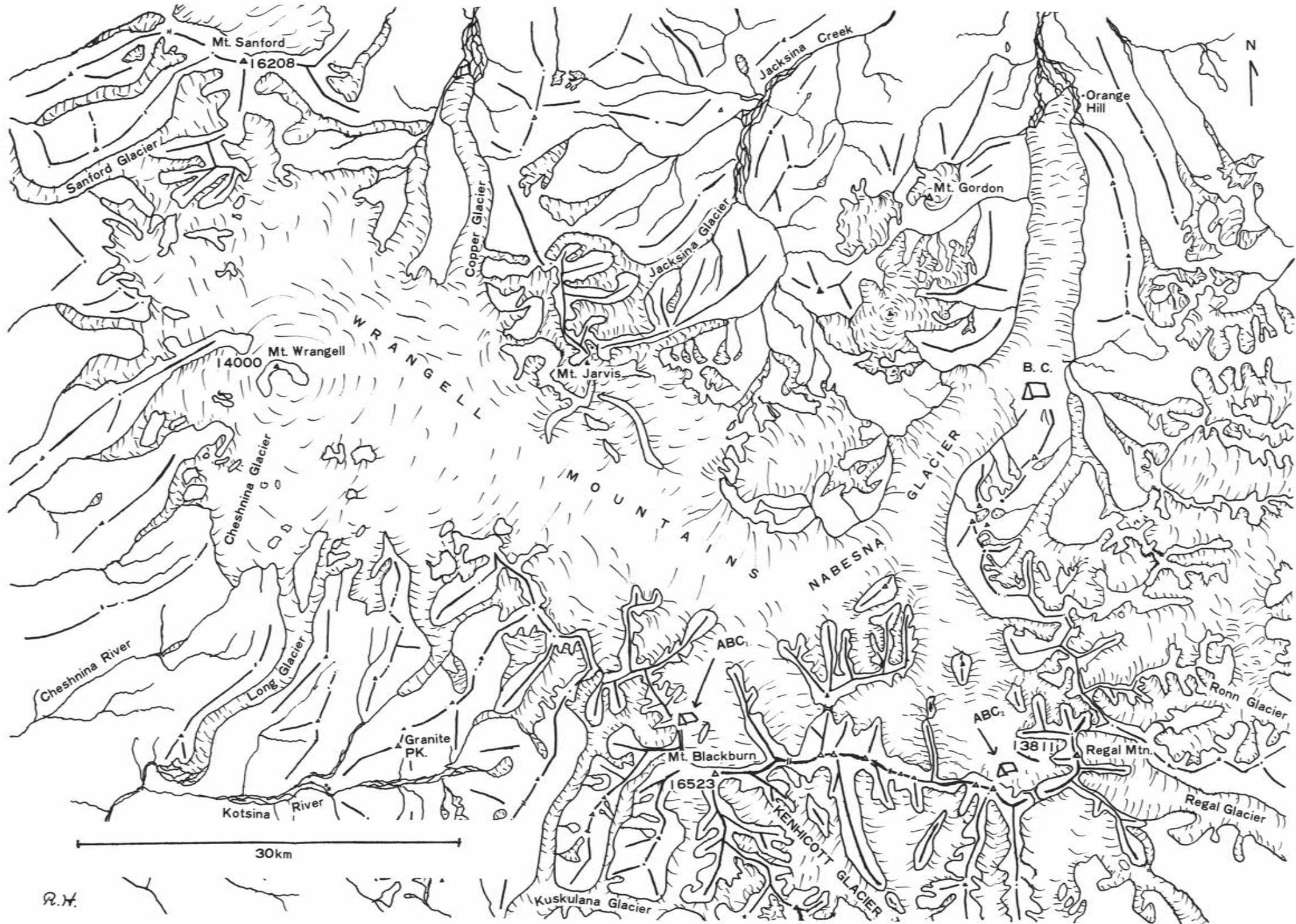
夕方七時頃風はおさまり始めた。空も快晴となる。一時的な前線の通過か？ 眼下に雲が飛び、すばらしい景観。テントの外のはすっかり雪で埋ってしまった。日が落ちる、淡い星が二つ三つ。明日もこの天気がもちますように。時々思い出したように嵐の名残りの風がさっさと雪を飛ばしていった。

翌十八日も三時に起きる。風もすっかりやんで絶好の登頂日。今日はC2から第一登頂隊が登頂し、鷲の巣キャンプから私達第二登頂隊がC2まで登ることになっている。しかし天気がよく、それに若し身体の状態がよかつたら同時登頂をやるうと決める。第二登頂隊に入ったことを残念がっていた松本君は、すっかり元氣をとり戻していた。

五時出発。サブザック軽装の快適さ。ピッチはぐんぐんのほり、二時間でC2着。第一登頂隊はすでにその時より四時間も前に出発していることを知った。

C2から上は、だだっぴろい尾根。技術的には何の心配もないが、ヒドン・クレバスだけが恐ろしい。それに高度影響という関所も通らねばならない。昨日の軽い頭痛はすっかり治っていたが、C2を通過した頃から段々高度影響を自覚してきた。息切れ、立ちくらみが次第に激しくなってくる。四八〇〇メートル位から上は、歩くことの疲れよりも、如何に一寸でも多く酸素を吸収するかの方へ努力が集中された。うっかりしていると呼吸が浅くなり、意識が朦朧とし、恍惚状態になる。ハッと我にかえって再び力一杯深呼吸をする。高度の割合に高所影響が強すぎるようだったが、これも基地から飛行機で一挙にここ迄やって来たせいかも知れない。

十時頃、第一登頂隊が降りて来たのに出会う。八時に頂上に至ったという。さすが一番若く元氣な内藤君も足もとがもつれて



Map of Wrangell Mountains



いるように見えた。それからあとただ如何に呼吸をするかに終止した。うすれていく意識の底で第三登の辛さを噛みしめた。これが初登ならどれだけ気持ちに張りの出てくることかと。

十一時三十分、だだっぴろい頂上に着く。まるで飛行場か何かのような頂上だ。抱きあって喜びあうところだが、一向にそんな感激はわかない。ああ、もうおしまいかといった感じである。これも第三登の悲しさのせいかもしれない。

このランゲル山脈の五千メートル前後の頂上の形には共通した点がある。北西にみえるランゲル峯、その北のサンフォード峯、ナベスナ・プラトーをこしてジャーヴィス峯、東に遠くボナ峯の頂上はいずれも円頂であるが、中腹から下が急傾斜でもって谷になぎおちている。これもこの辺の浸蝕が、三千メートル前後の高度で最も激しいという事実を、示しているものであらう。

一時間程周囲の山を写真におさめる。遠くローガン峯、セント・エライアスが望まれる。日本の他のパーティもこの好天を掴んで、快調に行動していることであらう。彼等の成功を祈った。

### リーガル峯登頂

リーガル峯は高度約四三〇〇メートル。高度こそ低いが今迄登攀の記録も写真もなく、一切が《未知》の山である。前進基

地ABC2からも前山が邪魔になって、頂上のほんの一部しか見えない。しかし偵察飛行の結果と、ブラックバイン頂上から遠望したところとを総合して、ルートを選べば登れる山相とふんだ。処々岩も出ているが、殆んど岩なしにルートが選べる。

このABC2は、私が偵察飛行をしてあらかじめ定めておいた地点とどうも様子が違う。あとでわかったことだが、手違いでウィルソンが異るところへ降りてしまったのだった。私が最後に飛来した時はガスがかかっており、その地点を地図上で確認することが出来なかった。ABC2からはリーガルは無論のこと、附近の山もガスのため見えず、自分の位置もつかめなくて甚だ心細い状態であった。

翌七月三十一日も濃いガスで何もみえなかった。しかし前日、ガスの一寸した晴れ間をつかんで定めておいた方向に、とにかく歩き出すことにした。時々ガスが薄くなり青空がチラチラ見える。このABC2の高度は約三〇〇〇メートル。ABC1と同じ高さだ。とすると又私達は雲の中にいるのではないのか？ 私はブラックバインの雲の中で、無為に過ごした七日間の経験から、高度をもう少し上げたら雲の上に出るかも知れないと考えた。軽い荷をもち、ゆるい傾斜を登りはじめた。気温は1°C。生あたたかい。間もなく雪さえ降り出した。約二時間半を費した時あたりが平坦になり、ガスでわからないが何かコルに出たような気がした。眼前に小高い山がぼんやりみえる。

先のルートを見通す希望をもってそこに登ってみたが、その頃から雪が激しくなり小高い山の上からは何もみえなかった。視程二〇メートル。もうこれはいけない。今日はこれ以上の行動をやめよう。荷をそこにデポしてABC2に帰える。ラッセルは膝を没し、スキーをもってこなかったことが悔やまれた。ABC2へ着いた時雪は本格的になっていたが、午前十時、時間もまだ早い。そこでキャンプをデポ地点迄あげることにした。降りしきる雪に濡れながら再びラッセル。その夜は八時になっても気温は $-10^{\circ}\text{C}$ で暖かく、雪が溶けてテントの中はビチャビチャ。居住性は悪かったが寒くなることを願いつつ、いつしか眠りこんでしまった。

八月一日。終日雪。沈澱。

八月二日。朝ガスがあつたが、リーガルらしいものがチラリとみえた。それは予想していたのとはまるで異なる方向にあつた。段々晴れてきて自分の位置が確認出来る、まるで今迄は見当違いの方向を考えていたことがわかった。昨日あのまま小山を尾根上の一ピークと考えて進んでいたら、危険な谷へ降りるところであつた。

とにかくリーガルへの直接ルートはまだ見通せないが、この方向だけは確かだという方向に歩き出した。前々日からの雪は腰を没し、重い荷とラッセルに苦しむ。傾斜はゆるい。やがて、時々太陽も顔を出しはじめ、気持も晴ればれとしてくる。

しかし、このあたりはヒドン・クレバスが多く、寸時の注意も怠るわけにはゆかなかつた。ある氷の小山をのりこしたらリーガルの全容が初めてみえた。うん、この山は背は低いが仲間々人だワイ、と一寸気をよくする。登攀ルートは三本考えられた。私はその中で中央にみえる西稜を選んだ。これが頂上に至る最短ルートでもあり、又一寸した魅惑的な鋭どきをもっているからだ。やがてリーガル直下のカール状の雪原に出る。高度約三四〇〇メートル。あと八〇〇メートルと少しだ。一〇時三〇分。この地点をC2と定める。時間はまだたつぷりある。翌日のためトレースをつけがてら尾根のとつつき迄偵察に出る。ルートとして選んだ西稜は途中でスッポリと切れ、ナベスナの支流氷河へと落ち込んでいる。従つてC2からその西稜にとつづきのが一つのやまばだ。斜面のあちこちにクレバスが走っており、何度か雪面をふみぬき肝を冷やす。つい近くと思つていたらとつつき点迄、三時間たつぷりを費やす。

翌朝三日。気温も $-10^{\circ}\text{C}$ と下り快晴、絶好の登頂日よりとなった。前日のトレースが役にたつてぐんぐんピッチがあがる。尾根にとりつく斜面は六〇度をこす急勾配だが、幸いに三〇〇メートルくらいしかない。手持の固定ザイル、登攀ザイルを全部使用してどうにか乗切った。尾根には雪庇があり傾斜も急なところもあったが、雪がしっかりしまつていたので安全であつた。時々瘦尾根がスバリと輪切りにたち割られるように、

クレバスが口をあけている。高度が四〇〇〇メートルそこそこのので、身体の異常も起らず快調である。冷たい風がガスをとばし頬に心地よい。ブラックバーンと違って、ここには処女地をゆくあの特有の心のはずみがある。何度かの偽ピークにだまされつつ、やっと頂上直下につく。十一時かっきり頂上着。頂上は畳半分位の雪の塊であった。反対側は頂上より数百メートルの氷崖となり、リーガル氷河へとおちこんでいる。今日はローガン、エライアスも見えない。ボナ (Mt. Bonna 5005 m) だけが下半は荒々しく、だがおだやかな頂上をみせていた。記念の写真をとって、登頂記録をしるした紙片をビンにつめ頂上に埋める。

ゆっくり腹ごしらえをして降り始める。帰途は早い。あとは基地迄無事帰着できれば自分の仕事の半分は終る。帰途の雪崩を心配していた最後の斜面も、雪が安定していて難なく通過。C2に帰着したのは出発してから九時間後の午後三時であった。

こうして登山隊の仕事は終った。高度にして四三〇〇メートルではスケールも小さく、多少欲求不満のきらいはあるが、しかしとにかく未登峰の空白を一つ埋めることが出来た。隊の規模、仕事のバランスを考えれば、これ位で満足しなければならぬまい。

帰途は、内藤君がクレバスに落ちこみ九死に一生を得たが、

その話は省こう。基地迄の三泊四日の氷河の旅は楽しいものがあった。

### 残された問題

◎ブラックバーンへの新登路―東峯へのルート

〔ナベスナ側より〕 私達の初期の計画では、若し条件がよければブラックバーン東峯より東北にのびる尾根を登路にとる予定であった。この登路はブ峯にいたるルートの内では、男性的な魅力をもつ尾根であるが、下半分が長大であるのが欠点である。今後ブ峯に志ざすならば、是非この東北尾根を試みるべきである。ブ峯は東西に約四キロ程離れた二つの丸い頂上をもっており、その西の頂を主峯と称しているが、写真によってはこちらが高いか不明なのがある。頂上からの感じでも、主峯の方が明らかに高いとはいえない位だから、その差はわずかなのであろう。東峯及び東北尾根は無論処女ルートである。

〔ケニコット側より〕 ドラ・キーンはケニコット側から登っ

たにしても、主峯から南にのびる南西尾根をとったと考えられる。この方がずっと容易であるからだ。しかし飛行機による偵察は、東峯より南にのびる東南尾根の魅力を増大させた。この尾根はナベスナ側の東北尾根より更に男性的で、且つ東北尾根の長大さもない。但しベースとなるべき飛行機の着陸場所の選択には、苦勞をするかも知れない。

◎東峯より東にのびる地域の山について

〔双子山（仮称）〕ブ峯から東へ、リーガルに至る尾根は仲々鋭い魅力をもっている。そして四〇〇〇メートルをこえるピークも二つ三つある。中でも仮称双子山 (Twin) は高度も四三〇メートル以上もあり、リーガルより山容も余程立派で登りごたえのある山である。ただブ峯に近接しているため、その存在は余り目立たないものになっている。

以上をとりまとめると、今後ブ峯に至る際には是非この東峯へのルートをとるべきである。双子山だけを目的にするにはやや貧弱だが、コルから東へ東峯へのルートを開くと共に、西へこの双子山を登れば一寸した面白い仕事が出来ようというものである。

## そ の 他

◎装備の基準について

同時期に行った他の隊も同意見であろうが、夏期のこの地方の登山は、総じて春山後期の装備で充分ことが足りる。私達の測定した最低気温は四〇〇〇メートルで  $-11^{\circ}\text{C}$  であり、風も秒速三十メートルそこそこであった。

◎通信機について

何といつても人煙より一〇〇キロも離れており、一度事が起ると取捨がつかなくなる。このことは無線機の必携を意味す

る。私達の場合、アマチュア用五ワットの無線機を携帯した。ウィルソンは三〇ワットの出力を要求したが、これで十分であった。電源は二〇〇ワット重量一〇キロ強の発電機である。基地と登山隊は三〇キロ以上も離れていたが、見通しがきいたためトランシーバーで充分連絡がとれた。この電池の充電には、太陽電池が非常に有効であった。

### 「山岳」第五九年英文欄訂正

英文欄六頁上から三行目末尾のピリオドをとり、その次に以下を挿入する。

for Yangma Khola. Climbed Syaog Kangri (c. 6400 m)

Dec. 7 Gathered at Walungchung Ghola.

Dec. 9 Departed from Walungchung Ghola for Tsudam over Tanje La (5100 m). On the way, climbed 2 minor peaks (Tanje Kangri, c. 5600 m).

Dec. 12 Reached Tsudam.

Dec. 15 Divided into 2 parties as follows:

A) 2 members (Hirano & Tatsumi) & 1 Sherpa (Ang Tharkey). Reconnoitered Three Sisters ranges and climbed 3 minor peaks (Samne Kangri, c. 5700 m)  
Over Tanga La, through Topke Ghola, Dawan and Chainpur Bazar, reached Dingla Bazar.

B) 2 members (Ishinabe & Miyamoto) & 1 Sherpa (Hiakpa Tenzing).

## セント・エライアス (一九六四年)

浅野清彦

戦後間もない一九四六年の暮、とにかく山に登ろうと集って出来た関西登高会も、間もなく二十周年を迎えようとしている。重なる合宿もマナスルに刺戟され、その他の遠征等に力を得て、北海道日高山脈への合宿となり、遂にジュガル・ヒマールへと結実して行った。けれど会独自の海外遠征への思いは次第に深くなり、会の力にふさわしい小遠征の計画が討議されて来た。

ついにアラスカが選ばれた理由は、遠征費用が少なくて済むことと、日数が約一ヶ月半位で行けることに集約される。一九六三年の春頃アンカレッジ市在住のスコット・D・ハミルトン君にも連絡がとれ、目標をセント・エライアス峰に決めたのもその頃であった。

当時手もとのアラスカの資料と言えば明治、早稲田のマッキンレーと『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』ぐらいであっ

た。セント・エライアス(五四八八メートル)は、周知の通り一八九七年イタリーの高名な登山家アブルツィ公の一行によって、その初登頂がなされた。しかし、JACRルームにも通いジャーナルを調べてみたが、この山の第二登の資料を得ることが出来ず、一九六三年の秋も終わる頃、会としての最終決定の時も、まだ南面からのルートに研究を集中していた。ハミルトン君も第二登の記録を知らず、一九六四年に入って山岳連盟に計画書を提出した時は、勿論南面のチンダル氷河からヘイドン・ピークを経て登る計画であった。

ちょうど二月十六日の西岡一雄氏の葬儀に列席した時、諏訪多栄蔵氏から一九四六年頃のジャーナルを手に入れたことを聞き、あわてて見せていただいて、ハーバード大学の第二登頂の記録を知ることが出来た。南面の記録は、航空隊支援のもとに展開された三ヶ月に余る大遠征であり、ルートその他は私

達の計画とはほぼ一致していたが、セント・エライアスへの認識を新たにすることも多くあった。

この山への挑戦は、その後ハーバード大学の連中を中心に数回行なわれているが、どれも成功せず、まだ第三登がなされていないことは明瞭であった。しかし、南面から北面への転進は私達の夢をいささか崩しはしたが、ニュートン峰からラッセル・コルを経て登るルートを当面の目標と決定したのは、二月末であった。

その後ウォシユバーン氏からの助言と美しい写真が到着したが、北壁正面のルートとラッセル・コルへの直登ルートの二つを推薦して来られたのみで、私達の申し入れたルートについては何も言われないのに、いささか疑問を感じながらも計画は進められた。

春とともに、アラスカ遠征の情報が次から次へと聞えて来た。まず関西学院大学のローガン峰があり、ついで川口市のカナディアン・ロッキーがあった。この二隊にはすぐ連絡して協力をお願いしたが、次の同志社大学がセント・エライアスに行くという情報にはいささか慌てた。旧知のJAC支部委員岸田権二、津田康祐両氏やサイパル遠征から帰国して間もない平林克敏氏等同大学の先輩達にお願いして、目標の変更を頼み込む。楽しい山行が先陣争いにより、無理が出来ることは絶対に避けなかった。幸い私達の懇望を心よく了解していただいた先輩並

に各遠征隊の皆様は、厚くお礼申し上げねばならない。次に開いたのは学習院大学である。同大学はセント・エライアス計画の先輩であるので、その計画書を見るまで心配であった。その上九州からも一隊出ると聞いて、あきれると同時にどうにでもなれと腰が坐って来た感じで、ついに連絡もとらなかつたが、岳連からその計画を聞かせてもらうまでは、やはり心配であった。

アラスカの登山は、すでに明治、早稲田の報告で、御承知のように、ベースキャンプへの輸送はすべて軽飛行機によることが常識である。これは装備、食料の軽量化を極力進めることと、体調をどうするかが問題となって来る。アプローチの旅の無いことは、近代化された国での登山らしさを感じるが、一抹の淋しさはかくせない。ただ軽量化とスピードのある登山を考へねばならないと思った。

この計画の中心として活躍した野村君や西前君等は、アラスカに於けるラッシュユ戦法のために、冬山合宿や春山計画にスピードを加えた訓練をすでに重ねていた。海外遠征が初めての私には、ジュガールに遠征経験を持つ野村君のアドバイスが非常に役立った。個人装備から共同装備に至るまで、彼の徹底した軽量化への意欲は見事なものであった。それは装備係や私などの不安を退ける力を持っていた。当初に計画されたものは、あくまで小さな隊で、スピードを心掛けた夏休み遠征とでも言え

るものであった。けれど会の今後のことを思うと、遠征経験者の数を多くすることや、次代を背負う人達の養成を考えねばならない。遠征委員会からの要請もあって、新たに二名の追加を認め九名の隊となった。アンカレッジのハミルトン君は現地の山をほとんど知らないが、隊員として参加させることとした。彼の参加は現地に於ける輸送、宿舎、通関その他に大変な力を發揮してくれた。こゝに隊員を紹介しておこう。

野村哲也 三十六歳 大阪河南高校教諭。彼は前に記したように、この遠征の中心として活躍したプロモーターで、一九六一年のビッグ・ホワイトの副隊長をやり、今度もまた副隊長をやってもらう。京大大学院に在学中であり、AACKのメンバーでもある。良き意味の野心家である。

西前四郎 二十八歳 関西大学一高教諭。現在彼はアンカレッジのメソジスト大学に在学中であるが、これも皆、彼の語学力と遠征のための準備に尽した結果に外ならぬことだ。小さな体には溢れるフアイトと技術は、登頂隊員として充分その力を發揮してくれた。

川本伶三 二十八歳 好きな写真関係の会社を退職して参加した彼は、この遠征隊一の被害者でもある。関西大学山岳部出身と自称する彼は、登高会でもスキーマの名手であり、写真家でもある。十六ミリを廻し続け、この遠征を助けてくれた。

山根孝明 二十七歳 山陽特殊製鋼勤務。登頂隊員として、

困難な瘦尾根を突破してくれた、会きつてのクライマーである彼、また装備係の専門家でもある。話しかけると、ピントが常にずれてはいるが、茫洋としたフアイターで、黙々と仕事を続ける遠征むきの男でもある。

尾田勉 二十二歳 住友金属鋼管製造所勤務。食料係の専門家、ダンブカー的存在でもある。重量級の体で黙々と輸送やルート工作に専心する好漢。彼と山根君とは現場の工具さんであり、夜業を続けながら今度の遠征に参加したのだ。けれど大従業員のカンパに思わぬ幸運に恵まれた男達でもある。職場の方々の厚い援助、支持を感謝する。

丈田宗和 二十一歳 関西大学に在学中。現役の山岳部員である彼は、部長初め先輩の方々の暖かい支持で参加を許され、山岳部は休部という形で、若い体を活かしてくれる。遠征中一番話題の中心人物としても大活躍であった。

河合秀郎 三十一歳 和歌山医大助手。もともとサッカーの選手である彼は、山でも街でも万能選手ぶりをあらわし、特に専門外の精神医学にもその腕を見せてくれた。一人で貧しいアメリカ旅行中に、好きな酒を黒人にとられかけたので逃げたとか、ニューヨークの中心街で、不親切なアメリカ人を相手に日本語で啖呵を切るという好漢である。

スコット・D・ハミルトン (Scott D. Hamilton, Jr.) 三十五歳 アンカレッジ市役所シテイ・プランナー。ハラモシユ

の遠征隊員であった彼がアンカレッジに在ることを知り、彼の文通でこの山行きが出来たと言ってもよい。クライマーではなかったが、プランナーであり素晴らしい現地マネージャーであった彼が、オリンピックに日本を訪ねてくれて、彼の暖かい純な友情を一層知ることが出来嬉しかった。アメリカ人らしい茶目気のある社交家だ。地震で彼の参加があやぶまれたが、大奮闘で活躍し約束通り同行した。常に隊の中では笑いの中心であった。「I have good idea」と話しかける彼を、山と共に忘れることはあるまい。

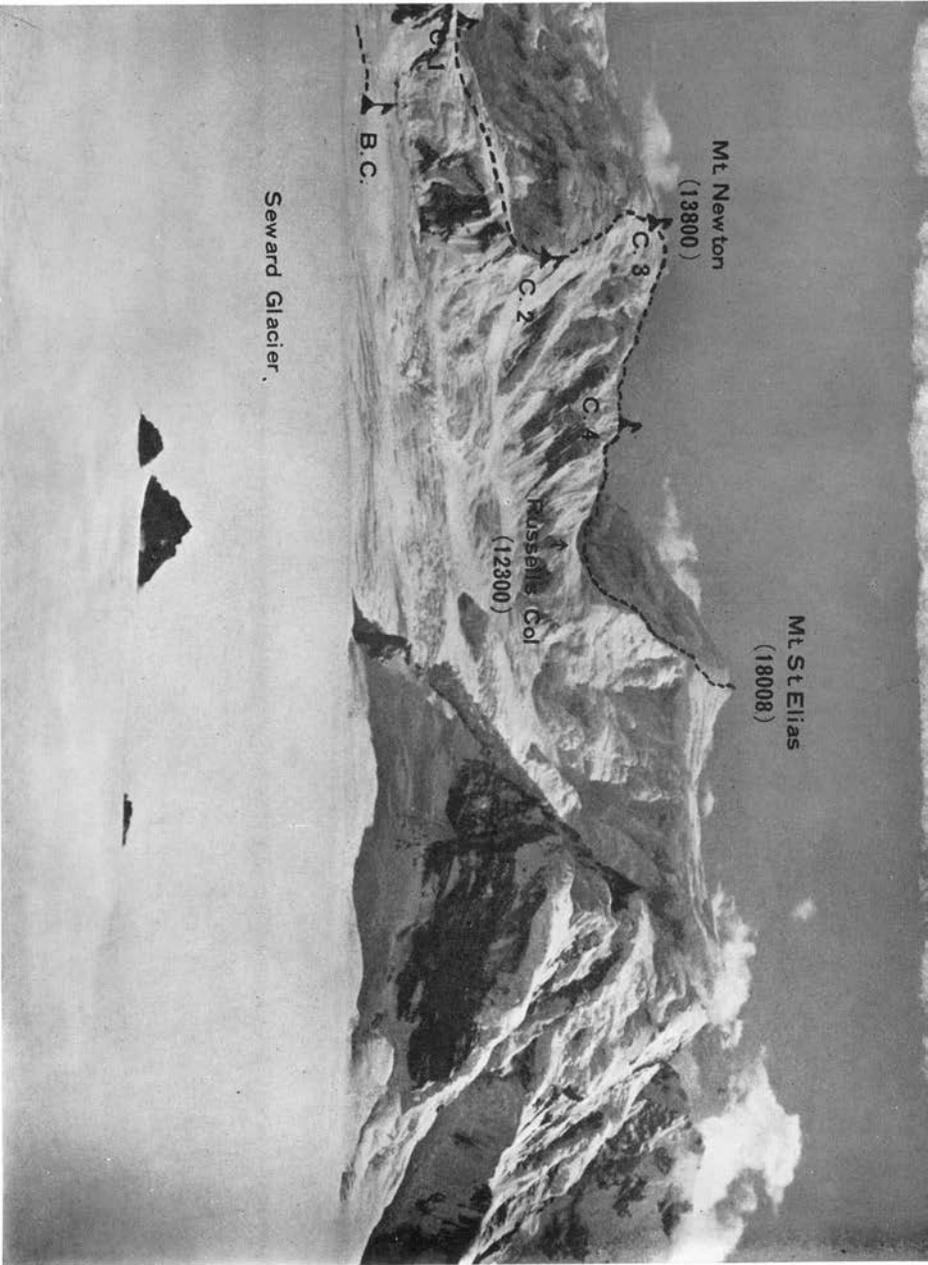
### 出発からベースキャンプまで

暗い羽田を発つてうとうとすると、もう下の世界が変わっている。広大な原野のようなものが左下に、右下には太平洋が見える。アラスカ上空だ。原始林らしいのが雪を冠った山となり、雲の彼方に朝日をうけて赤いマツキンレーが見え出すと、ぐんと高度が下がり、あっという間にアンカレッジ空港、全く旅などという味わいはない。通関検査などトランクの蓋を開けるだけで「OK」である。ハミルトン君の手配で州の儀典局長代理などの出迎えを受ける。宿舎のYMCAに落ちつく間もなく、車の手配などをしてくれたケニヤン少佐の迎いで、航空基地の将校集会所で食事をよばれる。彼はシビル・エア・パトロールの隊長で日本にも永くいらしく、ハミルトンの友人でもあ

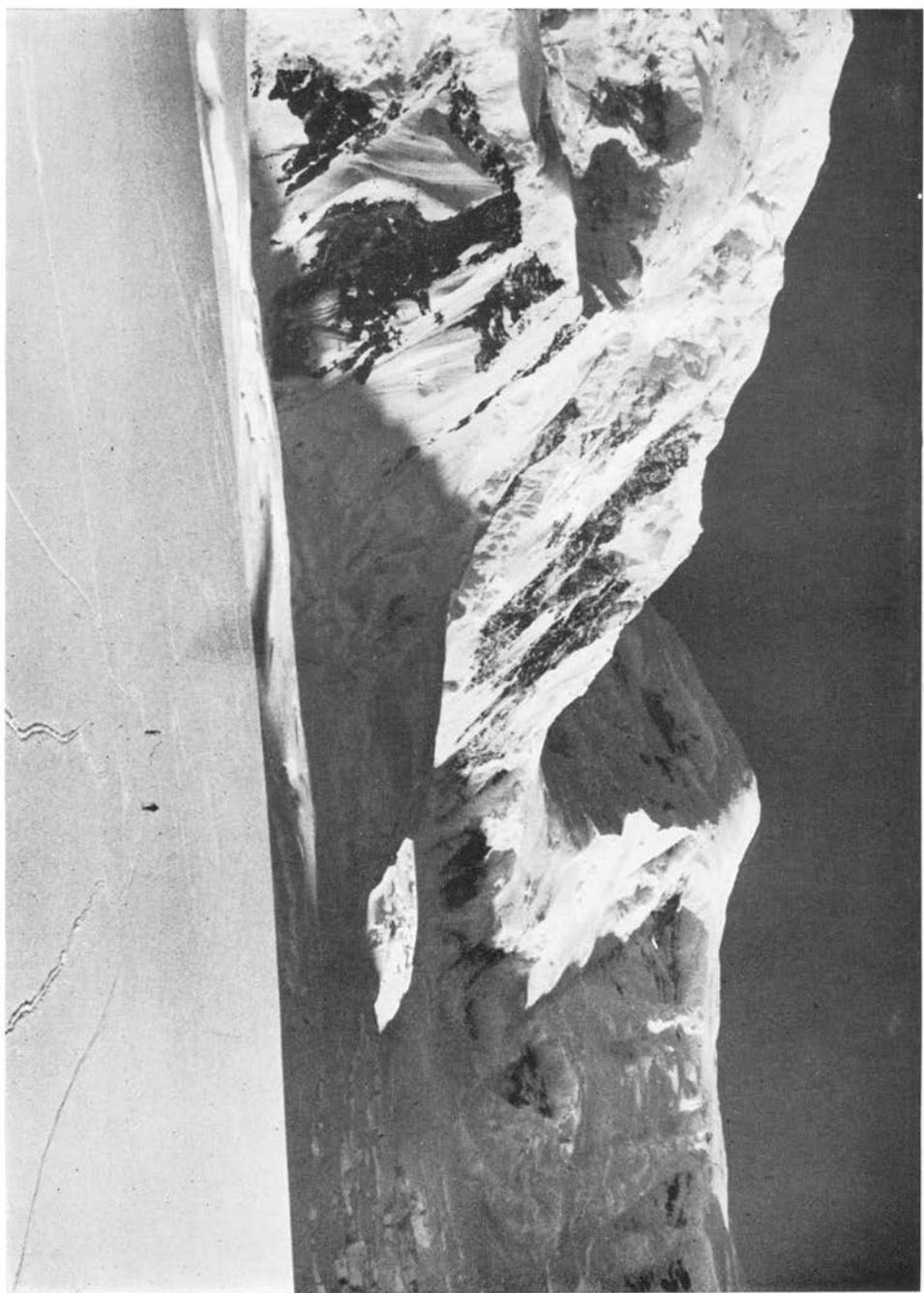
る。彼の援助は大変ありがたかった。救助隊、市役所等の挨拶、日本人有力者G木村氏、マクタット氏の歓迎パーティーに振り廻され、夜汽車、夜飛行と寝ていないのを、翌朝六時に起こされてYMCAの聖書研究会に引っぱり出される。全く眠いがハミルトンのことも考えて、ぼやきながらも出席、第二日の活躍を開始する。

先発隊を六月十四日に送り出したのに、船の都合で今日には着く予定だ。先発隊の仕事も重なって大忙、ハミルトンの活躍に助けられ、三日朝出発のめどが夜おそくなってたち、ほっとする。ハミルトンに言わせると、私達が各要所の人達に計画書を送り、挨拶しておいたのが非常に役に立ったそうだ。

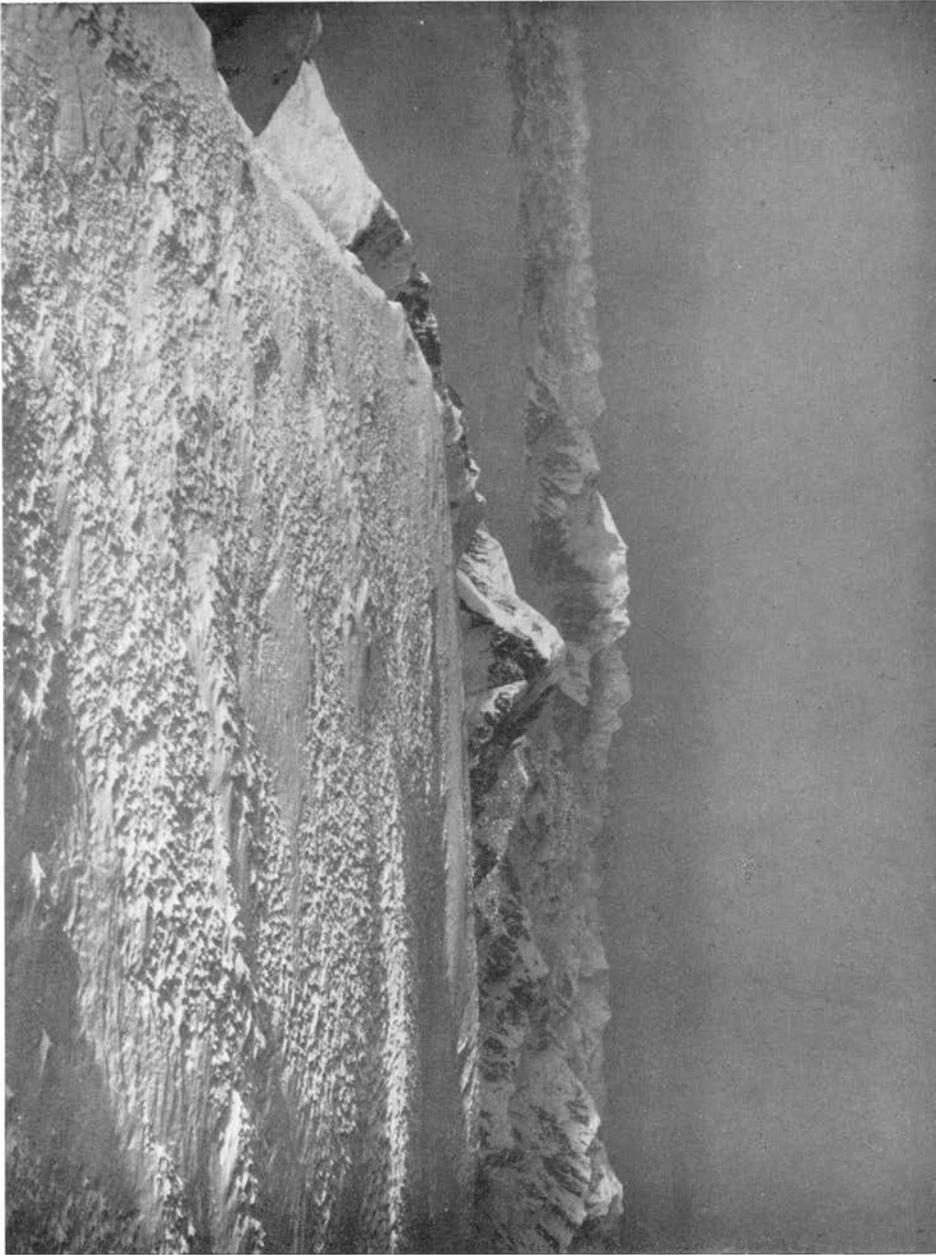
三日の朝はエア・パトロール隊のオフィシャルカーが二台で迎えに来る。港に廻して荷を引取りすぐ出発する。約三〇〇キロ八時間のドライブである。車にゆられて次々と展開される美しいアラスカ風景に、やっと山に來た落ち付いた気持ちになる。アタナスカ渓谷をさか上り、氷河がハイウエー近くまで押出されているのも見られる。ロングレーク、キングマウンテン等の山間部を過ぎて平原に入り、ハイウエーは地道となる。だだっ広い原野の平凡な眺めも沼や湖が点々と続き、寒波にのび悩んでいるやせた針葉樹林が広がるのも、アラスカのな景観と言える。途中ガルカーナのウィルソン基地による。ブッシュユパイロット、ウィルソンには、日本からの遠征隊がほとんど世話



セワード氷河の対岸から見たセント・エリアス峰とその登攀ルート  
Mt. St. Elias seen from the Seward Glacier and its climbing route.



ペーシヤンゾから望んだニュートン峰とセント・エリアス峰 (右)  
Mt. St. Elias (right) and Mt. Newton (left) seen from the Base Camp.



セント・エラアス峰の頂上から見たバンクーバー峰(中央)、オーガスタ峰(中央下)及びクック峰(右端)  
Mt. Augusta (14,070ft.)(center), Mt. Vancouver (15,700ft.)(above Augusta) and Mt. Cook  
(13,760ft.)(extreme right) seen from the top of Mt. St. Elias.



第4キャンプから見上げるセント・エリヤス、写真の下部に見えるのが難所の瘦尾根  
Looking up from Camp IV on Mt. St. Elias. The most difficult part of the ridge is shown in the lower part.

になり、その実力は高く評価されている。ベースまで早く入りたい私達にとっては、彼の輸送計画が気になる。広い飛行場の片隅に彼の小さな事務所と格納庫がある。天気が悪いのでしばらく待たされる事を覚悟して、更にチチナ飛行場まで走る。ハイウエーをはずれると、兎やムースの横切る小さな悪路であるが、一段と山に近づいた感じで楽しい。夕方おそく、これが飛行場かと驚く程佳しい所に着く。カドーバー・エアラインの小さな格納庫がなければ、河原かと間違えるばかりである。雨の中でやっと暗くなった十一時頃食事も終り、テントに全員もぐり込む。この小さな飛行場に四、五、六の三日間を過す。時雨のばらつくうつとうしい日が過ぎ、いささかあせり気味の七日の朝早く、ウィルソンからの連絡で全員この地を離れることが出来た。チチナ飛行場からベースキャンプまでは直線距離約三〇〇キロ、二時間半の飛行である。先ず野村君がパイパー機で直接セワード氷河へ、次に続く者はセスナ機で一たん途中のタナリバーまで約一時間飛び、氷河地帯を往復するパイパー機に中継される。アラスカ登山の特徴の一つであるこの飛行は、アプローチの楽しみをなくしはするが、また別な美しい時間を持たしてくれて、その上時間の節約にもなることが大きな魅力である。飛び立つとすぐ、ランゲル、ブラックバーン等五〇〇〇メートルの山々が大きく迫り、ベアー、ボナ等も素晴らしい。金の余っている方はウィルソンに言えば、どこでも飛んで

くれる。山人達の特別観光ルートとして推薦しておく。

料金は非常に高いようだが、足もとを見るようなことはなく、飛行一時間当りが約三五ドルである。特にパークレー・アイスフィールドの上空は良い。真白な大きい氷河地帯がアラスカの山の特徴であり、極地帯を除けばこのようなものは見られないであろう。七日の夕方ベースキャンプに入ったのは私の機が最終で、ベースに五名、途中のタナリバーに四名が残る。熊の巣だというタナーで雨の八日を過した連中も、九日の午前中にベースキャンプに集合出来た。九名の人員と約八〇〇キロログラムの荷を、タナリバーからパイパー機で八回、セスナ機で二回輸送してくれた。往きの全飛行機が一〇〇ドルであった。

## 登山日誌

全員集合出来た九日の午後は、トレーニングと氷河訓練とルート偵察を兼ねて、ベースキャンプ上部のフォール状になった氷河を登る。翌十日から登頂を終り全員ベースに集合の二十一日までの十二日間を、野村君と登頂隊員西前君の手記をまじえて、日を追って記録する。

七月十日(雪)前日の偵察と検討の結果、今日は朝から雪であるが、北壁正面ルートは充分な偵察を必要とするので後に廻すこととし、とりあえず全員で安全なニュートン尾根から一週間の予定で攻撃することとした。尾根上から正面ルートの観察

も出来るので、それを兼ね先ず隊を二分し、ニュートン尾根を野村をリーダーとして五名、他はサポートに廻り後日正面ルート攻撃隊として行動することとした。しかし、この時私達はウィルソンの見たニュートン峰頂上近くのトレースと、野村君が着陸する際、この付近を飛んで見つけたアメリカ隊のベースキャンプ跡などから、多分このパリエーションは彼等にふみにじられているだろうと想像していた。この日は濃い霧と雪にルートが見つけにくく、特に尾根末端の水河からの取り付き点に苦しみ、尾根上唯一の露岩地点にデポして帰る。

七月十一日(曇時々晴)晴れ間に見るデポ地点が遙か下部なので、今更のように山のスケールに驚く。ベースキャンプも尾根も、すっぽりと濃いガスに包まれているが、更に新しい荷を負い全員出発する。ベースから一たん水河を下り、ニュートン尾根の取り付き点までが長い。デポ地点の上のピークを越えた所に第一キャンプを建設、私と河合ドクターがベースキャンプに下る。尾根の上でもクレパスがかくれている嫌な所だ。

七月十二日(晴)野村、西前がルート工作のため先発、二時間遅れて五名のポッカ隊が出発する。毎日この形式で、ルート工作に特に日を費すことはなかった。ニュートン尾根は第一キャンプ付近から広い台状のだから登りが続くが、途中に大きなビルディング状の段が出来、その上部にも下部にも、デブリが見られる。尾根は三時間程の登りで急に細くなり、百メートル

ル程の瘦尾根となり、その突当りが百五十メートル程の壁となっている。瘦尾根も壁も氷の上に不安定な雪がのり、ルート工作に苦勞する。この壁のルート工作に約四時間を費す。この壁の上部から尾根は急に左に折れ、ニュートン頂上まで急斜面で突上げる。

瘦尾根の始まる手前にアメリカ隊の第二キャンプ跡があり、壁には固定ザイルが下がっていた。荷を負っての登攀が困難のため、そのザイルを利用してつり上げ、午後六時頃やっと壁の上の台地に第二キャンプを建設することが出来た。私達の第二キャンプはアメリカ隊の第三キャンプ地であった。麻の八ミリの固定ザイルが放置されていたり、標旗の付いていない細い竹のような棒が残っていたりする。西前、山根両隊員が第一キャンプに下り、他は第二キャンプに入る。

七月十三日(晴)昨日、ベースキャンプでは河合、浅野の両名がハンドトーカーと双眼鏡で第二キャンプ建設を見守っていたが、最後の壁の工作時間が延びるのにいららさせられた。ハンドトーカーの調子は上々で、今回は特にベースから全部のルートが見渡せるので、標高差二〇〇〇メートルを越した地点でも自由に連絡することが出来た。

ニュートン隊は第三キャンプ建設を頂上に予定して出発、第一キャンプの西前、山根隊員は第二を越し第三キャンプへの荷上げをやる。第二キャンプ上部の急な登りは、次々とクレパス

があらわれブロックにはばまれるが、やっと六時過ぎに、頂上直下の四〇〇メートル地点に第三キャンプが建設された。日の暮れないアラスカの夏は長時間行動出来ることはありがたいが、連日の十二時間近い行動に登頂隊はへばって来たらしい。毎日毎日の晴天に追われていることもある。交信する野村副隊長の声からも判断出来た。ベースキャンプの河合、浅野は北壁正面ルートの荷上げと偵察に登る。氷河の右岸近くにある中心部をゆっくりと登り、雪崩の観察をやりながら正面ルートへの取付点をさがす。正面上部に大きく覆いかぶさる、厚み百メートルを越す大氷塊が崩れ落ちる雪崩に、壁の近くは深くえぐられていて、尾根の上部にもデブリのあとが見える。これはなかなか取付きが大変だし危険が大きい。更によく偵察せねばならないと決心する。

氷河から見上げるニュートン尾根はなかなか威力がある。眼鏡には隊員の活躍が点々と見られ、その成功を祈った。雪崩の危険の少ない、正面尾根が充分観察出来る地点にデポしてベースへと下る。

連絡によると西前、山根は第一キャンプに下り、明日はベースに帰るとのことであった。第三キャンプでは全員に軽い高度の影響が出て来たらしい。ベースキャンプの温度は夕方急に下るが、マイナス五度位にしかならない。日中は平均プラス十度位である。

七月十四日(晴)この日も朝早くから全く雲の無い快晴であった。ラッセル・コルに第四キャンプを建設する予定だ。野村以下五名は比較的元気な丈田とハミルトンを先発させ、ニュートン頂上から尾根筋を下り気味に進む。第二キャンプの天幕は第三となり、更にテントを畳んでラッセル・コルを目指す。午後三時頃、一五〇メートル落ちている壁と、それに続く想像外に悪いのこぎり状の瘦尾根に当るその場所には、例のアメリカ隊のキャンプ跡もあり資材も放置されているが、それから前進した跡は見当らない。夕方の連絡で、野村君から、アメリカ隊はこの場所から前進していない吉報と同時に、やや悲観的なキャンプ前進不能の観測が伝えられて来る。丈田、尾田両隊員は壁にルートを切り開く努力を重ねてくれたらしいが、この壁の下降にも相当時間を費すだろうと報告して来る。私は野村君との連絡で、北壁正面尾根への挑戦は断念しても、アメリカ隊が前進していない以上、このルートに全力を注ぐ決心をして、西前、山根両隊員に第四キャンプへの応援を命ずることとする。野村君は翌十五日の第一回攻撃の結果を見てからの意見であったが、私は天候の崩れることを心配して、まだ十分に疲れの回復していない両隊員を浅野、河合がサポートして、翌日第二キャンプに入る決心をした。この夜、ベースキャンプは四名となり、久しぶりで楽しい雰囲気にも包まれた。しかし午後になると高空に出る雲に天気の前崩れを予想して、私には何となく不安な夜で

あった。

七月十五日(晴)早くから明ける外に出て見ると、昨日の不安な雲は一切なく、又もやからりとした天気である。第四キャンプとの交信は、第一回の攻撃隊として丈田、川本、ハミルトンの三名が出発したことを伝える。今日は第二キャンプまでだとゆっくりと仕度して四人で出発する。西前、山根が至極元気なのが頼もしい。

竹類の持込みを心配して、ジュラルミンの棒で標旗を立てたが、連日の好天で皆倒れそうになっている。一つ一つ修正して前進する。尾根末端へのルートも短縮した。第一キャンプは畳み、第二キャンプとして使用することとし、食料その他の貯蔵品も第二へ移す。第二キャンプ途中のアイスビルディングも、幸運にもスノーブリッジを見付け、フィックスを付けて越している。瘦尾根の不安定な雪と、その上の壁の雪にルート工作時間の長かったことを思い出させた。

アメリカ隊の固定ザイルは晒してない麻で摩擦力が強く、合成繊維と違う好さを感じながら使用する。第二キャンプからは目の下にベースキャンプが小さい点と見え、セント・エライアス氷河の泡立ちもよく観察出来る。ベースキャンプ下のセウード氷河が大きく広がり、標高差四千メートルのローガン峰へと上って行くのが雄大に眺められる。

七月十六日(晴)第四キャンプに登る西前、山根を先発させ

河合、浅野はゆっくりとニュートン頂上を目ざす。第四との交信は第一回登頂の失敗を告げ、しかも瘦尾根の状態が非常に悪いことを知らせて来る。西前、山根両隊員は「何とかなるでしょう」とけろりとしていた。河合ドクターと二人の、のんびりした登高も次第に高度をかせぎ、四〇〇〇メートル近くで元気な丈田、尾田、ハミルトンと久しぶりの対面をする。三人は今日中にベースキャンプに下るのだ。すっかり日に焼け唇などぶやけている。わずか五日ぶりに顔を会わせても、こんなに嬉しいものか、いつものことながら山の中のあの気持ちは好きである。再会後一時間でニュートン頂上へ出ると、急に腰が抜けたような喜びが明るい展望とともにやってくる。マラスピナ氷河、太平洋、パンクーパー峰にクック峰、それに尾根続きのジャンネット峰、オーガスタ峰等、山の喜びは久しぶりだ。セント・エライアスはますます高く、圧倒的な威力をもってかぶさって来る。この広大な氷河に包まれた地帯は、足下のセント・エライアス氷河から東へセワード氷河の大きな流れとなり、ローガン峰の向うからハーバード氷河が流れ込み、南に細く急に泡立ちながらマラスピナ氷河の広大な三角州となっている。西を見るとコロンプス氷河はパークレイ・フィールドとなり、はるかに消えている。充分に頂きを楽しんだ二人は西前、山根の健闘を祈って下山、六時頃第二キャンプに入る。

七月十七日(晴)もう一日だけの晴を祈っていたが、幸い今

日も雲一つない快晴である。ハンドトーカーは昨日からの準備と、早朝の登頂隊の出発を告げる。心配げに報告する野村君も、どうやら難関を突破してくれた様子と知らせてくる。ここに西前君の登頂手記を記しておく。

### 登頂報告 西前四郎

午前二時、激しい風の音に四人とも目が覚めてしまった。昨日から案じていたように一週間続きの好天も崩れてきたのだらうか。西前、山根が最少限の荷で一氣に頂上を窺うことにして、三時第四キャンプを出る。下の氷壁はフィックスロープにすがって十分とかわらない。四時川本隊のトレースに導かれ、堅くしまった尾根を「人差指」に達する。右手は雪庇が張り出し、左手は水の上にザラメ雪が凍りついた急斜面である。四ピッチ、一〇〇メートル程ツルベで行くと「小指」の急な下りが難かしく四〇メートルのフィックスを残す。ここから先もまた同じような指が並んでいて、雪庇を落したあとを網渡りよりしく下って行く箇所等、両側が下の氷河まで千メートルもすっぽり切れ落ちているだけに、今まで経験したことのない「悪さ」だった。ラッセル・コル六時四十分。最初の人差指から五〇〇メートル足らずだが、かなり疲れてしまった。幸い気づかっていた雲も消えて、今日も暖かい天気である。ひろびろとした雪のコルでゆっくり休んだ後、テルモス、フィックスロー

プ、ピトン、防寒具など思い切って残して行く。頂上まで高度差一七〇〇メートル。難かしい所はないが、終始一五一三〇センチ程もぐるので、疲れをおそれて努めてゆっくり登る。五〇〇メートルのアイスブロック帯で一ピッチ、ステップを切ったのが応えて、二人とも急に高度の影響を感じ出した。(三時)そこから頂上へはゆるい大斜面が続いているだけだが、足の方は全くはかどらない。最後に西側へ大きくまわりこんで頂上に立ったのは、八時二十分だった。

ピッケルやフィックス・バーに結んだ旗が赤々と夕陽をうけてはためく。隊長が一番喜んでくれるだろうが、下から見えているだろうか。何回も下へ向ってピッケルを振ってみる。うすれていく陽差しを追いかけるように、いくつも露出を変えて写真をとり、預って来た写真や記念品を堅雪の下に埋めて頂上後にする。九時の日没と同時に、体が寒さでこわばってしまった。今日中にコルまで降りられるつもりだったが、天気もまだ持ちそうなので、ビバークの誘惑に負けてしまう。九時四十分、約五二〇〇メートル。雪を掘り下げてツェルトを張る。高度のせいか、ローソクを二本ともしていても殆んど温まらず、一晚中震えていた。

翌十八日午前三時の日の出から更に二時間、暖かくなるのを待つて出発する。途中スタカット二箇所、グリセードも交えて十時ラッセルのコル。更に二度と通る気のしない瘦尾根を登っ

て、先輩の出迎えを受ける。握手。疲れた体に第四キャンプ下の氷壁が実に長かった。四時第四キャンプ着。(以上西前記)

七月十八日(晴) 日もまだ晴れている。登頂隊も無事第四キャンプに帰った。野村君と種々相談した結果、川本、山根隊員は明十八日ベースに下り、新らしい食料補給に丈田、尾田隊員を登らせる。十九日はキャンプをニュートン頂上直下に移し、二十日はニュートン峰の東にあるジャネット西峰と思われる明瞭なピークに、野村、西前、丈田、尾田の四名で往復することとなった。

七月十九日(晴)。

七月二十日(晴) まだ続く天気、いささかあきれ気味である。このような幸運が待っているととは思いがけないことだった。ニュートン隊はベースから明瞭に見えるピーク(初登頂だと考えられるがジャネット峰か無名峰か不明)を目指して出発する。ベース組は川本、河合、浅野の三名でセワード氷河を渡り、テンプル・マウンテンと記されているピークに行く。スキーを付けてベースキャンプの台地を下り、広大な氷河を横断する。図上で約十四キロある。ザラメ状の氷河の上を懸命にスキーを滑らせるが、行けども行けども遠くなる感じで、どれ程進んだか見当もつかない。次第に高くなるエライアスが見事で、野村隊の登っているピークもその全容が見えて来る。

氷河は流れに従い大きいうねりを持っている。スキーは登りにかかり、後滑りしたり突然滑り出したりする。ベースで吹いていない風も、氷河の中心部では冷たく流れている。冬のこの広大な氷河の状況を想像して、その厳しさを考えた。対岸の台上に登ると更にその先きに大きな氷河があり、ローガンはまだるか向うで遠い。

セント・エライアス山群の観察をゆっくりと楽しみみ返す。交信によるとジャネット登頂には成功したらしい。明日は全員集合出来ると思うと嬉しい。

七月二十一日(晴) ちょうどこれで十日間の晴天が続いたことになる。朝から調理士が腕によりをかけ、ばらずしを作っている。一時に野村、西前、尾田、丈田が下りて来る。嬉しい食事が出来た。全員全くの事故無し。最後に残っていたワイスキーの乾杯で祝う。

## 後記

十日間続いた晴天も翌二十二日は崩れだし、夕方にはすっかり雪となった。残されている正面尾根への未練も、これですっかり流された感じである。残念そうな西前君等を説き伏せ、全員に中止を命じ、二十六日の飛行便を待つこととなる。

この山行では登山中晴天で、下るとすっかり崩れ、二十六日の下り便の来る日になって、晴れ出すという幸運が一番嬉しい

ことであつた。その上ハミルトン君のおかげで意外にドルの節約が出来、全員でアメリカ旅行を楽しめたのも隊長として嬉しいことだつた。経費の節約のために船便を捜すことが大変で、予定していた船も他の隊にさらわれたり、不定期便の貨物船ばかりで予定がたらず困つた。今後はアラスカに行く便船が多くなり、往復二十四万円の飛行機代を節約出来るならば、一人当り二十万円位の山行を計画することは可能である。

七月を中心とするならば、装備等は日本の冬山の物を持って行けば良く、飛行機で行くならば三十五万円位でも楽しむことが出来るのではないか。アメリカの山人達がニューヨークから出かけるより、日本はアラスカに近い。アラスカの山々で、庶民の遠征登山を考へて来たかつたのであるが、いささか贅沢に流れ、世間に甘えた登山となつたことを羞かしく思つている。又もや空軍のトラックにゆられて、二十八日に全員アンカレッジに帰ることが出来て、この登山は終つた。最後にアメリカ山岳会のウォッシュバーン氏やエバレット氏からの暖かい助言と支持を感謝すると共に、今後この地の良いグレンデとなることを祈る。

## 山 岳 第五十九年

(二九六五年三月刊)

古代の立山をめぐる

サイバルの登頂と西北ネパールの横断

トウインズの試登

シャルプの登頂と東北ネパール山群の踏査

バルトロ・カンリ登頂

ヌンプルの登頂

P二九の東面

ナラカンカール紀行

ニューギニア中央高地の旅

コルデイエラ・レアル(一九六三年)

ヒムルン・ヒマールの試登

カンデ・ヒウンチユリの試登

鷲の国の瞥見

近藤茂吉氏の黒部横断

「わが山旅五十年」

追悼 吉田竹志氏(藤島敏男)、西岡一雄氏(諏訪多栄蔵・加納一郎)、高木正孝氏(田口二郎・田中薫)、田中秀作氏

会務報告・英文梗概

付録IIネパール・ヒマラヤ東北部の地図(十万分の一)(折込)

A5判三〇〇頁・写真四八葉(内原色版一葉・地図一九面・定価

千二百円

★御希望の方は本会事務局或いは茗溪堂でお求め下さい。

# ローガン峰東稜

(一九六四年)

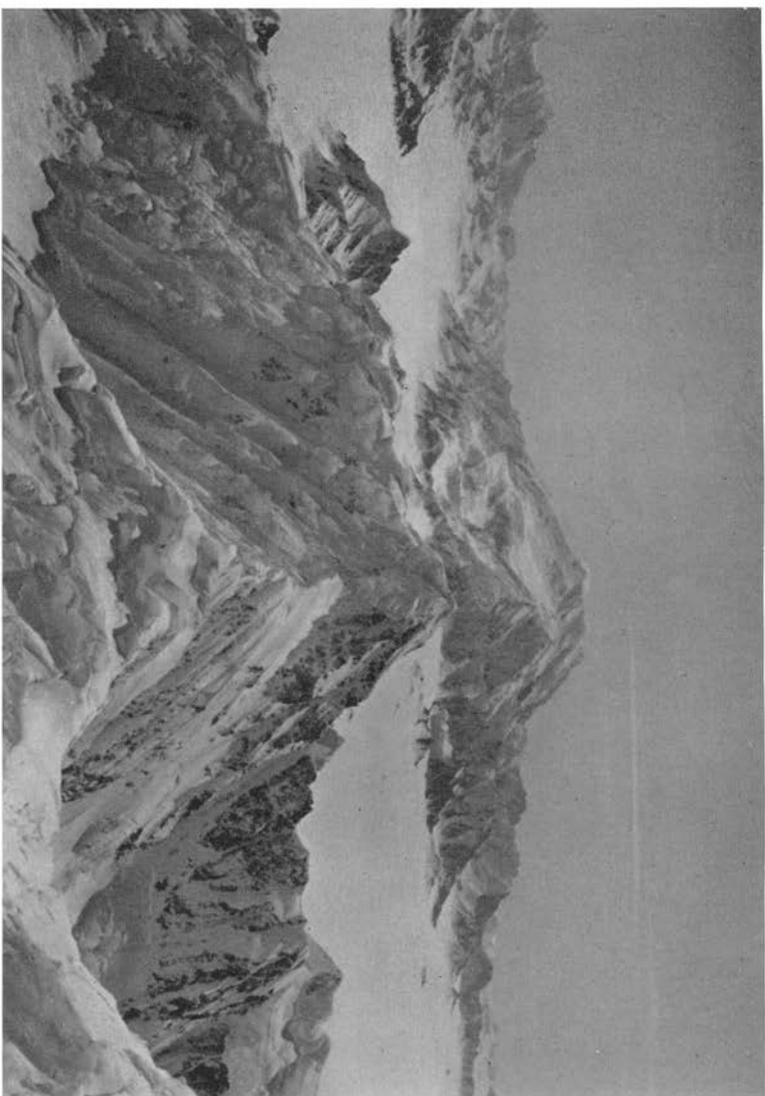
室田欣一

関西学院大学山岳部は学院創立七五周年を記念して、学院ゆかりの地カナダに学生隊を送ることになった。我々の目的は、カナダの最高峰ローガン Mt. Logan (六〇五〇メートル) を新ルートから登頂することと、ユーコン領州内のアメリカ原住民遺跡の調査であった。学術調査の報告は別の機会にゆずり、ここではローガン峰登頂の模様について記しておこう。

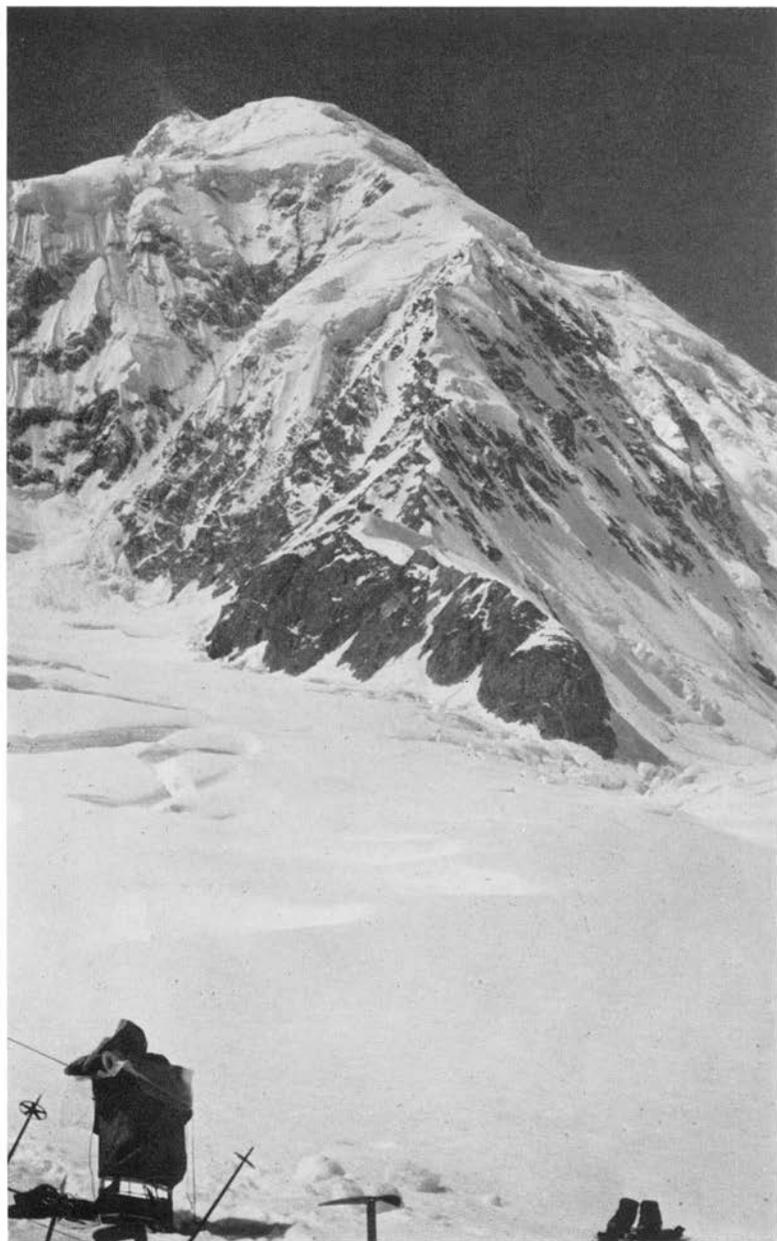
ローガン峰はカナダの最高峰であり、北米大陸ではアラスカのマッキンレーに次ぐ高さをも有しており、ユーコン領州の西南端(北緯六〇度三五分、西経一四〇度二五分)に位置している。その頂上稜線は一六キロメートルの長さを有し、中央峰、西峰、東峰の三つのピークから成っている。その巨大な雪庇をまとった輝やく氷壁は、北米第一の壮麗な光景であろう。この山域は世界有数の氷河地域であり、ローガン周辺にもローガン Logan 氷河、ハッバード Hubbard 氷河、カスカワルシュ

Kaskawalsch 氷河、セワード Seward 氷河等の大水河が分布しており、いずれの氷河も学問的に興味ある素材を提供しているが、これまでは部分的に探査されているに過ぎない。ローガン峰は一九二五年、カナダ・アメリカ合同隊が初登頂して以来、一九六三年夏までに西方から中央峰へ四隊が登頂し、東稜からは一九五七年以来三隊が東峰に達している。一九六四年は我々の東稜から中央峰への初登と共に、学習院大隊の西方からの登頂、アメリカ隊の北稜からの登頂もあり、ローガンの登攀に画期的な一頁を加えることになった。

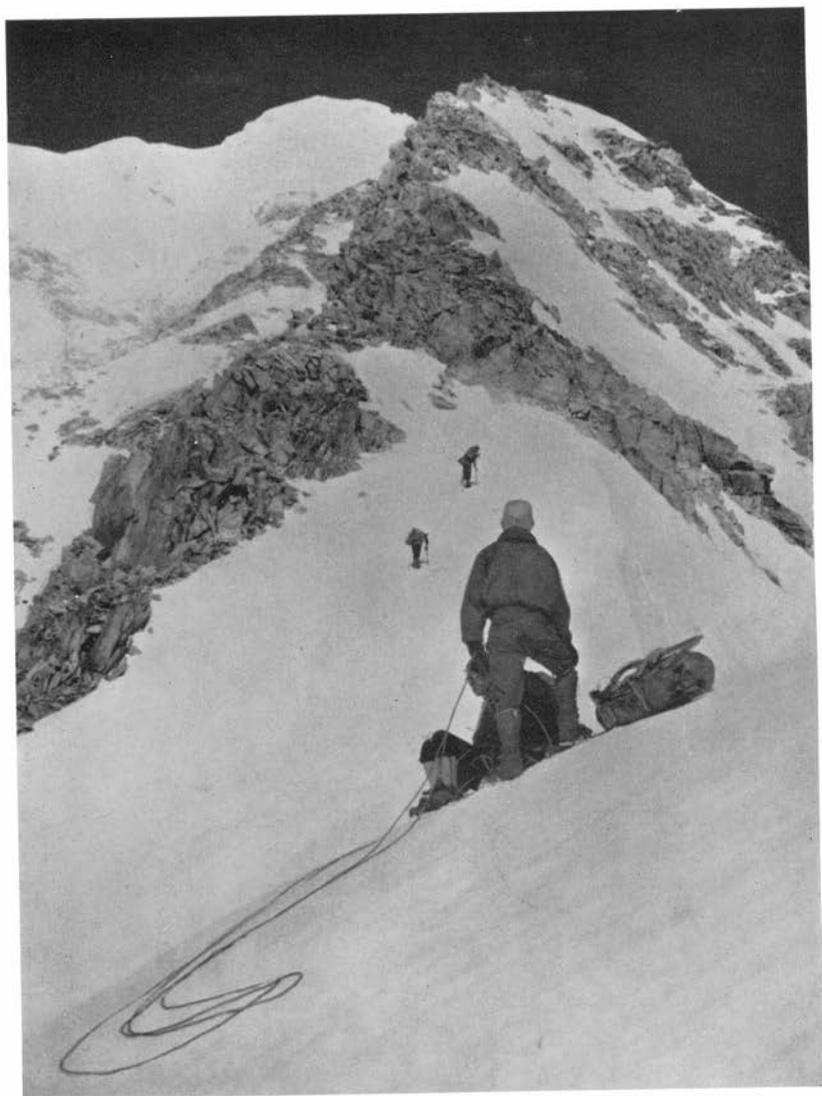
アプローチとしては(1)太平洋岸からマラスピナ Malaspina 氷河、セワード氷河経由、(2)アラスカのチチナ谷からローガン氷河経由、(3)カナダのクルアーン Kurane 湖畔からカスカワルシュ氷河経由の三つが考えられたが、我々と同行することになったカナダ人ガイドのハンス・モーザー氏の助言も



第2 キャンプから見たローガン峰南東稜と遙かにバンクーバー峰 (関西学院大学)  
The south-east ridge of Mt. Logan (6050 m) seen from Camp II (3780 m), with Mt.  
Vancouver in the background.



ローガン峰東稜（BCから）（関西学院大学）  
The East Ridge of Mt. Logan seen from the Base-camp.



ローガン峰東稜の登高（2800m附近）（関西学院大学）  
Climbing up the East Ridge of Mt. Logan at about 2800m  
in height.



第3キャンプからマッカーサー峰を望む (関西学院大学)  
The southern aspect of Mt. McArthur (4389m) seen from  
Camp III.



ローガン中央峰(右)とセント・エライアス峰(左) (関西学院大学)  
Central Peak of Mt. Logan(6050m) (right) and Mt. St.  
Elias (5488m) (left).

あつて、カナダのクルアーネ湖畔からカスカワルシユ氷河を経由するルートを選んだ。

## アブローチ

五月三日夕刻、連日の荷物整理も終わり、在留邦人による壮行会に招待されて楽しい時を過し、直ちにトラックと乗用車に分乗して、隊長以下九名でエドモントンからアラスカ・ハイウェイに向う。四名が交互にハンドルを握り、クルアーネ湖畔までの約二四〇〇キロメートルを三日間で走破し、六月二日クルアーネ湖畔に到着。この間トラックが道路から転落して、あわやという所で命びろいをしたこともあったが、大した損害もなく済んだ。ただ私だけが指に裂傷を負い、徒歩による入山は無理となつたので、荷物についてゆく今井と共に飛行機でベース・キャンプへ入ることに、計画を変更しなければならなくなつた。凍結した湖畔にある、北米極地研究所 Arctic Institute of North America の横にテントを張り、物資の最終的な整理をする。

翌三日も小雨がぱらつき、うっとうしい天気であつたが、ハンス・モーザーと五名の隊員はスリムズ河からローガン東稜基部のBC予定地まで、徒歩で入山するために出発する。その後グレアム隊長と我々二名は、先日の事故で多少いたんだトラックに物資を積み、アラスカのグレナレンへ向つて更に北上し

た。六月四日は飛行場の格納庫の中でシェラーフ・ザックにくるまつて眠り、翌日午後軽飛行機でチチナ谷をさかのぼり、ローガン氷河末端の河原に二人でキャンプする。パイロットが帰つて、我々二人だけになると急に寂しくなり、先刻聞かされた熊の恐ろしさが身にせまつてくるようであつた。

六月七日、天候が回復すると共に、いよいよBC予定地への空輸が始まる。六回の空輸で全装備を運び終り、ここへ仮BCを作つた。明日から徒歩部隊が到着するまでに、荷物を更に東稜に近い所(標高三三〇〇メートル)まで運んでBCを建設することにする。二人共初めて氷河を踏んだので、すっかり勘が狂つて、ここから東稜の取付までどの位の距離があるのか、見当もつかない始末である。

六月十日は昨日の雨につづく悪天候であるが、涼しいのでボッカには快適であつた。そろそろ徒歩隊が見えてもよい頃だと考えながら、無言でスキーの先端を一心に見つめてボッカを続ける。退屈だが、これを一週間も続けている徒歩の隊員達のことを思うと、贅沢なことと言えない。午後氷河の彼方に双眼鏡で黒点を見つける。確かに人間だ。我々の仲間だ。しかしなかなか近寄つてこない。なんと広い氷河であろうか。遂に午後七時三十分、全員BCに揃つた。皆真黒に日焼けし、精悍な顔になつている。アブローチは予想に反して悪条件であつたらしく、ガイドのモーザーまでが帰りは飛行機に乗るようになると言い出す

始末である。

## 東峰登頂

六月一日は終日食糧、装備の最終的な整理、点検を行った。一九五九年に、このリッジを登って東峰に達したモーザーの経験を尊重して、彼の意見に従って食糧、装備を大幅に軽量化した。彼の計画では、一八日間で中央峰を登ってBCまで下山してこれるといのである。我々は四〇日以上の食糧を準備している、下山後は近くの山を漁ろうと考えていた。勿論余力が残っている場合の話ではあるが。

氷河上では昼間は気温が上昇し、雪の状態が悪いので、能率を上げるため夜間出発し、午前中で行動を打ち切ることにした。六月頃には、この辺りでは二〇時間位明るく、真夜中でもヘッド・ランプは不要であった。このためであろうか、我々とはかく夜更しをしがちであった。

六月一二日、寝袋に入ったと思うや、たちまち朝飯の時間になり、午前三時全員スキーを履いて出発する。五〇〇メートル程進んだだけで第一のクレバスにさえぎられてアイゼンに履き変える。ここから二人ずつアンザイレンし、更に東稜と南東稜にはさまれた氷河をつめる。モーザーは巧みにヒドン・クレバスを避けながら、一九五九年彼が登った取付の斜面へと我々を導いてくれる。この南側斜面は、高度差約二〇〇メートルの氷

化した壁状のルンゼで、平均斜度四〇度位であり、中程に水平に幅三メートルのクレバスが走り、上部程急傾斜である。東稜の北斜面から取付いたアメリカ隊が、我々のC I予定地(三二四〇メートル)までに三つの前進キャンプを設けていることからみても、このルートの優れていることが明らかであろう。

氷河上のクレバスを越えるのに手間どり、ルンゼの下に達した時は、上部の岩場に陽が差して落石が断続的に起こり始めて、この登攀は非常に危険となってきた。落石の間を縫って遂に東稜上に出た。そこで一息入れようとしたが当が外れた。荷物を置いてのんびりと煙草をふかせるような場所は、何処にもないのである。アメリカ隊はどこにテントを張ったのだろうか。我々にも、日本の山とこの辺りの山の違いがやっと分って来た。今頃気が付くとは―。休む暇もなく浮石だらけの岩稜を登って、標高三〇〇〇メートルのやや平らなガラ場にデポする。このデポ地から、下の氷河の上に小さく黒く見える我々のBCを眺めた一同のはしゃぎよう。なんと無邪気な連中であらう。

BCへ帰って休養中、ローガン北面へアメリカ隊を送り込んだパイロットのウィルソンが、我々の様子を見に立ち寄った。テントから急いで飛出そうとしたモーザーが、転倒して左膝を強打して歩行不能となり、直ちにその飛行機で下山しなければならぬ破目になった。彼を失うことは我々にとって大きな痛手

ではあるが、それにもましてやり切れないのは、この遠征を支援して下さった関係者に与えるショックを考える時である。あまりにも突然のことなので対策も定まらないが、とにかく隊員の気持をひきたて再びローガンに向おうと決心した。

翌日は気分転換のため終日スキーをして遊ぶ。明日からいよいよローガン峰アタックだ。我々の力に相応しい登り方で、セーフティ・ファーストをモットーにしよう。翌日から連日悪天候で、一八日も空模様はかんばしくなかったが視界がきくのを幸いに、午前四時に出発する。一張のテントに予備の食糧、装備を詰め込み、パイロットのウィルソン宛に、我々を七月一日頃に迎えにくるようにと依頼した手紙と、事務局、友人達への便りを同封した袋を、テントの支柱にぶらさげておく。我々を六月二六日に迎えにくるようにと、先日ウィルソンに言っておいたのだが、この調子では、とてもその頃までに登頂出来そうにないので、メッセージを残したのである。

先日のデポ地までは、二回目であったためか問題なく通過し、その後も二箇所フィックス・ロープを張ったのみで、三二四〇メートルの小さな懸垂氷河の上にCⅠを建設した。取付からここまでの間には、テントを張れるような場所は全くなかった。翌日は又しても雪で、早くも食糧の節約を計ることにする。

六月二〇日、雪の中を先日のデポを回収し、荷上げに向う。

CⅠから上部は急に傾斜が増し氷壁となっている。足場作りに手間どり、わずかに一五〇メートル高度を上げただけで、霧にまかれて退却。六月二二日、昨日来の雪が少しおさまったので午前五時CⅠを撤収してCⅡ建設に向う。今日もコンティニューアスで歩ける所は全くなく、階段状の氷壁にてこずり、最後の岩峰に達した頃には吹雪となる。テントを張る場所どころか、荷を置く所もなく、やむを得ず氷のナイフ・エッジを二〇メートル進んだところで、大きな懸垂氷河の上に絶好のキャンプ地を見い出す。高度計は三七八〇メートルを示し、これまでの最高到達地点だと喜び合う。しかし、一六時間もかかって地吹雪の中を、先のルートの見通しもなくテントを上げる危険を痛感し、反省させられた。六月二四日、ガスの中をルート工作隊二名の後を追って、五名のボッカ隊が続く。部分的には七〇度に達する急な氷壁の連続ではかどらず、四〇二〇メートルの地点にデポ。これから先はあまり問題はないように思うが、気はゆるめない。

六月二六日、CⅢ建設に向う。デポ地から上部は広く、ゆるい雪の尾根となり、全員好調に四四〇〇メートルのアイス・ドーム直下に達し、CⅢを建設し、その後下のデポも回収する。眼前のマッカーサー Mt. McArthur (四三八九メートル)の美しい双耳峰が夕日に輝き、ローガン南東稜の向うに姿を見せたセワード氷河の大雪原は、昨日までの苦闘を忘れさせてくれ

る。

六月二十七日、荷上げに向ったがドームの斜面で霧にまかれ引返す。夕方、いつものように晴れてきたので、今井他三名をルート工作に出発させる。大セラックス帯の下を左へ三〇〇メートル程トラバースし、クレバスにかかったスノー・ブリッジを渡って、上部のクラストした雪面に出る。四時間でアイス・ドーム頂上の四八〇〇メートルに到達し、東峰の全容を確認して夜半CⅢに帰ってきた。もう頂上は目前だと思い、キャンプは喜びに包まれた。

六月二十八日、全員で荷上げをして、アイス・ドームの大雪原を前衛峰の下でトラバースして、東峰の直下へ向って進む。写真で見たナンガ・バルバットのジルバー・ザッテルを思いおこすような広大さである。霧にまかれた時のために、赤旗を三〇メートルおきに立てていく。

六月二十九日、高度五〇〇〇メートルの地点にCⅣを設ける。

全員好調で、高山病の気配なし。食欲も旺盛で、食糧制限が最もこたえる。翌日から猛烈な吹雪で行動は出来ない。この高度でふぶかれると全くこたえる。食糧もほとんど尽きたが、どうにもならない。七月三日、天候回復のきざしが見えたので全員東峰アタックに出発したが、すぐ吹雪となりキャンプに引返す。午後五時、再度天候が回復してきたので、今井、千田、小西、三戸田を出発させる。千田は調子が悪く、しばらくして帰

ってきた。残りの三名はそのままアタックに向い、悪天候の中を一寸刻みに前進したが、五七〇〇メートルの地点で登頂を断念し深夜キャンプに戻ってきた。最後の機会もこうしてつぶれた。後は撤収のみだ。BCから再び登りなおすのだ。

七月四日、目が覚めると快晴である。昨日温存していた大沼、新村が元気なので、撤収の前に東峰だけでもと思い、アタックの許可を与える。これを見た他の隊員も行くのを望んだので、結局全員を出発させる。技術的に何等問題のないルートなので、各自ザイルをはずして、自分のペースで歩き、四時間で東峰に立つ。遠征前の春山合宿で不慮の死をとげた仲間、高田君の遺品を頂上に埋め、黙祷をささげる。コル一つ隔てた中央峰は予想以上に遠く、再度出なおすことにする。型通りの記念撮影も、東峰では感激がうすかった。高度のためか食欲不振で、この二日間食糧が減っていなかったもので、明日よい天気であれば、もう一度中央峰アタックを試みようと思心する。

七月五日、ガスのためアタックを諦め、撤収と定める。再度のアタックのためテント一張と、撤収に不要な装備をデポしたので荷は軽い。深夜CⅢ・CⅡ間のデポ地に着きテントを張る。ウエファースと紅茶しか残っておらず、最低の一夜であった。

七月六日、氷壁に積った雪がくさって最悪の状態である。昼頃飛行機が飛来し、何度もBC附近に着陸する。どこかの隊を運んできたようである。我々の姿も確認してくれたから、日本で

も心配せずに済むだろうと考える。早く下りようと思うが、気ばかりあせって、この日もCⅡまで下りただけで日が暮れた。七月七日、新雪のためかえって下りやすくなり、夜の二〇時三〇分に着く。BCの横には二人用テントがあり、そこから日本語が飛び出したので我々は全く驚いた。福岡の修猷館高校OB隊の南条氏であった。七月八日、再度のアタックのための食糧も乏しく、下山予定日も過ぎていたので、グレアム隊長や日本の事務局とも連絡をとった方が良くと考え、今井、千田、三戸田を下山させることにする。七月一日午後、天候が回復したので三名を下山させる。ここまで苦労を共にした隊員と別れるのはつらいが、これも仕方ない。

福岡隊の他の三名は、我々と同じアプローチ・ルートをとっているらしいが、まだ到着しない。いささか心配になる。南条さんと昼食を共にし、日本のことを色々話す。彼は文筆業だけあって我々を退屈させない。彼に、日本隊同志が競争するのはやめて、一緒に登ろうと提案して、彼の仲間が到着するのを待つことにした。

### 中央峰登頂

七月一四日、昨日まで待ったが福岡隊の三名は到着しないので、昨夜南条氏に先に出発する旨伝える。素晴らしい好天に恵まれ、前回のCⅡまで一五時間で登る。リッジの状態も雪がふえ

たため良くなっているが、我々がルートに慣れたのも理由になるだろう。七月一五日、今日も快晴、前回には考えられなかった好天続きた。CⅡ上部の氷壁はフィックス・ロープをはずしていたので、時間をとられ、CⅢへは午後五時四〇分に到着した。テントはCⅡに残してきており、CⅣへは五時間位かかりそうなので引返すか否かと迷ったが、結局CⅣへ向うことにする。ツェルト・ザックをかぶり、夕食をとった後出発した。アイス・ドームの頭へ出たのは午後一〇時。広いプラトローを二時間、白夜の中を黙々と進む。CⅣ附近に着いたがデポした物資が見当らず、うす暗い中をこれ以上捜しても疲労するだけなので、ビバークを決心した。丁度その時新村がデポを発見した。テントを張り、夜食か朝食か区別のつかぬ食事をしている時、先程沈んでいた太陽が再び姿を現わした。今日(七月一六日)も快晴だが休養をとって明日一挙に中央峰をアタックしよう。天候も安定しているし食糧、燃料も充分ある。

七月一七日、中央峰アタックだ。午前三時三〇分、完全装備で三日間のビバーク準備をしてテントから飛び出す。しかし、アイゼンをつけている間に雲が湧き、東峰を包んでしまった。ここまでくれば東峰は眼中にない。目的はただ一つ、中央峰だけである。万全を期して行動を中止する。しばらくすると雲が薄くなったので、東峰へ達するのに前回登った南東稜より容易そうな北稜を、大沼、小西に偵察させる。帰ってきた彼等の報

告では、北稜はゆるく南東稜よりはるかに容易であり、又上部でのトラバースも可能である、ということである。明日は北稜から登ろう。

七月一八日、午前四時三〇分出発。一時間で北稜の上に出る。北稜上を二時間進み、東峰直下の急傾斜になる手前で北側の斜面を登りぎみにトラバースし、中央峰と東峰の間の稜線へ向う。稜線へ出たのはC IVを出て四時間後であった。出た所は東峰より五〇メートル下であった。稜線は意外に広いが、中央峰との最低鞍部への下りはやせている。鞍部から頂上を往復するの五時間かかると見て、ビバーク用具の一部をデポする。

コルから二〇〇メートル余り急なリッジを登ると、顕著なピークが見えてきた。あれが中央峰だと、互いに励まし合ってそのピークに登ると、更に前方に、より高くまぎれもない中央峰がそびえている。やっぱり中央峰は高い。もう東峰と殆んど同じ高さに立っているのに、頂上はまだ上にある。二回目の六〇〇メートルは、あまり苦しくない。先行の大沼、小西のパーティが頂上直下五メートルのところまで、じっと動かずに待っていた。「全員一緒にピークを踏みましょう」と言う。四名ピークの下に並び「いちっ、にいっ、さん」でスタートし、同時に頂上に立つ。

セワード氷河を隔ててセント・エライアス St. Elias (五四八メートル) がそびえている。クック Mt. Cook (四一九四メー

トル) もバンクーバー Mt. Vancouver (四七九メートル) も見える。空には一片の雲もなく、抜けるように青い。聞こえるのはカメラのシャッターの音だけである。どの顔も、かつて見たことのない程の喜びにあふれている。記念撮影の後、喜びをかみしめるように一歩一歩滑りの道を歩む。七時間に亘るアタックは終わった。七名全員ならもっと素晴らしいのに、と思うと一抹の心残りもあるが、下山した三名は我々四名のために涙をのんで下ったのだ。下りは四時間でC IVに帰着。テントの中で頂上に翻したカナダ国旗、日の丸、そして部族に寄せ書をした。今日のこの喜びを寝袋にくるまってかみしめよう。

七月一九日午前九時三〇分、ゆっくりと撤収をはじめた。C 皿直前で、小西がヒドン・クレバスに音もなく吸い込まれた。が、幸いすぐ引上げることが出来た。今日はC IIで寝る。

七月二〇日、快晴のもと最後のザイルさばきを楽しみながら下る。午後八時、遂に懐しいB Cに帰ってきた。福岡隊のテントは雪に埋もれ倒れかけていた。南条さんはどうしたのかと心配したが、我々のデポの中から先日連絡のため下山した三名が、ウィルソンに託した手紙が見つかり、南条さんは飛行機でクルアーネまで下山したということを知った。カスカワルシュ氷河とハッパード氷河の分水嶺にある極地研究所のキャンプから、クルアーネまで飛行機に乗せてもらえることになったとのことである。それを聞いた我々の喜びようは、もう下界に降り

たかのようにだ。

七月二日、無人の氷河の上とはいえ、立つ鳥跡をにごさずのたとえ通りに、塵芥を雪の中に埋めた。撤収準備に一日を費す。七月二日、雪のため撤収を延期し、つぶれかけている福岡隊のテントをたたみ、彼等の物資に標識をとりつけた。七月二七日、連日悪天候で撤収出来ずにいたが、午前三時遂にBCを撤収。翌二八日、夜中極地研究所のキャンプに到着した。

約二箇月に亘る登山によって、我々は幸いにも、目標のローガン峰に登頂することが出来た。しかし、その経過はここに述べた通り必ずしも順調ではなかった。途中、誤報であったとはいえ、我々の行方不明が伝えられたことは、勿論下山後に知ったのであるが、出発前からの懸案であった長距離無電機の使用が、将来この種のトラブルをなくしてくれるであろう。

付記 関西学院大学カナダ(ニューコン領州)探検隊のメンバーは、

隊長 L・B・グレアム(四一歳) 関学大社会学部教授。

登攀隊長 室田欣一(二四歳) 商学部四年。

隊員 今井拓雄(二二歳) 商学部四年。

千田一夫(二三歳) 経済学部四年。

大沼俊勝(二三歳) 経済学部三年。

小西啓右(二二歳) 商学部三年。

新村岳夫(二〇歳) 法学部二年。

三戸田一郎(二〇歳) 法学部二年。

ガイド ハンス・モーザー(三二歳)。

## 山 岳 第五十八年

(一九六四年三月刊)

山ときどき

チャムラン 一九六二年

サルトロ・カンリ登頂

東北ネパール 一九六二年

ダウラギリ一周の旅

ビッグ・ホワイト・ピーク登頂

インドラサンとデオ・ティバ

G IVの写真とサラグラール峰

コルデイエラ・ブランカ

山岳会と日本アルプス地方三角測量の思い出

台湾山岳未到への想片

台湾の山旅

青い雪の山 チンボラン

登山技術研究会の報告

追悼 武智直道氏(積有恒)、橋本竜伍氏(日高信六郎)、大森明沈氏(神谷恭)

ヒマラヤ登山年譜(一九五六〜五八年)

会務報告・英文梗概

A5判二八〇頁・写真四六葉・地図二二面・定価千円

★御希望の方は本会事務局或いは茗溪堂でお求め下さい。

松方三郎

中野征紀

加藤泰安

中尾佐助

石坂照二郎

高橋照

酒井敏明

F・マライニ

吉川尚郎

高木菊三郎

沼井鉄太郎

藤田博

和田匡弘

和

大森明

田中栄蔵

馬場勝嘉

## ローガン峰（一九六四年）

川崎巖

人口七千の小さな港町、日米合弁のアラスカバルプの本拠地シトカ。前庭には緑の芝生が拡がり、裏庭下には白鳥の遊ぶ湖水が静かにはすを浮べている。対岸には樅の林が黒々と湖岸まで迫り、その上にはスリー・シスターズ、ベア・マウンテン、アローヘッド、クロスの峰々の氷蝕を受けたエイギュールが、残雪をとどめて影を湖水に投射している。暖房自在の五室と車付きの車庫。こんな合宿所が提供され、われわれ学習院山岳部ローガン峰登山隊八人は幸運なスタートを切った。

間もなく入港した後発隊も、入国手続、税関とも「ローガン峰登山」"オオクレイジスポーツ"で全てOK。写真を撮るため、狩猟のために山に来るのならまだしも、山に登るだけの目的で、わざわざ日本からやって来たと言うことは、ここに住むアメリカ人には理解出来ないことらしい。

アラスカバルプの方々の御好意を得て、一週間の準備と登山

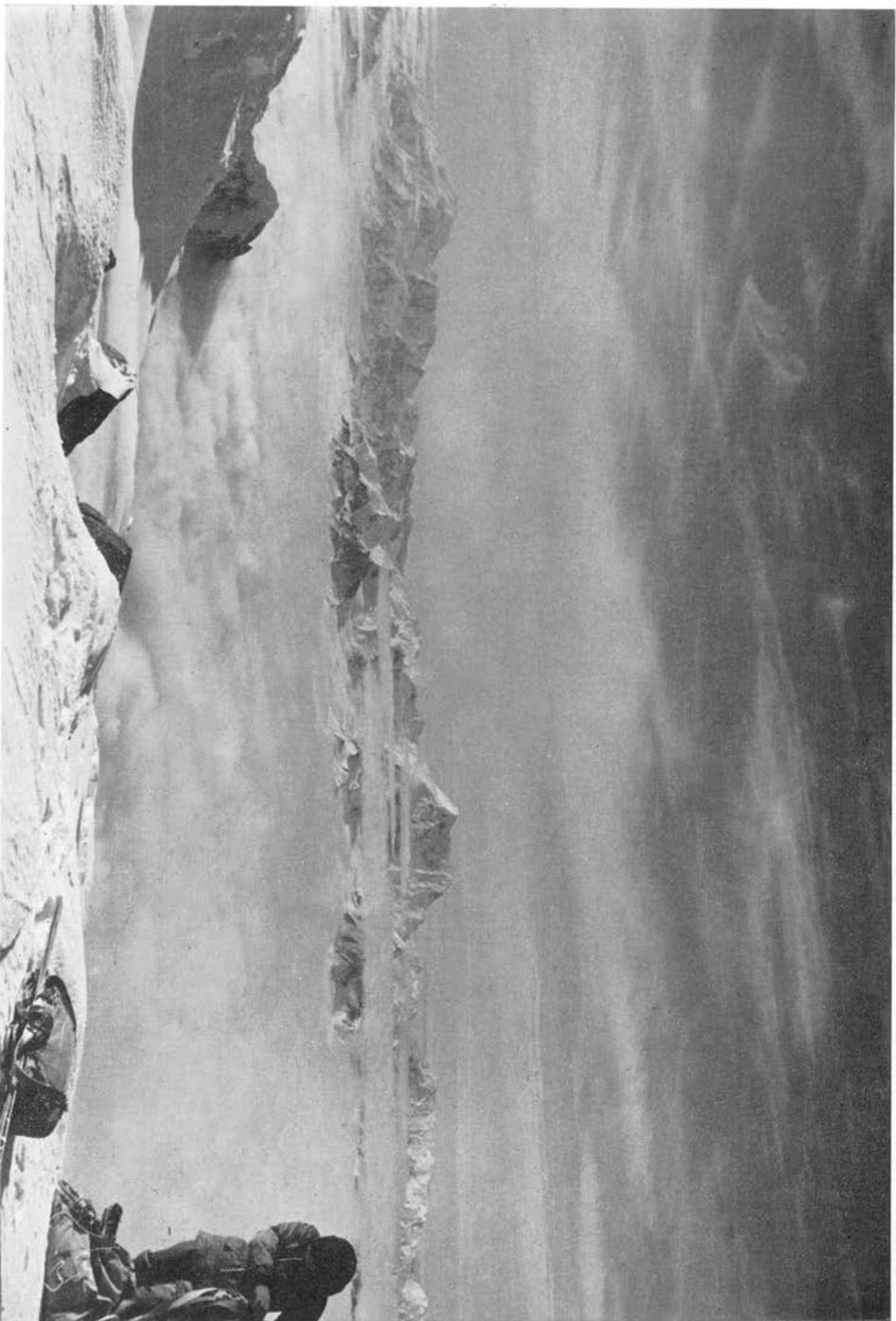
前の体調を終え、七月一日いよいよシトカを出発した。森林伐採主任がヘインズに出張するというので、そのトラックに一トンの荷物を積みこむ。彼はかつて石原慎太郎に見込まれて、NHKの「アラスカ物語」に出演したという独身の好漢である。豪華な遊覧を兼ねたフェリーボートにトラックごと乗船した。まるで湖水か運河のようにおだやかな、狭いフィヨルド海岸線には、氷蝕された鋭峰から氷河がいきなり海に落ち込んでいて、その中を船は静かな波紋を描きながら、一三時間でヘインズに着いた。

これより一路アラスカ・ハイウエーを六三〇マイル程北上、ガルカナまで一泊二日のバス旅行が始まる。手荷物持込制限一人五〇キロだが、特別のはからいで超過分は全て無料で、バスのうしろとボディーの下のトランクに入れてくれる。運賃は一人三六ドル。三〇人乗りのバスは、最初ほかにお客もなく、われわれ八人の貸切り同様で、カナダ国境の税関も簡単に通過。ただ変わったことは、両国国境を境いに、カナダ領の道路は土煙りをたてる道になってしまった。

標高一〇〇〇メートルあまりの平原を、時速九〇キロでひたはしり、窓に飛び去る広大な景色に、すっかり西部劇気分が御機嫌になったわれわれは、この直線的な道にあくびをしている運転手に、時々ピースをくわえさせては自覚させた。ヘインズ・ジャンクションを過ぎると米松と樅の林の平原の向うに、



ローガン峰西稜からキング・ピーク (5221 m) を望む (学習院大学)  
King Peak (5221 m) seen from the West Ridge of Mt. Logan.



ローガン峰西接からオースタ峰(左)とセント・エライアス峰(右)を望む(学習院大学)  
Mt. Augusta (4566m) (left) and Mt. St. Elias (5488m) (right) seen from the West  
Ridge of Mt. Logan.

穂高の吊尾根を思わせるような山々が見え初めた。周囲の人々に山の名を訊ねても、彼等にとっては山などは全く興味の外である。どれを指しても全てセント・エライアス・レンジと答は一つである。

クルアネ湖をはじめとする湖沼と湿地と森林の中の一本道、アラスカ・ハイウェイには、行交う車もまばらで、五〇マイル間隔ぐらいで給油所と、カフェを兼ねたはたごとカマボコ兵舎の教会が点在するだけである。北上するにつれて米松と樅の背丈が低くなって、遂に荒原となる。地平線のかなたに、夜中の太陽が沈む情景には、ものあわれを解しないわれわれでさえ、深い詩情が湧きあがってくる。トーク・ジャンクションの丸太造りのモーターに一泊。

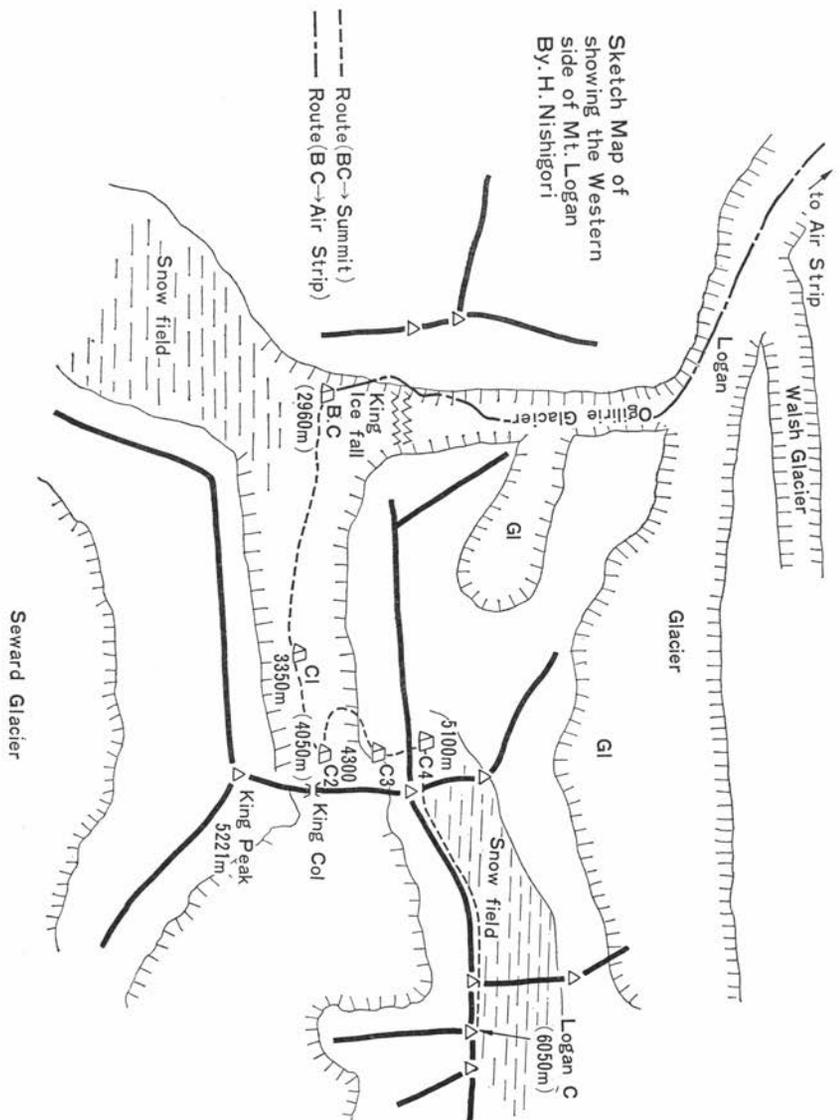
昨日乗ったバスはフェアバンクス行きであったが、交代した運転手と他の乗客の好意で、バスをアンカレッジ行きに変更してくれ、乗換えないで、ガルカナの飛行場の中まで送ってくれることになった。運転手は戦後東京の渋谷にいたことがあると、盛んに東京の話をしかけてくる。遠く旅している身にとっては、こうしたアラスカに共通した素朴な親切が、身にしみてうれしい。

ブッシュ・パイロットのウィルソンは、同志社隊や関西登高会を連日運んだ後で、くたくたに疲れている模様なので、飛行場といってもバラックの格納庫しかない横の草むらの中に、テ

ントを張って待つことにする。翌日の夕方六時、先刻までベニキ塗をしていたオッサンの操縦するセスナ機に、私と錦織が一五〇キロの荷物を膝の上まで積まれて乗せられる。大湿地帯の上をムースが四、五匹連れで歩いての眺めながら一飛びして、家一軒ない狸と熊の巣である荒野の飛行場、メイクリークに降ろされる。これでは、この飛行機の事故に保険が効かないのも当然だと、へんなところに感心する。

七月一五日早朝、まだ眠っているテントに突風が吹きつけてきたと思ったら、ウィルソンが玩具のような飛行機に乗って現われた。昨日のより小さな、この樅をつけたパイバアキャブ機は、私一人と七五キロの荷物を積んで、腰をふりふりやと舞上がる。蛇行する泥沼のチチナ川に添って遊行、ローガン氷河の上空五〇〇メートルぐらいを飛びつづける。バウムクーヘンを思わせるような氷河のモレインの縞が、飛行機の足の下に実にすばらしい。

オギルビー氷河に入ると、ローガン頂上のプラトーが目前に広がるが、このまま頂上に着地出来そうな気がする。機をキング・アイスフォールの上に着雪させる。標高二九七〇メートルまで足を使わずに、アツという間に来てしまったわけである。北北東にルカナア、南にセント・エライアス、前面にキング・コルを望む白銀の静かなこのベースキャンプに、八人と四五日分の食糧が、好天に恵まれ、一昼夜の間に集結した。一月後の



八月十五日、ウィルソンに飛来してくれることを約束して別れると、この広い氷河上はわれわれ八人の世界である。

七月二日迄の一週間で、キング・コルのC2まで全員の一日二分二〇〇キロの物資を、スキーで運びあげた。最初はスケールアウトして、正確な距離・高度の判断をつけかねたり、偵察に出掛けて嬉しさのあまり炎天下に昼寝して、顔や口唇を焼けたのだらして、夜ヒイヒイ泣く者が出たりした。

連日の快晴続きで、ローガン西尾根末端とキング・ピーク西尾根に挟まれた谷氷河の水平距離一二キロ、高度差一一〇〇メートルのこのルートの帰路は、実に快調なスキーコースとなった。炎天下では最高四二度にもなる真昼の暑さを避け、午前三時頃から行動を開始して、遅くとも午前一〇時頃までには行動を切上げる。昼間はテントの出口にツェルトザックを張り、その下にエアマットを敷いてゴロゴロ待機して、夕食後にスキーを楽しみながら荷上げをすることにした。

キング・コルのC2から、一九二五年のカナダ隊がとった中央峰と西峰間に直接続く斜面に取付こうと、七月二五、六日にかけて前後七回偵察したが、斜面全体に亀の甲羅を思わせる縦横に走ったクレバスに阻まれて、進むこともできない。この山の登山の時期としては、遅きに過ぎていたのだ。真夏の氷河はズタズタに荒れている。これまでがあまりに順調で、ローガン組みし易しとなめてかかっていたところに、行手を阻むこのク

レバス帯に手間どり、初めての氷河との格闘には、クレバスに落ちる隊員もあり、天候の下り坂への明らかな徴候と重なり、登山期間中で最も追い詰められた気持になった。私はここで全員登頂を諦めて、短期間勝負で一パーティでも頂上に立たせるような体勢に、切りかえることにした。

キング・コルから後戻りして、三八三〇メートル地点から東北に、ローガンの西稜に食込んだカール状の雪面を、西稜に直接取付くルートが、偵察の結果唯一の可能性を残していた。キング・コルから新ルートを聞き、スキーで危いスノーブリッジを七カ所通過して、四三〇〇メートルにC3を建設することに成功した。

C3とC4間は比高七〇〇メートルの急斜面で、雪崩の危険もあり、スキーを捨てアイゼンとピッケルの世界が始まった。最後の二〇〇メートルは、不安定な雪面がまじっているので、ザイルをフィックスして乗切り、頂上につながる大雪面の西端にC4を建設した。

二九日、この大雪面を西から東に縦断し、頂上に接近しようとするが、川村のクレバス墜落に鼻を挫かれ、この十数キロの大雪原を、いつ落ちるかわからぬ不安に支配されながら、ヒドン・クレバスの上を這うようにして進む気にはならなかった。

三〇日二時、今度はキング・ピークと相對している東側ピー

クの側稜にそって登り、西稜のピークを一つずつ忠実に越して進む。仕方なく追い詰められて採った、このローガン峰への新ルートは、長さとの苦闘だった。南側の下には、キング・コルから中央峰と西峰間に連なる一九二五年カナダ隊の通った広い雪面が拉がり、その先にはマッカーサー、セント・エライアスが、セワード氷河上の雲海の上に頭を出している。後にはつい数日前まで高く仰いだキング・ピークの美しい峰が低く見える。北には頂上プラトリーの広い雪斜面。その上にラクダのコブのように見える北峰と、いくつかのコブの頭が果しなく続き、その下にはローガン氷河が遥か下に流れている。前面西稜には、後立山の縦走に似たいくつものピークが次々に現われ、C4から中央峰迄一三キロにもおよぶ長い稜線であった。

ローガンはちょうど上の平らなデコレイションケーキのような形で、東西にかけてわずかに高く、東峰、中央峰、西峰、北峰が峰頭となっているが、その他にも数多いコブのような凹凸がいくつもある。

第一次隊四人の内二人が、西峰を直前にしてへばり、川崎、川村で西峰に一二時三〇分に達し、二一時疲れてC4に帰幕した。この結果で、C4から中央峰までは長いということを除けば、別に問題もなく、途中までサポートをつけ、ビバーク一泊を覚悟すれば登頂は困難でないことが判った。

一方C2とC3間はスノーブリッジが危く、テント間の連絡

が心配であるのと、食糧の補給も必要となり、七月三十一日一次隊と二次隊を入替えることにした。八月二日三時、高野、錦織、石川が二人のサポートを連れて出発、五九〇〇メートルにビバークして、翌三日三時に出発したが、ガスのため引き返し五時再出発、風の中を一〇時三〇分中央峰登頂に成功した。二時三〇分C4に帰幕する。翌四日はかなり疲労していたが、食糧も少なくなつたので昼から全員C2まで撤収する。

いよいよ天候も悪化してきたが、目の前にそびえるキング・ピークに、一戦も交えずに引き下るわけにもいかない。新雪の急斜面に取付いてみたが、小さな泡雪崩を幾度かかぶり、土気はあがらず、遂にBCまで引揚げてしまった。

しかしBCまで下ると、登頂を終った後のあの安堵感と、それに伴なう疲労したような不精がテント中を支配し、一方ではわざわざアラスカの山奥にあって、生涯二度とないであろうこのチャンスに、迎えの飛行機が来る迄、今一度全力を尽して挑戦せねばという意欲の交錯した、複雑な気持が各人各様に現われ、毎朝観天望気しては、ずるずる食糧を食い潰してしまう状況が続いた。

しかし毎朝の風と、午後になって湧上ってくる雲、到着当時想像もしなかったBC近辺のクレバスに、ついに見切りをつけ、八月一二日BCを出発、オギルビー氷河を下りローガン氷河に出て、ツングのチチナ河が始まる高度七〇〇メートルの、

森林限界の飛行機中継地点まで氷河の道を歩きだした。

風邪にやられた橋本と付添った高野、小森には気の毒であったが後に残し、氷河、モレイン、泥沼の池、小川、詩情あふれる緑のアルプと変化する、一日一〇キロの遅々たる歩みであったが、約八〇キロメートルの楽しい旅だった。

やっと全景が見えるようになったローガンを振り返り、日本アルプスを幾つか寄集めたような、周囲の無名の山々を眺め、騒々しい東京の混雑と、アラスカの山を永年夢みて、今度は来れなかった山仲間に見えはせる時、この一瞬が実に貴重なものに加え、一歩々々踏みしめて下っていった。

ローガン登山を通じて、われわれの感じた特長を列記すると次のようなことになるだろう。

(1) 高さの割に比高が大きく、氷河は他の地方に比べて比較にならないぐらい大規模で、話にきくヒマラヤより広さと深さをもったワイルドな感が深い。ガイドやポーターがいないが、一方飛行機が使えらるということは、又新しい登山の型がここにあるといえる。

(2) 登山シーズンが夏で、休みを利用して短期間で登れる。六月中旬から七月中旬までが最もよいと思われる。七月中旬以降は、天候の悪化にもまして雪氷面の融解が激しく、テント間が孤立する危険がある。これに対する人の配置や、クレパスを乗り越えるための組立梯子等の準備は、特に考える必要がある。

(3) 万一に備えて、B Cと飛行基地間の連絡用通信機の準備が望ましい。

(4) 六、七月を登頂期間とした場合、日本の春山程度の装備で充分であるのと、距離が近いいため比較的安い費用で行ける。

(5) スキーが有効に使用出来る部分が多い。

(6) 森林限界より低いところを通過するか、一時立寄る場合には、野獣、特に熊のために、護身用としての銃の準備をする必要がある。われわれも二回熊に襲われたが、土地の連中も銃器なしでは決して歩かない。

最後に隊の構成メンバーは左記の通りである。

隊長 長川 崎 巖 二九歳 昭和三五年卒。

第五次南極観測越冬隊員。

副隊長 高野実之輔 二九歳 昭和三六年卒。  
 記録 佐藤 浩 幸 二七歳 昭和三八年卒。  
 庶務、医業 川村 治 朗 二二歳 経済学部四年。  
 会計、気象 小森 泰 三 二四歳 法学部四年。  
 装 備 錦 織 英 夫 二四歳 経済学部三年。  
 食 糧 石 川 正 弘 二二歳 法学部三年。  
 食糧輸送 橋本 克 彦 二〇歳 経済学部二年。

## アルタアル連峰 オビスポ峰登頂

＝一九六四年第二次エクアドル・アンデス遠征隊の記録＝

宮野準治

アルタアル(Altar)はエクアドル・アンデス(Andes Ecuatorianos)山系の東部山脈(Cordillera Occidental)のほぼ中央に位置し、アマゾン的一大支流であるパスタアサ河(Rio Pastaza)の源流域をなしている。この山は他のエクアドル・アンデスの山が独立的山容を呈しているのに対し、連峰性をもつ唯一のものである。アルタアルは文字通り「祭壇」という意味であるが、ケチュア語では「コリヤネス」(美しい峰)と云われている。それぞれにキリスト教会の牧師の階位名が付けられており、南から北へ、オビスポ Obispo (大僧正・五四〇四メートル※)、タベルナクロ Tabernaculo (聖堂・五二九六メートル)、カノ

ニ(Canónigo (修道僧・五三三五メートル)と呼称されている。そのいずれもが未踏峰である。(一九六三年七月にイタリア山

岳会のメンバー二名が、主峰オビスポに登頂したというニュースが入ったが、後述のように彼等は気象条件のためか、左側の岩のピーク＝最高峰より二〇メートルほど低いと思われる＝を主峰頂上と誤認したと推測される。)

※標高はまらまちで、アルトゥロ・アイヒリア(Arduino Eichler)の『エクアドルの雪と森』(Nieve y Selva en Ecuador)の年表には五四〇四メートル、エクアドル陸軍地理研究所の一〇〇万分の一の地図では五三一九メートル、フランシスコ・テラン(Francisco Terán)の『エクアドルの地理』(Geografía del Ecuador)には五三二〇メートルとしてある。われわれが持参した高度計・気圧計で測定したところでは約五三二〇メートルであった。

一九六一年早稲田大学探検部(和田匡弘隊長)が試登(山

岳」第五八年参照)してきた資料に基き、一九六三年われわれ早稲田大学山の会及びOB会のメンバーにより、エクアドル・アンデス特に未踏峰アルタアル及びカヤンベ登頂の計画が準備された。写真、スライドでみるアルタアルはオビスポ峰※を始めてとして、その登頂の可能性を信じさせないほどの鋭さを誇る山であった。

※一八八〇年この地を訪れ、数々の初登頂をほしいままにしたイギリス人エドワード・ウィンバーは、その著『赤道の大アンデスの旅』(Travels amongst the Great Andes of Equator)の中で、オビスポ峰をヨーロッパ・アルプスのアイガーと対比させてこう表現している。「最高峰は噴火口(カルデラ湖を指すと思われる)の底から三五〇〇フィート(約一〇六七メートル)もせり上っており、その絶壁はアイガーの最も険しい部分よりきびしいものであった。」

われわれ一行七名は皆、海外遠征は初めてであり、隊長が二十七歳(当時)、隊の平均年齢が二十四歳という若輩のパーティーだったが、学生時代からの気心のしれた仲間ばかりであった。

時期はアンデスの乾燥期といわれる六月・七月を選んだが、アルタアルでは入山期間四十日中、快晴日数わずか三日という天候であった。装備・食糧には特に独創的なものはなかったが、乾燥期のアンデス山系で特異性を發揮するというアルタアルの気象観測と、地形測量のための器材を上げることががで

き、所期の目的をある程度達成できたことは、登頂と共に嬉しかった。

一九六四年五月十六日朝、船は暑いグワヤキル港に錨をおろした。通関手続も簡単にエクアドルに第一歩を踏む。十八日、トラックに一・五トンの荷物を載せ、アルタアルの登山根拠地ともいべきリオバンバに向う。

リオバンバはチンボラソン(六三二〇メートル)とアルタアルにはさまれた、標高二六〇〇メートルの静かな石畳みの古い街である。リオバンバでは関係方面の挨拶や現地調達物資の購入、キャラバン用の馬・ロバの予約に数日忙殺される。

五月二十五日、いよいよ一・五トンの荷物と共にアルタアルに向う。トラックの窓からみるアルタアルは、まさに「美しい峰」である。リオ・タラウの出合で一日五スクレー(約一〇〇円)で予約しておいたロバ、馬に荷を載せ替え、文明の社会から離別する。途中、インディオ達の部落をみながら、急に降りだした夕立の中をアシエンダ(農場)に着く。

二十六日、前日ロバと馬が重労働をしたとかで、なかなか馬方のインディオ達との間に商談がまとまらない。結局、十時過ぎタバコの威力でキャラバンが始まる。ロバ・馬の数が予定の半分しか集まらず、二日間に分かれてベイス・キャンプ(BC)入りすることになる。先発隊の宮野、角田、早川、青木はここ

数日來の雨でドロコになった急坂を、ロバと馬の尻追いを助けながら、それでも田園風景を楽しみつつ旅を続ける。高山病に悩まされることもなくリオ・チャンボの谷音を聞きながら進む。途中径が土砂でくずれ落ちており、ノンビリと径の出来上るまで待つ。夕刻、濃いガスに包まれた三九〇〇メートルの草原地帯のBC予定地に着く。

二十七日、後発の村田、松村、小林がBCに集る。途中ロバが谷へ落込んだが、幸い軽い怪我程度ですんだ。BCは馬蹄型に連らなるアルタアル連峰を目前に、左右を急な草付の尾根にはさまれた牧草帯である。やがて五張りのテントが張られ気象観測用の器具が設置される。BCの正面に見るアルタアルには懸垂氷河がかかり、ときおり谷間一杯に雪崩の音を響かせる。夜はプロパンガスのランプがホテル・アルタアルを明るくする。

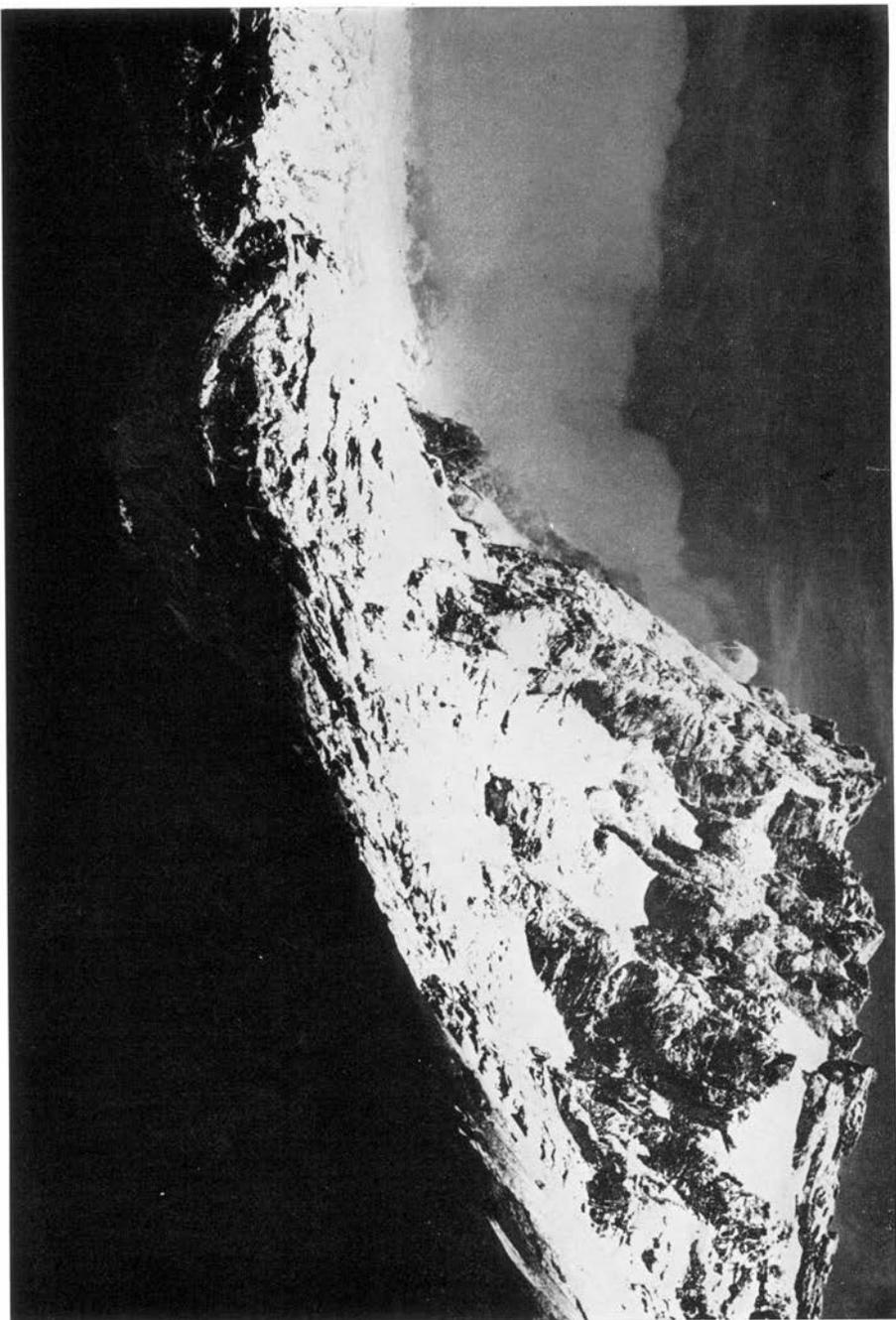
二十八・九日と終日BCの整理に忙殺される。天候は乾燥期というのに、湿度八〇パーセントと良くない。

三十日、前日のリズムによるルート偵察を検討した結果、やはり正面攻撃は不可能であるとの結論に達し、一九六一年の一次隊が開拓してくれたオビスポ西稜、南稜を越えて、オビスポ氷河に出ることにする。湿原地帯を横切り、草付尾根を西稜コルへと荷上げが開始する。コルのツメはゴルジュ状の荒れた不安定な岩場で、荷上げのルートとしては余り快適とはいえない。

三十一日、西稜コルへと荷上げが続く。偵察に出た角田の報告により、西稜をまいた雪原にC1を建設することにする。標高四四九〇メートル、BCから軽い荷物で四時間の登高である。六月一・二日、C1への荷上げが続き、夕方近くC1が建設される。視界がひらける。ジャンクション・ピークから長く尾を引く南稜の彼方に、オビスポ氷河のクレヴァースが鈍い光をなげかける。時折りかかる雲の流れの合間に望む主峰は、圧倒的な鋭さを誇示している。

三日、曇。引続き天気は悪い。角田、松村の二人が登攀ルートの開拓を西稜と南稜上部に求める。西稜はカルデラ湖と中央懸垂氷河を見るアレートで、頂上への最短距離ではあるが、途中で切落ちて通過は不可能。やむなくジャンクション・ピーク直下から西稜ぞいに南へ落ちている氷河に挑む。末端からスタカットで登るが、上部に行くにしたがい亀裂が縦横にはしり、最後の垂直の氷壁で絶望的となる。一度戻って南稜上部にルートを探す。取付き迄はゆるい雪原が続く。南稜は火山岩の脆い岩肌を露わし取付地点は見当らない。やっと打ったハーケンを頼りに登った浮石のルンゼの彼方は、オビスポ氷河迄数百メートルも切落している。いずれにせよ、C2は南稜を越したオビスポ氷河上に置かねばならない。

五日、青木、小林が代って濃いガスの中を南稜下部を偵察、運よく南稜から氷河への下降点(四六八五メートル・南稜コル)



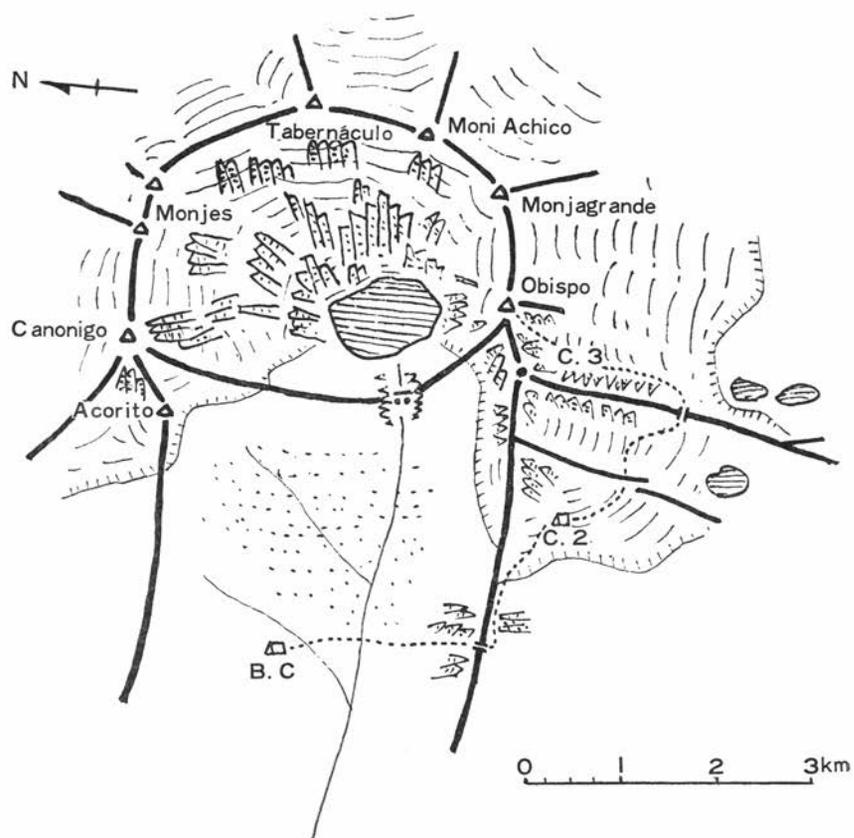
アルタアル連峰の主峰オビスポ (5404 m) (ベースキャンプから)  
Obispo (5404 m), the highest peak of Altar, seen from the Base-camp (Ecuadorian Andes)



第2 キャンプから見たオビスポ (5404 m)

Obispo (5404 m). Altar group, seen from Camp II. (Ecuadorian Andes)

Sketch Map of Altar



を見つけて帰ってくる。

六日、角田、早川、松村がC2迄のルート工作とキャンプ・サイトの偵察。村田、青木、小林の荷上げが続く。C1から南稜へのルートは一旦雪原に降り、再び急なゴルジュ状の岩場を登る。ここに三カ所、ザイル二〇〇メートルをフィックスする。南稜のコルはさすがに風が強い。コルから氷河への下り口は岩がかぶさり、大きな氷塊からツララが下っている。右側はラグウナ・ベルデまで三〇〇メートルほど切落している。ここに8ミリ・ザイル四〇メートルを固定。左側は穂高の屏風岩を二倍にしたような岩肌が続き圧倒的だ。C2予定地は広大なオビスポ氷河をかなり登りつめたプラトーに決める。C1からの所要時間はおよそ五時間。

七日、角田、青木はC2から登頂ルート偵察。早川、松村、小林はC2への荷上げに往復する。久しぶりに晴上ったC2から仰ぐ最高峰は、氷をまとった鋭い穂先を天空に突きさしている。角田、青木の二人は西稜、南稜の分岐点、ジャンクション・ピークからのルートと、主峰から南に派生する短かい急傾斜の氷におおわれた尾根からのルートを偵察。前のルートは無数の針峰があり通過を不可能にしている。一旦戻って氷の尾根への取付点を求めて、氷河のクレヴァスをぬいながら登る。この尾根から切落ちた、平均七〇度の傾斜をもつ氷のルンゼ（入口に俵の蓋のような岩があることから、われわれはこのルンゼを「タワ

ラのルンゼ」と呼んだ）を登れば、登頂に可能なルートが開けることを確認して、午後四時C2に帰ってくる。

八日、角田、青木、小林の三人は氷の尾根に取付くため朝七時C2を後にする。タワラのルンゼは約二〇〇メートル、左側の岩にハーケンを連打して登る。傾斜はほとんど垂直に感じられ、出口は大きくせり出した雪庇にふさがれている。着氷にアイス・ハーケンを二本打ちこみ吊り上げ気味に乗越す。上はわれわれがカニのハサミと呼ぶ氷河の基部迄、雪のリッジが三〇〇メートルほど続いている。C2からブリズムでみたときは、このリッジは台地状に思われたが、とてもキャンプを出せるような場所のみあたらない。C3をここに出せないとなると、この上には絶対に出すことはできない。どうしてもC2からのアタックになる。カニのハサミの氷河のクレヴァスを帯を苦闘して開拓した三人は、最後のツメが悪くて時間切れ。どうにか登頂への手がかりを得て、夜晩く真白になって帰ってくる。

十日、早川、松村の二人は今日こそ頂上に立てることを期してC2を出る。しかし結果は前回同様、頂上の直下約五三〇〇メートルの小さなテラスに達しながら、時間切れに涙をのむ。次の記述は松村隊員の手記である。

——前日早川と松村の二人は、快晴のC2へ午前中に入りのんびり過ぐす。久しぶりの青空を楽しむ。天幕の内に入れてもゴグル無しではまぶしくて、天井を見ていられない程の強烈な

太陽である。プリズムで何回もルートを再確認し、スケッチを作る。夜は満天の星が輝く。装備の点検を済ませ、心のかぶりりと幾分緊張した気持を噛みしめるようにして、シユラフにもぐり込む。

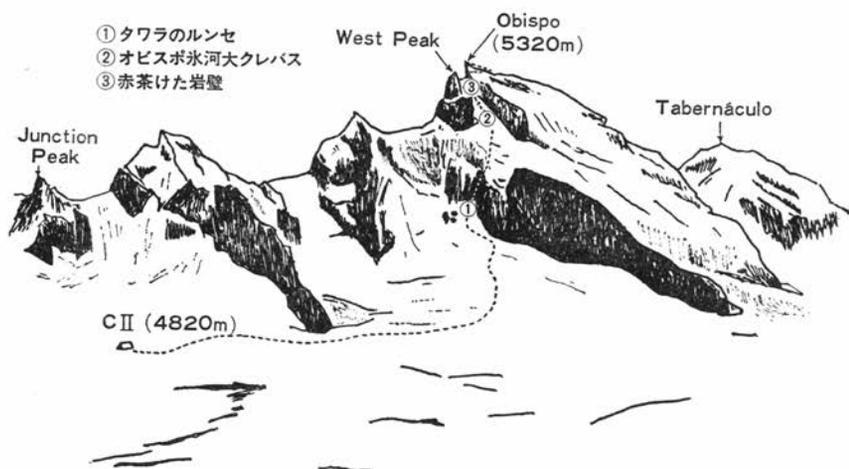
十五日時、テルモスに作っておいた水で、気の進まぬ朝食を摂る。前回の結果から考えても、登りにかなりの時間を要し、体力の消耗も激しく、下りの安全を期するためには、ビヴァク出来る装備を担いで行かねばなるまい。四食分の食糧と固形燃料、ツェルトを用意する。

タワラのルンゼ迄のクレヴァス帯の雪が締まっている間に高度を稼ぐ。薄く流れていたガスが晴れ、サンガイ(五三〇メートル)の噴煙が指呼の間に見え、南稜の針峰がバラ色に染まる。ルンゼ基部のクレヴァスの縁を捲いてザイルを結ぶ。ルンゼの左側の脆い岩にそってハーケンが打たれている。ザイルに触れた湿雪がボールとなってすごいスピードで落下して行く。三ピッチで乗越しの雪庇に到る。庇の下の蒼水にガツチリ喰い込んだハーケンを頼りに身を反らせ、反対側にホールドを刻む。ここからあのいやな雪のリッジが待ちかまえる。モンハ・グランデ側はバッサリ切落ち、下は茶色に汚されたクレヴァスやセラックスが、不気味に横たわっている。傾斜はあまり感じないが、グサグサの雪と下の氷がアイゼンにびびったりとしないで、緊張させられる。

天に突き刺さるようにピークが聳えている。圧倒される程の見事さだ。傾斜が急になると、縁が雪庇状に張り出したクレヴァスにぶつかる。その縁をビッケルとバイルを支点にして、吊り上げ気味に越す。ようやくカニのハサミの下に出る。十二時だ。夢中で気づかなかったが意外に時間がかかっている。地理的に電波が伝わらないのか、無線機には何の反応もない。昼食を摂る。全ルートで唯一の二人並んで腰を下せる処だ。

最後の急傾斜から流れる氷河が階段状にクレヴァスとなり、巨大な氷柱となっている。この氷河は幅約三〇メートル、長さ二〇〇メートル位だろうか。腰を下していたそのままの位置でトップの早川を確保する。確保点からクレヴァスを右に廻りこんで行き、トップの姿は見えなくなる。時々わずかにザイルが延び、右手の岩に叩き込むハーケンの音が聞こえ、スノーボールが飛んでくる。吊り上げ気味に四〇メートル一杯にザイルが延びるのに一時間は要した。上を見ると身体が仰向けにはがれてしまいそうだ。前にアタックした角田の言から、この右側の尾根の岩に移るポイントは聞いていたが、もっと下方から岩を登り右手に廻込むルートが探せそうな気がして、何度も岩に取付いてみたが、リスもホールドも得られず断念する。結果的にも、たとえ下の岩から直上しても、最後のギャップで邪魔されることに変わりなかった。これ以上直上は不可能と思われるあたりに、赤茶化した岩があり前回のルートに達する。浅い

## Route to Obispo



ンゼ状の部分にかなり太いリスが走り、ハーケンが打たれているが、確信のあるものは少なそうだ。南国の山の太陽は明るいが、時計は既に十六時を示している。C2方面も晴れわたり黄色い天幕が白の世界に映えている。

今日BCから登ってきた隊長と村田の姿か、人影が二つ小さく見えている。激励のコールも良く届く。

ここで再び早川がトップになり、アプミ三台を掛け替えて登る。この部分は高度にして三〇メートル程だが、その何倍にも感じられる。五〇〇メートルの高度での吊り上げはやはり苦しい。上は風化したボロボロの岩で小さなテラスになっている。頂上は、このテラスから垂直の段を越えれば勝算が得られる。——頂上はすぐそばにある。ハーケンは全く利かず直上は考えられない。左側はカニのハサミの氷河からハンク気味になっており全く不可能である。残る右方は腐った雪を数メートル・トラヴァースしなければならず、確実なハーケンが一本取付きに打てなければ、どうしても試す気にはなれない。下は数百メートル一気に切落ちていく。トップを確保するにも、左方の凹部に身体を押しつけるだけでは最上の方法とは云えない。しかし、頂上は手のとどきそうなどころにある。太陽も沈みかけて寒くなる。全く暗くなる前にビヴァク・ブラツツ迄降りなければならぬ。体力も気力も限界だったろう。早川にうながされて氷河へ降りる。疲労のためかバランスも悪くなり、つま

らぬスリップをする。昼食を摂った五二〇〇メートルの位置で予定通りビヴァクの仕度に取りかかる。ザイルの結び目は完全に凍って解けない。風は無いが寒さはかなり厳しい。C2と交信する。予定通り今日主峰に登っていれば、明日は隊長、村田の二人は、モンハ・グランデの魅力溢れる氷の尾根をアタックする予定だったのだが……。

ビヴァクのわれわれを力ずけるように、いつまでも天幕の外にライトが揺れている。ツェルトを被りアイゼンを外し、衣類のありったけを着込む。メタを時々燃やす。火を消したとたんに寒さが全身を包む。いつしか眠り込む。寒さに気付いて起き上ると、早川が大声で歌っている。明方の冷込みは一段と厳しく、太陽をひたすら待ち焦がれた。――

実際、われわれは憂鬱だった。日本を出発するときには、アルタアル連峰を縦走するんだと意気込んでいたのに、最高峰一つも登ることができない。あと一〇メートルがどうしてもこえられない。前半の天気 of 悪さに比して、ここ数日はやや天気が安定してきている。この間にどうにかしなくてはならない。先の不安はつるばかりだった。アタック対策を強化するためC2を増設。

しかし、十三日からアルタアルを襲った猛風雪は、二十二日迄息をつく暇もあたえず、人間の能力が如何に微々たるもので

あるかを痛切に感ずる。C2、C1の天幕は完全に雪に埋まり、西稜のゴルジュも氷化し、コルには大きな雪庇ができる。BCにも雪が降る。

二十日、風雪の中を全員BCに下る。天幕内で連日風雪にいためつけられていた隊員の体力は、かなり低下していたが、下山を一週間延期して最後の機会をうかがうことにする。

二十三日、さしもの風雪もようやく静まり、午後から再び陽光がBCを明るくする。

二十四日、角田、早川、青木、松村、小林の五人が快晴となったC1に入る。ルートは更に悪化し、ラッセルに苦勞する。

二十五日、青木、松村、小林のサポートを受けて角田、早川がC2に入る。二十六日、二十七日と再び風雪となり、タワラのルンゼ附近は雪崩の巣となっている旨が、C1を中継して無電機に入ってくる。しかし二十七日夕方から急に晴上り、BCからみるアルタアル連峰は雪煙をなびかせ神々しい。

二十八日、快晴の朝を迎える。午後三時、角田、早川の二人は苦しい登高の末、最高峰を踏むことができた。頂上では、いつしか降り始めた雪が舞っていた。次は登頂隊員の角田の手記から抜萃したものである。

六月二十八日、待ちに待った快晴の朝を迎え、南稜の針峰の影がしだいに氷河上に長くなる。六時、幾分緊張した面持ちで天幕の外に出る。オビスポ氷河も連日の風雪にその素顔をかく

し、天幕に貼りついた氷が朝陽にきらめく。前日の夕方、風雪がおさまるのを待ちかねてラッセルした雪原を登る。氷河上に立つ赤い標識が、左右に曲折しながら上部へとわれわれ二人を導びく。

タワラのルンゼ取付点八時。ザイルを結ぶ。ほぼ垂直に近い不安定な斜面のトラヴァースへの一歩から、緊張の連続が始まる。四〇メートル・ザイル一杯で、左側のややかぶり気味の岩壁とのコンタクト・ラインに達する。連打されたハーケンが雪に埋まっていた。この縁に沿いトップを交替しながら高度をかせぐ。三ピッチで巨大な雪庇の下に出る。早川は蒼氷に打ち残されたアイス・ハーケンを頼りに、ひとしきりアイス・バイルを振っていたが、やがてたくみに右手からまわりこむように乗越し、視界から消える。九時半、テルモスを取り出し十五分ほど休息。風も弱く、アルタアルには一点の雲も無い。ピーク直下から派生した氷を被った岩稜は、この地点から南へ急激に落差み氷壁を形成している。

再び困難な登行が始まる。傾斜はきついが、高度感はずほど感じられない。連続するクレヴァースは、ピッケルとバイルを頼りに強引に直上する。やがて例の巨大なクレヴァースが、連日の風雪にもうまらずに、青白い口をあけて待ちうけている。スノー・ブリッジを早川の確保に身をまかせてよじ登る。いよいよ逆V字形の、急峻なカニのハサミの氷河の基部に達する。風が

少しでて遠く白雪の峰に雲が湧く。十一時、無電機に声が飛びこむ。地形測量の青木、松村、小林達からの交信である。広い雪原にポツンと豆つぶを置いたように三人の姿が見える。軽い食事を摂る。高度計・気圧計は共に五〇〇〇メートルを指している。そうすると、あと四〇〇メートルか。再び眼前の氷にピッケルを振う。氷河の入口には幅二メートルほどのクレヴァースがあり、右側の岩場に小さなスタンスを求めめる。氷河は左右の岩壁にはさまれ、仰ぐ空は申しわけなさそうな空間をのぞかせている。ここにいると、まるで無限の登りに挑んでいるような不安感におそわれる。

上部からのブロックと、今にも崩れそうな雪面に緊張感が増す。岩にそって高度を上げる。入口のクレヴァースから五ピッチ、赤茶けた岩の下に達する。十二時四十五分。前二回に比べてかなり良いペースである。ザックからアプミを出す。主峰から吹きおろす風が強くなり、ガスの去来が激しくなる。

この赤茶けた岩——氷をまとして外傾した、一〇メートルほどの岩さえ登れば頂上に立てる。今度こそ登ってやる。一時、無電機で交信。測量隊も濃くなってきたガスに悩まされているとのこと。現在地を連絡し、次の交信時間を打合せ。

手のとどくいっぱいのところ打ったハーケンから、右斜め上へ吊り上げ気味に取付く。薄くはった氷はすぐに飛びちり、いたずらにアイゼンの爪が空をきる。赤茶けた岩は脆く、爪先

がやっと岩にかかったと思うと、それはすぐガスにのまれ落ちてゆく。五〇〇メートルでの吊り上げ、アプミのセットはやはり苦しい。ザイルは左右にまがりくねって滑りは更に悪くなる。左腕を岩の割れ目にひじ迄入れて、強引に雪のついた小さなテラスに立つ。前二回のアタックの最高到達点である。頂上は眼前にある。手を伸ばせばとどきそうな近さである。早川をこのテラスで確保したいのだが、ハーケンを打てないのは前回と同様である。試みに打った二本のハーケンは音もなく飛び散る。あきらめて、どうしても前には行く気になれなかった、急峻な軟雪面に足を踏み出すことにする。早川に声をかける。「とにかく右斜め上へトラヴァースして、小さな雪のリッジをたどれば、ピークに達する雪稜に立てるだろう」と計算して、激しさを加えてきた風雪の中にステップを切る。

しかし途中ガスの切れ間に左斜め上を見ると、その時まで信じていた左斜め上の岩のピークは本当のピークでなく、さらに右奥に高い雪のピークを発見。直上する予定だったリッジの基部を通過、更に一〇メートルほどトラヴァースをする。岩のわずかに露出した地点に達しハーケンを打つ。早川に声をかけるが風に飛ばされて返事がない。しばらくしてザイルに返信があつて、やがて早川が全身真白になつてあがつてくる。

「おい、あれは頂上ではないぜ。」

早川も驚いたような顔をしている。無理はない。三〇分前

までは、あの岩のピークが最高峰と思っていたのだから。早川は雪稜に沿って二メートル降り、雪の深い三メートルほどのルンゼに入り、まるで泳ぐようにして雪稜へ這い上る。雪稜はすぐ広い雪面にかわつていた。カノニゴ方面から吹きつける風雪はやや弱まる。トップを交替して、そのまま登高を続ける。

突然眼前から雪の斜面がなくなる。「おい、上つてこい。頂上だぞ。」早川がやつてくる。黙つて顔を見合せる。午後三時。

アルタアル連峰の最高峰オビスポの頂きは、カルデラ湖側に傾いた、雪と氷の可愛らしいピークだった。直ちに無電機を取り出す。午後二時の交信をすっかり忘れていたので、C2の三人の連中にどなられる。

「頂上に着いたぜ。」そして西稜をへだてて交信不能だったB Cから、隊長の祝いの言葉に続いて記念写真の指示がくる。日の丸の旗をピッケルにつけて万歳をするのは、いくら写真を撮るためだとはいえ、あまり恰好のよい図ではない。再び強くなった風に、ピッケルに結んだ日の丸、校旗、エクアドル山岳会のペナントが鳴る。前二回のアタックの失敗——連日風雪にとじこめられていた苦悩の日々が、走馬灯の如く思い出される。でも、もう一步も登らなくてもよいのだと思うと、何故かガツクリとした気持になる。ガスが薄くなり、南稜の岩峰とモンハ・グランデの巨峰が低くぼんやりと姿を現わす。

三年前、日本人として初めてこの山に入り、われわれに多大

の力を貸してくれた早大一次隊の名を刻んだハーケンに、ささやかな遠征隊に惜しみなく後援してくれた人々の名前、それにわれわれ七名の名前を書きしるした日章旗を結び、青氷にたたきこむ。

午後四時十五分、下降を開始。何度となく二人で振り返えり、再び訪れることはないであろうこの白い頂上を後にした。

#### 附記

一九六三年七月のイタリア山岳会メンバーによる、オビスポ峰登頂の詳しい記録が手許にないので、明確には断定出来ないが、エクアドルの山岳雑誌『山』及び地元山岳会の話を総合すると、彼等はわれわれが当初頂上と誤認した岩峰を、やはり頂上と間違えたのではないかということである。前記『山』及び地元山岳会に残っていた言葉によると、頂上には岩が大きく露出しているとのことであるが、われわれが登頂に成功したピークは、蒼氷のものであった。また途中カニのハサミの氷河の側壁に、一本の残置ハーケン（イタリア山岳会のもとの確認）を発見したが、その後のルートでは発見されていない。そして、われわれは前記岩峰をウェスト・ピークと呼んでいる。

なお第二次エクアドル・アンデス遠征隊のメンバーは、隊長宮野準治（二七歳）、副隊長角田武夫（二五歳）、隊員は村田進（二四歳）、早川正（二五歳）、青木一隆（二四歳）、松村啓之亮（二四歳）、小林伸吉（二三歳）の計七名であった。

## 山岳バックナンバー

第四六・四七年

四〇〇円

第四八年

四〇〇円

第五一年

五〇〇円

第五三年

五〇〇円

第五七年

八〇〇円

★右各号在庫品が僅かに残っています。会員には右記定価の二割引きで、おわかり致しますので、御希望の方は本会事務室まで御申出下さい。

★郵送御希望の方は、別に郵税を御負担下さるようお願いいたします。

# 知床岳と知床半島一周の旅

成瀬岩雄

北海道の知床には昭和二年七月末、成蹊高等学校の学生であった時に行ったのだが、当時『山岳』に寄稿を勧められた事もあったものの、性来の筆不精でその俚になつてしまつたが、最近、久し振りで当時の同行者連と会食し、成蹊高等学校の校友会誌『こみち』第二十号に発表した同行者、横田、田山両氏の紀行を読み返して見て、当時の思い出を新たに、右紀行の再録を茲に御願ひした次第である。

今でこそ、当世流行の観光ブームの脚光を浴びた有名コースになつてしまつた知床も、当時は勿論、誰も訪れた者もなく、案内記などもある筈もない、云わば未知の世界であつたが、この記録を今読み返して見ると、随分大袈裟な表現が諸処に見られるので、その点は編集者に適切な訂正を御委せすることにして、茲に公表した次第である。

実際、歩いて見ても、当時、唯一の頼みとした五万分の一地

図でも、随分現実と違っている様な処もあり、知床岳頂上と半島突先の間大きな池——單なる雪融けによるばかりではないと思われる様な——等も遥かに見受けられたり、予想外の下降困難な滝の連続、強力なバネ仕掛けの様な偃松との苦闘の連続で知床岳登頂を終つたが、当初、我々の間で知床岳登山以後の海岸では「絶対に船を使わない」と云う申合せを忠実に守り、唯、根室側で一カ所、海辺に立ちはだかる絶壁には如何ともし難く、仲間の一人が対岸に泳ぎ渡つて流木を集め、筏を組んで全員渡り、以後は羅臼迄目的通り海辺沿いに歩いて、この旅を終つた。何れにしても、全行程快晴の連続であつた事が何より幸であつた。(四〇・五・十一)

成瀬氏から送られた成蹊高校校友会誌を開くと、知床の記録は「前人未踏、知床半島探險記(其ノ一)」として、配属将校

陸軍騎兵少佐横田卓一氏により三十一頁、記録の形式で田山正男氏により七頁余が添えられている。成瀬氏の依頼もあり、横田氏の文章は多少訂正した。発端から七月二十七日知床岳登頂までは、主として横田氏の記述にしたがい、それ以後は横田氏の記述がないので、田山氏の文章を用いた。(望月達夫)

横田卓一

田山正男

## 一、出発まで

陸地測量部発行仮製版五万分の一地図を開くと、ちょうど蝸牛角状の半島が、右に千島の国後島を望み、オホーツク海と日本海とを境して突出しているのを見るであろう。これが知床半島である。しかも、そこは峻峰重畳して海に迫り、到る所断崖絶壁を形成していることが知られるであろう。

昨年(大正十五年)夏季北海道大学で半島の探険を企てたが、羅臼岳、硫黄岳をきわめただけで、地形の険難と偃松、熊笹等の障碍のため、それから更に北進することは出来なかった。その記事を同大学発行の雑誌で読んだ私は、以来なんとかして知床半島探査の企拳を實行したいと考えた。

計画に先立ち、私は出来る限り半島の事情を蒐集調査しようと思ひ、北海道庁、ウトロ、羅臼両巡查派出所、根室、網走

両警察署及び同上各地在郷軍人会、青年会等に照会した。その結果を概括すると大体次のようなことが判明した。

一、知床半島の西海岸は、硫黄岳以北知床岬に至る間は陸地の記録及び経験者はなく、海面から見た海岸及び陸地の状況は、断崖絶壁で到底徒歩の通過を許さない。夏季七月下旬から九月中旬まで、沿岸二、三カ所に漁場が開設されるほか常住者はいない。漁場の交通はすべて船によつてゐる。

二、知床岳登山の経験者はいない。従つて登山の可否については全く不明だが、全般の関係から考え、至難中の至難事である。

三、東海岸知床岬南方の赤岩から羅臼に至る間は、諸所に昆布採集のため夏季根室方面から移住者があるが、交通機関は船に限られ、陸行の記録及び経験者はない。

四、半島内では熊の棲息数は道庁管下で最も多い。根室庁管下で年々多少の被害があるが、その性癖はそれ程獐猛ではなさそうである。蚊、虻、牛虱、山蛭は多く、旅行者の苦勞は少なくないであろう。

五、降雨量は北海道全体の気象と大差はないようだが、濃霧の多いことが本地方の特色である。夏季の過半は一寸先も見えないような濃霧が襲来し、こうした場合、旅行者がうろたえて移動することが最も危険である。

目的地に最も近い且つ地理の調査に權威あると思われる各方

面からの回答は、以上のように甚だたよりないものであった。然し一方において陸地測量部地形課の稲田、宮坂両君から、同地方の状況及び冒険旅行の体験を精細に聞くことができた。

両君は参謀本部地図作製のため、日本国内はおろか隣邦各地迄も实地踏査された、斯界の権威者であるばかりでなく、宮坂君は現にわれわれの指針とする仮製五万分の一図の現作者であるからである。仮製図というものは、正測量を一時補う目的で、極めて簡単な方法をもって見取り図にしたものであるから、正測図のように、すべてをこれに信頼するということはできない。知床半島の図は、宮坂君が船から海正面及び陸上数点の高所から、交會法によって測図されたものである。

両君と初めて会ったとき、私の述べた企拳に対しては、共にその不可能を力説された。然し、その後屢々お会いしているうち、私の決意に共鳴され、万一遭難の場合には、点在する漁場を頼りにして帰還するという条件のもとに、われわれの企拳を肯定された。両君から得た資料によって、旅行の計画並びに実行の骨子としたのであるが、その要点は次のようなものであった。

## 一、地形

知床岳 テッパンベツ川を廻行すること三五〇〇メートルの凸稜を攀登し、標高一二五四・二に到り得るであろう。頂上近くに飲用水がある。ポトピラベツ方面への下山経験はな

い。しかし地形から判断して、大地隙西南凸稜を利用すれば、絶対不可能のことはないであろう。脊梁山脈の縦走は絶対危険である。

西海岸 ルシア北方鱈岩付近、アウンルイ南方及び北方の岬端は、断崖下の通過絶対不可能である。

東海岸、ペキンノ鼻南方、ポロモイ南方、観音岩付近断崖下の通過は不可能である。

海岸沿いの傾斜は概ね険峻で断崖多く、通過のためには大きな困難に遭遇することがあろう。

## 二、動植物

熊の棲息が多く屢々遭遇するかも知れないが、こちらから敵意を示さなければ、決して人類に危害を加えない。ただ山稜の隅角や溪流の屈曲点などで不意に遭遇した場合は、熊が逃げる暇なく嘯みついてくることがあるから、予め笛、鈴、音声等で接近を予告し、熊が逃避できる余裕を与えた方がよろしい。

爬虫類の危険はないが蚊、蛇、牛虱、山蛭などは甚だ多い。

トド松、エゾ松の密林は、実際見た者でなければ想像がでない。倒木枯木が多く、その地帯内の通過は極めて困難である。偃松の繁茂は本地方独特のもので、その地帯は広範囲である。幹の長径は尺余にも及び、大小の枝幹が繁り合っ

て、ちょうど山腹を蔽う魚鱗のごとく、その通過は全く枝から枝に伝うほか方法なく、最も困難である。熊笹の発育は丈余に及び甚だしく密生している。

俵松や熊笹は、北へ行くに従いしだいに発育が不良となつて、岬端付近では通過にさして障碍となることはない。

### 三、住 民

半島内の永住者は古来絶無である。夏季網走及び根室を拠点とする漁業者により、七月下旬から九月中旬に至る間、左記箇所に漁場が開設される。

西海岸＝ルシア、ポトピラベツ。

東海岸＝赤岩及びモイレウシ以南には、点々昆布採集場がある。

一 漁場には通常男子数人があつて、主として鮭鱒漁に従事している。人情極めて淳朴で義侠心に富み、旅行者の遭難、宿営、休養等に対して最善の努力をするであらう。なお各漁場には磯舟を保有しているから、もし地形險難で徒歩通過を許さない場合は、それによって渡船した方がよろしい。

### 四、天候、気象

大正十三年八月の天候、晴天七日、時化<sup>しけ</sup>二日、濃霧十一日、雨天十一日。

ルシア川付近は所謂ルサ門と称する所で、半島中の最低鞍部である。根室国境から襲来する濃霧の最も烈しい所で、半

島の前後部が晴れている日でも、そこは概して霧深く、晴れることが少ない。

## 二、紀 行

高等学校三年最後の思い出に、何か痛快な旅行を試みたいといふのが、田山君らのかねてからの希望で、私と色々地図を按じた末、話が大体知床半島にきまつたのは四月頃であつた。人跡未踏の地であるため記録は絶無であるし、道庁その他に問合させた結果も既述の通りで、計画の立案には大いに苦心した。

一行は田山正男君（文科三年）をリーダーとして、三好道夫君（文科三年）、成瀬岩雄君（文科二年）の三人に寺田猛、三上和一の両先生及び私（配属将校陸軍騎兵少佐横田卓一）の六名であつた。人夫は現地にて佐竹慶太郎、岡本某を雇つた。

昭和二年七月二十日 多数の見送りをうけて、午後十時上野を出発した。

七月二十一日 長途の汽車旅行に一行はやや倦怠の色が現われ、校歌を口ずさみトランプなどをやった。成瀬君は一行中最も貧弱な体格の所有者であるが、人は見かけによらぬもの、君が山岳旅行に関する経験と知識とは、到底他の追隨を許さない。地図を按じて、頗りに知床岳踏破以後の第二の作戦計画に懸命であつた。

七月二十二日 愈々北見に入る。沿線の風物が佳境を呈す

る。戦場ヶ原を大規模にしたようなショコツの平原、清楚な白樺、紫紺にけむる山々の姿、すべてが良い。点在する粗末なアイヌの草屋や、麦島のなかにたつ無数の大樹の根が、全く内地と異った風情を呈する。午後十時半網走着。

この地において宮坂君の紹介により、漁業家桂田治三郎氏と相知り、また寺田先生の参加により、先生と親交のある三隅歩兵大尉、広辻歩兵少佐両氏を知り得た。しかも、われわれの血縁者である設楽判事が同地区裁判所に勤務せられ、その官邸に招じられて宿泊することとなった。

七月二十三日 網走滞在。

旅行用調度品は既に万端買い整えられ、且つ船積みに便利な位置に一括保管されてあった。船は桂田氏所有の発動機船で、これもわれわれの到着を待っていたのだが、天候の関係と調度品の授受その他の都合で、二十四日未明出港のこととなった。入夫三名のうち二名は、斜里で便乗することとなり、一名のアイヌは桂田氏宅に滞在して、われわれを待っていた。桂田氏立会のもとに日当二円五十銭と約束をした。

右の交渉が終了した後、設楽判事は一同を網走海岸から双子岩に到る景勝地へ案内された。目前に広く展開した海がオホーツク海かと思うと、気が大きくなる。右手に長く突出したのが、われわれの目指す知床半島である。峻嶮穂高を連想せしめる斜里岳、なだらかな山肌を見せて知床岳が紫に煙っている。三隅

君の厚意で野外で御馳走をうける。佳肴中特記すべきは当地産の帆立貝であった。

桂田氏は齡六十を超え、なお矍鑠壯者を凌ぐ海国男子である。しかも、われわれのために職業の一部をも犠牲として奔走し、終始最善の尽力をされた恩人である。半島沿岸に漁場を経営すること二十余年、西海岸における同業者中での成功者である。往年宮坂君が測図出張当時はロシアに在ったが、今や家運益々隆盛となり、壮年の息子と共に最近はアウンルイを根拠地として、鋭意経営の歩を進められつつある。丁度今の時期が、今年の漁業の当初にあたったため、漁具糧食の運搬に多忙であったにもかかわらず、その出帆を見合せ、われわれの荷物の運搬をひきうけられた。即ち網走で準備した主食品その他を二分し、一は一行と共にロシアに陸揚げし、他はアウンルイに前送して以後の用途に充て、アウンルイを行進の第二目標地点とすることを快諾された。明早朝出帆に関して細部の打合せをして、桂田氏のもとを辞した。夜はまた設楽邸に諸子参集され、軟談深更に及び僅かの寝をとる。

旅行用の草鞋わらじは、一行六名人夫三名の分を合わせると百足に近い大量を要するので、東京から携行するのは、ひと苦労と按じていたところ、宮坂君の経験に基き、網走監獄署に注文したのである。そのわらじは綿布を編み入れた頑る入念な製作で、その紐を麻製とし着脱交換に便し堅牢無比である。われわれは

一日に二足を予定したが、一日一足で充分間に合わすことを得た。監獄草鞋と称したこのわらじが、優秀であったことを特に一言しておきたい。

七月二十四日 二時半起床。北海名物のガスがたちこめているが、風はなく天候はわれわれに幸いしたらしい。船は、その大きさも型も、隅田川辺を航行する発動機船と大同小異で、北海三十里の波濤を無事航行しうるや、いささか心もとない。船長は桂田氏若主人と機関手一名。われわれ六名の他、前日雇傭したアイヌ一名とアウンルイ漁場に至る漁夫一名が合乗した。

三時半、発動機船は朝霧をついて出帆、一路東進した。三時間もたつたらう、漸く展望は開けた。柔かい緑のビロウドをいっただいた砂原が続いている。無数の小島は松島の再現かと疑われた。いや恐らく、パノラマに違いない。蜃気楼に相違ない。斜里はお伽噺に現われる竜宮のように美しい平和な村だ。

ただ雇傭したアイヌに、けしからぬことが持上った。即ち前に約束した日当の値上げを要求してきたのである。結局われわれは彼の態度を非として、イワウベツ川付近で下船せしめ、一方斜里で乗船してきた漁夫を、その代りとして雇うこととした。

われわれが目標をルシア川に選んだのは、この川がその源を硫黄山に発し、オホーツク海に流入する川であり、昨年北海道大学の一行によって、既に足跡を印せられた最北の地でもあつ

たからである。

沿岸の地勢は島戸狩付近を境界とし、南北両地区に分けられ、南は網走平地である長汀曲浦一連の砂浜で、風光はさして驚くべきものもないが、これに反し以北は所謂知床半島地域で、山勢海に迫って到る所懸崖深淵を囲み、一簾の飛瀑緑樹を透して海上から散見し得る等、風光明媚の地である。特にその絶勝の地は、イクシュベツ川からルシア川に到る硫黄山西北麓一帯の沿岸であらう。

船がウブシノツタ川沖合を通過する頃、その右前方に当り珍らしくも断崖の絶えた、僅かな砂浜を見出した。われわれの上陸地であるルシア漁場が即ちこの地である。船が近づくと、ルシア河口及びテッパンベツ川河口に各一の小屋が目に入った。ルシア漁場とは、この両家屋を通じての総称で、われわれは翌日の経路を顧慮して、テッパンベツ川番屋に上陸した。時刻は正午近くで八時間の航海をしてきた。先ず番小屋を訪問したが、漁期に早く、網走から盆栽採集の目的で、前日来滞在中の男が一名いただけだ。幸いわれわれは今夜の宿営をこの屋下に行うこととし、ルシア漁場主に了解を求めた。

番屋は丸太を組み合せたものに、僅かの板張りをしたもので、約十畳位の板の間の中央に炬を設けた、至って殺風景のものである。そして番屋はすべて生活必需品の清水を得るためと、河岸に群集してくる鮭鱒を漁獲するためとから、小流の河

口近くに位置している。

われわれは番屋の清掃、炊事の準備等を分担して行った後、時間の余裕を利用し、テップンベツ川に釣魚をしたり、ルシア川番屋を訪れたりした。川には魚多く、忽ち大鱒三尾と岩魚五六十を捕った。

七月二十五日 晴天快晴であったことは、何より嬉しい。午前六時テップンベツ番屋を出発した。七貫刃のルックザックは遠慮なく双肩に喰い込む。コースはテップンベツ川を遡行して、河口から三千五百メートルの尾根を、独立標高一二五四・二に向い攀登するにあつた。

河口から三、四百メートルの間は河床稍々開け、右に左に溪流を渡渉しつつ前進したが、しだいに峡谷断崖に遮られて、急流中の岩床を辿りつつ遡行した。兩岸の熊笹、藨、イタドリ等が厚く頭上を覆い、小暗い墜道の水中を前進するので頗る気味が悪い。人夫の三名はややもすれば遅れがちで、三上先生が再三激励する。午前七時三十分、河口から千メートルの河流三叉点に達し小憩した。

ここはテップンベツ本流と、標高七七三・九北麓から発する無名川との合流点で、僅かな淵を形成している。ここから上流は一層山勢極まり、且つ急流で屢々滝をなし、倒木が多く行進はしだいに困難をました。三千五百メートルの尾根は、実際では峻峻な兩岸と密林のため全く展望を封ぜられ、その判定に少

なからぬ苦慮をした。

休止点から遡行すること約二千メートル、兩岸の地形稍々開けて、尾根西南方曲線の屈曲点と思われる地点で、河岸に熊の足跡を認めた。コクワの実を採食した様子で、樹幹に生々しい爪痕があつた。この辺が目標とした尾根の基脚にあたるので、一同はルックザックを下して攀登口の偵察につとめ、且つ水筒に水を満たした。時に午前十時三十分。

山脚の地形は図に示すような平易なものでなく、河岸は到る所断崖を形成し、しかも熊笹やイタドリの類が繁茂して、方向を決定し難い。ようやく河岸を攀じ山稜に取りつくことを得た。この付近は雑草や樹木が混生し、行進は左程困難ではないが、身の丈を没する密生した叢中の前進は、甚だ無気味であつた。傾斜はかなり急だが、雑草に足場が得られるので、攀登もまた特に困難は覺えない。やがて雑草地帯を通過し、純然たる密林中に分け入った。トド松、エゾ松、その他潤葉樹の原木がびっしりと繁茂し、正面を向いたままでは到底樹間を通過し得ない。枯木は到る所に横たわり、前進を拒止している。右方殆んど直角に近い急傾斜の谷を望みながら、馬ノ背のような山稜の攀登に極度の努力をしたのだが、しかも前進は思うようにならない。

知床岳の山勢は、ちょうど妙義山に密林を覆つたようなもので、峻峻極まりない難山である。途中数回の休憩をとつた後、正

午近く傾斜の少々緩かな地点に達したが、前方をうかがうと降り勾配となつてゐるので、われわれはその前進方向に対して、いささか疑問を覚えざるを得なかつた。ちょうど正午なので、ここで約四十分の大休止をした。この頃から各自の水筒は空になり、稍々渴を覚えるようになった。休憩中空身となつて、地図と現地とを比較し偵察したところ、幸い降り勾配は暫くで止み、目指す方向が誤りないことを確認したので、更に新鋭の氣を以て密林中の前進を続行した。

進むこと約一時間弱で、又々不齊の地形に遭遇した。前方の降り勾配は前のに比べ更に大きいようだが、展望不可能のため充分な觀察を遂げることができない。枯木に攀じ登つて、その上から地図と磁石とを対照して、大体の地形の觀察をすることができた。即ち前方に横たわる谷地は、百メートル余で左折するのなら、十数メートル降下して後、再び尾根俵いに登攀し得るのである。

もし左折しなければ、百メートル余の降下によつて、午前半日の努力は水泡に帰するかもしれない。そこでわれわれは左折案を採つた。新コースを前進すると、間もなく偃松地帯に遭遇した。上方から覆い冠さつた枝葉を頼りに、枝から幹、幹から枝へと渡り歩くので、ルックザックの荷重と容積とのため、著しく進退の自由を束縛され、名状し難い難行であつた。殊に人間の疲労を訴へること甚だしかつた。

午前六時から不斷の努力をもつて、直距離二里弱の山路を攀登したわれわれは、時間的に言つても既に山頂に近いことを確信し、一層の奮闘を続けていた。しかし、偃松は依然として絶えることなく、また山頂と認めるような何物も見出さなかつた。こうして悪戦苦闘は午後七時迄継続され、漸くにして一峯を究め得たのである。

その峰の左手にあつては、剣刃にも似た峻峰が屏風のように重疊として、われわれは今や屏風の一角を辛うじて占領し得たのである。しかも、その第一段を登り得たに過ぎない。前面は直下數百尺の絶壁下に、 Teppanベツ川が一条の白線をひいて流れ、背後の硫黄山は夕空にその雄姿を現わしていた。

展望が自由になつたので地図を按じると、この地は知床中腹の予定宿營地であることが一目瞭然であつた。われわれの八時間半に亘る苦闘の結果は、僅々千五百メートルを攀登し得たに過ぎない。知床の山々を一望に収めたこの絶景も、現在のわれわれには何らの慰安とはならなかつた。一同は悲憤の情と飢渴に迫られ、嗆然として鋭角三角塔上の頂点に立つた。間もなく雲霧に全山は蔽われ、時刻の晚いことから、到底これからの行動は無理となつた。こうして一日で頂上を究めようという雄圖は挫折し、この地に宿營の準備が着手された。

露營で最も困難を感じたことは、飲用水の得られなかつたことと、山頂は三方から吹き上げる突風と、面積が狭いため天幕

がたてられなかったことである。そこで傾斜約四十五度の偃松帯に、なんとか天幕を張って泊ることとし、人夫三名は同様の地点に天幕を羽おっただけで、その下にもぐりこんだ。一滴の水も得られないので、その夜は乾パンをかじって過ぎねばならなかった。しかし、幸いにも夜が深まると共に風はおさまり、静穏となった。

七月二十六日 暁天幸いに快晴。露宮用具の始末もそこそこに、三上、寺田両先生は水を求めるべく午前五時三十分先発した。残った一行は準備を整え、乾パンをかじった後、先発隊のあとを追った。

本日の行程は直距離一里弱であるから、たとえ山路の高低を加えても、一日の行程としては決して大なるものではない。地形は昨日のような広い峻坂ではなく、削り立てたような山背を、峰から峰へと前進するのである。偃松は前にもまして繁茂し、両側からの疾風のため岩上に密着して行く手をとぎし、歩行は更に困難を極めた。加うるに渴水のためか、精力永続せず、呼吸逼迫のため屢々休息をとらねばならなかった。一進一止、まことに遅々たる前進に心の焦燥を禁じ得ない。こうして幾つもの峰頭をのりこえ、ようやく知床岳の絶頂を眼前に仰ぎ見ることができた。その中腹の窪地には純白の雪渓が走っていた。先発隊のナタ目を入れた偃松は、その辺りから姿を消した。また後続の人夫二名は遥か後方に残留し、一時連絡をたっ

たが、やがて一名の人夫が追及して来て、休息の後追及すべき旨を伝えた。

知床岳の雄姿に勇氣百倍したわれわれは、更に奮闘一時間、田山君が「水」と絶叫して、遂に水を発見した。絶頂から約二千メートル小閉鎖曲線の丘阜北側の日蔭に、数日前の雨水が溜っていた。時まさに正午を稍々過ぎる頃である。

水は寧ろ変廢したのに近く、なま温かくて小さな虫がたくさんいたが、一行は夢中になってこの水をがぶ飲みした。そして直ちに炊事を急いだ。この間先発した三上先生は、この水を発見することなく、直路山麓の雪渓に至り、双手に水の充滿した飯盒を携えてやってこられた。断水二十数時間後の飽食は、以て瞑すべしであるが、まだ一滴の水を得ておらぬ人夫二名の救援をせねばならぬ。三上先生と三好君は軽装して水と食事を携行し、他は二氏のルックザック及び寺田先生の食事を携えて雪渓に至り、本夜の宿営の準備をすることとなった。

そこからは余り高低差のない知床鞍部を、雪渓を目標として進むのであったが、偃松の繁茂は依然として続き、相当の困難があった。しかし既に飢餓の境を脱したわれわれは、一気呵成に躍進し、午後四時三十分予定地に到達した。

ここ迄やってきて、テッパンベツ番屋出発以来初めて愁眉を開いた。ここは正しく計画に予定した宿営地点だった。(高度約一〇八〇メートル)

雪溪は山頂西北角を起点とし、姪々山を繞って下降する地盤の基部に堆積した残雪で、西北から東南に向い、長さ三、四百メートル、幅五十乃至百メートルを算する程度のもので、その下方には清冽無比の泉が湧出している。また付近に咲き乱れたガンコウランやユケモモの可憐な姿が、限りなくわれわれを喜ばせた。

一同はしばし雪溪の風光を賞し、ついで露营地の選定、燃料集め等に従事しているうち、三上、三好両氏が人夫を伴うことなく帰ってきた。両氏の話によると、人夫の休憩していた地点まで行ったが、天幕を岩上にかざし、その下に荷物を置いたまま姿が見えない、付近を呼び捜したが、遂に失踪と判断し、荷物を調査したところ、私有物は勿論われわれの糧食中味噌の大部と米二、三升及び鍋一個とを携行して、逃亡した模様である。われわれは彼等を敢て追及するの煩を避け、爾後の策を講ずることにした。

露営は最も理想的に実施された。弾力ある厚き苔を褥とし、偃松の枯枝に充分の暖をとり、味噌汁、罐詰肉に舌鼓をならした。

(田山追記——地形上及び飲料水の都合上、知床岳登高にはテッパンベツ川の源流点まで廻り、そこから企てた方が遥かに楽と思う。)

七月二十七日 この日もまた快晴である。人夫がたった一人

になったため、荷を分けて背負う。ルックザックはかなりの重量となったが、希望に燃えたった爽快な気分、午前七時露营地を後に山頂目にかけて出発した。露营地は既に知床岳の八、九合目の高所に位置していた。その上ここからは岩石累々たる所を飛び、石を伝って登るのだから、傾斜は急であるが偃松の難は少なく、前二日間の行進に比較して非常にらくであった。

雪溪のつらなる地盤に沿い、山頂近く堡壘のように南北にわたる絶壁の下を右に迂回し、最東端の絶頂に達するコースを採った。図上では知床岳(一二五四・二メートル)の絶頂を閉鎖曲線の西方に記入してあるが、最高点はむしろ東端小閉鎖曲線上にあるものと思う。午前八時三十分、われわれは知床岳の絶頂をきわめ、万歳の歓呼をあげた。さらに校歌を合唱し、葉用メントルブラン数滴をカップにおとして乾盃した。成瀬君は石を積んで記念とし、また記録を記してビール瓶内に入れ、これを岩の間に保存した。

知床岳の眺望は実に天下一品である。知床半島の物見台と言つてもよく、遮るものなく全半島を一望に収め、海をへだてて遠く千島国後島を望み、顧みれば硫黄山が指呼の間に屹立している。足下の赭岩の崩壊した一大峡谷は、直下海に迫って傑然とさせられる。山頂は殆んど岩によって形成され、東西に長く幅は僅か数メートルで、岩窪に腐植土があり、偃松その他の雑草が繁っている。

絶頂に留ること一時間、憧れてきたこの頂に袂別して下山の途につく。

知床岳の大峡谷、われわれはこれを地獄谷と命名した。これを右に、山頂西北端から遠くポトピラベツ川河口に派出した尾根は、われわれが下山路として選定したコースであり、文字通り人跡未踏の地であった。山頂の閉鎖曲線を西へ、地獄谷の西端付近から、再び偃松の厄に遭い、岩間の深い間隙に陥落するものも少なくなかった。

こうして三角標高の西北六百メートルの地点に到着したわれわれは、また進路の選定に一大問題を与えられた。その隆起部から下方を望むと、疑々たる山の背は剣の刃のように痩せ細り、処々階段状に岩壁がたちはだかっていた。これに反して地獄谷は、赤褐色の岩石の崩壊が凄惨の状を呈してはいるが、その谷底の状況は見得る限りでは、大きな困難もなさそうであり、これを下降したなら、ポトピラベツ漁場の近くで、海岸に到達できそうに看取された。そこで、われわれは尾根をすてて地獄谷沿いのコースをとることとなった。

しかし、地獄谷は絶壁の連続であった。しかも水量が多く到る所滝をなしていた。幸い四本のロープが非常に役立った。われわれは却って弱い二人の老夫のいないことを喜んだ。彼らがいたら、どんなことになったかと、今なお疎然とする。ロープに身を托して絶壁を下る心地は、全く生死を脱却した心境で、

友を思う情の他には、全く何物もない境地であった。

全身水を浴びて、三十メートル近くの滝を降下したときには、つくづく岩燕の翼がほしかった。蝦夷の地を初めて探検した近藤重蔵の手記に「道ナキ道ヲ切り開キ、蟻付シ蟹行シ猿攀ス」という一句があるが、自分たちにはよく彼の苦心が判る様な気がした。

なお二、三の滝を降下するうちに、日はトッピーと暮れてしまった。

七月二十八日 野営地の直ぐ下は、青黒い滝壺をもつ恐ろしい滝だ。この川は硫黄分と鉄分(?)を多量に含んでいるために赤黒く濁り、しかも水量多く岩を嘯み、底をえぐって流れる様は物凄い。

河岸が広くなるにつれて、到る所一尺余もある大熊の足跡が生々しく印せられ、曲り角には鈴と警笛に驚いて引戻った跡さえ歴然としている。この付近の実地の地形は、所々地図の示すところと大いに相違していた。殊に地図では大ガレが海拔二百メートルで消失しているのに、実際はこれに相違して、海岸のすぐ近くまで迫っていた。

幾度か絶望と思っただけに、初めて海岸へ出た時は非常に嬉しかった。正午ポトピラベツの古川氏の小舎に着く。

午後、付近のオケッチウシ川に釣に行く。藪の深い、傘程もある藪に蔽われた小気味の悪い川ではあるが、川底も見えない

程岩魚が群れていた。充分清遊を試みて帰れば、古川氏の好意で、漁油を煮る大鍋に風呂が沸かしてある。何処も変らぬ厚い人情に感謝しつつ、知床岳の土の汚れを落した。

この時、ようやく沈まんとする夕陽は、青澄んだ空に五色の光を放ち、洋々たる海原は金色に照り反り、やがては千古を包む碧青に戻る。オホーツク海の日没は実にすばらしい。海浜にて野営。

七月二十九日 岩伝いに海岸を進む。オッケチウシ川までは、道も頗る平凡だが、それから先は絶壁が海に迫って、深淵をなし、屢々危険を冒した。九時四十分、一行は遂に如何ともしたい深淵につき当った。削ったような絶壁はロープの使用もならぬ。色々考えた末、流木を集めて架橋することにきめた。忽ち勇敢にも寺田先生は、深海に身をおどらして彼岸に泳ぎつき、相呼応して作業にかかる。一時間にしく立派な丸木橋が出来上った。

アウンルイの桂田氏の小舎は、アウンルイ川から程近い。十一時二十分に着く。予定より一日遅れたので、桂田氏は大変心配された相だが、一行の無事を見て大いに喜ばれ、祝酒を傾けながら、変化に富んだ北海六十年の生活を物語ってくれた。彼は西海岸漁業者中、押しも押されぬ成功者の一人だ。

川釣りにいい加減驚いた自分(田山)は、この日始めて海釣りをして、更に度胆をぬかれた。釣れる釣れる。ガヤという黒

鯛に似た七八寸の魚が、舟の周りに黒く群れる。ヒレにかかるのはまだしも、一度糸を呑み切ったやつが、食欲にも再びかかる。横田先生と二人で五十分間に三百五六十も釣った。流し鉤をすれば、これどころではなかった。流し鉤とは、長い糸に鉤を凡そ六十もつけて沖に流すのである。

これを引き上げる時の楽しさ。誰しも釣手が味うような、所謂手答えという快感が遺憾なく味わえる。一人が糸をたぐれば、一人は掛針鋭く鱸を押す。他は子供のようにはしゃぎながら、舟から乗り出して、糸に鈴なりにぶらさがった大魚の、溼潤たる躍動を楽しむと言った具合。二尺近くのオヒョウ、ガヤ……が舟に小山のように積まれると、一同は凱歌をあげて帰った。今晚の献立は、オヒョウの刺身、ガヤの塩焼き、鮭の塩焼き、岩魚ヤマベの味噌汁。

七月三十日 人夫の佐竹は中々忠実な男で、よく働らいてくれた。齢五十を越えた、人好きのする老人だ。最後まで行を共にさせてやりたかったが、彼の帰途の都合もあるので、解雇することに決めた。

代りに、丁度漁場に来合せた岡本というアイヌを備う。彼、年四十、一見頗る獐猛な巨大漢だが、火酒を呑まなければ人が好い。これが総てアイヌ人の特性らしい。彼は二十貫位の荷は平気で背負う。

六時十分出発、岡本は荷を積んで海を、われわれはあくまで

陸路を。ポロモイ川以北知床岬に至る海岸は、風景として見るべきものが多い。敢て諸君の清遊をすすめる。

重畳せる峡谷は千古の秘密を包み、微動だにせぬ青藍の淵をたたえ、宛然かの有名なノールウエイの水河浸蝕谷を思わせる。逆かまくら怒涛は海岸の奇岩怪石に碎け、白い沫をあげて奇観を呈する。見上げるような石門あり、獅子の面貌を備えた獅子岩や、さては高樓のようなロソク岩、われわれは幾度か大自然の造化の妙に、驚異の目を瞠らされた。一度目を転じて絶壁を仰げば、ハンゴン草の黄花、エゾノコギリ草の白、ヤナギ草の淡紅が眼をひく。青空を悠々とかける鷺や、或いは鴉群を追って得々たる鷹の群も、一度短銃をはなせば、あわてふためいて飛去る姿のおかしさ。十一時、文吉小舎跡に着く。ここには水もあり、絶好の野営地である。

十二時半、愈々われわれは憧れの知床岬に達した。想像に勝るその壮観。岬は一望千里の高原で、樹木少く雑草が茂り、数々の花が千紫万紅妍を競っている。遠く南方を展望すると、一帯の山野はトドマツ、エゾマツ、偃松の林で暗緑を呈し、遙かに淡青の山岳を見る。

気味の悪いことには、到るところ熊の踏みにじった跡や狐の穴が多く、草のすり合う音にも襟を冷やす。

岬の突端、海中に一奇岩がある。風仙岩と言ひ、これを起点に波濤千里の太平洋と、鏡つようなオホーツク海とが、剛然と

境している。またこの岩を中心として、北見の国と根室の国とが背中を合わせている。この頗る重大な役割をもつ岩の周りには、無数の海豹が背をほしていた。一体知床とはアイヌ語でシレットクと呼び、「美しい地」或いは「突出した所」という意味の由。いかにも半島の特徴をとらえた地名である。

四月以来、夢寐にも忘れなかつた憧憬のこの地に、三四日は滞在したいのだが、残念ながらここには水がない。後髪を引かれるような思いで、われわれは岬を去った。愈々東海岸である。西海岸があくまで険難で、永住者が絶無なのに比し、東海岸は五六の難所を除く他は、概して歩行可能で、比較的発達し、一里毎に三四の昆布採取小舎がある。岡本の案内で赤岩の昆布小舎に着く。晩は途中生捕った蛸の酢ヅケに舌鼓をうった。

七月三十一日 東海岸でわれわれが内心懸念していたのは、絶対歩行不可能と言われた念仏岩とベキンノ鼻を、どうして通過するかということだった。勿論、漁業者が既に企てたように、舟行によれば訳もなからう。しかし、これではあくまで徒歩で、またはわれわれの力だけで突破しようという当初の目的に反する。

正六時昆布小舎を出発。途中一回の山越えをなし、約二時間半で念仏岩まで来て見れば、聞きしに倍する難関だ。絶壁は幾十尋の淵に対して、極端な鋭角をなし、手掛りも足掛りもな

い。大きく迂回しているために、架橋もならない。そこで思い  
たつたのが筏であった。幸い軍人の先生が三人もおられたの  
で、忽ちにして流木はロープによって組まれ、立派な筏が出来  
あがった。しかし筏を操ることは更に難事だった。何回か危う  
く海中に投げ出されそうになり、幾度か失敗を重ねて後ようや  
く成功した。

念仏岩以南の海岸は軟かい砂岩が多く、激浪のために根こ  
ぎになった巨樹、木材等が一帶に堆積している。昆布、海草、  
熊の糞等が散乱し、奇怪な海虫、怪魚、海豹の骨等もうちあげ  
られ、それらに鳥がむれていた。

この付近には海豹(アイヌ人はこれをトツカリと呼ぶ)が多く、  
われわれが近づくと、七尺近くの巨体を無器用に動かして、忙  
しく海に飛びこむ様は滑稽である。豚にヒレとヒゲをつけたの  
がトツカリで、御同様頗る愛敬がある。

ペキンノ鼻の山越えは、熊の足跡を辿って訳もなく通過し、  
モイレウシ小舎に着く。時に一時二十分。モイレウシとは「波  
はあって波のない所」という意味の、甚だパラドックス式なア  
イヌ語だが、成程静かな入江だ。発動機船が一隻碇泊してい  
た。幸い根室行だったので、われわれの荷物の便乗を托し岡本  
を帰した。モイレウシには小舎はたった一軒だけで、そこから  
先約二丁の地も、また頗る難所だった。船で渡してあげようと  
勧める漁夫の好意をことわり、洞窟を潜ったり、ロープを使っ

たりして、辛うじて通過した。セセキ到着六時。

セセキには、われわれの一行を出迎えに、七里の險路を冒し  
て、羅臼警察部長渡辺氏が来ておられ、一行の成功を心から祝  
ってくれたのには、涙の出る程嬉しかった。

セセキは中々ふるった温泉である。人家は二軒。温泉は海岸  
の磯の上であって、満潮になれば消失する。露天なのは言う迄  
もない。こんこんとして湧き出る熱湯に、時々海水が浸入して  
具合よく加減される。湯にのぼせた顔を涼しい海風が掠すめ  
る。これ程原始的な自然の浴場がまたとあろうか。この素朴  
な、しかも気持のよい温泉が、一日の労働に疲れた昆布採取者  
の、唯一の慰安所であり、また別天地でもある。彼らは一里の  
道も遠しとせずにやってくるのだ。そして彼らはここで、何事  
も忘れて高談し戯笑して、愉快に一日の結末をつけるのだ。六  
畳二間だけの旅舎は、所謂駅通と同じ性質のもので、手厚い待  
遇(しかも低廉な宿賃で)には恐縮した。十日ぶりで畳の上に  
寝る。本日の行程七里半。

八月一日 熊に備えるため、剣の代りに銃を担った渡辺巡查  
を先頭に、十日間の悪戦苦闘に衣服は破れ、髭の伸びた六人  
は、海岸を練って歩いた。風彩の悪く、監獄草鞋をはいた一行  
は、少なからず漁夫を驚かした。「どちらから」と彼らが問う  
のに「網走から」と答えるので、さては矢張り重罪犯人かと思  
われたのも、無理のないことだった。

十一時知床別に着く。同地は凡そ百軒の人家がある東海岸最北の大都市？である。急に下界に出たわれわれには、事毎に目新らしく、鶏の顔さえ珍らしい。

シャモ（大和民族）に追われて本州を去り、北海道に逃げた後のアイヌの歴史は、熊との争闘史である。今でも熊の害は甚だ多く、殊に知床半島には多数の熊がいるので有名である。知床別や羅臼付近のように、比較的開けた土地でさえ、なお相当の被害がある。十日前二頭の大熊が、あの家の雨戸を破ったとか、この前はあの木に三頭の小熊が戯れていたとか、この地点で郵便屋が殺されたとか、一々説明の労をとりながら、装弾する部長の緊張ぶりを見ては、今更ながら熊の巢と言われるあの知床岳を突破した、無謀に近い大胆？に、自分ながら呆れるばかりだった。

四時四十五分、羅臼に着いた。

## 坂本直行画文集

### 雪原の足あと

著者は釧路に生れ、北大で山岳部に籍をおいた。日高と原野の風光に「身も心も奪われて」、昭和十一年からは下野塚で開拓生活に入った。火山灰地の悪条件の下で、百姓や炭焼をやりながら、四季おりおりのスケッチを続ける。百枚あまりのスケッチとともに、随筆が楽しい。商人やサラリーマンを加えた混成部隊の山岳行でキャンプをはり、歌をうたう。石狩岳の山頂で結婚式をあげる山仲間の人を引受け、雪を踏みしめて型破りの式を司会する。——「自然とともに生活する」著者の気持が伝わってくる。

(週刊朝日6月4日号書評より)

B5判 原色版38 図版65 二〇〇頁

特装本函入り 定価二、八〇〇円

お申込は 茗 溪 堂 へ

## 海外登山略報

### グノン・キナバル登山

世界第三位の大きさを誇る熱帯の巨島ボルネオ、その北部にジャングルをぬきこんでた、幻のようにそびえる岩峰が望まれる。原住民が神々の住居と信じている聖なる山、グノン・キナバル(四〇七メートル)(Gunong はマレー語の山の意味)である。

東京農業大学探検部は、一九六四年六月から一二月まで、ボルネオ農業調査五年次計画の第一次隊として、杉野忠夫教授リーダー以下九名がサバ(旧英領ボルネオ)において調査を行なった。キナバルは七月および九月の二回、南面から最高点 Low's Peak に足跡をのこした。この山は最近とくにその重要性が認められ、山腹にはラジオ・サバの中継所、営林局の小屋ができ、そして山頂近くにヘリコプター輸送による立派なジュラルミン製の山小屋が建っている。初登頂は一八五一年 High Low によって Paka route から行なわれているが、山頂近くのその小屋のため、一般ルートである Paka route からの登山は、大きな困難がなくなった。しかしヴァリエーション・ルートからの登頂は、初登頂から百年後にはじめて開かれた事実が示すとお

り、千メートルにおよぶ垂直の岩壁と、昼なお暗いジャングルの通過は、登山としても、探検としても大きな魅力と困難を持っている。最高点 Low's Peak へは、初登頂のときに Low のとった Paka route が唯一のものであり、北面から稜線に達した記録すらない。

主なルートを記すと次のものがある。

- ① Paka route
- ② Marai Parai route (北山稜の五千百フィートまで)
- ③ Bowen's route (Paka route の上部で分かれて King George Peak に達す)
- ④ Kundasan route (Kundasan 部落より Paka route に合す)
- ⑤ Mesilau route (東山稜に達す)
- ⑥ Royal Society Expedition route (東尾根より東山稜上のピナクルに達す)
- ⑦ Panataran route (唯一の北面ルート、ただしキナバルより遙かに離れた五千フィートの前山に達したのみ)

キナバル山頂は広大な花崗片麻岩の台地で、その台地をかこむように、幻想的な岩峰、ピナクルが聳え立っている。眼下には、インドネシア領カリマンタンに続く広大なジャングルが広がり、海外線には白いサンゴ礁の浜、南支那海の明るい青さ。赤道に近い南の島にもこんな楽しい山があった。そして東西南北四マイルにおよぶ四千メートル級の岩峰群の登攀も、未知のヴァリエーション・ルートも、グノン・キナバルはまだ知られ

ない多くの魅力を示してくれた。

(向後元彦)

## カナダ親善登山

隊員編成 池田甚兵衛(隊長)、内田静雄(副隊長)、村田実、大関英雄、柏倉時雄、矢野和孝、志賀侃、三成善次郎、浅井秩夫、奥山輝一、村川満均、増田義雄、井場良次郎。

一九六二年ごろから、一都市の小さな山岳団体の若者たちが、勤らく者による海外遠征登山を行ないたいと考え、短時間で経費も少なく、ヒマラヤには及ばなくても、岩と氷にアタックできる山ということで、カナディアン・ロッキーズが選ばれた。初登頂とはいかなくても、日本人によってかつて登られたアルバータ峰(三六一九メートル)を目標とした。登山隊は全日本山岳連盟一九六四年度海外登山隊として認められ、隊員は川口市山岳連盟傘下の山岳会十団体から、選考委員会を選んだ。一九六四年六月二日、羽田から空路バンクーバーに全員集結、バンクーバーからC・P・R(列車)を利用してアルバータ州バンフに入る。バンフからレントカーによりバンフ・ジャスパー・ハイウェイを約三百キロ北上し、ハイウェイからアルバータ峰への最短コースの地点へBCを設ける。このルートは、かつての横氏一行のアサパスカ谷湖行のルートと区別するため、アルバータ・トランス・ハイウェイと名付けた。サンアプタ河から前衛の尾根三千メートルを乗越して、アルバータ峰の肩二千メートルよりアルバータ峰のアタックを行っ

たが、予想以上に岩質がもろく、岩登り用の器具のほとんどがきかず、山稜直下七百メートルの地点で登頂を断念した。AC発七月一日、一二日アタック、一三日AC帰着。アルバータ峰は周辺の山容と異なり、戦艦を横たえたような黒い山容で、そのほとんどがオースドックスな岩登りである。その周辺には無気味に、懸垂氷河が十五分ごとに雪崩をおこしていた。

カナダ国立公園内であるため、その管理規定にもとずいた行動をとる必要があるため、地区ワーデン(管理員)との連絡を密にし、その指示に従わねばならない。特にハイウェイ沿線では、指定キャンプ場以外はキャンプできないし、登山に際してはクライミング・ライセンス(無料)を受け、これにより事故発生の場合の救助などが約束される。また野生動物は完全に保護されているため、テントの付近にひんぱんに出没するクマ、シカ、リスなどに危害を加えることは禁止されている。またこの時季は蚊の発生がひどく、食事もできないほどで防虫剤が必要である。ハイウェイを一步はずれると原始の世界で、ハイウェイからは氷河湖に映す懸垂氷河や、三、四千メートル級の岩峰の風景は、第二のスイスと呼ばれている。

山へのアプローチは、ハイウェイを車で行くよりほかに、現在では荷馬や人夫の利用はできない。ガイドは国立公園管理局の指示を受けるか、カナダ山岳会の秀れたクライマーなどを依頼することができる。

カナディアン・ロッキーズは日本から近く、入国許可の問題もなく、気軽に岩と氷の山を楽しめるという点でも、大いに

魅力のあるところである。

(村田 実)

## マウント・クック登頂

一 社会人山岳団体として持ち続けた、海外登山の第一段階として、氷河のある山で、ある程度歯ごたえのある場所として、ニューゼーランドを選んだ。したがって、計画当初より遠征という言葉を意識的にさげ、たんに合宿の地をタスマン氷河にという形をとった。

メンバー、狩山芳夫(隊長)、松原通雄、伊藤尤士、梶野圭右。一九六四年二月五日、本隊(狩山、伊藤、梶野)荷物とともに姫路出発、海路シドニーへ。

一月一七日、シドニー着、一六日空路日本を発った松原と合流、空路ニューゼーランド、クライスト・チャーチに向う。

二月二日、荷物の通関に数日を費し、バスでハーミテージへ。

二月二日、食糧調達(殆んど現地調達)、パッキング完了。  
二月三日、ポール・ハットまでバスで入り、タスマン氷河に至る。

二月二五日、プラトウ・ハット着。ホックステッター氷河の終点、グラランド・プラトウに幕営の予定であったが、六三年末空輸により小屋が建設されていた(地図には未記入)。

二月二六日、プラトウ・ハットから標高差一七〇〇メートルのクックをアタックすることにする。ルートはスピード本位

に考え、リングダ氷河をとることとする。午前三時ハット出発、太陽が出ないうちにリングダ氷河を通過するためピッチを上げ、午前八時半メインクレスト(ザブリゲン・リッジの延長)へ出る。六ピッチの岩登りで、頂上直下のアイス・キャップに達し、二百五十メートルのカッティングで午後二時半頂上に立った。下降は難渋を極わめ、午後一時グラランド・プラトウに帰着。頂上へは伊藤、梶野で達し、狩山、松原はアイス・キャップ下で待機、われわれのすぐ後からニューゼーランド・アルパイン・クラブの二パーティが登頂した。今シーズンのニューレコードとのことであった。

二月三〇日、ハーミテージへ下山。食糧、燃料など補給、梶野は仕事の都合で空路帰国。

一九六五年一月一日、三名でタスマン氷河源頭のタスマン・サドル付近へ、セスナをチャーターして空路荷上げ、テント設置。

一月二日、ホックステッター・ドーム(九二五八フィート)へ、氷河源頭域を判断のため登頂、われわれの第二の目的であるエリーデビエーモントの登路を確認する。

三日、八日、風雪のため停滞。

一月九日、予定期間をすぎたため下山。

二月二日、オーストラリア経由で姫路へ帰港。

以上不満足ではあったが、クックの日本人としての初登という初期の目的を達した。(東京西山会 伊藤尤士)

(本略報の編集にあたり山崎安治氏の労を多とし、記して謝意を表する——編者)

## 追悼

### 高野鷹蔵氏（一八八四—一九六四）

『岳人』一九六四年十月号に、「小島鳥水と甲斐の白峰」という題で、一文を掲げた中に、昔高野君が小島君を捜し出したいきさつに触れたので、近い内にそれを高野君の所に持参して、昔の思い出を語りあい且つ又鳥水のあの一文が、小島君を吾々のグループ即ち日本博物学同志会の幹部と結びつけた動機となつたが、それが実際の紀行ではなくて、文献を元にして書き上げた一片の創作であつたことの由を話して、少し許り驚かして見ようかなど、考えている矢先に、高野君は思いもかけず、あの世に旅立ってしまったのは、残念至極といわなければならぬ。

私が初めて高野君に逢つたのは、明治三十六年（一九〇三年）一月十一日に、日本博物学同志会の第三回談話会が、麴町区永田町の日枝神社境内にあつた楠本という茶亭で、開催された時であつた。明治時代には、日枝神社即ち山王の境内には、今とちがって両三軒の茶亭があつて、参詣の人などが立寄つて休ん

だり、暑い夏の日など、涼みに来る人が休憩したりしたものだ。その席を借りて、こんな会が開かれたので、室内には標本や書籍などを陳列し、また会員だの私達の先生の帰山信順先生とか、来賓の寺崎留吉氏の講演があつた。

横浜在住の高野君とは、距離の関係もあり、また同君は蝶郎と号して、蝶類の研究に専念して居たし、こちらは植物という訳で、大して盛んな交渉はなかつたように記憶する。

明治三十七年の『太陽』第十卷第三号に、小島鳥水と名乗る人物が、「甲斐の白峰」なる一文を掲載したのが、吾々の間で問題となり、やがて、この人は横浜の住人ということを目にはさんだ私は、外にたよる人もないまま、高野君に一書を飛ばして、若し出来たなら、小島鳥水という人を捜し当てて呉れないかと頼んで見た。高野君も一時は途方にくれたらしかつたが、幸いにも或る日知人の山崎小三（号紫紅）氏に遇い、鳥水は山崎氏の友人だということで、同氏の紹介状を持って、明治三十八年一月か二月頃、二人で小島君を訪問して以来、私と高野君との間は、交渉が漸く深くなり、明治四十二年に私が外遊するに当つては、高野君に多大な御世話になつたし、大正二年の夏に、一時帰朝した時にも亦高野君の御世話になつた。大正五年に最終的に帰朝した後、後から届いた荷物の受取りについても、高野君を煩わしたことが少なくなつた。

明治三十八年の秋に、山岳会が結成されたが、一番困つたのは事務所をどこに置くかの問題であつた。最初は発起人の最年長者であつた城氏の法律事務所置いて貰つたが、やがて

城氏が朝鮮に赴任することになったので、一時同氏の厳君の所に移したが、茲にも永く置く訳に行かないので、明治四十一年一月に、高野君の横浜の家に移したまま、大正八年十月十五日に私の家に移るまで、この長年月高野君の監督下に、会が成長して行ったのである。その間、殆ど一人で会務を見た訳で、若し同君のような人が居なかったとしたら、会の発展もどうなっただであらうか。高野君の功績は、筆舌に尽せぬ程である。

大正六年以来、山岳会の用事で高野君を訪問する機会がふえ、一方、私の著書に入れる写真に関しても、高野君の好意に俟ったこと再三に上っている。大正十二年九月の大震災までに、私達が高野君の家を訪ねた回数、算え切れない程であった。一人で訪問したこともあれば、数名で押し掛けたこともあり、私ばかりでなく、誰も彼も自分の家同然の気安さで、頻繁に訪問したものである。

高野君がいつ頃から写真に熱中し始めたか、詳しくは知らないが、蝶類採集の目的で、浅間山麓などに出向いた折に、浅間山の写真をとったのが、明治三十八年の夏のことであったのだから、その頃には、もうカメラを手にしていたことは確かだ。その年の秋九月の下旬に、日本博物学同志会横浜支部の発案で、丹沢山塊の塔ノ岳に、採集旅行を企てた時にも、カメラを携行し、幾枚か撮影して、印画を私達に呉れたが、その時の紀行を『山岳』第一年第一号に掲載した中には、一枚も使ってないのは、その結果に満足しなかったのかとも思われる。浅間山のも、丹沢行きの時にも、手札判の器械であったが、その後カ

ビネ判の組立て暗箱に、Bテッサーのレンズをつけたものにかわって、やがては写真器一式と乾板幾ダースかを、防水の箱に納めて、それが五貫目もあるので、登山の折には専用の人夫一人を特に雇って、いざ撮影の際には、高野君の下知の下に、背負梯子からその箱をおろさせ、立ちどころに三脚をたてて、暗箱を組立て、レンズをはめ込み、ソールトンシッターを装置して、短時間に一写に及ぶという寸法を、工夫したということであった。

山の好い写真が集まると、今度は写真帖を作って、同好者に配布することを思い立ち、『高山深谷』の題で幾集かを完成し、最後には写真版にして印刷したのだが、それ迄は製版によらず、悉く景色に忠じて、色々な印画紙を用いて焼付けたものである。それも多数のことであり、中々一人では間に合わず、写真屋を雇って来て助手に使っても、彼等の腕前では、高野君の気に入るようには行かないと、嘆声を漏していた。前記『高山深谷』の最後の集は、昭和十六年十二月十五日の発売で、その巻頭に、高野君の昔の山岳写真の苦心談が載っている。

大正十二年九月一日の関東大震災で全焼し、幾百に余る硝子のネガが、一緒にとけて山となったのを見て、写真を断念したらしいが、阿佐ヶ谷に新居を構えて以来は、ローラーカナリヤの飼育に専念して、羽毛の色をあざやかにする為に、唐辛子を餌に加えると、繁殖力が衰えることばしていた。戦時中には、餌の入手が困難となったので、何か雑草で代用品はないかと、相談に来たこともあったが、晩年はこのほうも断念した模様で

あった。

七十歳を超えた頃、可なりひどい胃潰瘍に罹り、思い切って行なった手術も幸に成功して、その後は健康を取り戻し、ただ日増しに甚しくなる交通地獄に、殆ど外出をせず、主として静かな生活を送って居たようだが、忽然として他界されたことは、寔に痛惜の至りである。(昭和三十九年十月二日誌)

(附記) 高野君が胃潰瘍の手術を断行して、その結果が大層良かったと聞いて、安心して居たが、昭和三十一年の秋になって、誰やらが来て、近来健康を害して床についていると話したので、九月二十三日、早速見舞に行つて見た。床中で退屈の折にでもと、拙著『高嶺の花』を携えた。

さて玄關に立つて案内を乞うと、単衣姿の高野君自身が取次に現れたので二度びっくり、重患の噂は何かの間違いと判つて安心。散々懐旧談に時間をつぶした上、軽い気持で帰宅した。その翌日、同君から来た書面が最近見当たつたので、茲に転載する。

「富士見町にて

武田賢兄

拝啓 昨日はわざわざ御見舞を頂き有難く御礼申上ます。旧知の御厚意感銘の至で御座います。御高著拝受、山崎博士のエーデルブイス(日本の)の話など五十年忘却していましたが、御手元に残された事洵に忘れ難き事です。

其節は好味拝領御礼申上ます、秋冷と共に元氣も出る事と存じます。差当りの持病も根治、当分永生きをするつもりで居り

ます。

御帰り後間もなく老妻等帰宅、残念がって居りました。失礼御寛恕願上ます。

カナリヤも戦後は一産業化し年間一億円近い外貨を得ますが、従つて私達の手にはおえぬ仕事となり、遠くの方から小言を云う係りになり何の能もなき有様です。

御自愛御健祥を祈ります。敬具

九月廿四日

この次に麻子夫人の添書きがある。

註。山崎博士のエーデルブイス云々は、昔山崎直方博士が、月山や黒岳でエーデルブイスの一種を探り、高野君に送つた件について、拙著に述べてあるその事を指すのである。(昭和四十年六月廿五日)

(武田久吉)

高野藤蔵君が急逝の報は私を驚かせた。近年とかく健康が勝れず、ことに胃潰瘍を患つてからは、好きな酒も断ち、甘いものを口にして左から右に転向、昔日の元氣はなかったけれど、まだまだ八十という年齢ほどの衰えは感じられなかったし、現に逝去の前にも歩いて、さほどの距離ではないにしろ、掛りつけの病院に行ったことを未亡人は語っており、急死という言葉を使われた程だ。病勢の重かった際にも、君の父君は九十まで生きられたし、「おれはまだ死なないよ」と言つておられたと言う。最後の診療の際は、いつもの薬とは違つたものを受けており、注射の直後に全身に激痛を來たし、立つことも出来ずに

苦しんだということで、その際主治医の博士は、家庭に取込みがあつて病院に居らず、代理の先生の手当を受けたそう、現場に居ない素人の私など、とやかく言うことは出来ないが、何かそこに手ちがいがあつたのではないかと、疑いたくなるような次第だ。

思えば君とは古いつき合ひであつた。日本山岳会の前身「山岳会」の時代だが、名前はその前「博物之友」や蝶の研究で知つていた。山岳会の事務所が当時、横浜本町の君の家に置かれていたので、いろいろの会合や所用で、よく君の家へ通つたものだ。君の家は先代以来船舶運送業で、荷主の旅宿も兼ねた広い構えであつた。間口の広い店に入ると、通りとカギの手に並んだ帳場格子の中に、キレイに髪を分け、縞の着物に角帯姿の若主人の君が坐っている姿が、今もまざまざと眼に浮かぶのだ。

ここに出入する山岳会関係の連中は、書生っぽ流のいわば異色の客だつた。山手から正金銀行に勤める小島鳥水を筆頭に、山岳会幹事の辻村伊助、梅沢親光、三枝威之介（現守博）の諸君が常連であつた。事務は勿々に片付けて、直き酒になる。小島、辻村のお付合いに比べ、主人は酒豪に近く、梅沢、三枝も強く、私もこの頃はよく飲んだ。だが、しゃべる方では鳥水が出色で、口角泡を飛ばし、立てつづけの早口に、舌鼓のような間の手を入れて、辛辣な風刺や皮肉を連発する。しかししも負けてはいない。辻村は声は低いがユーモアたっぷり、大きな齒ぐきを露わし、眼鏡を光らして笑う。梅沢の布袋和尙然たる

恰幅は、柄になく甲高い声で、巨腹を揺すつてケラケラ笑いを立てる。山の話が勿論多いのは当然だが、雑談も多種多様に渡る。辻村が女の髪型をよく知らないといつて、主人公の高野がさんざん冷やかす、島田鬘と銀杏返しを取りちがえているというので、辻村は島田こそ銀杏の葉の形じゃないか、そんな命名法というのがあるか、と大真面目になつて負惜しみをいう。こんな談笑に更けて、風呂に入り泊り込むことも多かつた。ここでは辻村の舞台で、好きな小説、山語り、怪談など朗読風な流暢な調子で、聞き惚れるばかりだが、惜しいことに綿々尽きる所をしらず、眠ると手ずから揺り起して寝かさないので。

大正初期、ウェストンが二度目の来朝の時は、山岳会幹部で東京柳橋の亀清に歓迎の宴を催おした。ウェストン夫妻を正座に、小島、高頭、高野、辻村、梅沢、三枝、そして私も席末に列した。芸者の御座付もあつたが、至つて静かな山の宴で、鳥水がいろいろ料理の説明を、訥々とした英語で、客に伝えるうち、吸もの中味でハタと詰つた。そしてハシラというのは何だっけかなアと、一座を見廻したが、声に応じる答がない。そこを高野君が小声で、鳥水に耳打ちするように「マスケル」と教えて、その場をつくらつた。さすが動物学教室出の素養であろう。また山岳会員の俳優尾上栄三郎（大正四年・六世坂東彦三郎を襲名）のため、市村座で総見を催おしたこともある。これも君の肝いりだ。芝居がハネて茶屋の二階で夜宴、そこに兄貴の六代目（尾上菊五郎）が礼に来て、あとで弟に、「いっこう山男らしくねエじゃねえか」と言つたという。彼の

想像をマンマと裏切ったのであろう。現代は都会の風を山に持込むが、当時は山の風を都会に吹き込む時代であった。

関東大震災では君の家も類焼の厄に遭った。その後で私が大阪から船で横浜に入って、君の家を見舞った時は、焼け跡に建てられたバラックの中に坐っていた君が、白髪に一変しているのにビックリした。あの黒髪が一夜にして、白髪翁と化したものらしい。家、家財は一切灰、写真の原板が蝸のように熔けてしまったと、いかにも残念そうに君は語った。しかし生命に別条なかつたのは、もっけの幸いで、この大災厄でわれわれは幾多の友を失ったのだ。君の晩年を彩った白髪は、この災厄のたみでがな。

君は由来いわゆる凝り屋であって、前に蝶、ついで写真、後にカナリヤ。いずれも君の童心の発露であって、中でも写真、印刷、用紙など専門家の域に達していた。

日本趣味から洋服ぎらいで通っていて、どこにでも和服に雪駄をチャラチャラさせて行つたが、上河内に行くにしても、松本まではそれで、登山客とは誰も気がつかない。それが一転して洋服を着出すや、又その方で凝った。

君の道楽仕事の一つに『高山深谷』があるが、その一篇一篇に表紙、図案、台紙などを新工夫し、凝りに凝って写真も商売人の手を借りず、自分で気に入ったように焼き付けたものだ。私もその図案を頼まれて、凝り屋の片棒を担いだ。

君は震災後、久しぶりに私を訪ねて来て、自分も小島さんと同様、この辺の静かな武蔵野の一角に住みたいからと、土地捜

しを頼まれた。私は出入りの植木屋に方々捜させて、結局現在の土地を手に入れ、そこが図らずも、ついで棲み家となつてしまったわけである。

私は悲報をうけて赴いた君の庭に、銀杏の実と落葉が散り乱れ、木枯しに吹かれているのをつくづくと眺め入って、今さら深い感慨にふけたことである。

(中村清太郎)

「山川さん、速達です」、十月一日のお屋ごころであった。差出人を見ると、日本山岳会からである。「突然ですが高野鷹蔵様が二十八日にお亡くなり……」という文句。「ああ、高野君、君も亡き人の数にはいったか。」何とも言いようのない寂寞感が、胸につきあげてくる。日本山岳会の発起人もだんだん欠けてゆき、今また高野君を失って、これであとは武田さんと私の二人きりになってしまった。

高野さんは私より二つ年上の申まをの歳、すでに亡き梅沢さんは一つ上の酉うまの歳、私は戌いぬの歳で、この三人は発起人中の年少組であった。鬼ヶ島の昔ばなしではないが、この三人が小島さん、高頭さんたちにお供をして、日本山岳会の発足に何かとお手伝いをしてから、やがて六十年、きのうきょうのように思つていたのに。

学生生活が終らんとしていたころ、私は故あって山川氏をつぐこととなったが、養家の老母がなぜか登山を危険視して、私が登山旅行をすることを好まない。(もともと、そのころは今日のように便利ではなく、登山旅行も相等困難ではあったが。)

元来私が山に登るのは、まだ人の登ったことのない頂上に、最初に登ってやろうというような功名心——もともとも六十余年前でも、日本では獵師も登っていないようなところはなかったようですが——からでもなく、「山がそこにあるからである」などと、大見得を切りたいからでもない。植物採集をしながら、頂上にたどりついたときの気もちを、味わいたいからだけである。

自分のささやかな気もちを味わいたいだけで、親を心配させたり、他人に迷惑をかけたたりするのは、誠につまらぬことと思つたので、その後はあまり登山をしないようになった。従つて日本山岳会の会合なども、あまり参合せず、山岳会の同人たちともご無沙汰がちとなり、高野さんにお目にかからぬことも、きのうきょうと思つているうちに、多年に及んでしまった。

昨年の末ごろ、武田さんが昔の登山の話を送されたのを聞いて、むしように昔のことがなつかしくなり、夜中に電話して高野さんをおどろかせたとき、日本博物学同志会の生きのこり連中と、そのうちに会合して、昔ばなしをしようではないかと君が言われた声が、まだ耳にのこっているような気がしているうちに幽明境を異にして、もはや今生こんじやうでは君に出会うことができないうち、何とも寂しいかぎりである。(昭和三十九年十月五日)

(山川 黙)

\*

会報で「高山深谷の追加話」を拝見し、お元氣だとばかり思つて居つたところへ、会よりの通知に接し、ただただ驚くばか

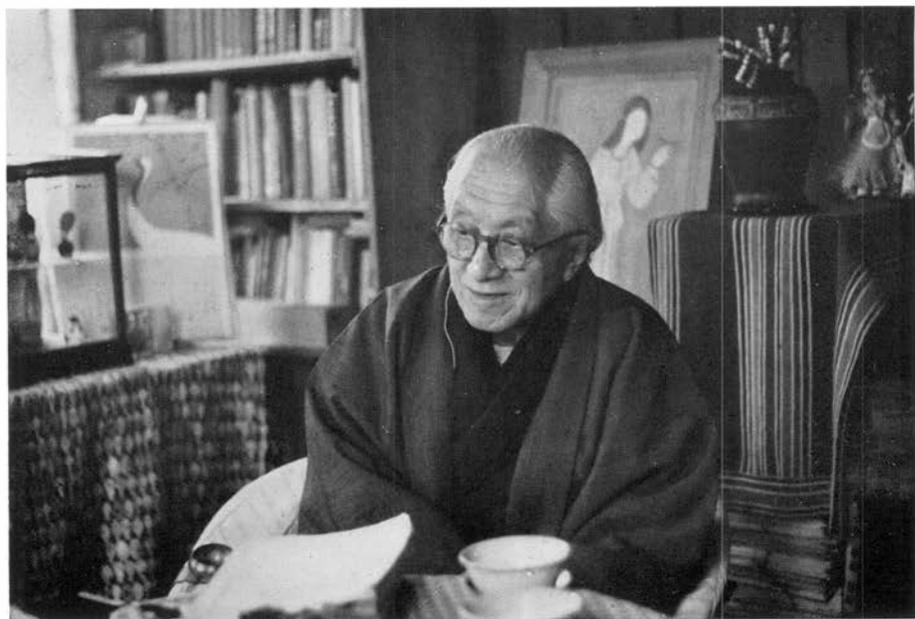
り、なにかの誤りではないかと思ひ、またそうであるように祈りましたが、二日朝阿佐ヶ谷のお宅に参り、麻子夫人より詳細承りました。ご令息ご家族のお婦りを楽しみに待つて居られたとのこと、返す返すも残念なことをいたしました。小生は昨年一度お会いしたきり、その後胃潰瘍をやつたり、またご承知の通り五月には怪我をしたりして、今もって腰の具合も完全でなく、ごぶさたしているうちに、とうとうこんなことになつてしまいました。

高野君とは明治三十八、九年ごろからの知り合ひですが、私は大正六、八年神戸に在住、また昭和十九年より三十二年までは、十四年間も疎開のまま東京をはなれて居りましたので、もとも頻繁に往き来したのは、明治末年、学生生活を終るまででした。従つて、そのころ辻村さんなどと一緒に、上高地の清水屋で、他にあまり泊り客もないので、勝手にあばれまわつたこと、白峰、赤石へ高頭、小島、中村諸氏とともに、案内の宗平以下十人ばかりの工夫をつれ、楽しい登山をしたこと(この時は高野君が食料方面を担当され、大いに腕をふるわれました)など、思い出します。そのほか、今の事務所が高野君のところにあつたので、たびたび中村君たちと伺つて、山の話に夜の更けるのも忘れ、一夜のご厄介にあずかつたことも、数回あつたと思います。実によき時代でした。(昭和三十九年十月八日)

(三枝守博)

\*

日本山岳会創立発起人であつた七人の侍のひとり、七本の柱



名誉会員 高野鷹蔵氏  
Takazo Takano (Hon. mem.)  
(1884-1964)



住 広 造氏

Kozo Sumi

(1880-1964)

の一本をわれわれは失った。六十年の歴史をもつJACの土台に、ゆるぎのあるうはずもないが、この先輩中の大先輩を失って、わたくし達は言いようのない悲しみと淋しさを感ずるのである。

本会発足前後の発起人たちの出あい、結びつきなどについては、故小島鳥水氏や、いまなお健在な武田先輩や、高野氏みずからも、いろいろの機会に書き残されているので、ここには触れない。私はただ本会成立当時、高野氏は二十二歳の若かさであったことを記すにとどめよう。余談だが、他の発起人も城氏四十一、小島氏三十三、高頭氏二十九、武田氏二十三、梅沢氏二十一、山川氏二十歳という年齢である。英国のアルパイン・クラブというお手本があったとはいえ、この国では神武以来はじめての「山岳会」を作ろうという、これらの先輩たちの意気は、おそらく当るべからざるものがあつたにちがいない。

少年のころから蝶の採集に興味をおぼえた高野さんが、平地の蝶から高山蝶にひかれて、山へ登りはじめられたのは自然のなりゆきであり、写真術を知れば山の姿をうつしたくなるというのも、また当然であつた。まして「山岳会」が出来あがり、好い仲間がふえ、まったく手のついていない山と、山岳写真という分野が目の前にひろがっていたのだから、このふたつに高野さんが夢中になられたのも無理もない。蝶の採集研究がつづけられたことは、『蝶類名称類纂』（明治四十年四月・警醒社刊）の著書によつても知られるが、その熱はやや下火になつたようにおもわれる。後に所蔵の標本は全部、往年の博物学同志会時

代の友人左武正一氏に贈られ、現在は国立科学博物館に左武レクシヨンとして寄贈されているという。

高野さんの登山歴は「山岳」への寄稿によつて、その概略を知ることが出来るが、その期間も比較的短かく、足跡もそれほど広きにわたつてはいないが、日本の山々の多くは未知の探検時代であつたし、その未知のヴェールを一枚一枚はがしに出かけてゆく仲間は、小島、高頭、辻村、三枝、中村、近藤、茨木、北沢などという、ほんとうの先駆者たちであつたのだから、Happy fewの醍醐味を心ゆくまで味わわれたことは、いうまでもなからう。

高野さんが本会のため、会員のため、また広く日本の登山界のために力をつくされたのは、本会創立後五年たつた明治四十二年（一九〇九年）から、大正八年（一九一九年）まで、本会の事務所を横浜の自宅で引受けられた十年間（二十五歳から三十五歳まで）であろう。同志の協力があつたとはいえ、「山岳」の編輯発行から会員との連絡まで、一切を処理してゆくことは容易でないが、高野さんのめぐるまれた境遇と熱意とがあつてこそ出来たのである。この時代の「山岳」を手にする、表紙から写真、図版などに、何ごとにも凝り性だつた高野さんの好みがあふんだんに盛られていて、まことにケンランたるものがある。

会員との連絡にも大いに意を用いられた様子で、後年私がふるい会員のことを伺うと、地方在住の会員についても、その経歴から人柄から職業からすべて詳細に語られるので、クラブの

元締はやはりかくあるべきなのだと感深くするのであった。高野さんを相談相手にして、JAC創期会員の事蹟調査に、もう少し早目に着手したならば、A・L・Mのアルパイン・クラブ・レジスターのようなものが出来たかもしれないとおもいますが、いまとなつてはもうとり返しがつかない。

この時代の高野さんが、最も熱をあげられたのが山岳写真であり、引伸印画だけでなく幻灯板(いまのカラー・スライド)を作り、本会の年次大会にはもとより、頼まれれば地方へも出かけて、幻灯付の講演を試みられた。大正初頭にぼつぼつ設立された、一高旅行部(一九一三年)、三高山岳会(一九一三年)、二高山岳会(一九一五年)、慶応義塾山岳会(一九一六年)などの発会式には、JACの先輩たちの講演と高野さんの幻灯と話がなくはならぬものであった。まだ見ぬ日本アルプスの峰々の美しい姿が、つきつきとスクリーンにうつし出されるのを見て、その頃の若者たちはいかに胸を躍らせたことであろう。高野さんは、当時の若人の山への開眼に、大きな役目を果されたといつても、過言ではないとおもう。

山岳写真と高野さんといえば、JACのふるい会員ならば、すぐ頭に浮かぶのが『高山深谷』のことである。第一輯(一九一〇年)から第八輯(一九一七年)まで、写真の選択はもとより焼付も、初めの一輯以外は全部自分で手がけ、装釘も会員の画家達を動員するなど、いかなれば凝り性の高野さんの道楽氣を、自由奔放に発散した産物であるが、八年間に八冊の制作といふことから察しても、製作者としては苦勞は苦勞なりに、大

いにたのしかつたのではあるまいか。西欧にも山岳写真集の流派なものとはたくさん刊行されているが、この『高山深谷』のように密着焼付印画を一枚々々貼ったものは、寡聞にしてわたくしは知らない。しかも、それが八輯も作られるというのは、尋常一様のことではない。高野さんにとっては愛児のようなものであつたらう。一九二三年の大地震に、横浜ですべてが灰に帰してしまつて以来、手にしたことがないという『高山深谷』の全揃に四十年ぶりで再会したとき、高野さんの喜びと感慨がどんなに大きく深いものであつたことか。これについては、会報二二八号所載「高山深谷と対面」という御本人の寄稿にゆづつて、ここにはふれるまい。

大正八年秋、大病をされて、その結果本会の事務所も、東京の武田さんの宅へ引継がれることになつたが、それ以後健康の故もあつたらうし、カナリア飼育に熱中されて、この方面での權威となられた関係もあつて、登山からも遠ざかり、本会の会合などにも前ほど顔を出されないようになったとおもう。といふのは丁度この頃(大正八年)JACに入会し、大正十二年幹事の末席につらなつた私が、高野さんの面識を得る機会がしばらくくなつたことから、どうもそんな気がするのである。

その高野さんが、JACへまたよく見えるようになるキッカケとなつたのは、辻村伊助著『スウィス日記』(梓書房刊・昭和五年八月)であつた。この年の春、刊行者岡茂雄君の肝入りで、『スウィス日記』と『ハイランド』編輯の相談会があり、小島、武田、高野、近藤の諸先輩、それに辻村さんの最も親しかった

那須皓氏を加え、松方三郎君と私とがお手伝いとして呼び出されたことがある。席上、辻村さんの想い出話、JACの昔話に花が咲いて、肝心の本ことは岡君と松方、藤島の兩人でよろしきに取りはからえ、というようになつてしまつたのをおぼえている。本は良心的出版者である岡君の努力で、ほんとうに立派な後世にのこるものが出来たし、松方君と私とは、高野さんをこれからも少しひっぱり出そうや、と話した事だつた。その結果が、明治四十二年一月十六日麴町富士見軒での第一回から、大正八年五月二十五日品川鮫洲川崎屋での第二十一回までで、久しく中絶していた有志晩餐会の復活となり、第一回会合の発起人であつた辻本満丸、高野鷹蔵、三枝守博の三氏がまた発起人となつて、昭和六年四月から大体春秋二回の集りがあるようになった。高野さんは、この集りにいつも顔を出されたばかりでなく、虎ノ門のクラブルームの理事会へもよく出席して、会の運営に色々といふ助言をされたのである。そして、このことは晩年あまり外出されなくなるまで、ずっとつづいたのであつて、早逝された心友辻村さんの遺著刊行が、高野さんの胸に燃えつづけていた、JACへの情熱の焰を再びかき立てる動機になつたのも、なにか不思議な因縁であろう。

山での高野さんが、どんなふうであつたかは、わたくしことき一時代おかれて山登りを始めたものの知るはずもないが、平地ではまず酒仙食通。山とカナリアの元締とあつて、各地の銘酒がふんだんにあつた。自ら鮑丁をとられたくらいだから、食通の方も推しはかれようというもの。酔いのまわるにつれて

談論風発、にぎやかな酒であつた。棚は自らというやかましき、戦前はウィスキーなど目の前で封をきつたものでないと承知されなかつた。なにごとにも凝り性が出て、中村清太郎先輩の追悼文に、高野さんがはじめ和服に凝り、のち洋服に凝つたというくだりがあるが(前出一八三頁)、それについて思い出す一挿話がある。ふるい会員の八木道三(是峰)氏は若くして渡英、二十何年も滞留されたが、高野さんとの間に、毎年英国から服地何着分を見立てて送るとの約束があり、だまつても自然に届くことになつていたところ、一別以来十年十五年たつて、八木氏の方では高野さんの頭に霜髪が加わつたのが想像できないもので、とんでもない若向きの服地が届いて、どうにも着られないという始末。君にあげようと、わたくしが頂戴したことがある。いま考えるとウソのような、ゆとりのある時代であつた。

若いときから自由な時間をたつぷりもつて、名利などはふりむきもせず、自分の好きなことに心から打ち込むことのできた高野さんの生涯は、幸福そのものであつたといつても、誰れも異存はないであらう。ただわたくし達としては、今年(一九六五年)迎える日本山岳会の選曆を、高野さんと共に喜ぶことのできなかつたのは、ほんとうに残念である。

会誌「山岳」所載原稿(本欄、雑録の別は省略)

塔ヶ岳(一卷一号)愛鷹山と天城八丁の池(一ノ二)秋の金峰山(二ノ一)二荒のおちば(日光奥白根の記)(三ノ一)女子

登山熱と危険予防(三ノ一) 硫黄岳登山(三ノ三) 山岳写真と松本市保里写真館(同上) 上高地の記(四ノ一) 山岳写真と其器械(同上) 登山者の便秘と下痢(四ノ二) 白峰及赤石山脈縦横記・共同執筆(五ノ一) 白馬岳より祖母谷温泉へ(六ノ三) 雨飾山焼山赤倉山に関する資料(同上) 本号挿図白馬岳の展望に就て(同上) 山岳写真(七ノ二) 同(七ノ三) 登山の準備(八ノ二) 新案の金カンジキ(十ノ一) 山岳会創生記(二十五ノ三) 日本山岳会創立頃の小島さんと私(四十四ノ一) 五十年の回顧(五十) 茨木猪之吉君の追憶(五十五)。

蝶郎(ペンネーム)の署名あるもの。

白馬岳の名(四ノ三) 長野県の高山植物保護(同上) 危険なる登山(七ノ一) 信州駒ヶ岳御岳白山の良地図出版さる(七ノ三) 陸地測量部槍ヶ岳附近及飛騨全部の地図を出版す(八ノ二) 山岳圖書批評(九ノ一) 本誌に用いたる紙に就て(九ノ二)。

T生、T・T生、た・たの署名のもの。

本年白馬岳の登山人数(六ノ三) 高山蝶(一ノ一) 落機山中一万呎以上の高峰(同上) 飛騨山脈と鋸曲(十二ノ一) サークの二三の性質(同上) 我邦最初の登山鉄道(十三ノ二)。

会報所載のもの。

老兵の嘉門治物語(十一号) 高山深谷の話(二十七) 山の思出(三十一) 辻村の幻灯(一六八) 老友岡野さんのこと(一七二) 五十年の回顧(一八三) 親の物好き(一八七) 高頭さんと私(一九八・一九九) 第二百回小集会高野氏のはなし要旨(二〇六) 武井真澄氏逝く(二〇七) 志村さんの味(二一五) 鳥

水・小島久太年譜抄(二一九) 鈴木牧之と高頭さん(二二四) 山岳会事始め(二二五) 高山深谷と対面(二二八) 高山深谷の追加話(二三三)。

外に気付いたものをあげると、梓版スウィス日記の巻頭に「純情の人・伊助」、梓版高山深谷第九輯(昭和八年)の跋文、これには常念岳、霞沢山、磐梯山の隨筆三篇があり、編輯者代表は高野さんで検印は「鷹蔵」となっている。第十輯(十六年)アルス刊には序文をよせられている。昭和二十四年岡書院刊「小島鳥水追憶」には、「山岳」四十四年一号と同文がある。他の雑誌に寄稿されたものもあるだろうが、私の手許には一冊も保存してないから、これは他日誰か特志家の手で探し出して貰いたいとおもう。カナリア関係の文献については、その道の方々にまつより仕方がない。

JACとの関係では会員番号第三番。幹事(明治三十八年—大正八年)。評議員(大正九年—昭和十年)。副会長(昭和六年—八年)。名誉会員(昭和十年)。

明治十七年三月十四日生、昭和三十九年九月二十八日歿。

ペンをおくに当って、JACの文字通りの生みの親のひとりであり、終生JACにかわらない愛情をもちつづけられた故人に、深い哀悼の意を捧げたい。(一九六五年五月)

(藤島敏男)

## 住 広造氏（一八八〇—一九六四）

一九二七年の秋、京都大学の林学教室で、本邦林野の景観という題で、特別講義をしたのが切掛けとなって、引続いて十年余り、林学や植物学の講義をした外、その翌年から、諸方の高山中腹に見る亜寒帯林の見学旅行に、学生を連れて歩くことになり、秋九月、新学期の始まる前に、そこちの自然林を訪れた。その第一歩として木曾を選び、御料林を見てから、黒沢口を登って、第一日は行場小屋泊り、翌日は五ノ池の小屋、次の日は嶽ノ湯、最後の日は飛驒側の大森林を見てから小坂に下り、ここで解散ということになった。

山の魅力にとりつかれた若い学生達は、京都に帰る代りに、高山を経由して平湯へ、そして私は高山で住君を訪ねて、折からの祭礼に、住君に案内されて、あちこち連れてあるかれた。

そしてその折りに面会した人の中には、果立妻太中学校教諭荒井虎夫氏、妻太実業学校教諭大倉徳光氏、高山高等女学校教諭神田鶴吉氏、高山青年会長平田誠二氏などがあつた。

住君は高山の安川通りに住伊書店を経営され、また三ノ町に妻太中央印刷所を営んで居られたので、飛驒に関するいろいろな書物の出版販売を行なわれた。岡村利平氏著の『飛驒山川』、同氏編纂の『飛驒史料』を始めとして、『飛驒の高山』『飛驒案

内』等、殊に昔の飛驒山中に於ける林業、林木の伐採から運材等の実況を描いた、古書の覆刻（和本）の如きは貴重なものである。斯くして、飛驒や高山の文化のためにつくられた功績は甚だ大きく、これは東京附近在住の人であつたなら、当然近來流行の春秋又は秋期の叙勲に該当するに相違ない。

両三日高山に滞在している間に、平湯に居る学生からは、毎日のように督促があるので、私もとうとうそれに促されて平湯に赴き、安房峠をこえて上河内に入り、ここに学生と両三日を送ってから、徳本峠を越えて松本に出た。それ以来御不沙汰勝ちであつた内に、他界されたのは遺憾至極といわなければならぬ。

（武田久吉）

未亡人住五枝氏（高山市下三之町一四番地）から編者宛の書面によると、住氏の略歴等は次の通りである。

明治十三年八月二十一日誕生。岐阜県立妻太中学校二年中退。明治三十二年書籍雜誌、教科書、楽器類取次販売。大正八年一月から活版印刷所創立。昭和二十三年六月株式会社組織に変更（妻太中央印刷株式会社）、逝去迄取締役社長として経営に當る。昭和三十九年十二月十二日午後二時四十一分逝去。

著書 乗鞍山上十日誌

登った山々 乗鞍岳、槍ヶ岳、穂高岳、御岳、白馬岳、立山等日本アルプス全山各地を、カメラをかついで踏破し、撮影した写真を基に、絵はがきを刊行発売（約三百余种）、アルプス及び飛驒地方の紹介に尽力した。

刊行図書の主なるもの 飛州志 飛驒山川 飛驒遺業合府  
飛驒後風土紀 飛驒国中案内 飛驒編年史要 運材図会 月刊  
「飛驒史壇」 飛驒案内 飛驒の白川村 大野郡史 飛驒史料  
尾張一宮市史 朝日村誌 久々野町史 上宝用水誌 国府村史  
きょうの飛驒史 丹生川村史 萩原町誌 村山遺跡 等。  
生涯を通して郷土の歴史、地誌の刊行に犠牲的出版を遂行し  
た。

日本山岳会へは明治四十二年四月入会（会員番号一九三）、  
五十五年の長きに亘る会員であった。（編者）

## 山口国俊氏（一八九二—一九六五）

もう十年も前のことだが、東京支部主催で国体の予選を八ヶ  
岳でやったことがある。私が山口さんと一緒に山に登ったの  
は、この時が初めてだった。いま印度へ行っている日綿の野田  
三郎さんがリーダーで、坂倉さんなども見えていた。コースを  
間違えて、阿弥陀へ向っていたのを途中で誰かが気付いて、急に  
降りることになったが、大変な悪い場所です。若し人達は面白そう  
だったが、老人女子組はさんさん文句を云い乍ら下った。昼食  
を終る頃から降り出した雨は段々はげしくなり、行者の小屋に  
着いた頃は物凄い降りだった。小屋はせまく全員を収容出来な

いので、元氣な人達は上の小屋へ向って雨の中を出て行く。若  
い人が準備して呉れた一等席に落ち着き、炬燵には火が入って  
山口さんは御機嫌だった。

リーダー達は明日の相談をした結果、お年寄りには少し危険な  
コースなので、お帰り願うと云うことになって、その由を野田  
さんが伝えて来た。おさまらないのは山口さんで、如何に説明  
しても返事をしない。全く面白くないと云う顔をして、子供の  
ようにすねている。野田さんは説明の言葉もつきて、頭を下げ  
たなりで只管恐縮している。まわりの者はおかしいけれど、笑  
う訳にゆかないで困ってしまった。幸い姉妹で帰る仲間があっ  
たので、私も一緒に降りることにして、山口さんの大好きな山  
草を、必ず見つけて上げると云う条件でやっと納得して貰った。  
私だけでなく、皆やれやれと思っただけならしい。

翌朝はからりと晴れて、昨日の雨はうそのような上天気、私  
は小屋のおやじさんに頼んで、珍らしい山草を二種類程採って  
来て貰い、山口さんに見せたところ大変喜ばれて、帰りの路も  
石と山草を充分に持たせられ、くたくたになって宿に着いた。  
宿で夕食の時、山口さんの言われるには、君はあまり達者じゃ  
ないな。

昨年（昭和三十九年）の夏白馬へ行かれたとき、雪渓でスリ  
ップして尻もちをついたが、それから変だと云っておられた  
が、やはりそれが病気に関係していたかも知れない。八月頃銀  
座で倒れ、そのまま入院され、お見舞に行かないうちに亡くな  
られた。雲の平へ行きたいと云っておられたが、連れて行って

上げたかった。そして山草や石を沢山持って上げればよかった。私を推薦して会へ入れて下さったのも山口さんである。それだのに山草を持つのがこわくて、敬遠した私は罪におびえて居る。船橋にある山口家のお庭には、自分で集められた数十鉢の山草が、訪れる春を待っている。

山口氏の登った山

奥武蔵、雲取山、八ヶ岳、劔、立山、白山、黒部下の廊下、日光、尾瀬、白馬、乗鞍等。

略歴

明治二十五年四月二十五日 兵庫県淡路洲本に生れる。

独力にて東京靴下株式会社を設立し、常務取締役であった。

昭和二十一年頃 日本山岳会入会（会員番号二七一八号）。

昭和四十年一月十六日 国府台国立病院で逝去、享年七十三歳。

（浜田一馬）

吉川良平氏（一八九六一一九六四）

吉川氏は明治二十九年十一月十九日生れ家は富山市の名門、父は儒者で尊皇家、業は醤油味噌醸造、富山市を襲った戦災では最初の最大激甚地帯であったが、よく将来を見通して雄大卓抜な構想をめぐらし、然も急速に復興した。どなたも御経験の事

と思うが、果して日本がどうなる事やら、又味噌醤油の需要が続くやら、雲をつかむ様な時である。そして資金面の苦勞など……単に身軽なやみ屋から出世したのでない事は敬意に値する。

私は特に次の一事を記したい。即ち立山味噌醤油株式会社という名称は単なる商標でなく、氏の信条を表したものであったという事である。今日立山とは形態的に劔岳を象徴しているのであるが、其頂上に自身発願して、故実に則り、総樺造りの祠を信頼する棟梁に作事せしめ、文蔵君や杉田さん等の友誼援助によって建立せられたのである。今日登山の隆盛に伴い山は荒れ放題、自然は尊厳も尊敬も薄れかすんでしまったが、こんな人もいたのである。

氏の山登りは晩学であるが、五年前入会の久世秀治氏とは同業者且同窓で、又莫逆の友である。登山は終始久世氏と行を共にし、春夏秋冬各地の山々を登り歩られた。急がない山を楽しむねばり強いものがあって、単独の時は天幕を含め六貫も背負った由、全国みそ醤油醸造業連合会長より業界登山日本一賞を授与されている事を弔辞で知った。

最も多く登ったのは勿論劔であるが、あの年で冬山も手掛ている。年齢から見て体力で挑むのではなく、半ば宗教的な気力で登るものと察する。いつも小屋で隣りすると、毎朝一時間は坐禪する。日記を拝見させて頂いたが、意味は判らんけれども、坐禅した事によって危機を切り抜けたとあるので、無意味に静坐しているのではない。又子息皆夫々山にスキーに生きているのを楽しみ眺め、スポーツ一家だと書してある。全く羨やましい。

恥しい事乍ら、私の子供は趣味は持たした積りだが、続いている。  
ない。

衷心から思う、氏の斯程の執心を生かし、分骨を彼の夕陽うすづく頂きに埋めたらと。

四月六日という日、今日は一周忌だが、昨年二月に孫達をつれ、蔵王にスキーを楽しむ。年齢という制約を忘れた名号通りの「梁山」振りで、温和円満な相貌の中に、どこにかゝるスタミナがあるのか驚く。戦災に糟糠の妻を失い、苦心の経営は軌道に乗り、子息達は夫々安定し、一時は高血圧で一同忠諫し禁酒したが、何の楽しみとてない親を想うて、時と共に黙認されて、久世氏とさしつさされつの楽しい楽しい仲であった。

悠然と登りつくせし山かすむ

雪閉ざす剣の祠人訪はで

久世柴の戸一周忌献

散りてこそ今年又咲く桜かな

我々は共通の友情のもとに謹んで御冥福を祈ります。

吉川良平氏は昭和二十三年七月本会入会、会員番号二九五  
四、昭和三十九年四月六日遠逝。  
(石黒清蔵)

## 篠原敏弘氏(一九三四—一九六四)

篠原君は一九六四年八月六日、任地ヨハネズブルクで交通事

故のため三十年の短かい生涯を終えた。淋しがり屋の君が、遠い異郷の地で唯一人、誰にもみとられることなく死んでいったとき、どんなに淋しかったろうかと思うと、胸が熱くなってくる。男ばかり三人兄弟の長男として、めぐまれた家庭に育てられた君は、明るい、物事にこだわらぬ、伸びのびとした性質の故に、接する仲間達から深く愛されていた。

何時の頃から君が山登りに志ざしたのか、よくは知らないが、すでに高等学校時代には、可成りの経験をつんでいたようである。大学に入ってから二年程の間は、サッカーに熱中していたが、その後転じて一橋山岳部に籍を置くようになった。たしか、叔父君森脇芳之先輩のご紹介があったように記憶している。その後の君は、それまでの道草を取り戻そうとするかのようになり、山登りに打ちこんでいった。嫌な顔一つせず、黙々と重い荷を背負い、どんなときにも陽気で快活であった君は、われわれにはなくてはならない貴重な仲間であった。幾つかの行を共にした山登りを振りかえって、君の怒った顔は一度も見たことがない。下級生の荷を分けて持ってやったり、暗くなった雪道を、遅れた下級生を迎えに戻って行く姿ばかりが想い出される。

陽気な性格の裏に、淋しがり屋の一面を持っていた君にとっで、良き仲間を得ての山岳部の生活は、すこぶるたのしいものだったように思う。国立にあった部のルームと、その近くにある部長太田可夫教授宅に、教室よりも足しげく通い、たちまちのうちに山岳部の生活にとけこんでしまった。

君は山を愛したがまた酒も好んだ。学園での生活の一刻、酒をくみ山の話にふけると、時のたつのも忘れた。しばしば終電車にのりおくれ、皆で国立の部のルームに泊りこんだり、近くの友人の家へこるがりこんだりした。そのような或る夜、寝呆けた彼が、さる友人宅の床の間を厠と間ちがえるという大失敗を演じ、翌朝ほうほうのていで退散してきたこともあったが、これとても今は悲しい思い出の一つとなつてしまった。年間百日を越える山行と、下界における山を忘れぬ生活、この頃から君は山登りから離れられなくなってしまったようだ。

君の日本山岳会入会は卒業の翌年、昭和三十三年のことだった(会員番号四八三八、紹介者は望月達夫、吉田義則の両氏)。入会後は一橋山岳部OBとして、また勤務先三菱商事の山岳部のメンバーとして、数多くの山行のかたわら、東京支部の役員として会務にたずさわり、『山日記』一九六一年版の編集のスタッフに名をつらねる一方、西穂高岳および木曾駒ヶ岳の登山技術講習会にも、講師として出席するなど、どこからそんな暇をみつけ出すのかと、あきれざるばかりの活躍ぶりだった。私も幾つかの講習会に行を共にしたが、とりわけ印象深かったのは、高校生を対象とした木曾駒の講習会の最終日に、一言宛発言を求められて、山登りとは、読む、書く、登るといふ三つの行為が、一体となつて構成されるのでなくては、完成されたいは言い難いと言ふ持論を、熱心によつていた姿である。その夜、行き当りばつたりに、飯田の街に宿を求め、久しぶりに一夜つもる話に語り明かしたが、そこでも同じ議論を熱心にくり

返していた。

卒業後一緒に登る機会は数える程しかなく、そのいずれもが貴重な思い出となつたが、二人切りで屏風岩のイルンゼへ出掛けたときの記憶が鮮明である。久しぶりの夏の徳沢は、おどろくばかりの喧嘩さの中にあり、寝られたものではない。二人ともすつかり機嫌を悪くしてしまつたが、それでも翌朝早く取付でアンザイレンする頃は、気分もほぐれ愉快になつてきた。久しぶりに行を共にしたのだが、たちまちのうちにブランドが埋まり、イキの合ったクライミングがたのしめ、矢張りこう言う仲間は貴重なんだなどの感を深めた。密度の高い登攀だったせいか、不思議にこのときの君の身のこなしの一つ一つが今でも眼に浮んでくる。

惜しむらくは彼自身、持論の読む、書く、登るのうち、読むことと登ることは、よく実践していたが、書く方については余り発表されたものがない。まだまだこれから沢山の山へ登り、書く方も充実させ、そして彼自身の山登りを完成させて欲しかったのに、突然の死が、彼の山登りを未完のままに中断してしまつたことは、本当に口惜しい。

個人的な追憶に終始してしまつたが、こうやって原稿用紙に向つていても、泣けてくるような状態では止むを得ない。時が悲しみを和らげてくれた頃に、機会が与えられたならば、彼の山登り評など試ろみてみたい気もするが。

(山本健一郎)

### 三輪 孝氏（一九一〇—一九六四）

三輪孝さんは明治四十四年一月七日大阪に生れた。昭和五年四月、東京美校本科油絵科入学、同七年には特待生に選ばれ、昭和十年三月めでたく同校を卒業し、それからすぐ東京の上野松坂屋の宣伝部へ入社したのである。この頃小生も学校を出て東京都庁（その頃は市役所）に入り、そのつとめ先の関係で店とも往來するようになり、しぜん同君を知ったのであった。その頃の彼は図案とかカットなどをかいていたが、めずらしいほどまじめ一本の人で、あなたは学校の先生のようにですね、と話したこともあったほどである。この頃は山のヤの字も話しあわなかったし、おたがいに山が好きなことも知りあわぬ中に、彼は召集をうけて入隊してしまい、そのまま戦争が終るまで、お互いに会う機会もなくすごしてしまったのである。

戦後、日本山岳画協会（昭和十一年三月結成、本会々報第五五号参照）が復活してから、その協会の山川勇一郎さん（本会々員）に会ったとき彼の話がとび出し、しかもこの協会の世話役をしていると聞いたのであった。それで、山がとてすきであるということを知るようになったのである。まもなく小生も、この協会のおてつだいをしはじめたので、ふたたびおつきあひとなつたのであった。その頃、彼はさかんに上高地に入っていた。

毎年何回というほど徳本の峠を越していたのである。キャンパス、油絵具などふつうの山登りの人には想像のつかない重い荷となるのである。美校のクラスメートの南政善さんは、この頃から彼にしごかれて山が好きになりました、と言われている。

彼の所属した光風会展には、昭和二十八年、二十九年とつづいて「上高地」を出している。剣岳へ行くというので、剣沢の佐伯文蔵君を紹介したのは何年前だったろう。それから剣がすっかりすきになって、毎年そこに足をはこび、日展や山岳画展、光風会に剣岳の岩と雪渓を、あの美しい深紫で発表していた。その頃は、もうりっぱな登山者になっていたのであるが、私は山が好きなだけなんですよ、と言うだけで、山のじまんも苦しさも口に出したことはなかった。彼が昭和二十年に一生のしごととして設立した阿佐ヶ谷美術学園は、いよいよ隆盛になって行くのに、急になくなられてしまった。

なお彼は光風会、日本山岳画協会の両会員のほか、日本解剖学会員、東京都私立各種学校協合理事であったり、著書もデザインのもの三つ、作品は昭和九年帝展に初入選以来、各種展覧会に入選、個展数回、昭和三十三年の日展には「雪空」が特選となり、委嘱をつづけていた。本会へは折井健一、岩佐吉雄両氏の紹介で昭和三十七年入会、会員番号五四六四、昭和三十九年一月一日逝く。

（小野 幸）

## 図書紹介

### 日本百名山

深田久弥著 四六倍判 二二二

ページ 写真四葉 昭和三九年

七月二〇日 新潮社発行 定価

八七〇円

古くからひとびとが抱いていた名山という言葉のイメージには、時代につれて変遷がある。

いまからおよそ百四十年前、「伝え聞く唐土もろこしには崑崙山、峨眉、補陀洛山等の高山これある由」という書き出しにはじまる十返舎一九撰『諸国名山往来』文政七年（一八二四年）には、海内名著の高山として、第一に富士山を据え、次いで筑波山、下野の日光山、陸奥の金華山、出羽の鳥海山、羽黒山、月山、湯殿山、それより越後の妙香山、上野の赤城山、榛名山と続き、以下越中の立山、加賀の白山というふうにな国のいわゆる名山、高山をかかげ、その数約四十二座におよぶ。その頃、別に日本七峯として日光（野州）、大峯（和州）、羽黒（羽州）、吉野（和州）、大山（伯州）、筑波（上州）、妙義（上州）という呼び名も市井にあった。また有名な谷晁『日本名山図会』

文化九年（一八一二年）に描かれた山は総数九十座。今でこそ、その幾つかに首をかしげるものがないわけではないが、当時これだけの山を選定した見識と、そのことごとくが実写によるのは見事である。とりわけ蝦夷地の内浦岳、白岳（有珠岳）、恵山、飛瑠涉（樽前山）、志利辺津山（後方羊蹄山）の五座を含む足跡の広さも賞讃されてよい。

しかし、文晁やさらに溯って、『東遊記』寛政九年（一七九七年）に名山論を書いた橋南谿にしても、熱心な山水の愛好者ではあったが、日本の山奥にまだまだ立派な山のあることを知らなかった。信・飛・越の国境や東北の僻地、さらに北海道のさい果てに、現代の登山者が喜ぶような山があるうとは、想像もしなかったに違いない。

明治以降、山を見る人の眼は大きく変った。そしていま、昭和の『名山往来』『名山図会』の現代版ともいえる『日本百名山』が、選歴を迎えた深田久弥さんによって編まれたことを喜ぶたい。この本には、深田さんの五十年近い登山歴と、一念発起、戦前から書き続けた執念がこめられている。

著者は選定の基準を、山の品格、歴史、個性において、候補リストを前に、教え子を銚衡する試験官のような辛気持で篩にかけたと、後記に記している。選定の結果については、人それぞれの好みにより、多少の相違があるかも知れない。しかし、それはそれでよい。七、八〇パーセントに衆論が落着くとすれば、あとはむしろ選ぶ人の個性が現われるほうが嬉しい。選ばれた百座については、先ず山の歴史、縁起を語り、つい

で文学の素材となったものは、古今を問わず、それをとり入れている。また近代登山の立場から、初出の文献はもとより、初登山者にも触れるという先蹤者への床しい態度も気持よい。そして最後に、簡単な自身の紀行を添えてあるが、これまた未知の山を志向しようとする者にとって、なにほどの手引きとなることは疑いない。大体以上のような内容が、全篇を通じて要領よく、しかも左右見開きの頁に収まるよう、そつなく纏めあげられているのは流石である。慾をいえば、挿入の写真がそぐわない感じがする。むしろスケッチにでもしたほうが、情感を誘ったのではないだろうか。

山を愛する者に全くの好古の癖がないとしたら、この書を読む興味は半減するだろう。本書に引用された文献は、『三代実録』『会津風土記』『上野国志』『甲斐国志』『北越雪譜』『日光山志』『東西蝦夷日誌』などの古資料から、近代登山においては『山岳』が丹念に探渉されている。また文学方面では、古くは『万葉集』『奥の細道』から近代の田山花袋、島崎藤村、石川啄木、斎藤茂吉、高村光太郎、大宰治、宮沢賢治といった馴染深い人の作品をひいているのも、薄れかけた記憶を確かめさせようとする、読者への思いやりである。

北海道の利尻岳、羅臼岳、斜里岳、トムラウシ、幌尻岳などは、僅か半世紀前まで、ほとんど人に知られなかつた山である。それが近年とくに脚光を浴びるようになったのは、僻地への憧れと、これらの山がまだ多くの夢を残しているからだろう。この地でわりあい早く登山者の足跡を印したのは石狩川上流で、

安政四年（一八五七年）に石狩在勤の足軽、松田市太郎が水源調査の命を受けて、大雪山踏破、水源見極めの功績をあげた。著者は大雪山という名がいつ頃ついたかという疑問を出しているが、小泉秀雄氏の考証には、明治二十六年発行の『日本名勝地誌』第九編北海道三部（博文館）が示されているので、起源はかなり古いことが判る。序でながら、後方羊蹄山の松浦武四郎初登頂を安政四年としてあるのは、安政五年（一八五八年）が正しい。

東北の名山に、秋田駒と栗駒山を欠くのは淋しいが、上信越で平ヶ岳と皇海山、それに高妻山を加えたのは勇断である。平ヶ岳は著者が百名山を志した最初から念頭にあったといい、ろくな登山道もないこと、それに山麓から頂上まで二日ないし三日もかかるという山は、今どきそうざらにあるものでない。独特の山容と、個性的な山頂が著者の心を深く捉えたようである。登山者が少なく、あまり人に知られないという点では、皇海山と高妻山も同様である。埋もれた山を世に出すという意味から、大いに力が入れている。

日本一の名山として、内外に知られる富士山は、あまりにも多く書かれ、歌われ、また描かれもしたため、とかく単調になりがちなどころ、山岳史家マルセル・クルツの言葉をひいて、一五二三年ポカテペテル（五四五—一米）登頂に至るまでの約七、八百年間、人間到達の最高峯の記録を保持したと紹介したのは新鮮である。内外文献に通じた氏の一面が窺える。

百名山の四分の一以上が、南北アルプスに割かれているのは

人それぞれ最良の相違はあるにしても、現代人の好みを順当に反映するといえるだろう。とりわけ笠ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳などについて書かれた文章が心に残る。ただウェストンの槍ヶ岳登頂に触れた個所で、登頂年代を明治二十四年（一八九一年）としているのは、翌二十五年の誤りなので、後日の訂正を希望したい。

加賀の白山は、深田さんのふるさとの山である。あまりにも多くを知り過ぎるため、かえって書きにくいと思われるが、この山をめぐる登山の歴史は古い。登山路にも変遷がある。残された文芸作品も豊富である。江戸時代の登山家や紀行文のこゝと、また古くから伝わる雷鳥の話などにも触れて欲しかった。

この本に古文献からの引証が多いことは前にも述べた。日本の名山といわれる山々に、たびたび叙位の恩典があったことは史実に残る。その出典は『三代実録』である。些細なことのようだが、ある山に後日、格上げの贈位があった場合、最初の叙位と昇格後のいずれをとるのが良いか、本書を含めて、未だに各書一致をみていないのが気になる。

『百名山』を批評することは易い。しかし、『百名山』を書く資格のある人は少ない。著者の山を見る眼はいつも清澄である。山と語り、山を讃えて日本全国を歩き続けた態度もまた立派である。『日本百名山』は全くよき人の手に成ったといえるだろう。

終りに、本書の表紙中央に貼られた五色刷の紙片は、著者九山山房主（久さんをもじる）の蔵書票を転用した趣向であるこ

とを付記する。

〔小林義正〕

坂本直行画文集

雪原の足あと

四六倍判 一九六ページ 別刷口絵  
四ページ 本文挿入色彩画スケッチ  
多数 昭和四〇年四月一日 茗溪堂  
発行 定価二八〇〇円

昭和三十二年の夏に出版された『原野から見た山』も立派な本で、方々へ持ち歩いて、極く素直な宣伝をしたが、今度の画文集も豪華な出来栄で、豊富に組み入れられた色刷りが見事である。巻頭の三枚の油彩と、本文中の色彩画は数えてみると三十八点、その他の挿画と花の絵は六十数点、絵の好きな人にとっては全く胸の踊る贈りものである。

豪華な出来栄と言ったが、この言葉はほんとうは当らない。豪華という言葉の感じは本で言えば革で表紙をつくり、金の装飾などをごつてりとつけたもの、服装で言えば勲章を胸いっぱいにはらさげた大礼服のようなものであって、これは誰が着ても似合うというものではない。そればかりでなく、私の性

にも趣味にも合わない。

従って坂本さんが出されたこの『雪原の足あと』を形容する言葉は、他にさがさなければならぬが、それは簡単には見あたらない。ということ、絵を見ながら、その何篇かの文章を読んで行くと、まだ私はお目にかかって直接お話をしたのではない著者の人物が、恐らく二度三度お話をする以上に細かく分つて来る。少しおかしな論法ではあるが、逆にこの本は坂本直行さんらしく、その生活にふさわしい美しさをもったものである確信が得られる。別の言い方をすれば、著者の満足するような出来栄であると思う。編集にたずさわられた方々(山下一夫、林和夫、望月達夫の三氏)は、多分その点に最も神経を使われたに相異なる。

かつて、この本にやや似た体裁の本を出された方々を思い出してみると、前にふれた坂本さんの『原野から見た山』もその一冊になっている。朋文堂の山岳文庫の、『山は屋上より』の足立源一郎氏、『山の眼玉』の畦地梅太郎氏、『日髯の山ひなたの山』の上田哲農氏などおられ、これらは絵にも山にも、またそこに綴られている文章にも関心のない人が見れば同じような本であり、山を愛する画家として区別なしに見てしまうかも知れない。だが私どもにはその違い、それぞれの個性のあらわれ方が興味の中心である。

絵にも文章にも、読者は好みを抱くことは当然であるが、そういう好き嫌いを越えた、対山岳の間具(こんな言葉を使つたのははじめてであるが)の相異は、山が生活の一部になって

生きている者にとっては、ともかく大変興味深いものである。

著者のこれまでの生涯については、私がここで御紹介などする必要はないだろうが、この本の奥付にも、一九〇六年に生れ、北大農学部卒、在学中から山登りをし、一度東京に出て来られたが、昭和五年以降北海道に戻り、十一年から野塚の原野で開拓生活をはじめ、日高の山を中心に絵を描き続けておられることは紹介されているが、著者の心と原野との結びつきをしみじみと味うのには、書名と同じ「雪原の足あと」という一文をゆつくりと読むことである。

「荒漠寂寥の無人の原野の一隅にある、小高い丘に立った僕は、まだ接したことがなかった空間と、大地の広がりを見て、冷酷と哀愁におののき、虚無感におそわれたのはそう長い時間ではなかった。原野というところは、僕にとっては、一旅人としてそこを無関心に通過するには、あまりにも大きな魅力をもっていた。」そして開墾生活の実際が細かに語られ、そのあいだに山にも登り絵も描くということが、どれほど強靱な体と神経を必要とするかが分る。

長い苦闘の生活、三十年間のランプの生活に終止符を打ち、坂本さんは今は山と絵の生活に移られた。電灯の明るさが恥しいほどだと書いてある。

この本の山の紀行文をよむと、坂本さんの周囲には、いい岳友がいることがまことに羨ましいほどである。山に入れば、子供のように浮かれ、その姿がどんな読者の眼にも浮んで来るだろう。「吹雪の結婚行進曲」は石狩岳の頂上で若い岳友が結婚式

をあげ、その時の仲人の記であるが、こういうことを悦んで引受けて、すこしも迷惑がらず、こんな仲人なら月に一回ぐらいでも悪くはないと書いてある。

考えてみると、年をとっても山に登り続けている方々は、誰にも一面こうした明るさ明らかさがあるが、坂本さんもこの点はかなり強烈なものを感ぜさせる。

絵については私には何も言えませんが、からりと晴れ渡った、こわいような空の青さが、この画家の、美しい童心、素朴な歓喜を伝えて来るやうなものである。

〔串田 孫一〕

### “AMERICANS ON EVEREST”

The official account of the ascent  
led by Norman G. Dyhrenfurth  
by James Ramsey Ullman  
and other members of the expedition  
J.B. Lippincott Company,  
Philadelphia and New York, 1964

写真Ⅱカラー七枚、白黒、六七枚  
ルート図（表裏表紙各大一枚）四  
二九頁、八・九五ドル（三五八〇  
円）

偵察行、失敗したもの、そして成功したものを入れて、この本は、エベレストへの公式な登山報告書（小冊子を除く）として、一体何冊目になるのであろうか。——但し国際法やその他の掟に反してやった、密入国ものは問題にせず——。私の書架にあるのをみると、ちょっと左記のようになってゐる。

- 1) Mount Everest, 1921 (Howard-Bury)
- 2) The Assault on Mount Everest, 1922 (C. G. Bruce)
- 3) The Fight for Everest, 1924 (E. F. Norton)
- 4) Everest, 1933 (Hugh Rutledge)
- 5) Everest, the Unfinished Adventure, 1936 (Hugh Rutledge)
- 6) Mount Everest, 1938 (H.W. Tilman)
- 7) The Mount Everest Reconnaissance Expedition, 1951 (E.E. Shipton)
- 8) Forerunners to Everest, 1952 (R. Dittert 他)
- 9) The Ascent of Everest, 1953 (John Hunt)
- 10) The Everest-Lhotse Adventure, 1956 (Albert Egler)
- 11) Lure of Everest, 1960 (Gyan Singh)

してみると、アメリカのは第十二冊目ということにならうか。今年（一九六五年）はインド隊が、四組で九人も登頂し、いろいろのレコード（彼等は十記録といっている）を作ったので、さぞや大きなたれり尽せりの報告書を出すことであらう。ある意味からすれば愉しみである。

これは余談だが、私の持っているアルマンの本には、隊長のディレンファースのと、二月十二日に、カンチのことで日本に寄ったビショップ（登頂者の一人）との二人のサインがあるが、サインといえは、第二隊の十五名がネパールへ行く途中東京に寄った時、エックラーの登頂記に書いて貰ったそれらの中に、アイスフォールで死んだブライテンバック、西稜から登ったホーンベイン、それに南稜から登頂したウィッチカー、ジャースタッドのがあり、著者のアルマンのも見られる。アンソルドのは手紙をやりとりしているし、エベレストに二度登ったシエルバのナワン・ゴンブのは、一九六三年登頂後アメリカに招待されての帰途に（九月二日）貰ったのがある。

さて、エベレストに限らず、ヒマラヤの山のBCまでのアプローチについては、近頃余り書かないのが常識になっているが、このアルマンの本では、そもその発端から募金の苦労、レーニア山での訓練、梱包、輸送は勿論、カトマンズからBCまでのキャラバンの様子まで、実に克明に記されている。

だが普通ならまたかと思うこの部分の記事の中にも、読んでみるとなかなかためになることが書いてある。実際、誰かもいっていたように、何でも読めば必ず何かしら得るところがあるもので、アメリカ隊のアプローチ・キャラバン中にもいろいろの事件がある。天然痘や火傷の重傷患者等に関する、思いがけない金のかかった処置、こんなことも起るのだ。登山隊はそんなことにはぶつかったら、知らん顔して通り抜けることはできない。とすると部隊が大きくなればなる程、それらに対処する

予算も、相当組んでおかないとえらいことになりそうだ。

日本から海外の山へ登りに行く隊の中には、お金も装備も必要限度ギリギリしか用意していかないのが多い。こういう隊には金のかかる善行はできない訳だ。海外登山審議会あたりでも、こういう点まで考えて、余り貧乏臭い登山隊は出さないようにすべきであろう。そして分母は少ない方がよい。

話を前に戻して、この本の著者のことだが、一般にこういう報告書は、隊長が代表者として書いたり編集したりしているものだが、この場合は一緒にカトマンズまで行った作家（登山家でもあるが）が、隊員の言葉や日記をもとにして作っている。それにしてもアルマンほどの者ともなれば、BCまでさえ行っていないくとも、この位のは書けるのだらう。全く恐れ入った腕前である。

ところで、この本の構成は二部に分け、第一部には、ディレンファースの長い前書が始まって、発端から登頂を済ませて帰国、そしてその後日語りまでである。山にとっついて、これを攻撃している間のことは、アメリカ山岳会の年報（一九六四年版）に出していたのと大差ない。この部分は私も、ディレンファースとアンソルドとカーターの許可を得て訳し、「岳人」の四十年二、三、四月号に連載した。その許可の手紙の中にディレンファースは、インドへ行くから序に東京その他講演旅行をやってもいいが、そちらの都合はどうか、と書いてあった。これが彼の日本に来ることになった最初のきっかけである。

第一回分の私の訳が出た丁度その時に、ディレンファースが

日本に來たので、この雑誌に彼のオートグラフを貰っていた人も大部いた。

それにしても、この本の方は訳すとなると大変だろうと思う。アメリカ英語で、スラング辞書にもないような、手に負えない俗語、俗文がいたるところにあり、唯読むだけならそんなところは素っ飛ばしてしまっても差支えないのだが、克明に訳すには、余程の語学力と経験が必要になってくる。

然し、この本のさわりは、私は寧ろ第二部のコンポネットにあると思うが、このコンポネットという字がまた、なかなかの曲者である。字引にある通りの「構成」ではどうもピンと来ない。私は意識して「主要項目」と考え、その真中の二字をとって「要項」としてみた、どんなものであろうか。

この要項では、紳士録、登攀史（これはお座なり）、アメリカ隊行動日誌、資金関係、食糧、衣料、装備、輸送、シエルパ、医療、酸素、スチール写真、映画、通信、生理学、心理学、社会学、地質及び氷河学、後援者、山岳用語といったような、項目名を見ただけで眼の眩みそうなのがズバリと並んでいるが、これらが皆、それぞれの専門家によって書かれている。前に沢山出版されたものとの重複があるかも知れないが、これだけのものを纏めるのは大変な努力だと思う。いずれJACの丹部節雄氏が良心的な訳本を出すことになっているので、ご熱心な方はそれを見られるとよい。

但し、この本は余程あわてて出したと見えて、索引がついていない。これは大きな欠点といえはいえよう。もう一つの不満

は西稜へのルートが、表紙裏以外に示されていないことで、ABCからC3Wまでのルートを、写真の上に点線ででも書いておいてくれたら、一層参考になったことであろう。

〔吉沢 一郎〕

Mr. Everett の片カナ書きは、従来「山岳」誌上では、エヴェレストを採用してきたが、昭和四〇年三月十一日のエヴェレスト委員会において、今後「エベレスト」に統一することを決定した（会報二四〇号参照。従って今後は「山岳」その他本会の刊行物等においては、エベレストを使用するが、本号の本文はそれ以前に執筆されたためエヴェレストとなっており、図書紹介及び会務報告ではエベレストとなっていて、統一を欠いている点御了承を願いたい。（編者）

# 会務報告

一九六四年九月～一九六五年六月

## ◇九月理事・評議員会 九月三日(木) 図書室

出席者 松方、渡辺、深田、折井、藤井、山崎、武藤、田村、松田、金坂、日高、神谷、吉沢、古沢、村井、加藤、望月、石原、中田、飯野、(山梨)、野口

### ▽議事、報告

- 一、日本ネパール文化協会仮事務所を本会内におく件。
- 二、国立登山センター設立の件。
- 三、図書室運営について。
- 四、読売新聞社主催立山集会について。
- 五、信濃毎日新聞社主催山岳学校について。
- 六、岩佐理事転任に伴い高橋理事に経理事務依頼の件。
- 七、登山技術カラスライド監修指導について。
- 八、以上の議題終了後、東海支部石原国利氏他が来室し、早大、JAC 東海支部のローツェ・シャル登山競合に関し申入れあり、緊急議題として検討の結果、その審議を海外登山審議委員会に付託することにした。

(詳細、会報二三五号参照)

## ◇臨時理事会 九月十日(木) 図書室

出席者 松方、三田、深田、折井、金坂、田辺、辰沼、山崎、松田、

田村、加藤、望月

### ▽議事

一、ローツェ・シャル登山競合に関する件。海外登山審議委員会に付託された審議の結果は、早稲田大学の計画を採るべしとの由。理事会はこれを採択した。

(ローツェ・シャル登山競合については会報二二六号参照)

- 二、昭和四十年年度国際スポーツ行事用外貨枠申請の件。
- 三、経理委員委嘱について、会員飯野亨氏に委嘱することを承認。

(詳細、会報二三五号参照)

## ◇十月理事・評議員会 十月一日(木) 図書室

出席者 松方、三田、渡辺、深田、辰沼、折井、山崎、金坂、松田、木下、武藤、田村、古沢、日高、藤島、神谷、加藤、織内、入沢、吉沢、望月、藤井、村井

### ▽議事、報告

- 一、山岳五十九年(一九六四年)発行について。
- 二、エベレスト登山準備状況について。
- 三、ローツェ・シャル登山競合について。
- 四、本会創立六十周年記念事業について。
- 五、日印合同登山計画について。
- 六、石川県山岳協会設立について。
- 七、その他報告事項。

(詳細、会報二二六号参照)

## ◇支部長会議 十月十七日(土) 図書室

出席者 越後⇨藤島(支)、齋藤、関西⇨水野、梶本、静岡⇨牧野、山本、山梨⇨三井、秋田⇨佐藤、佐々木、東海⇨須賀、富山⇨中田、石黒、東京⇨沼倉

告 報 務 會

松方、三田、渡辺、深田、折井、山崎、金坂、川上、松田、田村、辰沼、田辺、古沢、日高、交野、神谷、望月、吉沢、村井、入沢、松本、野口

▽会議の内容

- 一、会長挨拶並びにエベレスト登山について。
- 二、海外登山事情につき意見交換。
- 三、本会創立六十周年記念事業について。
- 四、日本山岳協会の規約変更について。
- 五、本会運営、連絡事項。

会費、入会金、会報、会員名簿、会員制度、ルーム移転の報告等。

(詳細、会報二二六号参照)

◇十一月理事会 十一月五日(木) 図書室

出席者 松方、深田、折井、辰沼、山崎、古沢、金坂、田村、武藤、松田、日高、神谷、望月、加藤

▽議事、報告

- 一、年次晩餐会開催について。
- 二、海外登山計画について。
- 三、本会創立六十周年記念事業について。
- 四、学生部補助金について。
- 五、日本ネパール文化協会発足について。

(詳細、会報二二七号参照)

◇十二月理事会 十二月一日(木) 図書室

出席者 松方、渡辺、辰沼、村木、武藤、松田、古沢、田村、山崎、吉沢、神谷、松本、芳野(東京支部)

▽議事、報告

- 一、昭和四十年年度役員について。

二、六十周年記念事業について。

三、海外登山審議委員会報告。

四、夏山診療所の報告。

五、文部省主催山の遭難対策協議会について。

(詳細、会報二二七号参照)

◇一月理事・評議員会 一月十四日(木) 図書室

出席者 松方、三田、渡辺、山崎、川上、深田、辰沼、古沢、松田、折井、田村、村木、木下、高橋、神谷、日高、藤井、青木、加藤、望月、石原

▽議事、報告

- 一、エベレスト登山計画について。
- 二、アメリカ・エベレスト隊長ディーレンファース氏来日の件。
- 三、昭和四十年年度国際スポーツ行事用外貨枠割当の件。
- 四、日本山岳協会の規約改正について。
- 五、本会創立六十周年記念事業委員委嘱について。
- 六、海外登山技術研究会について。
- 七、海外遠征隊に対し推薦状発行の件。

(詳細、会報二二七号参照)

◇二月理事・評議員会 二月四日(木) 図書室

出席者 松方、三田、渡辺、深田、折井、辰沼、古沢、山崎、川上、田村、武藤、松田、日高、藤島、加藤、望月、村井、吉沢、中田、牧野、石原、沼倉(東京支部)、中世古(東海支部)

▽議事、報告

- 一、昭和四十年年度理事推薦について。
- 二、山岳協会連絡事項。
- ①昭和四十年年度海外登山外貨枠決定の件。

②登山指導者研修会の件。

- 三、エベレスト登山計画について。
- 四、山岳第五十九年の発行について。
- 五、東海支部の役員交替について。
- 六、大分支部長辞任について——副支部長野口秋人氏の代行を諒承。

(詳細、会報二二七号参照)

◇三月理事・評議員会 三月四日(木) 図書室

- 出席者 松方、三田、渡辺、深田、折井、辰沼、山崎、金坂、松田、田村、村木、今西(錦)、青木、神谷、加藤、村井、吉沢、中田、石原、沼倉、飯野

▽議事、報告

- 一、昭和四十年年度役員推薦について。
- 二、通常会員総会開催について。
- 三、海外登山技術研究会開催について。
- 四、台湾山岳協会訪日登山隊に対し招聘状発行の件。
- 五、海外登山隊に対する推薦状発行規定について。
- 六、エベレスト登山準備状況報告。
- 七、山岳協会海外登山審議委員会報告。
- 八、本会の住居標示変更について。

(詳細、会報二二八号参照)

◇四月理事・評議員会 四月一日(木) 図書室

- 出席者 松方、三田、渡辺、折井、辰沼、田村、川上、松田、山崎、藤島(敏)、日高、神谷、入沢、吉沢、加藤、織内、望月、石原、中田、藤島(玄)、(以下東海支部) 中世古、原、市川

▽議事、報告

- 一、一九六五年度通常会員総会開催の件。

二、エベレスト登山について。

三、第三回海外登山技術研究会開催について。

- 四、北アルプス山小屋友好会主催による中部山岳国立公園三十周年記念行事について。
- 五、山岳第五十九年刊行について。

六、台湾山岳協会に招聘状送付の件。

七、東海支部ヒマラヤ登山計画変更について。

(詳細、会報二二九号参照)

◇臨時理事・評議員会 四月十五日。 図書室

- 出席者 松方、三田、渡辺、折井、川上、山崎、深田、辰沼、田村、村木、松田、日高、吉沢、加藤、交野、藤井、小原、織内、大塚、宮下、相沢、芳野

▽議事、報告

- 一、海外登山技術研究会実施について。
- 二、東海支部海外登山計画変更について。
- 三、福田宏年氏のソ連旅行に対し推薦状発行の件。
- 四、フランス国際アルピニスト集会について。
- 五、韓国山岳会、招待の件。

(詳細、会報二二九号参照)

◇通常会員総会 四月二十四日(土) 図書室

- 出席者 六四名、委任出席二〇三名。

▽総会次第

- 一、開会の辞
  - 二、会長挨拶
  - 三、報告事項
- 松田 雄一  
松方 三郎  
松方 三郎

(山の絵の会、木暮祭、ウェストン祭、年次晩餐会、ディレンファール)

總會をかねて、石楠花の咲く佐渡の裏道を探勝した。東京より槇、村井、深田、松本、中河の諸氏、石川支部より亀田氏が参加、参加者総数五十数名に達し盛会であった。(会報二四二号参照)

▽第八回有志懇談会、六月十九日(土)、小石川六義園・心泉亭にて、出席者二十八名、世話人は、山下一夫、今井喜美子、小野利次の三氏。(会報二四三号参照)

▽早、明ヒマラヤ登山隊歓迎会。六月二十四日、日比谷三井ビルにて。来日中のシエルバ、ペンバ・テンジン氏も出席、参加者八十三名、盛会であった。(会報二四三号参照)

#### ◇海外登山界との交流

一、本年度は二五カ国、四四団体とLibrary Exchangeを行なった。本年度はオリンピックの開催年にもあたり、海外から多数の山岳人が来日し、本会では次の様に歓迎会を開催した。

▽ニマ・ノルブ嬢歓迎会 九月七日午後六時から三井物産クラブにて。故ガルトゥエン・ノルブの長女ニマ嬢が大阪市立大学の招きで来日したので、これを機に、ヒマラヤ関係者四十名(内婦人二十二名)が集い歓迎会を開催した。(会報三三六号参照)

▽オリンピック・ネパール選手団歓迎会 十月九日午後六時から市ヶ谷の海外協力センターに於て日本ネパール文化協会主催の歓迎会に協力した。

▽モリス・エルゾグ氏歓迎会 十月十六日国際文化会館にて。(会報三三七号参照)

▽ニマ・テンジン嬢歓迎会 十月二十四日午後七時から銀座サントリー・ラウンジにて。オリンピックを機会に来日中のテンジン・ノルゲイ氏の末娘ニマさんを迎え、婦人会員十二名を含む二十一名が参加した。(会報三三六号参照)

▽メロトラ駐日インド大使送別会 十二月四日、国際文化会館にて。出席者十七名。(会報三三七号参照)

▽ノーマン・ディレンファース氏歓迎会 本会の招きで、インドへの旅行の途次、一月十六日(二十一日来日)した。この間本会では一月十八日、丸ノ内糖業会館にて歓迎会を開催。近藤、植名養会員はじめ会員多数がなごやかに歓談した(会報三三七号参照)。翌一月十九日午後六時、銀座のヤマハ・ホールにて記念講演会を開催。松方会長の挨拶について、ディレンファース氏は会員丹部節雄氏の通訳で講演を行い、百枚余のスライドを映写しながら、二時間に亘って詳しくアメリカ・エベレスト隊の行動を説明した(会報三三七号参照)。更に一月二十一日には国際文化会館にてエベレスト関係者と懇談会を行なった。

三、ハウストン文庫 ハウストン一家が昭和三十六年十一月来日した折、オスカー氏より本会へ図書(寄贈)申出があったが、この寄贈図書三十八冊が、三十九年十月本会に届いた。本会ではこれを記念してハウストン文庫として残すことになった。(会報三三六号参照)

◇海外登山 本年度の海外遠征隊の総数は二十四隊、約一四〇名に達したが、多くの隊に本会々員が参加した。尚海外登山に関するトピックとして次の記事を記録しておきたい。

一、ローツェ・シャル事件……本会の事務連絡の不手際から昭和三十九年度国際スポーツ行事用外貨の割当てを受けた早稲田大学と、直接ネパール政府に登山許可を申請した本会東海支部が、共に目標とした山がローツェ・シャルであったため、その調整をめぐりトラブルがあった。(会報三三六号参照)

二、海外登山審議会、昭和四十年国際スポーツ行事用外貨枠は、十一月十五日の海外登山委員会にて、本会東海支部「マカール」七〇〇〇

七、各担当理事業務報告。  
八、六十周年記念事業について。  
九、その他報告事項。  
(詳細、会報二四一号参照)

× × ×

◇小集会

▽第二六回 九月十六日(水) 図書室

ランタン・リルン(講演と8ミリ)

鈴木 武夫氏

▽第二七回 六月二十九日(火) 図書室

山の放談

藤島 敏男氏

◎会場の関係で小集会としてではなく、東京支部主催の毎月第三水曜日の夜の定例集会「三水会」として次の集会在開催された。

▽十月二十一日(水) 於図書室

アラスカ、ローガン峰遠征報告

川崎 巖氏

▽十一月十八日(水) 於図書室

山の季節について(講演)

気象庁 村越 巖氏

▽二月十七日(水) 於図書室

ギャチュン・カン、アルバータ(講演と映画)

池田甚兵衛氏

▽三月十七日(水) 於図書室

東部ネパール横断旅行(講演とスライド)

宮本 千晴氏

◇主なる行事及び集会

▽越後支部主催紅葉の銀山平探勝。十月十日、十一日、銀山平の伝之

助小屋にて。十一日は荒沢岳登山を行なう。会員十八名(内東京から七名、会員外十七名が参加した。(会報二二六号参照))

▽越後支部主催文化祭記念登山、十一月一日、二日、佐渡金北山、ど

んでん高原を中心として行なわれ、東京からも神谷氏他五名が参加した。(会報二二七号参照)

した。(会報二二七号参照)  
▽石川支部主催岩間懇親会、池田前支部長以下十二名が参加した。(会報二二六号参照)

▽静岡支部主催第七回紅葉会、十一月十四日、十五日、畑第二ダム下の白樺荘にて。東京その他から二十二名、静岡県内から二十六名が参加した。(会報二二七号参照)

▽一九六四年度年次晩餐会、十二月二日、茗溪会館にて開催。司会者深田久弥氏、松方会長の挨拶のあと鳥山悦成名誉会員の音頭で乾杯、司会者の指名で数名が次々とスピーチを行ない、恒例の今年度の海外登山の簡単な報告があった。出席者一五五名。

▽この一本展、十二月二日、年次晩餐会と同じ会場の一隅に、故高野鷹蔵名誉会員の遺影、アルバム、著書、愛蔵書、「高山深谷」、原稿、書翰等が展示された。(会報二二七号参照)

▽近藤、楨名誉会員の叙勲。四月二十九日発表の第二回生存者叙勲に際し、本会から左記の通り栄ある叙勲を受けられた。

勲三等旭日中綬章

楨 有恒

勲四等瑞宝章

近藤 茂吉

▽木暮翁碑前懇親会、山梨支部主催により五月二十三日、金山平にて。霧の旅、会員六名、山梨支部より十名が参加、快晴に恵まれ楽しい山行であった。(会報二四二号参照)

▽第十九回ウェストン祭、六月五日、六日。信濃支部主催にて上高地にて開催。日高、渡辺、藤木氏ら二百余名が参加し盛であった。尚

今回は新しく取りかえられた径三尺に及ぶ、丸型のレリーフ(佐藤久二郎氏製作)の除幕式が行なわれた。(会報二四一号参照)

▽越後支部主催、鄙びた佐渡を探ねる会。六月十八日、二十日、支部

三、理事会担当業務分担の件。

加藤（総務・企画・協会）、深田（会員・図書・山岳編集・協会）、辰沼（遭難対策・協会）、村木（指導）、大塚（海外登山・装備・協会）、松田（海外連絡・庶務・協会）、飯野（経理・山小屋管理）、皆川（山日記）、川上（指導）、田村（研究調査・医療）、住吉（関西・指導）、田辺（指導・六十周年記念事業）、竹田（指導・装備）、杉浦（会員・自然保護）、川崎（集会・庶務）、宮下（会報）、渡辺（支部）  
なお、常務理事は、加藤、深田、辰沼、村木、大塚、松田、飯野以上七名に決定する。

四、常任評議員追選の件。

折井評議員を、出席評議員万場一致常任評議員に推薦した。

五、委員会設置の件。

六、其他報告事項。

（詳細、会報二四〇号参照）

◇五月理事・評議員会 五月十三日（木）図書室

出席者 松方、加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、田村、田辺、竹田、宮下、杉浦、川崎、皆川、神谷、日高、村井、藤島（敏）、吉沢、望月、中田、野口、芳野（東京支部）

▽議事、報告

一、本年度の各担当理事の方針並びに運営方法について。

二、理事担当業務に「装備担当」を追加の件。

担当、大塚、竹田両理事とする。

三、エベレスト登山計画状況報告。

四、日・印合同婦人登山について。

五、創立六十周年記念事業について。

六、其他報告事項。

（詳細、会報二四〇号参照）

◇支部長会議 五月二十九日（土）図書室

出席者 関西⇨水野、信濃⇨高山、越後⇨藤島、山梨⇨三井、宮城⇨北川、大分⇨野口、東京⇨石原、東海⇨藤森・石原、山形⇨後藤、熊本⇨西沢、静岡⇨山本

松方、加藤、深田、大塚、松田、飯野、辰沼、川崎、田村、神谷、青木、藤井、村井、（以下委任）福島⇨伊藤、富山⇨中田

一、会長挨拶。

二、本年度役員業務分担について説明。

三、本年度理事会としての具体的運営方針説明。

四、各支部現況報告。

五、山岳協会運営方針について地方の立場より希望がのべられ、種々検討した。

（詳細、会報二四一号参照）

◇六月理事・評議員会 六月三日（木）図書室

出席者 松方、三田、渡辺、加藤、深田、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、田村、住吉、田辺、竹田、宮下、杉浦、川崎、神谷、藤井、村井、入沢、望月、吉沢、石原（憲）、牧野、加藤（数）（大分）、中世古（東海）、諏訪多（関西）、松本、野口、加藤（喜）

▽議事、報告

一、復活会員制度について。

二、山岳協会役員総会報告。

三、支部長会議報告。

四、遭難対策案検討について。

五、カトマンズ現地報告（加藤喜一郎）。

六、エベレスト委員会報告。

ス氏来日関係、小集会七回、海外登山家、諸団体との交流、海外登山(等)

#### 四、支部報告

富山支部(中田勇吉)、信濃支部(高山忠四朗)、静岡支部(牧野衛・山本朋三郎)、越後支部(井口正男)

松田 雄一

・支部長交代の件

東海支部(須賀太郎より石原国利)、石川支部(池田知幸より磯野三郎)、大分支部(永井清一より野口秋人)

#### 五、昭和三九年度決算報告

(神河内山荘の分も含む)

折井 健一

#### 六、監査報告

(収支決算全員承認)

野口 末延

#### 七、昭和四〇年度収支予算案審議

(右全員異議なく承認)

#### 八、役員改選の件

神谷 恭

一九六五年度の理事として、加藤泰安、深田久弥、辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、松田雄一、飯野亨、皆川完一、川上隆、田村扇一、竹田寛次、田辺寿、住吉仙也、武藤晃、杉浦耀子、川崎巖、宮下秀樹の十七氏を選任、会長、両副会長を含め二十氏に決定。退任された折井健一、山崎安治、古沢肇、木下是雄、金坂一郎、梶本徳次郎、高橋進、岩佐吉雄の八氏の労を謝す。

監事一名は野口末延氏を再選。

評議員一名追加。折井健一氏を選任。加藤泰安氏は理事に就任につき退任。

#### 九、昭和四〇年度の方針

松方 三郎

(会費、支部長異動、支部と理事会、六十周年記念事業、年中行事、

山岳協会、エベレスト登山に関する件等)

・最後に星野会員から全岳連に関する提案あり、本件については会報第二四〇号巻頭の会長挨拶を参照されたい。

#### 十、閉会の辞

松田 雄一

・午後五時半総会終了後、恒例により図書室で出席会員多数が懇談、閑談に過ぎた。

#### ◇新年度第一回理事・評議員会 四月二十六日(月) 図書室

出席者 松方、渡辺、加藤、深田、辰沼、大塚、松田、村木、川上、

田村、竹田、杉浦、川崎、日高、神谷、藤井、青木、村井、石原

(東京支部)

#### ▽議事、報告

一、日本山岳協会新役員推薦の件。

本会より選出する一九六五〜一九六六年度の役員を次の様に決定した。

副会長松方三郎、専務理事(一名)加藤泰安、常務理事(三名)辰沼広吉、大塚博美、松田雄一、理事(七名)深田久弥、中田勇吉、高山忠四朗、三井松男、水野祥太郎、山本朋三郎、齋藤平七

二、本年度方針検討の件。

本年度理事会としては次の六項目を懸案事項として考えた。(加藤理事)

- ①会員に対するサービス。
- ②山岳協会活動に対し積極的に対処する。
- ③学生部の指導・育成。
- ④会の運営資金である会費の徴収を徹底する。
- ⑤エベレスト登山の実行。
- ⑥六十周年記念行事の遂行。

ドル、東京薬科大学ニランタン・リ、三五〇〇ドル、北大ニダウラ  
ギリ、四〇〇〇ドル、阪大ニビーク29、五〇〇〇ドルに決め、山岳協  
会宛推薦した。(会報二二七号参照)

三、エベレスト登山。本会エベレスト委員会では、昭和三十九年八月十  
八日組織本部委員会を発足せしめて、準備にかかり、九月二十六日毎  
日新聞社の後援決定。十二月二十三日、文部省助成金内定。昭和四十  
年三月四日、NHKの後援が決まり、四月より具体的な準備に着手す  
る予定でいたところ、三月十九日ネパール政府は突如として登山禁止  
令を発表。本会では六月九日のエベレスト委員会で計画延期を決め  
た。(会報二四一号参照)

◇日本山岳協会 十月十七日の協会臨時総会で、協会規約二条、四条が  
改正され、従来運営細則で、日本山岳会は技術研究と海外登山、全日  
本山岳連盟は、国体登山と一般登山の指導啓蒙とそれぞれ分担してい  
たが、新規約では「本協会は日本体育協会加盟団体として、アマチュ  
ア登山の一切を統括し、登山に関する全国的事業及び国際的事業を遂  
行することを目的とする」と改正された。(会報二二七号参照)

尚本会では協会主催の次の二つの行事に協力した。  
一、富士山登山指導者研修会、二月二十六日〜三十一日。講師として山  
崎、広谷、君島三氏を派遣した。(会報二二七号参照)

二、海外登山技術研究会。四月二十九日〜五月二日、東吾妻新野地温泉  
にて、現地責任者、松方、実行委員長、辰沼のもと、本会福島支部の  
協力をえて参加者六十六名にて行なった。(会報二四一号参照)

◇山岳 第五十九年(通卷二一八号)(一九六四年)を三月一日発行、  
編集者望月達夫。

◇会報 第二三五号(第二三九号(編集者古沢肇)、第二四〇号(編集

者吉沢一郎)を発行。

◇山日記 一九六五年版(第三十輯)を一月一日発行、編集代表皆川完  
一。

◇物故会員 この期間に逝去された会員は次の通りである。本会はここ  
に謹んで哀悼の意を表す。

### 一九六五年度役員

- 会 長 松方三郎
- 副会長 三田幸夫、渡辺公平
- 常 務 加藤泰安、深田久弥、辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、松田  
雄一、飯野亨
- 理 事 皆川完一、川上隆、田村扇一、竹田寛次、田辺寿、住吉仙也、  
武藤晃、杉浦耀子、川崎巖、宮下秀樹
- 監 事 野口末延、松本熊次郎
- 常任 望月達夫、小原勝郎、藤島敏男、神谷恭、交野武一、織内信  
評議員

彦 折井健一、藤井運平

評議員

入沢文明、日高信六郎、成瀬岩雄、早川種三、伊藤秀五郎、今西錦司、今西寿雄、橋本三八、青木昇、篠田軍治、川喜田壯太郎、津田周二、吉沢一郎、村井米子

評議員  
支部長

石原憲治(東京)、水野祥太郎(関西)、藤島源太郎(越後)、伊藤弥十郎(福島)、磯野三郎(石川)、高山忠四朗(信濃)、中田勇吉(富山)、三井松男(山梨)、織田収(山陰)、後藤幹次(山形)、牧野衛(静岡)、三谷孝一(熊本)、末松大助(福岡)、北川正次(宮城)、荒巻広政(秋田)、野口秋人(大分)、石原国利(東海)

顧問

藤木九三





# SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. LX

Issued in December, 1965

## Contents

(in English)

Gyachung Kang, 1964 .....	By Kazuyoshi Kohara.....	1
Langtang Himal, 1964 .....	By Takeo Suzuki.....	3
An Andean Expedition, 1964 .....	By Ichiyou Mukou.....	5
Annapurna South Peak (Ganesh) .....	By Haruo Higuchi.....	8
Glacier Dome, 1964.....	By Sumio Shima.....	9
An Expedition to Barun Valley, 1964 .....	By Taiji Endo.....	11
The third ascent of Mt. Blackburn and the first ascent of Mt. Regal, Wrangell Mountains, Alaska.....	By Taiichi Kitamura.....	13
Mt. St. Elias, 1964 .....	By Kiyohiko Asano.....	15
Mt. Logan, East Ridge, 1964 .....	By Kinichi Murota.....	16
Mt. Logan Expedition, 1964.....	By Iwao Kawasaki.....	18
Altar, 1964.....	By Junji Miyano.....	19

(in Japanese, except the articles mentioned above)

The ascent of Shiretoko Dake in 1928 .....	By Iwao Naruse.....	161
Expedition Notes .....	Edited by Yasuji Yamazaki.....	176
In Memoriam:		
T. Takano, K. Sumi, K. Yamaguchi, R. Yoshikawa		
T. Shinohara, T. Miwa.....		179
Book Reviews .....		195
Club Proceedings .....		202
Himalayan Chronicle, 1959~1962 .....	By Eizo Tanaka & Katsuyoshi Baba.....	21
Notes on Hindu Kush (with the chronicle of Explorations and Mountaineering in the Hindu Kush, and two maps) .....	By Ichiro Yoshizawa.....	47

**Editor: Tatsuo Mochizuki**

Associate Editors: Kyuya Fukata, Taian Kato,  
Yasuji Yamazaki and Yuichi Matsuda

## The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: No. 31-18, Jingumae 3-Chome, Shibuya-ku, Tokyo.

.....

(April, 1965~April, 1966)

*President:* Saburo Matsukata  
*Vice-Presidents:* Yukio Mita, Kohei Watanabe  
*Honorary Secretaries:* Taian Kato, Yuichi Matsuda  
*Honorary Editor:* Tatsuo Mochizuki  
*Honorary Librarian:* Kyuya Fukata  
*Honorary Treasurer:* Tōru Iino  
*Auditors:* Suenobu Noguchi, Kumajiro Matsumoto

.....

### Committee

Kyuya Fukata	Tōru Iino	Taian Kato
Takashi Kawakami	Iwao Kawasaki	Yuichi Matsuda
Kwanichi Minagawa	Hideki Miyashita	Junjiro Muraki
Akira Muto	Hiromi Ohtsuka	Kanji Takeda
Senichi Tamura	Hisashi Tanabe	Hirokichi Tatsunuma
Youko Sugiura	Senya Sumiyoshi	

.....

### Council

Noboru Aoki	Unpei Fujii	Toshio Fujishima
Sanpachi Hashimoto	Tanezo Hayakawa	Shinrokuro Hidaka
Kinji Imanishi	Toshio Imanishi	Fumiaki Irisawa
Hidegoro Itoh	Kyo Kamiya	Takeichi Katano
Sotaro Kawakita	Tatsuo Mochizuki	Yoneko Murai
Iwao Naruse	Katsuro Ohara	Kenichi Orii
Nobuhiko Oriuchi	Gunji Shinoda	Shuji Tsuda
Ichiro Yoshizawa		

.....

### Chairmans of Local Sections

<i>Akita:</i> Hiromasa Aramaki	<i>Yamagata:</i> Kanji Gotoh
<i>Miyagi:</i> Shoji Kitagawa	<i>Fukushima:</i> Yajuro Itoh
<i>Echigo:</i> Gen Fujishima	<i>Tokyo:</i> Kenji Ishihara
<i>Yamanashi:</i> Matsuo Mitsui	<i>Shizuoka:</i> Mamoru Makino
<i>Shinano:</i> Chushiro Takayama	<i>Tokai:</i> Kunitoshi Ishihara
<i>Ishikawa:</i> Saburo Isono	<i>Toyama:</i> Yukichi Nakada
<i>Kwansai:</i> Shotaro Mizuno	<i>Sanin:</i> Osamu Oda
<i>Fukuoka:</i> Daisuke Suematsu	<i>Kumamoto:</i> Koichi Mitani
<i>Oita:</i> Akito Noguchi	

.....

*Adviser:* Kyuzo Fujiki

# Gyachung Kang, 1964

By Kazuyoshi Kohara

Gyachung Kang (7922 m) lies in the Nepal Himalaya and takes its place at about lat. 28°06' N. and long. 86°45' E. on the border ridge between Nepal and Tibet, about 20 km to the northwest from Mt. Everest. The British Expeditions in 1951 and 1952, the British Everest Expedition in 1953, and the American Expedition in 1962 went in the neighbourhood of Gyachung Kang. From Japan, the Reconnaissance Expedition of Fukuoka University in 1959 and the "Yeti" Expedition in 1960 made some explorations around the mountain. (see "*Sangaku*" vol. 55, 1960) But it had not yet been climbed by any human being.

"All Japan Himalayan Expedition, 1964" was organized and sent by the Federation of All Japan Mountaineering Unions with an intention to try the ascent of Gyachung Kang. The members of this expedition were selected from mainly the Nagano Section, and 2 members (Y. Kato and K. Sakaizawa) with Pasang Phutar III (sirdar) could reach the summit on April 10, 1964, and 2 other members (K. Machida and K. Yasuhisa) repeated the ascent next day. But, on April 9, one fellow, A. Otaki slipped down from the border ridge (about 7700 m in height) to the Tibetan side and died.

Summary of the Expedition as follows;

1. Members:

Kazuyoshi Kohara	(40 of age)	The Leader and doctor
Ichiro Yoshizawa	(32 " )	The Deputy-leader
Yukihiko Kato	(30 " )	
Takeshi Takeda	(30 " )	
Kazunobu Machida	(29 " )	
Akio Otaki	(29 " )	
Kiyoto Sakaizawa	(27 " )	
Tadao Kitamura	(27 " )	
Kazunari Yasuhisa	(25 " )	
Toshiro Kikuchi	(28 " )	Reporter
Chuji Kobayashi	(28 " )	Cameraman

2. Liaison Officer: J. C. Thakur (25 of age)

3. Sherpas : Pasang Phutar III (32 of age) Sirdar  
 High Altitude Porters : 12  
 Local Porters : 8  
 Kitchen Boys : 3  
 Mail Runners : 8
4. Coolies : 315 Coolies for going  
 84 Coolies for coming back
5. Records :
- February 17 Left Kathmandu.
- March 4 Arrived at Namche Bazar.  
 11 Arrived at Base Camp on the Ngojumba Glacier (5280 m).  
 17 Established Camp 1 on the Ngojumba Glacier (5730 m).  
 20 Established Camp 2 on the Ngojumba Glacier (5960 m).  
 23 Established Camp 3 on the Ngojumba Glacier (6410 m).  
 27 Established Camp 4 (Advance Base Camp) below the ice  
 couloir (6650 m).
- April 1 Established Camp 5 in the ice couloir (7050 m).  
 6 Established temporary Camp 6 a little under the Border  
 ridge (7550 m).  
 9 A. Otaki's accident happened.  
 Established Camp 6 on the Border ridge (7670 m).  
 10 2 members attacked and could reach the summit.  
 11 Other 2 members attacked again the top and succeeded.  
 15 All members and Sherpas withdrew to Base Camp.  
 19 Made A. Otaki's tombstone on the lateral moraine of the  
 Ngojumba Glacier.  
 23 All members were divided into 3 groups. 1st group (5  
 members) departed from Base Camp to explore in the  
 Khumbu and Imja Glaciers.  
 (Ngojumba Glacier—Chola Khola—Khumbu Glacier—Imja  
 Gl.—Ambu Lapcha (5780 m)—Mingbo La (5800 m)—  
 Thyangboche—Thami)  
 25 2nd group (3 members) left Base Camp to explore in the  
 Bhote Kosi Area.  
 (Ngojumba Glacier—Lhenjo Pass (5800 m)—Chhule—Lunak  
 —Nangpa La (5806 m)—Thami)

3rd group (2 members) left at the same time from Base Camp to Thami directly transporting the loads.

- May 5 All members and Sherpas concentrated to Thami.  
8 Left Thami.  
22 Reached Kathmandu.

6. Summit:

On the 10th of April, Y. Kato, K. Sakaizawa and Pasang Phutar III started from the final Camp 6 (7670 m) at 7.00 a.m. and after 4 hours climbing up the steep rock knife-edged ridge and rock wall, they stood on the summit of Gyachung Kang at 11.00 a.m.

The weather was fine, but the wind blowing severely. They stayed on the summit about one hour and came back to the final camp in safe at 3.00 p.m.

On the 11th of April, other 2 members, K. Machida and K. Yasuhisa started from the final Camp 6 at 7.00 a.m. and reached the summit at 10.00 a.m.

7. Accident:

On the 9th of April, T. Takeda and A. Otaki started from the temporary Camp 6 (7550 m) at 8.45 a.m. They arrived at the border ridge at 11.30 a.m. and took some rest. At that time, A. Otaki slipped down to the Gyachung Glacier (Tibetan side) about 2000 m below and was missing.

Due to the very steep rock wall and also the border line between Nepal and Tibet which we could not cross over, so we had to give up the rescue unwillingly.

## Langtang Himal, 1964

By Takeo Suzuki

In March 1964, Osaka City University Langtang Himal Expedition left Japan to try again to climb Langtang Lirung (7245 m), backed up by its Alpine Club. Three years ago, we had the misfortune to lose our three members, leader K. Morimoto, member K. Oshima and sirdar Gyaltsen Norbu, by an avalanche in

the Lirung Glacier. (see "*Sangaku*" vol. 57, 1962) And then last autumn, two Italian climbers were killed in the same place.

We polished up our plan to climb the said mountain in details and added to seven members in all in view of what had preceded.

Leader;	T. Suzuki	(40 ages)	
Member;	T. Kondo	(27 " )	a member of first Exp.
	Y. Kadota	(29 " )	
	T. Kiyohara	(27 " )	
	A. Ban	(24 " )	a member of first Exp.
	K. Jokei	(23 " )	
	S. Sasaki	(21 " )	

In smooth load-carrying, on 4th April we pitched our Base Camp on the Lirung Glacier. Several days reconnaissance proved that the risk of avalanches in the Glacier was too great in this year especially. So we decided to change the route from the Glacier to the South ridge. Camp 1 was established on 6th April at the height of 4900 meters and Camp 2 on 21st April at 5600 meters.

But, above the site of Camp 2, the line of rocky ridge and the icy precipices, running steeply, up to the ice shoulder, our route was finally obstructed at the height of 5770 meters and we were compelled to give up the ascent of the south-ridge. Seeing from the south-ridge, we think it is impossible to climb the south-western face of Lirung, on account of many avalanches. It may be given as a conclusion that we cannot find a possible route to the summit of Langtang Lirung except the Lirung Glacier in spite of risk.

Then, moving Base Camp to the Kishump kharka, we divided into two parties, one of which, consisted of three members and two Sherpas, tried to attack Kyungka Peak (6979 m) with success, pitching three camps, on 8th of May. The other, remaining members and two Sherpas, reached the summit of Urkimman (6397 m) with three camps, on 5th of May.

Afterward, we entered into the innermost part of the Langtang Glacier and reconnoitered the mountains around it from Hagen's Col and Tilman's Col. All members came back to Kathmandu on 27th of May.

# An Andean Expedition, 1964

By Ichiyou Mukou

Five men and a woman stayed in Bolivia about three months in 1964, being lucky enough to succeed in ascending twenty peaks of the Andes, fifteen of which, I am assured, had been untrodden before we got their summits. Nineteen of the peaks belong to the Cordillera Real and one, the highest in the country, to the Cordillera Occidental.

We owe our success to Mr. Evelio Echevarria in U. S. A. and Mr. German Mills in Chile who were kindly enough to lend us their invaluable maps of the Real, and to the many in Bolivia and Japan who heartily supported our expedition.

The party was despatched by the Alpine Club of the Tokyo University of Foreign Studies, consisting of three graduates, one woman graduate and two undergraduates. The names are as follows; Ichiyou Mukou, the leader (29), Masaki Aoki (29), Kunio Suzuki (28), Akiko Mukou, the leader's wife (27), Takaya Takeshita (23), Tadashi Inagawa (22).

Five of the members and two tons of the expedition equipments sailed from Port Yokohama on April 7, and arrived at the port of Arica, Chile, on May 26. Suzuki flew out from Haneda Airport via Canada and Peru on May 15, appearing to receive us on the platform of La Paz Railway Station late on the evening of May 27, when we arrived in the capital of Bolivia by the Arica-La Paz Railway after fifty-one days journey.

During the next two weeks, whilst enjoying the generous hospitality of the Club Andino Boliviano, the staff of the Japanese Embassy and many Japanese residents in the city, we commenced our acclimatization, the pace being suitably stepped up with visiting by car the Chacaltaya Observatory of Cosmic Rays at about 5200 meters, or going fishing down a Yungas valley over a 4600 meters pass in the Cordillera Real.

A young medical student, named Franz Gutierrez, belonging to Club Andino Boliviano, proposed to join our party, and another man of the club named Benancio Pachahuay, was employed as our cook and camp caretaker. Purchases of food and fuel were completed. On June 9, the eight members started in a lorry from La Paz for the central region of the Cordillera Real, and after two days of strenuous and

pleasant marching with a herd of llamas, horses and donkeys to transport our loads and together with attendant Indios, set up our Base Camp in the upper valley of the Chachacomani River. The camp site was at 4600 meters. To the north, 1400 meters above, the ice cliff of Chachacomani South Peak dominated the scene. To the east, the head of the valley was ringed by many beautiful mountains guarded with hanging glaciers and steep rocky ridges.

We got ten first ascents and the second ascent of Chachacomani in this first mountaineering stage in Bolivia, during which the weather stayed perfect except on the evening when we got to the top of Chachacomani South Peak, the highest virgin peak hereabout.

Our second aim was at the Sorata Group, situated at the northern extremity of the Cordillera Real. We had two companions this time; a sergeant named Noel Castillo, and a Japanese resident in La Paz named Kanji Ohta.

After two days travelling through the tremendously up-and-down road, our lorry reached a small mine (Mina Canderaria), overlooking the Cooco Valley eight hundred meters below. In the bottom of this valley was Cooco village, inhabitants of which were so tricky that we were compelled to stay there in their curious eyes for two days. They would not let their llamas for our loads until I consented to pay twice as much charges as in Chachacomani.

It was on the evening of July 10 that we could set up our Base Camp beside a small pond in the upper Cooco valley. Mountains and glaciers seen from the camp looked steeper than those in the Chachacomani region. We first tried Illampu (6362 m), making two advance camps on Illampu East Glacier, in vain. The east side of the mountain was guarded with a overhanging wall two kilometers in length and 500-800 meters in height.

After a week of unsuccessful climbing, we moved our Base Camp to a place four kilometers up the Cooco valley and got a successful series of ascending Hancouma (6427 m, the fifth ascent, and the first from the north side), Hancopity and Viluyo Hancouma.

Our last objective in Bolivia was Nevado Sajama, the highest mountain in this country, belonging to the Cordillera Occidental. The afternoon of August 12 saw us starting La Paz in our lorry. The road this time went southward, parting at Alto La Paz from the familiar one to the north which we had taken on our first and second mountaineering. There occurred many troubles during our four days travelling through the Altiplano.

Sajama village lay deserted in a wide valley near the Bolivia-Chile frontier.

Nevalo Sajama seen from there was a gigantic snow-covered dome, whose bigness was far beyond my imagination through written books on this lonely volcano. We advanced a camp at the foot of the snow line and two men of the party could attain the top of the giant on August 17. Throughout this last mountaineering we were constantly annoyed by the very strong west wind. August is not a suitable month for travelling on the Altiplano.

#### List of Ascents

Vinohuara 2	5639m	15.6.64	1 st. ascent	Takeshita, Inagawa, Aoki
Unnamed	5791	"	"	"
Unnamed	5812	"	"	"
Vinohuara 1	5608	16.6.64	"	Suzuki, Gutierrez, A. Mukou, I. Mukou
Hailliguaya 2	5828	17.6.64	"	Takeshita, Inagawa, Aoki
Hailliguaya 3	5837	"	"	"
Hailliguaya 4	5578	"	"	"
Chachacomani S	6030	22.6.64	"	Suzuki, Aoki, A. Mukou, Takeshita, Inagawa, I. Mukou
Chachacomani N	6074	24.6.64	2 nd. ascent	Suzuki, Aoki, Takeshita
Hailliguaya 1	5940	"	1 st. ascent	Inagawa, Benancio, I. Mukou
Nevaldo <i>Yarigatake</i>	5800	20.6.64	"	Aoki, Inagawa
Unnamed	6056	16.7.64	"	Inagawa, Suzuki, Castillo
Hancopity 7	5850	23.7.64	2 nd. ascent	Suzuki, Aoki, Ohta
Hancopity 1	5863	24.7.24	1 st. ascent	A. Mukou, I. Mukou
Hancouma (Ancouma)	6427	25.7.64	5 th. ascent	Takeshita, Inagawa, I. Mukou
Hancopity 4	5818	26.7.64	1 st. ascent	Suzuki, Aoki, Ohta
Viluyo Hancouma 1	5600	27.7.64	"	Takeshita, Inagawa
Viluyo Hancouma 2	5550	"	2 nd. ascent	A. Mukou, I. Mukou
Viluyo Hancouma 3	5520	"	1 st. ascent	"
Sajama	6531	17.8.64	6 th. ascent	Suzuki, Inagawa

# Annapurna South Peak (Ganesh)

By Dr. Haruo Higuchi

An expedition organized and sent by Kyoto University Alpine Club, Kyoto, succeeded in making the first ascent of Annapurna South Peak (Ganesh, 7256 meters) on October 15, 1964. This expedition consisted of six members, including a professor as a leader, a graduate and four undergraduates who took the initiative for planning the expedition.

The members were as follows:

- : Dr. Haruo Higuchi, leader, age 35, Assistant Professor of Kyoto University (Geophysics).
- : Shoichiro Uyeo, deputy-leader, age 26, a graduate of Kyoto University (Pharmaceutical Organic Chemistry), member of the successful Saloro Kangri Expedition of the Academic Alpine Club of Kyoto, 1962.
- : Hiromichi Yoshino, age 23, an undergraduate of Kyoto University (Cytogenetics).
- : Kiyoo Shimada, age 22, an undergraduate of Kyoto University (Polymer Chemistry).
- : Masaaki Kimura, age 21, an undergraduate of Kyoto University (Political Science).
- : Yutaka Ageta, age 20, an undergraduate of Kyoto University (Geophysics).

Members left Japan between July 25 and August 23, and met all together on September 8 at Pokhara. Here Pasang Phutar III as a sirdar, Lakpa Tsering as a cook, Mingma Tsering and Karma Sherpa as high altitude porters, joined our party. After seven days' caravan we established the base camp at an altitude of 4000 meters in an aberration valley of the South Annapurna Glacier. Baggages of 1.8 ton including both equipments and foods were transported by 53 porters to the base camp.

Five advance camps were established: Camp I at 4600 m. on September 21, Camp II at 5200 m. on 27, Camp III at 5600 m. on October 3, Camp IV at 6200 m. on 8, Camp V at 6600 m. on 12, respectively. In the lower part of the climbing route, we had to cross several dangerous avalanche courses and in the upper part of it, 700 meters of fixed ropes and 10 meters of a handmade wooden ladder were

necessary to make the route safe.

On October 13 the three members, Yoshino, Kimura and Ageta, tried to attack the peak, and reached the central peak (ca. 7150 m) at three o'clock in the afternoon, but they found another a little higher peaks both on the south and on the north. No time was left for trying them. On October 15 Uyeo and Mingma succeeded to scale the highest peak (the southernmost peak) of Annapurna South Peak at half past twelve o'clock, following the same route and passing over the central peak. On the same day Higuchi and Karma tried to scale the north peak (ca. 7200 m.) but lack of time prevented them from reaching the summit and they could only scale a minor peak (ca. 7100 m.) on the way to the north peak. On October 20 all the members returned to the base camp.

While we waited for porters coming up to the base camp, we made short reconnaissance tours to the South Annapurna Glacier, the West Annapurna Glacier and the East Annapurna Glacier, and also scaled Tent Peak (5945 m.) After four days' caravan we arrived at Pokhara on November 3.

## Glacier Dome, 1964

By Sumio Shima

In the end of summer 1964, mountains of Annapurna were still out of sight behind the thick clouds of monsoon. On 10th of September, we, seven members of All Japan Himalaya Expedition 1964 to Glacier Dome (7255 m), Dr. S. Shima (the leader), S. Ishikawa, H. Sase, M. Takeuchi, T. Arisawa, Y. Takahashi and M. Nishimura, left Pokhara being blessed with unusual heavy rain.

After the one-week-march, being wet all over, to the Annapurna Glacier in the basin of Modi Khola, our Base Camp (4200 m) was established on the old moraine of the South Annapurna Glacier where the fairy meadow spread. From the Base one could see the gigantic icy wall of Annapurna I, the magnificent snowy creases of Fluted Peak and the sky over her shoulder giving a glimpse of the head of our mountain, Glacier Dome.

First reconnaissance was made on the route approaching from the South Annapurna Glacier in order to cut our new way to Glacier Dome and if things go well, to scale Fluted Peak (6667 m). However, the difficulty of the knife-edged ridge of

Fluted Peak and the continued bad weather, with six days of intermittent rain and snow fall had a depressing effect on this bold trial.

On September 26 th, an order for moving to take a route to the gorge, the "ordinary" one taken by W. Noyce and J. O. M. Roberts in 1957, which connecting with the West Annapurna Glacier, was issued. Five precious days were spent for opening up the way in this unpleasant gorge because of flooding. On 30 th, we set up Camp I (4220 m) on the crossing point of the West Glacier and the East Glacier in the lapse of two weeks after the establishment of Base Camp. Thanks to the improving weather, Camp 3 (5400 m) was established at the foot of Fluted Peak on 5 th of October.

Desolate ice-falls standing against us with innumerable bottomless crevasses and huge icy buildings did not allow us to climb more than 100 meter-high within one day. Two days after the establishment of Camp 4 (5760 m), a disaster lay in ambush for us. One of the members, H. Sase, who reconnoitered the advance route was assaulted by an ice avalanche in the snow gully above Camp 4. Harder movement for the erection of Camp 5 was carried on while the seriously injured being given treatment.

On 14 th, the final Camp 5 was put on the large shelf of ice. Next morning brought splendid sunshine. Two attacking members, M. Nishimura and Dorje (Sherpa) left the final camp located at the height of 6190 meters. Six hours spent for climbing of steep snow slope required them to make a bivouac on the col (6490 m) of Glacier Dome and Fluted Peak. Machapuchare with the glow of the setting sun gave them a promise for the fine weather of next day.

On 16 th, the weather was expectedly at its best without a speck of cloud in the sky. They began to climb the endless snow flank of Glacier Dome (7255 m) with anticipation and anxiety for success. At 11 : 45 a.m. they stood on a snow plane at last. They had fought for five hours and now their destination was reached. None of them spoke an only word. The icy wall of Annapurna glinted in celebration of our victorious epilogue of Glacier Dome.

#### Acknowledgement

Grateful acknowledgement is made to Col. J. O. M. Roberts, Miss. E. A. Hawley, Reuters in Kathmandu and Mr. T. Kambara for their kindly cooperation shown us in accomplishing the project of our expedition.

# An Expedition to Barun Valley, 1964

By Taiji Endo

The Rikkio University Mountaineering Club went on an expedition to Barun Valley in the eastern Nepal in the pre-monsoon period of 1964. The expedition was consisted of the following members: H. Fukuda (leader), T. Yamanoi (deputy-leader), M. Okura (manager), T. Kishino, T. Endo, M. Bista as the liaison officer and five Sherpas under the sirdar Nami.

In the spring of 1964, we left Japan for India. On completing the clearance in Calcutta, we entered in Nepal by rail with our supplies of about 2 tons. In Dharan, we could stay in the British Camp. There we repacked, arranged the porters and bought some kerosene and some provisions which are necessary for our caravan.

We started from Dharan on March 26 for Sedua with 5 Sherpas and about 70 porters. After ten days' march, we reached Sedua. All porters who came from the lower valleys didn't wish to carry loads beyond there, because there were no villages beyond Sedua and we had to cross the snow-covered pass to the Barun Valley. Therefore we spent a day rearranging porters and getting such food as some potatoes, a couple of goats, five cocks, etc. It took five days from Sedua to the Barun Valley. On April 11 th, our base camp was established on the moraine of the Barun Glacier at the height of about 5150 m. On the following day, the advanced base camp was pitched at a point of 5300 m to scale Baruntse (7220 m) as a result of reconnaissance. We intended to take the route through East Col (Sherpani Col) to Baruntse. And we set up Camp I (5750 m) below the col, Camp II (6100 m) in the snow field at the upper part of Plateau Glacier and Camp III (6600 m) at the shoulder of Baruntse respectively.

On April 29, Yamanoi and Endo left the assault camp early in the morning. We, at first, were climbing slowly soft, but steep snow face. After two hours' forwarding, there was a tremendous crevasse preventing our advance, however, we fortunately could find out a solid snow-bridge which made us to cross easy and then we continued to climb the steep snow face for an hour. But, we had finally to stop, owing to the very steep slope of almost a perpendicular pinnacle. After

all, our first attempt failed.

On May 1, we tried again. We could traverse the pinnacle cutting many big steps. There were two overhanging bumps and a long heavily corniced ridge continued up to the summit of Baruntse. While the weather was turning worse, so we had to descend to the camp in a hurry.

In the evening we discussed to be given up or not and decided we would try again the last attempt to believe some possibilities. But we were too tired to continue without having a rest. So we descended to the base camp to take a rest for a few days and to fetch remaining loads.

On May 9, Yamanoi, Okura, Endo and Ang Tharkey tried the last attempt. When we forwarded a step from the point which we had turned back on May 1, suddenly snow broke and some section of the ridge dropped away down to the Barun Glacier. It was not so difficult, but was very dangerous to keep on climbing. So we gave up to scale Baruntse.

On May 11, our party was divided into three groups. (A) Fukuda, the liaison officer, two Sherpas and some local porters went back to Kathmandu with the main baggages, crossing over West Col, Ambu Lapcha and via Namche Bazar. (B) Yamanoi, Okura and two Sherpas left Camp II to climb Pethangtse (6730 m) for the head of the Barun Glacier. They set up an advanced camp there and on May 16, they could reach the summit of Pethangtse after twelve hours' labour, in spite of bad weather. (C) Kishino, Endo and three Sherpas made a reconnaissance to Pyramid Peak (6837 m) and other 6500 m peak in the upper part of the Plateau Glacier. We set up an advanced camp at the foot of Pyramid Peak. Though we did not succeed to reach the top of Pyramid Peak, we attained to the summit of the 6500 m peak on May 16.

After gathering together at Camp II on May 22, we crossed over the Hongu divide and Ambu Lapcha, and went to Chukung kharka which commands a glorious view of Lhotse, Ama Dablam and other great peaks. On June 15, we arrived in Kathmandu via Namche Bazar.

# The third ascent of Mt. Blackburn and the first ascent of Mt. Regal, Wrangell Mountains, Alaska

By Tai-ichi Kitamura

A scientific and mountaineering expedition to the district of the Nabesna Glacier in Wrangell Mountains, Alaska, was carried out successfully by the Doshisha University Party during the summer in 1964. The purposes of the expedition were, firstly, to make a glaciological study and geophysical observations (geomagnetic and VLF (Very Low Frequency Cosmic Electromagnetic Wave phenomena) observations), and secondly, to scale Mt. Blackburn, the highest peak in Wrangell Mountains, and also try to make an assault on Mt. Regal, an unclimbed peak in the region.

The members were,

Dr. N. Nishihara	(44)	Leader, Professor of Material Science.
Dr. T. Kitamura	(33)	Mountaineering Leader, Associate Professor of Geophysics.
Mr. R. Hasegawa	(26)	Scientific and Climbing member. B. Eng.
Mr. T. Araki	(26)	Scientific member. M. Sc.
Mr. Y. Kawai	(25)	Scientific and Climbing member, student of Doshisha University.
Mr. A. Matsumoto	(22)	Climbing member, student of Doshisha University.
Mr. S. Naito	(21)	Climbing member, student of Doshisha University.

The equipments were transported by air on July 8th, by J. E. Wilson (local pilot) from Gulkana to Base Camp (1300 m) which was established at the middle of the Nabesna Glacier. Four mountaineering members led by Kitamura flew up to A. B. C. I (Advanced Base Camp I) on July 13th.

After short reconnaissance flight we decided to abandon the predetermined route along the North-east ridge leading to the East Peak of Mt. Blackburn, inasmuch as it was too long for us four to tackle, and to follow the same route along the North-west ridge that had been taken by Blumer in 1958.

Thus A. B. C. I was set up at an altitude of 2800 m on the snow field in the lower part of N. W. ridge. The Camp I was completed at an altitude of 3800 m after three days' laborious works. It was named as "the camp of eagles' nestle", meaning the camp site hanging in mid-air. The ice tower which had been described by Blumer was not identified.

After the first party, Kawai and Naito, supported by the second party, Kitamura and Matsumoto, set up Camp II, we had an abrupt change of weather. It blew severely and sometimes with the speed of more than 30 m/s. Fortunately, it did not last so long and we had a fine weather in the next morning. The first assault party which had started from Camp II at 4 a.m. reached the round top of Mt. Blackburn at 8 a.m. The second party which had started from Camp I at 5 a.m. also reached the top at 11 a.m. on the same day. There were no difficulties above Camp II in the technical sense.

All the members were again together at A. B. C. I on July, 20th. The weather was on the wrong side for the following nine days. Snow fell to a depth of 80 cm. The snow condition of A. B. C. I was so foul for a plane to land and take off that we had to wait for Wilson's flight at a snow plateau about 800 m below A. B. C. I.

A. B. C. II was pitched at an altitude of about 3000 m on a small plateau in an unnamed glacier descending from the foot of Mt. Regal. On the morning of July 31st, we had bad weather and managed to set up Camp I only 400 m up from A. B. C. II. As it became warmer and snow fell all day long on Aug. 1st, we had to stay in the camp doing nothing. On the following morning we decided to move forward as the weather was changing better, and Camp II was pitched at an altitude of 3200 m on a snow plateau at the very foot of Mt. Regal.

Although the summit of Regal was covered by a veil of thick clouds on the morning of Aug. 3rd, we started at 6 a.m. as it showed a sign of being dispelled soon. We took the route of West ridge which is the shortest way to the top. The slope on the West ridge was very steep, sometimes more than 60°, but the condition of snow was stable enough to make us free from the danger of avalanche. Paying necessary precautions against many crevasses we continued to climb with a considerably high pace, and reached the summit at 11 a.m.

A piece of paper on which our record is written, was buried under the snow of the summit as a token of our success.

# Mt. St. Elias, 1964

By Kiyohiko Asano

We, Kansai Tokokai, sent an expedition to St. Elias in summer 1964. We got the summit on 17th July after 9 days' struggle. It was the third ascent and one by a new route of St. Elias.

It was only a light expedition, but we regard it as one step to greater mountains such as the Himalayan giants. The Alaskan range has much possibilities for such purpose.

We, K. Asano, T. Nomura, R. Kawamoto, T. Yamane, T. Oda and H. Kawai, arrived at Anchorage on 1st of July after 6 hours flight from Haneda. S. Nishimae and M. Takeda who had left Japan by sea, reached next day with our equipments. S. D. Hamilton, one of our members in Anchorage, had already made the necessary preparations, so we had not so much business except buying food and visiting the office of Civil Air Patrol that is to give us a necessary activity in an emergency case.

On 3rd of July, we left Anchorage for Titina by truck. An excellent bush pilot, Jack Wilson is to transport all the members and gears from the Titina air field to the Columbus Glacier. But, due to the bad weather, we were compelled to stay in Titina for 4 days. Our advance party settled the Base Camp (2100 m) on the plateau of the north side of St. Elias near the Columbus Glacier on 7th, and all the members gathered there on 9th. After reconnoitering several routes, we decided to take the route via Mt. Newton. It was traced one month ago by Sierra Club's party, but they failed halfway.

We began our activities on 10th. We took the tactics carrying all the gears at one time and promoting camp every day. In such a way, we settled Camp 1 (2700 m) on 10th, Camp 2 (3400 m) on 11th, Camp 3 (4000 m) on 12th respectively, and reached the summit of Mt. Newton at noon on 13th. The route was being struggled, but not so difficult except overhanging ice-wall between Camps 1 and 2.

Then we went down to Russell Col which lies in the middle way to St. Elias, but we encountered a steep ice-wall and an extremely narrow ridge at 3 p.m. We took about 5 hours to make a route along this wall and could not but stopping with our tent and equipments just above the ice-wall, for it was dangerous to pass with

heavy loads. So we made up our minds to attack the top from this camp (C 4). It was long and difficult way, but Nishimae and Yamane got the top successfully at 8 p.m. on 17th after 20 hours hard work. They rested 3 or 4 hours in a small snow cave at the altitude of 5000 m, and came back to Camp 4 at 2 p.m. next day. It takes 36 hours in all, and was very hard and dangerous ascent. So we gave up the second attempt in fear of an accident. On 20th, another members climbed the west peak of Janet (3900 m), which had never been climbed. All the members came back safely to the Base Camp on 21st. It was on 28th that we returned to the civilized world-Anchorage.

All of our equipments and foods are 600 kgs in weight and about 8 cubic meters in bulk.

Our expedition was a very happy one, because Dr. Bradford Washburn gave us a favour to offering many data about St. Elias and Civil Air Patrol and other people in Anchorage are very kind, and God gave us a good weather during our mountaineering. We are very eager to express our thanks to all that helped us.

## Mt. Logan, East Ridge, 1964

By Kinichi Murota

Kwansei Gakuin University Canadian (Yukon Territory) Expedition was organized by the Kwansei Gakuin Alpine Club to mark the 75th anniversary of the founding of Kwansei Gakuin. The aims of this party were to climb Mt. Logan by way of the east ridge and to make some scientific investigations in the Yukon Territory. The members were as follows; Prof. Lloyd B. Graham, Chief of Expedition, age 41; Kinichi Murota, Head of climbing party, 24; Hiroo Imai, 22; Kazuo Senda, 23; Toshikatsu Ōnuma, 23; Keisuke Konishi, 21; Takeo Shinmura, 20; Ichirō Mitoda, 20; Hans Gmoser, Guide, 32.

On May 30, 1964 we departed from Edmonton by car and truck for the Kluane Lake, Yukon Territory. On June 3, five members with Mr. Hans Gmoser began to walk along the Slims River from Mile 1060, Alaska Highway, while Dr. Graham, K. Murota and H. Imai with equipments continued to proceed to Alaska by truck. On June 7, K. Murota, H. Imai and all the climbing equipments were transferred to the foot of the east ridge by airplane. On June 10, the walking party reached

there and established the Base Camp (7300 ft.) On June 12, we cached loads at the height of 10,000 ft. Getting out of the tent in a hurry at the unexpected arrival of an airplane, Mr. Gmoser slipped down in a depression outside of the entrance of the tent, strained severely a ligament in his left knee and was unable to walk. He was evacuated by the same airplane to the Kluane Lake. Even though we were deprived unfortunately of Mr. Gmoser's expert services, it was decided to continue our climbing.

We set up four advanced camps, climbing many sharp knife-edges and steep ice-falls. We used 300-meter-handlines between Camp 1 and Camp 3. The altitudes of the respective camps were 10,800 ft., 12,000 ft., 14,400 ft., and 16,700 ft. On June 29, we established Camp 4 on the Ice-Dome. On July 3, we attacked the East Peak but failed at 18,000 ft. on account of heavy fog. In the evening, H. Imai and three members attacked it again, but they were forced to retreat from 19,200 ft. owing to bad weather. At night, the mercury registered  $-23^{\circ}\text{C}$ .

On July 4, all the members reached the summit of East Peak. We were in such a great want of food because of many delays caused by bad weather that we could not try the ascent of the Central Peak at that time. We decided to return to the Base Camp to replenish food and re-group for a new attempt on the Central Peak. It took us no less than three days to descend to the Base Camp because of hazardous conditions. On July 11, H. Imai, K. Senda and I. Mitoda left the Base Camp for the Kluane Lake to restore communication with Dr. Graham and to make archaeological investigations near Burwash Landing on the Kluane Lake.

On July 14, K. Murota and the other three started again from the Base Camp to ascend the Central Peak via the East Peak. The four set up Camp 4 on July 16. On July 17, the four started to ascend the peak, but we did not complete the attack on account of mist. We, however, reconnoitred a new route which would enable a successful climb. On July 18, K. Murota, T. Onuma, K. Konishi and T. Shinmura left Camp 4 and, after climbing for 8 hours, succeeded in making a new ascent of Mt. Logan by way of the east ridge. We returned to the Base Camp on July 20. On July 27, we left the Base Camp for the Kluane Lake. We returned to Japan early in September.

# Mt. Logan Expedition, 1964

By Iwao Kawasaki

In 1964, the Gakushuin Alpine Club sent an expedition party headed by I. Kawasaki to Mt. Logan (6050 m) located in St. Elias Range, Yukon Territory in Canada. The party consisted of eight members, five of whom were students. On July 5th, we all members got together at Sitka, Alaska State, with about one ton of foods and equipments for climbing and staying in Alaska. After few days' staying there, we left for Gulkana, from where we flied to the Ogilvie Glacier by a chartered plane and set up the Base Camp on the Glacier at the altitude of 2970 m on July 16. Without any troubles, Camp II was set up just below the King Col on July 21st. First of all, our plan was to take the same route that the Canadian party in 1925 had taken.

After seven times reconnaissance, we had to give up this route for enormous bottomless crevasses prevented us from going ahead. Even though we understood that the latter part of July was too late season to climb in Alaskan ranges from every point of view—snow condition, weather and so on, the snow condition was very much worse than our expectations.

As a result in reconsideration of our plan, we reached the conclusion that only one way to our success was to take the ever-untraced route of the West Ridge. After passing over several snow bridges, setting up Camp III at the altitude of 4300 m, we traced the steep slope of 700 m in height to the West Ridge in danger of avalanche and falling huge ice blocks. On July 28, the four got into Camp IV (5100 m) in the lowest point of summit plateau.

The attack to the summit was tried by me and other three members on July 30 and succeeded in the ascent of the West Peak of Mt. Logan, but we were too tired to proceed to the Central Peak. This attack was long way in such a height from Camp IV to the West Peak, some thirteen kilometers in distance, and it took some nineteen hours.

Second attack was made on August 2nd by the new members consisted of three and supported by other two members. After spending one night on the ridge just below the West Peak, they got to the Central Peak (6050 m) on August 3rd.

All of us got back to the Base Camp on August 7. On return trip from the Base

Camp to Gulkana, five of the party walked down along the Logan Glacier and got to the air strip located at the junction of the Titina and the Logan Glaciers, from where we fled to Gulkana.

## Altar, 1964

By Junji Miyano

The Waseda University Second Ecuadorian Andes Expedition (W. U. E. A. E.-1964) was planned and sent by the Tomon Mountain Society and the Waseda Mountain Society, in order to ascend Mt. Altar and Mt. Cayambe, and to make the meteorological observation and the geographical measurement in the Ecuadorian Andes. Members of the party were as follows; Junji Miyano, the leader, Takeo Tsunoda, Susumu Murata, Tadashi Hayakawa, Kazutaka Aoki, Keinosuke Matsumura and Nobuyoshi Kobayashi.

The Ecuadorian Andes are made up of two chains of mountains—Cordillera Oriental, the east side, and Cordillera Occidental, the west side. Among these chains there are several lofty mountains, such as Chimborazo (6267 m), Cotopaxi (5897 m), Cayambe (5790 m), Antisana (5704 m), Altar (5319 m), Illiniza (5265 m), Sangay (5230 m) and Tungurahua (5016 m).

Altar is an extinct volcano, situated in the central part of Cordillera Oriental and in the source region of the Pastaza river, a branch of the great Amazon. It is the fifth mountain in Ecuador, but it is said to be the most difficult. It consists of many sheer peaks and these peaks extend just like the horseshoe form, the diameter of that is about 2.5 kilometers.

We left Tokyo on 29th of April by s/s "Puna" and arrived at Guayaquil, a main port of Ecuador, on 16th of May. Then, we went to Riobamba and prepared for climbing Mt. Altar. On 25th of May, we started from Riobamba with two medium-size trucks, and passing Rio Tarau, reached Hacienda, the base house. There, we employed several Indians, horses and asses for the transportation of our equipments and provisions.

The base camp was constructed on the moist grassy plain in the bosom of Altar-range, on 27th of May. The altitude of B. C. is about 3900 m above the sea-level. After that it was necessary for us to acclimatize and to survey the route

for Obispo, the main peak. On 30th of May, we began to climb via the western ridge. The first camp was pitched on 1st of June at the side of the ridge, 4485 m in height. It had been very bad weather, so it was rather difficult for us to find out the route for the second camp. But we could find it out at last, and on 7th of June, the second camp (4820 m) was pitched on the great glacier, situated between the southern ridge and the big snow ridge being derived from Obispo. From here we could look up to Obispo like a cone soaring into the sky.

As a result of the reconnaissance, it was decided that the climbing route was not through the western ridge, but through the snow slope being directly upward to Obispo. On 8th and 10th of June, two parties attacked the peak, but both failed unfortunately. The failure suggested a great deal of instructions about gaining the summit. We had prepared for the secure system for the attack. However, we had very hard snowstorms for 10 days. We were compelled to come down to the base camp on 20th of June for rebuilding the system.

On 24th of June, we began to climb up again. On the following day T. Tsunoda and T. Hayakawa went to the second camp.

On 28th of June, the two members left the second camp at 6.00 in the morning. They climbed up the steep gully attached with much snow and got to the snow slope. They walked up across the groups of big crevasses. At last they reached the base point of the rocky wall, after climbing the very precipitous glacier which is situated between Obispo and the Gendarme.

There were several overhangs in this vertical wall. The rock was very bad and fragile. Snow covering in some places on the wall, was un-balanced. But they clambered step by step. At 3.00 in the afternoon, they stood on the top of Obispo (5320 m), the highest point in Altar-group. Rejoicing at the victory, they waved the both flags of Japan and Ecuador, and the pennants of Waseda University and Nuevos Horizontes— the national alpine club of Ecuador. Finally they buried a can contained with the Japanese flag signed by all members of the expedition, and then began to descend carefully.

After the climbing of Mt. Altar, we succeeded in gaining three peaks of Mt. Cayambe.

We left Ecuador on 22nd of August and arrived at Yokohama on 12th of September 1964.

# ヒマラヤ登山年譜(続3)

(1959~1962)

田中栄蔵・馬場勝嘉 共編

## 凡 例

1. 本年譜は『山岳』第58年掲載の同名(続)(1956~1958)に続く。若干の記載洩れがあるが、御示教賜りたい。
2. 配列と記載の順序:年代,遠征期間,隊長名(または隊名),所属国,地域と目標の山岳の登山・探査の範囲,到達地点,月日,人名,参照文献抄を付した。高度は公式と思われるものを採録した。
3. 文献の略号は既往と同じであるが,下記の通り。

AAJ=The American Alpine Journal (AAC)

AJ=The Alpine Journal (AC)

Alpen=Die Alpen (SAC) Q=Quartal, B=Bulletin.

AGHM=Annale Groupe de Haute Montagne.

DAVJ=Jahrbuch des Deutschen Alpenverein (DAV)

DP=G.O. Dyhrenfurth: Der dritte Pol, 1961.

GJ= The Geographical Journal (RGS)

HJ=The Himalayan Journal (HC)

HMI=The Himalayan Mountaineering Institute. Half Yearly Newsletter=NL

J=Journal (SSAF)

MA=La Montagne et Alpinisme (CAF)

MW=BdW=The Mountain World (SSAF)

ÖAVJ=Jahrbuch des Österreichischen Alpenverein (ÖAV)

ÖAZ=Österreichische Alpenzeitung (ÖAK)

RM=Rivista Mensile(CAI)

## 1959

- 3~6. 村木潤次郎 Nepal. Manaslu 山系の南端 Himalchuli を目指し, Shurang 谷から Lidanda 乗起に出, 東尾根を登り, 前衛峯の大氷壁に5月21日石坂・松田が奮闘し7400mに達した。

村木:ヒマルチュリ, 山岳55年1~32, AAJ 34. 70~71, RM 79. 288~290, 石坂昭二郎:ヒマルチュリ日記(1959)

- 3~5. Jean Franco (FFM, CAF) Nepal. Yamatari 氷河に入り, Le Rognon 支氷河から Jannu 南稜に達し,これを北上しC6を設け,5月12日 G Magnone, R. Paragot は 7400 m に達し引返した。  
MA 23. 72~73, 108~121, AGHM 1959. 2~7.
- 4~5. Fritz Moravec (ÖHDE) Nepal. Mayandi Khola から同名の氷河をつめ, Dhaulagiri の北東コルから北東突起を進んだが, C2 付近のクレバスで Heinrich Roiss を失った。嵐に妨げられながらも C6を設け,5月25日 Karl Prein と Pasang Dawa Lama は 7800 m に達したが, 天候悪く成功しなかった。  
F.Moravec: Dhaulagiri. Berg ohne Gnade, DAVJ 85. 99~108, AJ 300. 11~17, MW 1960~61. 126~130, HJ 22. 31~37, ÖAZ 1307. 151~154.
- 4~6. J.H. Emlyn Jones (British Exp.) Nepal. Everest の南 Ama Dablam の困難な北東稜を攻撃し, C5まで進め,5月21日早朝 G. Fraser と M. Harris がC5をたつたまま,遂に帰らなかった。到達地点は 6600 m 以上と考えられる。  
AJ 300. 1~10, HJ 22. 13~21, Alpen 36: 3. 208~214, AGHM '59. 8~13.
- 4~8. Dr. Keith Warburton (British-Germany-Pakistan) Karakorum. Batura-Muztagh の主峰 Hunza Kunji I (7785 m) の氷瀑にC3を設け,6月28日隊長ほか4名が出発したまま帰らない。残員はスイス隊やドイツ隊と捜索したが, C3に達せられず,8月15日帰国の途につく。  
AJ 300. 48~52, MW 1960~61. 87~107.
- 4~5. M.S. Kohli (India Exp.) Kumaon. 海軍々人隊。Martoli から Lwanl Gadm の Narspanpati に入り,北面から東北稜のC3をへて,5月25日 Kohli, K. P. Sharma が Nanda Kot (6861 m) の第2登に成功した。帰路は立教隊と同じく Trail Pass から Pindari 氷河に出た。  
HJ 23. 21~29, AAJ 34. 160, HMI. NL. No. 6. Table.
- 5~9. Dr. Hans-Jochen Schneider (German-Pakistan K.E.) Karakorum. Minapin より同名の氷河をつめ,西稜から Diran (7266 m) (別名ミナピン)を再度攻撃し,頂上直下 200 m に迫ったが,天候悪く成功しなかった。次いで Kukuar 氷河に入り, Sat Maro 氷河合流点から 5900 m 峯に7月26日登頂。8月は Warburton 隊の捜索に加わり,中旬 Karambar 氷河を探り, Ishkuman 河の Phakora から Naltar Gah へ氷河峠 (4500 m) を越し,峠の南の

- 4900 m 峯に登頂。  
MW 1960~61. 108~125, DAVJ 85. 117~129.
- 5~6. Jagjit Singh  
(Indian Army) Garhwal. Jumna 川と Bhagirati 川との分水嶺上の Banderpunch I (6387 m) (通称 Black Peak) に同名の氷河をつめ, 6月7日 A隊が第2登, 翌8日 B隊が第3登に成功した。  
AAJ 34. 158~159.  
[註] 第1登 1955年6月7日. J.T.M. Gibson とシエルバ2名。
- 5~11. Herbert Tichy Chitral-Swat-Nepal. Chitral から Kafiristan で 5000 m の山に登り, Chitral から Swat にぬけ, Kohistan から Indus に出る。さらに Nepal の Langtang Himal に出て Langshisa Ri の2座に登る。  
ÖAZ 1309. 21~22.
- 6~7. Harald Biller  
(Nürnberger  
Hindukusch-  
Kundfahrt) Hindu-Kush. Kabul の北の Panjshir 谷に入り 6月21日 Dashtribar (5250 m), 同23日 Galamastan (5304 m) に初登頂。7月27日には Mir Samir (6059 m) に登った。この東北稜は岩と氷の困難な登攀であった。  
DAVJ 85. 130~136, AAJ 34. 162, ÖAZ 1331, 143.
- 6~7. Raymond Lambert Karakorum. 南方 Khiang 氷河から Disteghil Sar にと (スイス・仏・伊) りつき, 南東稜に C3 を進め, 7100 m に達したが, 天候悪化し雪崩の危険のため引き返した。  
AAJ 34. 161.
- 6~7. Guido Monzino Karakorum. Hispar 氷河に入り支流 Khani Basa 氷河 (spedizione G.M. '59) から Kanjut Sar (7760 m) の南東稜に取付き, 7月19日 C6 から Camilo Pélissier と Jean Bich が頂上に向った。Bich が凍傷・疲労で落伍し前者のみで単独初登頂した。  
G. Monzino: Kanjut Sar, RM 79. 77~100, 173~175, J II : 9. 296~301.
- 6~8. H.R.A. Streather Karakorum. Shigar 谷から Chogo Lungma 氷河と (Army Mountain- Kero Lungma 氷河を探り, 次いで Hispar Wall 上の neering Associa- Sugar Loaf (5639 m), Wedge Peak (5578 m), Engineer tion Exp: British- Peak (5794 m) などに登頂。Alchori 隊は Gloster Peak Pakistan) (5882 m) に登頂。Ganchen に向った隊は成功しなかつた。Chogo Lungma 氷河から 8月2日 A.J. Imrie と R. J. Akhter は Malubiting East (6970 m) に初登頂。隊長

と G. F. Chapman は Haramosh La を越して Gilgit に  
出た。

AJ 300. 37~47, AAJ 35. 413~414.

7~8. Fosco Maraini  
(CAI. sezione  
romana)

Hindu-Kush. Chitral から Washich をへて, Ziwar Gol  
源頭の Gram Shal に基地を設け, Niroghi 氷河に入り種  
々偵察の後支氷河 (Gh. Roma) から 6792 m 峯に C 5 を  
おき, その南西稜に C 6 を設営。8 月 24 日 Franco Alletto,  
Paolo Consiglio (C 6 より), Giancarlo Castelli, Carlo  
Alberto Pinelli (C 5 より) は途中で合流して Saraghrar  
(7349 m) に初登頂した。

F. Maraini: Paropàmiso, AJ 301. 151~157, RM 79.  
141~154, Pirelli 12: 6. 58~65, 山岳 58 年 133~140.

8~11. 加藤喜一郎  
(日本: 慶応大学・  
登高会)

Nepal. Kali Gandaki を溯り Mukutgaon に基地をお  
き, 2 隊に分れ 1 隊は East Churen Khola 等を探索した。  
1 隊の宮下秀樹と石島襄二は Barbung Khola の Mukut-  
gaon の北の Kangrewa (5250 m) に 10 月 13 日初登した。  
次いで北面から Churen Khola, Chorten Ridge など  
Dhaulagiri II の北面を探索したが, その面には可能性の  
ある登路が見出せなかった。帰路は Marsyandi を下り Musi  
Khola から Himalchuli を偵察した。

山岳 55 年 33~52, AAJ 34. 67~68, RM 79. 290~  
292. 登高行 XVI. 22~42.

9~10. Claude Kogan  
(International  
Women's Exp.)

Nepal. 女性のみで Cho Oyu の第 3 登を目指し, 初登  
のルートに従い 10 月 1 日 C 4 (7100 m) を設け Kogan,  
Mlle Claudine van der Stratten, Sherpa Ang Norbu が  
入ったが, 数日嵐が続き, C 4 は雪崩に洗われていたのを  
11 日に登った Dorothy Gravina と Jeanne Franco が発  
見した。

MA 25. 174, 26. 193~195, AAJ 34. 156.

9~11. 加藤秀木  
(日本: 福岡大  
学ヒマラヤ探査  
隊)

Nepal. Rolwaling Khola の Beding に入り, Hadengi  
La をこし Menlung Pokhari を中心に, Menlungtse,  
Gaurisankar を偵察し, Hakan, Pangbuk に試登した。途  
中盗賊にあう。Tesi Lapcha, Menlung La をこえ Khum-  
jung に達し, Dudh Kosi を溯り Ngojumba 氷河上から  
Gyachung Kang を望見した。

山岳 55 年 95~117, AAJ 34. 71~72, RM 79. 292~

294.

- 9~11. 山田 哲雄  
(日本：飯田山岳  
会ランタン・ヒ  
マール遠征隊)

Nepal. Trisuli Gandaki を溯り, Langtang Khola に入り, Lirung 氷河端に BC をもうけ, Langtang Lirung を偵察したが, 氷河が悪いため目標を変更し, BC 東北の Shalbachum (6700 m) を攻撃し, 10月25日 寺畑哲朗, 北城節雄, Pasang Temba, Dawa Thondup が西南稜から初登頂した。後 Tsunga Pu などをさぐった。

山岳 55年 70~95, 岳人. No. 141~142号, AAJ 34. 69, RM 79. 294~295.

[註] Shalbachum は P. Aufschnaiter の地図によれば Phrul Rangjen-Ri 6918 m に相当する。Alpen '59. s. 197.

10. S.N. Goyal  
(Indian Air Force  
Exp.)

Garhwal. Joshimath から Mana 村をへて Alakhananda に入り, Chowkhamba (Chaukhamba) (7138 m) と Neelakantha を同時攻撃した。前者は10月13日に出発し, C 4 をたて10月17日, 隊長 Chowdhury, Chaturvedi と Pasang Dawa Lama, Phurba Lobsang, Lhakpa Gyalbo の2組で北面から東稜を登り第2登に成功した。後者は Satopanth 氷河から北面に C 4 をのぼし, V. Raina と Sherpa Pasang が 6100 m に達したが, 嵐で退却した。

HJ 23. 100~109.

- 9~11. John S. Humphreys  
(A.H.E)

Nepal. Nautanwa から Kali Gandaki にそい Dhaulagiri II の北, Mukut に基地をもうけ, 西面から10月18日隊長 F. Dunn, J. Noxon は “Tongu Peak” (6250 m) に初登頂した。続いて最高峯 Hangde (6600 m) へ同じく西側から, 10月21日 Dunn, Noxon, C. Cronk が嵐のなかを 6584 m まで達した。次いで Barbung Khola を北上し, Tsarka に近い Eastern Kanjiroba Himal に基地を移し, “Tekochen Peak” (5570 m) 10/18, Ama Tsumen (5600 m) 11/3, Tekochen La の北峯 (5600 m) 11/4 などに初登頂した。なおこの隊は地質・測量などを行っているので, その成果が期待される。

AAJ 35. 249~262, 34. 154~155, 155~156.

- 10~3 ('60) 小川 鼎三

Nepal. Arun 川にそって12月17日 Namche Bazar に近く基地をもうけ, Langmoche 河, Bhote Kosi 上流, Imja Khola 源頭, Khumbu 氷河など, 広範囲にわたり雪男 (Yeti) をさがしたが発見できなかった。しかし, この

地方に越冬した記録としては貴重である。

山岳 55年 118~142, 林 寿郎: 雪男—ヒマラヤ動物記, AAJ 35. 279.

\* 6~7 史占春

Pamir (Sinkiang). 7月7日中国人33人(内女性8人=チベット族4, 漢族4)が Muztagh Ata (7433 m) に第2登した。

Alpen 36 J 2 Q. 156~159.

### 1960

3~5. 史占春  
(中国)

Tibet. (Chomolungma) 総勢 214 名で Everest 北方ルート—Rongbuk—North Col (C 4) から東北稜を進み, 5月2日 8100 m の幕営から Second Step を乗越し偵察し下山, 5月24日王富洲, 貢布, 屈銀華の3名が 8500 m の幕営から出発し, 5月25日北京時間 04.20 分 Everest に登頂(第4登, 北側からの登攀)。ただし信憑性を云々されている。

AJ 302. 28~41, 313~315, MA 31. 2~9, HJ 23. 151~168, AAJ 35. 408~409, RM 81. 26~32. 人民中国 1960. 8. (No. 88) 42~46, Alpen 39 J. 171~172, 中国の登山運動。

3~5. Brigadier Gyan  
Singh  
(First Indian  
Everest Exp.)

Nepal. Everest 南方ルートをとり高度馴化の後, Khumbu 氷河に 19 名が集結。Lhotse 氷河から Geneva Spur をへて South Col に達し, 5月24日 Narindar Kumar, Nawang Gombu, Sonam Gyatso が C 7 (8410 m) に入り, 翌 25 日南稜を登り 8626 m に達したが, 強風のため引返した。

G. Singh: Lure of Everest, AJ 302. 15~27, HJ 22. 3~12, AAJ 35. 409, MW 1962/63. 50~59.

3~6. Max Eiselin  
(Schweizerische  
Himalaya-Exp.  
1960)

Nepal. Dhaulagiri (8222 m) 登山にヒマラヤで初めて軽飛行機を用い, Dapa Col と北東コル (5750 m) に着陸輸送にほぼ成功。North East Spur に取付き, 5月4日 C 5 (7400 m) から攻撃したが天候悪化で引返し, N.E. Spur と South East Ridge の接合点下に C 6 (7800 m) を設け, 5月13日 Kurt Diemberger, Peter Diener, Ernst Forrer, Albin Schelbert, Nyima Dorji, Nawan Dorji が初登頂に成功した。5月23日, C 5 から Michel Vaucher と Hugo Weber が第2登。

M. Eiselin: Erfolg am Dhaulagiri. (邦訳: 横川文雄。英訳あり), Alpen 37: 1. 42~49, MW 1960~61. 131~140, HJ 22. 38~50, MA 30. 302~308, AGHM '60. 9~11, AAJ 35. 231~248, ÖAZ 1316~17. 64~75.

- 3~6. J.O.M. Roberts Nepal. Annapurna II を北側から登ろうと, Marsyandi (British-Indian-Nepalese Services' Him. Exp.) 河を溯り, Annapurna IV の北西稜上の Dome 支稜から A IV を越し, 稜線に C 6 (7200 m) をもうけ, 5月17日 C 5 (7270 m) をたち C 6 をへて Richard Grant, Chris Bonington, Ang Nyima が Annapurna II (7937 m) に初登頂した。

R. H. Grant: Annapurna II, AJ 301. 143~150, HJ 22. 22~30, AAJ 35. 409~410.

- 3~7. 伊藤久行 Nepal. Jugal Himal の Big White Peak (7083 m) を (全日本山岳連盟 ヒマラヤ遠征隊) 目指して Phurbi Chyachumbu 氷河に入り, 主峯をねらう途上5月7日石原国利, 加藤幸彦, Pasan Phutar が, 主稜と中央稜交点の Madia Peak (6800 m) に初登頂。5月10日 C 5 撤収の途次, 春田金徳, 稲垣恒夫, Dawa Thondup は Gyaltzen Peak (6700 m) に第2登。その後中央稜から主峯にルートを求めたが, 天候悪化のため断念した。

全日本山岳連盟 (東海地区山岳連盟): 1960年ジュガー・ヒマール登山隊報告書 (1964-2月刊), 山岳56年94~107, 岳人149号17~21, AAJ 35. 280~281.

- 4~5. 津田康祐 Nepal (West). Nepal と India の境のカリ河を溯り, (同志社大学ヒマラヤ遠征隊) Api 北面の Api 氷河を経て, Api 北西稜上の C 4 (6550 m) から, 5月10日平林克敏, Gyaltzen Norbu が Api (7132 m) に初登頂。翌11日津田康祐, 寺阪元雄が第2登した。

山岳56年63~93, 江上康: アピ, 岳人153, 154号, J. IV: 2. 99~104, RM 81. 289~294, AAJ 35. 279~280.

- 4~6. 山田二郎 Nepal. Pokhara から東へ進み, Marsyandi 河の支流 (慶応大学ヒマラヤ遠征隊) Musi Khola をつめ, 西面から Himalchuli (7864 m) に挑んだ。東尾根から West Peak の西稜ぞいに登り, North Peak との間から廻込み C 6 (7300 m) を設け, 5月24日田辺寿, 原田雅弘が初登頂。翌25日宮下秀樹, 中沢公正

が第2登した。

山田二郎：登頂ヒマルチュリ，山岳56年1~42，AAJ 35. 275~277，登高行 XVI号 全頁。

4~6. P.J. Wallace  
(British)

Nepal. Ganesh Himal の Chilime Khola から Sanjen 氷河に入り，1955年 R. Lambert 隊のルートを通り，5月30日山稜上 6500m に幕営し，翌日東峰，大きな雪のドーム (Ca. 7390m) に登頂した。主峯には達せられなかった。

HJ 22. 113~117, AAJ 35. 410.

4~6. Stane Kersnik  
(Yugoslavian  
Him. Exp.)

Garhwal. Kali Ganga を溯り，Baraltholi (5270m) に登り高度馴化をし，Trisul 南面の Bidalgwar 氷河に幕営を進め，6月5日主稜から Ante Mahkota, Ales Kunaver が Trisul II (6690m) に登頂，帰途6月7日上記2名に隊長を加えたパーティは，Trisul III (6170m) に登頂。なお Baroltoli (5275m) に第2登した。

HJ 22. 70~74, AAJ 35. 413.

5~6. Wolfgang Stefan  
(Oesterr. Karakorum-Exp., 1960)

Karakorum. Hispar 氷河から Kunyang 氷河に入り，Disteghil Sar (7885m) の南西面に取付き，6月8日西稜上の C3 に達し，6月9日 Gunther Stärker と Diether Marchart が初登頂した。

AJ 302. 1~8. HJ 22. 120~133, ÖAZ 1317. 34~63, AAJ 35. 414, MW 1962/63. 60~69.

5~6. Gurdial Singh  
(Indian Exp.)

Garhwal. Rishi Ganga をへて Southern Rishi 氷河に入り，Devistan I (6678m) の 5500m まで試登した。

HJ 23. 138~147.

5~7. George I. Bell  
(American-  
Pakistan K-Exp.)

Karakorum. Hush 谷に入り Serac 氷河に登り，Dome を C3 (前進基地) とした。南東フェースに C6 を設け Masherbrum の登頂を試みたが失敗。さらに C7 を出し，7月6日隊長と William Unsoeld が Masherbrum (7821m) に初登頂。続いて8日 Nicholas B. Clinch と Jawed Akhter が第2登した。9日には Thomas McCormack, Abdul Rahim が Serac Peak (Ca. 6706m) に初登頂した。米人7名，パキスタン人3名。

AAJ 35. 209~229, HJ 22. 51~69, AGHM 1960. 2~8, AJ 304. 9~25, Sierra Club Bulletin 45: 9. 1~23, Harvard Mountaineering, No. 15, MW 1962/63. 40

~49.

5~8. P.J. Stephenson  
(Saltoro Exp.)

Karakorum. 東部 Karakorum の Saltoro 河の Bila-fond 氷河に入り, Grachma Lungba に進み, K 12 (7468 m) の西面を偵察。北西コル 5940 m から K 12 を試みたが馴化不足で退却し, 再度の攻撃は 7 月 8 日隊長が南西壁の 7010 m に達した。この間に 2 隊員は Chumik 氷河の源頭まで探った。帰路 Goma から Gyong 氷河に入り, 東端の Gyong La (5700 m) に達した。

AJ 302. 147~150, HJ 23. 71~79, AAJ 35. 414~416.

6~7. William  
D. Hackett  
(German-Am.  
Karakorum Exp.)

Karakorum. 米独バ合同隊で K 2 を目指し, イタリア隊と同じアブルッチ稜を辿り, 7 月 9 日 C 6 (6970 m) を設け, 13 日 Ludwig Greissl, Günter Jahr が約 7260 m に達した。後は嵐のため再起できなかった。

AAJ 35. 263~267, 268~274, Der Bergkamerad 1959/60. 456~457, 825~826.

6~9. 酒戸 弥二郎  
(AACK)

Hindu Kush. 上部 Oxus 河の Ishkashim をへて Ab-i-Panja 川から Qazi Deh 谷に入り, Mandalaz 谷合流点に BC をおく。Qazi Deh 氷河を登りつめ, 南稜の 5900 m のコルから北上し, 稜線上 6300 m に C 4 を設け, 8 月 17 日酒井敏明, 岩坪五郎が Noshaq (7490 m) に初登頂した。

京都大学学士山岳会: ノシヤック登頂, 山岳 56 年 43~62, HJ 22. 153~157, AAJ 35. 277~278, RM 80. 280~281, Der Bergkamerad 1960/61. 466, K. Saysse-To-biczka: Polskie Wyprawy Egzotyczne. 353~362.

7~8. Michael Anderl  
(DEPAK)

Karakorum. Saltoro 谷に入り Kondus 氷河を溯り Conway Saddle 下をトラバースして, 8 月 10 日 Sia La (5700 m) に立つ。さらに C 3 (6450 m) をもうけ, 8 月 13 日隊長と Ernst Senn は Ca. 7150 m に初登頂し, この峯を隊の略称から Depak Peak と名付けた。それから Silver Throne (Ca. 6900 m) に登頂した。

AAJ 35. 416, Der Bergkamerad 1959/60. 715~716, 824.

7~8. Wilfrid Noyce  
(Anglo-American

Karakorum. Hispar 氷河の入口 Nagar から Gharesa 氷河の源頭に進み, Trivor と Momhil Sar との間の北西

- Exp.) コルに達し, Trivor (7720 m) の北西稜に C 4 (7070 m) をおき, 8月17日隊長と Jack Sadler が Trivor に初登頂した。  
W. Noyce : To the Unknown Mountain (邦訳 : 野間寛二郎), AJ 302. 1~14, MW 1960~61. 141~156, HJ 22. 134~140, AAJ 35. 416.
- 8~9. Joyce Dunsheath Hindu-Kush. Afghan 中部の Nuristan の Panjshir 河 (Abinger (Abinger 河を溯り, Mir Samir (6059 m) の南東稜の 5000 m に達したが天候悪く中止した。 Afghanistan Exp.) たが天候悪く中止した。  
AJ 302. 139~140, Dunsheath : Afghan Quest.
- 8~10. Dietrich Hasse Hindu-Kush. Berlin から往復バスで遠征し, Central (Deutschen Hindu-Kush に入った。Kabul から Panjshir 溪谷を北上 Hindukusch Kundfahrt, 1960, 源流の Sachi 河上流の Koh-i-Bandakor (6660 m) を攻撃 Sect. Berlin, した。馴化不足をととのえ, 9月22日 Hasse, Wolfgang DAV) von Hanseemann, Siegbert Heine, Hannes Winkler が南西稜から初登頂した。帰路には Anjuman 部落から東の Pagar 溪谷に入り (10月上旬), 5000 m 級5座に初登頂した。また Warmamo 氷河でも2座に登頂した。  
DAVJ 86. 150~157, Mitteilungen des DAV. 13 : 1. 7~9, "Berg und Mensch" (Hrgh. T. Hiebeler) 140~148, "Die Erde" 92 : 1. 59~70, Der Bergkamerad Nr. 12. 407~411, ÖAZ 1331. 143~145, 159, AAJ 35. 418, Bergsteiger 1960/61. 146~153.
- 7~10. Boleslawa Hindu Kush. 上記 AACK 隊と同じく Qazi Deh 谷に Chwascinski 入り, そのルートを追うようにして, 8月27日 Krzysztof (First Poland Berbeka, Stanislaw Biel, Jerzy Krajski, Stanislaw Kulin- Hindu-Kush ski, Jan Mostowski, Zbigniew Rubinowski, Stanislaw Exp.) Zierhoffer が Noshaq に第2登した。9月上旬付近の 6000 m 前後の3座に登頂した。  
AJ 303. 235~249, RM 80. 282~289, AAJ 35. 418~9, K. SAYSSE-Tobiczyka : Polskie Wyprawy Egzotyczne. (W. Skalach i Lodach Swiata, II) 353~362, "Taternik" 38 : Nr 2~4. 87~171.
9. Dr. W. Hamberger. Kulu. ドイツから自動車で Manali につき Chandra 河 (German) から支流の Karcho Nala に入り, 9月16日隊長, Dr.

Rudi Weber, 現地人 Baldor と C.B. 12 (6187 m) に登頂。Rohtang Pass で Deo Tibba 隊とあう。

HJ 24. 81~85.

- 9~11. 細川沙多子  
(インド・パン  
ジャブ婦人親善  
隊)

Punjab. Manali から Malana 河を経て Jagatsukh 谷の Seri に基地をもうけ, Chandar tal から Duhangen Pass をへて Malana 雪原に出て, 10月7日浜中慶子, 岡部みち子, Gyaltzen Norbu, Dawa Thondup が Deo Tibba (6001 m) に第4登した。なお Malana 雪原中の 4660 m 峯と, 基地南方の 4800 m 峯 (チャコ・ピークと命名) にも登頂した。

細川沙多子: 女六人ヒマラヤを行く, 山岳 56年 108~125, AAJ 35. 281~282, H.C-Newsletter 18.

- 9~12. Sir Edmund  
Hillary  
(Himalayan  
Scientific and  
Mountaineering  
Exp. 1960-61)

Nepal. 科学者, 特殊技能者, 登山家を網羅した総勢 21 名の大遠征隊である。ここでは雪男探査は省略し, 登山を主とする。Namche Bazar から Mingbo に BC をおき, Rakpa 氷河を溯り, Ama Dablam の南西下の 5723 m に Silver Hut, 5301 m に Green Hut を設置し, 12月から翌年4月まで滞在し, 越冬をしながら高所生理学の研究などを行った。11月18日 Dr. J.S. Milledge と Sherpa が南東稜から Puma Dablam (6395 m) に初登頂した。数日後第2登も行われた。なお 10~11月に近辺などの3峯に登頂した。

Sir Edmund Hillary and Desmond Doig: High in the Thin Cold Air. (仏・独訳あり), AJ 303. 343~364, HJ 22. 141~145, 23. 30~46, AAJ 35. 411~412, 36. 69~98, NGM. 122: 4 (Oct. '62) 502~547, MW 1962/63. 70~91.

- 9~10. H.V.R. Iengar

Sikkim. Gantok から Lachen-chu に入り, Kangchen-jau の北東面から試登し, East Col から東稜の 6250 m に達した。帰路は Mome Samdong をへて Lachung-chu を下った。

HJ 22. 75~83.

10. Sukumar Roy  
(Calcutta Exp.)

Garhwal. 隊長, Dilip Banerjee, Sherpa Ang Tsering, Pemba Norbu, Ajeeba, Tashi は10月22日 Nanda Ghunti (6309 m) に第2登した。

HMI. Newsletter. No. 4. 8, No. 6. Table.

10. E.J.E. Mills Hindu-Kush. Swat and Indus Kohistan に入り Falak Sar (5918 m) を西、東面から偵察した。  
AJ 304. 42~53.
- 10~11. Robert Sandoz Nepal. Rolwaling 溪谷に入り、Ripimu 氷河から Chobtse の北面と南面を偵察したが、落水が危険なため目標を Pigferago (6624 m) に変更した。同峯の北面から西稜に取りつき先発隊は引返したが、後発隊の Alain Barbezat と Sherpa Nawang Dorje は10月21日登頂した。その後 Tolam Bau 氷河に入り、10月30日 Pierre Girod と隊長は南稜ぞいに Pimu (6350 m) に第2登頂。11月1日隊長はシェルパ Nima Tensing をつれ、さらに北上して西面から Singkar (6290 m) に登った。Barbezat 夫妻は Tesi Lapcha の南の Parchamo (6322 m) の第2登を行った。  
MA 35. 130~136, AGHM 1960. 12~17, AAJ 35. 410.
- \* 5~6. 白 進 考 青海(積石山) 中国西部。西寧から旧青海州に入り、Kongmar 氷河を登り頂上直下(600 m)の断崖にはばまれ、南東面をさぐり、さらに Walmar 氷河を辿って北東面から、6月2日白進考ほか7名が Amne Machin (7160 m) に初登頂した。  
AJ 303. 274~283, 中国の登山運動。

### 1961

- 1~6. Sir Ed. Hillary Nepal. 1960 年から越冬し高所生理学研究に従事していた。2月下旬から Ama Dablam の南稜に取つき、困難な塔や氷段に次々と幕営を進め、6300 m 台地に氷洞を掘り、3月13日 Dr. Michael Ward, Barry C. Bishop, Michael Gill, Wally Romanes が鋭峯 Ama Dablam (6856 m) に初登頂した。次いで酸素なしで Makalu に登るべく、Hongu Khola, Barun Plateau 氷河をへて Barun 氷河に至り、Makalu Col をへて頂上から下っている氷河上に C 7 (8230 m) をつくり、5月18日頂上を目指したが、P. D. Mulgrew が病氣となり、8350 m で引返した。  
文献は1960年と同じ。
1. E.J.E. Mills Hindu-Kush. Swat and Indus Kohistan に入り、Khan Shai (Ca. 5640 m) を西面(Ushu 河)から登頂した。

- AJ 304. 42~53.
- 3~4. Robert O. Lee (America) Sikkim, Talung Peak (7349 m) を偵察した。  
Alpen 38 : 2 Q. 107.
- 4~5. Jan Boon (alone) Nepal. Nepal-Tibet 中央および東部国境圏で5ヵ月間人種学的研究(シェルパの生活)と登攀を行った。  
Bergkamerad 1961/62. 707.
- 4~5. 森本嘉一 (大阪市大ヒマラヤ遠征隊) Nepal. トリスル河支流ランタン・コーラに入り, リルン氷河に BC を設け, ランタン・リルン(7245 m)を南東面から取つき, 氷河雪原 5600 m の C 3 に待機中, 5月11日4時45分上部氷壁が崩壊し, 森本, 大島健司, サード・ギャルツェン・ノルブが死亡した。  
山岳 57年 93~115, 大阪市立大学ランタン・リルン遠征報告書(37年, 144頁), JAC 会報 215, AAJ 36. 270, ÖAZ 1331. 160~161.
- 4~5. Lieu, M.S. Kohli (Indian Navy Annapurna Exp.) Nepal. Marsyandi 河を溯り, Manangbhot 村の対岸堆石上に BC (3565 m) を設け, 偵察後これを 3810 m に移す。Annapurna III と IV 峯の間のアイスドーム(6100 m)の East Col を越えて, III 峯の東斜面に向う。4月26日 Annapurna III 峯(7577 m)に向ったが, 頂上下 150 m で悪天候のため引返した。5月2日攻撃を再開し, 5日 C 5 (6800 m), 6日 Kohli, Sonam Gyatso, Sirdar Sonam Girmi が16時15分初登頂した。  
Kohli : Last of Annapurna, do : (In Himalayan Endeavour) : Chapt. 13. 95~110, AAJ 36, 268~269, 岳人 188, 158~162.
- 4~5. Joseph Walmsley (British Exp.) Nepal. Thyangboche から Nuptse の南稜, 中央稜を偵察後, 中央稜をルートにきめ, Nuptse 氷河の右岸に BC (5180 m) を設ける。忠実に中央稜を登り, 5月15日 C 8 (7255 m) に入り, 翌16日 Dennis P. Davis とシェルパ Tashi が Nuptse (7879 m) に初登した。翌17日 Les Brown, Chris Bonington, Dr. J. Swallow, Ang Pemba が第2登した。  
AJ 303, 209~234, HJ 23. 3~15, MA Feb '62. 167~172, AAJ 36. 99~106.
- 4~5. 梶本徳次郎 (全日本山岳連盟) Nepal. Jugal Himal の Phurbi Chyachumbu 氷河に入り, 1960年伊藤隊と同じく Big White Peak を目指し,

- ヒマラヤ遠征隊) 中央山稜をこして Madia Peak と主峯のコルに登り、稜線の 6990 m に雪洞を掘り、5月13日赤山、小泉、森田は頂上から 33 m (7050 m) に達したが、風雪激しく引返す。5月11日梶本、番場宏明、シェルパらと C 4 から Gyaltzen Peak (6705 m) に第3登。5月13日野村哲也らは、C 2 から Ladies Peak を経て南稜線上の Gumasi Peak (6100 m) (命名・円峯の意) に登頂した。  
山岳 57 年 116~130, AAJ 36. 270, ÖAZ 1331. 161.
- 4~5. 篠田 軍治 Nepal. Marsyandi Khola から Musi Khola に入り、(大阪大学山岳会 Peak 29 の西尾根上の 4900 m の鞍部一住吉のコルを越して Thulangi 氷河を発見し、その氷河上に降り、4300 m ヒマラヤ遠征隊) に BC を設けた。この氷河の上部は氷瀑が悪く、西面からの登攀を断念し、付近の偵察と試登を行い、5月18日西尾根の 6200 m に初登頂した。帰路は氷河を下り Dona Khola から Marsyandi Khola に出た。  
山岳 57 年 72~92, 篠田軍治 : P 29 西面 (37 年 11 月), AAJ 36. 270, ÖAZ 1331. 161~162.
- 4~6. John B. Tyson Nepal (West). Karnali 河の支流 Bheri 谷から Jagdula (Britain) Khola を溯り、5月4日 BC を設く。Sisne Himal, Kanjiroba Himal を測量調査をする。Dr. H. Tichy の “Passang Peak” の東の1峯 Matathumba (Ca. 6100 m) に登頂した (5月16日)。氷河の上流をさぐり、西面に移り Maharigaon でも Sisne Himal の中央の1峯に登る。帰路は Jumla から Mabu Pass-Dailekh-Surkhet を通った。  
AJ 304. 120~129, HJ 23. 89~99, AAJ 36. 269, MW 1962/63. 92~101.
- 4~6. Erich Waschak Karakorum. Shyok, Kondus 谷をへて Kondus 氷河と (Österr. Sherpi 氷河の合流点 4150 m に BC を設く。Kondus 氷河 Karakorum をつめて東源頭の Sia La を越して Siachen 氷河上部 Exp. 1961) (West Source 氷河) を南下し、Mt. Ghent (7450 m) の西稜の凹みに C 4 (6400 m) をおき、6月4日 Wolfgang Axt が単独で初登頂した。なお Silver Throne (6900 m) の第2登に成功した。  
HJ 23. 47~55, ÖAZ 1318. 121~22, AAJ 36. 278, ÖAVJ 87. 153~166.
- 5~6. Capt. Narinder Garhwal. 6月13日 O. P. Sharma, Sherpas Phurba

- Kumar (Indian Exp.) Lobsang, Lakpa Gyalbu Lama は Nilkanta (6596 m) の南面から取つき, C 5 から東稜をへて初登頂した。  
N. Kumar (In Himalayan Endeavour). Chapt. 14, 111 ~124, AJ 306. 139~141, AAJ 36, 272, HMI. NL No. 6. Table, HJ 24. 148~155.
- 5~6. Paolo Consiglio. (Spedizione romana, CAI) Punjab. Kulu の Beas 河から Parbati 河にそい, Dibibokri Nala に基地をもうける。Kulu Makalu といわれる Lal Qila を目指し, No. 2 氷河をつめ, 5850 m の峠に達し, West 氷河との中間尾根の 5500 m の峠をこし C 3 を設ける。6月2日 18時西氷河源頭から西稜をへて西壁を Lal Qila (6349 m) に Domenico De Riso, Franco Alletto が初登頂した。この日は 150 m に 22 本のハーケンを打って進むのに, 12時間を要した。帰路は西氷河を下る。  
RM 80 : 7/8. 242, 81 : 11/12. 333~350, HJ 24. 86 ~89.
- 5~6. Gurdial Singh (Indian Exp.) Garhwal. Rishi Ganga から Nanda Devi 内院に入り, 同峯をねらってその 6700 m に達した。South 氷河から 6月16日, 隊長, Maj. John Dias, Suman Dubey, Hari Dang, Lt.N. Sharma, Sherpas, Kalden, Nima が Devistan I (6705 m) に初登頂した。6月21日には西となりの Maiktoli (6803 m) に隊長, Dias, Dubey, Dang, Capt. K.N. Thadanni, Sherpas, Lakpa, Nima, Kalden が初登頂した。  
HMI. NL No. 6. Table, AJ 303. 390, AAJ 36. 272~274.
- 5~6. Karl M. Herrligkoffer (Deutsche Diamir-Exp. '61) Kashmir. Nanga Parbat (8125 m) の西側 Diamir 氷河の 4200 m に BC を設置。中央稜の左側よりフランケに取つき, C 3 (6600 m) から 6月20日 Toni Kinshofer, Jörg Lehne, Siegfried Loew が 7150 m に達しビバークした。翌日から天候悪く断念。  
Bergsteiger 29 : 7. 457~461, ÖAZ 1321. 2~4, AAJ 36. 280~281.
- 5~6. Felix K. Knauth (American Exp.) Karakorum. Skardu, Askole をへて Baltoro に入り, Paiju の下に幕営。北面, 東面, 南東面をさぐったが, どこにも容易なルートは発見できなかった。西面は可能性があった。モンスーンとなり帰る。

- AAJ 36. 278~279.
- 6~7. Robert Pettigrew (Derbyshire Himalayan Exp.) Punjab. Beas 河を溯り Chandra Khanni 峠をこして Malana nullah に下り、3840 m に BC を設く。Malana 氷河を登り、Deo Tibba と Indrasan との間のコル 5490 m に C 4 をおき、6月20日 Deo Tibba (6001 m) に第5登した。7月1日第6登を行い Indrasan にも試登した。その後東部の East Tos 氷河に入り、これを探査し、White Sail (6416 m) に第2登した。  
AJ 305. 323~331, 306. 59~60, HJ 23. 110~132, AAJ 36. 275~278, Alpen 39 J. 177.
- 7~8. A.J.M Smyth (RAF. KK-Exp.) Karakorum. Khapalu で Shyok 河を渡り Hushe 河を溯る。K 6 (7280 m) を南と北の Chogolisa 氷河方面から偵察 (南西面 Nangmah から 6100 m まで試登)、後 Aling 氷河の末端に基地をつくり、この氷河周辺の Etwar Peak (6400 m), Hunchback (6553 m), Sceptre (5791 m), Mitre (5943 m) の4座に登頂した。  
AJ 304. 73~84. HJ 23. 80~88, AAJ 36. 279~280.
- 7~8. W.P. Gamble (Cambridge Univ. Exp.) Karakorum. ヨーロッパから陸路を Gilgit に至る。Hunza 谷から Minapin 氷河に入り、周辺の氷河および植物研究をした。  
HJ 23. 16~20.
- 7~8. Josef Ruf (Bremer (DAV) H-K. Kundfahrt) Hindu-Kush. Kabul から Panjshir 溪谷に入り、Anjuman-Pass をこし、同名の河を東北へ下り、Munjon をへて Rees 谷の支流 Chrebek 谷に BC をもうけた。8月10日右岸の Hausberg (4650 m) に登頂。8月12日左岸の Büsserberg (5230 m) に登る。氷河源頭の Koh-i-Chrebek (6250 m) (Snow bird Peak) は2夜のピバークの後、8月17日 J. Ruf, G. Heyser, O. Laudi, B. Lentge が初登頂した。帰途左岸の Schwarze Turm (4850 m) に登った。  
Alpen 38 : 3 Q. 168~170, ÖAZ 1331. 145, AAJ 36. 281.
- 8~9. Dietrich v. Dobeneck (Traunsteiner Hindukusch- Hindu-Kush. 上記 Chrebek の南西の Darrah-i-Deh-Ambi 谷に入った。この源頭の Kollae Ahmead Baba (5800 m) に8月25日に登頂。同日 Djuk-Deh-Ambi (5600 m), Kollae Pierjach (5620 m) にも登頂した。また

- Kundfahrt) 8月28日には Bordj-Deh-Ambi (5750 m) と Deh-Ambi Tower (5650 m) にも登頂。その後となりの Durrak-i-Shahran 谷に移動し、9月1日 Koh-i-Marchech の最高頂 Sarguna (Ca. 6060 m) に西稜から K. Brenner, O. Huber, F. Wagenberger, K. Winkler が登頂した。9月6日 Shakh-i-Kabud (Ca. 6015 m) を東稜 (上記4名で) から登頂し、中央峰 (5650 m) にも登った。なお Kabud-Turm (5850 m) ではビパークを強いられ、これらに57時間を要した。
- ÖAZ 1331. 145~146, Taternik 38:2~4, 75. 80, DAVJ 87. 167~174, AAJ 36. 281~282, Alpen 39 J. 180~181.
- 8~10. Ardito Desio (Spedizione italiana in Afghanistan) Hindu-Kush. Kabul の西方で東部 Koh-i-Baba 山脈の Korkhu 谷に入り、Koh-i-Kol (5010 m) (Montagna del Lago) と Koh-i-Shuksi (Ca. 4800 m) に初登頂した。  
RM 81:1~2. 54~55, AAJ 36. 281, HJ 23. 194.
- 8~9. J.P. O'F. Lynam (British Exp.) Punjab. 英国から自動車で Manali に達し、Chandra 河から Bara Shigri 氷河の上部に BC をおき、周辺の測量に従事した。北東の支氷河を登って、北面から Shigri Parbat (6645 m) に初登頂した。  
HJ 23. 56~61, AAJ 36. 524.
- 8~9. Biswadeb Biswas (India) Garhwal. Niti から Dhauri 河を溯り Vasudhara Tal に至り、East Kamet 氷河を登り、Mana Peak と Kamet を結ぶ岩壁下 5970 m に C3 を設ける。9月21日 Mana の北西稜上 6870 m に C5 を進めたが、頂上下 50 m で引返えし、再攻も悪天のため登頂を断念した。  
HJ 23. 148~150.
- 8~9. N.E. Odell Kashmir. Kolahoi Northern 氷河調査。  
AJ 306. 138~139.
9. 島 澄 夫 (日本・パキスタン合同隊) Karakorum. Gilgit から Chalt に至り、Daintar 氷河を調査し、次いで Baltar 氷河に向い、Teigni を試登、さらに Kukuay 氷河に入り、Kuti Dorkush を Sato Maru 氷河側から試登し 5700 m にビパークし、9月28日天候悪く断念した。  
山岳 57年 156~164, 島澄夫: 秘境フンザ王国, 岳人 167号 18~23.

- 9~10. Josephine Scarr Punjab. 陸路 Manali から Shigri 氷河に入り BC を設  
(Women's Kulu Exp.) け 6050 m 峰に試登。次いで Lion (6096 m) と Central  
Peak (6285 m) に登頂。さらに氷河左岸 Tos Nullah との  
分水嶺上の 6247 m 峰を試みたが、約 150 m 低い前峰で  
時間がなく引返した。  
HJ 23. 62~70, AAJ 37. 524.
- 9~10. Jan Boon Nepal. Cho Oyu の東稜 5800 m の稜頂に 1959 年女性  
隊の記念碑を取りつけた。  
Alpen 38 : B 45.
- 9~10. Sonam Gyatso Sikkim. 地点が明確でないが、Kangchenjau の南面の  
(Indian Exp.) 5790 m に BC を設け、10 月 10 日隊長と Lekpa Tenzing  
が Yulhekan (6429 m) (南面からではない)、10 月 13 日  
Devi Singh, Pemba Gyaltzen, Nima Tsering が Chombu  
(6362 m) に初登頂した。北面から Kangchenjau を試み  
るべくコルをこし、ここから 10 月 21 日隊長、L. Tenzing,  
Jaswant Singh はブリザードの中を頂上 (6889 m) に第 2  
登した。  
HJ 23. 169~170, AAJ 37. 528, HMI. NL. No. 6.  
Table.
10. Prithvi Chaudhuri Garhwal. Nanda Khat (6611 m) に 10 月 20 日隊長と  
(Indian Exp.) ポーター Pan Singh が初登頂した。  
HMI. NL No. 6. Table.  
\* 上記 Table の 6861 m は Nanda Kot の標高で誤り、お  
そらく南 Nanda Devi 氷河側からの登頂と思う。
- 11~12. J.S. Keen Nepal. 11 月 23 日 Namche Bazar をたち、翌日 Nare  
(British Army Khola の 4880 m に BC を設け、Mingbo (6195 m) を試  
Exp.) 登し 5950 m に達した。また付近の調査を行った。  
HJ 23. 133~137.
- \* Erwin Schneider Nepal. Khumbu 地域の写真測量を 4~7, 9~12 月  
(Nepal Him. Research (1962 年 1 月まで) に亘って行った。  
Scheme) Mitt. DAV. 1961. 186~187.
- \* J. Nanavati Garhwal. Bhyundar 溪谷から Nilgiri Parbat (6474 m)  
(Indian Exp.) に試登し、積雪が危険のため 5950 m で退却した。  
HJ 23. 193, HJ 24. 138~140, AAJ 36. 275, HMI.  
NL. No. 5. 22.
- \* 5~6. 袁揚(Yuan- Pamir. (新疆). 新疆西南部 (崑崙山脈) の Kungur

yang) (Qungur) 第1峯 (7595 m) の登頂を目指した (5/16)。6  
(中国女子登山 月 17 日 13 時 20 分 (北京時間以下同じ) 副隊長王義勤が  
隊) パントー, シーラオ, チャムチンを率いて 7560 m に達し  
たとき, 王, チャムチンは引返えし, チベット族の2名が  
22 時 30 分コングル・チュウビエ・タグ (中国名) の頂上  
に立った。第2登。帰途 7400 m でピパークし, 翌日突撃  
キャンプ (7300 m) に達した。7000 m で激しい吹雪にあ  
いシーラオは落命した。

中国画報・通巻 118 号 1961. 10 (極東書店版), 32~  
35, RM 1961. 244, 中国の登山運動。

\* 8. E. タム  
(ソ連)

Pamir. フェドチェンコ氷河とピワチヌイ氷河の合流点  
に基地を設け, ヘリコプター輸送をした。ピワチヌイ氷河  
から接合点をへて, プラウダ峯をまきコムニズム峯 (前ピ  
ク・スターリン峯) の南稜をつめ, 7200 m 雪洞から 8 月  
13 日 11 時 30 分コムニズム峯 (7495 m) に 14 人が登頂し  
た。

岳人 193 号 18~21, 194 号 114~117, 195 号 104~  
107.

## 1962

9/61~4/62. Kenneth  
Hewitt  
(International  
Biafo-Gyang  
Exp.)

Karakorum. 科学者 13 名で各分野の科学調査を行う。  
Alpen. 38 J. B 140. B 194.

3~5. Gerhard Lenser  
(German-Swiss  
Nepal-Himalaya  
Exp.)

Nepal. Everest 山群の北方にある Pumo Ri を目指し,  
その西面と南東面を偵察後, 北東稜に取りつき苦勞の末  
Lingtren との鞍部に達し, 東北東稜を登り, C 5 から 5  
月 17 日隊長, E. Forrer, U. Hürliман が Pumo Ri (7145  
m) に初登頂した。気骨のある報告である。

G. Lenser : Pumo Ri (邦訳 : 緒方郁映・橋本信), MW  
1962/63. 127~132. DAVJ 88. 148~155, HJ 24. 41~  
47, AAJ 37. 517~518, Bergsteiger 30 J. 319~326.

3~6. Lionel Terray  
(French Exp.)

Nepal East. Jannu を目指し Yamatari 氷河に入り, 支  
氷河から 'Dentelle' の頭に出, 南稜上を進み, 一旦頂上  
まで 200 m に達したが吹雪で引返えし, 4 月 27 日 R. De-  
maison, P. Keller, R. Paragot, Sherpa Gyaltzen Mikchung

が Jannu (7710 m) に初登頂。翌 28 日 J. Bouvier, P. Leroux, A. Bertrand, Y. P-Villard および L. Terray, J. Ravier, Sherpa Wongdi が登頂。

L. Terray : Les Conquérants de l'Inutile (1961), MA No. 38. 230~231, No. 39. 268~387, HJ 24. 3~15, AAJ 1963. 517, 朝日グラフ 1962-8-17.

3~6. John Dias  
(2nd. Indian  
Everest Exp.)

Nepal. Everest. 再度 Everest を目指し, Lhotse の Eperon des Génevois わきのクローアールに取付いたが, Sherpa Nawang Tsering が落石にあい死去。5月23日 South Col に C 6 を設け, 28 日に 8430 m に C 7 を進めた。29 日は風雪で酸素がきれ, 30 日は快晴だが雪の状態が悪く, 南峰直下 8720 m で断念して引返した。

HJ 24. 21~34, AJ 306. 1~10, MA 1963. 40~49, Alpen 39 J. 172, AAJ 1963. 518.

3~12. Dr. G.  
Diesselhorst  
(Forschungs-  
unternehmens  
Nepal-Himalaya)

Nepal. 4 つの科学班が Terai および Khumbu 地域に 3 月から 11 月まで植物相などを調査した。また 9 月より 12 月までは 5 班が Khumbu-Himal の地図作成に活動した。地図は Erwin Schneider が担当している。

Alpen 39 J. 174~175, Bergsteiger 1961/62 597~600.

4. K.S. Rana.  
(Indian Army  
Himalayan Exp.)

Sikkim SW. Kabru 山塊の Koktang (6147 m) に, 4 月 26 日隊長と Capt. K. P. S. Ahluwalia とシェルパ 2 名が登頂した。

AAJ 1963. 528.

4~5. 高橋 照  
(全日本山岳連盟  
: 第 3 次ジュガー  
ル・ヒマール遠征  
隊)

Nepal East. 前回と同じく Phurbi Chyachumbu 氷河に入り, Central Ridge の High Pass (5960 m=C 5) から, Big White Peak 南氷壁を攀じて国境稜線を辿り, 5 月 3 日森田格, 安久一成が Lönpo Gang (7083 m=B. W. Peak) に初登頂。5 月 5 日中野満, 石田嘉一, 秋山正人, 加藤幸彦が第 2 登した。

山岳 58 年 103~118, 岳人 171. 94~96, AAJ 1963. 520, Alpen 39 J. 175~176, ÖAZ 1327. 38, 1331. 161.

4~6. 石坂昭二郎  
(日本大学ムクト  
・ヒマール学術調  
査隊)

Nepal. Kali Gandaki の Tukucha から Dan Bhush Khola をつめ, Hidden Valley に入り Hongde 峰左岸の氷河を進み, 5 月 8 日宮原, 石坂, 平山善吉, シェルパ Ang Temba, Ang Dawa が Hongde (6600 m) に初登頂した。その後北方から Churen Himal の Kantokal (6500

m)に登頂し、北の Barbung Khola に入り、Jangla Bhan-  
jyang を越し、Mayangdi Khola に出た。

日本大学ムクト・ヒマール学術調査隊報告書、山岳 58  
年、88~102, AAJ 1963. 520~521, ÖAZ 1324. 83.

- 4~6. Woodrow Wilson Sayre  
(An American Exp.) Nepal. Gyachung Kang の登山許可をとり、21日の後  
その麓 Ngojumba 氷河に達した。2週間を費して東の  
Nup La (5915 m) を越し、ここでシェルパを帰した。後、  
隊員4名のみで重荷をもって West Rongbuk 氷河に出て、  
さらに East Rongbuk 氷河を登り、5月30日 North Col  
に達した。幕営を Everest の北方ルートに進めたが、6月  
3日 7620 m まで登り退却し、帰途も苦難を重ねた。

W.W. Sayre : Four against Everest, Life international  
1963. March 25. 74~86, Alpen 39 J. 172~4, -do- B.  
63~64, ÖAZ 1324. 82.

- 4~6. Dorothy Gravina (British Women's Jagdula Exp.) Nepal West. Bheri 河を溯り、Kaigaon につき、Jag-  
dula Khola を溯り、西から Kanjiroba に近づこうとした  
が、谷が悪く断念。Garpung Khola に入り、Kanjiroba の  
南東壁下で測量と小登山をなす。5月14日 J. Scarr と  
B. Spark がシェルパ2名をつれ Jagdula 峯 (6553 m) に  
初登頂——Pinnacle Peak と命名——翌15日第2登をし  
た。その後 Kagmara I, II, III 峯に登頂。Garpung Khola  
源頭の科尔を越して Suli Ghad に出る。

AJ 306. 65~77, HJ 24. 63~73, AAJ 1963. 523,  
ÖAZ 1324. 583.

- 4~6. 中尾佐助 (大阪府立大学東北ネパール学術調査隊) Nepal East. Darjeeling から西行して Nepal 領に入り、  
Tharpu, Yanpodin, Helok をへて Ghunsa Khola から  
Kangbachen を通り、Nupchu 氷河から Nupchu (7028 m)  
を東稜より攻め、5月20日 C3 から椿隆行と Sherpa  
Chotale が初登頂。21日額田正巳と西田不二夫、さらに平  
野征人と加納巖が第2登。22日西岡京治, Ang Namgyal,  
Ang Phurba が第3登した。その後 Lhonak, Pangpema  
をさぐり、Yalung 谷, Sharphu 山群を探查した。

山岳 58 年。63~87, ヒマラヤの奥深く 13~15, THAK-  
TO 5. 161~181, HJ 24. 16~20. AAJ 1963. 519,  
Alpen 39 J. 171, ÖAZ 1324. 82.

- 4~6. 中野征紀 Nepal. Hongu Khola を溯り Chamlang 西麓に BC を

- (北海道大学ヒマ  
ラヤ遠征隊)
- おき、西稜と北西面を偵察し、南稜の途中に食入る氷河に  
登路を求め、幕営を進めた。氷のアレートが悪かったが、  
C 4 からやや上の雪洞から 5 月 31 日安間荘と Sherpa Pa-  
sang Phutar III が Chamlang (7317 m) に初登頂した。  
帰路は Ambu Lapcha を越し Imja Khola を下った。  
山岳 58 年. 15~28, 北大山岳部々報 9 号. 23~73,  
Alpen 39 J. 172, AAJ 1963. 518~519, ÖAZ 1324. 82.
- 5~6. Karl M.  
Herrligkoffer  
(Deutsche  
Diamir-Exp.)
- Kashmir. 前年と同じく、西面から Nanga Parbat に登  
るべく、Indus 河ぞいに下り、Bunar から Diamir 谷に  
入り Diamir-Flanke のルートに入る。Bazin-Scharte 下  
の C 4 から、6 月 22 日 A. Mannhardt, S. Löw, T. Kins-  
hofer が 17 時間の苦闘の末、西側からの初登攀 (第 2 登)  
に成功した。帰途 8080 m でピバークレシ、23 日 Löw がス  
リップして死去した。  
MW 1962/63. 102~126, Bergsteiger 29 J. 457~461,  
AAJ 1963. 524~525, MA. No. 39. 308, ÖAZ 1321. 2  
~4, 1324. 81~82.
6. P.S. Bakshi  
(Indian Army  
Mountaineering Ass.  
Exp.)
- Zaskar. Leo Pargiyal (6770 m) に登山中、6 月 20 日  
C 2 幕営地 (6460 m) が不適當で変更中、断崖上の横断で  
スリップが起り、隊長と Capt. J.N. Wadhwa, Sherpa  
Gyaltzen Mikchung (Jannu を初登頂してすぐに参加)、  
Karma Wanchoo (Ajeeba の息子) が 300 m 墜落し、  
Wadhwa 大尉のみが生残った。遭難後のアクションが不  
手際であった。  
HJ 24. 134~136, AAJ 1963. 524, Alpen 39 J. 178,  
ÖAZ 1326. 130.
6. Capt. Jagjit Singh  
(Indian Army Mana-  
Nilgiri Exp.)
- Garhwal East. Nilgiri Parbat (6474 m) に登るべく  
Bhiundhar Ganga に入り、Khulia Ghata をこし、山の  
西面と北面より二度にわたって試登したが、1937 年の  
Smythe の頃と雪の状態が異り、天候も悪く退却した。  
Mana Peak (7272 m) は上記二回の間に行われ、南面の  
Gupta Khal (5788 m) から取付こうとしたが、地形と雪  
と天候に妨げられた。近くの 6062 m 峯に登頂した。  
HJ 24. 74~80, AAJ 1963. 524.
6. Fritz Stammberger  
(German-alone)
- Hindu Kush. Tirich Mir 東峯 (7692 m) をめざして、  
約 6100 m で雪崩にあい頭と顔に負傷し幸いにもアメリカ

隊の処置をうけることができた。

Der Bergkamerad 62/63. 626~631, AAJ 1963. 526.

6. Felix K. Knauth  
(An American Exp.) Hindu Kush. Tirich Mir (7700 m) を目標にノールウェイ隊とやや異ったルートを3週間にわたって試登し、6553 m Camp で5日間雪崩の危険のため足留めされ、下山した。

AAJ. 1963. 526.

- 6~7. 四手井 綱彦  
(Pakistan-Japan  
Joint Karakoram  
Exp.) Karakorum. Saltoro Kangri を目指して Bilafond 氷河から、Bilafond La を越し Siachen 氷河に出、Peak 36 氷河に前進基地を設営した。Saltoro Kangri (7742 m) の南東面の氷斜面にルートをとり、7月23日斉藤惇生、高村泰雄、Raja Bashir が C5 を出発し、7400 m でビバーク。翌24日初登頂した。

京都大学学士山岳会：サルトロ・カンリ、山岳58年29~62, AJ 308. 73~80, AACK 時報 No. 2. 1~64, No. 3. 36~42, AAJ 1963. 525~526, Alpen 39 J. 180.

- 6~7. Maj. E.J.E. Mills  
(British-Pakistan  
Forces Karakoram  
Exp.) Karakorum. Hispar 氷河北岸の Khinyang Chhish (7852 m) と Pumarikish (7492 m) を目標に、前者の南々西稜にルートをとり、Pumarikish 氷河の Snow basin 5490 m に C2 をおき、尾根に取付き幕営を進めたが、C4 を建設中、7月18日隊長と Capt. M.R.F. Jones が約6100 m で雪崩にあい、約1500 m 下の Pumarikish 氷河に流れ落され死亡した。

AJ 306. 100~107, HJ 24. 96~106, 141~142, AJ 308. 98~102, Alpen 39 J. 179, AAJ 1963. 526, ÖAZ 1324. 83, 1326. 130.

- 7~8. Prof Ardito Desio  
(Italian Exp.) Karakorum. Hunza 溪谷と Skardu 地域で地質学探査。隊員 Dr. Etcole Martina は Misgar 村と Barah 谷をへて、Tehri Sar (5050 m) に北壁から初登頂した。

AJ 306. 123, AAJ 1963. 527.

- 7~8. Josef Ziegler  
(Bamberger  
(DAV) Hinduku-  
sch-Kundfahrt) Hindu Kush. Badakhshan 地方の Anjuman 峠をこして、同名の谷を下り、Tilli まで Munjon 谷を上る。その東部の Koh-i-Mondi (6248 m) と Koh-i-Jumi (6040 m) の間のアイスリンネに入り、7月26日隊長、O. Reus, H. Vogel が Mondi に初登頂し、隊長と Vogel は西峯 Jumi に登頂。8月に入り付近の5000 m 級の8座に初登頂し、

Perun 谷でも 5000 m 級 3 座に登り, Weran 峠をこし Pech 谷を下った。

DAVJ. 88. 156~166, ÖAZ 1331. 147~148, Der Bergkamerade 62/63 448~452, AAJ 1964. 233.

7~9. Stanislaw

Zierhoffer  
(2nd Polish Hindu Kush Exp.)

Hindu Kush. この隊は二隊で編成された。

A) Stanislaw Biel 外 Krakaw の 9 名。Wakhan Corridor に入り, Urgundi-Bala 谷に入り, Koh-i-Tez (Scharfer Gipfel) (7015 m) に, 8 月 28 日 J. Krajski, A. Pachalski, W. Olech が初登頂し, 続いて 29, 30 日 にかけて全員登頂した。ほか 6000 m 級数座に登った。

B) S. Zierhoffer は Pozen グループ 7 名とフランス GUMS 4 名からなる。同じく Wakhan の Qazi Deh 谷の支谷 Mandaras に入り, 8 月 27 日 J. Dobrogowski, A. Gasiorowski, J. Mitkiewicz が北西稜から Koh-i-Nadir Shah (7125 m) に初登頂。29 日隊長ら 6 名が第 2 登。9 月 4 日きつい氷のルートをとって, Koh-i-Mandaras (6631 m) に隊長と J. Stryczynski が登頂した。また 8 月上旬には M 5 (6000 m), M 3 (6100 m), M 4 a (6300 m) にも登頂した。両隊ともに登攀のみではなく, 科学調査も行った。

Taternik 1962. 172~174, -do- 1963, AJ 306. 121~122, ÖAZ 1331. 154~157.

8~9. Trevor H. Braham  
(India Exp.)

Hindu Kush. Swat 河畔の Kalam から Ushu 河を溯り Pologa から北上, West Falak Sar 氷河に入り Falak Sar (5918 m) の北北西稜を試登。その後 Paloga 谷に入り同名の峠を越して Gabriel 河に出, Mirshahi をへて Sirri Dara に入り, Swat-Kandia 分水嶺上の 5182 m 峰に登頂し Kalam に出た。

AJ 307. 251~261, HJ 24. 107~118, AAJ 1963. 526~527.

9. Werner Kaesweher  
(Rosenheimer Hindukusch-Kundfahrt)

Hindu Kush. Badakhshan 地方から Anjuman 峠と東部の Ramgel 峠との間に入り, Kalodak で 5 座, Kaschau で 2 座, Tscabtera で 2 座, Katatara で 3 座, いずれも 5000 m 級に登頂。

ÖAZ 1331. 148~149, Der Bergkamerade 62/63. 424~430.

- 9~10. J.O.M. Roberts (British Exp.) Nepal. Mayandi Khola の支流 Muri Gurja Khola の Gurjakhani につき, Darsinge の 4420 m の峠をこし Kaphe Khola に出、Dhaul Himal IV (7640 m) を西南側から試登。その他 Ghustung South 試登, 10月9日 5334 m 峯登頂, 22日隊長, Sherpa Nawang Dorje, Ang Pema が C3 から Ghustung North (6462 m) に登頂した。Kaphe Khola を下る。  
AJ 307. 188~197, HJ 24. 53~62, AAJ 1963. 521~522.
- 9~10. 朴 鉄 若 (韓国慶熙大学遠征隊) Nepal. Dhaulagiri II を目標に, その南面 4600 m に BC をおく。9月26日 Mayandi 氷河をこして偵察, 10月11日, 隊長と宋允一が 6700 m の前衛峯に向うも登頂出来ず断念す。  
AJJ 1963. 522, 韓国語報告書あり。
- 9~10. 小野寺 幸之進 (京大大学山岳部パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊) Punjab. クルー溪谷の Malana 河から同名氷河に BC をおく。10月8日 Indrasan (6221 m) を東南側の C3 (5500 m) から目指し, 11日南壁を攻撃したが天候と雪にはばまれ, 13日富田幸次郎, 宮木靖雄が初登頂した。同日 C2 から大森義次, 田中二郎, C3 にいた岩瀬時郎, シェルパ Gunding が北東稜から Deo Tibba (6001 m) に第9登した。  
京大大学山岳部: インドラサン登頂, 小野寺幸之進: パンジャブ・ヒマラヤの山と谷, 山岳 58年 119~132, 京大山岳部々報 11号 33~81, HJ 24. 90~95, AAJ 1963. 523~524, AAVK 13号 18~25.
- 9~10. Sepp Kutschera (Österreichische Hindukusch Exp.) Hindu Kush. Wakhan の Mandaras 谷に入り, Kishmi Khan (ca 7200 m) の西の鞍部から西稜を攻め, 6100 m に達したが新雪で断念。なお de Grancy, Hans Fischer は地図と地質の調査を行った。  
ÖAZ 1331. 157~158, Der Bergkamerade 62/63. 597~598.
- 9~11. Dr.C.G. Egeler (Netherlands Himalayan Exp.) Nepal. Amsterdam University の科学班と登攀班が合同した隊で, 後者の隊長は4月 Jannu, 7~8月 Andes で活躍した Lionel Terray である。Annapurna Himal の西端の名峯 Nilgiri North Peak (7031 m) を目指し, Tuku-cha の上流 Jomoson から非常に急峻な北面をへて西稜に

出, C 3 から 10 月 19 日, 隊長, Holger, Peter and Paul van Lookeren Campagne, Sherpa Wongdhi が初登頂した。

HJ 24. 48~52, AAJ 1963. 522~523, その他略す。  
Garhwal East. Nilgiri-Parbat (6474m) の第 2 登。

10. Amulya Sen  
(Himalayan Ass. of  
Calcutta Exp.)

HC-Newsletter 20.

9~11. Dr.P.R.C. Steele

Nepal. 妻と Jane Knudtzon 嬢, シェルパ 2 名, タマンクリー 6 名の小隊。Mayandi Khola から西に進み Uttar Ganga をへて, Sisne Khola に入り, Hiunchuli Patan, Yeti La, Amji Himal 等に登って偵察をする。Toridwari Bhanjyang をこし, Barbung Khola にそい, 11 月 1 日 Mukut Himal の Mu La をこし, Jomoson に出て Pokhara に帰る。

AJ 307. 198~204, HJ 24. 133~134.

7~8. Sir John Hunt  
(British-Soviet  
Pamirs-Exp.)

Pamir. 英人 12 名, ソ連側隊長 Anatoli Ovchinnikov ほか 5 名。Garmo 氷河を基地とし, Vavivola, Belaev 氷河に 3 隊を編成した。

1) Pik Garmo(6654 m) は 7 月 24 日西稜から W. Noyce, Robin Smith, ソ連隊長外 1 名が登頂。帰路 Noyce, Smith は墜死。

2) Pik Patriot (6279 m) は 7 月 25 日, 西稜から Dr. M. Slesser ら 4 名とソ連 2 名が初登攀により登頂。

3) Pik Concord (5754 m) は 7 月 21 日西稜から Hunt ら 5 名が登頂した。

4) Pik Communism (7466 m) は 8 月 14 日南壁をへて東稜からソ連隊長ら 8 名が登頂。

M. Slesser : Red Peak, AJ 306. 90~99, 307. 243~250, MW 1962/63. 133~143, HJ 24. 119~130, AAJ 1963. 528, 外。

# Hindu Kush 山脈覚え書

吉 沢 一 郎

Indus 河の支流 Gilgit 河に、北から注ぐ Ishkoman 河の上流を Karambar 河というが(略図参照)、この河は、Karakorum と Hindu Kush の結び目に深く食い込んでいて、末は Kabul 河に入る Chitral 河(上流は Yarkhun 河という)とは背中合せになっており、その分水嶺上に Karambar 峠(4285 m)をもっている。この峠の西方に Baroghil 峠(3794 m)があり、これに対し Yarkhun 河を間に挟んで Darkot 峠(4688 m)が殆んど真南に対峙している。この二つの峠は北の Pamir (中央 Asia) と南の Indus 並びに Ganges 平原とを結ぶ重要な峠であって、歴史上古くから知られており、その位置からしても戦略的な拠点として重視されてきたのは頷ける。紀元 747 年には後出の高仙芝(Kao Hsien Chih) 将軍も、この峠を越えて Gilgit 近くまで進駐したことがある。

今日われわれがいう Hindu Kush 山脈は、この Baroghil 峠辺りから、Afghanistan と Pakistan の国境をなしつつ西々南へ走っている一本の主軸と、それから派出されている支尾根(却ってこの方に高い山があるのは面白い)を含むものであるが、19世紀の末辺りには、Darkot 峠を通して走る山脈も Hindu Kush の一派と考えられ、従って Hindu Kush は二本の並行山脈よりなるもの(地理学者の見解)とされていた。そして又、叙上のように、その高峰の中でも高い方のものが支脈の上にあることも、注目されていたが、最終の結論として、もとは平頂な大山脈であったものが、水量の豊富な河の解析によって、Hindu Kush と Hindu Raj に分れたものだと考えられるようになってきたらしい。これは地質の上からも証明されるということである。

Hindu Kush は Karambar 峠辺りを中心として、Karakorum とは対照的に西々南へ走り、Afghanistan へ入っていくが、Sydney Burrard は、この二つの山脈を同じ系統に属する高皺曲山脈であるといっている。最高峰群(7000 m 以上)の集まっているのは、Kachan 峠(5639 m) と Dorah 峠(4554 m)の間のみである。有名な Kurt Diemberger の父の Adolf Diemberger は、Austria における G. O. Dyhrenfurth の如き人物であるが、最近、Dieter Hasse の“Hindu Kush の境界、構成及び探検史”によって同様のことをわれわれに紹介してくれている。彼らの分類によると、この部分は“東部 Hindu Kush”となっている。

これから西の中部及び西部 Hindu Kush では、中部の Koh-e-Bandakā (6660m) 以

上に高い山は見出せない。もっとも Kachan 峠と Baroghil 峠の間は、まだ余り踏査されていないので詳しいことはわからないが、Darkot 峠の付近に 6000~6700 m の峰が 5 峰あるとしている書物もあるし、Tom Longstaff の “This my voyage” の図には、そこに 6872 m (22,545 ft) の山さえ記入されている。(A. Stein の Koyo Zom, 6883 m のことか。)

Hindu Kush の主軸には可なりの曲折があるが、延長約 600 km, Karakorum の 500 km より長い。然し Kabul 北方の西部 Hindu Kush は、中央 Afghanistan の殆んどを蔽う小支脈に分裂し、高いものでも Paghman 山地の Takht-i-Turkoman(4708 or 4699 m), Koh-i-Baba での Shah Fuladi (5143 m) しかない。この Amu Kalan (5100 m) は 1938 年にドイツの登山家によって初登攀された。昔から南北の交通は、主としてこの部分の低い峠越えで行われていたようである。然し C. Rathjens 博士は 1955 年に “Afghanische Hindu Kush” という論文を独逸両山岳会の年報に発表しているが、この頃でも Hindu Kush は未開の地で、登山的にも探検的にも殆んどが処女地と言ってよかつたのである。Maurice Herzog が監修して 1956 年に出した “La Montagne” (邦訳：山岳・三巻) には、“Hindu Kush 山脈の探検” という章もあるが、探検的には参考になることが何も書いてない。これは以上述べた理由からも無理からぬことであろう。

中部 Hindu Kush は Khawak 峠 (3548 m) から東へ、Anjuman 峠 (4225 m), Ramgul 峠 (4700 m), Semenek 峠 (4500 m), Dorah 峠 (4554 m) を結ぶ曲りくねった部分をいい、7000 m に達する山はないが、登山の対象としては非常に興味の深い部分であって、日本を含め独逸その他の遠征隊が最近屢々入り込んでいる。

この地域でも、ドイツが 1935 年に早くも先駆的な科学的探検隊を送っているのは流石である。後援者には Phil. Borchers, R. Rickmers, R. Finsterwalder といったお馴染みの有名な科学者が並び、指揮は科学の方を A. Scheibe 博士が、技術の方を Albert Herrlich 博士がとっている。

Dorah 峠以東、Kachan 峠を経て Baroghil 峠に到る東部及び最東部 Hindu Kush は、Pakistan 側から近寄れたため、登山的な歴史は可なり以前に遡ることが出来る。Pakistan が英領の時代には、英国の若い軍人兼測量官が登山探検の先駆者になったのは当然である。Chitral における最初の初登頂は、C. G. Bruce と F. Younghusband によって行われた (1893 年) Ispero Zom (4300 m) のそれであるが、この部分の最高峰即ち Tirich Mir, Istor-o-Nal, Saraghrar 等が、皆英国人以外の人々によって初登頂されているのは皮肉でもあり、興味もある。

これを要するに、Hindu Kush 諸山の開拓が、Himalaya や Karakorum に比べて遅れたのは、その位置が政治的に微妙なところにあったことや、住民 (Chitral 側) の間にひどい迷信が行われていたこと (注 1)、山頂は他に比べて低い、同時に万年雪限界 (雪線) が低くて (注 2)、登山に困難を伴っていたこと、人夫の不足と不慣れ等のこと

が挙げられるが、近年に到って漸く登山家の眼が、急にこの未開拓地に向けられるようになった。これには Afghanistan や Pakistan の政府が、登山というものに理解をもちはじめ、この方面への入国制限を前よりは緩めて来たことも、その理由の一つに数えられよう。Hindu Kush の神秘も、そしてその空白地も、次第に範囲が狭ばめられている。1963年に Norway の A. Naess 隊が Tirich Mir の東峰を狙って、Pakistan 政府に断られたのは例外であるが(但し 1964年に許可を得て東峰を南壁から攻撃し、その初登頂に成功した)、日本からも近頃だんだんこの方面に遠征隊が出されるようになった。ここには、小遠征隊に適した素晴らしい手頃な山々が、まだまだ沢山残っている。西欧の国々のように、Volkswagen で乗り込むわけにはいかないが、大いに羽根をのばして、青い空と輝やく陽光に恵まれる夏の登山を楽しんで貰いたい。

(注1)〔迷信〕 Tirich Mir に登ろうとした人は、長くても2年以上は生きていられないというのも一つの例。但し、これには例外もある。1929年に測量に従事した Coldstream 大尉は、Peshawar で狂信者のために殺害され、Burns 中尉は 1932年8月12日、Kashmir の Panj-tarni で登山中、同僚の Charles Felix Stoehr と一緒に雪崩に潰された。また、35年の時の登攀隊員 D. Hunt 中尉は遠征後2ヵ月 Chitral 河で鴨猟中溺死した。1928~29年の Cadell は2年後に Burma で肺炎に罹って死んだが、これは Tirich Mir における過労が原因であるという。総てこれらの事件は、Chitral では誰一人知らぬ者はなく、それを山に棲む精霊の祟りと恐れているということである。

(注2)〔雪線〕は 5200m で、Karakorum より低い。これは気温と降水量によるものであるが、このために酸素の欠乏を除外すれば、Hindu Kush における 5800m の山は、雪線 5800m である Karakorum の 6400m の山に相当する、ということになる。

### Hindu Kush の意味

次に例によって Hindu Kush という言葉の意味について、文献を調べてみよう。Hindu Kush が広く用いられる以前には、Abesta 地方の Iran 語で、ギリシャ風に綴ると Paropamisus (“鷲が飛ぶ高さより高い”という意)となる名称が、この山脈に使われていたという。だが現在でも地図をみると、Demavend (5771m) から Iran の北部を弓型に走っている山脈が、Afghanistan に入ったところに、この文字が記入されている。すると、これは Hindu Kush 全体というよりも、その西部末端の辺り(Herat の北を東西に走る低い山脈)を指しているものではないかと思う。

さて Hindu Kush については、幾つかの解釈が行われている。(1) スイスの測量家で探検家である Schlagintweit 兄弟(Adolf, Hermann and Robert, 19世紀の中頃4年間、印度磁気測量局の命により中央 Asia を広く歩いた)の一人は、それをペルシャ語で“Hindu 人の殺害者”と解し、(2) Tangier 生れの有名な大旅行家 Ibn Batuta (1304~1378) は、1334年に次のように書いている。印度から連れてこられた沢山の男女の奴隷が、これを越える時の劇しい雪と厳しい寒気のために斃れたことから、その名があると。(3) Babar 皇帝が“Barkh と Kabul の間に、七ツの峠をもつ Hindu Kush という山がある”と、その覚え書に書いたのは 1504年のことである。(4) T. H. Hol-

dich は 1904 年に、その著“印度”の中で、Hindu Kush というのは Hindu の軍勢が、Turkistan へ横断しようとして、今日“死せる Hindu 人”という名で知られている峠において、行方不明になったことから起ると書いている。(5) James Rennell 少佐の説。Bengal の測量長官であった彼が 1793 年に樹てた説で、Alexander 大王の印度侵入に際し、ギリシャ人並びにその史家達が使った、Indian Caucasus からの転化であろうとするもの。これはその道の権威である Henry Yule も賛成 (1931 年) しており、最終的な解釈と考えてよかろう。

### 今後の課題

高山表並びに略年表によって、1965 年度現在までに至る Hindu Kush の登山的立場からみた情勢は、その大要をご了解願えることと思う。そこで残された問題は、どこかということになるのだが、西部ではご覧のように、一応主なものは登られてしまっている。然し東部では少なくなっているとはいえ、Hindu Raj 山脈を除いて、まだ大まかにいって 5, 6 座の主要峰が未踏のままになっている。そして特に 1963 年のイタリー隊が発見した Baba Tangi (6513 m) 付近にある Ishmara 山群と、それに Lunkho 山群等は非常に興味があるのではないかと思われる。ただ残念なことは、中央アジアにおける政治情勢の緊迫化によって、高峻山岳に関係ある国々が、登山許可を出さないようになったことである。Wakhan を目指した 7 国の遠征隊も、遂に不許可または取消しの浮目にあっている。だが、いずれは又春のめぐり来ることもあろう。われわれはそれまでにじっくりと、資料による研究によって、目標の地の実態を理解しておくべきであろう。

# Hindu Kush 山脈開拓略年表

吉 沢 一 郎

順序	年 代	主要人物又は隊長	地 域	摘 要
1	1500～ 1000 BC	アリアン人種		紀元前 20 世紀にはじまったアリアン人種の大移動の一部は、前 15 世紀から前 10 世紀の頃に H. K. を越え、尚インダスを渡ってガンジス方面に及び、ここにインダス文明の基礎を築いた。
2	BC 328	アレキサンダー大王		冬期大軍を率いてイランの高峻山地やエルブルス山脈をこえ、Khawak 峠 (3548 m) によって H. K. を越し、バクトリアを征服した後、インドへ入った。
3	AD 518～ 521	宗雲 (スヌユン)、慧生 (フイシ モン)	東 部	宗雲は歌塩 (トンホアソ) の人、衛 (ウエイ) 国の女帝の命により、その都洛陽 (ローヤン) から聖典探求のためインドに派遣され、8 月の上旬タシュケルガンから 9 月中旬鉢和 (ボホー) [今のワカンの] の国に入る。この国の南に大雪山 (ヒンズー・タシュのこと) あり、とある。H. K. をどこで越えたかは明らかでない。因みに慧生は宗雲の随行僧である。
4	AD 627～ 645	玄奘三蔵 (シュアソツツァン)		貞観元年 (627)、唐の太宗の時、僧、玄奘三蔵は都長安をあとに西域に向い、大清池、バミールを経てアフガニスタンに入り、バミアンの東で H. K. をこえ (628)、インドに到着、10 年以上の歳月を求法に費やし、貞観 15 年 (641)、今度はバンジシール河を廻り、今のカワク峠を越え、東方に向った。4 年を経て貞観 19 年 (645)、多くの仏典と仏像を持って長安に戻った。
5	747	高仙芝 (カオ・シユン・チー)		高仙芝は唐代の名将、高句麗 (朝鮮) 人で騎射に長じ、唐朝に仕え、玄宗の開元末に安西副都護、四鎮都知兵馬使となり、小勃律を平らげ、私謀を降したため、大食 (サラセム帝国) 等の諸胡 72 国、風を望んで唐に従ったといわ

順序	年	代	主要人物又は隊長	地域	摘	要
						<p>れている。功をもって四鎮節度使に擢んでられ、左羽林軍大將軍を拜し、密雲郡公に封ぜられた。後に安祿山の乱を討ち、監軍辺令誠に害せられた。唐朝が西方にその勢力を伸ばすにつれ、H.K.は重要な戦略的拠点となったが、彼等はその辺境を確保するため、チトラル地方の宗主権を握っていたこともあった。当時陸々たる大王国であったチベット(763年に西安まで占領したソンツァンガンボ王から以後の時代)は、東方バミール方面を狙っていたアラブ族と協力し、西方への交易ルートである絹街道を切断しようとして目論んだ。高仙芝將軍は一方の軍兵を率い、ダルコト峠(4688m)を越えて南進し、インドに達し、暫らくの間両国の連絡を断切することに成功した。20世紀に入ってからハンガリー系の英国人探検家オレル・スタインは、山上の高みにその土塁の遺物を発見した。スタインは高仙芝の偉業を讃え、ダルコト峠の上に彼の記念碑のないのを嘆いた。高仙芝が遭遇し、克服した自然的障害のことを考えると、ダルコト峠とバミール越えは、西欧のハンニバルやナポレオンのアルプス越えにも優る功業といわなければならない。</p>
6	1274		Marco Polo, Nicolo, Maffeo	東部		<p>この時の主役は父の Nicolo, 元の世祖忽必烈汗の宮廷に行くためバダクシヤンを通ぎ、ワカーンの渓谷を廻った。(但しこれには異説もある。)</p>
7	1398		帖木児(チムール)			<p>蒙古王 チムール H.K. を越す。</p>
8	1506		バーバル皇帝			<p>冬期ヘサレール山塊を横断。</p>
9	1603		Benedict Goez			<p>アゾレス生れのジェズイット派の俗人。ポルトガルから派遣されてインドに至り、アクバル皇帝の許しを得て、カタイ(シナ)に伝道旅行に出かけることになった。カプール經由 H. K. をこえ Ab-i-Panja (オクサス) を通って、タシュケルガン方面に出た。</p>
10	1837~1838		John Wood 中尉(後に大尉)	東部		<p>Faizabad から Zebak 經由 Ishkashim でオクサスに達す (1838. 2. 4)。Kala Panja を経て Pamir 河を廻り、Victoria 湖に辿りついた(2.19)。</p>
11	1860		Abdul Mejid	東部		<p>インド政府所属のインド人密使の先驅の一人。カプールから A. Hayward の足跡を辿り、ランガル・キシュトを経てピクトリア湖に向う途中から、バ</p>

				ミールを南から北へ横断した。
12	1860 (頃)	Mohammed Amin	東 部	A. シュラーギーントワイトの案内を務めたこともあり、Hayward に道筋を教えたこともあるヤルカンドの商人。彼はチトラル、マスツージ、パロギール峠、Sarhad, Langar, Chakmaktin 湖經由タシクグルガンに出た。
13	1868	Mirza Shuja (Mirza)	東 部	マントゴメリー少佐の命によりカプールを10月に出発、Kokcha 河からイジュカシムを通り、オクサスを遡ってカラ・パンジャに至り、1869年1月チヤクマクチンに達してからタシクグルガンに出た。
14	1870	Ibrahim Khan	東 部	ギルギット、ヤシン、ダルコット峠、パロギール峠、サルハハード、ランガル、Bozai Gumbaz (村長ボザイの墓)、チャクマクチン湖からヤルカンドへ赴いた。
15	1870	Faiz Baksh	東 部	イジュカシム、オクサス、カラ・パンジャ、ランガル、タシクグルガン。
16	1870	Ata Muhammad	東 部	詳細不明、Haidar Shah (Habildar) 等も北西フロモンティアで活動。
17	1870	Dr. Potagos	東 部	ギリシヤ人。ワカーン經由 Kashgar へ出る。
18	1870	George W. Hayward		7月18日、ギルギット河の上流、ヤシンの北に当るダルコトで土人のために惨殺さる。
19	1874	H. Trotter 大尉, Thomas Gordon 中尉, J. Biddulph 大尉, Dr. Stolicza		Forsyth 卿第2回カシユガル湖訪問使節団に属した彼らは、タシクグルガンからチャクマクチン湖に達し、ビダルフはサルハハードからパロギール峠を調査した。その間トロッターは測量助手 Abdul Subhan を派遣して、オクサス流域を調査せしめた。
20	1876	J. Biddulph		カランパール河を遡り、H.K. の主軸に達しようとしたが、イミトの北 25 km のところから自然的障害で引返した。
21	1878~80	アフガン戦争		これに前後して多くの軍人派の測量隊が、この地域に入り、アフガニスタンからギルギットまでの大よその地図を作った。
22	1880	J. Biddulph		少佐の "Tribes of Hindoo Koosh" 中に、初めてティリチ・ミール線の写真が現われた。

順序	年 代	主要人物又は隊長	地 域	摘 要
23	1880	M.S. (略号)		インド測量局所属の密偵、オクサスの水源を誤報す。
24	1883	Ivanof, Benderski		Ab-i-Wakhan に現わる。
25	1885	Ney Elias		インド政府の特使としてシナ・トルキスタンに派遣さる。パミールを東から西に横断し、最後にオクサスの左岸をイシュカシムに達し、ゼバク、バタクシヤンを経てヘラトに至る。
26	1886	Lockhart 大佐, Woodthorpe 大佐, Barrow大尉, Dr. Giles.		オクサスの水源からイシュカシムまでの最初の科学的調査、この報告は貴重なものとして政庁出版物の中に含まれている。
27	1888	Gabriel Bonvalot, Capus, Pepin		フェルガナからチトラルまで、最初の記録的パミール北南横断を行った。最後はイルシャド峠に失敗し、ボザイ・グンバーズ、サルハハード經由でパロギール峠をこえた。
28	1888	Grombchevski 大尉		1876年スコペレフの副官, Marghilan 総督補佐官, フェルガナで国境事務官等をやったポーランドの軍人で近衛隊所属。キリク峠からフンザに侵入、ラジャに会ってこれをロシアの同盟国たらしめんとした。ヤングハズバンドに2度会っている。
29	1889	George Littledale		1888年に一度パミール訪問、今度は夫人を伴い(女でパミールに来た最初の英国人)、チャクマクティン湖、サルハハード、パロギール峠、ダルコト峠を經由してカシミールに出た。
30	1889	H. Dauvergne		ワジール峠、オクサス源流、パロギール峠、ヤルクーン及びカランバンール河の水源、イシュコモマン谷を歩く。
31	1891	J.M. Stewart 中尉		カランバンール峠を越えた。
32	1893	C.G. Bruce, F. Youngusband		チトラルの <b>Ispero Zom</b> (4300 m) に初登頂す。
33	1893~1895	George Cockerill		ティリチ・ミールの西方及び北方に亘るアフガンとの国境峠を幾つも踏査した。

34	1894	G. Nathaniel Curzon H. Lennard	ワクジール峠よりオクサス源流へ、パミールよりパロギール峠(3794 m)をこえ、ヤルクーン河を下ってチトラルに入る。レナードはダルコト峠をこえてギルギットへ。
35	1895	国境測定委員会	小ペーミールが緩衝地帯と決定される。
36	1895	George S. Robertson, J.G. Kelly	ロパーソンを隊長とする英印の小部隊が、チトラルの要塞で土民に包囲されたが、ケリー大佐は救援隊と山砲を率い、ギルギット河の最奥にある雪のシャンドゥール峠(4114 m, Hindu Raj 山脈上にある)を越えて、増援の大部隊がつかまえて敵を追払った。その時以来、チトラルの宗主権は英国に帰した。(今はパキスタン)
37	1898~1899	O. Olufsen, Anthon Hjuiler, Ove Paulsen	デンマークの第1回パミール遠征隊は、1896~97にオルフゼン隊長で行われた。第2回も同じ、但しこの方は Hindu Kush に深い関係がある。オクサス河のランガールから、大屈曲点付近のイシユカシム経由コロロクまで、流域30万の地図をつくる。彼の著には Lunkho が 6900 m, Ssad Istragh が 7350 m, Nushau が 7460 m, Tirach-mir が 7463 m と出ている。
38	1906	Aurel Stein	最東部 4月20日スリナガル発、ロワライ峠(3185 m)からマストージを経、ヤルクーン河を廻り、ダルコト峠(4688 m)を北側から上下し、パロギール峠(3794 m)をこえ、(5/19)、ワクジール峠(4907 m)からトルキスタンに向った。
39	1916	T.G. Longstaff	カランパール氷河を調査してからフンザ河の方へ山越え、1916~17までグピス要塞で行政補佐官をやっていた。シャンドゥール峠、ヤシン河の上流、カランパール河等を歩いた。
40	1917	Poland 隊	中、東部 Wysokogorski Club に属する St. Billkiewicz, W. Korsak が、7ム・ダリヤの大屈曲点と Kokcha (Wardui) 河の間で活動、ゼンカ(イシユカシムの南西)よりスタクサン峠(4892 m, ティリチ・ミールの西、ドラ峠の北東)まで登ったという。
41	1924	R. Vavilov	中 部 ソ連の農業植物学者、ウエラシ峠(4560 m)を越える。

順序	年 代	主要人物又は隊長	地 域	摘 要
42	1924	Emil Trinkler	西 部	Ak Robot 峠 (3118 m) を越えた。
43	1927~1931	Clinton G. Lewis 大佐	東 部	大佐の大測量事業によって H. K. の氷河が数多く世に紹介された。軍人も測量官も高山登山には未経験であったが、5500 m 以上の所で測量する必要がしばしばあった。リュウイスは Atrak, Ziwar, Uzhnu の三大河が、主軸の奥深く食い込んでいること、並びにその源頭に大きな氷河があることを発見した。当時の長さの上、下ティリッチ氷河が 29 km, アトラクツクも同じ、Chiantar は 34 km, Kotgaz 19 km, Karambar 26 km, その奥に <b>Karambar Sar (Kampire Dior, 7143 m)</b> を発見した。カランバール河には三つの氷河があるが、その一つに Chatiboi (湖が出来るだろうという意) 氷河がある。
44	1929	Georg Morgensterne		オスローの比較文化研究会からの依頼によって、イラン語とインド語の系統の言葉を調査する。
45	1929	Donald McKay Burn	東 部	他に Culverwell 大尉, Dutton 少佐, Coldstream 大尉が <b>Istor-o-Nal</b> の西尾根を登り、6154 m までで退却した。
46	1932	W. Iven, K. Brückl	中 部	アンジュマニ峠 (4225 m) をこえてワカーン谷に下る。
47	1933	Reginald Schomberg	東 部	欧州人として最初にダルコト峠 (4688 m) を越えたという。
48	1935	R.J. Lawder	東 部	他に Dennis Neville Brideoake Hunt (1905~1935) が Istor-o-Nal を試み、8月11日、ローダーは 6949 m まで、Hunt は 7345 m まで登った。尚ハントはその年の10月15日、チトラル河で鴨猟中溺死す。
49	1935	Dr. A. Scheibe	東, 中部	Phil. Borchers, R. Rickmers, R. Finsterwalder 等が後援したドイツの科学隊が、中部及び東部 H.K. に入った。("Deutsch im H.K.", Berlin, 1937) 科学隊長はシャイベ、科学者は G. Kerstan 他 3 名。スリスタンの地理的探査に際して <b>Semenek</b> 峠 (4500 m, ドラ峠の南にあり) を越え、チトラルに入り、ドラ峠にも寄る。技術隊長 Albert Herrlich と W. Roemer は南バラム氷河からティリチ・ミールの約 6000 m に達した。Walter Patzelt は Parun 谷, Pech 谷等 (スリスタンの) を探り、立派な地質調査

50	1935	Reginald Schomberg	東部	ティリチ・ミール付近を調査し、ティリチ河の北支流 Rosh Gol, Ziwar Gol に入り、7000 m 前後の高峰を幾つか発見した。 <b>Noghr Zom, Shogol Zom</b> (黒谷山, Shayoz 6920 m のことか), <b>Shorghordok</b> (Shoghordok, 6885 m のことか) 等がある。	を行った。
51	1937	E.E. Fox (USA)	中部	Khwaia-Muhammad 山地を調査する。Anjuman 部落-Warsaj 峠-Farkhar 谷	
52	1937	ドイツ	東部	ティリチ・ミールとイストル・オ・ナール地域をドイツ隊が踏査したらしいが、詳細不明。	
53	1938	J.R.G. Finch	東部	フィンチの英国隊が、ティリチ・ミールの偵察と <b>Buni Zom</b> (6551 m) の試登を行った。(H.J., 1952) 目的は 1939 年への準備。6月9日 Owir 氷河の最後の氷瀑の上の台地 (4724 m)。24 日までの間に、この氷河の源頭を偵察、次に南バルム氷河へ横断し、これを下り、北バルム氷河を少し登った。これはクレンバス多く困難。25日, Dirgol 氷河との間の尾根を登る。次に Mastuj 河を渡って <b>Buni Zom</b> の様子を探りに行く。これは 600 m ばかりの氷壁が厄介である。ブニ・ゾムからみると、ティリチ・ミールの南、Owir 氷河の頭の上に頭抜けて高いのがあったが、これは後に <b>Koh-e-Ban-dakā</b> ((6660 m or 6500 m) と判る。	
54	1938		西部	ドイツの登山家が、西部の <b>Amu Kalan</b> (5100 m) に登った。	
55	1939	Miles-Smeaton	東部	前年の Finch が軍務で英国に帰ったので、M.S. 夫妻, Miller, Richard Orgill だけで T. Mir に向う。然しオウィール氷河から南氷河峰 (6700 m) に登ったのみ。	
56	1947	H.W. Tilman	東部	カシュガールを9月14日に出発、ビザなしでワクジール峠をこえオクサスに入り、捕えられたが四方を観察しながら、遂にフアイザバードまで連れていかれた。最後はゼバク、サングリチ経由、ドラール峠の上で釈放されチトラルに戻る。ワクジール峠の南側に 6500 m の山あり、Bozai Gumbaz は 1850 年にフンザの掠奪者に殺された村長ボザイの墓という意味、後にイタリ隊の登った Baba Tangi の写真が彼の著にある。この本はなかなか教えてく	

順序	年	代	主要人物又は隊長	地域	摘	要
						れるところが多い。
57	1949		Arne Naess	東部		ノルウェーのアルネ・ネスと R. Heen が <b>T. Mir</b> を偵察、東峰南東麓も試みる。
58	1950		Arne Naess	東部		<b>T. Mir</b> (7700 m) に初登頂、7月22日、Per Kvernberg—23日、A. N., Henry Berg, Tony Streather.
59	1955		J.E. Murphy, Jr.	東部		イストル・オ・ナール (7398 m) 初登頂。USA の Harvard Karakoram Expedition (AAJ., 1956)、登頂は6月8日、マーフィーと Thomas A. Mutch.
60	1955 (1955年分に追加2隊あり。最後を見よ)		Dr. C. Rathjens	西部		ドイツの科学隊。1955年の ÖAV, DAV の年報に出た報告は、西部 H.K. に関する科学的踏査の当時の状況を知るのに優れた文献であるという。Pashman 山域の最高峰は <b>Takht-i-Turkman</b> (4699 m)、これは度々登られていて、 <b>Koh-i-Baba</b> での最高峰は <b>Shah Fuladi</b> (5143 m) である。
61	1956		Eric Newby	中部		E.N. と Hugh Carless が <b>Mir Samir</b> (6060 m) の試登と Nuristan の旅行を行った。少しとぼけた報告ではあるが“ A Short Walk in the H. K.”, 1958 となって出ている。
62	1956		京都大学、パキスタン	南部		藤田和夫、本多勝一、吉場健二等がカランバル・サル (7143 m) と <b>Pr-an Sar</b> (6293 m) の試登の後、Ishkoman 峠 (5105 m) をこえ、ダルクトより Yashin 河を下ってギルギットに戻った。
63	1957		京都大学、パキスタン	南部		松下進、本多勝一他が <b>Shakhandok</b> (6320 m) を試登、頂下 100 m まで達し、その後チトラルや Swat を訪れる。
64	1957		New Zealand 隊	H.R.		Buni Zom に登ったという。
65	1958		P.S. Nelson	東部		Oxford Chitral Expedition、隊員 E.W. Norrish, F.S. Plumpton, W. G. Roberts, N.A.J. Rogers, リエゾンは Mohammad Ibrahim Khan, 担夫4人の内3人は 1951年にノルウェイ隊に参加。チトラル河の本流沿いに、Turikho, Drasan, Sarth An 峠 (3960 m), Zundrangam, Rosh

66	1959	Fosco Maraini	東 部	<p>Gol, Duru 等を経, 8 日目に <b>Saraghrar</b> (7349 m) の西壁下 Totiraz Noku (4200 m) に B. C., 周囲には 6100 m 以上の無名峰が 7 座ある。高度順化及び踏査のため Kotgaz 氷河, サラグラールの北峡谷, Tao Zom (5600 m) 等を探り登る。10 日後, 容易なルートはなかったが, 北クームが最良と考え, 氷河 (5800 m) から急な雪のクールワールを頂稜 (6860 m) に出ようとした。それから頂上までは 1.2 キロの緩い山稜。8 月 24 日, 8 日かかりの攻撃プランを立て, その 4 日目 8 月 27 日, ネルソンとブラムトンは 6600 m まで登り, 引返したが, クールワールを横切った時, ネルソン墜落, 即死。これで登攀中止。(AAJ, 1959)</p>
67	1959	Harald Biller	中 部	<p><b>Saraghrar</b> (7349 m) 初登頂。Ziwar 河を廻り, 7 月 25 日 Niroghi 氷河の源頭に BC (4419 m), 8 月 6 日攻撃開始, 8 月 24 日, Franco Alletto, Paolo Consiglio, Giancarlo Castelli, Betto Pinelli の 4 人が頂上に立った。“Where Four Worlds Meet,” 1964.</p> <p>Nürmberger 隊, 夫人 Bobby Biller, Theo Stöckinger, Hans Vogel. これは中部 H.K. における最初の記憶すべき踏査。然し尚, <b>Anjuman</b> 峠 (4225 m) の南にとどまる。ドイツから Kabul まで車。6 月 21 日, Dashi-i-Ribat (5300 m), 7 月 27 日, <b>Mir Samir</b> (6060 m) に登る。[Panjshir の東支谷を廻り, BC (4000 m), 北及び南東から踏査した後, 北東後を登った。2 隊, 下りは南東面, ビバーク一度。中部 H.K. における最初の 6000 m 級登頂なり。</p>
68	1960	Wolfgang von Hansemann	中 部	<p>Berlin 隊。他に Dieter Hasse, Siegbert Heine, Hannes Winkler 参加。ベルリンからバスで Dasht-i-Rewat, これから馬と人夫でアンジュール谷を北へ。アンジューマン峠へ登り, 100 km 向うに目的の山を望見する。初めてアンジューマン河を下り, Munjan 河との合流点に到ってそれを渡り, Sakhi 谷を廻る。9 月 6 日, BC (3960 m), 9 月 8 日, CI (5420 m), 9 月 10 日, CII (5800 m), 9 月 11 日南西稜 6000 m まで, 20 日 CII を 5960 m に移し, ここから 22 日, 6 時間以上かかって全員 <b>Koh-e-Bandaká</b> (6660 m) 初登頂。船達 Pagar 谷に入る, 小湖多し。西側の Siriambi 氷河より 5000 m 級 7 座に登る。ベルリン隊のアンジューマン峠越えと中部 H.K. の最</p>

順序	年 代	主要人物又は隊長	地 域	摘 要
69	1960	酒戸弥二郎	東 部	高峰登頂は、正にコロンブスの役目を果たしたものと見える。 京都大学, Quazi 谷と Mandaras 谷との合流点に BC (3080 m), C I (3800 m), C II (4500 m), C III (5500 m), CIV (コルの下, 6300 m), 8月17日 <b>Doshaq</b> (7492 m) 初登頂 (酒井敏明, 岩坪五郎)。(注)今までは Noshakh と書かれていたが Doshaq の方が正しいらしい。Herat の南西に Doshakh という山がある。又 Mushaq (7487 m) というのは Noshaq~Doshaq ではなからうか。
70	1960	B. Chwaszinski	東 部	第一回 Poland 隊, <b>Doshaq</b> の第 2 登他, Ishkashim につくまで日本隊が来ていることを知らなかった。 <b>Doshaq</b> 登頂 8月27日, K. Berbeka, St. Biel, J. Krajski, K. Kulinski, J. Mostowski, Z. Rubinowski, St. Zierthoffer [C I (4500 m), C II (5500 m), C III (6150 m, 頂後), CIV (6900 m)]。 <b>Asp-e-Safed</b> (6449 m), 登頂 9月4日, St. Kulinski, J.M., Z.R., S. Sprudin. <b>Rach-e-Daros</b> (5684 m) 登頂 9月5日, St. Z., K.B. [Quazi-Deh 氷河の支氷河 (Polen Gl) から登る]。 9月6日, <b>Khorpusht-e-Yakhi</b> (5697 m) に登頂, St. Biel, J. K., W. Lesniewicz. <b>Gumbaz-e-Safed</b> (6797 m) は 9月8日, 6300 m までで吹雪退却。その後全隊 Warg の谷を探る。
71	1960	Herbert Tichy	東 部	高峰に登ったというが詳細不明。
72	1960	Joyce Dunsheath	中 部	英国, 他に Eleanor Baillie, Ladies Alpine Club, Abinger Afghanistan Exp, ロンドン (7/10) よりモスコウ等経由, テヘランでデマベンド (5669 m) に登り, カプール着 8/14. Mir Samir を狙いたるも C II (4600 m) までで放棄, 天候崩れ, 担夫の拒否による。Anjuman 峠付近で 2 峰に登り, カプール着 9/28.
73	1961	Dietrich von Dobreneck	中 部	ドイツ Traunsteiner 遠征隊。他に Karl Brenner, Otto Huber, Fritz Wagnerberger, Karl Winkler. 北方から Munian 谷へ入り, Deh-Ambi 谷の奥に BC (3700 m), Dewana 連山で 8月25日, <b>Kollae Ahmad Baba</b> (5800 m) 他 4 峰に登る。O.H. と K.W. は隣りの Sharan 谷に入り, 国

74	1961	Josef Ruf	中部	境上の <b>Deh Ambi-Turm</b> (5650 m) と <b>Bordj-Deh-Ambi</b> (5750 m) に 8月28日登る。次に全員をこの谷に集め、BC (3600 m)、HC (4600 m) から9月1日、 <b>Koh-i-Marchech</b> (6060 m) に登る [K.B., O.H., F.W., K.W., 下りにピバーク一度]。9月6日、 <b>Shakh-i-Kabud</b> (6150 m) に登る [登頂者同じ、ピバーク二度、この間、 <b>中央峰</b> (5650 m) 及び <b>Kabud Turm</b> (5850 m) にも登る]。
75	1962	Sepp Ziegler	中部	ドイツ Bremer Exp. 他に Elisabeth Huffmann, Gertrud Heyser, Otto Laudi, Berni, Lentge, 7月18日車でカプール着。Munjan 谷上部の Borrich 谷, Sanglich 谷を探り、Chrebek 谷に BC (3950 m), 8月10日 HC (4500 m), 8月17日ピバーク二度で <b>Koh-i-Chrebek</b> (6250 m) に初登頂。(J.R., G.H., O.L., B.L.), 中部 H.K. の第3高峰なり。
76	1962	Werner Kaesweber	中部	ドイツ, Bamberger Exp. 他に Rudolf Fürst, Karl Gross, Walter Patzelt, Otto Reus, Hans Vogel. Panishir 谷から Anjuman 峠をこえ、Munjan 谷から Tili へ、これから東へ山へ入り、5500 m 級5峰と <b>Koh-i-Mondi</b> (6248 m, 7月26日), <b>Koh-i-Jumi</b> (6020 m, 7月26日), <b>Koh-i-Nu</b> (5650 m, 7月29日) を登り、戻り Parun 谷から Weran 峠 (4560 m) を越え、Pech 谷 (Nuristan) を下り Jalalabad に出る。
77	1962	Sepp Kutschera	東部	ドイツ, Rosenheimer Exp, 他に Benno Sinnesbichler, Annemaria Stadler, S. Ziegler 隊のあとから Anjuman 峠に登り、東側の山群に入り、4900~5200 m 峰19座に登る。Ramgul 谷の奥に 5953 m 峰を発見、多分 6000 m 級であろう。Kalo-dak, Kashaan, Chabtera, <b>Katataara</b> の各山群を歩く。カタタラの主峰 (5400 m) は吹雪で失敗。
			東部	オーストリア, 他に Helmut Hanswanter, Roger Senarclens de Granicy, Hans Fischer (地理, 地質)。人間は車で小アジアを横断したが、荷物には船積みしたため一カ月おくれ、而もキャラバン途上強盗にあう。第2次 Poland 隊の帰途にあって装備を借りる。 <b>Kishmi Khan</b> (7200 m) を西陵から狙い West Col (5300 m) に登ったが、吹雪と時季おくれで退却 (10月中旬)。de Gr. と Fischer は科学調査を行う。

順序	年 代	主要人物又は隊長	地 域	摘 要
78	1962	Stanislav Biel (Krakow 隊) Stanislav Zierhoffer (Poznan 隊)	東 部	第2次ポーランド隊, 他に Henryke Dembinski, J. Dobrogowski, A. Gasiorowski, J. Mitkiewicz, M. Ginat, F. Moreau, B. Langvin, P. W. Schramm, I. Stryczynski, Marian Bala, St. Bierhoffer, J. Krajski, W. Olech, A. Pachalski, R. Lazarski, H. Cioncka, K. Jakubowski 等参加, 内フランス人4人おり。 <b>Koh-i-Nadir Shah</b> (7125 m) — 8月27日, 29日, 登頂。 <b>Koh-i-Tez</b> (7015 m) — 8月28, 29, 30日に登頂。 <b>Koh-i-Mandaras</b> (6631 m) — 9月4日登頂。尚8月中に <b>M5</b> (6000 m), <b>M3</b> (6100 m), <b>M4a</b> (6300 m) 登頂。 <b>Shachaur</b> (7116 m) は諦められた。Kishmi Khan の北の峠 Hari Kotal (5100 m) を横断し, St. Biel と Olech は9月6日 <b>Kalat</b> (5600 m) に登った。両隊の集合点 Quazi-Deh で S. Kutschera 隊に会い, 援助する。
79	1962	Fritz Stammberger	東 部	西ドイツのミュンヘンの人。目標 <b>Tirich Mir 東峰</b> (7692 m), Oihor 谷に並行した谷を北上し, Owir-An (峠) を越え Barum 谷の Shabronz に下る。ノルウェー隊のルートをとって CIV までスキー, CV (6000 m), 6月10日, 7100 m にピバーク, それから登攀中落石, 氷雪崩, 墜落, 血まみれでピバーク, 命からがら Barum 氷河を下る。
80	1963	Gene White	東 部	米國, パキスタン, 最近出来たベンジャワール大学山岳会の会員12人が Farzand Ali Durrani に率いられて参加, 他に White の妻 Elizabeth, パーレーの Farquhar の息子 Peter が参加。Buni Zom (6551 m) 偵察後, Rosh Gol に BC (3350 m), Ishpandar Sor (6088 m) 他に登路発見, CI (4300 m), CII (5030 m) と進めたるも, 7/17 BC でべ大学の W. Mohammad Khan 教授が墜死すのことで登山活動中止となる。
81	1963	Markus Schmuck (W. Frisch ははじめ H. Eggert とともに別動隊で行ったが, 後者が怪我をして故国へ空輸されたので, この隊に参加した)	東 部	オーストリア, 他に Martin Gmachi, Walter Frisch, 9月4日チトラルをあとにし, 9月12日 Shayoz 氷河に BC (4145 m), CI (5182 m), CII (5791 m), CIII (6203 m), 9月20日, <b>Koh-i-Shoghordok</b> (6855 m) 及び <b>Koh-i-Shayoz</b> (6920 m) に初登頂。Salzburg からの往復僅かに33日。

82	1963	Rolf Reiser	中 部	ドイツ, Stuttgart Exp. 他に Wolfgang Lutz (登攀隊長), Dieter Grundig, Alfred Kehrlie, ティリチ・ミール方面が不許可になったので, Pagar 谷の北にある Bologron 谷を廻り, <b>Kalantscha</b> 山群を踏査, 8月22日ポロロン谷の奥に BC (4280 m) を設け, 徹底的に調査を行う。8月23日~9月15日の間に <b>Kolei Württemberg</b> (5610 m) 他17峰初登頂, 9月15日~9月27日の間に <b>Koh-e-Safed</b> (5760 m) 他6峰を初登頂。
83	1963	Andrzej Wilczkowski	東 部	第3次ポーランド隊。他にTadeusz Bartczak, Tomasz Gozdecki, Marek Grochowski, Maciej Gryczynski, Bogdan Mac, Jerzy Michalski, Andrzej Miller, Antoni Tokarski, Jerzy Warteriewicz。7月20日ワルンウー鉄道-タシュケント-飛行機-カブール。アフガン人2人参加。8月25日, トラックで Shachaur 村に到着。この谷の <b>Kotgaz</b> 峠の下に BC (3807 m)。1962年のクチュラ隊と同じく荷物の到着を長い間待った。ワカーンに入った時には他の遠征隊は帰還の途にあった。ポーランド隊の目標の一つであった Kishmi Khan は, オーストリア隊に登られてしまっていた。 <b>Kishmi Khan</b> (7170 m) を Shachaur 谷より第3, 4登, 9月22日, 間に5キャンプ。 <b>M2</b> (6580 m) 9月25日登頂。北のゴル, Hari Kotal は 1962年にクラコヴ隊が越えている。10月2日 <b>Auar</b> (6550 m) に登頂。9月27日, <b>Languta (Languta-e-Barf, c. 7010 m or 6995)</b> を北峰から南の主峰へ登る。10月上旬 Shachaur の北面踏査。残された問題は <b>Lan-gar</b> の四峰 (皆 c. 7000 m, 一部はバキスタン領内) と <b>Lunkho, Ishmara</b> 山群なり。
84	1963	Thomas Trübswetter	中 部	ドイツ, Garmisch-Partenkirchen 隊, 他に Iris Trübswetter, Volker Gazert, Konrad Holch, Christian Speer。アンジューマン及びムンジャン谷地域で活動, 7月4日~13日の間に Iblar 谷の 5000 m 峰12座に登る。この中に <b>Koh-e-kâ-Safed</b> (5950 m) あり。7月16日から Sachi 谷に入り, <b>Koh-e-Bandakâ</b> (6500 m, 南峰で主峰, 7月17日第2登), 同日, 北峰 (6400 m) も登る。同日又, <b>Koh-e-Bandakâ-Sachi</b> (c. 6200 m), Iris も登る。その後ムンジャン谷の Miandeh に行き, 一隊はアンジューマン峠越え, 他隊は欧州人未踏の Kamgul 峠 (4700 m) を越え, Sauroni 谷で最後の 5000 m 級 <b>Koh-e-Sauroni</b> (5100 m) に登る。

順序	年	代	主要人物又は隊長	地域	摘	要
85	1963		J-P. Hunger	東部		ユネスコ所属の鉱物学者、重要な科学的現場調査を行う。
86	1963		Gerald Gruber (Styria 隊) Hans Pilz (Grazer-Linz 隊)	東部		オーストリア、2 隊が同じ目的で出発、後合同する。G. G. 隊には Rudolf Pischinger, Norbert Zernig, Sepp Weber, Manfred Schober 参加。H. P. 隊には Mathias Hofpointner, Siegfried Jungmair, Gerhard Werner 参加。Quaz-i-Deh から 3 日で谷の頭に BC (4572 m), ドシヤク (西支稜下。CI (5547 m), CII (6400 m), ヒバーク (6904 m, 雪洞)。8 月 21 日 <b>Doshaq</b> 西峰 (7200 m) に初登、主峰 (7492 m, 新ルートによる) の第 3 登。Grazer 隊は尚、8 月 28 日 <b>Khorpusht-e-Yakhi</b> (5697 m, ポーランド隊初登) の第 2 登及び 8 月 30 日 <b>Gumbaz-e-Safed</b> (6797 m) 初登 (ポーランド隊前に不成功)。
87	1963		Sepp Kutschera	東部		オーストリア、他に Werner Pongratz, Rainer Weiss, Alois Maier。1962 年に失敗した <b>Kishmi Khan</b> (7200 m) への再攻。7 月 27 日、支稜から 6100 m のところで西稜にとりつき初登頂 (S. K., W. P.)、7 月 28 日。(A.M., R.W.)。そのあとで <b>Koh-i-Warg</b> (6500 m), <b>Koh-i-Spurditsch</b> (6300 m) に立つ。
88	1963		Axel von Hillebrandt	中部		ドイツ, Münchner Exp. 他に Jochen Edrich, Erwin Grötzbach, Hans Huber, Rainer Köfflerlein, Ekke Rübel。6 月～9 月まで <b>Khwajam Muhammad</b> 山群の地理、地質、地形の研究を行う。序に <b>Koh-e-Münchner</b> (5600 m) 他 17 座に登頂する。
89	1963		Max Eiselin	東部		スイス、他に Alois Strickler, Hanspeter Ryf, Simon Burkhardt, Victor Wyss。カブール, Faizabad, Ishkashim, Wakhan Corridor, 8 月 16 日 Langar 村。ランガール谷と上部ウルゲンド谷 (Urgend-e-Bala) を偵察後、下ウルゲンド谷 (Urgend-e-Payan) に入る。8 月 20 日ウルゲンドをあとにし、2 日後 BC (4600 m)。8 月 26 日, S.B., A.S., V.W. が <b>Sirt-e-Urgend-e-Payan</b> (Shah, 6445 m, Sirt は雪峰) に初登。8 月 30 日, S.B., A.S., M.E. が Koh-e-Urup (5650 m), 9 月 4 日, A.S. が次いで 2 時間後 S.B., H.R., M.E. が <b>Sirt-e-Urgend-e-Bala</b> (Urgend, 7038

90	1963	Carlo Alberto Pinelli	東部	<p>m) に登頂, 9月7日, A.S., V.W. が第3登。(H.C. は 5400 m と 6400 m)。Langar 峰は余りに困難なることを発見。</p> <p>イタリー, 他に Giancarlo Biasin, Giancarlo Castelli, Guido Cosulich, Pietro Gui, Franco Chiergo. 隊長と G. Castelli は 1959 年にサラダラールへ行った。ワカン谷を廻り Khandut まで車, ここから <b>Lunkho</b> 山群踏査, 6000 m 級の難峰東西にあり, Ishmara 山群が北に延びている。8月17日 Max Eiselein 隊にあう。Khandut の西の谷と Ishmara の東の谷を探る。<b>Baba Tangi</b> 峰(谷の父, 6513 m)を発見し, 西稜の側峰の麓にある Baba Tangi 谷に BC (4800 m), CI (5450 m), CII (5900 m), 8月7日, 隊長, Castelli, G.B 初登頂。これは H.K. の北東端にある最高峰, 従って眺望は素晴らしい, Pamir, Batura 氷河, Gilgit 方面の山, サラダラール等が見えた。</p>
91	1964	Dietrich von Dobeneck	東部	<p>ドイツ, 他に Otto Huber を含めて 6 人。<b>Langar 前峰</b> (6170 m) 初登, 7月5日<b>同北峰</b> (6750 m) 初登 6 人, 7月8日<b>主峰</b> (7060 m) Otto Huber 初登, 7月8日 <b>南東峰</b> (6850 m) 初登 O. H., Languta-e-Barf (6995 m) は悪天で放棄, 但し山稜上の 6351 m 及び 5099 m の両峰初登, 7月30日 Koh-i-Bay Qara (5420) に登頂 (これはワカン回廊東部にある一峰なり)。</p>
92	1964	Arne Naess	東部	ノルウェー, Tirich Mir 東峰 (7692 m) 南壁攻撃成功, 登頂者は Ralph Hoibakk, Anders Opdal (7月27日)。
93	1964	Gerald Gruber	東部	オーストリア, Steiermark 隊, 他に Rudolf Pischinger, H. Schindlbacher, R. Goschal. 8月17日, <b>Shachaur</b> (7116 m), 8月19日, <b>Udrem Zom</b> (7131 m) に初登頂, Koh-i-Nadir Shah 第3登。
94	1964	M.W.H. Day 中尉	Swat	英国, Cambridge 隊, 他に John Peck, H.R. Samuel 中尉, R.J. Isherwood, Chitral を拒否され, Siri Dara の台地 (1962年に T.H. Braham に探られたことがある) 探査に入る。パキスタン地形局が最近 6400 m と測定す。8月中に 6 峰登頂, 中に初登頂ある管 (一峰には最近登られた足跡があった)。2 峰は c. 5800 m 以上, 但し Falak Sar (5918 m) よりは低い。

順序	年	主要人物又は隊長	地域	摘	要
95	1964	水野清一	西部		Siri Dara の最高峰は Mankial と記されたものであろう。 京都大学第5次イラン、アフガニスタン、パキスタン学術調査隊（7月～半年）。末尾至行、応地利明他10名。10月、ヘラトより H. K. 横断、カブールへ。
96	1964	松井秀治	中部		名古屋大学隊、他に8人（内仏教芸術隊4人）。6月中旬カイネムル峠よりカブール着。Shachaur を狙いたるも都合により <b>Koh-e-Bandaká</b> (6500 m) に変更。東側より攻撃、8月3日第1峰に登る、ドイツ隊（1963年）のペンタント発見、8月5日全員退却と決定、15日ゼバツクでドイツ隊と交戦、17日ファイザンバードで京大隊とあう。20日カブール着。
97	1964	Gene White	東部		アメリカ、他に Pat & Clarice, Caywood, Stu & Barbara Krebs. 北 Barum 氷河に BC (3900 m). 5000 m 級5峰に初登, <b>Kunotak</b> (5869 m) が最高。Tirich Mir 東峰を南東稜より試登。
98	1964	Hindu Kush Tagung (Bergsteiger, März, 1965)			H. K. 会議。オーストリア・ザルツブルグにて、(12月6日, 7日) H. K. Exp. の報告と研究発表の会。日本からも京大人文科学研究所の谷泰氏出席せりという。
99	1965	矢野 真	中部		大分県、他に西諒、梅本秀徳、姫野和記、加藤英彦、江藤幸夫。6月～7月、目標、 <b>Koh-i-Mondi</b> (6248 m), <b>Mir Samir</b> (6060 m)。出発前大部いざござありし模様。7月3日前者に登頂（西、梅本、江藤）。尚 Koh-i-Jumi (6020 m) にも登りしという。
100	1964	Wolfgang Haase	中部		ドイツ隊, E. Haase, E. Rinkl, W. Straass. Khwaja-Muhammad 山群, 上記 No. 88 に続いてこの山群に入り、両隊でこの山群を殆んど踏査しつくした感がある。
101	1965	高島一芳	東部		千葉県市川岳連、他に関谷宏、有岡達郎、小松敏二、青木敏夫、仁科正純並びに報道1名。目標 <b>Tirich Mir 東峰</b> (7692 m) 他。登山は8月上旬。 (パキスタン政府より登山不許可の通知あり、このため計画を 1966 年に延

102	1965	詳細不明	東部	期, 今年は隊員2人によるルート調査隊を送ることになった模様。 広島大学, アフガンよりチトラルへ。
103	1965	Craig Merrihue		アメリカ, 他に Michael Wortis, 夏季に遠征。但しこれは C. メリヒューが Dan Doody (Everester, 1963) と共にワシントン山のハンチントン谷にあるピナクル・ガリーの氷壁登攀中滑落死 (3/28) したため中止となった模様。
104	1965	Stefan Rausch	東部	独, スイス合同隊, 北西チトラル, 山脈の走行図作成の予定という。
105	1965	四方田清, 松倉和義	西, 中部	東北学院大学山岳部。Koh-i-Baba の Shah Fladi (5143 m) 試登 (4.15 ~ 5.3), 中部の Mir Samir (6060 m) 偵察 (5.10 ~ 5.26)。尚 1966 年度に同大学より同方面に本格的な登山隊が出される由。
106	1965	甘利仁朝 (31)	中部	丸子博之 (28), 佐藤之俊 (22), 一橋大学隊, Koh-e-Bandakā (6660 m) その他登攀, 偵察, 7.21 出発せり, 1966 年度のための先遣隊である。但し Karakorum 中部に許可がとればその方へ行くかも知れない。
追加	1955	Cambridge 大学々生	中部	Khwaja Muhammad 山群で活動, Hezrat-i-Muhammad (c. 4500 m) を初登顶, これはこの山群における最初の登山と思われる。
追加	1955	C. Hinze, H. Filipie	中部	Khwaja Muhammad 山群の諸溪谷を踏査する。

# A LIST OF HIGH MOUNTAINS IN THE HINDU KUSH RANGE

.....arranged and revised by Ichiro Yoshizawa.....

Area	Names of the Mountains	Alt.	Dates of the 1st Ascents	Nat.	Leaders
E	Tirich Mir	7700 m	1957-7-22	Nor	Arne Naess
E	Tirich Mir East	7692	1964-7-25	Nor	Arne Naess
E	Noshaq (Doshaq)	7492	1960-8-17	J	Y. Sakato
E	Istor-o-Nal	7389	1955-6-8	USA	J.E. Murphy, Jr.
E	<i>Saraghrar South-East P.</i>	7387 ?			
E	Saraghrar	7349	1959-8-24	It	Fosco Maraini
E	Noshaq East	7281	1963-8-21	Öst	G. Gruber, H. Pilz
		(7480)			
E	Noshaq West	7200	1963-8-21	Öst	G. Gruber, H. Pilz
E	Kishmi Khan	7170	1963-7-28	Öst	Sepp Kutschera
E	Udrem Zom (Shachaur 2)	7131	1964-8-19	Öst	Gerald Gruber
E	Koh-i-Nadir Shah	7125	1962-8-27	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	Shachaur 1	7116	1964-8-17	Öst	G. Gruber
E	<i>Langar 2 East Peak</i>	7061			
E	Langar 1	7060	1964-7-9	D	Dietrich von Dobeneck
E	<i>Tirich Mir North</i>	7056			
E	<i>Saraghrar N-E (1)</i>	7040			
E	Urgend	7039	1963-9-4	Sch	Max Eiselin
	(Sirt-e-Urgend-e-Bara)				
E	<i>Dhar</i>	7038			
E	<i>Achez Czioch</i>	7020			
E	Languta-e-Barf	7017	1963-9-27	Pol	Andrzej Wilczkowski
		(6995)			
E	Koh-i-Tez	7015	1962-8-28	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	<i>Noshaq S-E Peak</i>	6999			
E	Koh-i-Shayoz	6920	1963-9-20	Öst	Markus Schmuck
E	<i>Lunkho 1</i>	6890			
H. R	<i>Koyo Zom</i>	6883			
E	<i>Lunkho 2</i>	6872			
E	Koh-i-Shoghordok	6855	1963-9-20	Öst	Markus Schmuck
E	Langar South-East P.	6850	1964-7-8	D	D. von Dobeneck
E	Gunbaz-e-Safed	6797	1963-8-30	Öst	G. Gruber, H. Pilz
E	Langar North	6750	1964-7-5	D	D. von Dobeneck
E	South Glacier Peak	6700	1939- ?	Br	Miles-Smeaton
E	<i>Nameless</i>	6681			

H. R	<i>Tui Peak</i>	6672			
M	Koh-i-Bandakâ (kor)	6660	1960-9-22	D	W. von Hansemann
		(6500)			
E	Koh-i-Mandaras	6631	1962-9-4	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	<i>M 8 (West of Mandaras)</i>	6626			
E	<i>Noshaq East, East Peak</i>	6588			
E	M 2	6580	1963-9-25	Pol	A. Wilczkowski
H. R	Buni Zom	6551	1957	NZ	?
H. R	<i>Daspar</i>	6526			
E	Baba Tangi	6513	1963-8-?	It	Carlo Alberto
E	<i>Nameless (Nicolas Ra.)</i>	6504			
E	Koh-i-Warg	6500	1963-7-?	Öst	Sepp Kutschera
E	<i>Wakhjir Pass South P.</i>	6500			
E	Asp-e-Safed	6449	1960-9-4	Pol	B. Chwaszinski
E	Shah (Sirt-e-Urgend-e-Payan)	6445	1963-8-26	Sch	Max Eiselin
E	Awar (Auar)	6440	1963-10-2	Pol	A. Wilczkowski
E	<i>Saraghrar N-E (2)</i>	6421			
M	Koh-i-Bandakâ North	6400	1963-7-17	D	Th. Trübswetter
E	<i>Kotgaz An N-E Peak</i>	6342			
E	<i>Mandaras S-E Peak</i>	6330			
H. R	<i>Shakhandok</i>	6320			
H. R	<i>Nameless</i>	6310			
E	Koh-i-Spurditsch	6300	1963-7-?	Öst	Sepp Kutschera
E	M 4 a	6274	1962-8-?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
M	Koh-i-Chrebek	6250	1961-8-17	D	J. Ruf
M	Koh-i-Mondi	6248	1962-7-26	D	Sepp Ziegler
E	<i>Mandaras East Peak</i>	6224			
M	Kon-i-Bandakâ Sachi	6200	1963-7-17	D	Th. Trübswetter
E	Langar Vorgipfel	6170	1964-7-?	D	D. von Dobeneck
E	<i>Kotgaz Gl. northside P.</i>	6167			
M	Shakh-i-Kabud	6150	1961-9-6	D	D. von Dobeneck
E	M 3	6100	1962-8-?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	<i>Ishpandar Sor</i>	6088			
M	Mir Samir	6060	1959-6-21	D	H. Biller
M	Koh-i-Marchek	6060	1961-9-1	D	D. von Dobeneck
M	Koh-i-Jumi	6020	1962-7-26	D	Sepp Ziegler
E	<i>Noshaq group East end</i>	6012			
E	M 5	6000	1962-8-?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer

**Explanation of the abbreviated letters.....**

Alt (Altitude), Br (British), D (Germany), E (East), H. R (Hindu Raj Range), It (Italy), J (Japan), M (Middle), Nat (Nationalities), Nor (Norway), Öst (Austria), Pol (Poland), Sch (Swiss).

Printed in italics are the unclimbed peaks.

## Some Reference Books and Journals

### Books ;

- 1896 (Revised) : George N. Curzon, "The Pamirs and the Source of the Oxus", The Royal Geographical Society, London.
- 1904..... : O. Olufsen, "Through the Unknown Pamirs (Vakhan and Garan)-The Second Danish Pamir Expedition, 1898-99", William Heinemann, London.
- 1912..... : Aurel Stein, "Ruins of Desert Cathay", Macmillan, London.
- 1933..... : Aurel Stein, "On Ancient Central Asian Tracks", Macmillan, London.
- 1935..... : R.C.F. Schomberg, "Between the Oxus and the Indus", Martin Hopkinson, London.
- 1938..... : R.C.F. Schomberg, "Kafirs and Glaciers", Martin Hopkinson, London.
- 1949..... : Harold W. Tilman, "Two Mountains and a River", Cambridge at the University Press, Cambridge.
- 1952..... : Arne Naess, "Tirich Mir, The Norwegian Himalaya Expedition", Hodder and Stoughton, London.
- 1952..... : George Seaver, "Francis Younghusband, Explorer and Mystic", John Murray, London.
- 1958..... : Eric Newby, "A Short Walk in the Hindu Kush", Secker and Warburg, London.
- 1961..... : Mrs. Joyce Dunsheath and Miss Eleanor Baillie, "Afghan Quest, The Story of the Abinger Afghanistan Expedition, 1961", George G. Harrap, London.
- 1963..... : Max Eiselin, "Wilder Hindu Kush", Orell Fussli Verlag, Zürich.
- 1964..... : Fosco Maraini, "Where Four Worlds Meet, Hindu Kush, 1959", Harcourt, Brace and World, New York.

### Journals and Newsletters ;

American Alpine Journals,

Alpine Journals,

Himalayan Journals, especially, Vol XI (1939), "Pioneer Exploration in Hunza and Chitral", by George Cockerill and Vol. XXV, 1964.

Die Alpen,

Geographical Journals,

Der Bergsteiger, especially,

März, 1965—"Österreichische Hindu Kush Tagung"

April, 1965-“Landschaft und Mensch im Afghanischen Hindu Kush” von  
Erwin Grötzbach.

Österreichische Alpenzeitung, especially,

Sept/Okt, 1963, Mai/Juni, 1964, and Jan/Feb, 1965.

American Alpine Club News-Nos. 82-84,

Himalayan Club Newsletters-No. 22, Dec. 1964.

## 和 書

昭和36年(1961), 京都大学学士山岳会編著, “ノジャック登頂”, 朝日新聞社発行

” 33年(1958), 本多勝一 “知られざるヒマラヤ〜奥ヒンズークシュ探検記”, 角川書店

” 33年(1958), 松下進編 “スワート・ヒンズークシュ紀行〜日ハ合同学生探検の記録”, 三一  
書房。

他に “山岳”。

その他, 深田, 田中(栄), 松田夫妻, 薬師, 岩坪, 中馬, 田村(協), 佐々木(仙台)等の諸兄弟  
からいろいろ助言を得たことを感謝します。



世界の四大スポーツ品メーカー

RK Mizuno



# 美津濃 '66 SKI

## スピードを 科学した



美津濃の研究陣が徹底的に追求したスキースピード。マックス・グライドFLソールはその結晶。一万円以上のスキースピードに、全面採用しています。特許・実用新案出願中。アフター・サービスも一歩進みました。ヒッコリー・スキーについて(三割交換)を実施、いままでの無料修理と、どちらかご都合の良い方をお選びください。

- ☑ヒッコリースキー
- スラローム、コンビ
- 特価 ¥ 11,000・¥ 10,000
- ウェーデルン(3割交換・無料修理)
- ¥ 7,000~¥ 10,000
- ☑グラススキー(無料交換)
- R・スラローム……………¥ 30,000

- コンビ ¥ 16,000・¥ 30,000
- ☑ユニグラススキー(無料交換)
- コンビ……………¥ 12,000
- ☑メタルスキー(無料交換)
- R・スラローム……………¥ 29,000
- ☑メタルヒッコリースキー(無料交換)
- コンビ……………¥ 16,000



この看板の店・デパートで《美津濃》とご指定下さい



**サンケイバレイ** はびわ湖の西岸比良山系の打見山とホーライ山を中心に開発した四季を通じてのレクリエーションセンターです。湖岸から打見山山頂まで標高差にして約800メートル、斜長約2000メートルをロマンスシートに坐ったまま、わずか20分でサンケイバレイ自慢の動く登山路〈カーレータ〉が御案内いたします。冬はトレール方式を採用した流れるスキー場、春はシャクナゲとドウダンツツジの花々、夏は避暑とキャンプ、秋はリフトに乗って数百年を経た原生林の紅葉見物とみなさまのおこしをお待ちしております。

## サンケイバレイ

現地木戸営業所 滋賀県滋賀郡志賀町木戸  
大阪事務所(サンケイビル内) TEL大阪 (361) 1221

## 山の遭難を

なくしましょう



それでも遭難は起こります

## 保険証券を加えて**装備は完全**

—— 日本団体生命の山岳保険 ——

当社は、遭難された多くの方々に、多額の奉仕をしてまいりました。営業ですから、利益を度外視して、といえは嘘になりますが、事実は全くの社会奉仕となっております。それだけ遭難が多いことです。

皆様が一人でも多くご加入になれば、貯蓄と同時に、山男の美德即ち相互扶助の精神が生かされるわけです。

当社の山岳保険は、普通の養老保険に災害保障特約がつき、災害による万一の場合には即時(条件あり)2倍の保険金が支払われます。又、災害により10日以上入院された場合にはお見舞金を差上げます。

昭和生れのホープ

**日本団体生命**

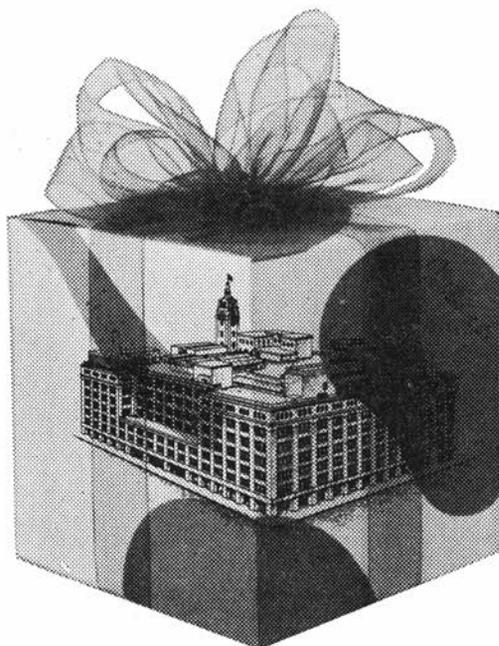
本店・東京都千代田区丸ノ内1～2 電話・東京(281)3211(代表)  
別館・東京都中央区日本橋小伝馬町3～2 電話・東京(662)3311(代表)

ヒマラヤ遠征にも参加した……

# △明治屋の缶詰

●いつも いちばん いいものを





流行の  
トップをゆく  
フアツション…  
伝統の  
みやびなきもの…  
産地直送の  
香りゆたかな  
風味…  
ハイセンスの  
リビング用品…  
いつも  
新しい暮らしの  
夢をおくる三越



**三越**

お買物の楽しさもそえて贈る  
受けて重宝三越の商品券  
10,000円券まで各種 全国本・支店共通

日本橋本店・新宿・銀座・池袋・丸の内(以上東京)・大阪・神戸・京都・高松・松山・仙台・札幌

全国有名運動具店・百貨店にてお求め下さい。



優れた品質と技術を誇る

東京 **トップ** 印

**登山用具**

KK東京**トップ**

東京・大阪



# ジョッキーの 登山靴

Jockey



## [特長]

- 抵抗面を避けるため、ホックを極力使はず  
D環を内面に包蔵する最新の方式を採用した
- 完全防水の“袋ベロ”を使用
- 底ゴムはイタリア製ビブラムを使用
- 最高製靴工の完全手縫
- 登山靴専用に鞣させた最高級皮革



- \*ピークハンターNo.90  
(最高級岳人用・舶来底使用) ¥9,000
  - \*クライマーエリートNo.75  
(高級登山靴・舶来ビブラム使用) ¥7,500
- 全国百貨店・有名運動具店でお求め下さい



40年の歴史と 東京・蔵前 (浅草局区内)  
信用のマーク ジョッキースポーツ株式会社 (PR課)

# エバニュー

山を愛する人のみが知る  
エバニューの

登攀用具  
スキー用具

ゼッス  
¥ 7,000

ニッケルクローム  
モリブデンNo.5  
鋼材使用・火造  
特殊焼入、焼戻  
し加工



超ジュラルミンカラビナ  
安全装置付 ¥ 700

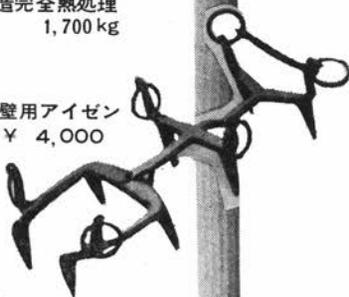
JIS75材使用  
型鍛造完全熱処理  
強度 1,700 kg



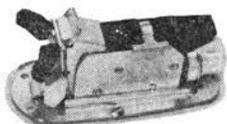
最高の締具！  
ブラックスリー  
(自動踏込式締具)  
¥ 3,500



8本爪氷壁用アイゼン  
¥ 4,000



- ・立ったまゝワンステップ  
で着脱自在
- ・骨折捻挫を99%  
防ぐ
- ・廻転がし易い



スキー、登山、ハイキング用品の総合メーカー

**EVERNEID**



スタイリストの登山靴



スタイリスト、都会の若人向のスマートなデザイン…  
革登山靴同様の機能を備え  
しかもスマート……これがポイント



ピーク

\* ナイロン登山靴

カラー・サイズ 紺(21.5~27.0) 赤(21.5~24.5)  
価格..... 2,300円

オニツカ株式会社

本社・工場 神戸市須磨区寺田町3丁目4

# 南極で 実証済み



ご存じでしょうか。日本南極観測隊の装備をお引き受けしたのは、わたしたちです。

防寒服も、防寒靴も、わたしたちがデザインし、制作指導しました。テストにテストを重ね、厳密な低温試験をくりかえし、その努力がみのつて、隊員の方々から折紙をつけていただきました。米、英、ベルギー、南ア、オーストラリアにも防寒装備を納入し、優秀な性能は世界的に認められています。冬の装備なら、ぜひ当研究所にお問い合わせください。

## 日本極地装備研究所

東京都千代田区三年町1番地(商工会館内)  
TEL 東京 581-1078

登山とスキー

# イワタ



アライズ  
リスト  
進全

東京都中央区日本通り2-1

TEL (271) 1718-7686

振替口座 東京 45929

## SPORDEN

\* スポーツシューズは…

スポーデン印を!

スキー/スケート/ゴルフ  
ホーリング/登山/野球



●台東区浅草吉野町1-16 スポーデン株式会社 電話(872)8121



外にも  
中にも  
キルティングの  
縫い目が  
ないので  
保温性は  
最高です。



## カネカロン BB シュラフ

### ▶カネカロンBB

特殊加工により成型されているので厚さが一定して保温が平均しています。引っぱってもちぎれません。普通のわたの10倍の強さです。引っぱってもすぐに完全にもとの状態にもどります。

### ▶普通の合繊わた

わたの厚さが一定していないので保温性にむらがあります。引っぱると簡単にちぎれてしまいます。引っぱると変形してもとの状態にもどりません。

品種 オールシーズン用 アルプ 冬山用 ポーラー  
デラックスオールシーズン用 アタック デラックス冬山用 ポーラー・スーパー  
その他キャンピング用スリーシーズン用も各種取揃えてあります。

製造元 **鐘淵化学工業株式会社**

発売元 **株式会社 山晴社**

東京 TEL (201) 6571代 大阪 TEL (202) 1121代 東京 TEL (291) 2722・6905 大阪 TEL (441) 4431・5204

### 好評発売中

## 坂本直行画文集 雪原の足あと

B 5判 200頁 原色版38 図版65 特装本 函入り/定価 2,800円

### 坂本直行のこと

「雪原の足あと」は直行の生涯の一つの転機を記念する本である。つまり30年間離れたことのない鉄とこ、で袂別して、一人の画家としての直行がこゝから出発するのである。

百姓と縁を切るのは如何にも惜しい、など、いうのは、のんきな傍観者の感慨であろう。直行は30年間、来る年も来る年も、借金と戦いながら、辛うじて開拓を続けて来たのだ。だから、実は、そうした感想を開陳する前に、そんなことをやられている北海道の農業の姿を、問題にしなければならぬことになりそうなのである。

もともと直行の方からいえば、そもそもは、思う存分自然の中に飛込んで、好きな山を眺めたり登ったりしながら暮らしていこ

うというところから、話が始まっているのだろうから、その30年がまるまる損だったわけではない。その上何度も絵の展覧会を開いて、山の好きな奴に絵を頒けてくれたり、本を出して、青白きインテリ共を感激させたりして来たのだから、結構世のため人のためにも尽したということになる。

明治39年生れといえ、今や直行も還暦は目の前だ。だがあの面構えを見ては、到底いっしょに山などへは行けない。多分今でも、山登りの如く、風を切って山を駆け廻っているに相違ない。恐るべき人物である。まずまずわれわれは、直行の文章を、また、直行の絵を楽しむことで満足した方が無事であろう。

(日本山岳会々長) 松方三郎

### 【主要目次】

ボロシリの歌声 又吉物語 初夏の南日高 しらねあおい 吹雪の結婚行進曲 九の沢カールケルン 5月の5色ガ原からみたトムラウシ 然別湖と西ヌブカウシ えぞにう雪原の足あと 春の暑寒別山群 12月の身辺雑記 原野と日高の山波 へびのたいまつ ばあふとちいそぶ 広尾又吉の死 夢の白鳥を訪ねて 早春の天狗岳を眺めて すみれ 流水と氷原を訪ねて 利尻富士の遠望 熊獲りの弥次馬になった話 僕の個展

発行 **茗溪堂** 東京都千代田区神田駿河台 2-1 電話東京 (291) 2811 振替24723

# ルガスキー

マッハで滑る!



世界最初の  
テフロンスキー

東京営業所 東京都千代田区神田小川町3-16  
TEL. (291)5851・(201)9498  
茅ヶ崎工場 神奈川県茅ヶ崎市今宿  
TEL. 茅ヶ崎 3 2 8 6  
本社・工場 札幌市北五条西十九丁目  
TEL. 札幌 (63) 3388-9



身体の消耗を  
考慮し、装備には  
随分気を配った  
が、シャモニーシ  
リーズのザックを  
選んだ。これは  
たぶん、科学的な  
運動科学に基づい  
て作られた。荷重の  
分散具合が実によく計  
算工から作られた。お  
まかせしよう。

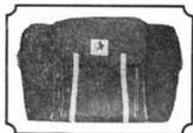


無駄を  
シャット・アウトした!

**チロリアン印**

シャモニーシリーズ

シャモニーグレンドスター ¥ 600  
シャモニーサブ ¥ 1600  
シャモニースタンダード ¥ 1600  
シャモニーデラックス ¥ 2200  
シャモニーアルペン ¥ 2600  
シャモニーバッグ ワイズバック  
¥ 800



株式会社 **サクライ**

東京都台東区蔵前2丁目2番5号  
TEL (851)3356-8・7611-0997(861)0933-5

# 山とスキーの専門店

キスリング

門田ビッケル

// アイゼン

夏冬用テント

## 片桐

東京都文京区湯島町3丁目38-9

片桐盛之助

電話 下谷(831) { 1794番  
6880番



## 山友社 たかはし

### 登山・スキー靴

四谷本店

新宿区三栄町3

TEL(351)1912,7432

八重洲口

中央区八重洲2の5

TEL(271)1560,8575

新宿ステーションビル4階

サービスショップ

TEL(352)6564



### 登山とスキーの

### 日本最古の専門店

## 好日山荘

東京店

東京都中央区銀座西2の5

電話(561)3600

振替東京113657

大阪店

大阪市北区老松町3の12

日新ビル1階

電話(341)7745(361)9330

振替大阪68763

神戸店

神戸市生田区三宮町1-32-1

電話(33)5251

振替神戸21352

福岡店

福岡市上洲崎6番地

電話(28)3440

世界のエクスペディションが使用した

## 高処用登山器具全般

酸素ボンベ一式

羽毛服各種

(フランス A. M. P社製)

(フランス モンクレール社製)

ピッケル クランポン アイスハーケン

(フランス シモン社製)

日本国内総発売元

### 福井株式会社



TEL (342) 2931-2 本社  
(342) 3771-2 本社

## アルピニスト に贈物!

………日本山岳会の御愛用の品………

すばらしい、理想の装備、手頃な値段!

東洋羽毛の羽毛シユラフ、各種羽毛服

保温、通気性、軽さ、が最高

是非御愛用下さい。



### 東洋羽毛工業(株)東京営業所

東京都渋谷区中通り2-15 TEL (403) 5704



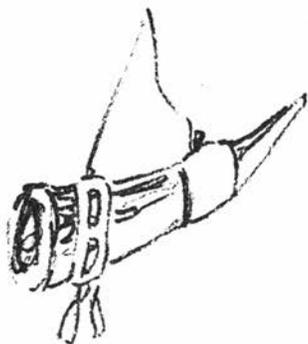
## 38年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊  
全装備納入以来高所用天幕専門  
製作 海外遠征隊には各方面より  
御使用頂き御高評頂いて居ります

## 吉田テント 吉田喜義商店

東京都杉並区桃井一丁目三番三号  
電話東京(399)2548 (398)8469(夜間)



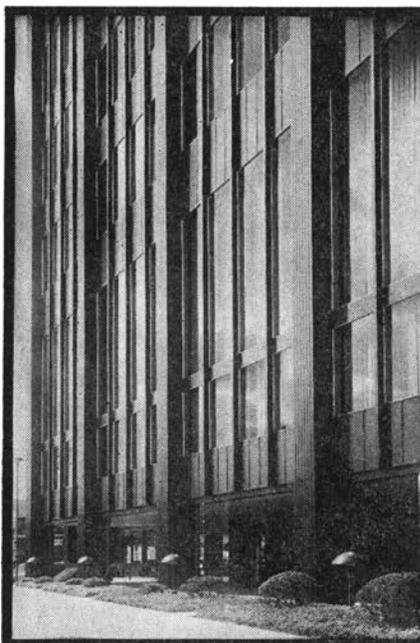
# 北海道、山の店 秀岳荘

札幌市北13条西4丁目  
TEL (71) 2346・8739

## 御在所岳

三重県湯の山温泉





# 日本建鉄の カーテンウォール

アルミ  
スチール  
ステンレス

サッシ・ドア  
ドリームドアオペレーター

## 日本建鉄株式会社

東京都千代田区大手町2の8 (日本ビル)  
電話 東京 (270) 6511 (大代表)

新しい技術を常に開発!

## アルケン 56N アルケン 60N

アルケンとは、合成洗剤の主原料であるアルキルベンゼンの商品名です。  
《日石洗剤》が、はじめて国産化したすぐれた製品です。  
アルケン60Nは洗浄力がさらにすぐれた高分子量のもです。

### 日本石油洗剤株式会社

本社 東京都港区西新橋1丁目3-12 日石本館 (502)1561  
出張所 大阪市北区中之島2-2-2 新朝日ビル (231)0986

## 頭痛

仕事に疲れて  
頭が痛い、混

雑にもまれて頭が重い……  
こんなときは新グレランの  
効きめをおためしください。

## 歯痛

虫歯の痛みも  
歯ぐきの痛み

も、痛みだしたら早目に新グ  
レランをおのみください。強  
力な鎮痛効果を發揮します。

## 生理痛

新グレランの  
強力な鎮痛・

鎮静作用——痛みもおさま  
り、憂うつな気分も明るく  
なります。

## 神経痛

肋間神経痛や  
坐骨神経痛の

はげしい痛み……がまんし  
ないで新グレランをどうぞ。  
3ツの有効成分が痛みをお  
さえます。

## 腰痛

俗にいう四十  
手五十腰にも

新グレランが効果的。運動  
後の筋肉痛にもぜひ——

痛みによく効く

新グレラン錠

普通一回一錠 はげしい痛みに一錠半  
(包装) 二錠 三錠 一〇〇錠



製造  
販売  
グレラン製薬  
武田薬品



武田販売

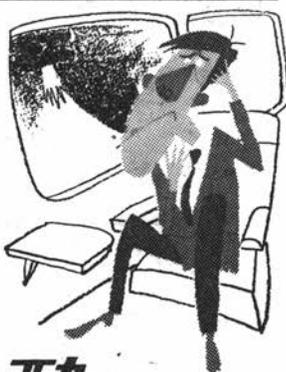
★ 缶入りサッポロ  
アルトトップ



出発前に1錠!



出発30分前にトラベルミン  
をまず1錠……のみ忘れて  
酔ってからでもすぐ1錠…  
トラベルミンは 水なしで  
どこでも手軽にのめます  
から旅先でとても重宝です



乗りもの酔いなら  
**トラベルミン**

ソフト錠--6錠 100円/30錠 400円/120錠 1,000円



子供さんには かんでおいしい…小学生用**トラベルミン**  
6チューブ 80円



アサヒケイサイ

出光

スタート

ここでぐっと差をつける

出光興産



中外製薬

必携！グロンサン  
強力内服液で、体  
力もガツチリ！快  
調にいきましょう

山へ！

強力内服液

グロンサン



祝「山岳」  
第六十年



やわらかい味と  
お手ごろの価格……  
ご指名のお客さまが  
さらに増加中！

ハイ  
ニッカ  
500円

ニッカ  
ウ井スキー

●ポケットびん…150円 ニッカウヰスキー株式会社



三井物産の



こけし印

詰ム  
話ム  
ソノ  
セージ

貯蓄の最高峰…

## 三井の貸付信託

- 三井の貸付信託は—
- 元金は法律により当行が保証
  - 高利回り
    - 年7分3厘7毛(5年もの)
    - 年6分5厘(2年もの)
 いずれも予想配当率
  - お申し込みは1口1万円から…
  - ご印ひとつでカンタン



## 三井信託銀行

本店 東京 日本橋室町  
270-9511



## より美しく より使いやすい カラーのSS

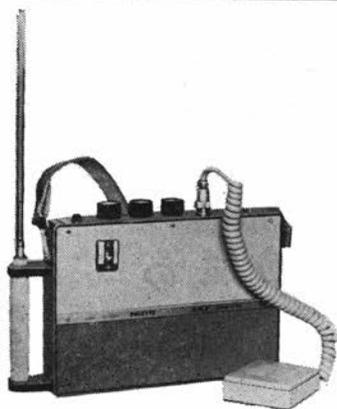
世界のカラー 新発売



富士フイルム

# フジカラー N100

35mm 12枚撮290円 20枚撮420円 現像料別



FB-600型エネートランシーバ

南極観測に！

ヒマラヤ・ゴジュンバ・カン等

海外遠征登山に！

隊員に愛用されて、世界各地で活躍しているのがエネートランシーバです。

性能 FB-600型エネートランシーバ  
 空中線出力 0.5W  
 周波数 26.968 26.976 MC  
 受信感度 1 $\mu$ V(S/N 10dB, 50mW)  
 寸法 255×180×41 重量3kg

ANY 株式会社 **エニー**

東京都世田谷区鳥山町1801 TEL(300)7311代

オートメーションの  
 完全体制を推進する

横河の電気計測器と  
 本山のコントロールバルブの御用は

**SUN**

横河電機製作所 代理店  
 本山製作所(仙台)

有信計器株式会社へ

取締役社長 神谷 恭 (JAC-744)

横浜市花咲町4-117 中銀ビル TEL(23)6551-3番

電線・ケーブル・

◆◆ 播州電機株式会社

姫路・大阪・東京・名古屋・神戸・富山・札幌



# ヒマラヤの高峰

深田久弥著 全5巻完結

B6判220頁平均・価1～3巻480円、4・5巻520円、  
布装函入美本、口絵写真4頁、地図・スケッチ多数

- 第1巻ヒマラヤ概観、エヴェレスト他10峰
  - 第2巻ヒマラヤ略史、K2他12峰
  - 第3巻高所ポーター、カンチエンジュンガ他11峰
  - 第4巻シェルパ列伝上、ナंगा・パルパット他12峰
  - 第5巻シェルパ列伝下、マナスル他11峰
- ※別巻 ヒマラヤの写真集(1966年1月刊の予定)

株式会社 **雪華社** 東京・中央・京橋1-7 電561-4077  
振替東京42150



## 山とスキーの専門店

関西登山スキー専門店会加盟店



## 山の店

大阪市北区曾根崎上1-24  
(梅田大映・お初天神裏)  
TEL 341-4192

# バツジ

ペナント  
ワッペン  
旗  
カップ  
トロフィー

金属看板  
七宝焼  
タイ止  
メダル  
キーホルダー  
ネームプレート

東京都千代田区飯田町1-16  
TEL(262)2424・2431・4871・夜間(261)4095

**アジア徽章**

# 登山・ハイキングシリーズ

時間

定評ある

コースタイム入精密地図と案内書

- ① 奥武蔵・武甲山・三峰・坂倉登喜子
- ② 奥秩父・金峰・甲武信・雲取・乾徳・横山厚夫他
- ③ 奥馬高高原・秋川溪谷・道志山塊・浜野栄治他
- ④ 丹波・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑤ 箱根・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑥ 奥日光・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑦ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑧ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑨ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑩ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑪ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑫ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑬ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑭ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑮ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑯ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑰ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑱ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑲ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ⑳ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉑ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉒ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉓ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉔ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉕ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉖ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉗ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉘ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉙ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉚ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉛ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉜ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉝ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉞ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㉟ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊱ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊲ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊳ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊴ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊵ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊶ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊷ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊸ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊹ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀
- ㊺ 尾瀬・日光・五湖・奥三ツ峠・高尾山・宮城和秀

- ① 金剛・生駒・信貴・仲西政一郎
- ② 六甲・生駒・信貴・仲西政一郎
- ③ 岩湧山・紀泉高原・友ヶ島・仲西政一郎
- ④ 京都・北山・比良・角倉太郎
- ⑤ 吉野・高野・仲西政一郎
- ⑥ 大峰・山と溪谷・仲西政一郎
- ⑦ 大台ヶ原・大杉谷・高尾山・仲西政一郎
- ⑧ 南紀・熊野・伊勢・志摩・仲西政一郎
- ⑨ 奥高尾・龍神温泉・湯ノ峰温泉・水町道他
- ⑩ 赤目・青山・室生・伊吹・水町道他
- ⑪ 鈴鹿・御在所・伊吹・水町道他
- ⑫ 大赤岩・三瓶山・備北山群・佐野勇一
- ⑬ 秋吉・三段峽・雲北山群・加藤武三
- ⑭ 九重・飯田・久住・万年山群・加藤武三
- ⑮ 英彦山・登山と耶馬溪・橋本三八
- ⑯ 阿蘇・山と馬場・周遊・熊本県岳連
- ⑰ 阿蘇・山と馬場・周遊・熊本県岳連

地図専門の **ニッパ**  
**日地出版**  
 本社 東京都千代田区西神田1-7  
 振替 東京195917 TEL (261)5126-8  
 支店 大阪市南区安堂寺橋通3-60  
 振替 大阪 28570 TEL (251)0609

日本山岳会への払い込みは最寄りの協和へ、  
 登山・ご旅行に欠かせない協和のワイドサービス預金

# 協和銀行

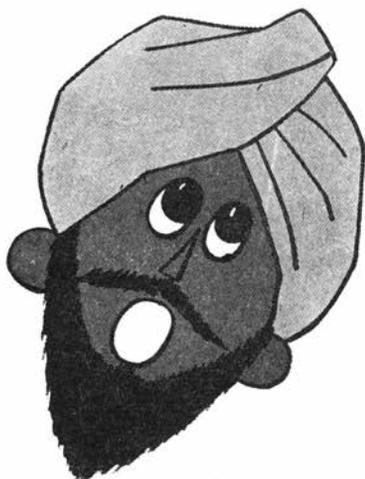
本店(東京駅前) 中目黒支店(中目黒駅前)

TEL 212-0211(大代) TEL 713-2111

他に大阪・名古屋・横浜・神戸・札幌・仙台・福岡等全国に220ヵ店



インド人がビックリしたのは  
このエスビーカレーです



特製 **エスビー** 固型即席

# カレー 新型

味のよさと使いよさ。ふたつの点で、うんと研究された即席カレーです。

主原料は、ご存じの赤缶エスビーカレー。インド、セイロン、香料群島から輸入した高級スパイスが、30数種も入っています。そのうえミルクや脂肪、イノシシン酸などもたっぷり加えました。

これをポリカーボネートに密封。味と香りをいつまでも逃がしません。

8皿分 **50**円

**エスビー** 食品株式会社

# われ北壁に成功せり

服部(芳野)満彦著

氷雪におおわれたマッターホルンの北壁登頂後、著者は「ツェルマツトより愛をこめて われ北壁に成功せり」と愛妻へよろこびを打電したが、その数日後、僚友は山麓に愛するひとを残したまま殺人岩壁アイガーで劇的な最期をとげた。マッターホルンとアイガーと、二つのドラマに立ちあつた著者が自から書きおろした真実の愛と死と苦闘の記録がここにある!

380円

実業之日本社

東京銀座西1の3・振替東京326番



山頂はザイルの長さにして20メートルとはなかつた。アルプス三大北壁の一つ、その最後のピッチ、私のよろこびは半分涙となつていた……

## ▶ 茗溪堂出版の図書目録 ◀

当社の本は全国どこの書店でも取扱っております 目録の本はどれも在庫あります 書店にない場合は注文して下さいと 東京から遠い所でも2週間ぐらいでお手元に届きます

### 山で唄う歌

戸野昭・朝倉宏編/A6ポケット型/I ¥130  
II ¥160/山で歌を唄う人たちの気持ちにピッタリ合った歌集 カット絵のビッケルや山岳会のマーク山の線描スケッチがまたたのしい

### 山日記

1966年版/日本山岳会編/A6判ポケット型  
400頁/¥400/赤い表紙でおなじみの山を愛する人の日記 30輯の伝統を重ねていよいよ充実 新鮮な内容と確実な記事でいっぱい

### 国立公園カレンダー

1966年版/日本国立公園協会編/B5判リング綴/¥700/さまざまな風景のひろがりを見せる日本の国立 国定公園の美しさを写真で楽しみながら使う大型のデスク・ダイアリー

### 山・よき仲間

成瀬 岩雄著/B6判・本文280頁・写真12頁・箱入上製本・限定版/¥800/よい仲間たちとよい時代にめぐまれた著者30年にわたる山行の記録と折にふれてしたためた小品集

### アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編/¥690/美しい写真と文章でたのしめる小人数によるヒマラヤ遠征の貴重な記録 京大のなが年のヒマラヤへの夢はここにはじめて実を結んだ 箱入美本

### 南極新聞

1956~7年/南極研究会編/B5判・横トジ ¥600/第一次南極観測隊の記録 男ばかりの世界に設立された南極新聞社の日刊新聞縮刷版 南極観測隊の活動を ことごとく網羅

### 山岳

日本山岳会年報/60年版・写真多数/¥1,500  
バックナンバー/48年¥400/51年 52年 53年 ¥500/54年 ¥700/57年 ¥800/58年 ¥1,000  
59年 ¥1,200/山行の記録と研究報告

### 山日記の栞

赤い表紙の豆腫筆集 山の好きな方々がいろいろな角度からいろいろなことを取りあげた 珠玉の小品とエッセイ 書店または小社までお申込下さい たちにお送ります 無料

東京都千代田区神田駿河台2-1  
電話東京 291-9442/振替東京24723

## 技報堂の優良理工学図書選

### 気象学ハンドブック

同編集委員会編 A 5・1580頁 価 2,500円

### 近代気象調査法

渡辺次雄著 B 6・310頁 価 450円

### 天気学

技報堂全書10  
渡辺次雄・荒井隆夫共著 B 6・350頁 価 500円

### 栄養学ハンドブック

同編集委員会編 A 5・1240頁 価 2,500円

### 微生物学ハンドブック

同編集委員会編 A 5・1500頁 価 3,000円

気象学の基礎理論から応用までを気象庁第一線技術者が詳述

調査の方法、資料の纏め方、調査指針をわかりやすく解説す

天気のあるようと天気のはたらきを体系的にまとめた好書。

栄養学の一大体系で我が国唯一の便覧と好評の書関係者必携

病原・非病原の一切を含む微生物学に関する総合的一大便覧

図書目録送呈

東京都港区赤坂溜池5 振替東京10 Tel.583-8581

技報堂

丸善の洋書ご案内



東京・日本橋  
電話272-7211

世界山岳年鑑 1964-65 年版 / (G. Allen and Unwin, London)

# THE MOUNTAIN WORLD 1964-65

With 64 plates and maps / Edited by Malcolm Barnes

〈本年末刊行予定・ご予約承り中〉 1965. 24×18 cm. 概価 ¥ 2,520

1953年の第1巻刊行以来、世界中の登山家・山岳愛好家に親しまれているロンドン G. Allen 社の山岳年鑑 1964-65年版が本年末に出版されることになりましたので案内申し上げます。本版では、これまでヒマラヤ山脈以上に知られていなかったヒンズークシ山脈の中央ヨーロッパ隊による遠征記が特集されており、その他、西尾根からのアタックで成功を収めたアメリカ・エヴェレスト登山隊の記録、殆ど知られていないブータン山脈紀行、フランス隊によるアラスカのハンチングトン登頂記、南極大陸のエルズワース山脈探検記、ドミンゴ・ジョッピーのアンデス縦走記、カナダ領バフィン島の登山記などの貴重なドキュメントや、シッキム地方の地名由来に関する記事など興味深い読物が豊富に盛り込まれています。また、巻末には山岳・登山に関するコンプリートな文獻書誌も収録されています。

アメリカ遠征隊によるエヴェレスト登頂記 / (Sierra Club, San Francisco)

## EVEREST: THE WEST RIDGE

Photographs by The American Mt. Everest Expedition

Text by Dr. Tom Hornbein Ed. by D. Brower.

〈本年10月末刊行〉 88 pages of color photos. 概価 ¥ 10,000

本書は、山岳叢書として有名な Sierra Club 社出版の "The Exhibit Format Series" の1冊で、登山史の輝かしい1ページを飾るアメリカ遠征隊による西尾根からのエヴェレスト登山記が素晴らしいカラー写真で収められています。

### ■定評あるベースボール・マガジン社の山岳名著選 各A5判上製箱入

1963年アメリカ隊

# エヴェレスト登頂記

最新刊  
発売中

ジェームス・ナルマン著 / 丹部節雄訳 / 三、八〇〇円  
西稜に新ルートを開拓して登頂し、山頂を縦断、従来のサウスコル・ルートで下山した。登山行動を逐一映画に記録し、写真多数。著者はアメリカ一流の山岳通作家。

## ダウラギリ登頂

M・アイゼリン著 / 横川文雄訳 / 一、六〇〇円

## 未知の山へ

W・ノイス著 / 野間寛二郎訳 / 九〇〇円

## ある六級クライマーの手記 垂直のあなた

G・リヴァノス著 / 安川茂雄訳 / 一、四〇〇円

## ヒマラヤの詩と真実 チャムラン

岡本、久木村、安間、鈴木 共著 / 一、四〇〇円

## プモ・リー 地上最高の山

G・レンザー著 / 織方・橋本共訳 / 一、六〇〇円

## 雲の中の九カ月

E・ヒラリ著 / 丹部節雄訳 / 一、二〇〇円

## エヴェレストの魅惑

グヤンシン著 / 野間寛二郎訳 / 一、四〇〇円

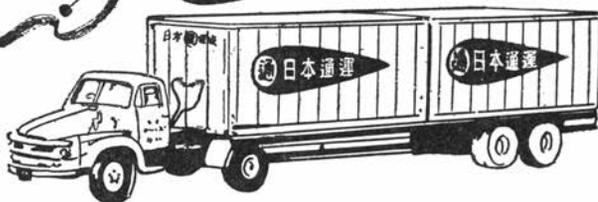
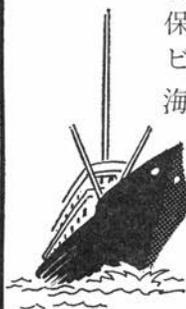
## 冬のアイガー北壁初登攀

T・ヒーベラー著 / 横川文雄訳 / 八〇〇円



## 営業案内

通 運 (車扱混才)  
 自動車運送 荷造包装  
 海 運 倉 庫  
 観 光 引 越  
 航 空 重量品作業  
 保 險 (運送保険・生命保険・火災保険)  
 ビル移転、転勤荷造輸送一切、及び  
 海外登山隊の御用命を御待ちします。



# 日本通運株式会社

両国支店 支店長 田谷 朗

両国支店	墨田区横網 1 6	電話 (622) 2191
江東営業所	江東区深川白河町 4 ~ 1	電話 (641) 8376
錦糸町営業所	墨田区錦糸町 1 ~ 4	電話 (622) 1121
亀戸営業所	江東区亀戸町 5 ~ 1 0 1	電話 (681) 5285
新小岩営業所	葛飾区上小松 1 4 0	電話 (691) 3196
寺島営業所	墨田区京島 1 ~ 2 6	電話 (611) 6151

## 「山岳」投稿規定

- 一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
- 一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
- 一、原稿は返却しない。
- 一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
- 一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
- 一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
- 一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
- 一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
- 一、校正は編集者に一任されたい。

送り先 東京都渋谷区神宮前三ノ三十一（外苑

コーポ内）

日本山岳会「山岳」編集部

編集委員

松山加深望

田崎藤田月

雄安泰久達

一治安弥夫

一九六五年十二月二十五日発行

山岳 六十年

(通巻一九号)

定価 一五〇〇円

東京都渋谷区神宮前三丁目三十一番（外苑コーポ内）

発行所

社団法人

日本山岳会

電話東京四三局六五〇（代表）  
東京四〇四局七六五七（直通）  
振替口座東京四八二九九番

編集兼  
発行者 日本山岳会内  
望月達夫

印刷  
写真版 株式会社 技報堂  
製本 光村原色版印刷所  
株式会社 三水舎

発売所 東京都千代田区神田駿河台二ノ一  
株式会社 茗溪堂

電話東京二九一局九四四二番  
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。



登頂に

観測に

このマークがお

伴いたしました

I	1936	年	立	教	大	学	ナ	ダ	コ	ー	ト	登	山	隊
II	1952	年	日	本	山	岳	マ	ス	ル	ル	踏	登	山	隊
III	1953	年												
IV	1954	年												
V	1955	年	京	都	大	学	第	二	マ	ナ	ス	ル	山	隊
VI	1956	年					ア	ク	コ	ル	ナ	登	山	隊
VII	1957	年					カ	ラ	マ	ナ	ル	登	山	隊
VIII	1958	年	日	文	部	省	第	三	マ	ナ	ル	登	山	隊
IX	1958	年	文	部	省	学	南	極	子	コ	ル	ニ	ア	隊
X	1958	年	神	戸	大	学	バ	ジ	ユ	マ	ガ	ル	チ	隊
XI	1959	年	日	本	教	育	ヒ	マ	ガ	ル	チ	ユ	リ	隊
XII	1959	年	本	教	育	新	レ	雪	男	学	術	探	険	隊
XIII	1960	年	日	明	治	大	学	ア	ラ	ス	カ	学	術	隊
XIV	1960	年	同	志	社	大	学	ア	ア	ビ	遠	征	隊	隊
XV	1961	年	早	稲	田	大	学	ア	ジ	ア	、	ヨ	ロ	隊
XVI	1961	年	大	全	日	本	学	ビ	ク	ホ	ル	フ	イ	隊
XVII	1961	年	全	日	本	上	学	ビ	ク	ア	ド	ル	フ	隊
XVIII	1961	年	早	稲	智	大	学	エ	南	ク	ア	ド	ル	隊
XIX	1962	年	全	日	本	上	学	ビ	ク	ホ	ワ	イ	ト	隊
XX	1962	年	全	日	本	上	学	ビ	ク	ホ	ワ	イ	ト	隊
XXI	1962	年	京	本	都	大	学	サ	シ	ル	キ	ム	ル	隊
XXII	1962	年	電	マ	電	九	学	シ	シ	ム	キ	ム	ル	隊
XXIII	1963	年	電	本	鱗	超	学	ヒ	ヒ	マ	ラ	ヤ	ル	隊
XXIV	1963	年	日	本	志	社	学	ヒ	マ	ラ	ヤ	ル	蝶	隊
XXV	1963	年	同	都	立	大	学	サ	イ	パ	ル	遠	征	隊
XXVI	1963	年	大	阪	府	立	大	合	同	東	部	ネ	パ	隊
XXVII	1964	年	北	海	道	大	学	ア	ン	デ	ス	、	ア	隊
XXVIII	1964	年	北	海	道	大	学	ア	ン	デ	ス	、	ア	隊
XXIX	1964	年	早	稲	田	大	学	エ	ク	ア	ド	ル	フ	隊
XXX	1965	年	早	稲	田	大	学	ロ	ー	ジ	ユ	ン	パ	隊
XXXI	1965	年	明	治	大	学	ゴ	ロ	ー	ジ	ユ	ン	パ	隊
XXXII	1965	年	防	衛	大	学	ゴ	ロ	ー	ジ	ユ	ン	パ	隊
XXXIII	1965	年	富	山	岳	学	中	部	ネ	バ	ン	ル	遠	隊
XXXIV	1965	年	富	山	岳	学	中	部	ネ	バ	ン	ル	遠	隊
XXXV	1965	年	富	山	岳	学	中	部	ネ	バ	ン	ル	遠	隊

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田 株式会社  
須田町2-23

**細野テント**

Tel. (253)  
4426~7

The Journal of  
The Japanese Alpine Club

**S A N G A K U**

Vol. LX 1965